

---

# 天命之外史

夢月葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天命之外史

### 【Nコード】

N3800N

### 【作者名】

夢月葵

### 【あらすじ】

誰もが知る物語とは似て非なる物語。

とある高校生、清宮涼は、趣味の博物館巡りを終えて帰宅する途中、不思議な占い師に声をかけられる。

「貴方、これから大変な運命が待ち構えて居ますよ。」

そう言われて一瞬不安になるも、持ち前の楽天安な性格で直ぐに打

ち消した。

その占い師が居なくなっているのも気付かずに。

自分なりの「三国志演義」を書いていきます。  
因みに全年齢対応です。

#### 参考文献

「三国志」作画・横山光輝（潮漫画文庫）

「項羽と劉邦」作画・横山光輝（潮漫画文庫）

「史記」作画・横山光輝（小学館文庫）

図説中国史 三国志地図（東光書店）

歴史人別冊 完全保存版三国志の真実

Wikipedia

ニコニコ動画

「モバゲータウン」、「Eエブリスタ」で連載していた作品です。  
そちらでの二次対策に引つ掛かって続きが書けなくなったので、こ  
っちに移ってきました。

拙い文章ですが、宜しくお願い致します。

## 登場人物紹介（前書き）

この作品の登場人物に関する簡単なプロフィールです。  
年齢は実年齢と初登場時の年齢を併記し、初登場時の年齢は（  
内に表しています。

一部のキャラクターのCVはイメージです。  
物語が進むにつれて更新していくので、最初は読まない事をオス  
スメします。

また、漢字変換出来ない名前や地名には代用漢字を使う予定なの  
で、どうか御了承下さい。

能力値について。

統率・武力・知力・政治・魅力の五つのステータス（数値は0～  
120）によって強さを表しています。

尚、表示されている数値は物語中で最新のものです、初期値は（  
内に表します。

2009年8月26日更新開始。

2011年4月28日更新。

## 登場人物紹介

名前・清宮涼きよみや・りょう

CV・吉野裕行

性別・男

生年月日・7月7日

年齢・18歳（17歳）

星座・蟹座

身長・体重・178・64

血液型・A型（Rh+）

利き手・利き足・右手・右足

出身地・東京都葛飾区柴又

武器・靖王伝家（予備）+雌雄一对の剣（蒼穹・紅星）

備考・聖フランチェス力学園二年生・桃園兄妹の長子・徐州州牧補佐

能力値

統率	・67	（64）
武力	・73	（70）
知力	・82	（81）
政治	・45	（43）
魅力	・59	（55）

桃香、愛紗、鈴々の義兄。

21世紀の日本に暮らす高校二年生の少年。

何故か「三国志演義」を基にした世界に飛ばされ、以後は「天の御遣い」として劉備（桃香）達と行動を共にする。

一人称は「俺」。

プロフィールやCV（声優）は作者のイメージです。御了承下さい。

名前：？（？・？・？）

真名：？

CV：水樹奈々

性別：女

年齢：？

出身地：

備考：占い師

、。

名前：劉備玄德りゅうびくわんとく

真名：桃香ももか

CV：安玖深音（後藤麻衣）

性別：女

年齢：17歳（16歳）

出身地：啄郡啄巣

武器：宝剣「靖王伝家」（せいおうでんか）

備考：桃園兄妹の長女・徐州州牧

能力値

統率：61（60）

武力：46（45）

知力：63（62）

政治：62（61）

魅力：120（120）

涼の義妹で、愛紗、鈴々の義姉。

ほんわかした性格と圧倒的な大きさを誇る胸の持ち主。  
争いを好まない性格が故に、一日でも早く戦いが無い世の中を作る為に戦いに身を投じる。

外見は、桃色の長い髪を白い羽根が付いた髪留めで左右に纏めたストレートヘア。白と緑を基調とし、肩が見える服は、どこかの学校の制服にも見え、襟元に紅いリボンが有る。

袖等には金色のラインが有り、両袖には羽根をあしらった金色の刺繍。ヒラヒラした紅いスカートの端には白いフリル。

靴は膝上迄有る長く白いブーツ。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「涼義兄さん」、もしくは「義兄さん」、「御主人様」。

「三国志演義」では、黄巾の乱や赤壁の戦い等の戦いを経て益州に蜀漢を建国し、初代皇帝となる。

名前・張飛テン・ウキ翼徳

真名・鈴々（りんりん）

CV・芹園みや（西沢広香）

性別・女

年齢・13歳（12歳）

出身地・啄郡

武器・矛「丈八蛇矛」（じょうはちだぼう）

備考・桃園兄妹の末妹

能力値

統率・93(92)  
武力・104(104)  
知力・39(39)  
政治・35(35)  
魅力・42(40)

涼、桃香、愛紗の義妹。

子供の様な外見からは想像もつかないくらいの怪力と戦闘力を誇る。

幼い頃(今も外見は幼いが)に両親を亡くしており、以来一人で暮らしている。

義勇軍では、二番隊の隊長として活躍。

徐州軍でもやはり二番隊の隊長になっている。

外見は、短い赤毛に、コミカルな虎の顔の髪飾りを付けている。

気の所為か、その表情が時々変わってる？

短めのインナーシャツとスパッツは同じ紺色、どちらも下部に金色のラインが入っている。因みにかなりのヘソ出しルック。

金色の首輪に、黄色を基調として茶色のラインや葉っぱの様なデザインが有る上着。両肩には白と黒で構成される陰陽のマークっぽいのが有る。

そのマークはベルトのバックルにも有り、ベルトは二つのベルトをクロスさせて使っている。

両手には紅い手甲が付いた手袋をはめている。色はやはり紺色で、指先は空いている。右腕は肘迄やはり紺色で覆われている。手袋の延長だろうか。

靴は履いて無く、指先と踵が無い靴下を履いている。色やデザインはスパッツ等と同じ。



首には紅いマフラー。まるで何処かの仮面のヒーローの様に、パタパタと風に揺れている。

一人称は真名でもある「鈴々」。

涼に対する呼び方は「涼お兄ちゃん」、もしくは「お兄ちゃん」。

「三国志演義」では、関羽自らが自分より強いと評した程の実力の持ち主。

張飛の字は正史では「益徳」ですが、演義では「翼徳」になっています。

名前・かん・う・つんぢょう関羽雲長

真名・あいししゃ愛紗

CV・くろがみ本山美奈（黒河奈美）

性別・女

年齢・16歳（15歳）

出身地・河東郡解

武器・大雑刀「青龍偃月刀」（せいりゆうえんげつとう）

備考・桃園兄妹の次女

能力値

統率・109（108）

武力・103（102）

知力・64（61）

政治・61（59）

魅力・84（83）

涼、桃香の義妹で、鈴々の義姉。

真面目で、桃園兄妹一のしつかり者。

一人旅をしていたが、楼桑村で桃香、鈴々、そして涼と出会い、義兄弟・義姉妹の契りを交わした後は義勇軍の筆頭武将として活躍。徐州軍でもやはり筆頭武将を任せられている。

外見は、黒く艶やかな黒髪を左側で纏め、紅いリボンが付いた金色の輪で留めている。

白と緑を基調とした服は桃香の服と似ており、金色のラインや肩を出している所も同じ。

服の下部は花びらの様なデザインになっており、後ろは前より長くなっている。

その下には黒いプリーツスカートに茶色のオーバーニーソックス、革靴の様な黒い靴。

部分的にはどこかの学校の制服に見えなくもない。

一人称は「私」または「自分」。

涼に対する呼び方は、「涼殿」、「義兄上」もしくは「御主人様」。

「三国志演義」では、張飛、呂布等と同じく最強の部類の実力を持つ武将として活躍し、最期迄劉備の為に戦った忠義の将。名前・

徐庶じょじゅ元直げんちく

真名・雪里しゅうり

CV・中原麻衣

性別・女

年齢・17歳（16歳）

出身地・豫州潁川

武器・武器じゃないけど大きな中華鍋

備考・義勇軍筆頭軍師 連合軍筆頭軍師 徐州軍筆頭軍師

能力値

統率	・ 89 (88)
武力	・ 60 (60)
知力	・ 91 (91)
政治	・ 80 (79)
魅力	・ 77 (77)

黄巾党討伐の為の軍師として、涼達と共に戦う。

元々は徐福じょふくと名乗っていたが、涼達と同行する際に名を改めた。

外見は、膝元ある長い銀髪に、野球帽の様な黄色い鍔付き帽子。

自信に満ちた大きな金色の瞳。

身長は鈴々より頭一つ大きい。胸は大きくないが小さくもなく、普通より少し大きいくらい。

首元には羽ばたく二つの羽根をあしらった首飾り。

服は帽子と同じ黄色を基調としたワンピースで、その左胸には白い羽根をあしらったワンポイントがあり、羽根のデザインが好き。

足は白いオーバーニーソックスと、革靴の様な紺色の靴。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮殿」。

「真・恋姫十無双」の朱里・雛里ルートでも名前だけは出ています。(その際は元直ちゃんと呼ばれていた。)

「三国志演義」では、単福という偽名で登場し、劉備軍の軍師に

迎えられた後は、劉備軍に軍師の必要性を印象付ける程の采配を見せるが……。

名前・張世平ちやうせいへい

真名・葉よう

CV・林原めぐみ

性別・女

年齢・18歳（17歳）

出身地・中山

備考・馬商人 徐州軍武具

能力値

統率	・50	(50)
武力	・30	(30)
知力	・84	(84)
政治	・33	(33)
魅力	・65	(65)

桃香達に馬や資金を調達した商人。

元々は中山ちゅうしやんの豪商だったが、黄巾党に家族を殺された為に馬商人に身を窶くたしていた。

女性にしては背が大きく、背丈は涼と余り変わらない。

普段の服装は、黒を基調としたノースリーブにホットパンツという軽装。

男っぽい性格からか、一人称は「あたい」。

涼に対する呼び方は「あんた」、もしくは「大将」。

「三国志」「三国志演義」共に一度しか登場していないので、そ

の後どうなったかは不明。

名前・蘇双そ・そう

真名・景けい

CV・下田麻美

性別・女

年齢・15歳（14歳）

出身地・？

備考・馬商人 徐州軍武具担当

能力値

統率・44（44）

武力・21（21）

知力・75（75）

政治・68（68）

魅力・64（64）

張世平の従姉妹。

大人しく冷静な口調で話す、女の子らしい女の子。

小柄でツインテールの髪型をしている。

普段の服装は、白を基調とした長袖の服にロングスカートという装い。

「吉川英治版三国志」や「横山光輝版三国志」等では、張世平の甥となっていたので、今作では姪にしようと思ったが、そうすると張世平を「少女」にするのが面倒なので従姉妹に変更したらしい

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「御主人様」、「清宮様」。

張世平同様、「三国志」「三国志演義」共に一度しか登場していない。

名前・盧植子幹ろ・しよく・しかん

真名・翡翠ひすい

CV・冬馬由美

性別・女

年齢・33歳(32歳)

出身地・啄郡啄県

武器・鉄扇「花鳥風月」と鉄斧「千差万別」

備考・劉備と公孫賛の恩師

能力値

統率・112(111)

武力・79(79)

知力・89(89)

政治・98(98)

魅力・79(79)

劉備や公孫賛を始めとした多くの者から慕われている儒学者。

また、政治家や將軍としても有能であり、その手腕は敵味方問わず認められており、あの曹操も敬語を使って話す程。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「涼様」「清宮様」。

「三国志演義」では、都からの勅使である左豊卿に賄賂を贈らな

かった為に怒りを買い、濡れ衣を着せられて黄巾党討伐の任を解かれてしまう。

真面目で高潔な人物として描かれ、門下生である劉備を更に引き立たせる役割を担っていた。

名前・賈馮文和かくぶんわ

真名・詠えい

CV・青山ゆかり（友永朱音）

性別・女

年齢・14歳

出身地・

武器・特に無し

備考・董卓軍の軍師

能力値

統率	・	105	(104)
武力	・	20	(20)
知力	・	92	(92)
政治	・	99	(99)
魅力	・	88	(87)

董卓軍きつての軍師であり、類い希なる才の持ち主。

董卓の幼馴染みであり、董卓の為だけに献策をする。

一人称が「ボク」の所謂ボクっ子。

「三国志演義」では曹操を手玉にとる程の知略の持ち主で、最終的には魏に仕えた。

名前・董卓仲穎たくちゆうえい

真名・月ゆえ

CV・木村あやか(いのくちゆか)  
性別・女  
年齢・14歳  
出身地・隴西郡  
武器・特に無し  
備考・董卓軍指揮官

能力値

統率・67(67)  
武力・12(12)  
知力・86(85)  
政治・57(55)  
魅力・110(108)

誰もが守りたくなる様な外見だが、これでも立派な將軍。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮」さん。

「三国志演義」では十常侍による混乱の後に。

名前・荀或

真名・桂花

CV・みる(き智村小真)

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・とくに無し

備考・曹操軍軍師



能力値

統率	・ 80 (79)
武力	・ 12 (10)
知力	・ 88 (87)
政治	・ 98 (98)
魅力	・ 52 (52)

曹操軍の軍師で、曹操命の少女。

その反面、嫌いな相手には超が付く程の毒舌になる。特に男は大嫌い。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「アンタ」。

「三国志演義」では、曹操の許で「王左の才」と呼ばれる程の知略をみせる。  
だが、やがて曹操と意見が対立し……。

尚、荀或の「いく」の部分は正確には「或」では無いのですが、  
本来の漢字が変換出来ない所以で似た字を使っています。御了承下さ  
い。

名前・曹操孟徳そう・そう・せい・まう・たへ

真名・華琳かりん

CV・乃嶋架菜(前田ゆきえ)

性別・女

年齢・16歳

出身地・

武器・大鎌「絶」(ぜつ)  
備考・曹操軍指揮官

能力値

統率・90(90)  
武力・83(83)  
知力・92(92)  
政治・98(98)  
魅力・101(101)

慎重かつ大胆な行動をとる優秀な武将にして指揮官。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「涼」。

「三国志」「三国志演義」では主役(悪役でもある)の一人として物語を彩る。

名前・?(・・)

真名・稟<sup>りん</sup>

CV・(今井麻美)

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・

備考・

軍師。

一人称は「」。  
涼に対する呼び方は「」。

「三国志」「三国志演義」では。

名前・田豫てんよ・いくこ国譲こくじやう

真名・時雨ときぐれ

CV・浅川悠

性別・女

年齢・16歳

出身地・

武器・大剣「竜王護旋」(りゅうおうごせん)

備考・義勇軍第三部隊隊長 連合軍第三部隊隊長

能力値

統率	・72	(71)
武力	・86	(85)
知力	・58	(58)
政治	・43	(43)
魅力	・60	(60)

男勝りな武将。

桃香の幼馴染みで、戦う力が無い桃香や雫を護ってきた。

一人称は「俺」。

涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志」「三国志演義」では物語の序盤で劉備から離れる事になる。

名前・趙雲子龍ちよううん・しりゆう

真名・星せい

CV・野神奈々（本井えみ）

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・双刃槍「龍牙」（りゆうが）

備考・公孫賛軍客将

能力値

統率	・93	(93)
武力	・98	(98)
知力	・86	(86)
政治	・64	(63)
魅力	・69	(68)

文武両道の武将。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮殿」。

「三国志」「三国志演義」では、袁紹、公孫賛に仕え、最後は劉備に仕える。

五虎大將軍の一人として最後迄活躍した、仁義に篤い武将。

名前・簡雍かんよう・けんわ

真名・雍おう

真名・雍おう

CV・堀江由衣

性別・女

年齢・16歳

出身地・幽州

武器・

備考・義勇軍副軍師

能力値

統率	・63	(62)
武力	・12	(11)
知力	・82	(82)
政治	・82	(82)
魅力	・70	(68)

駆け出しの軍師。

桃香とは幼馴染みであり、桃香を始めとした親しい女友達は皆ちゃん付けで呼んでいる。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では劉備に長きに渡って仕える。中々ユーモアがある人物だったらしい。

長坂の戦いでは負傷して動けなくなるが、趙雲に助けられて一命を取り留めている。

名前・? (・・・)

真名・風ふう

CV・海原エレナ (氷青)

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・

備考・

軍師。

一人称は「」。

涼に対する呼び方は「」。

「三国志」「三国志演義」では。

名前・張宝明専

真名・地和

CV・御苑生メイ（梅原千尋）

性別・女

年齢・14歳

出身地・

武器・特に無し

備考・黄巾党第二部隊指揮官 連合軍第四部隊隊長 義勇軍第四部隊隊長

能力値

統率・49（46）

武力・44（42）

知力・48（48）

政治・45（44）

魅力・92（91）

黄巾党第二部隊の指揮官だったが、鉄門峽の戦いで敗れた後、秘密裏に涼達に匿われる。

以来、桃香の従姉妹の名前である「劉燕徳然」を名乗り、「地香」という真名も涼から貰う。

一人称は「ちい」。

涼に対する呼び方は「涼」。

「三国志演義」では妖術を使う武将として登場し、官軍を苦しめた。

張宝の字は本来は判っていませんが、ここでは「明専」という字を使っています。

また、劉徳然も名は判っていませんが、ここでは「燕」という名を使っています。御了承下さい。

名前・孫堅文台そん・けん・ぶんたい

真名・海蓮かいれん

CV・久川綾

性別・女

年齢・37歳

出身地・呉郡富春県

武器・直刀「南海霸王」

備考・孫策の母。

能力値

統率・112(112)

武力・99(99)

知力・79(79)

政治・88(88)  
魅力・82(82)

孫軍総大将。

普段は物静かな妙齡の女性だが、いざ戦いになると人が変わったかの様に好戦的になる。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮さん」、「清宮殿」、「婿殿」。

「三国志」「三国志演義」では「江東の虎」と呼ばれる程の豪傑として描かれている。

名前・孫策そんさくはくふ伯符

真名・雪蓮しうれん

CV・サトウユキ(米島希)

性別・女

年齢・19歳

出身地・呉郡富春県

武器・大剣「霸王之理」(はおうのごとわり)  
備考・孫堅の娘

能力値

統率・94(93)  
武力・94(92)  
知力・75(75)  
政治・83(83)  
魅力・94(93)



孫軍副将。

若さ故に逸る気持ちによくはなるが、それ以外では完璧な能力を持った武将。

涼達との出会いは、黄巾党南陽部隊と戦っていた連合軍に孫軍が参戦した事が始まり。

その時に、意見の相違と実力を見極める為に涼と戦うが、思いもよらず負けてしまい、以来、涼を認める様になる。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「涼」。

「三国志演義」では「江東の小霸王」として孫呉を発展させるが…

名前・程普徳謀てい・ふ・とく・ぼう

真名・泉菜せんらい

CV・雪乃五月

性別・女

年齢・29歳

出身地・幽州北平郡

武器・

備考・孫軍

能力値

統率・105(105)

武力・98(98)

知力・84(84)

政治・90(90)

魅力・74(74)

孫軍古參武将の一人。

孫堅に仕えており、時々、その娘である孫策を窺める事もある。普段は口数が少なく、必要な事しか喋らない。

実力は折り紙付きで、孫策が時々立ち向かうも全敗している。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「総大将」。

「三国志」「三国志演義」では。

名前・公孫こうそん贇さん白珪はくけい

真名・白蓮ばいれん

CV・柚木かなめ（河原木志穂）

性別・女

年齢・16歳

出身地・幽州遼西群令支県

武器・「普通の剣」（ふつうのけん）

備考・幽州太守

能力値

統率	・ 5 6	( 5 5 )
武力	・ 5 6	( 5 5 )
知力	・ 5 6	( 5 5 )
政治	・ 5 6	( 5 5 )
魅力	・ 5 6	( 5 5 )

数年前、盧植の許で勉学を学んでいた頃に桃香と知り合い、親友と

なる。

現実的だが、生来の人の良さからよく損をしている。

外見も性格も武力も政治も余り目立った特徴は無いが、周りが凄過ぎるから仕方無いのかも知れない。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では無敵と言われた戦法「白馬陣」で勝ち続ける等、優秀な武将だった。

名前・于吉（うき）

CV・ジャック・クラウド（子安武人）

性別・男

年齢・18歳

出身地・

武器・「」（）

備考・

謎の組織？に属する青年。

一人称は「私」。

「三国志演義」では、民に慕われる導師として登場するが、それが国を乱すとして孫策によって殺される。

しかし……。

名前・（）（）

真名・○

CV・○

性別・男

年齢・17歳

出身地・

武器・「」○

備考・

、。

一人称は「俺」。

「三国志演義」では、。

名前・文醜ぶんしゆう伸緑しんりよく

真名・猪々子いししえ

CV・紫華すみれ（神崎ちろ）

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・大剣「斬山刀」（ざんざんとう）

備考・袁紹軍の二枚看板。

能力値

統率・62（61）

武力・81（79）

知力・35（35）

政治・28（28）

魅力・65(64)

袁紹軍きつての武将で、考えるより勘で戦うタイプ。ちよつと男勝りなところが有り、いつも斗詩を困らせている。宝塚なら間違いなく男役だろう。

一人称は「あたい」。  
涼に対する呼び方は「アニキ」。

「三国志演義」では袁紹軍の二枚看板の一角として活躍。また、顔良とは義兄弟と言われている。

文醜の字は本来は判っていませんが、ここでは「伸緑」という字を使っています。御了承下さい。

名前・顔良がん・りょう青恵せいけい

真名・斗詩とし

CV・青井美海(羽月理恵)

性別・女

年齢・15歳

出身地・

武器・大槌「金光鉄槌」(きんこうてつづい)

備考・袁紹軍の二枚看板。

能力値

統率・70(69)

武力・74(74)

知力・55(55)

政治・47(47)  
魅力・78(78)

袁紹軍きつての武将で、考えて戦うタイプ。  
物腰が柔らかく、言葉遣いも丁寧で、世話女房みたいなキャラ。宝塚なら間違いなく女役。

一人称は「私」。  
涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では袁紹軍の二枚看板の一角として活躍。また、文醜とは義兄弟と言われている。

顔良の字は本来は判っていませんが、ここでは「青恵」という字を使っています。御了承下さい。

名前・孫権仲謀

真名・蓮華

CV・風音(櫻井浩美)

性別・女

年齢・16歳

出身地・呉郡富春県

武器・大剣「霸王之調」(はおうのしらべ)  
備考・孫堅の娘、孫策の妹

能力値

統率・70(70)  
武力・65(65)

知力・79(79)  
政治・93(93)  
魅力・102(102)

孫軍副將補佐。

孫堅の次女で、雪蓮の妹。また、妹が一人居る。

姉と違って真面目で、ちよつと融通が利かないところも有る。

だがそれは家族や仲間、そして民を愛するが故であり、責任感が強い現れでもある。

「天の御遣い」である涼の実力を疑っていたが、十常侍誅殺の経緯から多少は認めた模様。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では孫呉の王として魏や蜀と時に戦い、時に手を結びながら呉を発展させていく。

名前・周瑜公瑾

真名・冥琳

CV・かわしまりの(瑞沢溪)

性別・女

年齢・19歳

出身地・揚州廬江郡

武器・鞭「白虎九尾」(びゃっくきゅうび)

備考・孫策の親友

能力値

統率・98(98)

武力・73(73)  
知力・104(104)  
政治・99(99)  
魅力・89(89)

孫軍筆頭軍師。

外見から受ける印象通り、沈着冷静な軍師。

雪蓮とは幼馴染みであり、「断金の交わり」と呼ばれる程仲が良い。自由奔放な雪蓮の舵取り役として、日々苦勞している。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では孫策、孫権に仕え、大都督として活躍。赤壁の戦いで魏軍を打ち破る等の戦功をあげる。

また、美形だったらしく「美周郎」と呼ばれており、三国志を題材とした演劇では必ず二枚目の役者が演じている。

名前・夏侯淵かこう・えん・みょうひん 妙才

真名・秋蘭しゅうらん

CV・如月葵(吉田愛理)

性別・女

年齢・17歳

出身地・

武器・弓「餓狼爪」(がろうそう)

備考・曹操軍の武將

能力値

統率・83(83)



武力・82(82)  
知力・78(78)  
政治・84(84)  
魅力・71(71)

弓の扱いにかけては曹操軍一の実力者。

夏侯惇（春蘭）とは双子で、夏侯淵は妹にあたる。  
、。

一人称は「私」。  
涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では、。

名前・夏侯玄讓かこう・とん・けんじょう

真名・春蘭しゅんらん

CV・深井晴花（浅井晴美）

性別・女

年齢・17歳

出身地・

武器・幅広の刀「七星牙狼」（しちせいがろう）

備考・曹操軍の武将

能力値

統率・88(88)  
武力・92(92)  
知力・33(33)  
政治・30(30)

魅力・82(82)

曹操軍一の武將を自負している猛將。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「貴様」「清宮」。

「三国志演義」では、。

名前・袁紹本初

えん・しょう・ほんしょ

真名・麗羽

れいは

CV・このかなみ(加藤雅美)

性別・女

年齢・17歳

出身地・豫州汝南郡汝陽県

武器・宝刀「袁家の宝刀」(えんけのほうとう)  
備考・袁紹軍総大将。

能力値

統率・43(43)

武力・40(40)

知力・30(30)

政治・24(24)

魅力・75(75)

袁紹軍総大将であり、袁家の筆頭。

名門のお嬢様な為、基本的に世間知らずで我が儘。

一人称は「私」（わたくし）。  
涼に対する呼び方は「清宮さん」。

「三国志演義」では、袁術と大陸を二分する程の勢力の持ち主。  
劉備と手を組んだり曹操と戦ったりしたが、部下の進言は余り聞か  
なかつたらしい。

名前・袁術公路えん・じゅつ・こうろ

真名・美羽みう

CV・卷田彩乃（中村繪里子）

性別・女

年齢・11歳

出身地・豫州汝南郡汝陽県

武器・宝刀「袁家の懐刀」（えんけのかいとう）  
備考・袁術軍総大将。

能力値

統率	・ 2 2	( 2 2 )
武力	・ 0 9	( 0 9 )
知力	・ 2 5	( 2 5 )
政治	・ 2 0	( 2 0 )
魅力	・ 6 2	( 6 2 )

袁術軍総大将だが、まだまだ子供。  
名門袁家の一員で、袁紹は従姉にあたる。

一人称は「妾」（わらわ）。  
涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では、袁紹と大陸を二分する程の勢力の持ち主。「仲」もしくは「成」を建国し皇帝になったが、誰にも認められなかった。

名前・張勳ちゆうこん玲源れいげん

真名まな・七乃ななの

CV・七野社（たかはし智秋）

性別・女

年齢・17歳

出身地・豫州汝南郡汝陽県

武器・「袁術親衛隊正式採用鋼劍」（えんじゅつしんえいたいせいしきさいようこうけん）

備考・袁術軍大將軍。

能力値

統率	・48	(48)
武力	・60	(60)
知力	・73	(73)
政治	・50	(50)
魅力	・61	(61)

袁術軍の高位武將だが、頼りになるのかよく判らない。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮さん」。

「三国志演義」では、呂布との戦いで第一隊の大將を務める等の活

躍を見せる。

だが、袁術亡き後は楊弘と共に捕まり、その後の動向は不明。

張勳の字は判っていませんが、ここでは「玲源」という字を使っています。御了承下さい。

名前・張遼ちやうりやう・文遠ぶんえん

真名・霞しあ

CV・AYA（茂呂田かおる）

性別・女

年齢・17歳

出身地・雁門郡馬邑県

武器・「飛龍偃月刀」（ひりゅうえんげつとう）

備考・丁原軍の武将。

能力値

統率	・ 84	( 84 )
武力	・ 92	( 91 )
知力	・ 76	( 76 )
政治	・ 67	( 67 )
魅力	・ 80	( 80 )

神速と謳われる武将。

何故かは解らないが、関西弁を喋っている。

丁原に何らかの恩が有るらしく、忠誠を誓い、また丁原も娘の様に接している。

一人称は「ウチ」。

涼に対する呼び方は「清宮」。

「三国志演義」では、様々な武將に仕えた末、曹操に仕えた。圧倒的な武力を持ち、孫権には特に恐れられた。

名前・張讓？（ちょう・じょう・？）

真名・？（）

CV・矢島晶子

性別・？

年齢・14歳

出身地・

武器・銀扇「縛来」（ばくらい）

備考・宦官の筆頭。

能力値

統率	・74	(74)
武力	・33	(33)
知力	・85	(85)
政治	・86	(86)
魅力	・41	(41)

十常侍を纏める若きリーダー！。

見かけは小さな子供だが、その雰囲気は大人をも圧倒する。

一人称は「僕」。

「三国志演義」では、十常侍筆頭として靈帝を思うままに操り、世の中を混乱させた。

何進殺害後、新帝や協皇子（陳留王、後の献帝）を連れて逃げるも、袁紹率いる諸侯連合に追われ、逃げ切れないと悟った結果入水自殺した。名前・橋カキ隋セウ士保シホ

真名・芽依メイ

CV・門脇舞以

性別・女

年齢・17歳

出身地・豫州

武器・「袁術親衛隊正式採用鋼劍・長刀」（えんじゅつしんえいたいせいしきさいようこうけん・ちようとう）

備考・袁術軍大將軍。

#### 能力値

統率	・ 86	( 86 )
武力	・ 79	( 79 )
知力	・ 77	( 77 )
政治	・ 61	( 61 )
魅力	・ 65	( 65 )

袁術軍の高位武將だが、ちょっと頼りない感じ。身長は涼と余り変わらない大きさで、胸は桃香より少し小さいくらい大きい。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「」。

「三国志演義」では、呂布との戦いで第二隊の大將を務める等の活躍を見せる。

橋隋の「隋」は本来別の漢字ですが、変換出来ないのと同じ読み  
の字で代用しています。

また、字は不明ですが、ここでは「土保」という字を使っています。  
御了承下さい。

名前・呂布奉先りよ・ふ・ほうせん

真名・恋れん

CV・井村屋ほのか（萩原えみこ）

性別・女

年齢・16歳

出身地・五原郡九原県

武器・「方天画戟」（ほうてんがげき）

備考・丁原軍の將軍。

能力値

統率・83（83）

武力・117（117）

知力・38（38）

政治・11（11）

魅力・77（77）

丁原軍の武將であり、丁原の養子。

普段はボーっとしており、とても強そうには見えない。寧ろ可愛い。

一人称は「恋」。

涼に対する呼び方は「オマエ」。



「三国志演義」では、丁原、董卓に仕えるが共に殺害。

独立後は様々な武将と手を組んだり対立したりを繰り返し、多くの敵を作った。

名前・糜竺子仲 び・じく・しちゆう

真名・山茶花 やんたか

CV・小林ゆう

性別・女

年齢・18歳（18歳）

出身地・東海郡

武器・大弓「誠心誠意」（せいしんせい）

備考・元徐州軍の文官。

#### 能力値

統率	・ 71 (71)
武力	・ 60 (60)
知力	・ 78 (78)
政治	・ 75 (75)
魅力	・ 73 (73)

元徐州軍の文官であり、糜芳の姉。

軍を辞めた後は糜芳と共に旅をしていたが、旅を終えると徐州に戻って仕官する。

真面目な性格で、丁寧な口調で話す。

艶やかな黒髪は胸の辺り迄伸びている。

瞳は見る者の心を捉える様な黒い瞳。

白を基調としたワンピースタイプのゆったりとした服。その上からも判る程大きな胸の膨らみも相俟って、清楚ながらに少なからず

妖艶さも持ち合わせている。

スカートの丈は膝下迄の長さで、短めの青い靴下と茶色のブーツタイプの靴。

装飾品は余り付けず、緑色の宝石がはめ込まれたブレスレットを右手首にしているくらい。

武器は背中に大型の弓矢を背負っており、左腰には短剣も所持している。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、徐州州牧となった劉備に仕え、以後益州迄付き従う。

文官よりなので一度も部隊を率いた事は無いが、弓の腕は一流だった。名前・糜び芳ほう子し方ほう

真名つばき・椿

CV・日高のり子

性別・女

年齢・16歳(16歳)

出身地・東海郡

武器・両刃刀「一意専心」(いちいせんしん)

備考・元徐州軍の武官。

能力値

統率・75(75)

武力・74(74)

知力・56(56)

政治・53(53)

魅力・68(68)

元徐州軍の武官であり、糜竺の妹。

姉との旅を終えると、当初の予定通り徐州に戻る。

どちらかと言うと不真面目な性格だが、民の事はちゃんと考えている。

首迄のショートヘアの色は黒で、瞳の色も同じ黒。身長は姉と同じくらい。

口調や所作は姉とは対照的に軽く、雑。服装は黒やら赤やら青やらと、カラフルな色合い。因みに胸は同年代の平均より少し小さめ。

黒いミニスカートに白のオーバーニーソックス、スニーカーの様な黄色い靴と活発的な格好。

プレスレットにネックレス、アンクレットと装飾品は沢山身に着けているが、ボーイッシュな所為か派手さが抑えられている。

一人称は「自分」。

涼に対する呼び方は「涼様」。

「三国志演義」では、徐州州牧となった劉備に仕え、以後益州迄付き従う。

史実と演義で最期が大きく違う。名前・陳珪漢瑜ちん・けい・かんゆ

真名・羽稀うぶ

CV・榊原良子

性別・女

年齢・34歳(34歳)

出身地・徐州下邳

武器・特に無し

備考・徐州軍兵糧管理官

能力値

統率	・63	(63)
武力	・48	(48)
知力	・71	(71)
政治	・79	(79)
魅力	・68	(68)

陳登の母にして徐州の文官。

元々、前徐州牧の陶謙に仕えていたが、病を患った為に一度職を辞した。

華佗によつて予定より早く病を克服出来たので、娘の羅深と共に現徐州牧の桃香に仕える。

服装は娘の陳登と同じく白を基調とした服装で、和服とドレスを足して二で割った様な、袖とスカートの丈が長い服。

娘と同じ栗色の髪は首の後ろで紅い布を巻いて纏めており、髪の長さは背中迄。

左耳には翡翠色の宝石が付いたピアス、首には翡翠色の宝石が付いたネックレス。

身長は雪里より頭一つ分高く、胸はこの歳の女性の平均より明らかに大きく、全体のスタイルも良い。

殆どスカートに隠れているが、靴は黒いロングブーツ。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、陳登と共に離間の計を巡らして呂布軍を徐州から追い出そうとする。

名前・陳登ちん・とう・元龍げんりゅう

真名・羅深らしん

CV・鈴田美夜子（金子明美）

性別・女

年齢・13歳（13歳）

出身地・徐州下邳

武器・長剣「質実剛健」（しつじつごうけん）

備考・徐州軍農業担当

能力値

統率	・52	（52）
武力	・53	（53）
知力	・61	（61）
政治	・45	（45）
魅力	・60	（60）

徐州軍の有望な若手。

子供特有の甲高い声を持つ、小さな少女。

年齢の割には小柄で、顔つきも体型も幼く、十歳やそれ以下の年齢にも見える。

ふんわりとした栗色のショートヘアに丸顔。

丸く大きな碧色の瞳に薄い唇、短い手足に僅かに膨らんだ胸と、いかにも子供らしい体型。

赤いワンポイントが有る白いベレー帽。

Tシャツっぽい赤い服の上に白いジャケットを羽織。

白いプリーツスカートに白い靴下と、服装は殆ど白で構成されて

いる。

武器の長剣は下手したら身長と余り変わらない長さ。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、陳珪と共に離間の計を巡らし、劉備への使者としても活躍した。

名前・廖淳元儉（れいじゅんげんけん）

真名・飛陽（ひやう）

CV・阪田佳代

性別・女

年齢・14歳（14歳）

出身地・荊州襄陽郡中廬県

武器・「守地護清」（しゅちごせい）

備考・元・黄巾党第二部隊 徐州軍四番隊

能力値

統率	・	30	(	30)
武力	・	43	(	43)
知力	・	48	(	48)
政治	・	32	(	32)
魅力	・	50	(	50)

助けてもらった恩を返す為に黄巾党に入ったが、どうやら余り活躍出来なかった様だ。

現在は地香（地和）の副官として警邏をしており、徐州の街（下丕）の事ならよく知っている。

栗色の髪とお揃いの色の眼。髪には黄緑色のバンダナを巻いていて、ポニーテールにしている。（本当は黄色いバンダナを巻きたいが、雪里達はそれを知らない。）

街の事を知り尽くしている。

背は雪里と同じか少し大きいくらいで胸もそんなに変わらない大きさ。

服装は黄緑色を基調としたノースリーブに黒いホットパンツ。

本来は黄色い布を巻いていた右手首には、空の様に澄みきった青い布が巻いている。

靴下やニーソックスは履かず、素足に青いスニーカータイプの靴。武器は黄緑色の鞘に納められた剣で、左腰に下げている。（真新しいので、最近手に入れた剣なのかも知れない。）

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では黄巾党の乱から諸葛亮・姜維による北伐迄の、長きに渡って登場している。

名前・孫乾公祐そん・かん・こうめつ

真名・霧雨きりゆ

CV・喜多村英梨

性別・女

年齢・17歳（17歳）

出身地・青州北海郡

武器・剣「言鳥代羽」（げんちようたいわ）

備考・書簡整理担当

能力値

統率・59（59）  
武力・61（61）  
知力・87（87）  
政治・81（81）  
魅力・74（74）

徐州軍の文官にして武官。

様々な知識や経験があるのか、大層な自信家。

外見は、比較的短い薄紅色の髪、前髪は目にかからない長さ。

服装は紺色のノースリーブの上にデニムのような生地だが赤い長袖の上着、紺色のホットパンツの上に白いミニスカート。

素足に紺色のスニーカー。見た感じは余り文官らしくない。

装飾品に興味が無いのか、そうした物は全く身に付けていない。武官でもあるが、普段は武器を持っていない。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、外交に長けた人物として様々な場面で活躍し、劉備の入蜀にも付き従った。

孫乾は「そんけん」とも読みますが、この作品では「そんかん」とします。

名前・諸葛均子魚しよかつ・きんこ・ぎし

真名・緋里ひり

CV・沢城みゆき



性別・女

年齢・11歳（11歳）

出身地・徐州琅邪郡陽都

武器・無し

備考・諸葛亮の妹

能力値

統率・40（40）

武力・21（21）

知力・59（59）

政治・60（60）

魅力・58（58）

朱里の妹で、姉に負けず劣らずの才女。

、。  
小さな女の子で、身長は鈴々より更に小さい。、。  
、。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「お兄様」。

「三国志演義」では、諸葛亮と共に隆中で暮らし、諸葛亮が劉備軍に入った後は留守を守る。

正史と違い、劉備軍に入ったという記述は無い。

名前・諸葛亮孔明しよかつりやうこくめい

真名・朱里しゅり

CV・楠鈴音（鳴海エリカ）

性別・女

年齢・16歳（16歳）

出身地・徐州琅邪郡陽都  
武器・武器じゃないけど大きな大きな本  
備考・徐州軍副軍師

能力値

統率・88(88)  
武力・34(34)  
知力・98(98)  
政治・101(101)  
魅力・79(79)

緋里の姉にして、雪里と雛里の親友。

隆中にて隠遁生活を送っていたが、雪里、そして劉備の誘いを受けて世に出る決意をする。

徐州軍では副軍師として雪里を補佐している。

大きく朱い瞳、首迄の長さの薄い金髪。

朱色の長袖の上着の下に白色の服を着ており、その服は青紫色のプリーツスカートに重なり、その先は花びらの様に広がっている。

また、それ等の服は黄緑色のリボン状の帯で巻いて留めていた。

白いオーバーニーソックスはスカートの中に隠れる他長く、素足は全く見えない。

上着と同じ朱色のベレー帽、そのベレー帽もまた、帯と同じ色と形のリボンが付いている。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、「伏龍」（臥龍）と称され、諸葛均と共に隆中で暮らしていたが、三顧の礼を受けて劉備軍に入る。

劉備軍の軍師として活躍し、蜀漢の丞相となり、劉備亡き後の蜀漢を守る。

名前・鳳統ほうとう士元しげん

真名・雛里ひなり

CV・九条信乃（後藤邑子）

性別・女

年齢・16歳（16歳）

出身地・荊州襄陽

武器・武器じゃないけど巨大な巻物

備考・徐州軍副軍師補佐

能力値

統率	・	91	(	91	)
武力	・	26	(	26	)
知力	・	93	(	93	)
政治	・	99	(	99	)
魅力	・	81	(	81	)

朱里、雪里の同門にして親友。

朱里と共に徐州へ赴き、副軍師補佐の任に就く。

瞳は大きく穏やかな緑色。

薄紫色の髪は長く、両耳の後ろで綿の様な髪留めを使ったツインテール。

朱里の服装と色違いのデザイン。具体的には、朱里の上着の色である朱色がスカートの色に、朱里のスカートの色である青紫色が上

着の色になっている。

白服の花びらの様な形の部分の折り目が多く、首元のアクセサリは髪留めと同じ様な素材で出来た、二つの丸い綿。

素足に白く短い靴下。

緑色のリボンに、上着と同じ青紫色の魔女帽。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「清宮様」。

「三国志演義」では、「鳳雛」と称され、諸葛亮と共に名軍師として登場し、赤壁の戦いでは曹操に連環の計を授ける。

劉備軍の副軍師として活躍し、益州攻略では劉備と共に従軍する

が……。

名前・黄婉月英こう・えん・げつえい

真名・蒼詩そうし

CV・松岡由貴

性別・女

年齢・15歳（15歳）

出身地・襄陽

武器・特に無し

備考・発明が得意

能力値

統率・14（14）

武力・42（42）

知力・88（88）

政治・33（33）

魅力・53（53）

朱里の親友。

長く長い髪に健康的に焼けた肌。大きな碧眼に活発そうな表情、子供特有の八重歯が特徴的。

背丈は朱里や雛里と同じくらいで、服装は白を基調としたノースリーブに黒いホットパンツ。靴下は履いておらず、素足に紅いサンダルを履いている。

一人称は「私」。

涼に対する呼び方は「アンタ」。

「三国志演義」では諸葛亮の妻である黄夫人として登場。容姿が醜かったと伝えられるが、頭が良くて幾つか発明をしたらしい。

また、本当は美人だったとか、実は外国人だったとか色々な伝説があつたりする。

黄夫人は名前が伝わっていませんが、この作品では演劇等で使われている「黄月英」と「黄婉貞」を参考にしています。

## 各種解説（前書き）

名前だけのキャラや敵キャラ、その他設定について補足します。  
なので、初めてこの作品を読む際にはこのページを飛ばす事をお勧めします。

2011年5月6日更新開始  
年月日更新

## 各種解説

名前・劉？（りゅう・？）

真名・？

CV・天野由梨

性別・女

年齢・？歳（？歳）

出身地・？

備考・桃香の母

桃香（劉備）の母親で、楼桑村に住んでいる。

皆さんは基本的にはアニメのイメージで読んでいただいで大丈夫だけど、この人を書いた時期は未だ「真・恋姫十無双」のアニメは放送前&放送中という時期だったので、書いている時はそんなイメージは全くしていませんでした。

なので、あんな気性の持ち主じゃありません（笑）

特に外見の記述もしてないのは、作品に未だ慣れていなかったのと、出番が最初の内くらいかなあと思っていたので……要するに手抜きですね

多分これから再登場すると思うので、その時にはちゃんと書いてみたいです。

ひよつとしたら名前とかもその時に決めるかも知れないですね。

名前・馬元義ばげんぎ

CV・堂坂晃三

性別・男

年齢・32歳

出身地・？

備考・黄巾党第二部隊所属

黄巾党の武將。

地和親衛隊の一人で、黄巾党第二部隊ではかなりの実力者。

尤も、あくまで普通の人間より少し強い程度なので、愛紗や鈴々とか比べたらめっちゃ弱い。

この作品では、涼が本当の意味で戦う事になるキツカケになった敵キャラです。

そうした意味では、単なるやられ役で終わらなかったキャラですね。

「三国志」には全く記されておらず、「後漢書」だけに記されている。

・桃園兄妹について

今作が原作と違う点の一つに、「桃園の誓い」によって涼（主人公）、桃香（劉備）、愛紗（関羽）、鈴々（張飛）が義兄妹・義姉妹になった事です。

原作でも桃園の誓いがあり、桃香・愛紗・鈴々は義姉妹になります。只、主人公（一刀）は義兄というより「ご主人様」という側面が強かった様に思います。

この辺りは、原作未プレイ（ビジュアルブックとかは読んでますが。）なんで、「違う！」と言われたらそれ迄ですが。

動画サイトのも、ゲームをプレイする時の為にストーリーや拠点フェイズは極力観ない様にしていて、設定で気になった事を調べる以外は観てません。御了承下さい。



では、どんな風に設定が変わってるかを説明します。  
先ず桃香は、涼の事を「涼義兄さん」「義兄さん」と呼んでいます。

こうする事で、愛紗や鈴々に対する「お姉ちゃん属性」だけでなく、涼に対する「妹属性」も持つ様になりました。

本来の「桃園の誓い」の様に、涼を長子とした四兄妹の序列化を図ったようになりました。

で、書いている内に気付いたんですが、ひよっとしたら「D・C・」シリーズの影響が有るのかも知れません。マンガやアニメしか知らないけど。

「D・C・」の朝倉音夢や、「D・C・」の朝倉由夢の影響は強いかなあ。

そう言えば、桃香の声優の安玖深音（後藤麻衣）さんは妹キャラを多く演じているみたいだしね。

愛紗は涼を「義兄上」と呼んでいます。

何かね……そう呼ばせたかったんだよね。「横山光輝三国志」だとそう呼んでいた気もするし。

只、桃香と同じく妹属性を強くした結果、従来の嫉妬キャラが出ていくなくなったのは計算外かな。出来るだけツンデレキャラは維持したいけど

鈴々は特に変化無いかな。

よくある三国志物の張飛みたいに「兄貴」と呼ばせたら、それは鈴々じゃなくなるしね。

因みに両親の設定は「恋姫＋夢想」等を参考にしています。

一応、桃香や愛紗は原作通りに「ご主人様」と呼ぶ事もあります  
が、その頻度は少ないかな。

また、愛紗は桃香に対して「桃香様」だけでなく「義姉上」と呼

んだりもします。

それ以外では全員基本的に原作通りです。

そんな感じで、桃香達の設定は原作より「兄妹」らしさ、「姉妹」らしさを重点に置いていきます。

勿論、これから色々と関係性が変わるでしょうが、これらの基本的な関係は余り崩れない様にしたいですね。

## 序章 日常（前書き）

「早く帰ってレッドクリフのDVD観よう」

2009年8月26日更新。

2009年8月28日最終更新。

## 序章 日常

「えっと……パンフレットにキーホルダーに、ストラップに……。」

閑静な住宅街を、一人の少年が歩いている。

肩にかけたバッグの中身を確かめながら、ゆっくりと帰路についている。

「あとは……何と言ってもこの図録だな！」

厚さ三はある本を取り出し、外だと言う事も構わずにページを開き、読んでいく。

その本の表紙には、「三国志の時代・信念を持った勇士達の記録」と箔押しされたタイトルが記載されていた。

「やっぱり、日本も外国もこういった時代の方が歴史としては面白いよなあ。」

少年は読みながら歩き続けた。

前から来る行人が自ら避けてくれたから、ぶつかる事は無い。自動車に関しても、少年が歩いているのはきちんと舗装されている歩道であり、更にここは時速三十の速度規制が設けられている為、余程の事が無い限り交通事故は起きない、比較的安全な場所だった。

「蜀の劉備に呉の孫策、そして何より魏の曹操！ この面子はやっぱり凄いよなあ。」

三国志を詳しく知らない人でも、一度は聞いた事のある登場人物の名前を挙げながら、少年は歩き続ける。

と、そこに、若い女性の声がどこからともなく聞こえてきた。「  
その読書家なお兄さん、ちょっと良いですか？」  
「ん？」

「読書家」と言われて、少年は頭を上げた。  
読書家と解るには本を読んでいる姿を見ないといけないが、こんな道端で本を読んでいるのは自分くらいだという事は、流石に少年でも理解していたらしい。

その少年が頭を上げた先、つまり左前方には一人の少女が立っていた。

少女は一見すると不思議な格好をしている。

白いノースリーブに薄紅色のプリーツスカート、それ自体は不思議でも何でもない。

黒いオーバーニーソックスや水色のシューズも同様。

只一つ普通と違った格好は、灰色のつばなし帽子から、顔を覆い隠す様にして、白と黒が混じったヴェールを頭に被っている事だった。その為、年若い少女という事は何となく判っても、どんな顔かはよく判らなかつた。

(……………何だろ?)

変に思いつつも、少年は少女に近付き話を聞く事にした。  
すると少女はこう続ける。

「……………お兄さんには、これから大変な運命が待っています。それも、沢山の人々の運命をも巻き込む程の大きな運命。その人々を幸福にするか、不幸にするか、それはお兄さんの決断次第。……………占つておいて何ですが、大変ですねえ。」「はあ……………」

そう応えてみたものの、少年には少女が何を言っているのかサッ

パリ解らなかつた。

唯一解つたのは、少女の占いが本当だった場合、何だか面倒な事になりそうだという事だった。

「おや？ おやおやあ？ ……ひょっとしてお兄さん、私の言う事を信じていませんね？」

「そりゃあ…ねえ……。」

見知らぬ少女に突然占われて、ハイそうですかと信じる程単純では無いと、少年は自負している。

「成程。まあ、それも当然でしょう。ならば、私の占いが本物だと言う証を見せましょう。」

「証？」

まさか水晶玉でも出すのか？ と、少年は思いながら、少女の行動を待った。

すると少女は、水晶玉を取り出すでもタロットカードを取り出すでも無く、只、少しの言葉を紡いだだけだった。

「……貴方の名前は、“清宮涼”。年齢は十七歳で、聖フランチェス科大学に在籍している高校二年生。家族構成は両親と妹が二人。但し離れて暮らしている為に現在は一人暮らし、と。……まあ、こんな所ですかね。」

「……!？」

少女の言葉を聞いていた少年・清宮涼は絶句した。

何故なら、今少女が語った事は全て間違いの無い事実だったからだ。

「何でそんな事迄……。」

「占い師ですから」

「いやいや、答えになってないから。」

涼はそう思ったが、何故か口には出せなかった。

それよりも、少女が涼の事をピタリと言い当てた事で、涼の胸中は一瞬にして不安で一杯になっていた。

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。私は怪しい者ではありませんから。」

「いや、充分怪しいから。」

流石にそこはツツコミをいれないとダメだと思っただけらしい。

「手厳しいですねえ。まあ、余り深く考えない方が良いでしょう。」

「いつも通り」にいけば大丈夫です。」

「そ、そうなんだ……。」

そう言っただけ少女の言葉に反応しつつも、涼は新しい疑問に対して自問自答を始めた。

（“いつも通り”の俺って、どういう事だ！？ この子は俺の性格迄占いで知ってるって事か！？）

混乱しつつ目の前の少女を再び見るが、やはりヴェールの所為でよく見えない。

只、微かに見えた表情は悪くなかった様に思えた。

「……と……」

「な、何？」

反射的に身構える涼。

甘く可愛い声の少女に恐れるというのも滑稽だが、現状では仕方ないか。

「今日は帰ってから観たい物が有るのでは無いですか？」

「え？」

予想外の言葉を聞いて、一瞬何を言われたのか解らなかった涼だが、やがてその意味を理解して叫んだ。

「あつ！ た、確かにそうだつ！」

涼は慌てながら、持っていた図録をバッグに入れる。

「そ、それじゃあ俺はこれでっ！」

「ええ、ごゆっくり」

そう言葉を交わして、涼は自宅へと駆け出した。

少女は笑みを浮かべながらその様子を眺めている。ずっと、ずっと。

そんな事に気付かない涼は、駆けながら考えていた。

(……何である子、俺の事知っていたんだ？ 個人情報が出てくるのか？)

振り返ってみようとしたが、その時間すら惜しい現状に改めて気付き、止める。

(……まあいつか。それより早く帰って、今日買ってきた“レッドクリフ”のDVDを観ようっと)



博物館の売店で売っていた、「三国志」を元にした大作映画のVD。

既に単品では二作共持っていたが、二作が一緒になっているBOX版は持っていなかったため、迷わず買っていた。

……普通は迷いそうだが。

そんな風に浮かれていたため、涼は気付かなかった。

先程の少女が、いつの間にか姿を消していた事に。

この街は勿論、既にこの世界から居なくなっていた事に。

## 第一章 三人の英傑と天の御遣い（前書き）

三人が出会ったのは天命なのか。  
ならば、三人が彼と出会ったのも天命なのだろうか。

2009年8月28日更新開始。  
2009年9月14日最終更新。

## 第一章 三人の英傑と天の御遣い

とある街の風景。

それなりに活気に溢れた街ではあるが、皆どこかピリピリしており、落ち着きが無い。

武器を売る店では品物が飛ぶ様に売れている。

買っていくのは若い男性だけでなく、老人や女性もが皆、矛や槍を手に帰路についていく。

本来、争いとは無縁の筈の民衆が武器を必要とするのには、ちゃんとした訳があった。

国中を荒らす集団、「黄巾党」の存在だ。

この黄巾党、元々は腐敗した漢王朝に対して反乱を起こしていた集団なのだが、その規模が大きくなるにつれ単なる暴徒の集まりと化してしまった。

今では、当初の大義名分を掲げる者は少なくなり、私利私欲に走る者ばかりになっている。

その黄巾党はこの街にも度々現れ、略奪や誘拐を幾度となく繰り返していた。

通常なら、街の平和を守る立場である「県令」という役職の役人が居るのだが、その県令も所詮は今の漢王朝から派遣された人間であり、殆ど役にたっていない。

酷い所だと、役目を放棄して洛陽に逃げていたりもするので、民衆は自衛しなければならなくなっている。

そしてこの街でも、いつそうなっても大丈夫な様に義勇兵を募っていた。

街の広場にはそれを知らせる立て札が立っている。

『我こそはと思う者、武器を取りて平和の守り手とならん。尚、性別、年齢は不問とす。』

と、立て札に書かれている。

性別も年齢も問わない事が、事の重大さを物語っていた。

その立て札を暫くの間見続けていた少女は、やがて大きく一つ溜息をついた。

「……ふう。」

腰迄ある桃色の長い髪が風に揺られ、つられて豊かな胸も揺れる。この街の一般的な、質素な衣服を身に纏う少女の瞳は、何かに対して逡巡している様だった。

「桃香お姉ちゃん、何してるのだ？」

「あ、鈴々ちゃん。うん……あれを見ていたの。」

通りがかった小さな少女から「桃香」と呼ばれた少女は、小さな少女を「鈴々」と呼びながら正面に在る立て札を指差した。

鈴々はその立て札を見る。

「あー、義勇兵を募集している立て札だね。」

「うん。……それでね鈴々ちゃん、私はこの義勇兵になろうと思うんだ。」

「ふーん……ええええっ！？」

図らずも綺麗なノリツツコミとなった鈴々の驚く声に、今度は桃香が驚いた。

「り、鈴々ちゃん、そんなに驚かなくても良いんじゃない？」

「驚くに決まってるのだ！ だって、桃香お姉ちゃんは武器を持つた事無いでしょ！？」

「本物の剣くらい持った事は有るよー。……一度だけだけど。」

ついこの前の出来事を思い出しながら、桃香は答える。

「持っただけじゃダメなのだ！ ちゃんと扱える様にならなきゃ、戦場で死んじゃうのだ！！」

「……………だよねえ。」

鈴々に言われて、苦笑いをする桃香。

桃香は、幼い頃に父を亡くし、母と二人暮らしだった。

十三歳の時に、儒学者の廬植の元で学問を学んでおり優秀な成績を残していたが、対照的に武術の方は余り得意では無かった。

「けど、同窓生だった白蓮ちゃんは今立派に跡を継いで、黄巾党征伐をしてるし、私も何かしないと……………」。「それはその人が戦えるから出来る事なのだ。戦えない桃香お姉ちゃんじゃ、直ぐに殺されちゃうに決まってるのだ。」

「うっ……………そう何度もハッキリ言わないでよう。」

だが、当たってるだけに何も言えない桃香だった。

「だから、お姉ちゃんは諦めて別の方法で人助けする方が良く思うのだ。」

「でも……………」

それでも桃香は諦めきれないらしく、困った顔のまま立て札を見続ける。

鈴々は、そんな桃香を暫く眺めてから明るく言った。

「なら、鈴々も一緒に行くのだ！」

「えっ……………？」

「鈴々が桃香お姉ちゃんを守って、ついでに黄巾党もぶっ飛ばしてやるのだ！」

「鈴々ちゃん……有難うっ！」

鈴々の優しさや心意気に感激した桃香は、嬉しさの余り鈴々をぎゅっと抱きしめていた。

「く……苦しいのだっ、桃香お姉ちゃんっ。」

桃香の豊か過ぎる胸に挟まれ、息が苦しくなる鈴々。

……有る意味羨ましい状況ではあるが。

「あっ、ゴメンゴメン。」

そう言っつて鈴々を解放する桃香。

鈴々は「苦しかったのだ！」と言いながら、今迄自分の顔があった部分を見つめていた。

「……？ 鈴々ちゃん、どうかした？」

「桃香お姉ちゃんは胸がおっきくて羨ましいのだ。」「えっ！？ ちょっと鈴々ちゃん、急にどうしたの？」

桃香にとつては何の脈絡も無く言われたので、目を丸くしながらも聞いてみた。

「鈴々はぺったんこだから、桃香お姉ちゃんが羨ましいのだ。どうしたらそんなにおっきくなるのだ？」

「え、えーっ……ご飯を沢山食べるとか？」

「ご飯なら毎日沢山食べてるのだ。」

「じゃ、じゃあ、運動をするとか？」

「武術の練習は毎日してるから、運動もちゃんとしてるのだ。」

「だ、だよねえ……。」

そう反論されて、他に理由が思い付かない桃香は言葉に詰まった。そもそも、胸が大きくなる方法なんて桃香は勿論、誰も知らないだろう。

「だ……大丈夫だよつ、鈴々ちゃんはこれから大きくなるからつ。」

「そうだと良いんだけど……。」

桃香の言葉を聞いて自らの胸を撫でる鈴々。

年齢的に平均より僅かに大きい身長と、平均より遥かに大きい胸を持つ桃香と比べて、平均より遥かに小さい身長と胸を持つ鈴々。

一見すればかなり歳が離れている様に見える二人だが、実際にはそんなに離れていなかったりする。

それだけに鈴々が不安になるのも解らないでもない。

「そ、それより鈴々ちゃんつ。一緒に義勇兵になってくれるんだよね？」

困った桃香は無理矢理話を戻した。

「うん、桃香お姉ちゃんと一緒に悪い奴等をぶっ飛ばしてやるのだつ。」

そしてそれに見事にのる鈴々。桃香は鈴々の性格を把握していて話を戻したのだろうか。

「それは嬉しいんだけど、私もちゃんと戦うよ。そうじゃないと参加する意味が無いし。」

「んー、それはそうだけど、桃香お姉ちゃんは先ず武器を扱える様

にならないと。武器は持つてるんだよね？」

「うん。実はこの間、お母さんから剣を買ったんだ。」

「桃香お姉ちゃんのお母さんから？」

「そうだよ。少し長くなるから、詳しくは帰ってから話すね。」

そう言つて桃香は鈴々を連れて自宅へと帰つていった。

桃香の自宅は街の中心部からさほど離れていない。自宅には母が居て、草鞋を作っていた。その手を休め、桃香と鈴々にお茶を出してくれた。

縁側に座つた桃香と鈴々は、それを美味しそうに飲んでいる。

その最中、桃香は先程の話の続きを話し始めた。

「実はね、この間お母さんに言われたの。貴女は“中山靖王”“劉勝”の末裔だつて。」

「“ちゅーざんせーおー”？ “りゅーしょー”？ それって一体何なのだ？” “んー。解り易く言うと、“劉勝”ってのは昔の漢の皇族の人の名前。“中山靖王”ってのはその人が王様をした時の呼び名みたいなもんかな。」

「ふえー、そうなのかい。」

お茶を飲み終え、ビックリした様に目を丸くしながら桃香を見る鈴々。

と、そこで、疑問が湧き上がったらしく、桃香に尋ねる。

「そんなに凄い家柄なら、どうして桃香お姉ちゃん達はこんな所に住んでいるのだ？ 王様は洛陽の宮殿に住んでる筈なのだ。」

「んー、何か御先祖様に色々あつて没落したんだつて。だから今はこんな暮らし。まあ、亡くなったお父さんの遺産や、草鞋を作つて売ってるから、それなりに生活出来てるんだけどね。」



そう言った桃香は、ゆつくりと立ち上がり、座敷へと向かった。そこには一差しの剣が飾られており、桃香はそれを両手で恭しく持ち上げ、縁側へと戻ってきた。

「これがこの間お母さんから貰った、我が家に伝わる宝剣、“靖王伝家”。この剣が、私が漢王朝の末裔って証になるんだって。」

「せいおーでんか”……何だかカツコイイ名前の剣なのだ！」

桃香が持つその剣は、黄緑色を基調とし、金色で縁取りされている鞘に納められている。形から察するに、両刃の剣の様だ。

その鐔は金色の円形、柄は黒を基調に金の線が等間隔に有り、底には丸い宝玉が付いていた。

「実は、お母さんにはもう義勇兵の事は話したの。」

「当然、桃香お姉ちゃんのお母さんは反対したんでしょ？」

「それがね、『貴女は一度決意したら決してその信念を曲げない娘だから心配だけど反対はしないわ。しっかりと頑張りなさい。』って言われたの。」

「ふえー、凄いお母さんなのだ。」

「ホントだね。で、その後に家系の事を教えてくれて、この剣もくれたって訳。」

言いながらゆつくりと、鞘から剣を抜く。

銀色の刀身は、長い年月を経たとは思えない程に光り輝いていた。

「いつでも使える様に、先祖代々手入れをしていたんだって。昔はお父さんが、お父さんが亡くなってからはお母さんがしていたみたい。」

「それでこんなに綺麗なんだね。」

「うん。」

暫くの間剣を見てから、再び鞘に納めた。  
その直後に鈴々が尋ねる。

「桃香お姉ちゃんは、その剣を持って義勇兵になるの？」

「そうだよ。あと、服も用意してるの。」

そう言つて指差した先には、仕立てたばかりと見られる真新しい服が掛けられていた。

中々用意が良い桃香である。

「そつか。じゃあ、明日から鈴々が稽古をつけてあげるのだ！」

「ホントに！？ わー、嬉しいなあっ」

鈴々の申し出に桃香は心から喜び、再び鈴々を抱き締めた。

大きな胸に挟まれた鈴々が再び苦しがつたのは言う迄もない。  
それから暫くの間談笑してから、鈴々は帰って行った。

「桃香お姉ちゃん、また明日なのだっ。」

「うん。またね、鈴々ちゃん。」

空は夕焼けに染まっていた。

数日後。

「うう〜、疲れたよう〜。」

「桃香お姉ちゃん、すっかりするのだっ。はい、お酒。」

「有難う〜、鈴々ちゃん〜。」

そう言つて鈴々からお酒が入った猪口を受け取つた桃香は、グイッと豪快に飲み干した。

ここは街の酒場。夕方になり、一仕事を終えた老若男女で賑わっ

ている。

因みに、二人は未成年に見えるが、この時代は十代でもお酒が飲めるので問題は無い。

勿論、これを読んでる未成年の人は飲んじゃダメだよ。

「それにしても、桃香お姉ちゃんの武術は大分上手くなったのだ。」

「そうかなあ？　だとしたら鈴々ちゃんの教え方が上手いからだよ。」

あれから桃香は、時間が有れば毎日鈴々と武術の稽古をしている。毎日している所為か、始めは何とも危なっかしかつた桃香も、何とかそれなりに武器を扱える様になっていた。

それでも、実戦で戦うにはまだまだではあるが。

「ふう……。早く皆の為に戦いたいな。」

「焦っちゃダメなのだ。焦ったら、確実に死んじゃうのだ。」

「それはそうかも知れないけど……。」

反論しようとした桃香だが、後ろから別の声が割って入ってきた。

「その子の言う通りです。焦りは禁物ですよ。」

二人が振り返ると、そこには旅人らしき風貌の黒髪の少女が立っていた。

「貴女は……？」

桃香が尋ねる。

「これは失礼。私は旅の武芸者で、関雲長と申す者。何やら溜息を吐いておられたので、少し気になって聞き耳を立てておりました。」

「聞き耳を立てるなんて、悪趣味なのだ。」

「鈴々ちゃんっ!」

鈴々の発した言葉に桃香が慌てふためく。

「いえ、その子の言う通りでしょう。謝ります。」

「そんなんっ、あの、別に気にしてませんから貴女も気にしないで下さい。」

丁寧に頭を下げる関雲長という名の少女に対し、慌てて声をかける桃香。

関雲長は、それを聞いてからゆっくりと顔を上げた。

「有難うございます。……どうでしょう、折角ですから私にも話を聞かせてくれませんか?」

「えっ、私達の話ですか?」

関雲長の思い掛けない提案に、驚く桃香。

「はい。どうやら貴女達は何やらお困りの様子。私に話して下さいれば、何か解決の糸口が見つかるかも知れません。」

「うーん、でも……。」

「それに、私も気になってしまったので、是非とも訳を知りたいのですよ。」

「そういう事でしたら……良いよね、鈴々ちゃん?」

「桃香お姉ちゃんが良いなら、鈴々は構わないのだっ。」

「良かった。じゃあ、関雲長さん、そちらにお座り下さい。」

「ああ。」

桃香に促され、関雲長は桃香達と同じ卓を囲んだ。

椅子に座った関雲長は、自らの獲物を右に置き、纏っていた羽織を脱いだ。

「では、改めて自己紹介させて頂きます。私の姓は“関”、名は“羽”、字は“雲長”。“関羽”と呼んで下さい。」  
「解ったわ。じゃあ次は私達ね。私の姓は“劉”、名は“備”、字は“玄德”。“劉備”って呼んで下さいね。」  
「鈴々の姓は“張”、名は“飛”、字は“翼徳”。“張飛”って呼んで欲しいのだっ。」

三人が三人共自己紹介を終えると、改めて先程の話をはじめた。

「……つまり、劉備殿は義勇兵になる為に張飛殿に稽古をつけて貰っているものの、未だ実戦に出られる実力が無い為に焦っておられると、そういう訳ですね？」

「は……はい、お恥ずかしい限りで……。」

関羽の確認に、桃香は俯きながら肯定する。  
だが関羽は、

「いえ、恥ずかしくは無いでしょう。最近漢王朝だけでなく、漢王朝を打倒するべく立ち上がった筈の黄巾党迄もが私利私欲に走っています。」  
そう言って話し始めた。

「今、時代は乱世の兆しを見せています。このまま漢王朝や黄巾党が残るにしろ滅ぶにしろ、世の中が乱れるのは最早必至。」  
「……うん。」

関羽の語り口調は普通だが、所々のトーンは重く、また表情も真剣で、桃香は思わず緊張の面もちになってしまっていた。

「そうなれば、他者より自分の事を優先する者ばかりが現れるでし

よう。いや、既にそうした者達が大多数を占め始めている。」  
「……そうかも知れないのだ。」

鈴々ですら言葉少なく、そして真剣に聞いていた。

「その様な時勢の中で、他者を助けたいと願う行動する。それは誰しもが一度は思いながらも、中々実現出来ない事です。そんな貴女の行動を立派と思う人は居れど、馬鹿にする人は決して居りません。もっと自分に自信を持って下さい、劉備殿。」

「そ、そうかな？ あ、有難う関羽さん。」

関羽に誉められ、桃香は頬を赤く染めた。

「けど、武術が強くないと、結局何も出来ないのだ。」

「ハッキリ言わないでよ、鈴々ちゃん……。」

「ですが、事実です。」

「関羽さん迄……うう。」

軽くへこんだ桃香を見た鈴々と関羽は、思わず吹き出していた。  
それから約二時間後。

桃香達はすっかり意気投合してお酒を飲み交わし、勘定を済ませて店を後にした。

外は夜の帳が降りきっており、空には三日月と沢山の星が輝いている。

「関羽さんはこれからどちらへ？」

かなり酔っぱらってはいるものの、何とか歩いている桃香が、比較的平然と歩いている関羽に尋ねる。

因みに、鈴々は酔いつぶれて桃香の背中で寝息をたてていた。

「そうですね、適当な宿を見付けて泊まるうかと思ってますが。」

関羽は羽織を纏いながらそう答える。

「なら、未だ宿をとってないんだね？ だったら家に泊まったら良いよ。」

「えっ？ それは嬉しい申し出ですが、お家の方に御迷惑がかかるのでは……？」

桃香の申し出に対して、関羽は僅かに喜びの表情を浮かべながらそう尋ねる。

桃香は答えた。

「大丈夫っ。私の家はお母さんと二人暮らしだし、そのお母さんもお客さんは大歓迎っ！ って人だから。」

「そ、そうですね。……なら、お言葉に甘えとしましょう。」  
「良かったー」

桃香は、関羽が自分の申し出を受けてくれたのが嬉しくて、満面の笑みを浮かべた。

折角だから、鈴々もこのまま泊まらせようと思いつながら。

桃香がそんな事を思っている時、関羽は前方が騒がしい事に気付いた。

「何の騒ぎでしょう？」

「酔っぱらいさんが喧嘩してるのかなあ？」

確かにこの時間になると、酔っぱらった人達の間で喧嘩が起きる事がある。

だが、今回はどうやらそれとは違う様だ。

何故なら、前から血相変えて走ってきた男性が周りに向かってこ  
う叫んでいたからだ。

「黄巾党の奴等が来たぞーっ!!」

「!!!!」

その瞬間、辺りは緊張に包まれた。

周りの家々からは武器を手にした老若男女が飛び出し、騒ぎの元  
へと向かっていく。

「黄巾党が……!! 関羽さん!!」

「ええ!!」

街に黄巾党が現れたと知り、桃香と関羽は現場に向かって走り出  
した。

因みに鈴々は未だ桃香の背中で眠っている。

しかも自分の得物を握ったまま。

鈍感なのか大物なのかよく判らない少女である。

そんな鈴々を背負いながら桃香は走っている為、どうしても関羽  
より遅れてしまっていた。

「関羽さん速いなあ……。」

いや、鈴々を背負って走っている桃香が遅いんだが。

まあ、多分鈴々を背負っていないなくても、関羽の方が速い様な気が  
するのだが。

「……私も早く行かなきゃね。」

一方その頃、関羽は既に現場に到着していた。



そこでは、黄色の布を頭に巻いた集団、つまり黄巾党と街の人間による戦闘が起きていた。

数はざっと見た所、黄巾党は十人ちょっと。一方の街の人間は二十人以上がその場に居た。

数では街の人間の方が勝っているが、何故か数的有利を全く生かせていない。

逆に数的不利である筈の黄巾党は、そんな状況でも全く恐れる事無く矛や槍を奮っている。

(やはり、こうなるか……。)

関羽は予測通りになっている現状を見て、思わず舌打ちをする。

街の人間と黄巾党との違い。それがこの差を生んでいた。

その違いとは、「人を斬った事が有るか無いか。」、只それだけ。それだけだが、それを経験してるかどうかで大きく違う。

人を斬った事が無い人間は、いざ人を斬ろうとする時、どうしても躊躇してしまう。

人を斬るという事は、人を殺すという事。

それ迄生きていた人間の「生」を奪い、「死」という終わりを与えるという事。

人を斬った事が無い人間はその事に恐怖し、まともに武器を振れないのだ。

だが、黄巾党は全く違う。

何の躊躇いも無く武器を奮い、目の前に居る人間の「生」を奪おうとしていた。

恐らく、今ここに居る黄巾党の人間は全員人を斬った事があるのだらう。

一度斬ってしまえば、二度斬るのも三度斬るのも同じ。

人を斬った事が無い頃には二度と戻れない。

故に、そうした人間は躊躇わない。後悔もしない。

そんな人間を相手に、人を斬った事が無い人間が勝つのは難しい。幸い、今は未だ死人は出ていないが、このままではそれも時間の問題だ。

黄巾党が少人数で街に来たのも、この人数で充分と思ったからだろう。事実、今迄は彼等の予測通りだった。

そう、今迄は。

「はあああーっ!!」

凜とした声が辺りに轟く。

その声を発した「少女」は、走りながら得物である槍を構える。

街の人間はその迫力に恐れをなして少女の進路を空ける。

だが、黄巾党の人間は動じる事無く、近付いてくる少女に向かって矛を、槍を振り回した。

「そんな太刀筋で、私を殺れると思うな！」

少女はそう叫んで槍を豪快に振り回す。

それだけで、目の前に居た黄巾党の人間達は地面に倒れた。

断末魔をあげる事も無く、三人が絶命していた。

その場には三人分の血溜まりが出来、少女の槍の刃先には、相手の命を奪った証である血がベツトリと付いていた。

これには黄巾党の男達も流石に驚いたらしく、残った者達は皆真剣な表情で武器を構え直した。

「徒党を組み、他者から奪う事しか出来ぬ賊共よ！ 天に代わってこの関雲長が成敗してくれる!!」

関羽は黄巾党の男達に向かってそう叫んで名乗りをあげると、自分の槍を片手で回してから再び黄巾党に向けた。

それに対し黄巾党の男達は、関羽の迫力に圧されながらも直ぐに斬りかかった。  
だが、

「はあっ！」

一閃、

「たあっ！！」

また一閃と関羽が槍を振る度に、黄巾党の男達の数は一みるみる減っていく。

その分だけ周りには、頭に黄色の布を巻いた死体が増えていく。  
今や残っている黄巾党の男達は三人。

最早勝負は決した。

関羽も黄巾党の男達も、そして周りで見守っている街の人々も、誰もがそう思った。

その時、

「関羽さーんっ。」

関羽の後方二十メートル先から、子供をおんぶした桃色の髪の少女が走ってきた。

「劉備殿!？」

「はあっ…はあっ…やっと追いついた……って、きゃあっ!！」

桃香は鈴々を背負いながらここ迄走ってきた。

そして漸く関羽に追いついたものの、そこで見た物は桃香にとって衝撃的な物だった。

「人が…死んでる……っ！」

桃香は、目の前に在る幾つもの死体を見て、体を硬直させた。今迄死体を見た事が無い訳では無い。

盗賊に襲われたり、狩りに行って逆にやられて死んだ人々の死体は、今迄何回も見た事がある。

だが、つい数分前迄生きて動いていた筈の人間の死体、つまり「新しい死体」というのは、今迄見ていない。

「あ…ああ……っ！」

義勇兵になれば、そんな死体を沢山見る事になる。それは理解していた。

だが、実際に「新しい死体」を間近で見た桃香は、頭では理解していても体が言う事を利かず、只震えて立ちすくむしか出来なかった。

例えば目の前のそれが、街を襲った黄巾党の男達の死体だと解つていても。

桃香は動く事が出来なかった。

そしてそれを、黄巾党の男達は見逃さなかった。

「……！ しまった……！」

標的を関羽から桃香へと変えた黄巾党の男達三人は、関羽を素通りし、一斉に桃香へと襲い掛かった。

「逃げるのです、劉備殿！」

「あ……ああ……っ！」

関羽は黄巾党の男達を追い掛けながら桃香に向かって叫んだ。

だが、それでも桃香は動けなかった。

その間にも、黄巾党の男達はみるみる迫ってきていた。

桃香は宝剣「靖王伝家」を腰に携えていた。

その為、自分の身を守る事が出来ない訳では無い。

だが、鈴々を背負い、更に死体を見て精神状態が不安定になった今の桃香に、そんな事が出来る筈は無かった。

「死ねーっ！！」

「っ！！」

目の前に来た黄巾党の一人が、桃香に向かって剣を振り上げた。

「劉備殿っ！！」

関羽は一番後ろに居た黄巾党の男を斬り捨てながら、桃香に向かって叫ぶ。

だが二人の距離は遠く離れており、間に合いそうにない。

そして、焦る関羽を嘲笑うかの様に、無常にも剣は振り下ろされた。

「……………っ！！」

桃香は反射的に目を瞑った。どうやら、体は動かさなくても目は動かせるらしい。

だが、いつ迄経っても痛くはならなかった。

ひよっとして、もう死んじゃったから痛くないのかな？ なんて

思いながら、桃香はゆっくりと目を開けた。

そこには、

「ぎゃあぎゃあ五月蠅いのだ。眠れないじゃないかあ。」

自らの矛を振り上げ、黄巾党の男による剣の一撃を防ぐ鈴々の姿があった。

「鈴々ちゃん…いつの間に!？」

確かめて後ろを見てみると、桃香の背中には誰も居ない。

目の前に居るのは本物の鈴々だった。

「何だか五月蠅くなつたから目が覚めたのだ。こいつ等が暴れてる所為で五月蠅いんだね、桃香お姉ちゃん？」

「う…うん…。」

それを聞いた鈴々は、矛を振って黄巾党の男の剣を弾くと、矛を向けて牽制する。

「みんなを苦しめる黄巾党は鈴々が倒すのだ。桃香お姉ちゃんは下がっていて。」

「で、でも鈴々ちゃんも危険だよ。」

「平気なのだ。」

桃香の制止も聞かず、鈴々は矛を振り黄巾党の男に向かっていく。

「でりやりやりやりやーっ!!」

鈴々は何度も矛を振り、黄巾党の男は辛うじてそれを防いでいた。だが、いつ迄も防ぎきれぬ訳がなく、遂には斬り伏せられる。

うつ伏せに倒れた黄巾党の男は、斬られた場所から血を流し、呻き、やがて絶命した。

鈴々は顔に付いた返り血を左腕で拭い、矛を振って血を払う。

鈴々の表情は常の明るい表情ではなく、かといって人を斬った事

による高揚感も無い。

僅かに悔恨の表情を浮かべていたが、それも直ぐに消えた。

「り…鈴々ちゃん、大丈夫!？」

「大丈夫なのだ。鈴々は怪我してないのだっ。」

「それは解るけど…その、あの……………」

桃香は何かを聞こうとして中々聞けないでいる。

「…………鈴々なら大丈夫なのだ。もう、慣れてるから。だから、桃香お姉ちゃんは気にしないでほしいのだ。」

「…………！ 鈴々ちゃん…………解った……………」

鈴々が人を斬った姿を、桃香は初めて見た。

鈴々が人を斬った事があるのを、知らなかった訳では無い。鈴々から直接聞いていたから知っていた。

それでも、自分より年下で、体もまるで子供の様に小さい鈴々が、敵とはいえ人を斬って心が無事でいられるのか、心配していた。

だから、今の鈴々の言葉を聞いた桃香は、自分なりの納得をしつつ、これからも鈴々と共に居たいと思った。

「ひ…ひええーっ!!！」

最後に残った黄巾党の男が、関羽や鈴々の強さに恐れをなし、一目散に逃げていく。

「待てっ！」

「待つのだーっ！」

逃がす訳にはいかないと判断した関羽と鈴々は、獲物を構えながら追走する。

「わわっ、二人共待ってよーっ！」

漸く落ち着いてきて体が動くようになった桃香も、慌てて二人を追いつける。

そうして三人が駆けていた、その時だった。

「なっ!?!」

「一体何なのだっ!?!」

「ま、眩しいっ!」

今は夜だというのに、まるで太陽が昇ったかの様に急に明るくなったのは。

それ迄暗かった空が急に明るくなったので、関羽達は勿論、街の人々や逃げていた黄巾党の男も、余りの眩しさで目が眩み、その場から動けなくなっていた。

その光は硬質な音と共に暫く続き、やがて消えていった。

とは言え、眩しさで目が眩んだ為に、皆暫くは目を開けられないでいる。

その中で最初に目を開けたのは桃香だった。

「な、何だったのかな、今の光……って、ええっ!?!」

目を擦りながら辺りを見回していた桃香は、ある一点を見た途端に大声をあげて驚いた。

「と、桃香お姉ちゃん、どうしたのだっ!?! ……はにゃ?」

「劉備殿、いかなされた!?! ……何と!?!」

続けて目を開けた鈴々と関羽も、桃香と同じ場所を見て驚く。



「いてて……一体何だったんだ、今のは？」

桃香達が見ている場所には、彼女達と同年代と思われる少年が座っていた。

「少年が座っている」だけなら未だ良いのだが、少年の服装や持ち物は、桃香達が見た事の無い物ばかりだった。

何より一番おかしいのは、少年がその場所に居る事だ。

街の出入り口へと続くその道には、先程迄は誰も居なかった。

辺りには民家も隠れる場所も無いのに、何故か少年は今そこに居る。

まるで、急に現れたかの様に突然現れていた。

「……ここはどこだ？ 俺、さつき迄家に居て、これから外出しようとしてた筈なのに……。」

周りを見ながらそう呟いていた少年は、目の前に居る人物を見て動きを止める。

その人物は頭に黄色い布を巻いた中年の男。右手には剣を握っており、その刀身は銀色に光っている。

「何だてめえ？ どけっ！！」

その男はそう叫びながらその剣を振り上げる。

少年は何が起こっているのか解らず、只立ち尽くしていた。

そして、その男は剣を振り下ろした。

少年は反射的に体を後ろに動かし、その剣をかわす。だが、少年の前髪が数本空に散った。

「な……なっ、何だよそれっ！？ ……まさか、本物の剣なのかっ

!？」

少年は、髪や顔、体を触りながら自分の無事を確かめる。だが、無事と解つても直ぐに恐怖心が少年の心を捉えた。

少年にとつて「現実」とは受け入れ難い、目の前の「現実」は、少年の体を動けなくするには充分だった。

そんな少年に対して、黄巾党の男は再び剣を振り上げる。

「危ないっ!」

その時、少年の前方、つまり黄巾党の男の後方から、柔らかくも意志の強い声が聞こえてきた。

「えーいっ!」

その声の主である桃色の髪の少女は、走りながら腰に有る鞘から剣を抜き、黄巾党の男に向かって斬りかかった。

だが黄巾党の男がかわした為に剣は空を斬り、少女は体勢を崩す。黄巾党の男はその隙を見逃さず、逆に少女に向かって斬りかかった。

「桃香お姉ちゃん!」

「劉備殿!」

鈴々と関羽が同時に叫ぶ。

その少女・桃香は咄嗟に剣を盾にして防ぐが、力量の差は明らかだった。

鈴々と関羽が救援に向かうが、距離的に間に合うか微妙だ。

このままでは間違いなく桃香は殺される。

鈴々や関羽は勿論、桃香自身もそう感じていた。

その時、

「てえりゃああつ!!」

そんな雄叫びと共に、少年が黄巾党の男目掛けて跳び蹴りをした。突然の事だったので、黄巾党の男は防ぐ事が出来ず、そのままゴロゴロと転がる様に吹っ飛ばされた。

「何だかよく解んねえけど、お前が悪い奴だつてのは解つたぜ!」

そう言いながら少年は桃香を庇う様にして前に立つ。

その桃香は、助ける筈が逆に助けられたのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俯いていた。

「この野郎、よくもやったな!」

黄巾党の男が立ち上がるうとしながらそう叫ぶ。

だが、その動作は途中でピタリと止まった。

「悪いが、そこ迄だ。」

「大人しくするのだ!」

黄巾党の男の首筋に、二つの刃がピタリとついている。

右側に関羽の槍の刃先、左側に鈴々の矛の刃先。少しでも動けば、間違いなく絶命する。

つまり、王手をかけられている。

それを察した黄巾党の男は、抵抗を止めてガックリとうなだれる。

その後、やってきた街の人々によって拘束された黄巾党の男は、そのままどこかへと連れて行かれた。

恐らく、尋問をされるのだろう。

「やれやれ、これにて一件落着なのだ！」

「そうだな。劉備殿も少年も、怪我はありませんか？」

事件の解決を確認した関羽が、桃香達の許に駆け寄る。

「私は大丈夫だよ、関羽さん。見たところ、この人も怪我してないみたいだし。」

そう言って二人は互いの無事を喜んでいた。

鈴々はというと、少年を珍しそうに見ている。

「あのー……。」「

「はい？」「

そんな中、少年は桃香達に話し掛けた。

それも、どこか驚いた表情で。

「さつきから“劉備”とか、“関羽”とか聞こえるんだけど……それって君達のニックネームなのかな？」

「につくねえむ？ 何それ？」

「……えっ？」

桃香の言葉を聞いた少年が、更に驚いた表情になって呟いた。

「えっと……ニックネームを知らないの？ ニックネームってのは、つまりは愛称みたいなものの事なんだけど……。」

「……私達の名前が愛称だと仰るのですか？」

「う、うん。」

ニックネームの説明をすると、急に関羽の表情が険しくなった。

少年もその異変に気付いたらしく、言葉が一瞬詰まる。

「貴方が何故そう思うのか解りませんが、我が名“関羽”は父母より頂いた大切な名前。愛称等の軽い物ではありません。」  
凜とした声で重々しく語る関羽。その表情はしつかりと少年を睨みつけていた。

「そ、そっか……。……じゃあ、君の字は“雲長”？」  
「なっ！？ 何故貴方が私の字を知っている！？」

初対面の相手に自分の字を言われた関羽は、驚きと共に警戒感を表し、手に持つ槍に力を込めた。

そんな関羽の警戒感に気付いているのかいないのか解らないが、少年は桃香の方を振り返って話し続ける。

「まあ、色々だね。で、君が劉備って事は、字は“玄德”かな？」  
「は、はいっ、当たってますっ！」  
「やっぱり。なら……。」

少年は関羽の右斜め後ろに居る小さな少女を見る。

「劉備と関羽ときたから……。まさかと思うけど、君が“張翼徳”？」  
「そうだよー。けど、何でまさかなのだ？」  
「いや、あの張飛がこんな小さい女の子なんて思わなくて。」

そもそも、三国志の英傑達が女の子なんて、とも思ったが、話が更にややこしくなりそうだったので言わなかった。

「小さいは余計なのだ！ 小さくても鈴々は強いのだ！」  
「だろっね。君が張飛ならそりゃ強いだろう。」

少年はそう言いながら、自分が知る張飛の活躍を思い出していた。虎牢関の戦いや長坂の戦いでの張飛の活躍は凄まじい。

劉備と関羽が来る迄はあの呂布と一騎打ちしてたり、長坂橋を背にして、追撃して来る曹魏の軍勢と対峙したりと、その戦い振りは正に一騎当千。

(それがこんな小さい女の子なんて言われて、戸惑わない方が変だろ……。)

鈴々が持っている武器は、形状からして「蛇矛」(だぼう)だろう。それはまさしく張飛の武器だ。

(長さとかも合ってるみたいだし、それに……。)

さっきの男が持っていた剣は真剣だった。

なら、この娘達の武器も本物の武器なのだろう。

少年はそう結論付けた。

そうになると、ここが何処なのか、何故此処に自分が居るのか、解らない事だらけになった。

(どっかのコスプレ会場に、無意識の内に迷い込んだって方が未だマシだけど……。)

だが、今自分が居るのは何処かの建造物の中では無く、見知らぬ風景が広がる街の中。

それも、明らかに現代の街とは思えないくらい質素な建物が並んでいる。

道は舗装されていないし、街灯や自動販売機、信号も電柱も何も無い。

少年が住んでいる現代では、こんな場所はもう世界中探しても数

が少ない筈だ。

少なくとも、少年の故郷である「日本」には、どんな田舎でも一通りのインフラは整っている。

「何が何やらサッパリだな……。」

「それはこちらの台詞です。」

混乱しつつある自分に対して呟いた一言に、凜とした声が応えた。

「何故貴様は私達の名前を知っている？」

「そうだよー。初めて会った筈の私や関羽さん、それに鈴々ちゃんの名前を当てるなんて、ちょっと考えられないよ。」

不思議に思った関羽と桃香は率直な疑問を投げかける。

「それは君達の名前が“三国志”の英傑達と同じ名前だからさ。」

「さんごくし？ 何それ？」

「……またかよ。」

桃香達の疑問に答えたものの、その桃香達は「三国志」を知らないらしい。

何でその名前で知らないのかとツツコミを入れたかったが、知らないのなら仕方ないとも思った。

それよりも、少し気になった事が有るからだ。

「あの……。」

「なあに？」

少年は桃香達に尋ねる。

「さっきから何回か聞く“りんりん”って、一体何の事？」

「あ。」  
「なっ!?!」  
「はにゃ?」

少年がその言葉を発した時、桃香達の表情が瞬時に変わった。

桃香は「ありゃ。」という表情に、

関羽は「何て事を。」という表情に、

そして、当の鈴々は「あーあ。」という表情になっている。

次の瞬間、関羽の槍が少年の喉元に突きつけられていた。

少年は、何故こんな事になったのか解らないといった表情を浮かべながら固まっている。

「貴様! 初対面の人間が張飛殿の“真名”を呼ぶなど、一体何のつもりですか?!?」

「な、何の事だよ?!?」

「とぼけないで戴きたいっ! この国の人間が“真名”を知らない訳が無いでしょうっ!?!」

「そう言われても、知らないもんは知らないよっ!」

相変わらず槍は突きつけられていたが、少年は必死にそう叫び続けた。

「ならば貴様は、この国の人間では無いとでも言うのか!?!」

「た、多分、この国の人間じゃ無いと思うけど……。」

「……………え?」

それは関羽にとって予想外の言葉だったのか、思わず槍を引いた。それは桃香や鈴々達も同じだったらしく、ポカンとした表情を浮かべている。

「えっと……………な、なら、貴方は外国の人って事?」



「まあ……そうなるかな。」

少年は桃香にそう答えながら、何故言葉が通じるのか解らないけど、とも思ったが、やはりややこしくなりそうなので言わなかった。

「では、貴様は何処から来たというのだ？ “南蛮”や“五胡”から来たとも言つのか？」

そう尋ねる関羽の声は、心なしか先程よりトーンが落ちている様に感じる。

外国の人間なら「真名」を知らないのも仕方無いと思ったのだろうか。

（確か、“南蛮”は劉備没後に実質的指導者となった諸葛亮が平定した場所で、“五胡”は華北に居る民族の事だよな。）

関羽の質問に答える前に、少年は南蛮と五胡についての知識を頭の中で再生した。

どちらも三国志に登場する単語だが、勿論少年はその何れの生まれでは無い。

「違うよ。俺は日本から来たんだ。」

「にほん？」

この感じ、早くも何回目だろうか？ と思いつつも、取り敢えず説明を始める少年。

「この大陸の東の果て、海を隔てた先に在る島国だよ。ひよっとしたら、今の国名は“倭国”かも知れないけど。」

少年は薄々感じていた。ここが、現代のどこでもない別の世界じゃないかと。

だからそんな訳の分からない説明になってしまったが、下手に考えるより話すのが良いと思い、話し続けた。

「多分君達にとっては訳の分からない事を言っていると思う。まあ、正直言つて、俺自身も現状はよく解つてないんだけどね。」

「よく解つてないとは？」

「気付いたらここに居たんだ。さっき迄家に居たのにね。」

少年はさつき迄の事を説明していった。当然の事ながら桃香達は困惑していたが、暫くすると桃香がハツとしながら呟いた。

「もしかして……“天の御遣い”……？」

「てんのみつかい？」

桃香が発した言葉を、少年は疑問符を浮かべながら繰り返した。すると、桃香が説明を始めた。

「えっとね、私の友達に“管輅”ちゃんっていう占い師が居てね。

その娘が言っていたの、『もうすぐ、この大陸に“天の御遣い”が現れる。』って。」

「管輅!？」

その名前を聞いた少年は驚いた。

管輅と言えば、三国志に登場する占い師で、人の寿命や様々な戦いの予言をピタリと当て、自らの寿命迄も知っていたという稀代の天才占い師だ。

(けど、管輅と劉備が友達だったとは書いてなかった筈……。単な

る俺の見落としか、それともここではそれが普通なのか？)

少年は暫しの間考えていたが、管輅の占いが気になったので考えるのを止め、桃香に話を続けてもらった。

「管輅ちゃんの占いはこんなだったよ。『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。その流星は天の御使いを乗せ、乱世を沈静す。』、だって。」

「つまりは、どういう意味なのだー？」

「要するに、天から遣わされた人物がこの大陸に平和をもたらす、という事でしょう。」

「うん。管輅ちゃんに詳しく聞いたらそう言ってた。」

桃香がそう言うと、桃香、関羽、鈴々の三人はほぼ同時に少年を見た。

「で、この者がその“天の御遣い”だと？」

「きつとそうだよ。だって、ピカーッと光ったら突然現れたし、私達の字をピタリと当てたんだもん。」

「それはそうですが……。」

桃香が力説するも、関羽は納得しきれていない様だ。

「それにほら、この人の服装とか見た事無いじゃない。」

「確かにそうなのだー。」

いや、君達の格好も、余り見た事無いよ？ と、少年は思ったが、結局はお互い様だという事なので口には出さなかった。

「劉備殿の仰る事は理解出来ませんが、私は未だ納得出来かねます。」  
「うーん、関羽さんは慎重なんだね。」

桃香はそう言って関羽の顔を覗き込んだ。

まあ、普通なら関羽の反応が正しいのだろう。

「それで、お兄ちゃんは今からどうするのだー？」

「んー……どうしようか。」

鈴々の質問に対して、少年は人事の様にそう答えた。

だがそれも仕方無いだろう。何せ見た事も無い場所に突然飛ばされたのだ。しかも、三国志の登場人物と同じ名前を持つ少女達が目の前に居るといふ不思議な状況。

これでは、投げやりな気持ちになっても仕方がない。

「行く当ては無いんですか？」

「まあ、見知らぬ土地だから知り合いも居ないしね。」

ここが日本でなく、更には元居た世界でもないのなら、少年は文字通り世界で一人ぼっちの存在だ。

今の少年は、誰にも頼れない、まさに孤独な存在。

「だったら、今日はうちに泊りませんか？」

「……えっ？」

「なっ!？」

「はにやっ?」

そんな少年に向けた劉備の提案は、少年だけでなく関羽と鈴々も驚かせた。

「りゅ、劉備殿っ!?!? い、一体何を考えているのですかっ!?!?」

「何って……行く当ての無い御遣い様をうちに泊めようかと。」

慌てて尋ねる関羽に対し、桃香は平然と答えた。  
それが関羽の焦りを助長させたのか、関羽は更に早口になってまくしたてた。

「年頃の娘である劉備殿が、そんな簡単に自分の家に男性を泊ませるものではありませんっ！」

「けどほら、困った時はお互い様って言うじゃない。」  
「しかしっ!!！」

「大丈夫だよ。御遣い様は優しいさうだし、うちにはお母さんも居るし。それに今夜は、関羽さんも泊まってくれるんでしょ？」

「そ、それはそうですが……。」  
「だったら、何かあっても助けてくれるって信じてるから。私は安心だよ。」

だが、桃香の言う事もまた正しいし、それに笑顔でそう言われては余り強くは言えない。

それにしても、どうやら桃香は、関羽も桃香と同年代の少女だという事を忘れていた様な気がする。

「鈴々ちゃんも泊まっていくなね？」

「当然なのだっ。桃香お姉ちゃんと一緒に布団で寝たいのだー。」

「うん、私も鈴々ちゃんと久し振りに一緒に寝たいよ。」

そう言って盛り上がる二人。関羽や少年が複雑な表情をしている事等気付いてないし。

「じゃあ御遣い様、行きましよう。」

「う、うん。けどその前にさ。」

「何ですか？」

桃香に連れられる前に、少年はある頼み事をした。

「その“御遣い様”って呼び方、何か堅苦しいから止めてほしいな。」

「えっ？でも……。」

その頼み事に戸惑う桃香。彼女にとって少年は天から来た凄い人なのだから、そう言われて戸惑うのも仕方がないのだが。

「良いから良いから。それより俺の事は名前で呼んで。俺の名前は“清宮涼”。“涼”って呼んでくれよ。」

「“きよみやりよう”？珍しい名前なんですネ。」

少年・「清宮涼」が言った名前を繰り返しながら、桃香は思ったままの感想を告げた。

と、そこに、関羽も名前の確認に話しかけてくる。

「となると、“清”が姓で“宮”が名、“涼”が字ですか？」

「いや、“清宮”が姓で“涼”が名前。字は無いんだ。」

「字が無い？それもまた珍しいですね。」

「まあ、国が違うしね。」そんな事を話しながら、四人は桃香の家へと向かっていった。

## 第二章 桃園の誓い（前書き）

桃の花が咲き乱れ、風と共に散っていく。  
それはまるで、淡い紅色の吹雪の様だった。

2009年9月14日更新開始。

2009年10月12日最終更新。

## 第二章 桃園の誓い

翌日。

「天の御遣い」の少年、清宮涼は桃香の家に居た。

昨夜、桃香に連れられて桃香宅に着き、そこで様々な説明や自己紹介をした後、就寝となった。

起きたのは未だ陽が昇って間もなくの時。

時計もテレビも無いので正確な時間は解らないが、起きるには早過ぎた時間だというくらいは解った。

腕時計は有るものの、そこに表示されている時間は元の世界のものなので、こちらの時間と合っている訳では無い。

この世界の日付や時間が解らないので、時計を合わせる事も出来ない。

よって、太陽が高く昇っている今が、昼前だという事くらいしか解らなかった。

「……本当に別世界に来ちゃったんだなあ。」

縁側の柱に体を預けたまま座っている涼が、空を見ながらそう呟いた。

昨夜、そして今朝交わした会話から、ここが涼の住んでいた世界とは違う世界だという事が解った。

しかも、どうやらこの世界は「三国志」に良く似た世界だという事も解った。

今は黄巾党の乱が起き、大陸の各地で乱世の兆しが見え始めているという。

(て事は、曹操や孫策、董卓や袁紹が勢力を伸ばしている頃か。いや、孫堅は未だ生きているかな。公孫賛や袁術も居るだろうし……)。



自分が知っている「三国志」の知識から、今の時代に該当する人物を思い浮かべる。

そこで、一つの疑問が浮かんだ。

涼の世界の「三国志」では、劉備、関羽、張飛は男性だ。

だがこの世界の劉備、関羽、張飛は女性、しかも涼と余り変わらない年齢だ。

(て事は、曹操や孫策達も女性の可能性が有るって事か……。)

劉備達がそうだった以上、曹操達もそうなる可能性は充分に有る。

(……どんなキャラになってるのか、不安でもあるし楽しみでもあるな。)

劉備達があんなキャラになっているのだから、そう思うのも仕方無いだろう。

と、そこに凜とした声が届いた。

「こんな所で何をしているのですか？」

「ん……関羽さんか。」

見上げると、そこには長い黒髪を左側で纏めている少女が立っていた。

「さん」付けはしなくて良いと申し上げた筈ですよ、涼殿。」

「それなら、俺も“殿”は付けなくて良いって言った筈だよ。」

涼の隣に座りながらそう言った関羽に対して、涼も同じ様な答えを返す。

「それもそうでしたね。ですが、貴方が“天の御遣い”なら呼び捨てにする訳にはいかないですよ。」

“天の御遣い”ねえ……。」

そう呟くと、再び空を見上げる。

「未だ御自覚が無いので？」

「そりゃ、今迄普通の学生やってた人間が、急に“天の御遣い”とか祭り上げられても戸惑うだけさ。」

関羽の問いに答えてから、涼が逆に問い掛ける。

「それに、関羽さんも俺が“天の御遣い”だつて事に納得してなかったんじゃない？」

「それはそうですが……昨夜の話や、“けーたいでんわ”なる天の絡繰り等を見せられては、ある程度納得せざるを得ませんからね。」

そう言つて関羽は少し困つた顔をした。

昨夜、少年は自分が別の世界から来た証拠として、持っていたバッグから色々な物を取り出して見せ、説明していった。

携帯電話が遠くの人と話せたり、写真を撮つたり出来る道具だと説明した時には、皆目を丸くしていた。

携帯ゲームを遊んでみせた時は鈴々が一番興味を持っていた。

携帯型音楽プレイヤーを操作して聴かせた時は、桃香も関羽も驚きつつ楽しんでいた。

「あー……まあ、それもそうだな。」

携帯電話もゲームもプレイヤーも、この世界が三国志を基にした世界なら有る訳が無い。

それを持つている涼を別の世界、つまり天の世界の人間と認識するのは当然かも知れない。

「……それに、貴方が本当に“天の御遣い”かどうかは、正直どうでも良いのです。」

「……え？」

思いも寄らない言葉に、涼は思わず聞き返した。

すると、関羽は涼の顔を見ながらこう答える。

「貴方が天からこの大陸に遣わされ、平和に導く人間だという噂が、劉備殿を始めとする人々に希望を持たせるんです。」

「あ……つまりは、風評や大義名分が得られれば良いって事か。」

「そういう事です。ですから、余り肩に力を入れなくて大丈夫ですよ。」

そう関羽に言われ、涼は一つの事例を思い浮かべた。

つまり、自分は「錦の御旗」になれば良いと言う事だな、と。

幕末、戊辰戦争で優勢だった反幕府軍を更に勢い付けたのは、天皇が率いる軍の証である「錦の御旗」を得た事だった。

「錦の御旗」を持つ軍に刃を向ける事は、天皇の敵、つまり朝敵になるという事。

もし朝敵になってしまったら、仮に戦争で勝っても民衆の支持を受ける事は無い。

民衆に支持されない集団が天下を獲れる訳もない。だからこそ、旧幕府軍の戦意は落ち、戦いは反幕府軍改め新政府軍の勝利へと繋がっていった。

涼は、その「錦の御旗」になれば良いらしい。

自分なんか「錦の御旗」になれるのだろうか？ という疑問は残るが、では他に何が出来るか？ と聞かれたら、何も出来ないといしか言い様がない。

「まあ、俺に出来る事なら何でもするさ。」  
「その意気です、涼殿。」

涼の決意に、関羽は笑みを浮かべながら応えた。

それから暫くして、二人は桃香達の許へ向かった。

桃香と鈴々は今、義勇兵の集まりに参加し、これから近くに居る黄巾党の根城に向かう所だった。

「あつ、涼さん。」

「お兄ちゃん、関羽お姉ちゃん、こっちなのだーっ。」

老若男女が集まる義勇兵の集団の中から、一際明るく声を上げる二人の少女の姿が見える。

これから戦いに行くというのに、これ程緊張感が無いのも珍しい。

「遅れて済みません。少し、涼殿と話をしています。」

「良いよー、気にしなくて。それより、涼さんも義勇兵に参加するんだよね？」

「ああ。戦った事は無いけど、かといってあのまま家に居るのも性に合わないしな。」

そう言っつて関羽と共に二人と合流した涼は、左腰に有る剣を軽く叩いた。

当然ながら、この剣は涼が元々持っていた物ではなく、昨夜、涼達の話聞いていた桃香の母から借り受けた物だ。

どうやら桃香の剣「靖王伝家」の予備の剣みたいな物らしく、大きさが一回り小さい事と装飾が少ない事以外は、殆ど同じだった。

因みに、名前は無いらしく、涼は取り敢えず「靖王伝家（予備）」と名付けた。

「とは言え、武器を使えぬ者が戦場に出ては足手纏いになります。余り、前線には出ない様、御気を付けて下さい。」

「う、うん。解ってるよ。」

死にたくはないしね、と思いつながら涼は身をすくめた。

辺りを見回すと、武具に身を包んだ老若男女が数え切れない程居る。

この街はそんなに大きく見えないが、予想以上に人口が多いらしい。

一通り見終わると、次に桃香達を見た。

目の前に居る桃香は、桃色の長い髪を白い羽根が付いた髪留めで左右に纏めたストレートヘア。

白と緑を基調とした服は、どこかの学校の制服にも見える。襟元に紅いリボンが有るから尚更だ。

まあ、肩が見える制服なんて余り無いだろうけど。

袖等には金色のラインが有り、両袖には羽根をあしらった金色の刺繍。ヒラヒラした紅いスカートの端には白いフリルみたいな物が見える。

靴は膝上迄有る長く白いブーツ。

今更ながら、コスプレみたいな服装だなと、涼は思った。

続いて、桃香の左隣に居る鈴々。

短い赤毛には、コミカルな虎の顔の髪飾りを付けている。

気の所為か、その表情が時々変わる様な……。

暫くして気の所為だと結論付けた涼は、観察を続ける。

短めのインナーシャツとスパッツは同じ紺色で、どちらも下部に金色のラインが入っている。因みにかなりのヘソ出しルックだが、寒くは無いだろっか？

金色の首輪に、黄色を基調として茶色のラインや葉っぱの様なデザインが有る上着。両肩には白と黒で構成される陰陽のマークっぽ

いのがある。

そのマークはベルトのバックルにも有り、ベルトは二つのベルトをクロスさせて使っている様だ。

両手には紅い手甲が付いた手袋をはめている。色はやはり紺色で、指先は空いている。

右腕は肘迄やはり紺色で覆われている。手袋の延長だろうか。

靴は履いて無く、指先と踵が無い靴下を履いている。色やデザインはスパッツ等と同じだ。

忘れていけないのは、首に巻いている紅いマフラーだ。

まるで何処かの仮面のヒーローの様に、パタパタと風に揺れている。

もし現代に皆と戻って、その仮面のヒーローの映像を見せたらどんな反応をするだろう。少し楽しみではある。

最後は、涼の左隣に居て、桃香の右隣に居る関羽。

黒く艶やかな黒髪を左側で纏め、紅いリボンが付いた金色の輪で留めている。

白と緑を基調とした服は桃香の服と似ており、金色のラインや肩を出している所も同じだ。

服の下部は花びらの様なデザインになっており、後ろは前より長くなっている。

その下には黒いプリーツスカートに茶色のオーバーニーソックス、革靴の様な黒い靴。

やっぱりコスプレっぽいし、部分的にはどこかの学校の制服に見えるかも知ない。

とまあ、三人の服装に関して涼はそんな感想を抱いていた。

(それにしても……これって今から戦うにしては軽装過ぎないか?)

周りの義勇兵は鎧兜に身を包んでいたりと、最低でも胸当て等の防具を身に着けている。

だがこの三人は普段着みたいな服装でいる。

桃香と関羽の豊かな胸が一目で解る程だ。

因みに別の意味で鈴々の胸も一目で解るが、それはおいておく。

（まあ、俺も劉備達の事は言えないけどさ。）

そう自嘲気味に心の中で呟いた涼は、自分の姿に目を向ける。

基本的には昨日と同じTシャツにジーパンという服装だが、今日はそれに白いフード付きコートが加わっていた。

涼が居た現代は、未だ秋の中頃といった時季だったので、コートを着るには少し早いのだが、どうやら、寒くなる前に買っておいたコートをバッグに入れっぱなしにしていたらしい。

なので、普通なら未だ着ない筈のコートだが、こちらの今の季節は春先でしかも肌寒い為、寒さから身を守るのに丁度良かった。

（他にも色々バッグに入れてたからなあ……お陰で少しは楽出来そうだけど。）

そのバッグは今背中に背負っている。

このバッグは汎用性が高く、本来は肩にかけて使う大きなバッグだが、少し手を加えるとこの様に背中に背負う事も出来る。

因みに、剣はズボンのベルトを通す所に鞘の紐を通して固定している。

「あ、どうやら指揮官の方々が来た様です。」

関羽の声に涼や桃香、鈴々が反応し、関羽が見ている方向に目をやる。

そこには、甲冑を身に纏った中年の男と、涼達と同年代と思われる少女が立っていた。

暫くの間、二人による話が続いたが、どうやらそれによると中年

の男が指揮官で、少女は軍師らしい。

涼は指揮官の名前は知らなかったが、軍師の少女の名前は聞き覚えが有った。

「今度は徐福か……。」

涼は目の前の少女を見ながら呟いた。

徐福とは、「三国志」で劉備に仕えた軍師の一人で、物語序盤で劉備達と共に活躍した人物だ。

とある出来事により劉備達の許から離れるが、劉備に対する恩義や忠義は忘れる事が無かったという。

「その徐福がここで登場……か。」

そう呟きながら、涼はどこか安心した心地になっていた。

「……？ 涼殿は、徐福殿を御存知で？」

「いや、会った事は無いけど解る。彼女はきつと優秀だよ。」

「はあ……。」

涼の言葉に関羽は怪訝な顔をしていたが、その徐福が話し始めたので視線を戻した。

徐福は野球帽の様な黄色い鍔付き帽子を深く被り、銀色の髪は膝元迄ある長さ。

身長は鈴々より頭一つ大きい様だ。因みに鈴々は小学生みたいに小さい。

胸は大きくないが小さくもなく、普通より少し大きいくらい。

首元には羽ばたく二つの羽根をあしらった首飾り。服は帽子と同じ黄色を基調としたワンピースで、その左胸には白い羽根をあしらったワンポイントが有り、どうやら羽根のデザインが好きな様だ。



足は白いオーバーニーソックスと、革靴のような紺色の靴を履いている。

大きな金色の瞳は自信に満ちていて、見ているこっちも自信に満ち溢れる様な気になってくる。

因みに、桃香の瞳は水色、関羽の瞳は金色、鈴々の瞳は紺色だ。

「昨夜、劉玄德さん達が捕縛した黄巾党の男から、色々と情報を聞き出せました。……劉玄德さん、関雲長さん、張翼徳さん、そして清宮涼殿、お手柄でしたね。」

「あ、いえ、どうぞ致しまして。」

徐福に誉められ、周りの人々から注目される中、昨夜は実質的に何もしてない桃香が、四人を代表して、少し慌てながら応えた。

関羽と鈴々の提案もあり、昨夜の事件は関羽、鈴々に加えて桃香、涼の合計四人の手柄になっていた。

殆ど活躍していない桃香や涼は当然嫌がったが、あの場に居た事と戦った事は事実だし、その方が後々役に立つからという事で何とか納得した。

因みに、涼が“天の御遣い”だという事は既に街の人々に知らせてある。

勿論、皆が皆それを信じている訳では無いが、昨夜の光と黄巾党の事件を知っている為、街の人々の大半は涼を“天の御遣い”として認めていた。

お陰で明け方、劉備宅の周りに野次馬が沢山居たのを見た涼も桃香も物凄く驚いていたが。

「その情報を基に斥候を放った結果、情報通りの場所に黄巾党の根城が在るのを確認しました。私達はこれからそこへ向かうのです。」

これからの事を力強く説明しながら、集まった義勇兵達を鼓舞する徐福。

隣に居る指揮官の存在理由が無いのではないかと思う程に、徐福は皆を引っ張っていた。

「それでは皆さん、私達について来て下さいっ！」

徐福の号令に義勇兵達は威勢の良い声で応え、目的地へと出発した。

涼以外の桃香達三人もそれに続いて歩き出す。

車もバイクも無いこの世界の地上での交通手段は、馬が徒歩しかない。

この行進も一部の人間を除き、皆徒歩だ。

目的地は近くの山間に在るらしく、パツと見は近いのだが、いざ歩くとなるとかなりの時間がかかる。

しかも、それなりの人数で行進している為、勝手に速度を上げたり落したり出来ず、休憩も勝手に出来ない為にかなり辛い。

訓練された兵士なら兎も角、ここに居るのは殆どが農民なので、この様な行進に慣れていなかった。

当然ながら、それは桃香も同じだ。

「あう、疲れたよあ。」

「桃香お姉ちゃん、もう直ぐ着くから頑張るのだ。」

「その前に小休止があと一回は有るでしょう。頑張ってください、劉備殿。」

「そんなあ。」

出発から約二時間、幾つかの小休止を挟みながら、桃香達義勇兵は行進を続けていた。

「……涼さんは良いなあ。馬に乗ってるから楽だろうし。」

そう言っつて桃香は遙か前方に居る筈の涼を探す。

探す相手は馬に乗っているから探し易い筈だが、この人混みでは意外と見つけるのが難しかった。

「涼殿は“天の御遣い”ですからね。流石に、その方を皆と同じ様に歩かせるという訳にはいかないと、徐福殿は判断されたのでしよう。」

「それはまあ、解るんだけどさあ。」

関羽の言葉に同意しつつも、何処か羨ましそうな返事をする桃香。出発前、徐福の号令が義勇兵を鼓舞していた時、涼達の前に一人の兵士がやってきた。

その兵士は涼に対して「徐福様が呼んでいます。」と伝え、涼は兵士に案内されるまま徐福の許へと向かった。

その後、涼を待とうとした桃香達だが、程なくして皆が行進を始めた為、仕方なく行進に加わっていると、前方で徐福と指揮官の間に居る涼の姿が見えた。

しかも、多少おぼつかない腕ながら馬に乗っている姿が。

「それに劉備殿、馬に乗るというのも、それなりに疲れるものなのですよ。」

「そうなの？」

「ええ、常に落ちない様に気を付けなければいけませんからね。お陰で、慣れない内は筋肉痛になり易いんですよ。」

「へえ〜。けど、それでも馬に乗りた〜い。」

「まったく、桃香お姉ちゃんは忍耐力が足りないのだ。」

「その様ですね。」

「うぐう。」

二人にそう言われ、落ち込む桃香であった。

一方、桃香達がそんな会話をしている頃、前方で馬に乗っている

涼は徐福と話をしていた。

「清宮殿、大分馬の扱いに慣れてきた様ですね。」

「まあね。昔の勘を取り戻したから何とか乗れてるよ。」

昔、乗馬クラブに入っていたのが役に立ったなと思いつながら、涼は徐福と話をしていた。

涼の両親は共に乗馬が趣味で、小さい頃からよく乗馬をさせられ、一時期乗馬クラブに入らされていた。嫌いではなかったが、友達と遊ぶ時間が無くなる為に余り長く続かなかつた。

だが、子供の頃覚えた事は成長した今も覚えているらしく、暫く乗っているといつの間にか勘を取り戻していた。

「それにしても、馬より簡単に乗れる乗り物や速い乗り物が有るとは、流石は天の国ですね。私もその“じてんしゃ”や“ばいく”、“じどうしゃ”とやらに乗ってみたいものです。」

徐福は目を輝かせながらそう言った。

馬に乗る前に涼に説明された天の国の乗り物に、彼女は強い興味を持った様だ。

まあ、どんな時代のどんな人間も、未知の事に興味を持つのは当然だろう。

「……それは楽しみだろうけど、今は黄巾党を倒す事に集中しないと。何か策でも有るの？」

そんな徐福の願いを叶える事が出来ない涼は、それとなく話を戻した。

すると徐福は自信満々に答える。

「勿論有りますわ。もつとも、黄巾党相手に手の込んだ策を弄する必要性は感じないのですが。」

「けど、黄巾党は結構数も多いし、都の兵士達も手を焼いていると聞くけど?」

「それは、都の兵士が無能なのと、相手を賊と思つて侮つているからです。黄巾党は農民出身が殆どなので、靈帝や大將軍何進がもつと早く本腰を入れていけば、既に事態は沈静化している筈ですから。」

徐福は、黄巾党の乱における現状と感想を苦々しい顔をしながら語つた。

彼女の話によれば、靈帝によつて何進が大將軍に任じられ、黄巾党討伐に本腰を入れたのはつい最近の事らしい。

靈帝は体が弱く、中常侍と呼ばれる側近達が靈帝を助けていたらしいが、その実はそうして権力を手に入れ、自分達の思うがままに政をしてきた。

そしてそれが漢王朝を衰退させ、黄巾党が出現した最大の要因らしい。

「けど、靈帝と何進が本腰をあげたのなら、この乱もじきに治まるんじゃないのか?」

涼は徐福にそう尋ねた。

この黄巾党の乱の後に待っている新たな戦いを知っているのに、それでも敢えて尋ねてみた。

「ええ、“この乱”はじきに治まります。ですが、こちらの様な地方に討伐軍が来るには未だ時間がかかるでしょう。ですから、この様な義勇兵が必要なのです。」

徐福は後ろに続いている義勇兵の面々を見ながらそう答えた。

つられて涼も振り返れば、その中に見知った三人の姿を見つける。かなり疲れている様だな、と感じる。特に桃香が。

「そろそろ小休止をとりましょうか。目的地は近いですから、疲れをとっておかないと戦いになりませんからね。」

そう言ったのは徐福。どうやら彼女も、義勇兵達が疲れているのに気付いた様だ。

直後に小休止をとると指揮官や徐福が告げると、皆ホツとした表情になっていった。

小休止は近くの小川の側でとる事にした。

小川に着くと、皆その水で顔を洗い、汗を拭き、喉の渴きを潤していた。

桃香、関羽、鈴々の三人も例外ではなく、特に桃香は先程迄とはうって変わって元気を取り戻していた。

そんな三人を見ながら、涼も自らの顔や腕の汗を洗い流していた。比較的寒かったり、馬に乗っているとはいえ、二時間以上も移動していればそれなりに汗をかくし喉も渴く。

出発前に貰った竹製の水筒に入れていた水は既に飲み尽くしていたので、喉を潤すには川の水を飲むしかない。

涼は今迄川の水を飲んだ事は無いが、水道や自動販売機等が無い以上、水を得るには仕方がない。

それに、この川の水はとても澄んでいて、小魚が気持ち良さそうに泳ぐ姿がそこかしこに見えた。

(それだけ、俺の世界の川が汚れているって事が。)

この世界の川は、コンクリートで護岸が固められていたり、転落防止の柵が有ったりしない。

川へと降りる道が階段になつてゐる事は少ないし、蛇等の獣に注意する様促す看板も無い。

けど、そんな風景がどこか温かいなと、涼は感じていた。きつとこれが、自然の在るべき姿なんだと。

そう思いながら、ゆっくりと両手で水を掬い、口に運ぶ。

「……おいしい。」

川の水ってこんなに美味しいものなのか、と思いながら二度、三度口に運ぶ。

そうして涼は、何度も冷たくて心地良い水を堪能していった。

「清宮殿、ここに居ましたか。」

喉を潤した涼の側に、徐福が立っていた。

それに気付いた涼は、顔を拭きながら応える。

「あ、徐福さん。俺を捜していたの？」

「ええ。実は黄巾党との戦いについて少し……。」「

そんな風に話をきりだしてから徐福は説明を始めた。

「……つまり、俺と劉備がそれぞれ部隊を率いるって訳か。」

「はい。片や“天の御遣い”、片や“劉勝の末裔”。これ等の肩書きは十分に兵の士気を上げ、敵の士気を下げます。」

「けど、俺も劉備も実戦経験は殆ど無いぞ。」

謙遜ではなく事実をありのままに話す涼。

「それはこの際構いません。お二人には後方で味方を鼓舞して貰えれば良いのですから。」

「けど、それって何か皆に悪い気がするなあ。」

「では、前線に出て斬られてきますか？」

「……それも嫌だけどさ。」

誰が好き好んで死に行きたいだろうか。

勿論、涼もそんな人間じゃない。

「……清宮殿はお優しい方ですね。」

「そうかな。」

今度は謙遜じみた話し方をする。

そんな涼に対して、徐福は少し声を低くし、更に真剣な表情でこう続けた。

「ええ、とてもお優しいです。ですが、それだけではダメなんです。」

「……どういう事？」

怪訝に思った涼は、自らも真剣な表情になって聞き返した。

「清宮殿は、皆を鼓舞するだけでなく、自ら先頭に立って指揮をしながら戦う人間になりたい、と、そう思っているのではありませんか？」

「まあ……そうかな。」

そんな風になれば、傷付く人を少しでも減らせる筈だから。

単純にそう思っ言葉に出した。

「やはり。確かに、その様な将が味方に居れば兵達は心強いでしょう。」

「だろ？」



「ええ。……ですが！」

突然、徐福は涼の胸を人差し指で軽く突きながら語気を強め、涼にだけ聞こえる声量で話し続ける。

「そういつた事は、力をつけてから言い、実行するものです！ 力無き者が理想を語っても、それは単なる理想のまま。悪く言えば世迷い事でしかないのです！」

「……っ！」

徐福が言った言葉に、涼は反論出来なかった。

その言葉は全て正しく、何一つ間違っていない。

力が有るから戦いに勝てる訳だし、民や兵もついて来る。勿論、ある程度の人徳も必要だが。

理想を語るなら、それ相応の力を得ないといけない。だが、今の涼にはその力が無い。

有るのは、「天の御遣い」という、人を集めるのに適した肩書きだけだった。

そんな現状ですら理解出来ず、脳天気にかけていた自分が恥ずかしい。

少し考えれば、これくらいは直ぐに解る事なのに。

涼はそう思いながら俯き、額に手をやる。今の情けない表情を見られない様にする為だ。

多分、今の顔は誰にも見られたくない表情だと思うから。

そんな涼に対して、徐福がさつきより小さな声で話し掛ける。

それに気付いた涼が軽く視線を向けると、何故か彼女も帽子の鰐を右手で押さえながら、少しだけ俯いていた。

「……勿論、理想を持つ事が悪いと言っている訳では無いのですよ。その点は、どうか誤解しないで下さいね。」

そう言うと徐福は振り返り、元来た道を戻っていく。

一人取り残された涼は、徐福の言葉を何度も心の中で繰り返しながら、自問自答を始めていた。

自分出来る事、やるべき事は何か有るのか、と。

(……そりゃあ、ずーっと肩書きだけの存在で良い訳が無いよな。

……けど、だったらどうすれば強くなれるんだろう……?)

理想を成すには強くならない、それは解る。

だが、どうすれば皆を守るだけの強さを得る事が出来るのか、平和な現代で生きてきた涼には想像出来なかった。

それから暫くして、行進を再開した義勇兵達は漸く目的地に着いた。

再び斥候を放ち、様子を見る徐福達。

その結果、黄巾党の根城には予想以上に多くの人数が居る事が解った。

「賊の数は私達より若干多い様ですが、これくらいの差なら策で何とでもなりますね。」

徐福は軍議の場でそう自信満々に告げた。

因みに、その場所には他に指揮官や各小隊長に任命された者、そして桃香と関羽、鈴々と涼の姿があった。

「何とでもなるとは言うが、具体的にはどうするのだ?」

岩に広げられた地形図を見ていた関羽が、徐福を見ながらそう尋ねる。

「そうですね……相手の方が数が多い場合、幾つかの方法が考えられます。援軍を呼んだり、火矢を使った奇襲等ですね。」

「けど、援軍は当てが無いし……。」

「火矢にしても、こんな山の中で使ったら山火事になって、こっちにも被害が出てしまうのだ。」

徐福の提案に、桃香と鈴々がそれぞれ意見を述べる。

だが、徐福はそれをお見通しらしく、全く動じていない。

「お二人の言う通りでしょうね。義勇軍である我々は、そう簡単に兵数を増やせませんし、火矢にしても使うには場所が余り良くありませんから。」

黄巾党の根城は山間に在り、正面以外の三方を崖に囲まれている。山の中だから周りには木々も沢山在るので、下手すれば山火事になるだろう。

そうなればこちらも巻き込まれる危険性が高くなる。

「それに、弱いとは言え今は向かい風が吹いています。火矢を使うには適していません。」

火矢を使うのは追い風の時というのは、先述の理由からも解る様に、軍略における常識だ。

よって火矢は使えない。

「なら、どうするんだ？」

涼が尋ねると、徐福は直ぐに答えた。

「相手はその殆どが農民の出です。まともな訓練を受けた者はかなり少ない筈。また、奴等は自分達より弱い者しか襲っていない……」

つまり、数に頼っただけの暴徒共でしかありません。」  
「ふむ。……それで？」

徐福の説明の先を促す関羽。

「こちらの人数が少ないと見れば、奴等は意気込んで襲いかかってくる筈。なので、先ずこちらは少人数で奴等の前に現れるのです。」  
「あの根城から誘い出すって訳か。」

「はい。そして、十分に誘い出した後、残りの人数全てを奴等に見せつけるのです。」

「けど、それでもこっちの人数は黄巾党より少ないのだ。それはどうするのだ？」

徐福の説明に涼と鈴々はそれぞれ反応するが、当の徐福は相変わらず自信に満ちた表情のまま説明を続ける。

「確かに、数的不利という状況は変わりませんが、こちらの方が黄巾党より人数が多い様に見える事は可能です。」

「……?? どういう事なのだ？」

徐福の説明を聞いた鈴々だが、余り理解出来なかった様で、頭の上に疑問符を浮かべている。

だが涼は、徐福の意図を理解していた。

(……成程ね。)

だが、それを口にはしなかった。

それを説明するのは、この場の主役である徐福の役目だと思ったからだ。

そんな涼の考えを知ってか知らずか、徐福は鈴々や桃香を見ながら尚も説明を続けていく。

「つまりですね、先程も言った通り、相手は弱い相手としか戦っていません。恐らく、相手が官軍か只の義勇兵かというだけでなく、相手の人数を判断材料にしていると考えられます。」

「まあ、そう考えるのが妥当だろうな。」

徐福の考えに関羽が同意する。

「ええ。ならば、もしこちらの人数が黄巾党より多かつたら、奴等はどう行動すると思いますか？」

「それは……多分逃げちゃうんじゃないかな？ 勝てる見込みが無いと判断すると思うよ。」

暫く口元に手を当てながら考えていた桃香が、冷静に答えを口にする。

徐福はその答えを頷きながら聞き、言葉を繋いだ。

「だと思えます。ですが、そうなる私達の目的を達成する事が難しくなります。」

「何でなのだ？」

またも鈴々が疑問符を頭に浮かべながら尋ねた。徐福はその答えを直ぐに口にする。

「私達の目的は黄巾党を追い払うのではなく、殲滅する事にあります。何故なら、追い払うだけではまたいつ戻ってくるか判りませんし、追い払った黄巾党の奴等が他の街や邑を襲う危険性もあるからです。」

「だから殲滅するって訳か。」

その意図を理解している涼が答える。

「はい。それに、上手く殲滅出来れば、黄巾党の他の部隊がこちらに来るのを防ぐ事が出来る筈です。何せ、奴等は弱い相手としか戦いませんからね。」

そこ迄言つてから、徐福は小さな黄色い旗が付いた木片を、周辺の地形を記した地図の上に置いた。

そこは、目的地である黄巾党の根城が在る場所を指し示していた。どうやらこれは黄巾党を表す物らしい。

また、その下の森林部分には、小さな青い旗が付いた木片が置かれている。どうやら、こっちは涼達義勇軍を表す物の様だ。

因みにこの世界の地図も、特に表記がない場合は上が北を指し示しているらしい。

「そして、その為には先ず奴等に動いてもらわなければなりません。そこで、先ずは少数で敵前に布陣。その後、応戦しながら後退し、敵を引きつけます。」

そう言いながら徐福は青い旗を上、黄色い旗を下に動かす、それから二つを同時に下に動かした。

「そして、十分に引きつけてから残りの兵を黄巾党の奴等の前に展開します。」

「だから、それが問題なのだ。少ない人数をどうやって多くするのだ？」

鈴々は早く答えを知りたいらしく、手をバタバタ振りながら促した。

「実際に増やすのは不可能ですね。ですが、こちらの兵を多く見せ

る事は可能です。……虚兵を使ってね。」  
「きよへい？」

鈴々は、キョトンとしながら徐福が言った言葉を繰り返した。どうやら、よく解っていない様だ。

一方、関羽は即座に解つたらしく静かに頷いており、桃香は暫く考えてから意図に気付いた様だ。

また、涼は予想通りだったらしく、関羽同様静かに徐福の話聞いていた。

「虚兵とは、即ち偽りの兵。それを多用する事で奴等の目を欺き、一気呵成に攻め立てる事が可能なんです。」

徐福は、常と変わらない自信に満ちた表情のまま説明を続ける。

「虚兵の絡繰りはこうです。先ず、旗手を通常の倍……いえ、三倍用意して下さい。」

「旗手を三倍？」

関羽が確認の為に聞き返す。

「ええ。そして、いざ黄巾党の前に残りの全軍で現れる際に、その旗手達に旗を思いつきり派手に振らせて下さい。序でに私達全員がいつも以上に大声を出すの。それで奴等はこちらが大軍だって誤認する筈よ。」

「成程ねー。けど、もしその策が上手くいかなかったらどうするの？」

徐福の説明を聞いていた桃香が、少し不安な表情をしながら尋ねる。

「上手くいかない？ 恐らく、それは無いですね。」  
「どうしてそう言いきれるんだ？」

疑問に思った涼が、徐福に尋ねる。

「そんな思慮深い人間が黄巾党の中に居るのなら、先日のような少数での街の襲撃はしないでしよう。もっと大人数で計画的に攻め、街の被害を甚大なものにしてきた筈です。」  
「成程ね。」

徐福の説明に納得した涼は、昨夜の黄巾党による襲撃事件を思い出していた。

涼がいつの間にか居たあの街は、小さいながらも義勇兵を募っていただけあり、攻めるにはそれなりの人数が必要な筈だ。

だが、奴等は十人程度という少ない人数で襲撃してきた。結果、幾人かの負傷者と建物が多少損壊したものの、死者は一人も出ず、物品を奪われる事もなかった。

勿論、関羽と鈴々の活躍があつた事も大きいが、それを差し引いても昨夜の襲撃は無謀だつたと考えられる。

「そんな相手ですから、この策で充分です。それに、念の為の策はちゃんと用意していますから、皆さん御安心下さい。」

徐福は自信満々に話していたが、皆の不安を察したらしく最後に一言付け加えた。

それで軍議は終了となり、各自の持ち場へと戻っていく。

涼は桃香、関羽、鈴々、そして徐福と共に本隊へと歩いていった。

「さっきの話だけど、本当に予備の策を考えているのか？」

「それはまあ、一応は。」



「一応かい。」

涼は苦笑しながら徐福にツッコミをいれた。

「軍師の仕事は策を練り上げ、指揮官を支え、軍を統率する事。そして、最終的には軍を勝利に導く事です。その為なら、策の十や二十を考えておくのは当然ですよ。」

「いやいや、十や二十を考えられる軍師はそう居ないだろ。」

それが普通かのように話す徐福に、涼は驚きと呆れが混じった表情で再びツッコミをいれた。

「そうですか？ 私の知り合いの子達なんて、私なんかより凄く沢山の策を瞬時に考え出しますよ。」

「……どんな奴等なんだよ、そいつ等は……。」

策を一つ考えるだけでも凄いと思うのに、それを沢山考えつくなんてどんな頭をしてるんだ。

涼は頭の中で呆れながら天を見上げていた。

それから約半刻（約一時間）後、涼達は戦場に居た。

と言つても、涼や桃香、徐福は戦線の遙か後方に居り、関羽や鈴々の二人が前線で戦っている。

関羽と鈴々がかなりの実力者とみた徐福によって、前線で戦う小隊長となった二人は前曲の一角を担う事になった。

今は作戦通り黄巾党を引っ張り出している所で、しかも予想以上に上手くいっていた。

「……黄巾党って、本当に考えなしなんだな。」

暫く攻勢に出た後、打ち合わせ通りに後退してみれば、果たして徐福の予想通りに黄巾党の集団がついて来た。

都合が良過ぎるくらいに策が機能しているのを、遠くの高台から眺めている涼は、同じく眺めている桃香と共にそんな感想を呟いた。

「私の予想通り、いえ、予想以上の展開ですね。」

徐福はその光景を眺めながら、口元を緩める。

何故か右手に大型の中華鍋を持ちながら。

その中華鍋は何？ 持ってきていたのか？ 等の疑問が思い付くものの、今は聞く雰囲気では無いので聞くのを止める涼だった。

「徐福、未だ出ないのか？」

「未だですよ、清宮殿。もう少し引き付けないと、賊を殲滅するのは難しいです。」

高台から身を屈めながら戦況を伺う涼達は、策の仕上げにかかるタイミングを図る。

一分……、

五分……、

やがて十分が経過しようとした時、徐福が高台に居る部隊に合図を送る。

「今です！」

大型中華鍋を銅鑼代わりに思いっきり叩いて味方を前進させ、同時に黄巾党を怯ませる事に成功する。

その隙を逃さず、全ての旗手が旗を思いっきり振りながら大声を張り上げる。

左右に在る高台から沢山の兵と旗が現れ、兵の声は木霊となって山中に響いていく。

木霊が策をより効果的にしたのか、黄巾党の士気はかなり低下し

ている。

そして追い打ちをかける様に、中央の高台から二人の男女が味方を鼓舞する。

「黄巾党を討伐せんと集まった勇者達よ！ 今こそ反撃の好機だ！  
！ 怖いだろうが、恐れるな！ 君達には天の加護があるのだから  
！！」

「さあ皆！ このまま一気に敵をやっつけるよ！！ 全軍、突撃！  
っ！！」

二人の檄を受け、待機していた義勇兵全員が雄叫びをあげながら坂を下り、黄巾党目掛けて突撃する。

対する黄巾党は既に浮き足立っており、慌てながら後退していく。また、黄巾党を引きずり出した関羽と鈴々も、本隊と合流して再び攻勢に転じている。

こうなれば、この戦いの決着は着いたも同然だ。

「お二人共、お見事です。これでこの戦いは私達の勝ちですね。」

高台で戦況を見ながら、徐福は鼓舞した二人・涼と桃香を労う。

「そうは言ってもねえ……。」

「俺達は味方を鼓舞しただけで、戦ってはいないしなあ……。」

だが、戦っていない二人は複雑な表情を浮かべながらそう呟いた。

「清宮殿、先程言った事をまた言わせるつもりですか？」

徐福が先程と同じ様に険しい表情をしながらそう言うと、涼は苦笑いをしながら答えた。

「大丈夫、解ってるよ。只……。」  
「只？」

徐福は疑問符を浮かべながら涼の言葉を待つ。  
暫しの沈黙の後、涼は声を絞り出した。

「……無力な自分に腹がたってるだけだ。」

そう言うと、涼は視線を空に向けた。

それから暫くして、関羽達が勝ち鬨をあげているのが聞こえてきた。

その夜、街は黄巾党討伐を祝って祭りの様に盛り上がった。

勿論、死傷者が全く出なかった訳では無いが、遺族は死者を誇りに思い、彼等をあの世に送り出す意味も込めて勝利を祝った。

既に酒樽は幾つも空になり、皿に盛られる食べ物食卓に並べられると直ぐに無くなっていった。

そうした祝福ムードの一団から少し離れた所に、涼は一人で居た。

「皆よく食べるなあ……。」

キャンプファイヤーの様に燃え盛る炎を中心にして座り、飲めや歌えの大合唱をしている義勇兵達。

そんな彼等を遠目に見ながら、涼は一人で小さな丘に座って食事をしていた。

初めの内は涼が「天の御遣い」と言う事もあって皆と一緒に勝利を祝っていたが、酒を勧められそうになるとこう言ってその場から逃げた。

『この勝利は君達あつての勝利だ。ならば、このお酒を飲むのは君達が最も相応しい。俺に遠慮せずに沢山飲んでくれ。』

そう言つと義勇兵達は感動したらしく、涼を讚えながら食べ物や酒を口へと運んでいった。

涼はその光景を暫く見た後、その場から離れた。本来どんちゃん騒ぎは嫌いでは無いのだが、何故か今日は思いつき騒ぐという気分にはならなかった。

実は、涼はその理由を解っていた。

自身は戦っていないが、戦場に立ち、沢山の人間が殺し殺されていく光景を目にした。

殺す人間の雄叫びや表情、殺される人間の悲鳴や形相。

それ等が目に焼き付き、耳にこびり付いて離れない。

あれが、戦い。

あれが、この世界の現実。

それ等の事実が、涼の心に深く突き刺さる。

(……………解ってはいたけど、結構キツいな……………。)

敵であれ味方であれ、人が殺され、死んでいく様を見て平気でいられる筈がない。

少なくとも、平和な世界で生きてきた涼は平気ではなかった。

だから、折角の戦勝祝いの宴にも積極的に参加する気にはなれず、適当な理由をそれらしく言つてその場から離れた。

その方が、場の雰囲気壊さずに済むと思つたから。

暫く一人で考えてみたいと思つたから。

そうしてこの場所を見つけ、今に至っている。

「結局、覚悟が足りないって事が……………」

涼はそう呟くとお茶をグイッと飲み干す。

普段、余り考え事をしないからか、中々考えが纏まらない。

それでも何とか考えようとしていると、こちらに近付く足音が耳に入ってきた。

「清宮殿、ここに居ましたか。」

そう言ったのは徐福だった。

「徐福、何故ここに？」

突然の訪問者である徐福に対して、少し驚きながら尋ねる。

「“天の御遣い”である清宮殿の姿が何処にも見当たらなかったの  
で、心配になって探しておりました。」

「心配？」

「ええ。……人の死を間近で見て怖くなったのではないかと。」

徐福は涼の正面に腰を下ろしながらそう答えた。

涼は自分の心を見透かされた様で驚いたが、今更取り繕うのもなんなので正直に話した。

「……徐福の言う通りだよ。今日の戦いを見て怖くなった。」

「……そうですか。」

予想通りの答えが返ってきたので、表情を暗くし俯く徐福。

だが、涼はそんな徐福の表情を一変させる言葉を繋げた。

「……けど、逃げるつもりは無いよ。」

「え？」

思わず顔を上げる徐福。

その眼に映った涼は、どこか寂しそうな表情だったが、同時に何

かを決意しようとしている瞳をしていた。

「確かに怖いけど、だからって逃げても何にもならないからね。」

「それはそうですが……ならば、これからどうするのです？」

「そうだな……まあ、“天の御遣い”として大陸が平和になる様に頑張るだけだよ。」

「……それが、辛く困難な道だとしてもですか？」

徐福は涼の眼を見ながら尋ねる。

涼は徐福の真剣な表情に少し戸惑いながらも、ゆっくりと自分の思いを語り続けた。

「ああ。勿論、不安ではあるんだけど、俺は一人じゃないから。劉備や関羽、張飛が居てくれる。皆が“天の御遣い”である俺を頼ってくれる。なら、俺は俺に出来る事をするだけだよ。」

そう言い終わると、どこか清々しい気持ちになったのか、涼の表情は先程迄と違って明るさを取り戻していた。

「……解りました。」

涼の言葉を聞いた徐福は、一度眼を閉じ、暫く考える様に静かにしてから口を開く。

「ならば、私は貴方の生き方を支持します。私に出来る事が有れば、力になりましょう。」

「有難う、徐福。」

徐福の言葉に涼は有りの儘の気持ちを口にして返す。

すると、何故か徐福は顔を耳迄真っ赤にし、慌てて帽子を深く被って顔を隠してしまった。

だが、耳は隠していない為に真つ赤な姿を露わにしている。

因みに、涼は徐福が何故そうなったのか気付いていない様で、徐福の突然の変化に戸惑っていた。

そうして涼がどうすれば良いか解らず慌てていると、先程徐福が来た方向から三人の少女の声が聞こえてきた。

「涼さん、どこー？」

「涼殿、何処にいらっしやるのですか？」

「どこなのだー？」

二人が声のする方向を見ると、そこには桃香、関羽、鈴々の姿があった。

涼は手を振って桃香達に自分達の居場所を知らせる。

「あつ、居たつ。」

それに気付いた桃香達が、駆け足で近付いてくる。

「涼さんも徐福ちゃんも、こんな所に居たんですね。」

「ああ、俺はお酒飲めないから、ここでゆっくりしてたんだ。」

「私は清宮殿を探して先程ここに来たところです。」

桃香が尋ねると、涼と徐福はそう答えた。

涼は何気なく三人の顔を見る。

三人共、少なからず顔を赤らめており、ほんの少しだけ酒の匂いがした。

「お兄ちゃんお酒飲めないのかー。情けないのだー。」

「そう言われてもなあ。俺の国では、二十歳にならないとお酒を飲んじゃいけないんだよ。」

「なんと、天の国ではその様な決まり事が有るのですか。」



「うん。だから十七歳の俺はお酒を飲んだ事が無いんだ。」  
「そうだったのかー。」

涼が関羽や鈴々に現代でのお酒に関する話をしてしていると、徐福がゆっくりと立ち上がりながら涼達に告げた。

「では、私はこれで失礼します。」

「えっ？ 今さっき来たばかりじゃないか。」

驚いた涼がそう言うが、当の徐福は帰る気である。

「私は、清宮殿がお元気かどうかを確かめに来ただけですから。それに、清宮殿だけでなく劉備殿達迄が宴に参加していないのなら、私くらいは参加しないといけませんからね。」

そう言うって徐福は元来た道に戻っていく。

「それでは皆さん、また明日。」

手を振りながら去っていく徐福は、やがて夜の闇に消えていった。徐福が帰った後、桃香達は暫くその場で食べたり飲んだりしていた。

やがて、粗方食べ終わった涼達は宴を楽しんでいる街の人達を丘から眺めていく。

この光景は、戦いに勝ったから見られたのだと思うと、誇らしい気持ちになる。

だけど、敵も味方も傷付き死んでいった人も居るといふ事を忘れてはいけない。

涼は今日何度目か解らない思いを胸に刻んだ。

「……これからも、頑張らなくてはいけませんね。」

関羽がそう呟くと、涼や桃香、鈴々がゆっくりと頷く。それは四人共同じ気持ちだという事だった。

暫くの間、宴の光景を見ている四人。

その状態は、涼が口を開く迄続いた。

「……少し冷えて来たな。場所を変えようか。」

「それなら、鈴々が良い場所を知ってるのだっ。」

鈴々はそう言うと同時に駆け出し、涼達は慌てて後を追った。

途中で追い付いた涼達は、鈴々を先頭にして丘から街に降り、道を歩く。

途中、陽気に酔っ払った人達から声を掛けられ、少し話をした。

お酒を勧められたりもしたが、何とか理由をつけて断っている。

やがて、大きな屋敷の門前で鈴々は立ち止まり、後ろを振り返っ

て元気よく涼達に告げた。

「ここなのだっ！」

「ここって……鈴々ちゃんの家だね。」

鈴々に連れられた大きめの屋敷は、桃香が言うには鈴々の家らしい。

立派な門と壁に囲まれた屋敷は緑も溢れており、恐らく庭もかなりの大きさなのだと思像出来る。

「張飛の家って大きいんだな。」

涼がそんな呟きを口にしてしていると、鈴々が門を開け、桃香達を家に入れていた。

「どうしたのだ？ お兄ちゃんも早く入るのだ！」  
「ん、ああ、今行くよ。」

鈴々に促され、涼も家へと入っていく。

そのまま家の中に入るのかと思ったが、鈴々は桃香達を庭へと案内している。

なので涼もそれについて庭へと向かう。

その庭は予想通り広く、そして素晴らしい光景が広がっていた。

「綺麗だ……。」

涼の目に飛び込んできたのは、淡い紅色や白色、濃い紅色の花を咲かせている沢山の木々。

風が吹く度に、花が吹雪の様に舞っていく。

「相変わらず綺麗な桃園だね。」

「ほう……張飛殿はこの様な庭を持っていたのですか。見事なものですね。」

「えへへー」

桃香達は目の前に広がる絶景を見ながら、顔をほころばせている。涼も同様の表情になっていたが、ふとある事に気付いた。

（張飛の庭……それに桃園……これってもしかして……？）

涼の頭の中に、「三国志演義」でも一、二を争う人気エピソードが思い浮かぶ。

劉備、関羽、張飛の三人が、桃園でする事と言えばあれしかない。

「それじゃあ、お酒と食べ物を持ってくるから、ちょっと待っていて

ねー。」

そんな涼の思考を遮るかの様に、鈴々の元気な声が耳に入ってくる。

声が出た方に振り向くと、その鈴々が家に入っていくのが見えた。

「張飛は元気だねえ。」

「本当ですね。」

涼の言葉に関羽も同意する。二人や桃香は、鈴々が居る方向を見ながら微笑んでいた。

「けど、こんな時間に騒いだらお家の人に迷惑じゃないのかな。」

何気なく涼はそう呟いた。

すると、何故か桃香の表情が急に曇った。

場の空気が変わった事に涼も関羽も気付き、ゆっくりと桃香を見る。

「劉備、どうかしたのか？」

「……………」

涼が尋ねても、桃香は直ぐに答えなかった。

その表情は何か困っている様で、また、迷っている様にも見える。そうして逡巡した結果、桃香は口を開いた。

「……………実は、鈴々ちゃんには御両親が居ないの。」

「「えっ……………」」

桃香が語った事実、涼と関羽は同時に絶句した。

「鈴々ちゃんが幼い頃、御両親が戦に巻き込まれて……。それ以来、鈴々ちゃんはこの家に一人で暮らしているの。勿論、私達も力になっっているんだけどね……。」

「そうだったのか……。」

こんな大きな屋敷に、小さな頃から一人で居るなんて、どれだけ大変だっただろうか。

自分がそんな立場だったらどうだろう。

多分、ちゃんと生きて行くのは無理だろうな。

自分の境遇を呪って、周りに当たり散らしたりしていたかも知れない。

そう考えると、明るく生きている様に見える張飛は凄いと、涼は心から敬意を表した。

「あの、二人共この事は……。」

「解ってる、聞いた事は秘密にするよ。」

「勿論、私もです。」

涼と関羽がそう約束すると、桃香は頭を下げて感謝を示した。

それから暫くして、鈴々が食べ物とお酒を沢山持って駆けてきた。

よくそんなに持てるなと思うくらいに沢山だったので、涼は今更ながらに戸惑っていたが。

「それじゃあ、早速始めるのだっ。」

鈴々が庭に在る木製のテーブルに食べ物とお酒を置くと、宴の二次会開始の音頭をとる。

だが、

「その前にちょっと良いかな？」

「はにゃ？」

桃香が鈴々に待ったをかけた。

鈴々は何かなと不思議そうに桃香を見つめ、涼と関羽も同様にいる。

そんな涼達の視線を受けながら、桃香は口を開く。

「私は、涼さんと関羽さんに私達の“真名”を預けようと思うんだ。鈴々ちゃんはどう？」

“真名”を？ 鈴々もさんせーなのだっ。」

桃香の提案に、鈴々は即座に同意する。

それを聞いていた涼は、少し驚きながら桃香に尋ねた。

「良いのか？ 確か“真名”って大切なものなんだろう？」

「うん。だけど、涼さんと関羽さんは大切な人だから、是非預けたいんだ。」

「そっか。なら、受け取らせて貰うよ。」

「良かったー。関羽さんはどう？」

「私も涼殿と同じです。」

「じゃあ、決まりだね。」

涼と関羽が了承したのを確認した桃香は、喜びながら二人を見て言葉を紡いだ。

「それじゃあ、改めて自己紹介するね。私は、姓は“劉”、名は“備”、字は“玄德”、真名は“桃香”です。ヨロシクね。」

桃香はそう言うと、両手を前で組んで笑顔のまま二人を見ている。続いて、その左隣に居る鈴々が元気よく自己紹介を始めた。

「鈴々は、姓は“張”、名は“飛”、字は“翼徳”、真名は“鈴々”なのだっ。よろしくなのだー」

言い終わると、両手を頭の後ろに組んでニカツと笑う。その顔は元気な子供そのものだ。

桃香と鈴々の自己紹介が終わると、今度は桃香の正面に居る関羽が姿勢を正して話し始めた。

「では、私も改めて自己紹介を。私の姓は“関”、名は“羽”、字は“雲長”、真名は“愛紗”です。皆さん、宜しくお願いします。」

そう言って関羽・愛紗は涼達に向かって一礼する。

桃香、鈴々、そして愛紗が改めて自己紹介をしたので、愛紗の左隣に居る涼も同様に姿勢を正し、桃香達を見ながら自己紹介を始めた。

「じゃあ、俺も皆に倣って、と。俺の姓は“清宮”、名は“涼”。

字と真名は無いから、好きな様に呼んでくれ。」

「解りましたっ。これからもヨロシクお願いしますね、御主人様」

「ああ宜しく……って、御主人様？」

普通に応えようとした涼だが、現代で聞くにはメイド喫茶にでも行かないと聞けない単語が聞こえた為、思わず聞き返す。

「はい 涼さんは“天の御遣い”ですから、私達はそう呼んだ方が良いかなあと。」

「俺、そういった堅っ苦しいのは苦手だっ、言わなかったっけ？」

昨夜初めて会った時も、桃香の家に着いてからもそう伝えた筈だが。

「確かにそう仰っていましたね。ですが、“天の御遣い”という立場を最大限に利用するには、劉……いえ、桃香殿の判断は間違っていないかと。」

「関……じゃなかった、愛紗迄そう言うの？」

真名を呼び慣れていない所為か、共に一度言い直しながら話を続ける愛紗と涼。

「ええ。桃香殿や涼殿がこれから成そうとしている事を考えれば、私達が涼殿を御主人様と呼び慕うのは理に適っています。」

「えーと……つまり？」

イマイチ、ピンとこない涼は愛紗に聞き返す。

「つまり、この大陸を平和に導く“天の御遣い”に私達が仕えているという事を周りに示し、涼殿の存在をより大きくする、という事です。」

「成程。“天の御遣い”の存在を皆に示す為にも、俺に敬称を付けて呼ぶって訳か。」

「その通りです。」

虚勢を張ると言うか、見栄を張ると言うか、兎に角大事になってきたかと、今更ながらに思う涼だった。

「まあ、それは解るけど、普段はもう少し砕けた感じで話しかけてくれよ。」

「うーん、じゃあ、出来るだけそうしますね。」

「頼むよ。」



涼の申し出に桃香が了承すると、その後に愛紗と鈴々も同様に了承した。

すると、今度は愛紗が杯を取りながら一つの提案をする。

「それでは、我等の結束を固める為にも、一つ誓いをたてませんか？」

「誓い？」

頭に疑問符を浮かべた鈴々が聞き返す。

「これから先は、困難な事も多々有るでしょう。ですが、そんな時も我等が力を合わせれば必ず解決出来る筈。その為の誓いです。」  
「成程ー。うん、良いと思うよ。」

愛紗の説明を聞いた桃香が笑顔で同意して杯を手にし、愛紗の杯に酒を注いだ。

鈴々も同様に杯を手にし、桃香の杯に酒を注ぐ。

その間、涼は内心で複雑な表情を浮かべていた。

(これってやつぱりあの「誓い」だよなあ……。この場面に俺が居て良いんだろうか……。)

涼が思い浮かべるあの「誓い」は本来、劉備、関羽、張飛の三人が誓うもので、他には誰も居なかった。

だからこそ涼は、この場面に参加して良いのか迷っている。

「お兄ちゃん？」

「えっ？」

そんな涼の思考を、鈴々が遮った。

その顔は不思議そうに涼を見ている。

「どうしたのだ？ お兄ちゃんも早く杯を取るのだ。」  
「あ、ああ。」

鈴々に促されて杯を手にする涼。それと同時に鈴々の杯に酒を注ぐ。

(まあ、いつか。)

それを見ながら、涼はそう思った。

考えても始まらないし、何より場の雰囲気壊したくない。

こんな風に、深く考え過ぎないのが、涼の長所であり短所でもある。

「涼殿、お酒を飲んだ事無いと仰ってましたが、これは大丈夫ですか？」

徳利を手にした愛紗が、心配そうに尋ねる。

「これくらいなら、多分大丈夫だよ。日本にも、御神酒とかは子供でも一口は飲めるし。」

「そうなんです。それは良かった。」

そう言っつて愛紗が涼の杯に酒を注ぐ。

話し方が余り変わらないのは、涼の意見を聞き入れたからだろう。

「これでお酒は皆に行き渡ったかな？」

「はい。」

「それじゃあ、早速誓いを始めるのだっ。」

桃香が確認し、愛紗がそれに答える。

鈴々は早くしたいらしくニコニコ顔で、涼はそんな彼女達を見て  
内心で微笑んでいた。

「そうだね。それじゃあ……。」

桃香がそう言っつて杯を掲げ、それに愛紗、鈴々、涼が続く。

「我等四人。」

「姓は違えども、兄妹姉妹の契りを結びしからは。」

「心を同じくして助け合い、困窮する者達を救わん。」

「上は国家に報い、下は民を安んずる事を誓う。」

「同年、同月、同日に生まれる事を得ずとも。」

「願わくば、同年、同月、同日に死せん事を。」

四人がそれぞれ言葉を口にし、最後に四人の杯を合わせる。  
そしてその杯に注がれている酒を、同時に一気に飲み干す。

「これで私達は、義兄妹と義姉妹だね。」

「ですね。」

「て事は、一番上がお兄ちゃん、それから桃香お姉ちゃん、愛紗  
お姉ちゃん、そして鈴々の順番かあ。」

「俺が長兄つて訳か。なら、しつかりしないと。」

「うん、期待してるよ、涼兄さん。」

桃香が笑顔でそう言つと、愛紗と鈴々も同様の笑顔を向ける。

桃香達から笑顔を向けられ、涼は顔を赤くした。

すると桃香達が笑いだし、つられて涼も笑う。

四人の宴は、これからだつた。

### 第三章 旅立ち（前書き）

沢山の人に見送られ、旅立つ。

寂しさを心に秘めたまま、前に進んでいく。  
それでも涙は、いつの間にか出てしまっていた。

2009年10月12日更新開始。

2009年12月7日最終更新。

### 第三章 旅立ち

「ん……………」

鳥のさえずりと陽の光を受けて、涼はゆっくりと目を覚ました。  
目の前には、見慣れない天井。

そう言えば昨日もそんな風に思ったっけ、と思いながら、一つ欠伸をする。

「もう少し寝ようかな……………」

そう呟いて目を瞑り、左に寝返りをうつ。

すると、心地良い香りが鼻に伝わり、次いで誰かの寝息が聞こえてきた。

「え……………」

ゆっくりと目を開けると、そこには見知った人の寝顔がある。  
穏やかな顔で定期的に呼吸をし、安眠しているのがよく解った。

(な、何で桃香が俺の隣に寝てるんだ!?)

突然の事にドギマギする涼。

二人の距離は30も離れていない。

(えーつと………… 昨夜は“桃園の誓い”の後に宴をして…………)

そこから先が思い出せない。

酒は誓いの時の一杯しか飲んでいない。ひよっとしたら、その一

杯だけで酔い潰れたのだろうか。

(この状況はヤバいって！ まさか俺、酔って桃香と……!?)

頭の中で桃色な妄想を浮かべながら、同時に慌てふためく。それでも状況を確認する為に自分や桃香を見ると、二人共寝間着に着替えている。

が、桃香の寝間着は寝相で着崩れし、目のやり場に困った。

(うわあ……間近で見ると本当に大きいな……って、何を考えてるんだ俺は！)

慌てて目を逸らすが、直ぐに視線が元に戻る。

やっぱり涼は男の子なのだ。

(ノーブラ……? いや、ブラって寝る時は外すんだっけ? ……  
そもそもこの世界の下着ってどんなのかな……?)

桃香の豊かな胸から目を離せない涼は、チラチラ見ながらそんな事を考えている。

(……ハッ！ だから、こんな事しちゃいけないんだって!!)

再び目を逸らした涼は、その勢いのまま目を瞑って反対方向に寝返りをうった。

すると、

「すう……すう……。」

といった寝息が前から聞こえてきた。

まさか、と思いつながら目を開けると、そこにはやはり見知った黒

髪の少女がスヤスヤと寝ている。

しかもまたかなり近い距離に二人は居るので、香りや寝息が直ぐに伝わった。

(あ、愛紗迄ここに！？ ま、まさか俺は二人と！？)

再び涼の頭の中で、桃色の妄想が脳内絶賛放映中になる。

よく見れば、愛紗の寝間着も着崩れして胸がはだけている。

桃香には負けるものの、愛紗もかなり大きい胸の持ち主なので、目のやり場に困るのは変わらない。

と言うより、涼は目を離せないでいた。

(愛紗も中々大きいな……。形も良いし、張りも良さそう……。)

何だか、段々と涼の理性が無くなってきている気がする。

まあ、二人の美少女(しかも巨乳)が隣で寝ていて、しかも肌を露わにしていれば、そうなるのも理解出来るが。

因みに、二人共大事な部分はちゃんと寝間着に隠れています。

それでも十代の思春期真っ盛りな少年には、目の前の光景がかなり刺激的なものなのは間違いない。

(……………ハッ！ だから落ち着け俺！ 未だそうと決まった訳じゃ無いんだからっ！！！)

慌てて頭を振り、落ち着こうとする涼。

(まずは、現状認識から始めないと……。)

そう心の中で呟くと、ゆっくりと起き上がって周りを見る。

この部屋は八畳くらいの畳張りの部屋。

その真ん中に布団が二組敷いてあり、涼の布団には桃香と一緒に

寝ており、その右隣には愛紗の布団がピッタリとくっついて敷いてある。

(ん?)

よく見ると、愛紗の右隣に小さな女の子がやはり寝間着を乱した姿で寝ている。

(あれは……鈴々か。まさか俺は鈴々とも……な訳無いか。鈴々は子供だしなあ。)

本人が聞いたら怒りそうな失礼な事を、涼は頭の中で呟いた。

(まあそれは置いといて……。)

置いとくのかよ。

(俺の体の感じからすると、どうやら二人とそいつった事はしてないみたいだ。……ホツとしたやら残念やら……。)

やはり鈴々は除外されている。

本人が知ったら、間違いなく蛇矛で殴られるだろう。

流石に斬られる事は無い……等。

……その前に、涼が思った事をちゃんと理解しているかが疑問だが。

(じゃあ何で俺達は一緒に寝てるんだろ……ん?)

考えていると、桃香が涼の手を掴んで抱き寄せる様に引つ張った。目が覚めたのかと思って顔を見ると、相変わらずの穏やかな寝顔がそこにある。



(ね、寝相なのか？ てか、桃香、その位置はマズいって！)

抱き寄せているので、涼の手は桃香の豊かな胸に挟まれている。  
なので、柔らかな感触がダイレクトに伝わってくる。

それを感じて平常でいられる思春期の男子は、そうそう居ない。

(これって、嬉しいけど有る意味拷問だ〜っ！)

涼は頭の中でそう叫んだ。

とは言え、無理に引つ張ったら起こしてしまうかも知れないので  
余り動けないし、かと言ってこのままでは涼の理性が飛ぶのは時間  
の問題。

と、その時、後ろから声が聞こえてきた。

「……御主人様、一体何をしているのですか？」

凜とした声が、いつもより低い声で涼の耳に入ってくる。

「あ、愛……紗………？」

恐る恐る振り向くと、そこには満面の笑みの愛紗が立っていた。

だが、その笑顔とは裏腹に、ゴゴゴゴ……といった恐い擬音が似  
合いそうな雰囲気を出している。

「あの、これはその、誤解で……っ。」

「ほう、桃香様の胸を触っているのが誤解なのですか。」

「触ってるのは確かだけど、俺から触った訳じゃなくて……。」

表情は相変わらず笑顔のままだが、段々と声がトゲトゲしくなっ  
てきた。

「あの……愛紗さん？」

「何でしょうか？」

涼は思い切って言うてみた。

「誤解なんだから、見逃してくれないかな？」

「それは勿論……ダメに決まっているでしょう!!」

そう叫ぶと、愛紗はいつの間にか手にしていた自分の武器を大きく振り上げる。

「ちょ、ちよつと待って！ 話せば解るからっ!!」

「問答無用っ!!」

涼の懇願を愛紗は聞き入れず、武器を思いつきり振った。

「ぎゃー……っ!!」

その結果、涼は壁に激突して気絶。代わりに、衝撃音に驚いた桃香と鈴々が目を覚ました。

十数分後。

「御主人様、申し訳ございませんっ!!」

先程の部屋には、桃香と鈴々に頭や背中を冷やして賣っている涼と、その涼に対して深々と頭を下げている愛紗が居た。

「いやまあ、誤解が解けたみたいだからもう良いよ。」

涼はそう言うて愛紗の頭を上げさせようとするが、当の愛紗は中々頭を上げようとはしなかった。

「いえ……私は、主である涼殿の言い分を聞かず、感情のまま武を奮い、怪我をさせてしまいました。……この関雲長、どの様な罰も受けさせて頂きますっ！」

「困ったなあ……。」

その言葉通りに困った涼は、隣に居る桃香や鈴々に助けを求めようとしますが、二人からは「頑張つて」とのアイコンタクトが返ってくるのみだった。

結局、涼は困ったまま考えるしかなかった。

そもそも、何故誤解が解けたかと言うと、話は今から数分前に遡る。

目が覚めた桃香と鈴々が、気絶している涼と怒っている愛紗を見ると、何が起きたのか愛紗に聞いた。

怒りによる興奮覚めやらぬ愛紗が、怒気をはらんだまま説明していくと、突然鈴々が桃香を見ながら苦笑し、こう言った。

「あちゃー……桃香お姉ちゃん、またやっちゃったみたいだねー。」

すると桃香も、

「うん……やっちゃったみたいだねー。」

と、やはり苦笑しながら応えた。

そのやり取りの意味が解らない愛紗は、キョトンとしたまま二人を見ている。

そんな愛紗に気付いた桃香が、少し顔を紅くして俯きながら口を開く。

「実は私……抱きつく癖があるんだ。」

「……はい？」

桃香の言葉の意味が解らないのか、愛紗は珍しく間の抜けた声を  
出してしまっていた。

「時々だけどね、寝癖で布団とか枕を抱きしめているんだ。」

「鈴々も、桃香お姉ちゃんと一緒に寝ると、よく抱きつかれるのだ  
っ。」

そう言った鈴々だが、嫌では無いらしく、満面の笑みを浮かべて  
いる。

一方、二人の話を聞いていた愛紗の表情は、物凄い速さで青くな  
っていった。

「で……では、涼殿が誤解だと仰っていたのは……………」

「うん、多分本当だよ。だって、涼兄さんが私を困らせる様な事は  
しないと思うし。」

「ごっ……御主人様……っ!!」

桃香が断言すると、愛紗は慌てながら依然気絶中の涼の許に駆け  
寄っていった。

それから間もなく涼が気が付くと、愛紗は土下座をするかの如く  
頭を下げ、何度も謝り続けた。

そして今に到る。

あれから何度言っても愛紗は納得せず、涼からの罰を受けようと  
している。

それは彼女が人一倍真面目な性格だからだ。決してそうした趣味  
が有る訳では無い。勘違いしない様に。

それを理解した涼は、やれやれといった表情のまま、愛紗に告げ  
る。

「……じゃあ、愛紗には罰を受けて貰う。」

「兄さん!？」

「お兄ちゃん!？」

涼のその言葉に桃香と鈴々は驚きの声をあげ、発言の撤回を求めようとする。

だが、

「二人共黙って。理由はどうあれ、罰を与えないと愛紗は納得しないみたいだから。」

「はい……。」

「解ったのだ……。」

そう言われて二人は渋々ながら納得した。

そんな二人を一度見てから、涼は愛紗の前に片膝を着いて座り話しかける。

「愛紗。」

「……はっ。」

愛紗は俯いたまま涼の裁きを待つ。

そんな愛紗に涼はゆっくりと罰の内容を告げる。

「君への罰は……自分自身をもっと大切にすることだ。」

「……えっ?？」

予想外の言葉に思わず顔を上げる愛紗。

そんな愛紗を見ながら、涼が更に続ける。

「今、これが何故罰なのかって思っただろ?？」

「は、はい……。」

愛紗は戸惑いつつも涼の問いに答える。  
そんな愛紗に涼は説明を始めた。

「愛紗は、俺達と義兄妹・義姉妹の契りを交わした。そして、俺達四人の中で今まともに戦えるのは、愛紗と鈴々だけだ。」

涼の言葉を黙って聞き続ける愛紗。

また、桃香と鈴々も同様に静かに聞いている。

「そうになると、必然的に俺と桃香は守られる立場になる。一応俺達は“天の御遣い”と“劉勝の末裔”だしね。」

苦笑しながら自分や桃香の肩書きを述べる涼。

「だから、愛紗と鈴々は自分より俺や桃香を優先しているんじゃないか？ 特に愛紗は、君の性格を考えるとそういった気持ち強い感じがするし。」

「そんな事は……っ。」

「無いって言い切れる？」

「う……。」

愛紗は言葉に詰まった。

涼が愛紗達と出会って未だ二日しか経っていないが、その性格は段々と解っていた。

桃香はのんびり屋だが確固とした信念を持っており、その意志は簡単に挫けない。

鈴々は見えた目も考え方も子供っぽいのが、戦いに関する覚悟は誰よりも強い。

そして愛紗は真面目で、こんな風に融通が利かない事もあるが、人一倍他者を思いやる心を持っている。

けど、だからこそ自分を省みていない様な気がしてならなかった。もしそうなら、少しずつで良いから自分を大切にしたい。

だからこんな罰を与えるんだ、と思いながら、涼は愛紗を優しく抱き締める。

「ご、御主人様っ!？」

突然の事に愛紗は驚き、上擦った声をあげる。

桃香と鈴々も驚いてはいるが、それを止める様子は無く、顔を紅らめながらその光景を眺めていた。

「俺達は義兄妹になつたんだろ？ なら、無理はしないでよ。兄妹なら兄妹らしく、助け合える筈だからさ。」

「御主人様……。」

「まあ、それには俺が強くないといけないんだけどさ。」

そう自嘲しながら、ゆつくりと愛紗から離れる涼。

「いえ……そのお気持ちだけで私には充分ですよ。」

愛紗は顔を少し紅らめながらそう言うと、表情を引き締め、姿勢を正してから涼に告げた。

「御主人様からの罰、謹んでお受けします。必ずや、御主人様が納得する結果を出して見せます。」

「うん。大変だけど頑張つて。」

そう言つて涼は愛紗に笑顔を向ける。

愛紗も、多少顔を紅らめながら笑顔を返した。

そんな二人を、羨ましそうに桃香と鈴々が見ている事には、二人共中々気付かなかった。

その後、二人が散々冷やかされたのは言う迄もない。

それから、朝食をとりながら何故四人が一緒の部屋に寝ていたのか皆で考えた。

その結果、涼は自身の予想通り最初の一口だけで酔い潰れたらしく、一番最初にあの部屋に向かい、着替えて布団を敷いて寝たらしい。

続いて酔い潰れたのが桃香で、やはり着替えて寝たのだが、酔っ払っていた所為か涼が寝ている布団にそのまま寝てしまったらしい。その後、愛紗と鈴々が酔い潰れて部屋に来て、布団を敷いて寝たらしい。勿論、ちゃんと着替えてから。

「酔い潰れていたのにちゃんと着替えているなんて、有る意味凄いな、俺達。」

「本当ですね、兄さん。」

普通は、酔い潰れていたら着の身着のまま寝ているだろうし、布団だつて敷いていないだろう。

変な所で規則正しい生活をしている涼達だった。

「それで御主人様、今日はどの様に過ごされるのですか？」

味噌汁を飲み干した愛紗が涼に尋ねる。

「そうだな……いつ迄もここに居る訳にもいかないし、旅の準備をしないとな。」

「旅って？」



涼の言葉に、鈴々が疑問符がついた表情で尋ねる。

「世直しの旅さ。」

涼はそう言っつて、朝食をどんどん食べていく。

今日から忙しくなるぞ、と思いつながら。

朝食後、鈴々と一旦別れた涼達は桃香の家へ帰って行った。

すると、桃香の母から「徐福さんが来ているわよ。」と告げられ、

涼達は徐福が居る部屋へと向かった。

「おや、皆様方。お帰りなさいませ。」

涼達が入って来たのを確認すると、徐福は飲んでいたお茶から口を離してそう言った。

「ただいま。……っつて、今日はどうしたの？　また黄巾党が現れたのか？」

涼がそう尋ねると、隣に居る桃香と愛紗の表情が険しくなる。

だが徐福は普通の表情のまま答える。

「いえ、街は今至極平和です。それに、もし黄巾党が現れたのなら、ここでのんびりとお茶を飲んでおらずに皆様方を探していますよ。」

「そ、それもそうだね。」

ホツとしながら三人は徐福の側に座る。

「なら、何の用で家に来たの？　徐福ちゃんが只遊びに来たって訳じゃ無いんですよ？」

徐福を見ながら、桃香が尋ねる。

「ええ。まずは皆様方にはこれに目を通して戴こうかと。」

「これは？」

服の内側にポケットでも有るのか、徐福は数枚の紙をそこから取り出し、涼達に渡す。

受け取った涼はそれが何かよく解らなかったが、次の言葉で理解した。

「先日の戦いの報告書です。」

そう言われて紙に目を通すと、「死傷者数」「捕縛数」等の文字と、それ等の横に漢数字が記載されていた。

因みに、この世界の文字の読み方が解らない涼は、取り敢えず読める文字だけを読んでいる。

(皆と話す事は普通に出来るのに、何で読む事は出来ないんだろ。

……何だか理不尽だ。)

そんな事を涼が頭の中で愚痴っていると、徐福が報告書の説明を始めた。

「そこに書いてある通り、昨日の掃討戦でこの辺りに居た黄巾党は壊滅しました。また、捕縛した黄巾党の人間から、色々と有益な情報を手に入れる事も出来ました。残念ながら、首領である張角の情報は有りませんでした……。」

始めはテンポよく話していた徐福だが、最後の部分は良い情報では無かったからか、声のトーンが若干下がっていた。

（張角か……。確か、三国志演義では黄巾党の乱の最中に病死したんだよな。情報が無いって事は、こっちの張角も既に死んでいるのか？）

報告書を取り敢えず読みながら、涼は情報を整理していた。

これからも戦うであろう当面の敵、黄巾党について。

一通りの説明が終わり、涼や愛紗、桃香との意見交換を終えると、徐福は再びお茶を飲み始めた。

「ところで、皆様方はこれからどうするおつもりなのですか？」

お茶を飲み終わると、徐福は涼達を見ながらそう尋ねた。

それに対し、三人を代表して涼が答える。

「成程、黄巾党を殲滅させる為に旅立ちますか。」

「ああ。」

強い意志がこもった声でハッキリと答える涼を、徐福は感心した様子に見ながら暫く考える。

「で、具体的にはどうするのですか？」

「それは未だ決めてない。」

「……………は？」

予想外の応えに、徐福は思わず目を点にしながら、間の抜けた声を出してしまった。

「取り敢えず、義勇兵を集めていこうとは思ってるんだけど。」

「……………では、その義勇兵を集める為の資金は有るのですか？」

「無い。けど、何とかなるでしょ。」

「……………。」

遂に反応出来なくなったのか、徐福は口を開けたまま黙ってしまった。

涼はその様子に怪訝な表情をしているが、隣に居る桃香と愛紗は徐福の異変に気付いたらしく、無意識の内に座ったまま後退りしていた。

それに気付かない涼は、徐福に声をかけようとする。  
すると、

「……貴方は何を考えているのですかっ!!」  
「わっ!?!」

メチャクチャ大きな声で怒鳴られたのだった。

「目標を持ったのは良しとしましょう。ですが、その為の指針が何も無いというのはどういう訳ですかっ!!」

「ちよっ、徐福!?!」

怒りで興奮している徐福が涼に詰め寄る。

余りの迫力に思わず後退る涼だが、徐福はその分も詰め寄っていく。

「これでは、感心した私がバカみたいではないですかっ!!」

遂には、涼の襟元を両手で掴んでしまう徐福。

流石に桃香と愛紗も止めようとしたが、徐福に睨まれるとそれ以上動けなかった。

あの関羽を威圧するとは……徐福、恐るべし。

「まあまあ、落ち着いて。」

「これが落ち着いていられますかっ!!」

涼の制止の言葉にも、耳を貸そうとしない徐福。  
だが、それでも涼は言葉を繋いでいく。

「確かに今はお金が無いよ。けど、当てが無い訳じゃ無いんだ。」  
「……と、言いますと?」

またも予想外の言葉を聞いた徐福は、ピタッと怒りを鎮めて涼の話を聞きだした。

まあ、依然として襟元を掴んだままだが。

「お金が無いなら何とかして増やせば良い。例えば、何かを売るとかね。」

「それはそうですが、それなりの物で無ければ、売っても二束三文にしかなりませんよ。」

「うん、確かにそれなりの物じゃないとね。……徐福、俺の肩書きは何か言ってみて。」

「清宮殿の肩書きですか? それは勿論“天の御使い”……あつ!」

何かに気付いた徐福が涼を見つめる。

「もしや、天の国の物を売るのでですか!？」

「御名答 俺の世界じゃありふれた物でも、この世界じゃ物珍しい筈。なら、結構良い値で売れると思うんだけど、どうかな?」

「それは……確かに……。」

涼の説明を聞いた徐福が右手を口元に当てながら考え込む。

やはり依然として襟元は掴んだままだが。

「天の国の道具を好事家に見せれば、ひよっとしたら物凄い額にな

「るかも知れません。」  
「だろ？」

徐福が賛同したので、涼は笑顔で徐福、桃香、愛紗に顔を向ける。それを見て、桃香や愛紗もホツとしたのか笑顔になった。だが、徐福はそんな雰囲気壊す一言を放つ。

「ですが、清宮殿の計画に相当する好事家を探すのは簡単じゃないですよ。」  
「え？」

途端に涼達の表情が曇る。

「確かに好事家は欲しい物珍しい物を手に入れる為なら、お金に糸目は付けません。……が、義勇兵を雇い装備も調えられる額を出せる好事家は、そうそう居ないでしょう。」

「幾ら好事家と言っても、当然ながら資金には限りがあるからな。」  
「ええ。清宮殿が義勇兵をどれだけ集める気が解りませんが、かなりの額が必要になるのは明らかですからね。」

徐福が冷静にそう言うと、涼は困った顔をしながら頬をかく。

「うーん……良いアイデアだと思ったんだけどなあ。」  
「あいであ？」

聞き慣れない単語を耳にして、思わず聞き返す徐福。

「天の国の言葉で、考えや思いつきって意味だよ。」  
「成程。確かに清宮殿の“あいであ”は良いと思います。後は、その大金を出せる好事家が居るかどうかだけです。」

涼の説明を聞いた後、徐福はそう言って涼の「あいであ」を認め  
た。

だが、かといって問題が解決した訳では無いので、涼達四人は揃  
って頭を抱えてしまった。

この時になって漸く、徐福は自分が涼の襟元を掴んだままなのに  
気付き、慌てて手を離し涼に謝罪する。

だが、涼はさほど気にしてなかったのか別段咎めはしなかった。  
そんな事もありながら考えていると、不意に桃香が手を拳げなが  
ら提案した。

「えっと……取り敢えず、ここで考えていても好事家が見つかる訳  
じゃ無いから、外に行ってみない？」

それは凄く単純だが、だからこそ皆が失念していた事だった。

「そうだな。確かに桃香の言う通り、ここでウンウン唸ってたって  
好事家は見つからないしな。」

「でしょ？ 愛紗ちゃんはどう？」

「私も、桃香様や御主人様が仰る通りだと思います。」

桃香の提案に、涼と愛紗は直ぐ様同意した。

なので、そのまま出掛けようとした涼達だったが、何故か徐福が  
キョトンとしていたので、涼達は立ち上がったまま徐福に話し掛け  
た。

「徐福、どうしたの？」

「……ああ、いえ、何でもありません。」

「何でもないって表情じゃ無かったよー。」

徐福は平静を装うものの、桃香に突っ込まれて思わず俯いてしま

う。

それから暫く考えてから徐福は尋ねた。

「劉備殿達は、お互いの真名を預けたのですか？」

「うん、昨夜の宴の中でね。」

徐福の質問に桃香が答える。

「そうでしたか。皆さんは昨日、お互いを姓名で呼んでいたの、今の会話は少々驚きました。」

「そうか？」

「ええ。……もしや、皆さんは既に閨を共にする仲になっているのですか？」

「「ぶっ！」「」

徐福がそう発言した途端、桃香と愛紗は殆ど同時に顔を真っ赤にし、慌てふためいた。

だが只一人、涼だけはキョトンとしていた。

「なあ愛紗、“ねや”って何の事だ？」

「なっ!?!」

涼に尋ねられて、紅かった顔が更に紅くなる愛紗。

尋ねられてない桃香も、心なしか紅くなっている様だ。

「えっと……それはですね……………」

愛紗は律儀に答えようとするが、慌てふためいて中々答えられないでいた。

そんな愛紗を見かねてか、代わりに桃香が答えようとする。



もつとも、その桃香も未だ顔を紅くしているのだけ。

「りよ、涼兄さん、本当に閨を知らないの？」

「知らないけど……ひよつとしてその言葉って、知ってて常識だったりする？」

「えつと……この場合の意味は子供は知らないかも知れないけど、私達くらいの歳の人なら、大体の人は知ってると思いますよ。」

「??？」

桃香の説明を聞いても、涼はイマイチピンとこなかったらしい。と、そんな時、徐福がクスクス笑いながら涼に対して詳しく説明を始めた。

「清宮殿、閨とは寢床の事。特に、夫婦や恋人同士が共に寝る寢床の事をそう言うのです。」

「……な、成程、そうだったんだ……。」

理由は解った涼だが、その所為で急に変な汗をかき始めていた。(夫婦や恋人が寝る寢床ってわざわざ言うって事は……つまりは、  
“ああいう事”をする寢床って意味だよな……。)

流石に、高校生である涼は彼女達の言わんとする事を理解している。

なので、桃香と愛紗が顔を紅くした理由も漸くだが理解していた。

「ところで清宮殿。」

「何？」

「先程、劉備殿が清宮殿の事を“涼兄さん”と呼んでいましたが、それはどういう意味なのでしょう？」

「ああ、それは……。」

徐福に尋ねられた涼は、隣に居る二人に話して良いか確認してから、昨夜の事を話し始めた。

「……成程、皆さんは義兄妹・義姉妹の契りを結んだのですか。」  
「ああ。差し詰め、“桃園の誓い”ってとこだな。」

三国志演義における、人気エピソードのタイトルをそのまま告げる涼。

「“桃園の誓い”、ですか。中々雅な例えですね。」  
「本当だねー。」  
「確かに。」

どうやら、涼が考えたオリジナルの名前だと思っただけらしい。まあ、三国志演義を知らないのだから当たり前ではあるが。説明するのも面倒なので、それについて涼は何も言わなかった。

「それじゃ、改めて行こうか。」

涼がそう言うと、四人は今度こそ部屋を出た。街に出た涼達は、手分けして好事家を探し始めた。

とは言つもの、やはりそう簡単に見つかる筈もなく、涼達は休憩をとりながら探し続けている。

「中々見つからないねー。」  
「そうだな。」  
「やっぱり、徐福ちゃんが言った通り、簡単にはいかないのかなあ。」

「かもな。」

街を歩き回りながらそんな会話を続けているのは、桃香と涼の二人。

愛紗と徐福は、鈴々を迎えに行ってから、そのまま探しに行くと言っていた。

その言葉通りに探しに行ったのか、愛紗達は未だ涼達と合流していない。

「うーん……。」

「どうした？」

そんな中、気が付くと桃香がこちらを見ながら唸っていた。

「涼兄さん、好事家さんが見つからないのに全然焦っていませんよね。」

「そう見えるか？」

「うん。」

そう言って桃香はさつきより強く見つめてくる。

だが涼は素知らぬ顔で歩き続ける。

その内心では、桃香の事を意外と鋭いなと思っていた。

（昨夜、俺達が桃園の誓いをした事で、この世界が三国志の世界、それも三国志演義を元にした世界だと確信出来た。）

「桃園の誓い」は、正史の「三国志」には無い「三国志演義」の創作である。

正史の「三国志」が歴史に忠実に描かれているのに対し、「三国志演義」は劉備や諸葛亮を主人公にしている為か、創作部分が多い。

「桃園の誓い」以外にも、「赤壁の戦い」における諸葛亮の活躍等も幾つかは創作だと言われている。

勿論、創作がダメだというのではないので、誤解しないでほしい。兎に角、この世界が「三国志演義」がベースになった世界なら、涼達が旅立つ為の準備が出来る様になる筈だ。

だが、

（だとすれば、この場面では当然あの二人が出て来る筈だけ……。）

果たして本当に出て来るのか、不安が無い訳でも無かった。

「大丈夫大丈夫。心配しないで良いつて」

「涼兄さんがそう言うなら、私も気にしないけど……。」

だが、その不安を桃香に悟られない様に、涼は努めて明るく振る舞っていた。

と、そんな時だった。

「あんたが清宮様と劉備様かい？」

二人は後ろから声をかけられた。

急に声をかけられた事に少し驚きながら、涼と桃香は同時に振り返る。

そこには小柄なツインテールの少女と、涼と同じくらいの身長少女が立っていた。

「そうですけど……貴女達は？」

桃香がそう答えながら逆に問い掛ける。

「あたいは馬商人の張世平。こっちは私の従姉妹で相棒の……。」「蘇双と申します。どうかお見知り置きを。」

桃香の問いに対して、比較的長身の少女が張世平と名乗ると、続けて小柄なツインテールの少女が蘇双と名乗った。

(来たか……。しかし、やっぱりこの二人も女の子なんだな。)

涼は張世平と蘇双を見ながら、この世界に来て何度目か解らない感想を呟く。

しかし、いつ迄もそう思う訳にもいかないので、取り敢えず二人の話を聞く事にした。

すると、二人は涼達が好事家を探している事を人伝に聞いたらしく、涼達の力になれると言ってきた。

それを聞いた桃香は素直に喜んだものの、自分達が必要としている額を考えると、途端に不安になってしまった。

「涼兄さん、どうしましょうか?」

「取り敢えず、もう少し話を聞いてみようよ。」

涼がそう言うと、桃香は静かに頷いて話を続けた。

すると、彼女達が出せる金額は涼達が必要としている金額以上だった。思った。

思わず桃香が尋ねる。

「馬商人って、そんなに儲かるものなんですか?」

「あたい達は元々、中山の豪商だったからね。かなりの数の好事家と繋がりが有るのさ。」

「元々?」

桃香が何気なく呟くと、二人は表情を暗くして話し始めた。

「……あたい達の家族は、黄巾党の奴等に殺されたんだ。」  
「……！」

静かに告げられた事実には、思わず絶句する涼と桃香。

「あたい達は何とか生き延びられたから、家族の仇を討ちたい。」  
「けど、私達には力がありません。ですから、私達の願いを聞き届けてくれる人を探していたのです。」

そう話す二人の瞳には、悔しさと悲しき、そして希望が同居していた。

そんな二人を、涼と桃香が放っておける筈がない。

涼と桃香は二人の申し出を受ける事にした。  
それでも、一応確認したい事が有ったので、涼は二人に問い掛ける。

「何故、俺達なんだ？ ここに来る迄にも、有力な将や太守は沢山居たんじゃないのか？」

「三国志演義」を知っている涼には聞く必要が無い質問なのだが、それでもここは異世界なので、聞いておきたかった様だ。

「確かに、ここに来る迄に沢山の人に会ったよ。けど、その殆どが私利私欲にまみれた奴ばっかで、あたい達が望む人物は一人も居なかった。」

「そんな中でこの街に着くと、お二人の噂を耳にしたので、私達の願いを託そうと思ったのです。」

「噂を聞いただけで決めて良いのか？ 実際には、俺達も私利私欲

にまみれた奴かも知れないのにさ。」

涼は敢えて自分達を卑下した物言いをしてみる。

「勿論、人の噂は当てにならない事も多くあります。」

「だけど、あんた達を見て確信したよ。あんた達は、あたい達が望んだ人物だ。」

「何でそう言い切れるんですか？」

自信満々に話す張世平に対し、桃香が問い掛ける。すると、張世平は涼と桃香を見ながら答える。

「瞳々。」

「瞳々？」

張世平の言葉を、涼と桃香の二人は同時に繰り返した。

「あんた達の瞳は、他の奴等とは違う。確固とした意志や信念を持っている。それは、今の時代に必要なものだよ。」  
「それが無い者に、私達の願いを預けたりはしませんから。」

張世平、そして蘇双はそう言つて、涼と桃香を見つめる。

二人の眼には、先程と比べて涼達に対する信頼が多く溢れていた。それを感じた涼と桃香は思った。

二人の、いや、沢山の人々の期待に応えられる様に、精一杯頑張らないといけないな、と。

そう決意した涼達は、話の続きは場所を移してからする事にした。その場所は、愛紗達との合流場所でもある鈴々の家である。

鈴々の家に着くと、そこには鈴々と愛紗、そして徐福が居た。どうやら、三人はこれから涼達と合流しようとしていた様だ。

何でも、鈴々を起こしてから好事家を探しに行ったものの見つからず、前もって決めていた合流場所であるここに一旦戻ってみたが、涼と桃香も未だ戻っていないので、暫く休憩していたら涼と桃香が戻ってきた、という感じらしい。

その涼と桃香が、見知らぬ二人の少女と一緒にだったので、愛紗達は一瞬だけ怪訝な表情をしたが、直ぐ様表情を明るくして涼に尋ねた。

「御主人様、もしや？」

「ああ。探していた好事家本人じゃないけど、その好事家と繋がりがある馬商人の、張世平さんと従姉妹の蘇双さんだ。」

涼がそう紹介すると、徐福は二人をジッと見始めた。

二人は大きさは色が違うものの、基本的なデザインが同じ服を着ている。見た感じ、余り高い服には見えない。

簡単に言くと、張世平は黒を基調としたノースリーブにホットパンツ。蘇双は白を基調とした長袖にロングスカートという格好だ。

そんな二人に徐福は、

「馬商人ですか。失礼ですが、余り儲かっている様には見えないのですが。」

と、先程の桃香と同じ様な事を言った。

思わず嘖き出しそうになった涼達だが、それを何とか堪え、経緯を簡単に説明する。

そうして徐福が納得したところで、涼達は商談を始めた。

と言っても、売り物は涼が持っている「天の国の道具」くらいしか無いのだが。

「それで、一体何を売ってくれるんだい？」



張世平が涼に尋ねた。

尋ねられた涼はバッグを開け、そこから細い棒を取り出し張世平に見せる。

「それは何ですか？」

恐らく、涼以外の全員が思っていた事を、まるで代表するかの様に愛紗が尋ねた。

涼はその棒を指先で回転させながら答える。

「これは“ボールペン”っていう、俺の国の筆記用具の一つだよ。」

そう言っただけで涼は「ボールペン」の説明をしてみた。

墨を使わず、キャップという蓋を外せば直ぐに文字が書けると知ると、桃香達は皆一様に驚いていた。

勿論、説明しただけで売れるとは思っていないので、ちゃんと実演してみせる。

この世界では紙は貴重品なので、実演には持っていたメモ帳を使った。

「わあっ。」

「凄いのだー。」

自分の名前「清宮涼」をメモ帳にスラスラッと書くと、桃香達は皆、さっきの説明を聞いていた時よりも大きく驚いていた。

やがて、自分達も書いてみたくなったのか、皆一様にボールペンを凝視している。

その雰囲気を押されたのか、涼は少しだけ、という条件をつけてボールペンを手渡した。

「これが“ぼうるぺん”……何とも珍妙な名前の筆記用具ですね。」

ボールペンを手に取った愛紗がそう呟く。

そして、同じく手渡したメモ帳に「関羽雲長 愛紗」と書くと、

「ほお……こんな小さな物がこれ程書き易いとは……やはり天の国とは凄い国なのですな。」

と感嘆の声を上げた。

桃香達も早くボールペンを手に取りたい様だが、愛紗は熱中しているのかそれに気付かない。

鈴々に取られそうになって、漸く気付いたくらいだ。

そんな光景を見ながら、涼は張世平に尋ねる。

「どう？ これは好事家が欲しがると思う？」

多分大丈夫だろうと思いつつも、少し不安にも思いながら答えを待つ。

すると、

「欲しがるも何も、寧ろこれを欲しがらない人間が居たら見てみたいね。」

というお墨付きを買った。

それから涼は、桃香達全員が試し書きを終えたのを確認してからボールペンを回収し、張世平に渡して代金を貰った。

その金額は、百人以上の兵を集められる程の大金だった。

それから数日は、旅の準備でてんでこ舞いだった。

同行してくれる義勇兵を集め、武具を揃え、馬を揃える。

まあ、馬に関しては張世平、蘇双がサービスとしてくれたので楽だったが。

もつとも、大変だったのは桃香達で、涼は何もしなかった。いや、出来なかったというのが正しいか。

「お兄ちゃん、大丈夫ー？」

「な、何とかね……。」

今、涼は布団に寝ており、鈴々に看病されていた。

この状態が、かれこれ三日も続いている。

この間の涼は、腹痛で寝込んでいた。

かといって何かの病気という訳ではない。単に腹を壊しているだけなのだ。

前日、前々日は何とも無かったが、張世平達との商談を終えた日の夜から体調を崩し、桃香達の勧めもあつて休んでいる。

異世界に来て、食べ物や飲み物が体に合わなかったのが原因と思われるが、初日や二日目は何ともなかったので、腹痛の時間差攻撃に涼は想像以上にまいつっていた。

何せ、現代と違って腹痛を治す薬が簡単に手に入る訳では無いし、トイレも洋式で無ければウォシュレットも当然無い。

今更ながら、涼は異世界に来ている事を実感していた。

結局、涼が全快したのは旅立つ準備が終わる前日の事だった。

涼の体調が良くなり、旅立ちを翌日に控えた夜、涼達は桃香の家に集まっていた。

「今更ながら確認するけど、皆俺に付いて来てくれるんだね？」

「当然です。私達は義兄妹・義姉妹なのですから、常に一緒です。」

「もし鈴々達を置いてったら、直ぐに追い掛けるのだっ。」

「そうだね。涼兄さん、私達を置いて行っちゃダメですからね。」

愛紗、鈴々、そして桃香の三人は微笑みながらそう告げる。

「解ってるよ。……三人共、有難う。」

涼はそんな三人に深く感謝しながら頭を下げた。

「桃香達はこう言ってるけど、君達はどうなんだい？」

続いて、桃香達の反対側に座っている三人に確認をとる。

「私は、先日の黄巾党討伐の時から清宮殿について行く決めていました。失礼ながら、この街の義勇兵の隊長では、私の実力を発揮出来ない様ですしね。」

イタズラっぽい笑みを浮かべながら、徐福も同行すると宣言する。

「勿論、あたい達もあなたについて行くよ。何せ、あなた達はあたい達の希望だからな。」

「うん……頑張って下さい。」

続けて、張世平と蘇双の二人も同行すると宣言した。

すると、彼女達の視線は自然と涼に集まっていた。

皆の視線を受けた涼は、全員をゆっくりと見渡してから告げる。

「皆、本当に有難う。心強い仲間が出来て、俺はとても嬉しく思ってるよ。」

そして深々と頭を下げ、感謝の意を示す。

すると、涼が頭を下げたので、桃香達も同様にして頭を下げた。

そうして互いに顔を見合わせると、柄にもない事をした所為か自

然と嘖き出してしまった。

「まあ、固つ苦しい挨拶はこれくらいにして、これから頑張っていこう。勿論、俺も頑張るからさ。」

「解りました。我が青龍偃月刀に誓って御主人様をお守り致します。」

「鈴々も、丈八蛇矛に誓うのだつ。」

「わ、私も靖王伝家に誓うもんつ。」

固つ苦しい挨拶は無しと言った傍から誓いだす三人。

しかし、その気持ちは嬉しいので素直に受け取る涼だった。

「三人共有難う。けど、俺もいつか皆を守れる様に強くなるからね。」

「うん、期待してるよ、涼兄さん。」

「ですが、我等が主は行き当たりばったりな上に、直ぐ体調を崩される様ですからな。今は私達が主を守らなければいけないのが現状ですね。」

「まったくです。」

「……それを言っなよ。」

折角の決意が揺らぎそうな事を言う徐福と愛紗であった。

「さて、では私からも一つ申し上げても宜しいでしょうか？」

「……何？」

涼が軽くへこんでいるのを知ってか知らずか、徐福はマイペースに尋ね、そして話し出す。

「実は先程、清宮殿にお仕えするにあたり、名を改めたのです。」

「えっ、名前を!？」

淡々と喋った割には内容が予想外だった為、涼だけでなく桃香達も驚いた。

そんな涼達に対し、徐福はあくまでマイペースに話し続ける。

「はい。兼ねてから、仕えるべき主が現れた時に名を改めようと思っ  
ていましたので。」

「そうだったのか。それで、何て名前にしたの？」

先程は忘れていたので驚いたが、「三国志演義」を知っている涼は勿論その名前を知っている。

だが、当然ながら桃香達は知らないので一応聞いてみた。

「徐福の“福”を“庶”に改め、“徐庶”にしました。」

「徐庶ちゃんかあ、良い名前だねっ。」

笑顔を浮かべた桃香が、徐福改め徐庶を見つめる。

「有難うございます、劉備殿。……折角ですから改めて自己紹介を  
しましょうか。私の姓は“徐”、名は“庶”、字は“元直”、真名  
は“雪里”と申します。以後、お見知り置きを。」

そう言っつて徐庶は深々と頭を下げる。

「ああ、こちらこそ宜しく、雪里。」

涼は早速徐庶を真名で呼び、改めて挨拶を交わした。

「それじゃあ、あたい達も改めて自己紹介しとくか。」  
「ええ。」

雪里に触発されたのか、張世平と蘇双も自己紹介を始めた。

「あたいの姓は“張”、名は“世平”、真名は“葉”だ。宜しくな。」  
「私の姓は“蘇”、名は“双”、真名は“景”です。宜しく。」

そう言っ頭を下げる張世平と蘇双。

そうして二人の自己紹介が終わると、桃香達も改めて自己紹介をして親睦を深めていった。

「それじゃあ、心機一転した徐庶や、張世平達が真名を預けてくれたお祝いに、今夜は宴なのだーっ。」

「これ鈴々っ。確かに雪里殿達の事は目出度い事だが、今日宴を開くなら、それは主に我等が主の出立を祝ってだろう。」

「あ、そうだったのだ。」

楽しそうに提案するも、愛紗に注意されてハツとする鈴々。

「まあまあ、今日はお母さんが腕によりをかけて料理を振る舞うって言っただから、楽しいこっよ。」

桃香がそう言っ、鈴々は子供の様にはしゃいだ。

……まあ、見た目も子供ではあるが。

結局その日は、涼達の旅立ちを祝っ盛大な宴が夜遅く迄続いた。  
「ん……………」

宴が終わり、今は誰もが寝静まっている真夜中。

そんな時間に、涼は不意に目が覚めた。

「うっ……………頭が痛い……………」

どうやらまた酔い潰れたらしいと思いながら、額を抑え、そのまま辺りを見回した。

今居るのは先程迄皆で御馳走を食べていた部屋。

涼自身は毛布一枚かけていただけで、着ている服は寝間着ではなく普段着のままだった。

「……またかよ。」

よくよく見れば、部屋には愛紗、鈴々、雪里、葉、景の五人が毛布にくるまって寝ている。

何だか最近見た光景だなあと思いながら、涼はゆっくりと立ち上がり部屋を出た。

別に何かしたくて部屋を出た訳では無い。

只、女の子が寝ている部屋に居るのが少しばかり居心地悪かっただけだ。

（また誤解されても困るからなあ。）

そう思いながら自然と体が震える。

どうやら、愛紗の一撃は体が覚える程に痛かったらしい。

（ん……？）

そんな事を考えながら廊下を歩いていると、とある部屋から人の話し声が聞こえてきた。

（この声は……桃香か？）

そう言えばさっきの部屋には居なかったなと思いながら、涼は声



がする部屋に近付いていった。

「……遂に、この日がやってきたのですね。」

続いて聞こえてきたのは、桃香の母の声だった。

「劉勝の末裔である貴女は、いつかは国の為民の為に立ち上がらなければなりませんでした。その為に私は、貴女に人として王としての生き方を教えてきたのです。」

「そうだったんだ……。けど、人としては兎も角、王としての生き方は教えて貰ってない気がするんだけど？」

桃香は母に尋ねた。

確かに、桃香が自分自身を劉勝の末裔だと知ったのは最近の事であり、それ迄は普通の少女として育ってきた筈だった。

「そんな事は有りませんよ。……桃香や、王に必要なものが何か解りますか？」

「王に必要なもの？ ……うん……やっぱり、誰にも負けない強さと、類い希な精神力とかじゃないかなあ？」

強くなければ敵から国や民を守れないし、精神力もプレッシャー等に打ち勝つ為に必要だ。

「確かにそれも大事です。ですが、強さや精神力だけでは駄目なのです。」

「じゃあ、何が必要なの？」

暫く考えていた桃香だったが、結局解らなかつたらしく答えを求めた。

桃香の母は答える。

「それは、民を思う心と、民に愛される事です。」  
「民を思う心と、民に愛される事……。」

桃香は母の言葉を反芻した。

「国とは民あつてのものであり、決して王だけのものではありません。それを忘れてしまつては、王たる資格はありません。……残念ながら、今の漢王朝はその事を忘れていきます。」

だからこそ漢王朝は腐敗し、そして黄巾党が現れた。  
それからの事は皆知る通り。

黄巾党の乱を鎮圧すべき官軍は頼りにならず、本来は国や民の為に立ち上がった筈の黄巾党は、単なる賊に成り下がった。

そして、そんな世の中を変えようと沢山の人々が立ち上がっている。

「貴女を、儒学者の廬植先生の許で学ばせたのも、その事を知ってもらいたかつたからです。」

「確かに、廬植先生には色々な事を教わりました。……それに、掛け替えのない友達も出来ました。」

母の言葉を聞いて当時を思い出したのか、桃香は微笑んだ。

涼はそんな桃香の声を聞きながら考える。

(桃香の親友……劉備が廬植の許で学んでいた時に知り合った人物  
と言えば、やっぱり公孫賛の事だろうな……。)

公孫賛、字は伯珪。

史実や演義で、旧知の仲である劉備を迎えた武將で、北方の勇で

ある袁紹と戦った歴戦の勇士である。

「伯珪ちゃんの事ですね。彼女も今は幽州太守として活躍している様です。」

「はい、私も白蓮ちゃんの噂はよく聞いています。」

桃香の母が伯珪ちゃんと呼ぶ。やはり、公孫贄も女の子の様だ。

「何れは、伯珪ちゃんと共に戦うのも良いでしょう。あの娘は中々利口な娘でしたからね。」

「ええ。私も、白蓮ちゃんと一緒に戦えたら良いなって思います。」

そう話す桃香の声はとても明るく、それだけで公孫贄の人柄がよく解った。

「ならば、先ずは伯珪ちゃんが居る城を目指すの良いでしょう。その道中に居る黄巾党を倒していけば貴女達の評判も上がり、伯珪ちゃんも温かく迎えてくれる筈です。」

「はい、解りました。絶対に白蓮ちゃんの所に行きます。」

そう言って桃香は母に頭を下げる。

そこ迄聞いてから、涼は踵を返した。

(これ以上盗み聞きは出来ないな。……戻ろう。)

本当は盗み聞き自体が駄目なのは涼も解っているが、何だか聞き入ってしまった。

多分、暫くの間離れ離れになる親子の会話に興味があったのだから。

それは、無意識の内に自分自身の家族の事を思っていたからかも知れない。

涼もまた、家族と離れ離れの身なのだから。

涼はその後、部屋に戻って再び寝る事にした。

女の子が雑魚寝している部屋に戻るの少し気が引けたが、ここで別室に移っても却って誤解されそうな気がしたので、結局そのまま寝る事にした。

一応、少し離れてはみた様だが。

(それにしても……。)

再び毛布にくるまりながら涼は思う。

(皆、ちょっと無防備過ぎるよなあ。ひょっとして、俺が男だって事を忘れてるんじゃないか?)

そう思いつつ周りを見る。

そこに居る愛紗達は皆酔い潰れたらしく、着の身着のままの姿で寝ていた。

毛布にくるまっっているとはいえ、寝相で毛布がはだけ、胸元や足が見えたりしている娘も居る。

涼は思春期真っ盛りの男の子であり、そんな光景を見せられてはかなり困ってしまうのだが。

(まあ、それだけ信頼してくれてるって事かな。……うん、そう思う事にしよう。)

余り考え過ぎてもいけないな、と結論付ける。

考えても答えが出ると限らない場合は、下手に考えない方が良く、今迄そうしてきたので、これからもそうするだろう。

そう思いながら、涼は再び眠りにつく。

暫くして、誰かが涼の隣に寝たのだが、その頃には熟睡していた

ので気付かなかった様だ。

翌朝、涼が目覚めた時には既に全員が目覚めていた。

「お早いお目覚めですね。」

と、雪里に言われたりもした。

よっぽど遅く迄寝ていたのかと思っただが、丁度朝食の時間だったのでそんなに遅い訳ではない。

だから何でそんな風に言われたのか、涼には解らなかつた。皆で集まって朝食をとると、何とお風呂が用意されていた。

この世界は毎日お風呂に入れる訳ではない。

現代みたいに蛇口を捻って水を汲む訳ではないし、お湯を沸かす為にガスを使う訳でもない。

自ら水を汲んで風呂桶を満たし、薪を焚いてお湯を沸かす。その行程はかなり大変だし、水が貴重な世界だから週に一回入れれば良い方だ。

夏だと川で水浴びとか出来るらしいけど、今は未だ季節じゃないから無理だし。

そんな貴重なお風呂に入る事が出来る。

勿論、一度に入る訳じゃ無いので、入る順番を決めないといけない。

桃香達は主である涼が先に入るべきだと主張し、その涼は女の子が先に入るべきと主張した。

どちらも譲らないまま数分が経過した所で、雪里が多数決を提案した。

「こら待てっ。それは……！」

「清宮殿が最初だと思う方は拳手を。」

勿論、結果は涼が入る事になった。

「多数決が数の暴力とは、よく言ったものだよ。」

風呂から上がり、取り敢えず寝間着に着替えた涼は、縁側に座りながらそう呟いた。

涼の後に桃香が入り、以降は愛紗、鈴々、雪里、葉、景の順番で入っていった。

そうして皆が風呂に入っている間に、桃香の母によって服は洗濯されている。

洗濯機も乾燥機も無い世界で、あの人数分の衣服の洗濯は大変だろつ。

なので、涼達も手伝うと申し出たが、旅立つ前に疲れる事はしなくて良いと言われ、断られている。

今日は天気も良いし風も適度に吹いている。これなら、昼過ぎには乾くだろう。

衣服が乾く迄の間、涼達は当面の基本方針を話し合った。

義勇軍を旗揚げするとはいえ、人数は百人ちょっと。しかもその殆どが、実戦経験が余り無い農民達だ。

ちゃんと行動しないと、あっという間に全滅してしまう。

「そこで、私の出番という訳です。」

いつもの様に自信満々に話し出したのは、涼率いる義勇軍唯一の軍師、徐庶こと雪里だった。

「清宮殿達には、先日捕縛した黄巾党の男から有益な情報を得た事は話しましたよね？ 実はその情報には、幽州に点在する黄巾党の拠点や人員等の詳細が含まれていたのですよ。」

「それは凄いな。なら、人数が少ない所から叩いていけば……。」

「黄巾党の数は減り、我等は名声を得る事になりますね。」

「そしてそうなれば、自然と人や物が集まってくる、と。」

「そう上手くいくかは解らないけど、可能性は高いと思います。」

雪里の報告を聞くと、涼達の話は一気に盛り上がっていった。

「けど、ずっと戦っていたら疲れるしご飯も無くなるのだ。鈴々達だけじゃ、その内お腹が減って戦えなくなるよ?」

「ああ、その点なら大丈夫だよ。」

鈴々が疑問を口にすると、桃香が笑顔を鈴々に向けながら話し出した。

それは昨夜、桃香と桃香の母が話していた内容だった。

「幽州の太守は公孫贇って人なんだけど、この人は私の幼馴染みの。だから、戦功を挙げていればきつと快く受け入れてくれると思うんだ。」

「ですが、いくら友達とは言え相手は太守です。そう易々と受け入れてくれるかどうか……。」

桃香の説明を聞いていた愛紗が不安を口にする。

だが桃香は、そんな愛紗の不安を無くすかの様に、笑顔を向けて話していく。

「大丈夫だよ、愛紗ちゃん。白蓮ちゃんは優しくて良い娘だから、きつと私達を受け入れてくれるよ!。」

義妹である桃香にそう言われては、義妹である愛紗はそれ以上何も言えなかった。

「……解りました。では御主人様、私達の当面の目標は、公孫贇殿が居る城に向かいつつ黄巾党を討つ……で、宜しいでしょうか?」

「ああ、それで良いよ。」

愛紗が確認すると、涼はあっさりとした。

難しい事が苦手なのと、当初の目的としては充分だと思っていたので、反対する理由が無いからでもある。

それから詳細を決めていき、終わった時には丁度昼食の時間になった。

これが、桃香にとって一先ず最後になる母の手作りご飯。

次に食べられるのは何年後になるか解らない。

だからだろうか、桃香は一口一口を噛み締める様に食べていった。勿論、その様子を皆に悟られない様に、出来る限り普通に振る舞っていた。

昼食を終えた頃、洗濯していた衣服が乾いた。この季節にしては暑かったのが早く乾いた要因らしい。

涼達は直ぐに着替え、続けて武器や道具を身に付けていく。

桃香は宝剣「靖王伝家」を、

愛紗は大薙刀「青龍偃月刀」を、

鈴々は長矛「丈八蛇矛」を、

武器を持たない雪里は「大きな中華鍋」、

葉は「巨大算盤」、

景は「巨大巻き尺」をそれぞれ携える。

そして涼はと言うと、旅の準備中に街の鍛冶屋に造らせた、外見が全く同じ二振りの剣、所謂「雌雄一对の剣」と、借りていた「靖王伝家（予備）」を持つ事になった。

本当は「雌雄一对の剣」が出来た時に「靖王伝家（予備）」は返すつもりだったのだが、桃香の母が、

『未だ返さなくて良いですよ。武器は使われてこそ意味が有りますから。』

と言い、桃香も、



『何だかお揃いみたいで嬉しいですね。』

と笑顔で言っていたので、何となく返しそびれていた。

そのお陰で、涼は三つもの剣を持つ事になってしまっている。

「外見だけは立派な剣士ですな、清宮殿。」

「どうせ俺は弱いですよー。」

桃香を除いた残りの全員は今、桃香の家の門前に集合し、そんな事を話して待っていた。

やがて、家の中から桃香と母が出て来る。

「それじゃあ……行ってきます。」

「ええ……気を付けるですよ。」

短く言葉を交わすと、桃香は深々と御辞儀をし、涼達の許に向かった。

涼達は桃香が合流すると同時に、桃香の母に向かってやはり深々と御辞儀をする。

「皆さんも、どうか無事に帰ってきて下さいね。」

涼達は、桃香の母にそう言われて送り出された。

桃香の母に見送られた涼達は、一路街の広場へと向かう。

そこには、涼達と共に義勇軍に参加する者達が主の到着を待っていた。

集まった義勇兵は百人以上。殆どは農民や商人の次男や次女だが、中には先の黄巾党征伐に参加した軍人も居り、涼達に対する期待の大きさが窺える。

涼達が広場に着くと、到着を待ちわびていた人々から大きな拍手が巻き起こった。

「す、凄いな……！」

「う、うんっ……！」

「お二人共、何を驚いているのですか。」

拍手に驚いている涼と桃香を、雪里が窘める。

「先日の黄巾党征伐の時には、もっと沢山の兵が居たではないですか。」

「それはそうなんだけど……。」

「この人達全員が俺達が率いる兵だと思つと、何だかプレッシャーが……。」

「ぶれっしああ？」

涼が言った言葉の意味が解らず、キョトンとした顔で聞き返す雪里。

「えっと……つまりは“精神的重圧”って事。」

「成程。しかし、これからは何千何万もの兵を率いる事もあるのですよ。これくらいの事で萎縮しては困ります。」

「そりゃあそうなんだけどさあ……。」

戦争の無い国で生まれ育つた涼には、些か荷が重い状況だろう。

「大丈夫ですよ、御主人様、桃香様。私達もついているのですから、御安心下さい。」

そんな涼と桃香を愛紗が励ますと、鈴々達も同意するかの様に頷く。

その様子を見ていた雪里は、はあ、と溜息をつきながら愛紗に言う。

「愛紗殿達は、直ぐにそうやって清宮殿と桃香様を甘やかす。」

だが、愛紗も負けずに言い返す。

「そうか？ 私には、雪里が少しばかり厳しい様に見えるがな。」  
「軍師とは、主に媚びへつらうだけでは意味がありませんからね。これは性分みたいなものです。」

愛紗の指摘にも表情一つ変えずに答える雪里。

それを見た愛紗は、納得した様な表情を浮かべながら言葉を続ける。

「成程。まあ、私もお二人が今のままで良いとは思っていない。少しずつでも我等が主として成長してもらわないとな。」

そう言つと、愛紗は二人の主それぞれ目をやる。

その視線が鋭かったからか、涼と桃香はビクツツとしながら声を発した。

「えっと……頑張ります。」

「わ、私も頑張るよつ。」

そう答えながら、情けないなあと思う二人だった。

「では、参りましょうか。皆がお二人のお言葉を待っています。」  
愛紗に促され、涼達は前に進んだ。

左右に分かれた義勇兵達の間を、涼と桃香を先頭にして、続けて

愛紗、鈴々、雪里、葉、景の順に歩いていく。

進んだ先には、直方体の台座が設置してあった。

数日前には無かったので、今日の為に作ったのだろう。

その台座に、涼達は義勇兵達から見て左から景、葉、鈴々、桃香、涼、愛紗、雪里の順に並んでいく。

そうして並び終わると、涼は改めて辺りを見渡す。

目の前には武装した義勇兵約百人。そしてその後方には、その様子を見ている街の人や旅人の姿がある。

その表情には、涼達に対する期待と、子供や友達を送り出す不安が同居していた。

（もしかしたらこれが今生の別れになるかも知れないんだから、当たり前だよな……。）

愛紗にああ言った手前、頑張らないといけないのだが、責任の重さが急激に襲いかかってくるのを涼は感じていた。

普通の高校生が他人の命を預かる事等は先ず無いのだから、その事で不安になるのは仕方ないだろう。

「……さんっ。涼兄さんっ。」

「えっ？」

声を掛けられている事に気付き、涼はハツとする。

「大丈夫ですか？ 何だか急に暗い表情になっていましたけど……。」

声を掛けていたのは、隣に立つ桃香だった。

心配そうに見つめる桃香を安心させないといけないと思った涼は、表情を取り繕って答える。

「大丈夫だよ、ちょっと考え事をしてただけだから。」  
「それだけには見えなかつたんだけど……」

尚も心配する桃香。そんな桃香の気を逸らそうと、涼は話題を変え、  
える事にした。

「それよりほら、愛紗が皆に話しているんだから、ちゃんと聴こうよ。」

涼がそう言う様に、今は愛紗が義勇兵達に対して義勇軍の心構えを説明していた。

「我等義勇軍には黄巾党という無法者共とは違い、鉄壁の規則がある。私がこれから言う規則を、皆は守れるか？」

愛紗の問いに、義勇兵達は雄叫びで答えた。

「良からう、では……。」

愛紗はコホンと咳払いをしてから、規則を一つ一つを凜とした声でハッキリと説明していく。

「一つ、將の命令を守る事！ 一つ、目の前の利益に惑わされず  
大志を抱く事！ 一つ、自らより国を思う事！ 一つ、略奪や弱者  
を傷付ける事は禁止！ 一つ、軍規を乱す者は追放！ ……以上だ  
！……」

愛紗が規則を言い終わると、暫くの間辺りに静寂が訪れたが、  
がて、先程よりも大きな雄叫びが湧き起こった。

雄叫びがあがったという事は、どうやらここに居る義勇兵は皆規則を守れるという事らしい。

「では桃香様、皆に一言お願いします。」

「えっ、私っ!?!」

尚も雄叫びが続く中、急に話を振られた桃香は驚いた。

自分には無理だと言って断っていたが、桃香も義勇軍の指揮官の一人なので、結局話さなければならなくなった。

「落ち着いていけば大丈夫だよ、桃香。」

「う、うんっ。」

涼に励まされて少し緊張がほぐれた桃香は、ゆっくりと前に立ち、義勇兵達の雄叫びが止むのを待ってから語りかけた。

「えっと……殆どの人はこの街の人だから私の事を知っていると思うけど、一応自己紹介しますね。私の名前は劉備玄德、中山靖王劉勝の末裔です。」

桃香がそう言うと、結構大きなどよめきが起きた。

考えてみれば、桃香自身も自分の出自を最近知った訳で、それからも殊更に話し回ってはいなかった。

先日の黄巾党征伐の折に少し話してはいたものの、参加していない人に迄は余りその出自が知られていなかった様だ。

「今の世の中は間違っています。ほんの一握りの人達だけが我が物顔で暮らしていて、それ以外の多くの人達は苦しい日々を送っています。」

初めは緊張気味だった桃香だが、話している内に緊張がほぐれてきたらしく、段々と饒舌になっていった。

「私は、この世の中を変えたい。誰もが笑顔で生きていける世の中にしたい。……けど、幾ら私に中山靖王の血が流れていても、一人では何も出来ない。」

桃香はそう言うと一度目を瞑り、両手を胸に添えながら話を続ける。

「けど、私には仲間が居る。私と義姉妹の契りを交わした関雲長ちゃんに張翼徳ちゃん、とつても頼りになる軍師の徐元直ちゃん、いつも元気で明るい商人の張世平ちゃんに蘇双ちゃん、そして……。」

そこで一旦言葉を区切ると、後ろに居る人物に向かって振り返り、その手をとった。

「そして、そんな私の……ううん、私達の力になってくれる人。その人がこの、“天の御遣い”こと清宮涼さんっ。」

桃香に引つ張られる様にして前に出た涼は、躓きそうになるも何とか耐えた。

そして感じた。皆の注目が、桃香から自分へと移っていったのを。そんな視線を交わす様に、涼は小声で桃香と話す。

「桃香、俺を紹介するのは良いけど、急に引つ張らないでくれよ。」

「ゴメンね、涼兄さん。一人じゃこれ以上耐えられそうになくて……。」

「そうは見えなかったけど……。」

「けどそうなのっ。」

桃香はそう言うと、何故か顔を紅くしてそっぽを向いた。

未だ何か言おうとした涼だったが、義勇兵達に向かって桃香が再

び話し始めたので、結局言えなかった。

「知っている方も多いでしょうが、清宮涼さんはこの大陸に平和をもたらす為に、天から遣わされたのです。そして先日の黄巾党討伐で、早速私達を勝利に導いてくれました。」

（いや、あれは別に俺は何もしていない様なものだけど……。）

涼はそう思ったが、義勇兵や街の人達は桃香の話を鵜呑みにしたらしく、涼に対して歓声を送っていた。

（いやいや、この中にはあの時参加してた人も居るよね？）

そんな涼の心のツッコミも、義勇兵達には当然聞こえない訳で。その歓声は暫くの間止む事は無かった。

「私達は、そんな御遣い様と共に立ち上がるのです。そして、いつか必ず平和を取り戻し、家族や友が待つこの街に戻ってきましょう！」

右手を高々と上げてそう言うと、義勇兵達は更に大きな歓声で応えた。

桃香はそんな義勇兵達を心強いと思いつつ、隣へと視線を移す。

「それじゃあ涼兄さん、最後に一言お願いします。」

「やっぱり？」

「うん」

笑顔で答える桃香に涼は何も言えなかった。

立场上何か言わないといけないとは解っていたものの、沢山の聴衆の前で話した経験が殆ど無い涼は、何を話したら良いか解らな



った。

と、そこで、義勇兵達がざわついているのに気付いた。聞こえてくる声から察するに、涼の服装や剣に注目している様だ。この世界の人間は誰もコートやジーパンなんて見た事無いだろうから、それは仕方ないだろう。

しかも、腰の左右には雌雄一対の剣を下げ、背中には靖王伝家（予備）を背負っている。

その姿と先程の桃香のスピーチで、涼がかなりの実力者だと思っているのかも知れない。

実際には未だ一人も斬った事が無いというのに。

「えっと、皆さん初めまして。只今、劉玄德から紹介された清宮涼です。」

取り敢えず涼は、挨拶から始めてみる。

「彼女が言った通り、俺はこの世界の人間ではありません。だから、天の御遣いという説明は解り易いとは思っています。」

そう言つと表情を引き締め、前を見据える。

「けど、だからと言って俺は万能じゃ無い。何でも出来るなら黄巾党は勿論、あらゆる悪党をとくに殲滅している訳だしね。」

そう言つた瞬間、義勇兵達はざわめいた。どうやら、涼が不思議な能力を持っていると思つていた者が多かつた様だ。

「けど、俺が皆に無い能力ちからを持っているのは確かだ。それはここに居る義勇兵や後ろで聴いている人達、そしてここに居る劉玄德達は勿論、この世界の誰も持つていない能力だ。」

能力と言ってはいるものの、ファンタジーによくある魔法の様な不思議な能力じゃない。

天界 - つまり現代の知識や道具を使えるに過ぎない。

だが、そんな事ですらこの世界の人々は驚いてしまう。それは以前、桃香達に携帯電話や携帯ゲームを操作してみせた時に実感していた。

だから、涼にとっては当たり前前の事でも、この世界の人々にとっては不思議な事なのだ。

「俺はその能力を皆の為に使う。そして、より効果的にする為には皆の協力が必要なんです。」

そこ迄言つと、ふうと息を吐き呼吸を整える。

「皆さん、どうか俺達に力を貸して下さい！ そして、先程劉玄德も言った様に、いつか必ず平和を取り戻し、俺達と共にこの街に戻りましょう！！」

涼は拳を握り締めながらそう言った。

そして暫くの沈黙の後、桃香の時よりも大きな歓声が辺りを包んだ。

その歓声が、涼達に対する期待の表れだというのは解る。

だが、自分の言葉に何故こんな風に反応してくれたのか、涼自身はよく解っていないかった。

力強くは無く、頼りにもならない言葉だったんじゃないかと思っていたのに。

それなのに、目の前では皆が手を天に突き上げて涼達の名を叫び、絶叫にも似た歓声があがっている。

涼にとってその光景は、まったく現実感がない光景に感じていた。

「それだけ、皆が世の中を憂いているという訳ですよ。」

隣に立つ愛紗が、前を見据えたまま呟く様に話し掛ける。

「苦しいからこそ、自分達を助けてくれる人を求めているのです。」

「俺は……俺達は、彼等の期待に応えられるのかな。」

「何を今更言うのですか。」

名前を呼ばれた愛紗は義勇兵達に手を振りながら、視線だけを涼に向けて話す。

「たった今、御主人様は皆に約束したのですよ。“皆で平和を取り戻してここに帰ってこよう”と。」

「……そうだったな。」

前から考えていた言葉ではない。直前に桃香が言っていたから、心に残っていたのかも知れない。

「ただ、言ったのは間違いなく清宮涼本人であり、それは変えようのない事実だ。」

「だったら、自分の言葉に責任を持たないといけない。」

「少なくとも、精一杯頑張って結果を出せる様にしないと駄目だ。」

「……愛紗、これから宜しくな。」

「それこそ今更ですよ、義兄上。」

愛紗は微笑みながらそう答える。

その笑顔に思わず赤面してしまう涼。

「普段の凜とした表情も可愛いのだから、笑顔も可愛いのは当然ではある。」

「多分、普通の感性を持つ男性なら皆、この笑顔にクラッとくるだ。」

ろう。

……いや、下手をしたら女性もクラツとくるかも知れない。

「そ、それもそうだな、愛紗。」

平静を装いつつ、前を向いて義勇兵達の声援に応える涼。

顔が紅くなっているのを自覚しつつ、何とか気付かれない様にしていく。

幸いにも、愛紗には気付かれずに済んだらしく、その場はそれで終わった。

只一人だけ、そんな涼の様子に気付いていた人物は居たのだが。それから涼達は義勇兵達を各部隊に振り分けた。

因みに部隊は涼や桃香達を守る部隊、愛紗が率いる部隊、鈴々が率いる部隊、雪里が率いる部隊、の四つだ。

振り分けが終わると、涼達と一部の義勇兵達は馬に乗って行進を始めた。それ以外の義勇兵達は、勿論徒歩での行進となる。

本当は全員分の馬を用意したかったのだが、葉達のサービスを含めても流石に全員分の馬を調達する事は出来なかった。

馬を用意するだけなら何とかなるが、馬の飼料代とかを考えると予算を大きくオーバーしてしまうのだ。

生き物を飼うって結構大変なんだよね、これが。

そうして隊列を成した涼達は今、街の大通りを通り街の外に向かっていた。

隊列の先頭には、異なる旗を持った二人の男性 - つまり旗手が並んで歩いている。

旗の一つは緑と白を基調とし、中央の丸の中には黒い筆文字で「劉」の一字。

もう一つの旗は青と白を基調とし、中央の丸の中に黒い筆文字で「清」の一字が入っている。

どちらもこの数日の間に作った旗の一つ。因みにこの二つは大将

旗なので、普通の旗より一回り大きく作られている。

その後ろには三列になって進む歩兵が居て、少し後ろに涼と桃香が馬に乗って並んで進んでいた。

「玄德ちゃん、しつかりねー。」

「あ、有難うございまーす。」

「御遣い様、どうかこの国をお願いします。」

「はい、任せて下さい。」

道行くすがら、集まった人々から声を掛けられる一同。

その声一つ一つに、丁寧に応えていく涼達。

そうしてゆつくりと行進する隊列の真ん中に、愛紗と鈴々が馬に乗って進んでいる。

愛紗は姿勢を正しくして真っ直ぐ前を見ている。

だが、鈴々はキョロキョロと辺りを見回していて落ち着きが無い。その様子に気付いた愛紗が声を掛けた。

「どうした、鈴々？」

「な、なんでも無いのだっ。」

鈴々はそう答えるも、やはり周りをキョロキョロし続ける。

「寂しいのか？」

「そ、そんな事無いのだっ。……ただ……。」

「ただ？」

「おばちゃんと離れ離れになるのが、ちょっと嫌なのだ。」

そう言つと、鈴々はあからさまに表情を暗くした。

幼い頃に両親を亡くしている鈴々にとって、おばちゃん・桃香の母は母親代わりだ。

そんな大切な人と離れるのだから、寂しくない訳がない。

「大丈夫だ、私達が功を上げれば呼び寄せられる事も出来る。直ぐに会えるさ。」

「……うんっ。」

愛紗が言った一言で鈴々は少しだけ元気になる。

功を上げる事が簡単じゃないのは鈴々も解っているが、それでも元気になる理由には充分だった。

だから、潤んだ瞳を腕で拭って前を見る。

情けない姿を見せたら、心配させてしまうから。

それだけは絶対にしなくなかった。

そんな二人の少し後ろには雪里が、その後ろには葉と景が並んで馬に乗って進んでいる。

また、その少し後ろには、「関」「張」「徐」の旗を持った騎手が並んで進んでいる。

因みに「張」は張飛 - 鈴々の旗で、張世平の旗ではない。

張世平 - 葉と蘇双 - 景は戦いに参加しないので旗は作っていないのだ。

それから三列に並んで歩いている歩兵が続き、最後尾を騎兵が二列になって進んでいく。

百名程の義勇兵達だが、皆が武装し行進している姿はそれなりに迫力がある。

だからだろうか、街の人達の声援は止む事が無い。

そんな声援を受けながら、涼と桃香は街と外を区別する門を潜る。

桃香はその瞬間、何気なく振り返った。

それは、暫く離れる事になるから最後に一目だけでも、と思って振り返っただけだった。

けど、桃香は振り返って良かったと思った。

桃香の視線の先に、よく見知った姿があったからだ。

その姿は、大通りに集まった人達の中にあつたのではない。近くに在る丘にあつた。

勿論、遠くてハッキリと見える訳じゃない。

だが、そこに居るのは一人の大人の女性で、何より髪型、服装、佇まい。そのどれもがあの人と同じだった。

(お母さん……っ！)

思わず泣きそうになつたが、何とか堪えた。

鈴々と同じで、情けない姿は見せたくないから。

例え、遠くて涙が見えなくても、泣く訳にはいかなかった。

「桃香、大丈夫か？」

桃香の異変に気付いた涼が声を掛ける。

それに対し、桃香は零れかけた涙を手で拭って答えた。

「……大丈夫だよ。覚悟はしていたし、それにこれが今生の別れて訳じゃ無いんだから。」

そう言うと、表情を引き締めて前を見据える。

涼はそんな桃香を見て、それ以上何も言わなかった。

下手に言つても逆効果になるし、何より掛ける言葉が思い付かない。  
い。

涼自身も親と離れているし、自由に帰る事が出来ない状況だから。

(……俺はいつ帰れるんだろう？ この大陸が平和になったら帰れるのか？ けど、だったら……。)

一体何年掛かるんだろう、と不安になる涼。

この世界が「三国志」や「三国志演義」を基にした世界なら、大

陸が平和になる迄何十年も掛かるんじゃないだろうか。

「三国志」や「三国志演義」に詳しい涼は、そんな事を考える。

（ま、深く考えても仕方ないか。なる様になるさ。）

そう思い直し、涼は馬を進める。

これが、長く厳しい旅の始まりだった。



#### 第四章 黄巾党征伐・前編（前書き）

黄巾党は、元は単なる農民達。

気高い志を持って立ち上がった筈の人々。

それがいつの間、単なる賊に成り下がったのか。

それは最早、黄巾党すら解っていないのだろう。

2009年12月7日更新開始。

2010年1月10日最終更新。

#### 第四章 黄巾党征伐・前編

涼達が旅立つて一ヶ月が経った。

その間に何度か黄巾党と戦い、全てに勝利している。

雪里が得た情報が正確だったので、当初の目的通りに小規模の所から攻めたのが要因の一つだ。

とは言え、黄巾党の根城をどんどん潰しているのは事実なので、その噂は瞬く間に広まっていった。

すると、義勇兵の志願者や資金・兵糧等の援助者が次々と現れ、義勇軍はその規模をどんどん大きくしていった。

初めは百名程だった義勇軍も、今では三千近い人数を誇る大部隊に成長している。

それだけ規模が大きくなると色々と問題も起きるが、そうした事には愛紗と雪里が対応していった。

愛紗は真面目で何より強いので、軍の空気を引き締めるのに一役買っている。

雪里はその頭脳で臨機応変に対応し、規則を守らない者には厳しい罰を与えた。

その為、今義勇軍に居る兵達は心身共にかなり鍛えられた者ばかり。

単に徒党を組んで辺りを荒らすしか能のない黄巾党が、今の義勇軍に勝てる筈もなく、今では「劉備・清宮軍」の名前を聞いただけで震え上がり、まるで蜘蛛の子を散らすかの様に逃げていくのだった。

そして今日も、涼達は黄巾党を倒す為に出陣し、目的の場所に向かっていった。

「すっかり大軍になったなあ。」

後ろに続く軍勢を見ながら、涼は呟いた。

「本当ですよ。一ヶ月前とは比べ物にならない人数ですよ。」

その呟きに、隣に居た桃香が応える。

「これも御主人様や桃香様の人徳のお陰でしょう。」

「お兄ちゃんもお姉ちゃんも、すっかり人気者になったのだっ。」

二人の後ろに続く愛紗と鈴々も続いて話に参加する。

「ですが、これでは未だ未だです。何れは何万何十万といった大軍を率いてもらわないと。」

そんな風に厳しい声を出しながら、雪里も会話に参加した。

「何十万で……。今は三千弱の軍を率いるだけで精一杯なのに、無茶言っなよ。」

「勿論、今直ぐという訳では有りません。ですが、気構えくらいは持ってもらわないと困ると言っているのです。」

「うう……雪里ちゃん、相変わらず厳しいよう。」

更に厳しい口調で喋る雪里に、涼と桃香はタジタジになっていく。

「そりゃ、この“劉備・清宮軍”を率いる一人として、それなりの自覚は有るさ。けど、戦い始めて一ヶ月くらいじゃそんな気構えは持てないよ。」

「まったく……。」

涼の答えに雪里は呆れつつも、それ以上は何も言わなかった。

雪里が話し終わったのを確認してから、再び桃香が涼に話し掛け

る。

「ねえ、涼兄さん。私達義勇軍の名前、変えちゃダメ？」

「その話は散々しただろ？ だからダメ。」

「えー。」

提案を即座に却下され、頬を膨らませる桃香。

それでも負けずに言葉を繋いでいく。

「だけど、私なんかより涼兄さんの名前だけの方がしっくりくると  
思うんだけどなあ。」

「そうかな？ 俺としては“劉備軍”だけの方が良いと思うんだけ  
ど。」

「それはダメですっ！」「」

涼の言葉に桃香と愛紗が同時に反対する。

「お兄ちゃんの名前は無いといけないと思うのだ。」「我が軍は、  
清宮殿と桃香様の二枚看板で成り立っているのですよ。それをお忘  
れにならないで下さい。」

更に鈴々と雪里も、二人と同じく反対の言葉を続ける。

涼は皆の言葉を苦笑しながら聞いてから、口を開いた。

「解ってるって。だから折衷案として“劉備・清宮軍”って名前に  
したんじゃないか。」

「だったら、せめて“清宮・劉備軍”に……。」

「ダメ、これ以上は譲歩しないって何度も言っただろ？」

「それはそうだけど……雪里ちゃんっ。」

反論に困った桃香は雪里に助けを求める。

「桃香様、時には諦める事も必要かと。」

「そんなーっ。」

雪里にあっさり断られ、桃香は悲しい表情になって声を上げた。冷たい様に感じるが、あっさり断ったのには理由が有る。

実は義勇軍の挙兵以来、既にこの会話は何回も繰り返されている。挙兵後、軍の正式な名前を決める事になったのだが、その時に「清宮軍」にするか「劉備軍」にするかでちよつと揉めた。

桃香や愛紗は「清宮軍」にする拘ったが、逆に涼は「劉備軍」にする拘った。

雪里は両者の言い分を公平に聞き、鈴々はよく解らなかつたのでどつちにもつかなかつた。

そんな感じで收拾がつきそうになかつたので、涼は二人の名前を入れた「劉備・清宮軍」という名称を提案した。

すると桃香と愛紗は「清宮・劉備軍」という案を出したが、「劉備・清宮軍」じゃないと自分の名前を入れるのは反対と言つたので、仕方なく涼の案を受け入れたという経緯が有る。

だが、やっぱり涼を立てたい桃香や愛紗は、それから何度も変更を申し出たが、今みたいに簡単にあしらわれている。

多分、未だ暫くは続くのだろう。

「ほら、早く行くよ。」

涼は苦笑しながら、皆に先を急ぐ様促した。

「ところでお兄ちゃん、鈴々達はこれからどこに行くんだっけ？」

鈴々の何気ない一言に、涼達は馬上でずっこけた。

「鈴々ちゃん、何処に行くか知らないで進んでいたのっ!？」

「そうなのだった。」  
「威張るなっ。」

元気良く答える鈴々に、桃香と愛紗は呆れてしまった。  
同様に呆れつつも、雪里は簡潔に説明した。

「これから行くのは、広宗（山東省）で黄巾党と戦っている官軍の董卓將軍の陣営です。」  
「官軍……なら苦戦しているだろうな。」

雪里の説明を聞いた愛紗が重い口調でそう呟く。  
この時代の官軍は墮落した漢王朝に仕えている為、殆どが戦える實力を持ってない上に覇気も無い。  
そんな人間ばかりだから、殆どが農民の黄巾党にさえ勝てない部隊が多いのだ。

（董卓……か。三国志でも演義でも物凄い悪役だけど、この世界でもやっぱり悪役なのかな。）

雪里達の会話を聞いていた涼は、董卓について考え始めた。  
董卓と言えば三国志は勿論、歴史上でも有数の悪役として知られている。

十常侍抹殺による混乱の後、帝を勝手に替え、暴政を強く等して大陸中を大混乱に陥れたという。

その暴政は、董卓が暗殺される迄長く続いた。  
そんな人物の救援をしなければならないのは、涼としても不本意なのだが、今の董卓は未だ一武將であり黄巾党と戦う官軍なので、彼等が苦戦していると知った以上、行かなくてはならなかった。

（あと、多分……いや、絶対女の子なんだろうな。それでいて悪役

なら、性格が悪いとか太つてるとか、そんな感じなんだろうか。)

この世界の董卓について色々想像してみたが、ゲームや演劇に出てくる董卓を女にしただけの醜い姿しか思い付かなかった。

(……やーめた。想像したって何の得にもならないしな。)

想像するのを止めた涼は、少し行軍速度を上げる様に指示し、目的地へと急いだ。

数刻後、董卓軍陣営に着いた涼達は、董卓に会う為に本陣に向かって歩いていった。

「……怪我人が多いな。」

「それだけ苦戦しているという事でしょう。」

その途中、陣内のあちらこちらに包帯を巻いた兵達の姿を見掛けた。

腕や足は言うに及ばず、頭や体にも巻いている兵が多く居る。

「覇気は勿論、数でも黄巾党が圧倒していますからね。こうなってしまうのは必然かと。」

目線だけを左右に動かして状況を確認しながら、雪里がそう分析する。

桃香も周りを見ながら暫く考え、そして雪里に尋ねる。

「ねえ雪里ちゃん、董卓さんが今相手にしてるのって、黄巾党の主力部隊なんだっけ?」

「ええ。農民が中心の黄巾党ですが、戦いを重ねる内に実力をつける者も多数居ます。そうした者を集めた部隊が、この辺りにも現れ

た様です。」

「厄介極まりないな。」

雪里の説明を聞いた涼がそう呟く。

今迄も何度か黄巾党と戦ってきたが、一人一人はそれ程強くない。だが、如何せん数が多いので正面から戦うと被害が大きい。

なので、いつも雪里の策を用いて被害を最小限に抑えてきた。

その黄巾党の中でも、腕に覚えのある者ばかりが集まっている部隊が、今回の敵なのだ。厄介極まりないという言葉は、決して過言では無いだろう。

「雪里、何か良い策は思い付いたか？」

「幾つかは。ですが、先ずは董卓將軍に会わなければ策を弄す事も出来ません。」

「そりゃそうだ。」

今度の敵の数は、涼達だけで戦って勝てる人数じゃない。

涼達よりも遥かに多い人数の董卓軍ですら、この有り様なのだから。

「じゃあ、先ずは董卓さんを捜さないと。どこかなー？」

そう言っつて桃香は辺りを見回した。

だが、その動きは直ぐに止まった。

「……桃香？」

その事に気付いた涼が声を掛けるも、返事は無い。よく見ると、桃香の視線は一点に集中していた。

その表情も、いつも以上に明るくなっている。



かと思うと、桃香は視線の先へと向かって突然走り出した。

「ちよつ、桃香!？」

涼は驚きつつも後を追った。愛紗と雪里もそれに続く。

涼達は、桃香が走り出した理由が解らなかった。

だが、自軍の陣内でないここで何かあったらいけない。

だから必死に追い掛けた。

だが桃香は止まらず、尚も走り続ける。

そして、

「先生っ!」

そう叫んで、一人の妙齢の女性の前で止まった。

先生と呼ばれた女性は、何事かという表情で振り返ったが、桃香の姿を見るとその表情を明るくして近付いた。

「貴女はもしや玄德! 劉玄德ではありませんか?」

「はい! 御久し振りです、先生!」

そう会話を交わすと、二人とも笑顔を浮かべながら手を握る。

愛紗と雪里は、桃香と話している女性は誰かと思いつながら見ていたが、涼だけはその正体に気付いていた。

(この時期に桃香が先生と呼ぶ人物って事は、恐らく……てか、やっぱり女性なんだな。)

涼がそう思っている間も、桃香は先生と呼んだ女性と親しげに話している。

まあ、話している相手が桃香の先生なら、親しいのは当たり前ではあるが。

「こうして会うのは三年振りですね、玄德。息災そうでは何よりです。」  
「先生こそ、お元気そうで嬉しいです。」

桃香は女性との話に夢中で、涼達に気付いていない様だ。

「貴女が天の御遣いと共に義勇軍を旗揚げし、活躍している事は聞いていましたよ。」

「いえ、私なんて未だ未だで……。皆が居なかつたら、義勇軍を旗揚げする事は出来ませんでした。」

そう言った所で漸く涼達に気付いたらしく、慌てて涼達の自己紹介を始めた。

「先生、この方がその天の御遣いの清宮涼さん。そして、その左隣に居る黒髪の女の子が武将の関雲長ちゃん、右隣に居る銀髪の女の子が軍師の徐元直ちゃんです。」

桃香の紹介を受けて、涼達は丁寧に挨拶を交わす。

その挨拶が終わると、今度は盧植が柔らかい物腰で自己紹介を始めた。

「皆さん初めまして。私は、かつて劉玄徳の先生をしていた盧植と申します。」

その名前を聞いた愛紗は、盧植を単なる桃香の師として認識したが、対照的に雪里はかなり驚いていた。

「貴女があの高名な盧植先生ですか。是非一度お目にかかりたいと思っていました。」

そう言った雪里は口調こそ常の冷静さを保っているものの、その瞳は眩しい程キラキラと輝いており、まるで憧れの人に会ったかのような様子だ。

いや、普段クールな雪里がこんな反応を示しているのだから、本当にそうなのかも知れない。

そんな雪里を盧植は真っ直ぐ見つめ、微笑みながら言った。

「有難うございます。でも、私はしがない儒学者ですよ。」

それが謙遜して言っている事は、雪里の反応を見る迄もなく解る。涼に至っては、「三国志」の知識を知っているのだから、盧植がしがない儒学者だけでない事くらい解っていた。

「そして、政治家であり將軍でもある、でしょ？」

そんな中、涼達の前方から女の子の声が聞こえ、そう言葉を紡いだ。

涼達はその声の主を注視し、盧植は振り返ってやはり微笑みながら声の主に応える。

「私にとって、それ等は副業でしかありませんよ、賈馱。」

賈馱と呼ばれた少女は、やれやれといった表情を浮かべながら更に言葉を紡ぐ。

「それだけ才能が有るのに、政治家や將軍が副業とはね。天も時々気紛れが過ぎるわ。」

そう言うと、賈馱は視線を涼達に向けた。

「で、貴方達は？」

「この方達は劉備・清宮軍の劉玄德と清宮涼さん、関雲長さんに徐元直さんですよ。」

賈馱の質問に涼達が答える前に、盧植が答えてくれた。

「最近噂に聞く、あの義勇軍の？ ふーん……。」

賈馱はそう言って、涼達を値踏みする様に見つめる。

女の子に見つめられて、ちよつと恥ずかしくなる涼だったが、それでも賈馱を観察する事は出来た。

賈馱は、緑色の長い髪を細い三つ編みにし、その上には黒を基調とした四角い帽子を被っている。帽子の前両端には糸を束ねた様な装飾があり、それはブーツにも施されていた。

金色に光る大きな瞳は鋭く、紅色フレームの上部分の縁が無い眼鏡をかけていた。

白を基調とした服の袖口は黒く、その両端に白いラインが入っている。また、胸元には紅いリボンが付いていた。

肩には、黒いケープみたいな羽織を身に着けていて、端は波の様な形の白い模様になっている。

指の部分が無いタイプの黒い手袋を填めていて、細い指先が露わになっている。

黒が好きなのか、プリーツスカートもタイツもブーツも黒を基調としていた。

身長は小さいが、鈴々よりは大きい。

(同じ小さいでも、かなりの差が有るもんだな。)

そう思いながら、一瞬だけその部分を見る。

小さい外見ながら、その体が女性だと如実に示す部分 - つまり胸は意外と大きい。

少なくとも、鈴々よりは遥かに大きかった。

(ここに鈴々が居なくて良かったよ。あれで結構コンプレックスみたいだし。)

因みにその鈴々は、部隊と共に留守番をしていて、何故かこの時クシャミをしていた。

「……ボクの顔に何か付いてる？」

ジツと見過ぎていたのだろうか、賈馭は涼を睨み付ける様に見ながらそう尋ねる。

余りに強く睨んでいたので、近くに居る桃香が竦み上がってしまったくらいだ。

だが、涼はそんな賈馭にたじろぎもせず、微笑みながら答える。

「綺麗な眼が二つに、鼻と口が一つずつ。あ、細い眉毛も二つ有るね。」

「……誉めてるのがケンカ売ってるのか、どっちかしら？」

賈馭は顔を赤らめつつも機嫌を悪くするという、器用な表情をしながら言った。

「ケンカは売ってないよ。ちょっとした冗談さ。」

「良い性格してるわね。」

「そりゃどうも。」

「言っとくけど、誉めてないわよ。」

賈馭はさっきより機嫌を悪くしながらそう言った。

「ゴメンゴメン、機嫌を直してよ。」

そう言って微笑みながら賈馱の頭を撫でる。  
途端に賈馱の顔が紅く染まった。

「な、何やってんのよアンタっ！」

「何って、機嫌を直してもらおうと思っ……。」

「だからって人の頭を撫でるんじゃないっ！」

顔を紅くしたまま、涼の手を振り払う賈馱。

そんな賈馱の様子を、涼は頭に疑問符を浮かべながら見つめていた。

（変だなあ、桃香はこうすると機嫌が直るんだけど。）

涼はそんな風に思いながら、疑問符を更に増やしていった。

皆がそれで機嫌が直る訳では無いという事を、誰かが涼に教えた方が良さそうだ。

「……御主人様、遊んでいる暇は有りませんよ。」

愛紗が、凜とした常の声をいつも以上に低くして涼に話し掛ける。  
涼は反射的に体を硬直させながら、首を何度も縦に振っていた。

「わ、解ってるってっ。えっと……ここの指揮官に会いたいんだけど、何処に居るのか教えてくれるかな？」

「……ここの指揮官は董卓將軍よ。……こっちへ。」

未だ少し朱に染まっている顔を若干伏せながら涼達に背を向けると、賈馱はスタスタと歩き出す。

涼達は慌ててそれについて行った。

それから数分後、涼達は一際大きな天幕へと辿り着いていた。  
因みに、盧植もついて来ていて、さつきから何故か微笑みながら涼達を見ている。

「この中に董卓將軍がいらっしやるわ。……くれぐれも、失礼の無い様にしなさいよ。」

「解ってる。」

賈馱の忠告を涼はしっかりと受け止める。

何せ相手はあの董卓だ。今は未だ官軍の將軍とはいえ、どんな性格か解ったもんじゃない。

下手に怒らせたら命が幾つ有っても足りないだろう。

「それじゃあ……失礼します。」

賈馱が天幕に入ると、涼達も後に続いた。

天幕の中には数人の兵士が左右に均等に配置されていて、中央の椅子に座っている人物の警護は万全の様だ。

涼は椅子に座っている人物に目を向け、そして驚いた。

そこに座っているのは、やはり女性だった。それも、かなり若い。ひよっとしたら涼と同じ位か年下かも知れない。

それだけでも充分驚きなのだが、もっとも驚いたのはその容姿だ。背は賈馱より小さく、肌は透き通る様に白い。

緩やかなウェーブ状の薄銀色の髪は肩迄伸び、ふんわりとしている。

そして何より、紫色の大きな瞳はとても澄んでいて、見る者を穏やかな気持ちにさせてくれた。

(この子が董卓……？ 本当に……！？)

余りにも想像と違っていたので、別人じゃないかと思ったが、天

幕の中には他にそれらしい格好をした者は居なかった。

目の前に居る少女は、黒と薄紫を基調とした宮廷装束に身を包み、帯は花魁の様な大きい紫色のリボン状になっていた。

ファアの様にもこもことした物を肩から掛けて腕に巻いており、優雅かつ華麗な姿に拍車がかかっている。

紫色のスカートは地面に着く程長く、どんな靴を履いているか判らない。

黒と白を基調とした四角い帽子の左右には、鍰が付いていて、その先には小さな宝石が幾つか連なって吊り下げられていた。

額には紅い水滴状の宝石が付いた飾りを巻いていて、帽子から降りている蝶々結びの細く紅いリボンと長いベールが表情を隠し、神秘的な印象すら感じさせる。

(こんな格好の子が一般兵な訳は無いし、ならやっぱりこの子が董卓なのか?)

そう結論付けようとするも、やはりイメージとかけ離れている為か、中々判断出来ない。

だが、まるでそんな涼に答えを突きつけるかの様に目の前の少女が立ち上がり、言葉を紡いだ。

「……皆さん初めまして。私が、この部隊の指揮官である董卓です。」

目の前の少女自身がそう言ったので、涼は認めざるを得なかった。だがそれでも、涼は中々言葉を紡ぐ事が出来なかった。

けどそれも、仕方が無い事だろう。

現実世界に伝わる董卓は、悪逆非道の限りを尽くした人間で、ゲームや演劇等では、太っていたり醜い容姿をしていたりする。

そんな董卓が、この世界では虫も殺せない様な可愛い女の子なのだから、余りの落差に思考が停止したりもするだろう。



「あの……?」

董卓はそんな涼の様子に気付いたらしく、怪訝な表情をしながら尋ねた。

すると涼は、董卓を見ながら呟いた。

「可愛い……。」

「へうっ!？」

「なあっ!？」

「あらあら」

「涼兄さん!？」

「御主人様っ!？」

「やれやれ……。」

董卓を見た涼が感想を正直に口にしたら、その場に居た武将や軍師達が三者三様の反応を見せた。

賈馱は暫く口をパクパクさせてから、董卓に駆け寄って涼から離す様に立ち、桃香は何度も涼の名前を呼びながらその体を揺さぶり、愛紗は笑顔のまま青龍偃月刀を持つ手に力を込め、雪里は呆れながらその光景を眺め、盧植は温かい眼差しで涼達を見守り、そして董卓は頬に手を当て、白い肌を朱に染めていた。「えっと……皆どうしたの?」

周りが急に騒がしくなったので呆気にとられていた涼が、皆を見回しながらそう尋ねた。

すると、賈馱が顔を真っ赤にして怒りながら迫っていった。

「“どうしたの?”じゃないわよっ! ボクの前で月を誑かそうなんて良い度胸してるわね!!」

「誑かすなんて人間きが悪いな。俺は思った事をそのまま言っただけで、別にそんなつもりじゃあ……。」  
「それが誑かしてるって言うのよ!!」

そう怒鳴ると、賈馱は董卓の許に戻ってその手を取り、涼から更に距離をとる様に動いていった。

納得いかない表情の涼は、不満を露わにしながら反論する。

「えー。だって可愛い子に“可愛い”って言っただけじゃんか。」  
「月が可愛いのは当たり前よっ!」

さつきより大きな声で怒鳴ると、賈馱は董卓を椅子に座らせ、まるで守る様に董卓の前に立った。

そんな賈馱を苦笑しながら観察しつつ、涼は賈馱が言った「月」という言葉について考えていた。

(賈馱がさつきから言ってる“ゆえ”って、多分董卓の真名の事だよな。外見だけでなく真名迄可憐とは、尚更可愛いな。)

そんな風に考えていたので、涼の顔は自然と綻んでいた。  
だからだろうか、涼は後ろに居る二人の只ならぬ気配に、全く気付いていなかった。

「……御主人様。」  
「涼兄さん……。」

一つは常より低く、一つは悲しみを含んだ口調で涼に話し掛ける。  
その瞬間になって、涼は漸く事態を把握した。  
すると、涼の体中から突然冷たい汗が大量に流れ始めた。

「な、何かな？」

平静を装いながら、ゆっくりと振り返る。

「会ったばかりの女性を口説くとは、随分と余裕が出て来た様ですね？」

「……涼兄さんって、意外と女好きですよね。」

そこに居たのは満面の笑みを浮かべる愛紗と、困った顔の桃香だった。

「え、えーっ！？ いや、それは物凄い誤解で……っ。」

「だまらっしやい！！」

否定して弁解しようとした涼だが、愛紗の一喝に遮られてしまう。

「これから黄巾党と戦うという大事な時に、女性を口説くとは言語道断！ 今日という今日は許しませんよっ！！」

「だから口説いていないって！ 只、感想を口にしたただけだしっ！

！」

「問答無用っ！！」

愛紗は青龍偃月刀を思いっきり振り上げる。

涼は既視感を感じたが、それ以上考える事は無かった。

涼がどうなったかは、言う迄も無い。

「それでは、現状についての確認から始めましょうか。」

あれから暫くして、涼達は軍議を始めていた。

涼は何故か体中を痛がっているが、それについては誰も気にしない様になっている。

よっぽど恐い物でも見たのだろうか。  
何はともあれ、軍議は進んでいた。

「ボク達董卓軍には、現在五万の兵が居るわ。もっとも、そこから傷兵を差し引くと……動かせる兵の数は四万三千といった所かしら。」

「傷兵が七千もですか。」

「これでも少ない方よ。近くで戦っている皇甫嵩將軍や朱儁將軍の部隊は、これより多い傷兵を抱えている様だから。」

「私の部隊も、董卓將軍の部隊と同じ位の傷兵を抱えているわ。」

賈馱や盧植の説明を聞きながら、雪里は頭を捻っていた。

そんな雪里の様子を見ながら、桃香が尋ねる。

「そう言えば、敵将は誰なんですか？」

「張角の妹の張宝よ。」

「ほう、地公將軍自ら出陣ですか。これはまた大物が出て来たものですね。」

（張宝が妹って事は、張角も女性なのかな？）

敵将が黄巾党の中核である張宝と知って苦い顔をする雪里と、またも女性になってしている事に少しだけ驚いた涼。

事柄は同じでも、考える事は違う二人だった。

そんな二人とは別に、桃香達もそれぞれ対策を考える。だが中々妙案は浮かばず、出るのは溜息ばかりだった。

「主力とは聞いていたが、よりもよって張宝自らが率いているとはな……。」

「今迄にない苦戦になるのは必至でしょう。ですが……。」

「ここで勝てれば黄巾党に大打撃を与える事が出来る、か……。」

そんな中、愛紗と雪里、そして涼が感想を述べ、何とか場の空気を換えようとする。

すると賈馱が、はあ、と溜息をつきながら口を開いた。

「確かにそうだけど、そう簡単にはいかないわよ。」

「だよなあ……。そっぴや、敵の数はどのくらいなんだ？」

涼が尋ねると、賈馱は表情を更に暗くし、言葉を絞り出す様に言った。

「……およそ二十五万。」

「に、二十五万!？」

こっちの兵数を遥かに超える大軍に、涼は勿論桃香達全員が大きく驚いた。

「勿論、この全てが相手では無いわ。現在、皇甫嵩將軍の部隊と朱儁將軍の部隊がそれぞれ四万ずつ、盧植將軍の部隊が二万を相手にしているから、ボク達の相手は残りの十五万。」

「それでも軽く三倍以上じゃなか。」

数が十萬少なくなっても、圧倒的不利な状況には変わらなかつた。董卓軍が四萬三千。そこに涼達義勇軍三千が加わっても総数は四萬六千で、十五萬の黄巾党とは十萬四千もの大差がついている。

兵法では、相手より多くの兵を揃える事が勝つ為の大前提だ。

残念ながら、今の涼達はその前提通りの状況を作り出せていなかった。

「け、けど、それだけの大軍を相手に、今迄持ちこたえていられる

なんて凄いですね。」

桃香が場の空気を変えようとしてそう言うと、賈駆は冷静に分析して説明した。

「まあね。どうやら、敵は主力とは言っても兵法に通じている者はそう居ないみたい。只数に任せて闇雲に押し寄せてくるだけだから、策を用いれば結構何とかなるのよ。」

「けど、兵力差が明らかなら、怖じ気付いて逃げだす兵も多いんじゃないのか？」

「……死んだ兵の殆どは、そうして逃げだした時に後ろからやられるわ。だから、逃げても死ぬだけだから最後迄諦めずに戦えて命令はしてるけど……。」

そう言うと、賈駆は今迄以上に表情を暗くしてしまった。

「当たり前だけど、それでも戦死者は出るわ。……軍師だから解ってはいるけど、そんな命令を出すしかないのって結構辛いよ……。」

「詠ちゃん……。」

董卓は心配そうな表情をしながら、賈駆を「詠ちゃん」と呼んだ。恐らく、「詠」とは賈駆の真名なのだろう。

「……なら、次の戦いでは賈駆殿はお休みになられていたら良いかと思います。」

「えっ？」

突然の提案に驚いた賈駆は、思わず間の抜けた声を出しながら声の主の方を見る。

そこには、静かにお茶を飲んでいる雪里が居た。

「……ボクに休んでろって、どういう事かしら？」  
「軍師たる者、時には非情な策も講じなければなりません。勿論、それに伴う心の痛みに耐えながら、ね。」

そう言つと再びお茶を飲み始める。

「ボクだってそんなの解ってるし、ちゃんとやってるわ。」  
「ですが、辛いのでしょうか？ ならば、後の事は同じ軍師である私に任せ、お休みになられた方が宜しいかと思つた迄です。」

言い終わると湯飲みを置き、賈馱に視線を向ける。

一方の賈馱も負けずに、視線を雪里に向けたままだ。

「徐元直、アンタは随分と自信がある様ね。」  
「当然です。軍師が自信を無くしては、主君に勝利を捧げる事等出来ませんからね。」

何だか、段々と互いの言葉に棘が出てきている。  
そんな二人を、涼も董卓もヒヤヒヤしながら見ていた。  
「え、詠ちゃん、徐庶さんは心配してくれてるんだよ。」  
「うんうん、そうそうっ。」

董卓も涼も焦りながら賈馱を宥め、また涼は目線を雪里に向けて注意をする。

雪里は軽く息を吐いてから頷き、賈馱は暫く雪里を睨みつけてからやはり息を吐いた。

「まあ良いわ。ボクも、噂に聞く義勇軍の軍師がどんな実力の持ち主か気になるしね。」

賈馱はそう言つと椅子に腰を降ろし、お茶に口を付ける。  
その様子を暫く見てから、雪里は淡々と言葉を紡いだ。

「御期待に沿える様、頑張りますよ。」

瞬間、「別に期待してないわよ。」と言いたげな表情を見せた賈馱だが、董卓が相変わらず困っていたからか何も言わなかった。  
それから、改めて黄巾党について話し合った。

涼達が戦う十五万の黄巾党だが、その全てを張宝が率いている訳では無い。

馬元義に丁峰、程遠志に鎧茂といった者が前線で各部隊を率い、それ等を張宝が纏めているという事らしい。

「ならば、各個撃破していつて数を減らしましょう。」  
「簡単に言つね。」

雪里の提案に、涼は少し呆れながらツツコミをいれた。

「数で押すしか能が無い相手等、策を使えば簡単に倒せますよ。」  
「それは遠回しにボクを馬鹿にしてるのかしら？」

賈馱が眉をピクピクさせながら、棘を含んだ言葉で尋ねる。

その瞬間、再び場の空気が悪くなる。

「そんなつもりはありませんが、そう聞こえましたか？」  
「聞こえなくはなかったわね。」

そう言つて賈馱が雪里を睨むと、雪里もまた賈馱に視線を向ける。  
マンガだと、視線と視線がぶつかり合い、バチバチと火花が散っ



ているといった、そんな感じだろう。

「……雪里。」

「解っています。」

「詠ちゃん……。」

「月え、そんな顔しないでよう……。」

涼と董卓が静かに注意すると、それぞれ素直に従った。

それから更に作戦の細部を話し合おうとした時、天幕の入り口から声が聞こえた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、大変なのだ！」

「鈴々!？」

「一体どうしたの!？」

少し慌てながら天幕に入ってきたのは、今や義勇軍の将になった鈴々。

そんな鈴々に、「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と呼ばれた涼と桃香が駆け寄る。

その途中、鈴々は蛇矛を担ぎながら、真剣な表情で言った。

「黄巾党が攻めてきたのだっ！」

「なっ!？」

「黄巾党が!？」

鈴々の言葉に天幕に居た全員が驚いた。

「敵の数は!？」

賈馱が鈴々に近付きながら尋ねる。

鈴々は一瞬答えて良いのか解らなかったが、涼と桃香が頷いてい

るのを確認すると、将らしく引き締まった表情で答えた。

「敵の数は約八万らしいのだ。」

「八万……ボク達が戦う相手の約半数か。」

「旗には何と書いてありましたか？」

鈴々の報告を受けた賈馱が考え込み始めると、雪里が椅子に座ったまま尋ねた。

「えっと……確か“馬”と“丁”だったのだ。」

「ならば、相手は馬元義と丁峰ですね。他の旗は有りませんでしたか？」

「無かったのだ。」

「成程。……清宮殿、桃香様、急いで迎撃しましょう。」

鈴々からの報告を聞いた雪里は暫く考えた後、二人を見ながらそう進言する。

勿論、それ自体に異論は無いのだが、何しろ戦力差が有り過ぎる。迎撃に出るだけでは勝つのは難しいだろう。

「どうする気なんだ？」

「簡単です。この辺りは平地で、地形を使った策は余り使えません。ですから、方形陣で一撃を防いだ後、中央を後退させて相手を引き寄せて挟撃、しかる後に後退した部隊も反転攻勢に出るのです。」

「基本だけ良い策ね。けど、それだけで敵を殲滅出来るかしら？」

雪里が提案した策を聞いていた賈馱が疑問を投げかける。

すると雪里は、賈馱に向き直りながら冷静に答えた。

「今回の戦で殲滅させるのは難しいでしょうね。ですが、持ちこたえる事は出来るでしょう？」

「当然よ。」

「ならば問題無いわ。今回は防戦にまわり、次の戦いで馬元義と丁峰の部隊を殲滅します。」

雪里がそう宣言すると、愛紗と鈴々は頷き、部隊を指揮する為に天幕を出て行った。

それを見届けると、今度は涼と桃香に向き直って言葉を紡いだ。

「清宮殿、桃香様、お二人の指揮にも期待していますよ。」

「解った。」

「任せといて。」

そう言っただけで涼と桃香も天幕を出て行く。

残った雪里は、董卓と賈馱に向かって言葉を投げ掛ける。

「それではお二人共。先程話した通り、私が部隊の総指揮をしても宜しいですね？」

「はい………お願いします。」

「大言壮語じゃないと良いけどね。」

董卓と賈馱がそれぞれ答えると、雪里は帽子を被り直しながら宣言した。

「まあ、見ていて下さい。今回と次の戦いで馬元義と丁峰を討ちとれるでしょうから。」

雪里はそう言っただけで天幕を出て行く。

その後の姿は、自信に満ち溢れていた。

結果、その日は無事黄巾党を追い払う事に成功した。

勿論犠牲もそれなりに出たが、それ以上に黄巾党に与えた損害は

大きかった。

「こちらの戦死者が約七百、負傷者が約九百。対する黄巾党は戦死者が約三万八千、投降者が約七千ですか。」

「実質的に、今回襲ってきた敵の半数以上を倒したと言う事だな。」

再び董卓の天幕に集まった涼達は、先程終わった戦いについての報告を兼ねた軍議を行っていた。

「黄巾党なんて大した事無いのだ。あのままなら一気に倒せた筈なのだった。」

「無茶を言うな鈴々。全ての兵がお前の様に戦える訳では無いのだぞ。」

血気盛んな鈴々を愛紗が窘める。

鈴々は頬を膨らませて不満を露わにするが、桃香が宥めると少しだけ機嫌を直した様だ。

雪里はそんな三人を微笑ましく思いつつも、それを表情に出さず軍議を続けた。

「義勇軍も董卓軍も精鋭揃いなだけあって、こちらの被害はかなり少なくて済みました。これなら、無事に次の戦いに臨めます。」

「けど、具体的にどう戦うの？ 雪里ちゃんの事だから、策も無しに只突撃！っ、て事はしないんでしょ？」

「当たり前です。策を用いない軍師等軍師ではありませんからね。」  
雪里が桃香に向かってそう言うと、台に広げられている地図を指差しながら、説明を始めた。

「恐らく、敵は今回の敗戦を受けて後方に居る味方に救援を頼むでしょう。ですが、後方部隊には守るべき張宝が居ますから、援軍は

余り送れない筈です。」

「そりゃあ、幾ら敵を倒しても自軍の大將が討ちとられては意味が無いからね。」

雪里の説明を聞きながら、賈馱が呟く様に言葉を紡ぐ。

「ええ。ですが仮に張宝自らが全軍を率いて合流した場合、敵の総数は約十万。対してこちらは約四万四千、投降してきた黄巾党を自軍に加えたとしても約五万で、依然として数的不利な状況には変わりありません。」

「そんな相手に正面からぶつかるのは愚策中の愚策。なら、当然何か策を練る必要が有るけど……一体、どうする気なんだ？」

涼が尋ねると、雪里は帽子の鏢を摘みながら言った。

「それは考えていますが……董卓殿、暫く天幕から離れても宜しいですか？」

「えっ？ ……は、はい、良いですよ。」

突然の申し出に董卓は戸惑いつつも了承する。

「有難うございます。では清宮殿、桃香様、お手数ですが御同行願えますか？」

「ん？ ああ。」

「良いよ。」

董卓同様、突然話を振られた二人は少し戸惑いながらも了承し、揃って天幕を出た。

賈馱は何か言いたそうだったが、董卓が了承した以上異議を唱える訳にもいかず、只三人を見送るしかなかった。

「……それで、鈴々達は何をすれば良いのだ？」

「……取り敢えず、御主人様達が戻られるのを待つとしよう。」

残された愛紗と鈴々は、やはり戸惑いながらも着席し、少し冷えたお茶を口にする。

そんな二人の呟きは、陣地を歩く雪里達には当然聞こえる筈は無かった。

それから数分後、涼達は陣地の外れ迄来ていた。

「なあ、何処迄行くんだ？ このままじゃ陣地を出るぞ。」

「そのつもりですから問題ありません。」

「そのつもりって……何をするの？」

雪里の後に行く涼と桃香は、相変わらず戸惑いながら尋ねる。

だが雪里は曖昧な答えを返すに止まり、スタスタと歩き続けた。た。

そうして遂に陣地を出たが、それでも雪里は足を止めなかった。

「雪里、本当に何処迄行くんだ？ このままじゃ陣地から離れ過ぎるぞ。」

「……もう直ぐです。」

涼の更なる問いかけにも一言で返した雪里が漸く足を止めたのは、先程の戦った場所が見渡せる小さな丘だった。

「着きました。」

「……此処が何なんだ？」

先程迄居た戦地を一望出来る場所で立ち止まった雪里に、怪訝な表情の涼が尋ねた。

何故なら、目の前に広がる平原には沢山の死体が未だに残ってい

るからだ。

大敗した黄巾党の兵士は勿論、勝利した劉備・清宮・董卓連合軍の兵士の死体も未だ野晒しになっている。

また、折れた剣や矢がそこかしこに散らばり、血溜まりが地面に染み込んでいた。

「……………」

それは涼も桃香も既に見慣れた光景だが、未だ直視出来ないらしく無意識に目を逸らす。

雪里もそれに気付いているが、特に注意はせず、右手を前に伸ばして話を続けた。

「我が軍と黄巾党の進路を予測した結果、この先が次の戦場になると予想されます。」

「まあ、そうだろうな。」

雪里が指差す方向には、先程の戦場とは違って、一面に腰の高さ迄伸びた長い草が覆い茂っており、その先に黄巾党の物と思われる天幕が幾つか点在していた。

「この地形を見て、何か思いませんか？」

「えっ？ うーん……………」

雪里に尋ねられた涼と桃香は、目の前に広がる風景を見る。

雪里が何を言いたいのか解らない涼と桃香は、随分と長い間思案顔のままだった。

「…………… あっ、解ったあっ！」

まるで叫ぶ様に言いながら、笑顔のまま右手を高々と挙げたのは

桃香だった。

「おや、清宮殿が先に気付くかと思いましたが、桃香様が先に気付かれるとは意外ですね。」

「……雪里ちゃん、何気に酷い事言っね。」

齒に衣着せぬ物言いの雪里に向かって、桃香は頬を膨らませながら落ち込んだ。何とも器用な事をやるものだ。

「これは失礼しました。それで、桃香様は何が解ったのですか？」

「この地形と黄巾党が居る場所。そこから一つの策が導き出せたんだよ。」

「……ああ、そっか！」

桃香がそう言うと、涼は合点がいった表情を浮かべながら声をあげた。

「ほう、清宮殿もお気づきになられましたか。」

「まあね。」

「それが桃香と同じかは解らないけどね。」と、付け加えながら涼は桃香を見る。

それが何を意味するのか、桃香と雪里には解らなかったが、余り深く考えずに話を続けた。

「それでは桃香様、その策について御説明下さい。」

「うん、あのね……。」

雪里に促された桃香は、慣れない口調と身振り手振りで、必死に説明をしていた。



「……という策なんだけど、どうかな？」

説明を終えた桃香は不安な表情で雪里を見る。

一方の雪里は暫く黙考した後、笑みを浮かべて桃香を見据えた。

「お見事です、桃香様。それは私が考えていた策と殆ど同じ策ですよ。」

「ホント!？」

雪里に誉められた桃香は、満面の笑みを浮かべて両手を合わせた。一応、これでも義勇軍の指揮官の一人である。

「因みに清宮殿は、どのような策を考えていましたか？」

クスクスと笑いながら雪里は涼に尋ねる。

話を振られた涼は、暫く考えてから口を開いた。

「そうだな……大体は桃香と同じだけど、他には……。」

涼はそう言っつて桃香の策に付け加えた。

「流石です、清宮殿。先程の桃香様の策と合わせれば、私が考えていた策と全く同じになります。」

「そうか。」

雪里の言葉を聞いた涼は、笑みを浮かべつつも冷静に接していた。「三国志」や「三国志演義」を知っている涼にとって、黄巾党の乱における劉備達の戦い方は一通り理解しているからだ。

「なら、決行は今夜か？」

「ええ。ですから兵の皆さんには今の内に休んで貰いましょう。」

雪里はそう言うと踵を返し、本陣へと戻っていく。

勿論、涼と桃香もその後が続いていった。

丁度その頃、涼達が居た場所から少し離れた場所に、新しく陣を張っている部隊があった。

この部隊は、劉備・清宮軍では勿論無いし、また董卓軍でも無い。更に、盧植軍でも無ければ皇甫嵩軍や朱儁軍でも無いし、ましてや黄巾党でも無かった。

「様、部隊の確認は全て終わりました。いつでも出撃可能です。」

「……そう。」

その陣内で、フードを被った少女が、金色の巻き髪を左右に分けている少女に報告すると、金髪の少女は彼方を見つめたまま応えた。

「どうかされましたか？」

「私が何を考えているか、貴女なら解るでしょう？」

金髪の少女はそう言うと、ゆっくりとフードの少女に向き直りながら、妖しい笑みを浮かべる。

笑みを向けられたフードの少女は、何故か顔を紅らめながら答えた。

「……はっ。我が軍は精鋭揃いながら、人数では圧倒的に不利。賊が相手なので普通に戦っても勝利は確実ですが、この戦いは如何に兵を損じる事無く勝つかが重要かと。」

「その通りよ。こんな所で苦戦する様では、霸道を歩む事等出来はしないわ。」

フードの少女と自分の考えが同じだと確認した金髪の少女は、遙か彼方を見つめながらそう言葉を紡いだ。

そんな金髪の少女を、フードの少女は相変わらず顔を紅らめながら見つめ、やがて表情を正しながら口を開いた。

「先程戻った物見によりますと、数刻前に劉備・清宮軍と董卓軍が共闘し、黄巾党の馬元義と丁峰が率いる部隊を敗走させたとの事です。」

「劉備に清宮に董卓？ どれも知らない武将ね。」

金髪の少女がそう言うと、フードの少女が説明を始めた。

「劉備と清宮は共に琢県楼桑村から、董卓は涼州から出てきた武将です。劉備と清宮は未だ義勇軍の将でしかありませんが、董卓は漢王朝の信頼を得る程の急成長を見せている様です。」

「私とした事が知らなかったわ。……それで、その者達は強いのかしら？」

金髪の少女は自分の不勉強を嘆きながら、直ぐ様情報収集を始める。

「全て伝え聞いた事でしかありませんが……董卓には賈馱という軍師が居り、その実力は大陸中の軍師の中でもかなりのものと。董卓の急成長には、賈馱の活躍があったのは間違いありません。」

「成程。では、劉備や清宮はどうなの？」

「劉備と清宮は旗揚げから共に戦っていて、義勇軍ながら優秀な武将と軍師が居るらしく、幽州各地で数々の武功を挙げている様です。」

説明を聞いていた金髪の少女は、義勇軍の活躍に興味を持ったら

しく、急に目の色が変わった。

「義勇軍にそれ程の者が居るの？」

「はっ。名前は未だ知られていませんが、何れも腕の立つ武将と頭の切れる軍師の様です。」

始めは半信半疑だった金髪の少女も、フードの少女の説明を聞く内にその表情が変わっていった。

そして暫く考えた後、おもむろに口を開いた。

「その者達、欲しいわね……。」

「ええっ!？」

金髪の少女の一言に、フードの少女は大袈裟過ぎる程に驚いた。

そんな少女に対して、金髪の少女は笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「何を驚いているの？ 優秀な将や軍師を欲しがるのは当然じゃない。」

「そ、それはそうですが……。」

「まあ、それは黄巾党を殲滅してからの話ね。……全軍に通達。我が軍は劉備・清宮・董卓軍の動きに合わせて進軍する！」

「は……はっ！」

金髪の少女の命を受けたフードの少女は、恭しく一礼してから、命令を伝える為にその場を離れた。

その後、金髪の少女は空を見上げて微笑んだ。一体、何を思っているのだろう。

そんな少女の側で翻る牙門旗には、「曹」の一字が大きく記されていたのだった。

それから数刻後。

太陽はとうの昔に地に沈み、世界には夜の帳が降りていた。

この日の夜空は一面を雲が覆っていて、月の光は地上に届いていない。

その為、辺りは漆黒の闇に包まれており、黄巾党の天幕の周りに立てられた篝火による明かりだけが、この闇夜に浮かんでいた。

見張りに立っている黄巾党の男達は、余程眠いのか先程から欠伸を繰り返している。

だがそれも無理は無い。現在の時刻は、現代でも未だ草木も眠る丑三つ時と呼ばれる深夜。つまり、午前三時半なのだから。

この場に居る黄巾党は四万弱。その九割九分が既に眠りについており、残りの一分が見張りについていた。

更にその一分の八割が睡魔に襲われている中で、異変は起こった。

「な、何だあれは!？」

黄巾党の見張りの一人が、とある方向を指差しながら叫んだ。

その指の先には、漆黒の闇に浮かぶ幾つもの鬼火。その数は百や千では追いつかず、万を軽く超えていた。

「何なんだよ、あの鬼火は……!! ま、まさか……!!！」

「か、官軍の総攻撃だあつ!!！」

鬼火を見ていた見張りの一人がそう叫ぶと、黄巾党の男達は味方を起こしに走ったり武器を手にとったりと、右往左往していった。

深夜に奇襲を受けた黄巾党は、次第に混乱の度合いを深めていった。

そこへ、更なる混乱の火種が文字通り飛んできた。

漆黒の闇夜を切り裂く様に放物線を描き、それは黄巾党の陣内に雨の様に降り注ぐ。

そして、動きが止まると同時に草や天幕を燃やし始め、瞬く間に一面を火の海に変える。

起きたばかりで満足に動けない黄巾党は、何が起きたのか理解する間も無く炎に包まれていく。

「う、うわあああつ!!」

「熱い、熱いいいっ!!」

「た、助けてくれえええっ!!」

轟々と燃える炎の音と、助けを求めて叫ぶ黄巾党の声が辺りに響く。

だが、彼等を助ける者は誰一人として居らず、その殆どが炎の中に消えていった。

辛うじて後方に脱出した者も居たが、その数は微々たるもの。

また、混乱して方向を間違えたのか、後方以外の方向に逃げた者も居たが、その者達には沢山の矢と剣と槍が襲いかかった。

命辛々逃げてきた黄巾党だったが、逃げ出すのに体力を使い果たした者が多く、武器も持たないで逃げてきた者も数多く居たので、誰もその攻撃を防ぐ事が出来なかったのだ。

結局、炎や攻撃によって死んだ黄巾党の数は三万人を遥かに超えていた。

それから更に数刻の時が流れた。

燃やす物が無くなった炎は次第に勢いを弱め、やがて鎮火した。

草木は燃え尽き、天幕は焼け落ち、数刻前迄黄巾党だった者は黒焦げになって固まっていた。

「うっ……!!」

涼は思わず手で鼻と口を塞いだ。

馬に乗ってその場に近付くにつれて、草木が燃えた臭いと、肉が

焼けた臭いが風に乗って漂ってきたからだ。

「酷い臭いだ……。出来れば、二度と嗅ぎたくは無いな。」

「そう願いたいのだ……。」

涼と同じく馬に乗って近付いた愛紗と鈴々も、手で鼻と口を塞ぐ。

「ですが、火計は見ての通り、使い様によっては非常に有効な策です。戦場に身を置く限り、いつかはまた経験するでしょう。」

「そうね。……まあ、この臭いが生理的に嫌なのはボクも同意見だけど。」

やはり馬に乗って近付いてきた雪里と賈馱も、同様に鼻と口を塞いでいた。

「……へっっ！」

「……きゃあっ！」

董卓と桃香も馬に乗って近付き、やはり鼻と口を塞いでいたのだが、そこかしこに転がっている黄巾党の焼死体が目に入る度に、小さく悲鳴をあげていた。

慌てて目を逸らす、その先にも焼死体が有るので、悲鳴は中々止まなかった。

何とか臭いや光景に慣れてきた涼達は、兵を動員して黄巾党の生き残りの搜索や、この先に居る筈の張宝の動きの監視、そして黄巾党及び連合軍の戦死者の弔いをそれぞれ行った。

「それにしても、こんなに上手くいくとはな……。」「

埋葬される黄巾党の遺体に手を合わせながら、涼はそう呟いた。心なしか、その表情には陰りがある。

「大勝の直後にその表情……もしかそれは、罪悪感ですか？」

涼の右隣に立って同じ様に手を合わせながら、雪里が尋ねる。

「そりゃあ……幾ら敵でも、こんな光景を見ちゃったらな……。……悪いか？」

「いえ。……寧ろ、その罪悪感を持ち続けた方が良かった。」

「……どういう事だ？」

疑問に思った涼が尋ねると、雪里は背を向けて話し始めた。

「……間接的には言え、清宮殿が沢山の人間を殺した事に変わりはありません。」

「……ああ。」

「ですが、清宮殿は今、戦場に身を置いています。その様な状況で、戦う度に罪悪感に囚われていては、何れ心を壊してしまうでしょう。」

「つまり、割り切れ……って事だよな。」

「そうです。」

弱々しく呟いた涼に対して、雪里は冷たく、そしてハッキリと言いつ切った。

今更ながら、涼は自分の決意が甘く弱い事を痛感していた。

平和な現代の日本で生まれ育ったのだから、戦いに対する考え方は比較的普通なのだが、この世界で生きて行くには普通ではいけない。

解っているのに、解りたくなかった。



それは、未だ自らの手を血で染めていない事からも、充分過ぎる程に表れている。

「ですが……時々は割り切らなくても良いと、私は思います。」  
「えっ……？」

驚いた涼が顔を上げると、背を向けていた筈の雪里はこちらを向いて微笑んでいた。

「割り切る事は大切です。一軍の指揮官なら尚更に。ですが、余りにも割り切り過ぎると人間としての大切な物……“心”を何れ失ってしまうでしょう。」  
「心を失う……。」

雪里の言葉を涼が反芻すると、雪里は一度空を見上げ、言葉を紡いだ。

その内容は、独裁によって多くの民を犠牲にした始皇帝についてだった。

「……歴史上、この国を始めて統一した秦の始皇帝は、政に関してはとても優れた人物だったと伝えられています。ですが、優れ過ぎていた為か国の事ばかりを考え、民の事は蔑ろにしました。……結果、世は乱れ、劉邦や項羽といった英雄が世に出る事になったのです。」

「劉邦は解るけど、項羽も英雄と言って良いのか？」

雪里の言葉に違和感を感じた涼が、そう尋ねる。

「清宮殿は高祖・劉邦と項羽について御存知なので？」

「まあ、少しは。」

軽く驚いた表情をしながら雪里が聞き返すと、涼は平然と答えた。実は涼が子供の頃、三国志に関する書物を読み漁っていた際、項羽と劉邦に関して興味を持ち、そのまま読破したという経緯があったので、それなりに知識は有るのだ。

そんな事は当然知らない雪里は、多少疑いながらもそれ以上追及せず、項羽についての自らの考えを口にした。

「確かに、漢王朝の礎を築いた高祖・劉邦と、戦上手ながら傲慢で人心を得ようとしなかった項羽を較べては、同じ英雄という言葉を使って良いのか躊躇うのは解ります。ですが……。」

一旦言葉を区切ると、帽子を取って長い銀髪を風に靡かせながら、再び言葉を紡いだ。

「項羽も元は、暴政を強いた秦に抵抗していた武将であり、その強さは一騎当千、国土無双。歴史にもしもは有りませんが、もしも項羽が人心を得る術を持っていたら、漢王朝では無く楚王朝がこの国を治めていたでしょう。そうした事から、項羽も英雄だと評したのです。」 負ける事が多かった劉邦と、戦いの殆どを勝ってきた項羽。

戦いの実績では圧倒的に項羽が優れていたが、最終的に勝利したのは劉邦だった。

「始皇帝と項羽……共に類い希なる才を持ちながら、最も大切な“人心”を得なかつた為に破滅へと突き進んでしまった……。始皇帝は、折角統一した王朝の寿命を縮め、項羽は天下を統一出来る實力を持ちながらその機を得る事が出来なかつた。……ここ迄言えば、私が先程言った事の意味は解りますよね？」

帽子を両手で持ちながら、雪里は真つ直ぐに涼を見つめ、尋ねた。

「……普段は敵を殺した事を気に病まずにいても良いけど、それに慣れて人を殺す心の痛みを忘れてはいけない……。」

「……その通りです。」

涼の答えに満足したのか、雪里は微笑みながら帽子を被り直した。

「人を殺す事は、この戦乱の世で生き抜く為に必要な事です。ですが、だからといって人を殺す事に何の躊躇いも無くなってしまつては、その者は鬼畜にも劣る愚かな存在になり果てるでしょう。……私は、貴方や桃香様にそんな道を歩いてほしくありません。」

「……解つた。有難う、雪里。そうならない様に気を付けるよ。」

「頼みますね。」

涼と雪里は互いにその言葉を交わし、笑みを浮かべた。

その直後、一足早く陣営に戻つて軍議をしていた筈の桃香が、馬に乗つてやつてきた。

何故かその表情は少し慌てている様だ。

「どうした？」

疑問に思つた涼と雪里が駆け寄ると、桃香は下馬して報告を始めようとする。

だが桃香は息を切らしており、話し出す迄数十秒を要した。

「えつと……愛紗ちゃんと董卓さん達と軍議をしていたんだけど、急にお客さんがやつてきて……。」

「お客さん？」

自分の陣営に戻っていた盧植が来たのかと思った涼だが、それならば桃香がこんなに慌てる必要は無い。そう思うと一体何があったのか不安になる涼と雪里だったが、その不安が収まらない内にその声が耳に届いてきた。

「貴方がもう一人の指揮官？」

声のした方を見ると、見知らぬ二人の少女が馬に乗って近付いていた。

一人はフードを被った小さな少女、もう一人は今声を掛けてきた金髪の小さな少女だ。

「そうだけど……君は？」

「あら、失礼したわね。」

そう言う和金髪の少女は下馬し、フードの少女も倣って下馬した。

「私の名は曹孟徳、曹軍の指揮官よ。」

金髪の少女は堂々とそう名乗った。

その名前を聞いた涼は一瞬思考が停止したが、やがて思考が元に戻ると、驚きながら尋ねた。

「曹孟徳って……君がああの曹操なのか!？」

「えっ? ええ……そうだけど……。」

驚きながら尋ねた所為か、曹操は戸惑いながら答えた。

( 鈴々の時も驚いたけど、まさかあの曹操迄こんなに小さい女の子になってるとはね……。 )

曹操と名乗った金髪の少女は、涼より遙かに背が低く、鈴々よりは明らかに大きいという具合の背丈だった。

もっとも、三国志における曹操も比較的背は低かったという記述が有るのを涼は知っているので、何処かで納得していたりもする。

納得しながら、涼は曹操を見続けた。

髪型は、髑髏の髪飾りで左右に纏めた所謂ツインテールで、その金髪はクルクルとした巻き髪になっている。

碧い眼は大きく、強い意志が見てとれた。

ノースリーブの服は胸元が開いているが、胸は余り大きくない。それでも鈴々よりは大きい様だ。因みに配色は服の上部が白色、襟元と胸から下は黒色、白いフリルがついたミニスカートは薄紫色という感じ。

また、腹部には紫色の鎧、その下には鬼の顔の様な形の腰当てを付けている。

二の腕から伸びている袖には、やはり白いフリルがついている。袖の色は黒色で、二の腕には銀色の腕当てを付けていた。

足には白いオーバーニーソックスと黒いブーツ。太腿と足首には紫色と銀色で構成されている足当てを付けていた。

(小さい娘だけど、格好や雰囲気は確かに曹操らしいな。……しかし、髑髏ってまるっきり悪役じゃん。)

そう思いながら、「三国志演義」では劉備が正義で曹操が悪という構図になっていたの、有る意味納得していた。

そんな事を思っていると、フードの少女が突然、

「ちよつと 안타つ！ 義勇軍の大将如きが華琳様を呼び捨てにするなんて生意気よ！ それと、華琳様が美しいからってジロジロ見ないでよ、穢らわしいっ！！」

と、涼を物凄く罵倒をした。

涼は目を丸くしながら声の主に目を向ける。  
すると今度は、

「何よ、男如きがこつちを見ないでよ！ 妊娠しちゃうじゃない！」

「するかっ！！」

と、更に突拍子もない事を言ったので、涼は思わずツッコミをいれた。

一応説明するが、人間は見られただけで妊娠したりしない。

「お止めなさい、桂花。」

「ですが華琳様っ！」

「……桂花。」

「は……はい。」

曹操が窺めると、フードの少女は途端に大人しくなった。

まあ、曹操の部下が曹操の命令に逆らえる訳は無いので、当然ではある。

「失礼したわね。あの娘は優秀な軍師なのだけど、私の事になると少し冷静さを欠いてしまうのよ。」

(少し……か?)

戸惑いながらもその疑問は口にしなかった。

「まあ、確かにビックリしたけど、曹操に謝られたら気にしない事にするよ。」

「助かるわ。」

涼の言葉を受けた曹操は笑みを浮かべた。

一方、フードの少女は罵詈雑言こそしなくなったものの、さつきからジーツと涼を睨みつけていた。目を合わせたらどうなるか解らないと察した涼は、余り目を合わさない様にしながらその少女を観察した。何とも器用だ。

その少女は、肩に付かない長さの、ふんわりとした栗色の髪を、猫耳みたいな形の黄緑色のフードで隠している。

碧色の瞳は今鋭く光っているが、本来はもう少し穏やかなんだろう。多分。

首元には碧色の丸い宝石をあしらった黒いリボン。服はフードと同じ色で、袖にはやはり同色のフリル。

上着は薄紫のコートっぽい服。両方の二の腕辺りが楕円形に空いており、そこには黒い紐が×字状に結んである。その×字状の紐は上着を留める為にも使われているらしく、ボタンやチャック代わりにしている様だ。

ズボンとは所謂かばちゃパンツ……なのか？ 因みに色は黒色。

靴下は履いておらず、素足に栗色の靴を履いていた。

「えっと……ビックリして言い忘れたけど、改めて自己紹介するね。俺は清宮涼、一応この義勇軍の指揮官の一人だ。」

「そして、“天の御遣い”でもある、でしょ？」

曹操はニヤリとしながら涼の言葉に付け加えた。

「まあね。」

「……確かに服は見た事の無い生地を使っている様だし、雰囲気も違うけど、それだけでは信じられないわね。」

曹操は涼の全身を見回しながらそう言った。

涼の服装は明らかにこの世界には無い物だが、それだけなら外国の服と見る事も出来るだろう。

「まあ、そうだろうね。……そういや、君の名前は？」

涼はフードの少女を見ながら尋ねる。

やはりと言うか、フードの少女は不機嫌な表情をして口を開いた。

「……何でアンタなんか言わなきゃいけないのよ。」

「だって、名前解らないと呼べないから。さっき曹操が言った名前は真名だろうから言えないし。」

「残念。うっかり言えば遠慮無く殺せるのに。」

「怖い事を言うね。」

「神聖な真名を勝手に呼ばれたら相手を殺しても良いのだから、これくらい普通よ。」

「……ホント、凄い世界だな。」

そう呟きながら、この世界に来たばかりの頃を思い出した。

知らなかったとはいえ、張飛の真名を呼んだ為に、愛紗に青龍偃月刀を向けられた時は、正直生きた心地がしなかった。

それだけ、この世界では真名が大切な物だという事だ。

「仕方ない。教えてくれないのなら、君の名前を当てるとするか。」  
「えっ？」

涼の言葉に、フードの少女は小さく声をあげて驚いた。また、曹操や桃香、雪里も同様に驚いている。

「何人が候補は居るんだけど……多分、荀或かな？」  
「なっ!？」  
「……凄いわね、当たりよ。」

名前を当てられたフードの少女 - 荀或は目を見開いて驚き、曹操



も冷静な表情のまま驚きを口にした。

「そっか、君が荀或か。なら曹操が優秀だと評するのも解るよ。」

涼は納得しながら二人を見る。

相変わらず驚いているが、ピタリと当てた所為かその表情には不審の色が混じっていた。

「アンタ……一体何者？」

「何者つて……一応天の御遣いの清宮涼、それ以上でもそれ以下でも無いよ。」

睨みつけながら尋ねる荀或に対し、涼はどこかで聞いた事があるフレーズを、飄々とした口振りで言っただけに答える。

勿論それで納得はしなかったが、涼がそれ以上言いつつもりが無いと解ると追及しなかった。

「そっいや、曹操達がここに来たのは何か用が有るからじゃないのか？」

「え、ええ。すっかり忘れていたわ。」

涼の言葉で本来の目的を思い出したらしい曹操は、小さく咳払いをしてから本題に入った。

「今回の策、見事だったわ。数的不利のあの状況では、草が多いこの地形を利用した火計は最善策よ。この策を考えたのは誰かしら？」

「ああ、それは……。」

「劉玄德様と清宮涼様のお二人です。」

「「えっ!？」」曹操の質問に涼が答えようとする、その前に雪里が答えてしまった。

しかもその答えが涼や桃香とは違っていた為、二人は同時に驚き

ながら雪里を見た。

「雪里ちゃん、それは違うでしょっ。」

「違うと思いますか？」

「確かにあの策は俺達も考えたけど、雪里は既にその策を考えていただろ。」

「確かに私はそう言いました。ですが、その際に自らの口で策の詳細を言っていないので、やはりこれはお二人の策かと思っています。」

そう言って雪里は、帽子の唾を摘んで笑みを浮かべる。

それを見た涼は、何かに気付いたらしく雪里に近付いて尋ねた。

「……謀ったな、雪里？」

「何の事でしょうか？」

未だに笑みを浮かべたままの雪里に対し、涼は小声で言葉を繋いだ。

「俺達に策を考えさせる事で、俺と桃香の名声をより高めようって事だろ？」

「……御名答。」

「けどこれは、一つ間違えば指揮官か軍師のどちらか、もしくは双方の名が落ちる。違うか？」

「……違いますね。」

適切な策を思いつく指揮官は名が上がるが、指揮官に献策出来ない軍師は名が落ちる。

また、見る人間によつては同じ策を考えられる、優れた人物ばかりと評される可能性があるが、逆に、同じ策しか考えつかない平凡な人物ばかりだと評される危険性もある。

「それが解っていて何故……。」

「……時には賭けに出る事も必要だという事ですよ。」

そう言っつて帽子を被り直すと、雪里は曹操の前に出た。

「それで曹操殿は、策を考えた人物に何か訊きたい事があるのですか？」

そうして曹操と話し始めたので、涼はそれ以上何も言えなかった。

「ええ、誰がどういった策を考えたのか、とだけね。」

「成程。では桃香様、清宮様。折角ですから曹操殿に説明してさしあげましょうか。」

「あ、ああ。」

「う、うん……。」

結局、涼と桃香は最後迄雪里の勢いに押されたままだった。

その後、焼死体の臭いが残る場で話し続けるのはどうかという事もあつて、全員天幕に戻る事になった。

今は天幕への道すがら、各員馬に乗って移動している。

「……それで、それからどうなったのかしら？」

「えつと、確か……。」

先頭に行く涼と桃香に挟まれて進む曹操が、右隣を進む桃香に尋ねる。

それを受けた桃香は、昨日の会話を思い出しながら説明していった。

『黄巾党の数は私達より多いから、まともに攻めるよりは奇襲が』

番成功すると思うの。それも夜遅くにね。』  
『成程。ですが、それだけでは少し弱いですね。』

桃香の案に雪里は頷きながら、後一押しを催促した。

『うん。だから、千人くらいの兵隊さん達に、十把を一つにした松明を持たせて、その人達を先頭にして進軍するの。』

『ふむ……松明の火でこちらが大軍だと錯覚させる訳ですね?』

『そう。深夜なら判断力は鈍るだろうし、誰か一人でも誤認して騒いだら一気に大混乱になるかなあって。』

『恐らく……いえ、間違いなく大混乱に陥るでしょう。相手は只の賊の集まりでしかありませんから、一度混乱すれば收拾はつかないでしょうね。』

『良かったあ……。名付けて“夜叉行進の計”という策なんだけど、どうかな?』

そこ迄が、桃香が考えた策だった。

『ふむ……訓練を受けている部隊には通用しないでしょうけど、黄巾党相手ならそれで充分でしょうね。』

『あはは……手厳しいね。』

曹操の評価に桃香は苦笑いを浮かべるしかなかった。

『フフ……それで、次は貴方の番という訳ね。』

曹操は桃香のそんな表情を、微笑みながら見てから涼に向き直り、話の続きを促した。

『そうだな。確か……。』

そう言って涼は話し始めた。

『黄巾党が陣を張っている辺りには、長い草が深く覆い茂っている。これを利用するのが一番だ。』

『ふむ……では、具体的にはどの様にするのですか？』

『単純にあの草を燃やせば良いよ。草は枯れてはいないけど、この辺りは最近晴天に恵まれて乾燥している様だし、一ヶ所でも火が付けば一気に火が回るだろう。何なら、油が入った瓶を投げ込むのも良いかもな。』

涼の説明を聞いた雪里は暫くの間考えた。『火矢を使って草を燃やし、火の勢いが足りなければ油瓶を投げ込む。成程、悪くないですね。』

『その口振りからすると、未だ足した方が良いかな？』

『ええ、未だ足す余地は有りますよ。』

笑みを浮かべながら答える雪里と、それを受けて考え込む涼。

だが、考える時間は一分にも満たない程短かった。

『なら、桃香の策を実行する前に敵陣の両翼に部隊を展開しておく。』

『具体的には？』

『右翼には愛紗を、左翼には鈴々と雪里を配置して、火計から逃れ陣地から出て来た黄巾党を討ってもらおう。因みに俺と桃香は、松明隊とその後方に配置する部隊の指揮かな。』

『私を鈴々殿と同じ部隊に配置する理由は？』

『左右に展開する部隊は、敵に気取られない様に静かに速く移動しないといけない。愛紗は安心して任せられるけど、鈴々はあの性格上ちょっと心許ないし。』

『つまり私は、鈴々殿のお守りをすれば良いのですね？』  
『まあ、そんな所。』

涼は苦笑しながら頷いた。  
説明を聞き終えた雪里は暫く考え、やがて満足した様な笑みを浮かべて口を開く。

『流石です、清宮殿。先程の桃香様の策と合わせれば、私が考えていた策と全く同じになります。』

それが、昨日あの場所で話した内容だった。

「……って感じで策を考えて、陣地に戻ってからは攻撃部隊を弓兵中心にするとか、詳細を詰めていったんだ。」

「成程……ね。」

涼の説明を聞き終えた曹操は、暫く考えてから後方に居る軍師を見る。

但し見ていたのは荀或ではなく、雪里だった。

「中々優秀ね、貴方達は。」

「有難う。」

涼がそう言った所で、丁度本陣に着いた。

それから涼達は、今後についての軍議を開いた。

今回の奇襲で死んだ黄巾党の遺体を調べた結果、敵将らしき者は居なかったという。

つまり、あの陣地に居た敵将は逃げ失せたという事。涼達連合軍は四方中三方に陣取っていた為、逃げた先は残りの一方である後方、つまり張宝が居る本陣に逃げたと推測出来る。

張宝がどう出るかは解らないが、ここで逃がす訳にはいかない。

「私達曹軍も連合軍に参加するわ。」

曹操がそう言つと、涼達は驚きながらも歓迎した。

曹操軍が加わつた事で、連合軍の数は張宝率いる黄巾党と互角以上の数になった。

「次で、決めよう。」

涼が皆に向かってそう言つと、桃香達は勿論、董卓達や曹操達も頷き、軍議は終了した。

決戦は、近い。

## 第五章 黄巾党征伐・後編（前書き）

黄巾党の首領、天公將軍・張角には二人の妹が居る。

一人は地公將軍・張宝。

一人は人公將軍・張梁。

その内の一人である張宝が、まさに今、涼達率いる連合軍の前に立ちふさがろうとしていた。

数では両者共ほぼ互角。

激闘は避けられそうに無かった。

2010年1月10日更新開始。

2010年2月15日最終更新。



## 第五章 黄巾党征伐・後編

翌日、出陣の準備を終えた涼達連合軍は張宝率いる黄巾党の本陣が在る山へと向かった。

昨日の夕方迄に合流した曹操軍は約五千。更に兵を補充した盧植軍約一万も合流した為に、連合軍の総数は七万を超えている。

「月え、本当に総大将にならなくて良かったの？」

「うん……私は余り戦いに向いてないし、だったら清宮さんや曹操さんに任せた方が良くと思う……。」

「折角の名を上げる好機なのになあ……。」

その先頭集団の中程で並んで進む董卓と賈馱は、そんな会話をしていた。

昨日の軍議で、総大将を決める事になった。

最後に合流した盧植は早々と辞退したが、桃香達は涼を、荀或は曹操を、そして賈馱は董卓を推薦した。

「徐庶はボク達との約束を守れずに敵將を討てなかったんだから、ここは辞退しなさいよっ。」

「私の落ち度は清宮様の落ち度ではありません。混同されては困りますね。」

「あら、軍師の実力を見極められない指揮官なんて、無能では無いの？」

「確かに。……では、荀或殿の実力を見極められなければ、曹操殿も同じく無能という訳ですね。」

「な……な……何ですってーっ!!！」

こんな感じの口喧嘩が四半刻も続いた。

結局、仲違いを好まない董卓が辞退すると、次いで曹操も連合軍に参加したばかりと言う事で辞退し、残るは涼だけになった。

慌てた涼は桃香に替わって貰おうとしたが、当然ながら桃香が首を縦に振る筈は無く、そのまま涼が総大将の任に就く事になった。

「まあ……“天の御遣い”が総大将って事で、兵の士気はかなり高まっているけどね。」

賈馱は、連合軍の士気が今迄に無く高まっているのを感じながら、涼が総大将になったのも悪くは無いと思っていた。

一方、曹操と荀或、そして盧植は董卓達より少し先を進んでいた。

「……華琳様あゝ。」

「総大将の件ならさっき言った通りよ。」

「そんなあ……。」

荀或の言葉を曹操が切って捨てると、荀或は悲しげな声を出した。曹操が総大将を辞退した事は、荀或にとってかなりのショックだったらしく、それから何度も考え直す様に言ってきた。

だが、一度辞退したものをやっぱりやってみたい等とは、曹操が言う筈もない。

なので、曹操は荀或の話が総大将の件と解ると、今みたいに直ぐ話を終わらせている。

また、曹操が総大将を辞退したのは、連合軍に参加したばかりという理由以外にもあった。

(フフ……噂の“天の御遣い”の実力、見せて貰うわよ……。)

曹操は涼の実力を見る為に辞退していた様だ。

それが何を意味するかは、曹操以外誰も知らない。

「……という訳だから、ちゃんと涼の命令を聞くのよ。」  
「そ、そんなっ！ 華琳様あつ！」

荀或が涙を浮かべながら懇願するも、曹操はそれ以上何も言わなかった。

「華琳ちゃんは相変わらずね。」

そう言ったのは、少し前を進んでいた妙齢の女性だった。

「……ちゃん付けは止めて下さいと、以前にも申した筈ですよ、翡翠様。」

「あら、そうだったわね。ごめんなさい、華琳ちゃん。」  
「……はあ。」

言った側からちゃん付けされたので、曹操は溜息しか出なかった。

「ふふ……。それで、曹操さんはこれからどうするのかしら？」  
「どうするも何も、天の御遣いの采配通りに動くだけですよ、盧植様。」

曹操は前を向いたまま、翡翠・盧植の問いに答える。

曹操の視線の先には、部下である関羽達と共に進む天の御遣いの姿があった。

この世界には無い生地で作られている白い衣服に身を包み、背中に一つ、左腰に二つの剣を差している天の御遣い・清宮涼の姿が。「ふふ……華琳ちゃんが力になるのなら、清宮様も心強いでしょうね。」

「……翡翠様は、涼についてどう思っているのですか？」

「あら、もしかして清宮様は華琳ちゃんの好み？」

「違いますっ！ 私は只、翡翠様が天の御遣いをどう評価しているのか知りただけですっ！」

「あら、そうだったの。……ふふ。」

曹操はからかわれていると理解しながらも、必死になって反論した。

盧植はそんな曹操を見ながら、口元を袖で隠して笑みを浮かべる。

「そうね……。今は未だ経験に乏しく、護られるだけの存在。けど、少しは兵法に通じている様だし、これからの成長に期待出来る程の大きな可能性を秘めている、と、私は見ているわ。」

「……そうですか。」

曹操はやはりという様な表情をして呟いた。

盧植が自分と同じ様な評価をしているのを知って、嬉しくもあり複雑でもあった。

「涼は張宝を討てるでしょうか？」

「大丈夫でしょう。彼には優秀な仲間が居ますし、華琳ちゃんも居ますから。」

「あ、いえ、私が聞きたいのは……。」

曹操は一度口を閉じ、暫く迷ってから尋ね直した。

「涼が、その手で張宝を殺せるか、という事です。」

曹操達がそんな話をしている頃、先頭に行く涼と桃香は一言も口にせずに進んでいた。

「……清宮殿、気持ちは解りますが、もう少し落ち着かれては如何ですか？」

「そ、そんな事言ったって……。」

そう言った涼の声は少し震えていた。

馬上の涼は姿勢正しく座っており、真っ直ぐ前方を見つめている。一見とても落ち着いている様だが、実際はそうではなかった。

「俺なんか董卓達を差し置いて総大将になるなんて、やっぱり無理だよ。」

その声はとても弱々しく、とても総大将の言葉とは思えない。

それでいて体はガチガチで、緊張しまくっている。

「そ、そんな事無いよ。涼兄さんならちゃんと出来るからっ。」

その緊張が隣に行く桃香にも移ったのだろうか、何故か桃香の口調も若干震えている。

「やれやれ……。」

そんな二人を見ながら、雪里は小さく嘆息していた。

それから数刻後、連合軍は山の麓に到着した。

ここからは山を登る事になる為、連合軍は小休止をとる事にした。長い行軍から解放された兵士達は、思い思いの休息を取り始める。勿論、涼達は只休んでいる訳にはいかない。

小休止の時間を使って、張宝戦の軍議を開いた。

台の上に山の地図を開き、それを囲み見る様に涼達は立っている。

「この山には何万もの人間が通れる大きな道はここしか無く、ここを押さえておけば黄巾党を逃がす事は無いでしょう。」

「勿論、バラバラに動くなら逃げ道は幾つか有りますが。」

荀或と雪里が、張宝が陣取っているこの山について説明をする。

「なら、ここを死守しつつ張宝を討つという方針で行けば良いと思うけど……涼はどう思う?」

「りよ、涼っ!?!」

曹操が涼に尋ねると、突然桃香が驚きの声を上げた。

曹操は桃香が驚いた理由に心当たりが有るのか、口元を緩ませて桃香を見つめる。

「どうしたの、劉備?」

「な、何で曹操さんが涼兄さん呼び捨てにしてるんです!?!」

「涼だつて私を“曹操”と呼び捨てにしているわよ。なら、私が涼を呼び捨てにしても構わないでしょ?」

「そ、それは……兄さくんっ!?!」

言い返せなくて困った桃香は涼に助けを求める。

「まあ、別に良いんじゃないか?」

「兄さくんっ。」

涼は特に気にしていないのか平然と答え、桃香を尚更困らせただけだった。

また、荀或も似た様な理由で涼を睨んでいるのだが、涼は敢えてスルーしている。

「まあ、それは良いとして」

数名は「良くない!」という表情をしたが、やはりスルーした。

「俺達はこれから山を登る訳だけど、山を登りながら攻めるのは難しいんじゃないか？」

「その通りです。」

涼が疑問を投げ掛けると、雪里が肯定しながら簡単に説明を始めた。

「攻城戦において守る側が有利な様に、山攻めもまた上に居る側が有利です。」

「岩や大木を落としたり、矢を降らせたり出来るからな。」

「はい。」

涼の言葉を雪里は再び肯定する。

「それに、今回はもう一つ懸案事項が有るわ。」

そこに、賈馱が神妙な面持ちで口を開いた。

自然と皆が賈馱に注目する。

「懸案事項って？」

「張宝の妖術よ。」

「ようじゅつ？」

現実離れた単語に思わず聞き返す涼。

まあ、そんな事を言ったらこの世界や桃香達の存在もかなり現実離れしているのだが。

「張宝は妖術を使うのか？」

「らしいわよ。以前、朱儁將軍がこの先の“鉄門峽”を攻めた時、張宝の妖術で散々な目にあっただけから。」

「妖術ねえ……この世界って、妖術を使う人は多いのか？」

「多くは無いでしょうね。現に私も桂花も妖術を使えないしね。」

涼の問い掛けに曹操が答えると、董卓達も同様に答えていった。

「なら、その妖術が本物が判らないんじゃないか？」

「確かにそうだけど、妖術の被害にあつたって言われているのも本当だから、厄介なのよ。」

「厄介って？」

涼が尋ねると、賈馱の代わりに荀彧が答えた。

「妖術という常人には抗い難い現象で部隊が被害を受けると言われているのよ。そんな事を知ったら、幾ら兵士とはいえ普通は恐れ近付きたくないと思うでしょ。」

「ああ、成程な。」

未知の現象に対する畏怖はどんな時代の人間も持っている。特に、この世界の人間はそういった事により敏感に反応するだろう。

「恐怖を取り除く事が出来ればその問題は解決するけど……。」

「そう簡単にはいかないでしょうね。」

「だよなあ……。」

涼がそう呟くと、即座に曹操が否定の言葉を返したので涼は軽くうなだれた。

考えながら涼は鉄門峡の方向に目を向ける。

両崖はとても硬そうない岩で出来ていて、その傾斜はとても急だ。空はどんよりと曇っていて、今にも雨が降り出しそうな雰囲気だ。それ以上に何か出て来そうな感じもする。その所為だろうか、妖術が現実味を帯びていた。



「因みに、張宝がどんな妖術を使ったのかは判る？」

涼が尋ねると、賈馱は即座に答えた。

「話によると、物凄い逆風が吹いて前に進む事が出来なくなっていて、その後に矢や岩が色んな所から飛んで来たらしいわよ。」

「成程……。」

話を聞いた涼は考え込んだ。

賈馱の話は三国志演義でもあった話だから、対応策が無い訳では無い。

只、今の状況は涼が良く知る三国志演義と似て非なるもの。果たして同じ様にしても良いのだろうか。

そうして散々考えた結果、先ずは軍師達に尋ねる事にした。

幸い、今この場には徐庶、賈馱、荀或といった、三国志でも有数の名軍師達が居るのだ。頼らない手はない。

「取り敢えず、軍師達の意見を聞いてみたいんだけど、何か考えは有る？」

涼がそう尋ねると、軍師達は既に考えていたらしく順々に答えていった。

「妖術の真偽が判らない以上、只この場に留まるだけでは意味がありません。有る程度は危険を承知で前に進む事も必要かと。」

「ボクとしては、妖術云々は兎も角、何らかの罠が仕掛けられている危険性が高い以上、全軍をもって進むのは反対ね。物見を放つて様子を見るのが先決だと思っけど。」

雪里と賈馱はそれぞれ異なる見解を示した。

涼は雪里の考えに若干の違和感を感じたが、今は全員の意見を聞

くべきと判断し、気にしない事にした。

「荀或は何か無いの？」

三人の軍師の中で、未だ考えを言っていない荀或に尋ねる。

「何でアンタなんかの為に献策しなくちゃいけないのよ。」

「何でって……一応、俺はこの連合軍の総大将だし。」

喧嘩腰になつて睨む荀或に対し、涼は平然と答える。それが気に食わなかったのか、荀或は尚更強く睨んだ。

そんな風に荀或が睨んでいると、今度は愛紗と鈴々が荀或を睨み始めた。

桃香と董卓はオロオロしだし、賈馱は頭を押さえて溜息を吐き、盧植はそんな彼女達を静かに見守っている。

「桂花。」

「……解りましたあ。」

場の空気を読んだのか、曹操が静かかつ強い口調で荀或を諭す。

曹操に睨まれた荀或は、肩を落としながら渋々涼に考えを述べ始めた。

「戦いにおいて、情報は必要不可欠。先程賈馱殿も仰られた様に、先ずは物見を放つて敵の様子を探り、それから行動に移した方が被害も少なくて宜しいかと。」

「つまり、進軍が一人、様子見が二人か。」

結局、涼は賈馱と荀或の提案を採用した。

物見を放つて二刻後、無事物見が帰ってきた。

大軍が通れる道は一つしか無いが、一人二人が通れる道は他にも在る。また、道無き道も、物見なら通る事は不可能ではなかったのだ。

「物見の報告によると、鉄門峽には落石の罾や弓兵隊が配置されている様です。」

「また、その先には張宝らしき女性の指揮官が居たとの報告も有ったわ。」

「そっか……。」

再び軍議が開かれ、雪里と賈馱が物見から受けた情報を皆に報告する。

敵の罾の確認が出来たのは良いが、張宝らしき人物がその先に居る事も判明した為、これからの行動が難しくなった。

「敵の罾を凌いで張宝を討つ……って、言うのは簡単だけど、実際はそう簡単にはいかないよなあ。」

「でしょうね。こちらの数が圧倒的なら力押しも不可能では無いけど、現在の戦力差はほぼ互角……。」

「この状況で戦えば、例え勝っても甚大な被害は免れないでしょうね。」

涼の言葉に、曹操と盧植がそれぞれの考えを述べる。

現状では、被害を覚悟して前進するのは下策でしかないが、このままでは進展は無い。

「どこかに道が在れば、この問題は解決するんだけど……。」

涼は溜息をつきながらそう呟いた。

「道が無いなら造れば良いのだっ。」

そんな時、鈴々の元気な声が涼達の耳に届いた。  
一同が鈴々に注目する中、涼が尋ねる。

「道を作るって、具体的にはどうするんだ？」

「そんなの簡単なのだ。あそこを登れば良いのだっ。」

元気にそう言いながら鈴々が指差したのは、右後方に聳える断崖絶壁だった。

「まさかあの崖を登ると言っの？」

荀或が驚きながら尋ねると、鈴々は笑顔で肯定した。

驚いたのは荀或だけではない。曹操も盧植も董卓も、その場に居る殆どの者が驚いていた。

「これだから義勇軍の武将は……。いい？ あんな崖を何万人もの兵が登れるのなら苦労はしないし、もし登れるのなら張宝だってあそこに兵を配置して守っているわ。けどあの崖を登るのは不可能だし、それが解っているから張宝も兵を配置していないのよ。」

「けど、登れそうな所から登っても意味が無いのだ。だからもし、鈴々達があな崖を登って攻めたら、きっと黄巾党は慌てると思うのだ。」

荀或の反論にたじろぎもせず、鈴々は逆に反論していく。

その言葉には説得力があったのか、荀或も多少慌てるが、負けずに崖を登る危険性の高さ成功率の低さを論じていった。

そんな論戦が暫く続いていると、おもむろに涼が口を開いた。

「……確かに無理かもな。」

その言葉で鈴々の表情は曇り、荀或は複雑な笑みを浮かべる。納得がいかないのか、鈴々は涼の許に駆け寄った。

「お兄ちゃんもあの崖を登るのは無理だっと思って思うの？」

さつき迄の元気が嘘の様に、鈴々の声は弱々しかった。

涼は鈴々を真っ直ぐ見ながら言った。

「ああ。……全員はな。」

その言葉に鈴々は勿論、曹操達も疑問符を浮かべた表情になった。

「どづいつ事？ ……まさか！？」

荀或は涼に尋ね、そして理解した。

「アンタまさか、少人数なら可能だと言っんじゃないでしょうね  
！？」

「残念ながら、そのまさかだよ。」

荀或にそう答えると、涼は皆を見回してから言葉を紡いだ。

「全員が崖を登る事は出来なくても、少人数……少なくとも五百人が登れたら、奇襲は成功する筈だ。」

「馬鹿言わないでっ！ あんな断崖絶壁、幾ら少人数で良いといつても不可能よ！ こんな危険な事に華琳様の兵を使わせられないわ  
！！」

「解ってる。だからこの策は義勇軍の兵だけでやるよ。その間、曹操達にはここで敵の注意を引きつけておいてほしいんだ。」

涼は、あくまで反対する荀或に冷静に対応し、曹操達に指示を出していく。

尚も反対しようとする荀或だったが、そこに涼が言葉を繋いで遮った。

「それに、俺の世界じゃ、ああいった崖を登るスポーツがある。」

「すばーっ?」

「えっと……運動競技って言えば良いかな? まあ兎に角、遊びで登る人も居るって事。それも、あれより大きな崖をね。」

その言葉に全員驚き戸惑ったが、同時に、策が成功するのではという思いも出始めていた。

「……解ったわ。なら、詳細を詰めていきましょう。」

「か、華琳様っ!?!」

曹操もその一人だったらしく、その表情は自信に満ち溢れている。勿論、荀或は慌てて曹操に考え直す様に言ったが、結局曹操が考えを変える事は無かった。

その後、盧植や董卓も涼の考えに賛同したので、崖を登る人員は直ぐに決まった。

大半は涼達義勇兵で占められたが、曹操軍、董卓軍、盧植軍からも数名から数十名が選ばれた。

義勇兵が中心という事もあって、奇襲部隊の指揮官には愛紗、鈴々に決まった。

そこで終わりかと思われたが、二人の言葉で軍議は更に長引く事になる。

「言い忘れたけど、俺も行くよ。」

「も、勿論私もっ。」二人がそう言った瞬間、その場に居る全員

が驚いたが、その中でも愛紗と鈴々が特に驚いていた。

「二人共、本気なのですか!?!」

「お兄ちゃんもお姉ちゃんも、無理しちゃダメなのだった。」

そんな風に慌てる二人だが、当の二人・涼と桃香は実にあっけらかんとしている。

「本気だよ。俺は鈴々の提案に乗ったんだし、最終的には俺が決めたんだ。なら、俺も行かないとダメだろ?」

「私も、涼兄さんと同じ義勇軍の指揮官だから一緒に行くよ。」

二人の決意は固いらしく、その瞳には迷いが無い。

それに気付いた愛紗と鈴々、そして曹操達は引き留めるのを止めた。

すると、涼はそんな彼女達の前に出る。

「董卓と曹操、そして盧植さんにはここに残って本隊の指揮をお願いします。」

「解りました。」

「解ったわ。」

「お任せ下さい。」

そう言っつて董卓達に本隊を任せると、義勇軍の中核で唯一ここに残る彼女に向き直った。

「雪里、君にはここで皆の補佐を頼みたい。」

「解りました。……皆さん、お気をつけ下さい。」

「ああ。」

最後に雪里にそう指示すると、涼は桃香達と共に奇襲部隊へと向かった。

鉄門峡の戦いは、こうして始まった。

崖を登る部隊は、総勢五百余名。

当然だが、その殆どが身のこなしが軽い者ばかりだ。

とは言え、それだけで全員が断崖絶壁を登れるとは限らない。

そこで涼は、この中で特に崖登りに自信がある者を数名選ぶと、彼等に太く長い縄を渡して登ってもらった。

断崖絶壁とはいえ、幸いその角度は九十度を超えておらず、またでっぱりも沢山在るので登れなくはない。それでも普通は登ろうと思わないくらい急な崖ではあるが。

所々に在る大きなでっぱりで休息しながら、彼等は無事崖を登りきった。

次に彼等は、渡された縄を繋いで更に長くし、一端を近くの大木に巻き付けてからその縄を下に降ろす。繋げた縄は地面に着いても余る程長く、籠を繋げても余裕だった。

籠には新たな縄を複数入れ、登頂に居る彼等はその籠を引き上げた。

引き上げた籠の中の縄は繋いで別の大木に巻き、最初の縄や籠と共に下に降ろす。

その縄にも籠が繋げられ、やはり複数の縄が入れられた。

そうして引き上げたり降ろしたりを繰り返した結果、現在の崖には幾つもの縄が垂れ下がっている。

そして今は、剣や槍を束ねてその縄に巻き、登頂に引き上げる作業に移っていた。

また、引き上げたのは武器だけでなく、松明や太鼓、銅鑼といった物も有った。

そうして一通りの物資を引き上げ終わると、いよいよ次は奇襲部隊そのものの番である。

彼等は垂れ下がった縄の先を輪にし、その中に入ってから縄を掴



み、登り始めた。

縄の両端がしっかりと巻かれていれば、登る際に解けて落ちる事も無い。

奇襲部隊はこうやって次々と断崖絶壁を登りきり、残すは涼、桃香、愛紗、鈴々だけになった。

「…………ゴクツ。」

桃香はこれから登る崖を見上げ、その高さに思わず唾を飲み込む。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよっ。」

心配する涼を不安がらせない様に笑顔を見せながら、桃香は縄を掴んだ。

縄の輪に体を通し、縄を引っ張りながら足を崖に着ける。

崖を歩くかの様に、かつ慎重に足を動かし、少しずつ登っていく。

「ほらっ…………涼兄さんも早く早くっ。」

「ああ。」

桃香に促され、涼も同じ様に縄に手を伸ばす。

よく見れば、愛紗と鈴々も既に登り始めていた。

そうして慎重に、でも出来るだけ速く登り続け、全員が無事に崖を登りきった。

「…………大丈夫か？」

「わ…………私は平気…………。」

桃香は息を切らせながら答えた。

勿論、息を切らしているのは桃香だけではない。

桃香の隣に座っている涼もそれなりに息が乱れているし、愛紗や鈴々も同じだった。

(やれば出来るもんだな…… ロッククライミングやフリークライミングの知識は有っても、やった事は無かったのに……。)

涼がそう思うと、何故だか手足が震えているのに気付いた。今更ながらに恐怖を感じているのかも知れない。

(かなり無茶したな……けど、これで奇襲が出来る筈だ。)

涼は震える手足を気力で抑え、しっかりと立ち上がった。

崖下からは、連合軍が鳴らす銅鑼や太鼓の音が鳴り響いてくる。

黄巾党が奇襲に気付かない様に、本隊が注意を引きつけているのだ。

「董卓達も上手くやってる様だし、俺達も早く支度をしよう。」

呼吸を整えながら、奇襲部隊に指示を出す。

それを受けて各員は武器を手にし、銅鑼や太鼓を持つ。

「よし、それじゃ……。」

「あ、涼兄さん、ちょっと待ってくれる？」

出撃の号令を出そうとした涼だったが、そこに桃香が割って入った。

「どうした？」

「戦う前に、ちょっとね。愛紗ちゃん、小さい火を焚いてくれる？」

「火、ですか？ それは構いませんが……。」

「折角回り込めるのに、何をするのだ？」

「まあ、見ててよ。」

鈴々の疑問に桃香は曖昧に答え、愛紗は枯れ木や落ち葉を集めて火を点ける。

やがて小さな焚き火が燃え始めると、桃香はその前に立って靖王伝家をゆっくりと鞘から抜いた。

愛紗や鈴々、そして奇襲部隊の面々は桃香が何をするのか判らないまま、その様子を後ろから見ている。だが只一人、涼だけは桃香の行動に心当たりがあった。

そんな涼も静かに桃香を見守る。

桃香は靖王伝家を両手で持ち、目の前で真っ直ぐに立てる。

それからゆっくりと目を閉じ、何かを呟き始めた。その声は小さくてよく聞き取れないので、何と言っているかは解らない。

暫くしてその呟きが終わると、閉じていた目を開いて靖王伝家を左上から右下、右上から左下へと振り、再び目の前に立てると浅く御辞儀をし、やはりゆっくりと鞘に収めた。

一連の動作が終わると桃香は小さく息を吐き、奇襲部隊の面々に向き直った。

「皆、今のはちゃんと見ていた？」

桃香の問いに全員が頷いて答える。

それを確認した桃香は微笑みながら言った。

「今のは破邪の祈祷。私の御先祖様、中山靖王劉勝より伝わる由緒正しい祈祷だよ。」

（破邪の祈祷？ ……成程。）

愛紗は桃香の意図に気付いた様だが、敢えて何も言わずに桃香を見守る。

一方、鈴々は未だよく解っていないらしく、首を傾げていた。

「この祈祷で、張宝さんの妖術は効力を失いました。もう、皆が怯える事はありません。」

桃香がそう言うと、それ迄どこか暗かった兵達の表情が明らかに明るくなっていった。

元々、張宝の妖術を避ける為に集められた奇襲部隊だが、彼等もやはり人間。恐怖が無いと言えば嘘になった。

「皆、空を見て。下に居た時に見た空は曇っていたのに、今はこうして青空が見えている。これが、張宝さんの妖術の効力が無くなった何よりの証ですつ。」

笑みを浮かべながら高々と空に向かって指差す桃香の姿は、そんな彼等を勇気付けるのに充分だった。

今の兵士達には、恐怖という感情は微塵も見られない。

（三国志演義でも、劉備が破邪の祈祷を行って兵の不安を取り除いている。女の子になっても、桃香はやっぱり劉備玄德なんだな。）

涼は桃香達を見ながらそう思う。

「それじゃあ、今度こそ行こうか。」

「うん！」

そして、程良く場が温まった所で改めて号令し、皆と共に進み出

した。

涼達が張宝の本陣に向かっていった時、その反対側の森の中では別の一団が動いていた。

短い髪の少女が木々の間を縫う様に走る。

その先の茂みには、四人の少女が身を屈めて辺りを窺っていた。その中の一人、眼鏡の少女が走ってきた少女に小さく声をかける。

「黄巾党の様子はどうでした？」

「官軍と対峙したままだな。」

「つまり、官軍は未だ動いておらぬのか？」

走ってきた少女が答えると、今度は白い衣服の少女が尋ねた。

「攻め倦ねてるって感じじゃないけど、未だ攻撃していないな。」

「成程ね……ねえ、貴女はどう思う？」

走ってきた少女の報告を聞いていた長い黒髪の少女は暫く考え込み、次いで左隣に居る長い金髪の少女に尋ねる。

「すぴー……。」

だがその長い金髪の少女は寝息をたてて眠りこけていた。

「寝るんじゃないっ！」

「……おおっ!?!」

それを見た長い黒髪の少女は、思わず左手で長い金髪の少女の後頭部を軽く叩く。

「いや、臍ちゃんと違って結構痛いですね。」

「今ので痛いのなら、誰が叩いても痛いわよ。」

長い金髪の少女は頭をさすりながら、ヒラヒラと手を振る長い黒髪の少女をジッと見ていた。

「そんな事はどうでも良いから、雫、風、凩。これからどうするか決めてくれ。」

走ってきた少女は長い黒髪の少女、長い金髪の少女、そして眼鏡の少女をそれぞれ雫、風、凩と呼びながら尋ねた。

「そう言われてもねー。時雨ちゃんだって、どうしたら良いかは解っているんでしょ？」

「解ってはいるが、軍師であるお前達なら何か策を考えられるかと思っただけ。」

雫は走ってきた少女を時雨ちゃんと呼んだ。ちゃん付けした所を見ると、二人はかなり仲が良いらしい。

そんな中、その時雨を見ながら軍師組の二人が口を開いた。

「……時雨さんは軍師を何か勘違いしているのでは……。」

「軍師にだって、出来る事と出来ない事が有るのですよ。」

二人は呆れながらそれぞれそう言った。

軍師組の残る一人である雫も、深く溜息を吐いてから意見を述べる。

「ここは、黄巾党が官軍の攻撃を受けて混乱する迄待つべきよ。」

「何だ、雁首揃って俺とそんなに変わらない考えなのか。」

「そう言っとな時雨。こちらは五人しか居ないのだ、仕方あるまい。」

雫の提案に時雨は落胆するが、すかさず白い衣服の少女が窘める。

「お前は何とも思わないのか、星？」 時雨は白い衣服の少女を星と呼んだ。

すると、星と呼ばれたその少女は時雨に向き直り、不敵な笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「……大軍相手に一人で立ち向かうというのも、確かに悪くない。」「  
「だろ？ なら……。」

「だが、こんな所で命を散らす訳にはいかぬ。我々には、それぞれやるべき事が有るのだからな。」

「くっ……!!」

未だ何か言いたかった時雨だが、星の言葉も理解出来る為、結局二の句が継げなかった。

時雨は無意識に手のひらを堅く閉じ、力を入れた。力を入れ過ぎて、手の甲の血管が浮き出た程だ。

「時雨ちゃん、私達がここに来た目的は忘れていないよね？」

そんな時雨を案じる雫が、時雨の右手を両手で包みながら尋ねる。突然の事に戸惑いながら、時雨は呟く様に言った。

「世を乱す黄巾党を倒す事と、劉玄德……桃香の力になる事だ。」  
「うん。なら、桃香ちゃんの為にも今は様子を見ようよ。ね？」  
「……解った。まったく、雫には適わないな。」

苦笑しながら雫の頭を乱暴に撫で、時雨は風の左隣に腰を下ろした。

暫しの休息に入る時雨達。だが、彼女達が再び動き出す迄、そう

時間はかからなかった。

涼達や時雨達が動く少し前、鉄門峡の前では連合軍が先に動きを見せていた。

「良い？ 銅鑼と太鼓は思いつきり鳴らすのよ！」

「最前線の部隊は、私の合図と共に前進し、敵の動きに合わせて後退を。決して前に出過ぎないで下さい。」

賈馱と雪里はそれぞれ馬上で前線の兵に指示を出し、同時に辺りに注意を払った。

「……敵の動きが無いわね。」

「そうね……私達が此処に攻めてきたのは判ってる筈だし、あちらも様子見という事かしら。」

二人の少し後方では、馬に乗った曹操と盧植が並んでその様子を見ていた。

そこに、曹操の命令を後方部隊に伝えに行っていた荀或が戻り、話に参加する。

「この場に居るのは黄巾党の主力部隊。幾ら賊でも用心深くなっているという事でしょうか。」

「恐らくね。」

荀或もやはり馬に乗っていたが、曹操の近くに来ると即座に下馬し、身を屈める。

どうやら、主従関係をハッキリさせている様だ。

「曹操さん。」

「どうしたの、董卓？」



次に曹操に声をかけたのは董卓だった。

初めは曹操達と共に前線の指揮をしていた董卓だが、奇襲部隊が気になっていたらしく、途中で指揮を賈馱に任せて後方に下がっていた。

因みに、勿論董卓も馬に乗っている。

董卓は盧植の隣で馬を止め、そのまま言葉を紡いだ。

「つい先程、清宮さんの部隊が全員崖を登りきりました。」

「本当に？ ……やるわね。」

「ふふ。流石は天の御遣いさんといった所かしらね。」

「只の偶然ではないですか？」

董卓の報告を受け、三者三様に感想を口にする曹操達。

「それじゃあ、そろそろかしらね。」

「だと思えます。」

「なら、一度部隊を纏めましょうか。華琳ちゃんはどう思う？」

「私も同意見です、翡翠様。」

盧植と曹操の意見は直ぐに一致した。

「良かった。なら、戻ってきたばかりで悪いけど、桂花ちゃんは前線の徐庶ちゃん達にこの事を伝えてきてくれるかしら？」

「了解しました。」

盧植の命を受け、荀或は再び騎乗し前線へと進む。

それから暫くして、雪里と賈馱は部隊を纏めて後退してきた。

「あとは、涼達の働き次第ね。」

「清宮さん達なら、きつとやってくれますよ。」

曹操と董卓は、共に崖の上を見ながらそう言った。奇襲部隊が上手く事を運べば、直ぐに戦いが始まる。

そして、敵将張宝を討てば、黄巾党は弱体化する。

その為の時を曹操達は待っていた。

そんな連合軍を前にして、黄巾党は動けずにいた。

山の上に陣取り、数も互角。普通に戦えば負ける事は先ず無い。

だが、それは訓練された兵を擁する軍同士の戦いなればこそ。

きちんとした訓練を受けず、只闇雲に人を殺してきた賊である黄巾党の間には、そんな技術も度胸も無かった。

数日前なら、数に任せた戦いが出来ていた。

だが、この数日で何万もの仲間がやられた結果、数的有利の状況は瞬く間に消えて無くなり、今迄通りにはいなくなつた。

山に陣取り、畏を仕掛けていても有利な気には全くなれず、更にはその畏すら連合軍には通じていない。

それどころか、いつ総攻撃を仕掛けられるかとビクビクしているくらいだ。

「状況はどうなってるの!？」

そんな黄巾党の本陣に、フードが付いた黄色い羽織りを纏つた少女の音が響く。

少女は苛立ちを隠さずに、目の前に並ぶ黄巾党の男達を睨んでいた。

「官軍はこちらの畏を警戒しているのか、依然として鉄門峡の手前に陣取つたままです。」

一人の男がそう答えると、少女は苛立つたまま尚も尋ねる。

「弓矢は撃てないの？」

「残念ながら、射程範囲外です。」

男は申し訳なさそうに答えた。

「……援軍は来そう？」

「張角様、張梁様共に官軍と交戦中らしく、恐らく援軍は見込めないかと……。」

「そう……。」

男の言葉を聞いた張宝は男達に背を向け、思案を巡らせる。

(官軍なんて以前は簡単に倒せたのに……このままじゃ、ヤバいじゃない……っ。)

好転どころか悪化しつつある状況に、張宝は焦りを感じていた。

そんな時、張宝達が居る本陣の後方から人の叫び声や騒音が聞こえてきた。

「一体何の騒ぎ!？」

騒ぎがする方に向かって声をあげると、その方向から一人の男がフラフラになりながら走ってきた。

男は張宝の近く迄来ると倒れ込む様にひれ伏し、報告を始める。その背中には、無数の矢が刺さっていた。

「た、大変です……こ、後方から攻撃を……っ！」

「何ですって!？」

報告を聞いた張宝及び周囲の者達は驚き、言葉を失った。

「……後方には崖しか無い。なら、裏切り者が出たと言つ事か!？」  
「お、恐らく……。」

暫くして張宝の側に居る男が報告してきた男に尋ね、報告してきた男はそれを肯定した。

「こんな時に裏切りなんて……。」

張宝は苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべ、後方に目をやった。

「……裏切り者の数は解る?」

後方に目をやったまま、張宝は尋ねる。

「ハッキリとした数は判りません……。只、自分が攻撃を受けた際は……少なくとも五百は居ました……。今はもっと増えている可能性もあります……。」

男は苦しみ、言葉を途切らせながらも何とか答えきった。  
そんな男に温かな笑みを向けながら、張宝は言った。

「……報告を有難う。休んで良いわよ。」

「は……はい……っ。」

男はそう答えて目を閉じた。

二度と覚めない深い眠りに落ちたのだ。

張宝達は男に感謝の意を示した後、近くに居た兵を呼んで男を運ばせた。

運ばれていく男を見ながら、張宝達は話し始めた。

「……どうします？」  
「……裏切り者を説き伏せるわ。私が行けば反乱は収まる筈だし。」  
「しかし、危険です！」  
「そんなの解ってるわ。でもね、アンタ達は私が誰だか忘れてない？」

張宝は笑みを浮かべながら男達に尋ねた。

「私は……ちいは皆の妹、地和ちゃんよ。ちいが話して言う事をきかない黄巾党員は居ないんだからっ。」

そう叫ぶと、近くに繋いでいた馬に飛び乗り、陣の後方へと向かう。

男達は慌ててその後を追いつけた。その黄巾党本陣の後方では、涼率いる奇襲部隊が黄巾党に対して攻撃を仕掛けていた。

「皆、後少しだよ！ 頑張つて！！」  
「ここが正念場だ！ 一瞬たりとも気を抜くな！！」  
「……」  
「……」  
「……」  
「……」

桃香と涼の檄を受けた兵士達の咆哮が、辺りに響き渡る。

否応無しに士気が上がる奇襲部隊に対し、黄巾党は混乱し士気が著しく低下していた。

人が来る筈が無い断崖絶壁を背にしていた彼等は、有り得ない筈の後方からの攻撃を受けて只逃げ惑うしか出来なかった。

そんな中誰かが、「裏切り者が出た！」と叫びだした。確証は何も無いが、まさか崖を登って来たとは考えない彼等はそう結論付け、いつの間にか「裏切り者」が存在している事になった。すると、程なくしてそこかしこで同士討ちが始まった。

結果、黄巾党は涼達奇襲部隊だけでなく、味方である筈の者達と

も戦わなくてはならなかったのだ。

「御主人様。」

「どうした、愛紗？」

指揮をとる涼の許にやってきたのは、「別行動」をしていた愛紗だった。

愛紗は青龍偃月刀を利き手に持ちながら報告を始める。

「鉄門峡に配置してあった“畏の排除”、完了しました。」

「……そうか。疲れているところ悪いけど、このまま攻撃に参加してくれるか？」

「勿論です。それに、疲れる程動いてはいいませんので大丈夫です。」

愛紗はそう言って青龍偃月刀を構え、前へ出る。

「……解った。なら、頼むよ。」

「承知しました、御主人様。」

愛紗は涼に頷いてから前へと駆け出した。

依然として混乱しつつも、涼達に気付いて攻撃を仕掛ける黄巾党も少なからず居る。

そんな敵を、愛紗は一刀のもとに斬り捨てる。

黄巾党が反撃してきても、剣や槍での攻撃は勿論、弓矢による攻撃をも完璧に防いだ。

そうして防御に徹した後は、直ぐ様攻撃に転じてその数を減らした。

相手が二人掛かりや三人掛かりでも怯む事無く、愛紗は青龍偃月刀を振って敵を確実に仕留めていった。

始めの内はその威勢を若干取り戻していた黄巾党も、愛紗の強さ

にその勢いを削がれると、次々と背を向けて後ろへと駆け出した。  
勿論そんな好機を見逃す愛紗ではない。

「弓兵隊、構えっ！」

凜とした声で味方にそう命じると、兵達は瞬時に弓に矢をつがえる。

「撃てーっ！！」

その声と同時に放たれた矢は、次々と黄巾党の体に命中し、その命を奪っていった。

丁度その頃、鉄門峡の前に陣取っていた連合軍に動きがあった。

「憂いは絶たれた！ 今こそ賊共を討ち滅ぼす時！！」

「全軍、突撃っ！」

曹操と盧植の号令が連合軍全体に響き渡ると、兵士達はいつも以上に気合いの入った雄叫びをあげながら駆け出し、山道を埋め尽くす程の兵士達の足音が、途切れる事無く大地を揺らしていった。

「先ずは、幸先が良いという所かしら。」

「そうですね。奇襲で敵を混乱させるだけでなく、畏を排除してくれるとは、意外とやります。」

兵士達と共に進軍しながら、盧植と曹操はそう話した。

そう、連合軍の懸案事項だった鉄門峡の畏は既に無い。

この少し前に畏は、いや、畏を担当していた黄巾党は全て排除されていた。

涼は黄巾党本陣に攻撃を仕掛ける際、奇襲部隊を二つに分けてい

た。

一つは、本陣に向かう涼達が率いる本隊。もう一つは、愛紗率いる遊撃隊だ。

遊撃隊の使命は、鉄門峡守備隊の殲滅。

気付かれない様に近付いた愛紗達は、畏担当の黄巾党を矢で排除していき、討ち漏らした分は愛紗達が自ら得物を振るって倒していった。

そうして畏の場所に居た黄巾党を全て倒した愛紗達は、崖下の曹操達に向かって叫んだ。

『落石の畏も、弓矢を撃つ黄巾党も最早居ない！ 安心して進まれよ！』

だが、連合軍は張宝の妖術を恐れているのか中々進もうとしなかった。

そこで愛紗は、青龍偃月刀を天高く掲げながらこう続けた。

『皆の不安の原因、それは恐らく張宝の妖術だろう。……だが、その心配は無用だ。全員、空を見よ！』

愛紗の迫力に圧されたのか、兵士達は皆素直に空を見上げた。

『張宝の妖術は、劉玄徳が行った破邪の祈祷によって打ち消された！ 先程迄曇っていた空が、今は青蒼と晴れているのがその証だ！』

愛紗の言う通り、先程迄曇っていた空は、今やその大半が澄み切った青で構成されている。

それを見た兵士達は、妖術の心配が無くなったと捉えたらしく、表情がどんどん明るくなり、士気が高まっていった。

そこに再び、愛紗の凜とした声が響き渡る。



『黄巾党を倒すべく集まった勇士達よ！ この機を逃さず、前へ進めっ！！ 我等には清宮殿の天の加護と、劉備殿の天分の才が有る事を忘れるなっ！！』

その言葉が決定打となつて、兵士達が持っていた恐怖心は完全に無くなった。

それから曹操達の檄が入り、今に至る。その間も士気は上がり続けていた。

士気が上がり続ける連合軍は、何の抵抗も受けなのまま山道を登り続けた。

また、黄巾党の本陣が在ると思われる方角からは、剣と剣がぶつかる音や人の叫び声が聞こえてくる。

どうやら、今まさに奇襲が行われているらしい。なら、一刻も早く合流しなければならぬ。

進軍速度は否応無く上がっていった。

（それにしても、涼だけでなく劉備にも戦いの才が有るとはね……。

）  
そんな中、曹操は涼と桃香について考えていた。

嘘か真か知らないが、天の国から来たという少年、清宮涼。

その涼を慕い、共に義勇軍の大將を務め、漢王朝の血をひくという少女、劉備玄徳。

二人共、見た目は強そうに見えないが、人望を集める徳を持っている。

曹操は二人を徳だけの人間かと思っていたが、その二人がそれぞれ崖に登って奇襲を行い、不安で一杯の兵士達の士気を上げている。

（これは、二人の評価を改めないといけないかもね……。）

兵士達を鼓舞しながら曹操はそう思う。

これから先、共に戦う事も有れば敵対する事も有るだろう。その際に相手の力を見極めておく事は大切だ。

そう思っていると、何故だか曹操は自然と笑みを浮かべていた。

そうして曹操達が山道を進んでいる間、涼達は黄巾党の本陣に向かっていて。

「でやああああーっ!!」

愛紗の青龍偃月刀が舞う度に、

「うりやりやりやりーっ!!」

そして、鈴々の丈八蛇矛が空を切る度に、黄巾党の命と勢いが次々と消え去っていった。

そうして愛紗と鈴々が部隊を率いて戦っている間、涼と桃香もまた自らの部隊を率いて戦っていた。

「建物は全て火を点けるんだ！ 松明や火矢を放てっ!!」

「風向きには気をつけてね！」

涼と桃香の指示を受けた奇襲部隊の面々は、直ぐ様松明や火矢を辺りの建物に向かって投げ入れ、放っていく。

木造の小屋や食料庫はたちまち燃え盛り、炎や煙が辺りを包み、そこかしこから悲鳴が聞こえてくる。

「……っ！」

「……気にすんな、とは言えないけど、気に病み過ぎるなよ。」  
「うん……。」

辛い表情の桃香に声をかける涼。

敵とは言え、人が苦しみ死んでいく様を見るのは心苦しいのだから。

勿論、いつ迄もそんな事を言っていられる訳じゃ無い事は、桃香も涼も理解していた。

そんな中、聞き慣れない少女の声が涼達の耳に届く。

「アンタ達、暴れるのもいい加減にしなさいよね！」

声に気付いた涼達は、その方向に向き直る。

そこには、馬に乗った少女を先頭に、十数人の黄巾党が居た。

「官軍の大軍を前にして臆病風に吹かれるのも解るけど、だからってこんな事したって意味無いわよ！」

馬上の少女は涼達に向かってそう叫んだ。

だが、当の涼達には彼女が何を言っているのか解らなかった。

「……涼兄さん、意味解る？」

「よく解らん。」

「だよー。私も解らないし。」

涼と桃香、そしてそれぞれの部隊の兵士達は少し混乱しつつも、

馬上の少女の言葉の意味を考え始めた。

考えながら、涼は馬上の少女を見た。

瞳は紺色、髪型は水色の髪を葉っぱの様な十字形の髪飾りで左に纏めたサイドテール。

肩やお腹を大胆に露出した白い服と袖。露出の割に胸は小さい。

二の腕には蕾の形をした緑色の腕輪、よく見ると髪飾りの形を少し変えただけにも見える。

胸の真ん中で分かれている胸当ても緑色で、中央には桃色の花が

描かれている。

黄色のブリーツスカートに重ねるように白い布を巻き、白と黄色で構成されたロングブーツを履いている。

左手にはさつき迄着ていたのか黄色い羽織を抱え、右手首には蝶結びにした黄色い布を巻いていた。(可愛い女の子だけ……こんな所に居るって事は、もしかしてこの娘が……?)

涼は馬上の少女を観察し終わると、一步前に出て尋ねる。

「君が張宝か？」

尋ねられた馬上の少女は、一瞬戸惑った表情になるも、直ぐに気を取り直して答えた。

「当たり前でしょ。アンタ、黄巾党の一員のクセにちいの顔を知らないワケ？」

その声は少し不満げだ。

だが、その言葉で涼や桃香は勿論、部隊の兵士達も漸く、馬上の少女・ちいこと張宝が先程言った言葉の意味を理解した。

張宝は、涼達を反乱を起こした黄巾党の一員だと勘違いしている。だからこそあんな物言いだっただのか、と思いながら、涼は言葉を紡ぐ。

「悪いけど知らないよ。」

「……失礼な奴ね。まあ、黄巾党も沢山居るから、ちいの顔をちゃんと見れてない人や、天和お姉ちゃんや人和の方が好きって人も居るだろうけど……。」

張宝がそこ迄言った時、後ろに居た黄巾党の一人が焦りながら張

宝に近付き、耳打ちした。

「あの……何か様子が変わです。」

「変って？ 確かにちいの顔を知らないのは変だけど……。」

「……その答えは、あれかも知れません。」

男はそう言つて或る場所を指差す。

その先には涼の部隊が在り、その中の一人が大きな旗を持っていた。

その旗に書かれている文字は、「清」。

「……“清”？ そんな名前の指揮官、ウチに居たっけ？」

「……居ません。」

男がそう断言すると、張宝は漸く慌てだした。

「えっ！？ それって一体……！？ ちょっとアンタ、名を名乗りなさい！！！」

慌てながら怒り、涼に名前を言う様に命令する張宝。

涼は黄巾党の一員では無いので、答える義務は無いが、一応答えた。

「俺の名前は清宮涼。官軍の総大将だ。」

涼が冷静かつ自信満々にそう言つと、張宝を始めとした黄巾党は驚き戸惑い始めた。

「清宮涼って、最近ウチの各部隊を倒してきた義勇軍の指揮官の一人の名前じゃない！」

「まあ、その本人だからねえ。」

慌てふためく張宝に対し、涼はあっけらかんと言った。その言葉で、黄巾党の動揺は更に大きくなっていった。

「……本人だったとして、どうやって此処に来たのよ？ 鉄門峡は未だ破られていないのに……。」

「簡単だよ、その崖を登っただけだから。」

「な、なんですってーっ!？」

驚いた張宝の声が辺りに響く。

また、黄巾党の動揺も計り知れない程だった。

「バ、バカ言わないでっ！ あんな崖を登れる訳が無いじゃないっ  
!！」

「それが登れるんだよ。……俺は天の御遣いだからね。」

動揺する張宝達を見据えながら、涼は涼しげにそう言った。

涼の言葉を聞き、目の前の現実を見た張宝達は信じられないといった表情で涼を見て、無意識に後退りしようとする。

それを見た涼は冷静な表情を崩さず、張宝達を見据え続けた。

(……このハツタリで降伏してくれると良いけど……無理かなあ。)

涼は内心こんな事を思っていた。

そう、張宝に言った「天の御遣いだから出来る」発言は、単なるハツタリに過ぎない。

この世界の人間が、不可思議な事に特別な畏怖の感情を持っているという事を涼は知っている。

だからこそ、このハツタリは有効だと思い、言ってみた。

果たしてその効果は - 。

「……君達が降伏し武装解除してくれたら、黄巾党の身の安全は保障する。」

念の為、もう一言付け加えた。

「……本当に？」

「俺は総大将だ。それ位は出来る。」

張宝は明らかに動揺しながら、涼の提案を受け入れようとしていく。

「ちいは……どうなるの？」

続けて、少し声を震わせながらそう尋ねた。

「……君は黄巾党の乱の首謀者である張三姉妹の一人だ。全くの無事って訳にはいかないだろう。勿論、寛大な処置を願ってはみるけど……。」

涼もまた、少し表情を曇らせながら答えた。

こればかりは、流石に涼の一存で決める事は難しい。

「解った……なら……。」

暫く考えていた張宝が、そう呟きながら下馬しようとする。  
だが、

「ダメだ、地和ちゃん！」

周りに居る黄巾党の一人が突然そう叫んだ。

「俺達は地和ちゃん達に惹かれてついて来たんだ！　なのに地和ちゃん居なくなったら、俺達が助かってても意味は無い！！」  
「そうだ！　俺達は最後迄地和ちゃんを守るぞ！！」

その一人の言葉から、黄巾党は堰を切った様に声を上げていく。そこには、涼を畏れ戸惑っていた先程迄の黄巾党の姿は微塵も無かった。

そんな光景を見ながら、涼は一つ溜息を吐く。

「……交渉決裂、かな？」

「そうみたいね。……アンタ達、ちいの敵をやっつけちゃって！！」

「……おおおおーっ！！」「」「」

張宝の号令に、黄巾党は雷鳴の様な声をあげて応えた。

「仕方がない……皆、黄巾党を倒すぞ！　但し、張宝は生け捕るんだ

！！！」

「……はっ！！」「」

涼もまた部隊に号令をかけ、兵士達が黄巾党と戦い始めた。

その様子を見ながら、涼はゆっくりと抜刀する。

「雌雄一対の剣」の一振りである「蒼穹」は、もう一振りの剣「紅星」と同じく日本刀の形状をしている。

この世界には当然ながら日本刀は無く、その材料も無かったが、涼が鍛冶屋の女主人に事細かに説明した結果、何とか出来上がった。材料が違う為、日本刀本来の切れ味は無いかも知れないが、軽くて使い易い。

もつとも、未だ人を斬った事は無いのだが。

「桃香。」



「解ってる。私も覚悟はとつくにしているから。」

隣に居る桃香に声を掛け、共に構える。

二人共、手や足が震えているのが解っていた。

それでも、やらないといけない。いつ迄も兵士達だけに任せる訳にはいかないから。

「頼りない兄だけど、俺から離れるなよ。」

「はいっ。」

桃香の返事を待ってから、涼は黄巾党に向かって駆け出し、桃香も離れない様に走る。

目指すは張宝只一人。

余計な殺生はしたくないし、戦う回数が増えればそれだけ命の危機も増える。

戦い方を知っていても、今迄それを実践する機会が無かった二人にとって、戦う回数は少ない方が良いに決まっていた。

幸い、兵士達と黄巾党が入り乱れている中で、張宝迄の道が拓けた。

涼と桃香はそこを見逃さず走っていく。

当の張宝は馬に乗ったまま黄巾党を鼓舞しており、涼達の接近に気付いていない。

(このまま、張宝を捕らえる！)

そう思いながら、涼は張宝に向かって剣を振るった。

怪我させない様に、ちゃんと峰打ちにして。

だが、涼の剣は張宝に当たる事は無かった。

「地和ちゃんは殺らせないっ!」

「ちいつ！」

黄巾党の男が涼の前に立ちはだかり、自らの剣で涼の剣による攻撃を防いだ。

その男はさつき張宝に向かって叫び、投降を思いとどまらせた一人だった。

「邪魔するなっ！」

涼は一旦間合いをとって再び剣を振るう。

だが男はそれを軽く避けていく。

「どうしたあ！？ 天の御遣い様の太刀筋つてのは、こんな物か！？ ……こんなんでこの馬元義様を殺れると思うなっ！！」

男はそう叫びながら剣を振り回す。

（こいつが馬元義……。そう言えば、この世界だと未だ馬元義が居るんだな。あと、登場人物が必ず女になってる訳じゃ無いみたいだ。）

涼は、馬元義の攻撃を必死にかわしながらそう思った。

その割には意外と余裕が有る様だ。一度も戦った事が無い涼がこれだけ動けるのは、涼の「戦いの先生」達のお陰だろう。

（そう言えば、桃香はどうした！？）

そんな中、涼はハッと思い出す。

涼と共に張宝を攻撃しようとした桃香だが、今は近くに居ない。不安になった涼は、攻撃をかわしながら辺りを見回す。

すると、桃香は涼の左前方約十メートル先に居り、そこで黄巾党の一人と打ち合っていた。

「丁峰さん、剣を退いて下さいっ！ 私達は無益な争いを望んでいません！！」

「俺達の仲間を殺しておいて、今更何を言いやがる！」

桃香は宝剣「靖王伝家」を両手で構え、丁峰と呼んだ黄巾党に呼び掛けながら何度も剣を振るっている。

桃香が黄巾党の男の名前を知っているのは、恐らく先程の馬元義と同じ様に名乗ったのだろう。

「桃香……っ！」

「戦いの最中に、何余所見してやがる！」

思わず駆け寄ろうとする涼だが、馬元義の攻撃がその進路を阻む。

「くっ……っ！」

涼は馬元義に斬りかかりながら、桃香の方に目をやる。

今の所は何とかなっているが、元来戦いに向いていない桃香が長く保つとは思えない。

もつとも、戦いに向いていないのは涼自身もなのだが。

（邪魔するなっ！！）

涼は急に湧き出た怒りに任せて剣を振るうと、運良く馬元義の剣を弾き飛ばす事が出来た。

そのまま馬元義に向かって剣を振り下ろそうとした涼だったが、何故かその手は途中で止まった。

(くっ……！)

涼は止まった手が震えているのが解った。

決心していた筈なのに、いざ人を斬るとなると躊躇ってしまっ様だ。

そうして動けない涼を、馬元義は見逃さなかった。

「おらっ!!」

「うわっ!!」

馬元義の左キックが涼の脇腹を狙い、涼はガードする間も無く蹴り飛ばされた。

涼は何とか受け身をとる事が出来たが、その間に馬元義は自分の剣を取り戻し、そのまま涼に向かってきた。

「死ねえっ!!」

涼は、マンガとかでよく聞く台詞だなと思いつつながら攻撃を必死に避け、立ち上がって剣を構える。

だが、その剣は依然として震えていた。

(……くそっ！ 震えるなよ、震えるなっ！)

涼は必死に震えを止めようとするが、止まる気配は全く無かった。相手が恐くて震えている訳では無い。相手を斬ることに怖れて震えているのだ。

そして、この震えを収める術が一つしか無いのを、涼は理解していた。

だが、「それ」が出来ないから困っている訳で。

「おりゃああつー!!」  
「くつ!」

攻撃を避けながら、「それ」をしないといけないと思いつつ出来ないジレンマに苦しんでいた。

(早く桃香の援護に行かないといけないのに……!)

焦る気持ちをつのらせながら、涼は剣を振った。

だがその動きは遅く弱く、とてもじゃないが当たる様な一撃では無い。

涼の攻撃を何の苦も無く避けた馬元義は、逆に斬りかかって涼を追い詰めた。

馬元義の剣の腕は、ハッキリ言って良くは無い。それは、戦いの素人である涼が動きを見切れている事からも解る。

だが、涼と馬元義では決定的に違う事が有る。

それは、

“人を斬った事が有るか無いか”

の一言に尽きる。

馬元義は今迄何人も斬ってきたのだろう。剣を振るう動きに迷いが無い。

だが、涼は違う。

平和な世界に生まれ育ち、今この乱世の世界に生きていても、ずっと仲間達に守られてきて未だ一人も斬った事が無い。

斬らないで済むなら一番良いが、それが簡単な事では無いのも解っている。

斬らなければ自分が斬られると解っていても、最後の決断に踏み込めない。

それは普通の人間として当然の事だった。  
いざ剣を振るって斬ろうとすると、手が止まって剣が震える。  
仮に振れたとしてもその速度は遅く、簡単にかわされる。  
これでは、例え百万回チャンスが有っても成功はしないだろう。

(俺は……負ける訳にはいかないのに……っ！)

焦って剣を振るうも、やはり当たる筈も無く、運良く当たろうとすると手が止まった。

そんな繰り返しは何度も続き、気付けば涼は孤立していた。

周りには味方である連合軍奇襲部隊も、敵である黄巾党主力部隊も居ない。

よく見れば、涼の遙か前方で彼等の戦いは続いていた。

幸い、桃香は無事の様だが、桃香が戦っていた相手である丁峰もまた無事だった。

「味方は来ねえみたいだな、天の御遣いさんよお！」

「ちいっ！」

馬元義もまた周りをよく見ていたらしく、そう叫びながら剣を振り回す。

その攻撃も難無くかわす涼だったが、バックステップでかわした後、背中に何かが当たった。

(木！？ しかも結構大きい!!)

涼の背後には樹齢何十年になるか解らない大木が在った。

その為、これ以上下がる事は出来ない。

「もらったあっ!!」

下がる事が出来ない涼に、馬元義は左から右への斬撃を放った。次の瞬間、キーン！という甲高い金属音が鳴り響いた。

涼の剣が、左から迫ってきた馬元義の剣を防いだからだ。

だが、ギリギリで防いだ為、僅かに剣の刃先が涼の肩に触れていた。

防ぐのが後少し遅かったら、間違いなく肩を切り裂かれていただろう。

「……………はあ……………はあ……………っ！！」

涼は殺されそうになった恐怖の余り、呼吸が必要以上に荒くなっている。

また、目の焦点は合っておらず、体温は急激に下がっている様に感じていた。

「ちっ、運の良い奴め。ならばもう一度……………！」

馬元義はそう言いながら剣を引こうとした。

だが、剣は涼の後ろに在る大木に刺さっていて中々抜けない。

「……………くない。」

涼は、目の焦点が合わないまま何かを呟いた。

「ああ！？」

中々剣が抜けない馬元義は苛立っている。

「……………たくない……………」

再び呟く涼。

その時、少しずつ馬元義の剣が大木から抜けてきた。

「よし、このまま……！」

それによって馬元義の苛立ちは収まりつつあり、攻撃も間もなく再開されようとしていた。  
その時、

「……………死にたく、ないっ！！」

涼はそう叫びながら剣を動かし、自らも右前方へと踏み出した。

数秒後、涼は剣を右手に持ち、相変わらず目の焦点が定まらないまま立っていた。

近くの大木の根元には、一人の男が俯せに倒れている。

男は首の右側から腰の左側にかけて刀傷が有り、そこから紅い液体が流れ出ていた。

大木にもその液体が飛び散っており、また、その木に留まっていた小さな虫も真っ赤に染まっている。

「はあ……はあ……っ。」

涼は荒い呼吸を繰り返す。

手は震え、それによって剣がカタカタと音を立てて震えていた。

白いコートは左側が紅く染まっている。勿論、涼の顔にも紅い液体が飛び散っていた。

涼は手を震わせながらゆっくりと振り向いた。

視界に入ってきたのは、紅く染まっている大木と、その根元に倒れている一人の男。



「……………っ！！」

男はピクリとも動かない。呼吸もしていない。

男が倒れている場所には紅い水溜まりが出来ており、男が頭に巻いている黄色い布も、今ではその半分以上を紅く染めていた。

「俺が……………」

涼は、弱々しく声を震わせながら呟く。

「俺が……………馬元義を殺した……………！？」

戸惑いながらそう呟いた涼の剣からは、馬元義を斬った時に付いた血が滴り落ちていた。

涼は信じられないといった表情をしていた。

だが、馬元義を斬った感触は確かに有る。

今迄経験した事の無い、肉が裂け、骨が砕ける、あの感触。それを思い出した瞬間、涼は激しい嘔吐感に襲われた。

「うっ……………ぐうっ……………！！」

だが涼は必死になって吐くのを我慢した。酸っぱい液体が胃に戻っていくのを感じる。

我慢した理由は、連合軍の総大将として、ここで吐く訳にはいかないと思ったからだ。

（これで……………後戻りは出来ない……………。）

元々逃げるつもりは無かったが、人を斬った事で尚更逃げる事が

出来ないと悟った。

手の震えは、いつの間にか治まっている。

人を斬った事で、「人を斬る恐怖」が無くなったからだろう。

実際、涼は未だ自分のした事を直視出来ないでいるが、人を斬る事に対する躊躇いは無くなるうとしていた。

(どんな理由があれ、本当は人を殺しちゃいけない。……だけど、この世界ではそうも言っていられない……。)

剣を握る手に、自然と力が入る。

(けど……それを言い訳にして人を殺すのを正当化したくない。だから……だから、この気持ちは絶対に忘れない！)

涼はそう固く決意すると、桃香の援護に向かった。

先程迄居た場所に戻ると、そこでは尚も戦いが続いていた。

先程より黄巾党の数は増えているが、連合軍奇襲部隊にも、罨の事後処理を終えた愛紗の部隊が合流している。

兵の数では負けてはいないし、愛紗や鈴々が農民上がりの黄巾党に負ける筈も無い。

そんな戦いの中、涼は桃香の姿を確認した。

愛紗達とは少し離れた所にへたり込む様に座っていて、側には靖王伝家が落ちている。

そして、桃香の前には一人の男が倒れていた。

「桃香！」

慌てて駆け寄るが、桃香は前を見たまま反応しない。

それに、まるで先程迄の涼の様に、目の焦点が合っていない。

そこで涼は気付いた。桃香の前に倒れている男が血を流して死ん

でいる事。

そして、桃香の剣である靖王伝家に血が付いている事に。

「わ……私……っ！」

桃香は声を震わせていた。

「戦っている時に転んじやって……そしたら丁峰さんが私に斬りかかったから、私……私……っ！」

「……もう良いから。」

涼は桃香を抱き寄せて、必死に落ち着かせようとした。

だが、それでも桃香は落ち着かず、声だけでなく体迄も震わせている。

それを見た涼は、先程迄の自分を見ているかの様に錯覚した。

「咄嗟に剣を突き出したら……丁峰さんの体に刺さって……それから……それから……っ！」

尚も落ち着かずにいる桃香は、いつの間にか涙を流していた。

「覚悟していた筈なのに……解っていた筈なのに……っ！ 結局、私は何も解っていなかったんだ……っ！」

涙を拭く事すら忘れ、自分がした事とその結果に恐怖し、自我を保てなくなっている。

この世界で生まれ育った人間でも、皆が皆人を殺すのに慣れていく訳では無い。寧ろ、涼の世界と同様に人を殺した事が無い人の方が多いのだ。

だから桃香のこの反応は自然なものであり、決しておかしくはない。

義勇軍の指揮官としてはおかしいかも知れないが、桃香はついこの間迄普通の女の子として育ってきたのだから、仕方が無いだろう。

「大丈夫……解っていないかったのなら、これからちゃんと解れば良いだけだ。俺も一緒だから、心配するな。」

涼は子供をあやす様に桃香を抱き締めながら、柔らかな口調で語り掛ける。

すると、桃香は少しずつ落ち着きだし、目の焦点も合ってきた。

「涼……兄さん………?」

涼を見ながら漸く気付いたかのように呟くと、安心したのか体の震えが治まってきた。「涼兄さん………」

もう一度呟いてから涼に向き直り、涙を拭う。

そこで初めて、涼の服や顔に血が着いているのに気付いた。

桃香は驚きつつも目を逸らさず、そのまま涼に尋ねる。

「涼兄さん……もしかして……。」

「ああ……さっき、斬った。」

靖王伝家を拾いながら、淡々と答える涼。

その剣をブンツと振って、剣に着いた血を地面に飛ばし、桃香に渡す。

暫くの間手に取るのを躊躇した桃香だが、やがてしっかりと剣の柄を握り、そのまま目の前で倒れている男・丁峰に目をやった。

「ごめんなさい……。」

そう呟くと、ゆっくりと立ち上がる。

「……でも、貴方を殺した事を無意味にはしません。約束します。」  
物言わぬ骸と化した丁峰にそう誓うと、表情を引き締めて涼に向き直った。

「行きましよう、涼兄さん。少しでも早くこの戦いを終わらせないと！」

「ああ！」

そう言葉を交わした二人は、愛紗達が居る前線へと走る。

涼も桃香も、動揺が完全に無くなった訳じゃ無い。

だが、いつ迄もそのままではいられない。

恐れ、悔やみ、泣くのは戦いが終わってからで良い。

涼と桃香はそう思いながら剣を構え直した。

張宝は焦っていた。

当初は劣勢だった黄巾党も、援軍の到着によって一時は立場が逆転した筈だった。

だが、今現在優勢なのは連合軍。そう、張宝の敵の方だった。

更に、悪い事は重なる物らしい。

『馬元義將軍が討たれました！』

『丁峰將軍、戦死！』

戦いの最中、部下が伝えてきた二つの凶報。

張宝率いる黄巾党第三部隊の主力が二人も討ち死にした事は、張宝だけでなく黄巾党全体に大きな衝撃を与えた。

張宝の檄によって上がっていた士気も、今では著しく低下しており、それによって次々と部下が討たれている。

(こんな……こんな事って無いっ!!)

慌てる張宝の耳に聞こえてくるのは、土気高らかに進む連合軍の兵の声と、地面に倒れ死んでいく黄巾党の兵の断末魔。

今や味方の兵は三十にも満たず、対する連合軍は数百を超えている。

勢いでも数でも負けていては、勝てる筈が無い。

(嫌よ……こんな所で死にたくないっ!)

逃げたいと思う張宝だが、部下を見捨てて逃げる訳にはいかない。だが、このままここに居ては間違いなく殺される。

選択肢は限り無く少なくなっていた。

そんな時、張宝の近くに居た部下の一人が矢を受けて倒れた。

部下は張宝に逃げる様言いながら死んでいった。

張宝は慌てて矢が飛んできた方向を見る。

そこには、桃色の長髪を靡かせ、大きな胸を揺らしながら弓矢を構えている少女が居た。

そしてその少女の近くには、「劉」と書かれた旗が風に靡いている。

(“劉”の旗……! それって、天の御遣いと共に戦ってる指揮官の名前と同じ……っ! 名前は確か、劉備玄德……!!)

張宝は、以前張梁から聞いた情報を思い出しながら劉備・桃香を見続けた。

先程の矢は、部下を狙ったものではない。矢は確実に張宝に向かって飛んできていた。

それが部下に当たったのは、部下が身を挺して張宝を守ったから

に他ならない。

(……天とお姉ちゃんみたいな大きな胸と、ノンビリしてそんな顔をしてるくせに、意外とやるじゃない……。流星は義勇軍の指揮官って訳……?)

張宝は考えようとした。が、考える暇が有る様な状況では無くなっていた。

残った部下が、身を挺して戦っていた。

張宝の前に壁になる様に並び、斬られても射られても直ぐには倒れない。

そして皆口々にこう叫んでいた。

地和ちゃん、逃げろ……！

いつの間にか、張宝は馬を後方に向けて走らせていた。

少女が立ち塞がる黄巾党の最後の一人を斬り倒すと、少女は兵に向かって大声をあげた。

「張宝を逃がすなっ！ 弓兵隊はどうしたっ!？」

「駄目ですっ！ 馬が速く、既に射程外です!」

兵の報告を聞いた少女は、無意識に歯軋りをした。

「ならばこちらから距離を詰めるだけだっ!」

「し、しかし、人間の足では馬に適いませんっ!」

「そんな事は百も承知！ だが、だからと言ってここに留まっても、射程外のままで!」

少女は長い黒髪を揺らしながら、兵達に向かってそう叫ぶ。

「敵將をここ迄追い詰めておきながら逃げられては、我等義勇軍の沽券に関わる！ 総員、我に続けーっ！！」

自身の得物、青龍偃月刀を掲げながら、少女は張宝に向かって走り出す。

少女の気迫に圧されたのか、兵達も大声を上げながらついて行った。

その様子を、別の部隊の兵が小さな少女に伝える。

「関羽將軍の部隊は張宝を追う様です。我が隊はどうします？」

「愛紗が行くなら、鈴々も行くのだっ。あ、念の為何人かはお兄ちゃん達についてほしいのだ。」

「解りました、張飛將軍。」

張飛・鈴々は、関羽・愛紗が張宝を追い掛けたと知ると瞬時に指示を出した。

「それじゃ皆、鈴々に続くのだーっ！」

丈八蛇矛を掲げた鈴々が走りながら号令を出すと、鈴々の部隊もまた張宝を追って走り出した。

その様子を見ながら、涼と桃香は自分の部隊に指示を出していた。

「負傷者はここに残って治療を受けて下さい。無事な人は私達と一緒に張宝さんを追い掛けますっ。」

「情報を得る為にも、出来れば張宝は生け捕りにしたい。けど、それが出来そうに無いなら無理はしないで良いから。」

指示を受けた兵達はそれぞれの役目を果たすべく動き出した。少なからず負傷者は居るし、死者も居る。



崖を登った時は五百人居た奇襲部隊も、今では四百五十人前後になっっている。

その内の約半数が愛紗と鈴々の部隊の為、ここに居るのは残りの約二百人。それは決して多い人数では無かった。

「…………涼兄さん。」

「どうした？」

そんな部隊の確認をしていた涼に、桃香が声をかけてきた。その声は何故か沈んでいる。

「あの…………さつきはごめんなさい。」

「さつき？」

桃香は涼に対して謝ったが、涼は何故謝られているのか全く解らなかつた。

「その…………張宝さんの居る方向に向かって、私が矢を放った事です。」

「ああ、あれか。」

確かあれは、張宝の側に居た黄巾党に当たったなと涼は思い返した。

「……………勿論、私は張宝さんを狙った訳じゃないの。近くに居た黄巾党を狙ったら、その射線上に張宝さんが居て……………。生け捕りにする筈なのに、殺そうとしてごめんなさい……………」

「そっか……………。まあ、幸い張宝は未だ無事だから余り気にするな。」

「うん……………」

未だ若干複雑な表情ながらも、少しホツとする桃香。

「けど、何で弓矢を使ったんだ？」

「それは、相手がちよつと遠くに居たんで、落ちていた弓矢を拾って攻撃したの。……あの弓矢、誰のだったのかな？」

落ちていたって事は、戦死した連合軍の兵士か黄巾党の兵士の物だろう。

生きているなら武器を落としたままにはしないだろうから。

（張宝は、史実だと皇甫嵩に、演義だと朱儁に敗れて戦死している。小説とかだと張宝を討つたのは劉備で、しかも弓矢を使っていた。だから、桃香が弓矢を使ってもおかしくは無いな。）

とは言え、普通の桃香が弓矢を使うのはやっぱり違和感が有るなと涼は思った。

涼は取り敢えず、慣れない武器は使わない方が良いんじゃないかと桃香に助言してから張宝を追った。

張宝は必死に馬を走らせていた。

本陣には数万の味方が居る。

彼等と合流すれば、数百しか居ない敵兵なんて簡単に倒せると、そう思っていた。

だが、その思惑は脆くも崩れ去る事になる。

「何……これ………！？」

本陣に辿り着いた張宝の視界に入ってきたのは、黄巾党と連合軍の戦いだっただけ。

しかも連合軍の数は黄巾党を圧倒しており、旗色は明らかに悪かった。

「地和……ちゃん……。」

その光景を前に呆然としている張宝の前に、黄巾党の一人がふらついた足取りでやってきた。

「一体……何があつたの!？」

「鉄門峡前に居た……連合軍が雪崩込んできて……この有り様です……!」

「鉄門峡つて……あそこに配置していた部隊は何やってたのよっ!？」

「どうやら……全滅した様です。恐らく……先程の裏切り者達が倒したのかと……!」

「そ、そんな……っ!」

張宝は絶望的な状況を悟り戦慄していた。

数で互角になっていた黄巾党が連合軍に勝つ為には、この山の地形を生かした戦いをしなければならなかった。

だが、最早それが可能な状況では無い。

張宝は、自分の命運が尽きようとしている事に、今迄感じた事の無い恐怖を感じていた。

「地和ちゃん……逃げてくれ……っ! 俺達はもう駄目だが、地和ちゃんが……天和ちゃんや人和ちゃんと合流出来れば、黄巾党は未だ……っ!」

男の言葉はそこで途切れた。

男はその場に倒れる。背中には無数の矢が刺さっていた。

「……っ!」

張宝は一瞬息をするのを忘れた。

目の前で部下が死ぬのは何回も見ているが、今は状況が状況だけにその恐ろしさは計り知れないものになっている。

遠くで張宝の名前を呼ぶ声が聞こえる。

そのトーンは決して友好的なものでは無い。

張宝が声のした方向に目をやると、そこには「曹」や「董」、「盧」の旗が揺れていた。どれも連合軍の武將の旗だ。

(ちい……死ぬの……!?)

張宝の体は震えていた。

次々と倒れていく部下達。雷鳴の様な大声を上げながら近付いてくる連合軍。そのどれもが恐怖の対象でしかない。

そんな状況に置かれた少女が冷静で居られる筈は無く、少女は只一目散に逃げ出した。

そこに居たのは黄巾党の指揮官である張宝では無く、普通の少女である張宝だった。

数刻後、この山に居た黄巾党は殆どが討たれ、残った者は皆投降した。

只、指揮官である張宝は遂に見つからなかった。

黄巾党が敗北する少し前、張宝は山の中をさまよっていた。

「……こんな……こんな筈じゃ無かったのに……。」

張宝は泣いていた。

負けた事を悔やんで泣いていた訳では無く、恐怖の余りに泣いていたのだ。

山の中を無我夢中で逃げ回った為、体中に枝や葉によるひっかき傷が出来ており、勿論服もボロボロで、馬もまた疲れ果てている。

そんな張宝に、更なる災難が降り懸かった。

「もらったあつー!!」  
「えっ!?!」

突然木の陰から一人の少女が飛び出し、張宝に斬りかかってきた。咄嗟に体が動いた為には避ける事が出来たが、弾みで馬からは落ちてしまった。

「痛っ!!」

落ちた場所は草が被い茂っていたので怪我はしなかったが、それでもそれなりの痛みが体に伝わってきた。

「いたた……っ!!」

張宝が体を起こそうとすると、その喉元に大剣が突きつけられた。

「確認するが……お前が張宝だな?」

張宝が目線だけを上げると、短い髪の少女が大剣を手にしたまま彼女を見下ろしている。

その表情は冷たく今にも張宝を殺しそうだが、だとしたら確認をとらずに斬り殺しているだろう。

直ぐに殺さないのは、何か理由が有るのだろうか。

「捕らえたのか、時雨殿?」

近くから別の少女の声が聞こえてくる。

その少女は白を基調とした服を着ており、水色の髪に白い肌。そして手には装飾豊かな槍を持っていた。

「一応な。今確認している所だ。」

白い服の少女に「時雨」と呼ばれた大剣の少女は、張宝を見据え  
たまま白い服の少女の問いに答えた。

「あちらは大勢が決した様だ。早くしないと、そなた達が合流出来  
なくなると思っが？」

「解つてる！ ……ん？ 星よ、お前達は共に行かないのか？」

「私達はもう少し旅を続けるつもりだ。やはり、自分が仕える主は  
きちんと思極めたいのでな。」

「お前らしい考えだな。」

相変わらず大剣を突きつけたまま会話を続ける時雨。

その時雨は、白い服の少女を「星」と呼んだ。

「……私を、どうするつもり？」

張宝は俯いたまま尋ねる。

それに対して、時雨と星は張宝を見ながら口を開いた。

「知れた事。お前が張宝本人なら、その首を貰う。」

「もつとも、嘘についても意味は無いぞ。捕虜に聞けば貴公が張宝  
かそうでないかは直ぐに判るからな。」

それを聞いた張宝は、表情をまったく変えずに、心の中で二人に  
向かって小さく舌を出した。

（皆に聞いたって、皆がちいの事をバラす訳無いじゃない。コイツ  
等……バカ？）

張宝がそう思う様に、黄巾党の人間は張三姉妹を心酔している。

実は今迄、張三姉妹の実態はよく判っていなかったのだが、それ

は黄巾党が鉄の結束とも言つべき団結力で、張三姉妹の事を秘密に  
してきたからだ。

だから、今回も誰も口を割らないだろう。それ程皆、口が固いの  
だ。

そう結論付け、安心した張宝はつい言ってしまった。

「黄巾党の皆が、私の事を話す訳が無いじゃない。」

それを聞いた時雨と星は啞然とした。

暫くの間、辺りに沈黙が流れる。

「……な、何よ？」

「いや……。」

「まさか、自分から正体をバラすとは思わなかったのな。」

「えっ……？ …………… ああっ！！」

漸く自身の失態に気付いた張宝は、大声を上げて落胆した。

黄巾党は口が固いが、肝心の張宝自身は口が軽かった様だ。

「うう…………。」

「まあ………… 手間が省けたと思えば良いか。」

「そうだな。」

そう言って互いに顔を見合わせ、それぞれの得物を握り直す。

「可哀想だとは思つが………… 覚悟！」

時雨と星、二人の少女が得物を振り上げ、張宝に向かって振り下  
るそうとした。

その時、

「わーっ！ その娘を斬るのはちょっと待ってーっ！！」

緊迫した場面に似合わない高く甘い声が、かなり慌てたトーンで辺りに響き渡った。

何事かと思つた二人が辺りを見渡すと、後ろから一人の少女が息を切らせながら走ってきた。

「と、桃香っ！？」

「えっ？ …… あっ、時雨ちゃんだあ。」

時雨は驚きながら少女の真名を口にした。すると、真名を呼ばれた少女もまた時雨をちゃん付けて呼んだ。

「時雨殿、もしかや彼女が？」

張宝が逃げない様に目を光らせながらその様子を見ていた星が、時雨に確認をとる。

「ああ。コイツが、俺と雫が合流しようとしていた相手の劉玄德だ。」

「えっ、雫ちゃんも一緒なの？」

時雨が星の問いに答えると、桃香は時雨の答えの中に出て来た固有名詞に反応を示した。

「ああ、今は近くで仲間達と一緒に待っているぞ。」

「そうなんだあ。早く会いたいなあ。」

時雨から説明を受けた桃香は、満面の笑みを浮かべながらそう言



った。

どうやら、桃香と時雨、そして雫は仲が良い間柄の様だ。

「劉玄德殿、お仲間と戯れるのも結構ですが、一つ尋ねても宜しいですか？」

そんな中、星が口を開いた。

「何ですか？」

「先程、貴女は張宝を斬るのを待てと仰ったが、それは如何なる理由があつての事ですか？」

「ああ、それはですね……。」

「それについては、俺が説明するよ。」

星の質問に桃香が答えようとすると、桃香が来た方向から少年の声が聞こえ、ゆっくりとした足取りで一人の少年が現れた。

「貴公は？」

「俺は清宮涼。桃香と共に義勇軍の指揮官を務めています。」

星がその少年・涼を見据えながら尋ねると、涼は丁寧な物腰で自分の名前を名乗った。

「ほう……では貴公が噂の“天の御遣い”殿か。」

「まあ、一応ね。」

涼が天の御遣いだと解ると、星は涼を値踏みするかの様に見つめる。

余りにジロジロ見つめるので、涼は何だか恥ずかしくなってしまうた。

「それで、張宝を斬るなという理由は何だ？」

そこに、何故か不機嫌な表情の時雨が尋ねてきた。

その疑問は星も同じだった様で、途端に表情を引き締める。

涼は、時雨の側で俯き涙を流している少女・張宝を一瞥してから口を開いた。

「張宝を斬るなって言ったのは、彼女を殺さないからさ。」

涼のその言葉に、時雨達は啞然となった。

暫くの沈黙の後、最初に口を開いたのは時雨だった。

「お前、何を言っている！？ まさか、相手が女だから殺すのが惜しくなったとも言えるのか！？」

「そりゃあ、見た所可愛い娘だし、そういった感情が無いと言えば嘘になるけど。」

「涼兄さんっ。」

嘘偽り無く正直に話す涼に、桃香は思わず注意する。

その光景を見て、時雨が困惑した表情を浮かべながら尋ねた。

「……桃香、今こいつの事を“涼兄さん”って呼んだか？」

「うん、呼んだよ。」

「……何で？」

「だって私達、義兄妹だもん」

桃香はそう言いながら笑みを浮かべ、涼の腕に抱きついたりすると辺りに、いや、時雨の周りにだけ再び沈黙が流れた。そして、

「な、なんだとーっ！？」

枝に留まっていた鳥や、草に隠れていた動物が一齐に逃げ出す程の、悲鳴にも似た大声があがった。

勿論、その声の主は時雨である。

「と、桃香っ！ 何でこんな奴と義兄妹の契りを交わしたんだっ！  
！」

「こんな奴って……。」

「お前は黙ってる！」

「……けど俺、無関係じゃないよね？」

「五月蠅いっ！！」

すっかり頭に血が上っている時雨は、涼の言葉に耳を貸そうとしなかった。

「時雨ちゃん、何でそんなに怒ってるの？」

「怒ってないっ！」

とは言うものの、どう見ても時雨は怒っている。

そんなに暑くも無いのに顔が真っ赤な事からも、それは明らかだ。

「……話を戻して良いか？」

そこに、星が口を挟んできた。

話が逸れてきたので、流れを断とうとしたらしい。

「しかし、星っ！」

「今は張宝の処遇についての理由を聞くのが最優先であろうっ？」

「くっ……っ！」

正論を言われて反論出来ず、言葉に詰まる時雨。そのまま諦めたらしく、そつぽを向いた。

だが、その直前に涼を睨んだ事に、涼自身が気付いた。とは言え、それに反応したら繰り返しになってしまうので、涼は何も言わなかった。

「張宝を殺さないのには、ちゃんとした理由が有るよ。」

そう言って話を再開する涼。

「それは、張宝を殺した場合の黄巾党の反応を危惧したからさ。」

「黄巾党の反応だと？ 奴等はほぼ全滅した様だが？」

時雨がそう言うと、張宝はビクツと体を震わせた。

「それは張宝が率いていた部隊だろ？ けど、首領の張角や妹の張梁が率いている部隊は健在だ。もし、張宝が殺されたら彼女達が知ったら……。」

「恐らく、仇討ちと称して今迄以上に暴れ回るだろう。」

「ああ。だから彼女達は捕らえるにしても殺すにしても、三人一緒じゃないと駄目だ。」

「……求心力になる存在が無くなれば、奴等は力を失うという訳だな。」

「その通り。」

元々、張三姉妹を中心として集まった農民達で結成されたのが黄巾党だ。

もし旗頭である張三姉妹が居なくなる様な事があれば、黄巾党は内部崩壊を起こし、簡単に鎮圧されるだろう。

「理由は解った。だが、ならば張宝はどうするのだ？」

「勿論、逃がすよ。」

「……だと思った。」

時雨は呆れながら言った。

「だが、一体どうやって逃がすつもりだ？ 鉄門峡は連合軍が抑えているんだぞ。例え変装させたとしても、お前が見知らぬ女を連れていけば、誰かが気付く。そうすれば全ては終わりだ。」

「時雨殿の言う通りだ。戦場に武将でも軍師でも無い少女が居ては、明らかに怪しまれる。」

時雨の意見に星も同意する。

だが涼は、二人の意見にも全くたじろぐ様子も無く、寧ろ冷静に言葉を紡いだ。

「確かに、普通なら怪しまれるだろうね。けど、この場所に君達が居た事で、作戦は比較的成功すると思ってるんだ。」

「私達が居た事で、」

「作戦が成功するだ？」

星と時雨は涼の言葉を繰り返した。

桃香もよく解っていないのか、キョトンとした顔のまま涼を見つめている。

「本当は、この先に在る獣道を張宝一人で通ってもらおう予定だったんだ。」

「獣道？ そんなものが在るのか？」

「ああ。うちの軍師が集めた情報で、さっき愛紗……関羽にその道が麓に続いているのを確認してもらった。」

「ちょっと険しいけど、普通の女の子一人でも充分降りられる道だ  
って言ってたよ。」

桃香は張宝をみつめながら、涼の話を補足する様に言った。

一瞬だけ目が合ったが、張宝は直ぐに目を逸らした。

「けど、本来なら連合軍と黄巾党以外は居ない筈のこの山に君達が  
居た。なら、これを利用しない手はない。」

「……まさか、張宝を我等の仲間として扱うつもりか？」

涼の説明の意図に気付いた星が尋ねる。すると、涼は首を縦に振  
って肯定した。

「この山にも数人ずつなら登れる小さな道は幾つか在るらしいから、  
君達の存在もそんなに不自然じゃないし。それに、君が桃香の知り  
合いなのも成功率を上げる要因になる。」

涼はそう言って時雨に向き直る。

「張宝を桃香の友達の娘って扱いにし、桃香に会う為に仲間と旅を  
していたって事にすれば、武将でも軍師でも無くても怪しまれない  
筈だ。」

「いざという時には、時雨殿や私が守ってきた事にすれば良い訳で  
すからな。」

「ああ。」

涼の説明に星は頷きながら確認をとる。

時雨は少し納得していない様だが、黙って話を聞いていた。

「幸い、張三姉妹についての情報は連合軍でも不足しているから、  
誰も張宝の顔は知らない。」

「先の戦いで顔を見られたのでは？」

「その可能性は有るけど、それは変装して尚且つ他人への露出を少なくすれば危険性は減る筈だ。」

「もしもの時は、間違つて襲われたつて言えば良いしね。」

星と涼がそう話していると、再び桃香が補足する様に話した。

それから暫くの間、星は静かに考え込み、やがて涼を見ながら口を開いた。

「……確かに成功率は意外と高いかも知れんな。……だが清宮殿、解っているのか？」

「何がだい？」

「貴公は敵を助けようとしている。それがどんな意味を持つのか、まさか解らない訳ではあるまい？」

「……解つてる。もしバレたら、俺や桃香だけでなく義勇軍全体が逆賊として狙われるだろうね。」 真面目な表情で尋ねる星に対し、涼もまた表情を引き締めながら答えた。

星は尚も尋ねる。

「それ程の危険を冒して迄、張宝を助ける理由は？」

「……今回の戦いで、沢山の人が死んだ。連合軍の兵士も、黄巾党の兵士も、沢山……。」

表情を曇らせながら、涼は言葉を紡いでいく。

「死んだ人は生き返る事は無い。……だから、一人でも多く生き残つてほしい。」

「だが、張宝が張角達と合流すれば、黄巾党の勢力が再び強くなるかも知れん。そうなれば、もっと多くの人が傷つき、死んでいくかも知れぬぞ。」

「勿論それも考えた。けど、ここで殺して火に油を注ぐよりはマシだと、俺は思う。」

星の指摘はもつともだった。

張宝は黄巾党の指揮官の一人であり、その影響力は黄巾党という反乱勢力が出来上がった事からも実証済みだ。

黄巾党の怒りを買っても、張宝を殺した方が結果的に良いと思うのも仕方がない。

だが涼は、それでも意思を曲げそうに無く、星と真っ直ぐに向き合っていた。

「……とんだ甘ちゃんだな。」

そこに、時雨が呆れながら声を出した。

その目には怒りが表れており、ジッと涼を睨みつけると、そのままゆっくりと近付いていった。

「世の中は、そんなに甘くねえんだよっ！」

そして次の瞬間、涼の服の襟を掴んで激昂した。

突然の事に桃香は慌てふためき、張宝も驚いている。

だが、星は何の反応も示さず、目の前で起きている事態を静かに見守っていた。

「……黄巾党が今迄何人殺したか知ってるのか!? 殺された人の殆どは何の落ち度も無い、普通の人達だった! それを……それをこいつの仲間が、自分達の欲望の為に殺したんだっ!!」

空いている手で張宝を指差しながら、時雨は叫んだ。

その張宝は、時雨の迫力に圧されたのか自責の念に囚われたのか判らないが、震えながら再び涙を流しだした。



「それなのにこいつを逃がすだと！ 人を斬った事も無い甘ちゃんらしい、反吐の出る理想論だな！！」

「……っ！」

時雨がそう罵ると、涼は自分の襟を掴んでいる時雨の手を掴みながら言った。

「なら……これを見るよ……。」

ゆつくりと腰に有る剣に手を伸ばす。

それを見た時雨は、今も握ったままの大剣の柄に力を込める。

一触即発。いつの間にかそんな空気が立ちこめていた。

それでも涼は剣の柄を握り、鞘から少しだけ抜く。

すると、それを見ていた時雨の表情が変わった。

「お前……。」

それを見た時雨は、いつの間にか涼の襟から手を離していた。

「……これで解ったか？」

そう言っつて涼は抜きかけていた剣を鞘に収める。

「……お前、人を斬った事あったんだな……。」

時雨はそう呟きながら涼を見つめる。

先程時雨が見たのは、剣の刃に残っていた紅い血の跡。

それは、少なくとも生き物を斬ったという証だった。

今の涼は、トレードマークとも言つべき白いコートを着ていない。何故着ていないかという点、先程の戦いで返り血を浴びて汚れた

為に脱いでいたのだ。

もしそのコートを着たままならば、時雨はそのコートに着いた返り血を見て、涼が人を斬っている事に気付いていただろう。

因みに現在の涼はTシャツにジーパンといったラフな格好。それだけでは締めまりが無いという事で、雪里が仕立てた青色を基調とした羽織りをその上に着ていた。

「俺は人を斬った上でこの決断を下した……。勿論、人を斬る苦しみも意味も知っている。」

服を整えながら、涼は静かに言葉を紡ぐ。

「甘い考えかも知れないけど……それでも、理想を捨てる気も諦める気も無いよ。」

そう言った涼の瞳には、一寸の迷いも無かった。

そんな瞳を見せられては、時雨は何も言えなかった。

「お主の負けだな、時雨殿。」

涼と時雨の衝突を見ていた星が、軽く笑いながら言った。

当の時雨はと言うと、星の言葉が凶星だったのか何も言い返さな  
いでいる。

そんな時雨を見てから、涼は未だに座り込んだままの張宝の前に  
ゆっくりと進み、その身を屈めた。

「取り敢えず、俺からの提案は以上なんだけど……どうかな？」

涼は張宝に尋ねた。

今迄張宝の処遇について散々議論してきたが、肝心の張宝自身に

は全くと言って良い程訊かなかった。

だから涼は、確認の意味を込めて尋ねているのだ。

張宝自身はこれからどうしたいのか、と。

暫くの沈黙の後、張宝は口を開いた。

「……………今の話、本気で言ってるの？」

「うん。」

「……………こんな事して、アンタに何の得が有るのよ？」

「君を助けられるっていう自己満足かな？」

「助ける振りして、後で殺すとかじゃないわよね？」

「違うから安心して。」

「じゃあ……………ちいの体が目当てとか？」

「えっ！？……………えっと、君は可愛いけど、流石にそんな卑劣な事はしないよ。」

「ふーん……………」

いつの間にか、張宝の表情から陰が無くなっていった。

その張宝は暫く涼を見つめると、笑みを浮かべながら言った。

「解ったわ。どのみち選択の余地は無いみたいだし、アンタの言う通りにしてあげる。」

「有難う、張宝。」

張宝の返事を受けて、涼は笑みを返しながら手を差し出す。

張宝がその手を掴むと、涼はゆっくりと引っ張って張宝を立たせた。

すると、張宝は涼の腕に抱きついてきた。

「えっ！？」

「ちよ、張宝さんっ！？」

突然の事に涼と桃香は驚き、時雨と星も啞然としている。

「どうせなら彼女っぽくした方が怪しまれないでしょ」

「ええっ!？」

「さっ、早く私を変装させてよ、涼」

「また呼び捨てっ!？」

まるで恋人の様に涼に密着する張宝と、曹操と同じ様にいきなり涼を呼び捨てにする張宝に驚く桃香。

涼は戸惑い焦り、時雨は呆れ、星は笑うのを堪えていた。

「え、えつと……それじゃ桃香、俺は一旦愛紗達と合流するから後をお願いっ。」

「えっ!？ ちょっと涼、待ちなさいよっ。」

「解りました涼兄さん。さあ張宝さん、変装しに行きましょう」

涼が逃げる様にその場を去ると、そこには何故かホツとする桃香や不満げな張宝、笑っている星と呆れる時雨が残された。

第六章 戦いが終わり、戦いが始まる。(前書き)

黄巾党との戦いは一先ず終わった。

だが、これで全てが終わった訳では無い。

寧ろ、これから始まるのだと、何人が気付いていたのだろうか。  
気付いても気付かなくても、時は流れていった。

2010年2月15日更新開始。

2010年4月1日最終更新。

## 第六章 戦いが終わり、戦いが始まる。

「皆、お疲れ様。」

張宝率いる黄巾党を倒したその夜、連合軍の本陣では戦勝を祝した宴が開かれようとしていた。

名目上とは言え総大将を務めた涼が正面中央の席に着き、その右隣に桃香、左隣には曹操が座っている。

更に桃香の右隣には董卓が、曹操の左隣には盧植が座り、連合軍の各指揮官が一列に座っていた。

その他の武将や軍師達は、涼達から見て正面左右に在る席に座り、総大将である涼の言葉を聴いている。

「苦しい戦いの中、皆よく頑張ってくれた。残念ながら敵将張宝は捕り逃してしまったが、今回の敗戦で黄巾党の勢いは大きく失われるだろう。」

愛紗や鈴々、雪里達が頷く。

「勿論、未だ黄巾党の全てを倒した訳では無いから油断は出来ないけど、今日は皆で勝利を祝い、疲れを癒してくれ。」

そう言つと涼は杯を手に取り、掲げながら宣言した。

「では、戦勝を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

「御遣い様に乾杯！」

涼の音頭をキツカケに皆思い思いの言葉を言いながら、杯に注が

れていたお酒を飲んでいった。

因みに、未成年の涼はお酒の代わりにお茶を飲んでいる。

この世界ではお茶も高級品なので、宴で飲んでいてもおかしくはない。

とは言え、こうした席では通常お酒を飲むものだから、お茶を飲むのは珍しい事でもある。

「涼、折角の宴なのだからお茶ではなくお酒を飲みなさいよ。」

そう言ったのは曹操だ。

手にはお酒が入った徳利を持っており、涼に勧めようとしている。

「有難う曹操。けど俺、未成年だし。」

「未成年って……確か、貴方は十七歳だって言ってたかしら？」

「そうだよ。この国じゃどうか知らないけど、俺の国では成人は二十歳からなんだよ。それ迄は飲酒も喫煙も禁止されているんだ。」

「だから飲まないと云うの？」

「ああ。」

「真面目なのね、貴方。」

「どうだろ？　ただ、ルール……規則を破って迄する事じゃ無いと思っただけさ。」

涼は苦笑しながらそう言つと茶碗を手にし、グイッとお茶を飲み干す。

「ここは貴方が居た世界では無いの？」

曹操はそう言いながら、いつの間にか持っていた水差で涼の茶碗にお茶を注いだ。

「あ、有難う曹操。それじゃ……。」

涼はお茶のお返しとして曹操の杯にお酒を注ぐ。

「有難う、涼。」

その杯を丁寧な口運び、静かに飲み干していく曹操。

片手でグイツと飲む涼とは対照的に優雅な仕草だ。

「例え住む場所が変わっても、それ迄の習慣ってそう簡単には変わらないだろ？ お酒に関してもそれと同じさ。」

涼は先程の問い掛けに答えながら、宴の為に振る舞われた料理を口にする。

肉料理も野菜料理もバランス良く配膳されているが、皆肉が好きらしく出席者の大半は肉ばかりを食べている。

因みに涼も肉料理を少し多く食べていた。

「まあ、一理有るわね。」

曹操は笑みを浮かべながら料理に手をつけた。

やはり静かに優雅に食べていく。

因みに涼は普通の食べ方なので、特に優雅でも無いし、また汚くも無かった。

「清宮様。」

「何ですか、盧植さん？」

そんな中、盧植が涼に声をかけてきた。

涼は一旦箸を休め、口の中に有る食べ物をお腹の中に送り込んでい



く。

「先程も言いましたが、改めて戦勝おめでとうございます。」  
「有難うございます。けど、さつきも言った通りこれは俺だけの手柄ではありません。皆さんのお陰で手にする事が出来た勝利です。」

盧植の祝辞を素直に受けつつ、同時に盧植達を労う涼。

因みに二人が言っている「先程」や「さつき」とは、涼が張宝を保護した後、山頂で盧植達と合流した時の事を指している。

山頂での戦いが一段落した頃、真つ先に涼と桃香の許にやって来たのは雪里だった。

雪里は涼の顔やコートに着いた血を見て一瞬驚いたが、直ぐに落ち着いて涼に手拭いと羽織を手渡した。

『この場に居る黄巾党は、その殆どが討ち取られるか投降していません。ですから顔に着いた返り血を拭き、お召し物を着替えても宜しいかと思えます。』

そう言っただけで促された涼は、雪里の言う通りに返り血を拭い、コートを脱いで代わりに羽織を羽織った。

その後、愛紗と鈴々が部隊を引き連れて合流すると、涼は自分の考えを三人に打ち明けた。

当然の如く驚き反対されたが、共に戦い始めて約一ヶ月。涼の性格を熟知している三人は意外と簡単に同意した。

それから、愛紗は雪里が戦術の為に手に入れていた情報に有った道の確認に行き、鈴々と雪里は各部隊の状況確認をし、涼と桃香は張宝の探索に向かった。

その後、無事張宝を保護した涼は桃香や星達に張宝を預け、部隊に戻った。

その時には完全に戦闘が終わっており、曹操達が部隊に合流して

いた。

『清宮様、戦勝おめでとうございます。』

そこで涼に対して祝辞を述べたのが盧植であり、また、曹操達もそれに倣っていった。

「けど、貴方や劉備が奇襲攻撃を仕掛けなければ勝つ事は難しかったし、例え勝っても甚大な被害を被っていた筈。だから、今回の一番の功労者は貴方よ。」

二人の話を聞いていた曹操がそう言うと、涼は照れながら言った。

「それなら、桃香達もその中に加えてくれよ。俺なんかよりずっと頑張ってくれたんだから。」

「確かに、関羽や張飛、そして徐庶の活躍には目を引くわね。でも……。」

曹操は涼の顔を、そして手を見つめると、顔を近付けて小さな声で言った。

「人を斬った事が無かった貴方が人を斬った。それだけでも、やっぱり貴方が功労者だと思っただけど？」 「……俺が人を斬った事が無かったって、何故解ったんだ？」

「そりゃ解るわよ。貴方にはそんな雰囲気が無かったし、それに……。」

「それに？」

「それに、戦場で白い服を着るなんて普通しないしね。」

返り血を浴びる可能性が高いのだから、その意見はもっともだ。

現代でも、白い服は汚れが目立つという理由で敬遠される事が有

る。

「まあ、あの服は俺が違う世界から来たって証明したいなものだしなあ。」

涼はそう言うと再びお茶を飲む。因みに、理由はそれだけでは無いのだが。

「それに、人を初めて斬ったのは俺だけじゃない。桃香……劉備も同じだしね。」

「どうやらその様ね。あの娘も少し雰囲気が変わったみたいだし。」

そう言うと、涼の右隣に居る桃香を見る。

桃香は隣に居る董卓と話が弾んでいるらしく、笑顔を浮かべながら食事をしていた。

だが曹操は気付いていた。その笑顔の中に有る「陰」に。

(まあ、これは戦いに身を投じた人間全てにかかる病気みたいなもの。これに勝てないのなら、戦場に身を置くべきではないわ……。)

戦いを続ける以上、これから人を斬る事が有るだろう。

その度に落ち込んでいては、何れその心身を壊してしまう。

(劉備……そして清宮涼。貴方達はどうなるかしらね。)

それとなく二人を見ながら、曹操は思った。

どうせなら、強くなってその姿を私に見せろ、と。

何れ敵対するかも知れない相手に対してついそう思ってしまうのは、曹操の悪い癖である。

曹操がそんな事を思っているとは涼や桃香は露程にも思っており、曹操は勿論、董卓や盧植、更には愛紗達と飲み交わしている。

そこに、二人の少女がやってきた。

「清宮、見回り終わったぞ。」

「今の所、異常は有りません。」

涼の前に並んで立つ二人は、対照的な外見と雰囲気を持っていた。

「二人共お疲れ様。ゆっくり休みながら宴の料理を堪能していったね。」

「有難うございます、清宮様。」

「よしっ、俺もっ腹ペコなんだよな。雫、早く食いに行こうぜ。」

「ちよっと時雨ちゃんっ、ちゃんと清宮様達に挨拶しないとっ。…

…ああもっっ！」

丁寧に挨拶した少女・雫に対し、もう一人の少女・時雨は挨拶もそこそこにして空いている席に向かった。

残された雫は、困りながらもきちんとして涼達に挨拶してからその後を追った。

「あの……清宮さん、あの人達は？」

そんな二人を見ていた董卓が、涼に向き直りながら尋ねる。

「ああ、彼女達はさっき仲間になった娘達だよ。」

「さっきって事は……投降した黄巾党の兵なのかしら？」

曹操も董卓と同じく気になっていたらしく、推測を述べてみる。

「いや、二人は桃香の友達なんだ。」

「劉備の？ ならあの二人は義勇軍に入ったの？」

曹操のもつともな疑問を受け、涼と桃香は説明を始めた。  
時雨達は、黄巾党の殲滅と桃香との合流を目的として旅をしていた事。

戦場となったあの山に、連合軍とは反対側の小道から登った事。  
そして戦いの最中に偶然出会い、そのまま仲間になった事等を簡潔に説明していった。

「……それじゃあ、その方達全員が義勇軍に参加したって事ですか？」

説明が終わると、董卓が確認の為の質問をした。

「いや、少なくとも三人は未だ旅を続けるらしいよ。仕える主を見極めたいってさ。」

「つまり、私達じゃ仕えるに値しないって事かしら？」

涼が董卓にそう答えると、曹操が不満そうに言った。

「そうじゃないと思うけど。多分、簡単に決めたくないんじゃないかな？」

「ふうん……。まあ良いわ。それで、その残りの娘達はどこに居るのかしら？」「皆この中に居る筈だよ。……ああ、さっきの二人と一緒にみたいだね。」

涼が時雨達の居る方を指差すと、曹操だけでなく董卓や盧植も目を向けた。

そこには確かに時雨と雫が並んで座っていた。

そして、時雨の右側にセミロングの茶髪の少女と水色の髪の少女、雫の左側に眼鏡の少女と長い金髪の少女が同じ列に並んでおり、仲良く食事をしていた。

「皆さん仲が良いんですね。」

「一緒に旅する様になって、それなりの時間が経っているみたいだからね。けど、何だかずっと前からの知り合いみたいだ。」

時雨達の様子を見た董卓が、微笑みながら言った。それは涼も同じ感想だった。

何よりも驚いたのは、“その場に居る張宝”迄もが何の違和感無く時雨達と接していたからだ。

(まあ、変にビクビクして怪しまれるよりマシか。)

張宝を宴に参加させるのは流石に反対意見も多かったが、「木を隠すなら森の中」という理由から最終的には皆納得した。

勿論、涼の性格から仕方無くといった感じもあったが。

「成程ね……。後で勧誘してみようかしら。」

「するのは勝手だけど、彼女達の意味も尊重してやりなよ？」

「解っているわよ、それくらい。」

当然の事を注意されたからか、曹操は少し機嫌を悪くした様だ。なので涼は話を変える事にした。

「ところで、これからの事なんだけど。」

「何？」

「張宝の部隊は倒せたけど、黄巾党には未だ張角や張梁の部隊が残っている。だからこれからも戦いは続く筈だよな？」

「そうね。」

曹操は涼の話に乗ってくれたのか、真剣な表情になって聞きだした。

「なら、俺達はこれからどう戦うかの指針を決めないといけない。」  
「……つまり、このまま連合を続けるかどうかという事かしら？」  
「ああ。」「私としては、このまま連合を組んでも良いのだけど……」  
「何か問題でも有るの？」

口籠もった曹操に違和感を感じた涼は、曹操を見つめながら尋ねる。

曹操は暫く間を置いてから答えた。

「私の軍の兵数は連合軍の中で二番目に少ない。このままでは、余り戦力になりそうも無いわ。」

「そんな事言ったら、義勇軍の数は三千弱だから連合軍の中で一番少ないんだけど。」

「けどそっちには関羽と張飛という武將に、徐庶という軍師が居る。それに比べたら、こっちは軍師の桂花くらいしか連れてきていないから、どうしても見劣りするわ。」

そう言つと曹操は杯を口に着け、お酒を飲み干した。

「……だから、一旦連合軍から離れて部隊を再編成し、それから改めて合流したいのだけど……どうかしら？」

「良いんじゃない？ 連合軍としても、戦力が増強されるのは心強いし。」

「有難う、助かるわ。」

涼から了承を得た曹操は笑みを浮かべながら再びお酒を飲み、そして左隣に居る盧植に向き直った。

「翡翠様はどうなさいますか？」

話を振られた盧植はお酒を飲んでいたので、一旦杯を置いてから質問に答えた。

「私はこのまま連合軍に残る予定ですよ。……董卓さんはどうします？」

盧植は、曹操の問い掛けに簡潔に答えると、続けて董卓に質問を投げかけた。

急に話を振られた董卓だが、慌てる素振りは全く無く、常の静かな口調で答えていった。

「……元々、連合軍は私達の軍と清宮さんの義勇軍が手を取り合っ  
て出来たものです。その結果、この様な大勝に繋がったのですから、  
私達はこの共闘を止めるつもりはありません。」

「なら、後は涼がどうしたいかで方針は決まるわね。」

董卓が答え終わると、曹操が涼を見ながら言った。  
それにより、皆の視線が自然と涼に向けられる。

「さつき曹操にも言ったけど、連合軍の中では俺達義勇軍が一番兵  
数が少ない。だから寧ろ、連合軍に参加し続けるのをこちらから求  
めたいくらいだよ。桃香も、それで良いよね？」

「うん。私も、涼さんと同じ考えだよ。」

「なら、決まりですね。」

涼や桃香の言葉を聴いた董卓が、両手を合わせながら微笑む。

曹操は一時的に離脱するものの、最終的には戦力を増強して合流  
する。

なら、負ける事は無い筈。



董卓の笑みは、戦いの終わりが見えた為の笑みだった。連合軍の指針が定まると、涼達は再び宴会モードに戻っていった。そうして宴は夜更け迄続き、やがて解散した。

「うーん、頭が痛いよー。」

「飲み過ぎだよ、桃香。」

顔を紅らめ、フラフラになりながら歩く桃香を支えながら、涼は自分達の天幕に向けて戻っていた。

途中迄同じ道なので、董卓や曹操、盧植も同行している。

「フフ……玄德は昔からはしゃぎ過ぎる傾向にありましたが、今も変わらない様ですね。」

「うっ……面目無いですう……。」

盧植に言われてうなだれる桃香。それを見て笑う涼達。

宴の余韻もあつて、皆朗らかな気分になっていた。そんな中、

一人の兵士が息を切らせて涼達の許にやってきた。

「どうかした？」

一応、今日一杯は未だ連合軍の総大将である涼が兵士に尋ねる。

兵士は息を整える事もせずに答えた。

「はっ！ さ、先程っ、洛陽から官軍が参りまして、盧植將軍に話が有るとの事でしたっ。」

「私に？」

突然の事に盧植は少し戸惑いながら声を出した。

「ひよつとして、今回の勝利に対する恩賞かな？」  
「まさか。今日の勝利の報が洛陽に届いたとしても、その返事がこんなに早く来る筈が無いわ。」  
「それに、もし今回の勝利に対する恩賞なら、盧植さんだけというのはおかしいです。」

桃香は笑みを浮かべながら推測するも、曹操と董卓によってそれは否定された。

涼が居た世界なら、情報の伝達は数秒も有れば可能だが、この世界にはインターネットといった便利な物は疎か、電話すら無い。

交通の手段にしても、飛行機は疎か電車も自動車も無い。そんな世界では遠くの街に情報が届くのに時間が掛かるし、当然ながら返事も遅くなる。

因みに、現在涼達は広宗の南西に居るが、ここから洛陽迄はどんなに馬を飛ばしても一日で往復出来る距離では無い。

また、黄巾党との戦いに勝利した事による恩賞だとしても、盧植だけというのは確かにおかしい。

少なくとも、奇襲部隊を率いた涼や劉備に無いのは変だし、盧植と共に本隊を率いた董卓と曹操に無いのも不自然だ。

なので、洛陽から来たその官軍が恩賞を届ける為に来た訳では無いのは確実だ。

「一体何の用かしら……？ 皆さん、済みませんが私は一足先に帰らせてもらいますね。」

「解りました。では盧植さん、お休みなさい。」

「お休みなさい。」

そう言って涼達は盧植と別れ、各々の天幕へと戻っていった。

翌朝、昨日の疲れもあって天幕の中に在るベッドで熟睡していた涼は、桃香に強引に起こされようとしていた。

「ん……あと五分……。」

未だ寝足りない涼はそんな呑気かつ定番の言葉を口にする。だが、この後に桃香が言った言葉によって、そんな眠気は一瞬にして吹き飛んだ。

「涼兄さん、早く起きて下さい！ 先生が……盧植先生が捕まりそうなんですっ！！」

「……何っ!？」

予想外の事に驚いて飛び起きた涼は、桃香に詳しい事情を訊こうとするも、慌てている所為か説明がよく解らなつた。

「と、兎に角早く来て下さいっ!!」

そう言つて桃香は涼の手を引っ張つて天幕から連れ出そうとするが、寝間着姿の涼は着替える時間をくれと言つて天幕から出るのを躊躇つた。

「直ぐ着替えて下さいねっ!」

桃香はそう言つて天幕を出て行った。流石に着替えの最中迄天幕の中に居るつもりは無かつた様だ。

桃香が出て行った後、涼は急いで着替えを済ませた。時間がかかつては桃香が戻ってくるかも知れなかつたし、何より涼自身も焦っていたからだ。

着替えを終えた涼が天幕を飛び出すと、直ぐ側で桃香が待つており、彼女に案内されて盧植の許に向かつた。

桃香に連れられてやってきたのは、それぞれの陣からの合流地点

となっている広場。

そこには各陣営の武将や軍師、兵士達が多数集まっていた。

「ですから何故、盧植將軍が捕まらないといけないのですか!?!」

そんな中、洛陽から来た官軍の兵士達に向かって、一人の少女が凄惨な剣幕でまくし立てていた。

膝迄有る長い銀髪に野球帽の様な黄色い帽子を被り、黄色いワンピースを着ているその少女は、涼がよく知る人物だった。

「雪里、落ち着け。」

そう言って雪里 - 徐庶に声をかける涼。

だが雪里の怒りは一向に治まる気配は無い。

「これが落ち着いていただけますか?!」

雪里は振り向き様に涼に向かって大声をあげる。その形相は普段の冷静な雪里とは、余りにもかけ離れていた。

涼はその迫力に圧されるも、何とか平静さを保ちながら尋ねる。

「そう言っても、俺はさっき起きたばかりで事態を把握していないんだ。済まないが説明してくれないか?」

涼がそう言くと、雪里は怒りを治めないまま説明を始めた。

「どつもごつもありませんっ! 洛陽の連中は、盧植將軍を職務怠慢という有り得ない容疑で逮捕するつもりなんですっ!」

「先生が職務怠慢だなんて、絶対に有り得ません!」

雪里の説明を聞いていた桃香が否定の声をあげる。すると、その場に居た連合軍の人間全てが頷いた。

「ですが、洛陽の連中はそう思っていない様です。彼等を派遣したのがその証拠！」

雪里は視線だけを洛陽からの兵士達に向けた。その視線には明らかに殺意が籠もっており、眼力だけで人が殺せそうな感じだ。

「落ち着きなさい、徐庶。」

そんな彼女に、一人の女性が優しく、かつ諫める口調で話し掛けてきた。

「先生！」

「盧植殿!!」

桃香と雪里を始めとして、その場に居た連合軍の人間全てが盧植に目を向けた。

盧植はストレートヘアに常の服装である和服とドレスを足して二で割った感じの服を着ていたが、その手には枷が詰められていた。

その姿を見た桃香達は嘆きの表情を浮かべ、ある者は涙を流し、またある者はいたたまれなくなつて視線を逸らした。

「先生……!!」

桃香と雪里、そして涼が盧植の許に向かう。盧植の周りには洛陽からの兵士が居て、彼等を疎んでいる様だった。

その直後に董卓や曹操迄も現れると、尚更その雰囲気は強くなつたが、誰もそんな事を気にはしなかった。「玄德、そう嘆く必要は

有りません。」

「でも……。」

盧植に心配されるも、やはり表情は曇ったままの桃香。そんな桃香の手を握りながら盧植は続ける。

「私は何も疚しい事はしていません。ですから、何れ誤解は解けるでしょう。」

そう言われて少しだけホツとした表情になる桃香。

勿論、そう簡単にいかない事は桃香もよく解っていたが、それは表情に出さない様になっている。

「ですが、この状況で盧植殿が居なくなつては、兵達の士気に係わります。」

「でしょうね。でも、それを解決する為の手は有ります。」

雪里に指摘された盧植は、そう言つとゆつくりと涼を見据えた。

急に視線を向けられた涼は、何事かと思ひ緊張する。

「清宮様、貴方に私の軍全てを委ねます。」

「えっ!？」

突然の事に驚く涼。

それは桃香達も同じだったらしく、皆驚きながら涼と盧植を交互に見つめた。

「貴方は天の御遣いであり、昨日の戦いではその知略と行動力を私達に見せてくれました。そんな貴方になら、安心して兵達を預けられます。」

「……解りました。未だ未だ若輩者ですが、謹んでその申し出をお受け致します。」

「有難うございます、清宮様。」  
安心した盧植は頭を下げて感謝を示した。

「でも、一つだけ良いですか？」

「何でしょう？」

「俺はあくまで盧植さんの兵士達を預かるだけです。盧植さんが戻ってきたら、その時はきちんと兵士達をお返しします。」

「……解りました。これ以上は気を使わせるだけの様ですし、それで構いませんよ。」

今度は逆に、涼からの申し出を受ける盧植。

盧植はその優しさに微笑み、口を開いた。

「では、清宮様には兵達だけでなく私の真名も預けましょう。」

「良いのですか？」

「ええ。これは私の信頼の証と思って下さい。」

「解りました。」

涼が承諾すると、盧植は姿勢を正してから改めて自己紹介を始めた。

「私は、姓は“盧”、名は“植”、字は“子幹”、真名は“翡翠”。この真名、貴方に預けます。」

「丁重にお受けします、翡翠さん。俺には真名が無いので、これからは名前の“涼”でお呼び下さい。」

「解りました、涼様。」

「あの、“様”は別に付けなくて良いですから……。」

「フフ……これも私なりの信頼の証ですから、お気になさらぬ様に。」

「わ、解りました。」

悪戯っぽく微笑む盧植・翡翠に対して、涼は苦笑しながら承諾した。

一連の話が終わると、洛陽からの兵士達が翡翠を急かし始めた。一応今迄待っていた様だ。

「解っています。……董卓さん、連合軍を頼みますね。」

「はい、盧植様。どうか御安心下さい。」

董卓は表情を引き締めて翡翠に応える。

「華琳ちゃん、皆さんと力を合わせ、この戦いを一日でも早く終わらせてね。」

「解っています、翡翠様。……今暫くの辛抱ですから。」

曹操は怒りを押し殺した表情のままそう言った。

「徐庶さん、貴女は軍師です。ならばその本分……忘れてはなりませんよ。」

「はっ……しかと心に刻み付けておきます……っ。」

雪里は必死に涙を堪えながら頭を下げた。

「玄德……涼様や皆と力を合わせるのですよ。そうすれば、皆が望む平和な世の中に必ず戻るのでから。」

「はいっ……先生……っ!!」

桃香は涙を堪える事が出来ず、遂に翡翠に抱きついて声をあげて



泣いた。

抱き締める事が出来ない翡翠は、優しい言葉をかけて桃香を宥めていった。

「では涼様……後を頼みます。」

「はい、翡翠様。」

涼は恭しく頭を下げ返事とした。

その後、翡翠は洛陽からの兵士達に連れられて連合軍から去っていった。

翡翠が連合軍を去った後、兵士達は動揺していたが、涼達の指導によって何とか落ち着きを取り戻した。

また、翡翠から涼に託された盧植軍の兵士達は前もって伝えられていたらしく、大きな混乱は無くそのまま義勇軍に組み込まれた。

本来なら大軍である盧植軍に義勇軍が組み込まれそうだが、その辺りも翡翠がちゃんと指示していた様で、盧植軍の兵士達は誰一人として不満を口にしなかった。

その後、曹軍は軍備増強の為連合軍から離脱するも、周辺地域に住む若者達が参加した為、兵の数はさほど変わらなかった。

こうして再編成と休息を終えた連合軍は進軍を再開した。

広宗に残る旧張宝軍と対峙していた皇甫嵩將軍や朱儁將軍率いる部隊と合流し、旧張宝軍を撃破。

その後、皇甫嵩將軍と朱儁將軍が豫州に向かうと、連合軍は荊州・南陽へ向かった。

連合軍はそこで張曼成、趙弘、韓忠、孫夏といった黄巾党南陽部隊と交戦。四ヶ月もの長き戦いの末、これに勝利する。

これ程時間がかかったのは、敵が宛城に立て籠もって籠城戦に持ち込んだ為である。

だが、孫堅を始めとした部隊が朱儁將軍から派遣されると、彼等の活躍もあって均衡が崩れ、遂に勝利を収めたのだった。

その後、各地での官軍の勝利が伝えられる様になった。黄巾党の勢いは完全に無くなっていたのだ。

そんな中、荊州・宛城にて周辺地域の安定に努めている連合軍に、ある一報が届いた。

「どうやら曹操が、張角・張梁を討つたらしい。」

その報せを受けた涼が、連合軍の軍議で発表した。

因みに、翡翠や曹操が連合軍を去ってから涼が連合軍の総大将を務めている。

「では、黄巾党は壊滅したという事かしら？」

先の戦いから連合軍に参加している孫堅が尋ねる。涼の予想通り、孫堅も女性だった。

孫堅は、桃色の長髪を結い上げた所謂ポニーテールの髪型をしており、服装は深紅のチャイナドレスを大胆に加工した物を着ている。年齢は涼より一回り以上上の筈だが、その美貌や色香は年齢を感じさせない程若々しい。

その隣には孫堅と似た姿と服装の少女が座っている。

彼女の名は孫策。孫堅の娘であり、後継者と目されている人物。

孫堅の若い頃はこんなだったのかなと思わせる程、二人は良く似ていた。

「実質的にはそうなるね。張角と張梁が討たれ、残る張宝は依然として行方不明だ。もし張宝が再起したとしても、以前の様に混乱が広がる事は無いだろう。」涼は孫堅達を見ながら言った。

百戦錬磨の豪傑と言われるが、今はそんな雰囲気を感じさせず、柔らかな物腰の孫堅と、常に殺気立たせている孫策。

二人は良く似た姿をしているが、印象は全く違っていた。

「けど、残党は居るんでしょ？ だったら戦いは未だ終わらないわ。」

孫策は刺々しい口調でそう言った。

確かに残党は居る。涼達連合軍が苑城に留まっているのも、先の戦いで投降せず逃げ出した黄巾党を討伐し、地域の治安回復を図る為だ。

「確かにね。だから今情報収集をしている所だよ。それが終わったから作戦を練って……。」

「遅い！ それでは奴等を逃がすだけよ!!！」  
涼の言葉を遮って孫策が叫んだ。

その瞬間、その場に居た全員に緊張が走る。

因みにここには、上座に涼と桃香、雪里が、涼から向かって左側に董卓と賈馱、そして旧盧植軍の武將と軍師が一人ずつ。右側に孫堅と孫策、そして孫堅の右腕たる武將、程普といったメンバーが居た。

その程普が孫策に言った。

「若君様、少し落ち着かれると宜しいかと存じます。」

孫策を見ずに静かな口調で言った程普を、孫策はキツと睨み付ける。

因みに、やはり程普も女性だった。「何よ、泉菜せんらいは私より清宮の味方をするつもり？」

程普の真名と思われる名前を呼びながら、孫策は程普の前に立った。  
場の空気がより一層張り詰めていく。

涼を始めとしたメンバーは皆どうするべきか悩んでいるが、孫堅は悩むどころか一向に動こうとしなかった。

「そうですね……今の若君様よりかは、総大将の味方をするでしょうね。」

「……孫家を裏切るつもり？」

「ふむ……若君様はもう少し言葉の勉強をなされた方が宜しいようですね。私は、若君様よりは総大将と言いましたが、殿より総大将とは一言も言っておりませぬよ。」

段々と語気が強くなっていく孫策に対し、相変わらず冷静な口調と態度のままの程普。

その態度が気に障ったのか、孫策は益々苛立っていく。

「……つまり、私は清宮より劣っていると云うの？」

「さて、それくらいは御自身でもお分かりになるのでは有りませんか？」

程普のその一言で、孫策の堪忍袋の緒がバツサリと切れた。

程普の真名を叫びながら、孫策は座ったままの程普の左側頭部に向けて右足を蹴り上げた。

だが、程普は左手を瞬時に動かして孫策の右足首を楽々と掴んだ。お陰で孫策は動けなくなった。すると、程普がそのまま立ち上がったので、足を掴まれたままの孫策はバランスを崩して床に倒れた。孫堅と同じく大胆な露出が有るチャイナドレスを着ている孫策は、倒れた際に下着を露出させている。

幸い、この場に居る男は涼一人だったので、恥ずかしさは少ないかも知れない。

「二人共、そこ迄よ。」

そう言ったのは、今迄静観していた孫堅だった。

途端に程普は手を離し、孫策もハツとして孫堅を見た。

孫堅の表情は先程迄とは打って変わって、厳しく険しいものになっている。

「これ以上軍議を乱し、私の顔に泥を塗るつもりなら……幾ら愛娘や戦友とは言え、容赦はしないわよ。」

「承知致しました。」

「わ、解ったわよ……。」

孫堅は氷の様に冷たい口調で喋り、まるで見た者を射殺す様な眼を二人に向けた。すると、先程迄あれ程怒っていた孫策が、瞬時に大人しくなった。

孫策が席に戻るのを確認すると、孫堅は涼に向き直って口を開いた。

「お騒がせしたわね。軍議を続けてちょうだい。」

「あ、ああ。」

そう言った孫堅の口調と表情はとても穏やかなものだった。激昂していた孫策を瞬時に萎縮させた人と同一人物とは、とても思えない。

その後再開された軍議では、情報収集を進める事、食糧危機に陥っている民の為に食糧を分け与える事、そして、治安回復の為に連合軍の各部隊を周辺に配置する事が決まった。

軍議終了後、孫策が軍議中の振る舞いについて涼に謝罪した。

勿論涼は許したが、孫策は簡単に許された事を意外に思ったらしく、暫く涼を見つめていた。

「……貴方、変わってるわね。」

孫策はそう言って退室した。

「……変わってるかなあ？」

涼のそんな呟きに対し、雪里と賈馱は「変わっている。」との評を下したのだった。

その後、各部隊の視察や街の様子の確認等をした涼は、疲れながら城へと戻った。

城に在る広場の一つに足を運ぶと、そこでは孫策と程普が斬り合っていた。

軍議中の事もあったので一瞬間間割れかと思っただ涼だったが、直ぐ傍で孫堅が二人の戦いを見ていた為、それが模擬戦だと解った。

「随分本格的な鍛練だね。」

涼がその声をかけながら近付くと、二人は一旦手を止めて涼に挨拶をする。

忘れてるかも知れないが、涼は連合軍の総大将なので、彼女達の上官なのだ。

「これぐらいやらないと身に付かないからね。」

孫堅が涼に近付きながら言った。

「孫堅さん。」

「私は今貴方の部下なのだから、さん付けは要らないと言った筈だけど？」

「済みません。けど、これが俺のやり方なんです。」

苦笑しながら涼が言うと、つられたのか孫堅も笑った。

「やっぱり貴方、変わってるわ。」

孫策に言われた事と同じ事を孫堅にも言われた涼だった。

その為改めて苦笑していると、孫策が近付きながらこう言った。

「丁度良いわ。私と手合わせしてくれないかしら？」

「えっ!？」

突然の申し出に涼は困惑した。

「幸い今はあの五月蠅い関羽も居ないし……良い機会だと思ったんだけど？」

「そうかも知れないけど、わざわざ手合わせしなくても結果は見えてるよ。」

涼は自分より孫策の方が強い事を解っていたので、苦笑しながらそう言った。

だが、孫策はそれを違う意味にとったらしい。

「ふうん……そんなに腕に自信が有るのなら、尚更手合わせしたいわね。」

「……え？」

全く想像していなかった言葉を聞いた涼は、苦笑する事さえ出来ずに思考が停止してしまった。

そして思考が再び活動を始めると、涼は現状を理解した。

(もしかして孫策さん、すっごい誤解をしているのか!?)

「どうやら孫策は、涼が言った「結果は見えてるよ。」を「自分（涼）が勝つ。」という意味に捉えたらしい。」

「いや、俺は別に強くないから。」

「強くもないのに連合軍の総大将をやれる訳無いじゃない。」

「それがやれてるんだよなあ……。」

慌てて否定するも、孫策は全く信じようとしない。それどころか、総大将である以上はそれなりの実力が有ると考えている様だ。

「それに、本当に実力が無いのなら、私は貴方に従うつもりは無いわ。」

「困ったなあ……。」

急に冷たい口調になった孫策は、殺気立った雰囲気になって涼を見据える。

凄まじい殺気が涼を襲うが、数ヶ月間戦場に居るだけあって、涼はたじろぐ事すらしなかった。

だが、それが却って孫策に戦う興味をそそらせる事になってしまった。

「三つも剣を持っているんだし、それなりに強いんでしょ？ だったらその実力を私に見せてよ。」

「うーん……多分見せる間も無く終わっちゃうと思うよ。」

涼はあつという間に自分が負けるだろうという意味で言った。

だが、またも孫策は違う意味に捉えてしまった。

「つまり……私なんか簡単に倒せるって事かしら？」

「何でそうなるんだっ!？」



二度も勘違いされて、思わずツツコミを入れる涼。  
だが、そのツツコミすら今の孫策の耳には届いていない様だ。

「ゴチャゴチャうるさいっ！ そっちが来ないなら、私から行くわよっ！」

「ええっ！？ ちょっと、二人共見てないで孫策さんを止めて下さいよっ！」

剣を構える孫策を見た涼は、慌てて周りで静観している孫堅と程普に助けを求める。

だが孫堅は、

「頑張りなさい」

と言って手を振り、また程普は、

「お気をつけ下さい。」

とだけ言って、助けようとはしなかった。

「ちょっと二人共ーっ！」

「余所見するとは余裕ねっ！」

涼が孫堅と程普に文句を言おうとしていると、孫策が剣を構えたまま走ってきた。

涼は慌てて雌雄一対の剣の一振り、「紅星」を抜いて構える。

その間にも孫策は剣を右上に振り上げながら近付き、やがて振り下ろした。

「くっ！」

キーン！ という金属音が辺りに響き渡ると、そこには剣と剣を交えている涼と孫策の姿があった。

（何て重い一撃だよ……普通に受け止めてたら剣が折れたんじゃないか？）

（へえ……受ける際に剣を斜めにして衝撃を逃がした……。やっぱり、結構楽しめそうね。）

涼は、孫策が振り下ろした剣に対して自分の剣を垂直に構え、更に剣と剣が当たる瞬間に斜めに倒した。

そうする事で剣や自分に対する衝撃を和らげる事が出来る。まともなぶつかるのは、体にも剣にも良くないのだ。

暫くそのままの姿勢で互いに剣を押し合い、次の一手を探っていた両者だったが、先に動いたのは孫策だった。

「はあっ！」

「ぐっ……！」

孫策は剣を押し付けたまま蹴りを放ち、涼の左脇腹を抉った。

内蔵が揺れる感触を初めて感じる。斬られる痛みより、ある意味苦しい痛みが涼を襲った。

痛みの余りバランスを崩して倒れそうになる涼。そしてそんな涼に向かって剣を振り下ろす孫策。

涼は痛みを堪えながら倒れ込む様に前に進み、孫策の足下に転がり込む。

そうやって孫策の一撃が涼では無く地面に直撃すると同時に、涼は孫策の左足を掴んで力任せに引っ張った。

「きゃあっ!？」

突然の事に立つ事が出来なくなった孫策は、剣を掴んだまま後ろに倒れた。

だが、流石は孫策と言うべきか、この突然の事態にも孫策はきちんと受け身をとってダメージを最小限に抑えている。

更に、掴まれていない右足を動かして涼を蹴りつけようとしていた。

だが、その蹴りは目標に当たる事無く空を切った。

「……っ！」

「……っ。」

涼は仰向けに倒れた孫策に馬乗りになり、その喉元に剣を突き付けていた。

孫策を地面に倒した直後、涼は孫策がどう反撃するか予測した。

倒れている人間が立っている相手に対してとる攻撃手段は限られている。

テレビで観た総合格闘技等では、倒れた選手が立っている選手の足を蹴ってダメージを与えていた。涼はそれを思い出し、先に動いたのだ。

「……斬らないの？」

「仲間を斬る必要は無いだろ。」

孫策の問い掛けにそう答えると、涼はそのままの体勢で剣を納め始めた。

「……未だ終わってないわよ。」

「え？」

涼が疑問符を口にする、孫策は涼の服の襟を掴んで力一杯投げ

飛ばした。いつの間にか自分の剣を手離していた様だ。

「うわああっ！！」

投げ飛ばされながらそんな悲鳴にも似た声をあげた涼は、孫策と違って上手く受け身を取れなかった。その為、固い土の上に叩きつけられた涼は一瞬呼吸が出来なくなり、やがて咳き込んだ。

「戦いは、相手を殺すか完全に屈服させる迄続くものよ。そんな事も解らないのなら貴方……死ぬわ。」

そう言って孫策は立ち上がり、剣を搦んだ。

涼は漸く立ち上がるが、剣を抜こうとはしない。

「……そんな事は解ってる。けど、今は殺し合いをしていた訳じゃないだろ。」

「まあね。……けど、私は言ったわよね？ 自分より弱い相手に従う気は無いつて。」

「……確かに、そんな事を言ってたね。」

痛むのか、蹴られた左脇腹を右手で押さえながら会話を続ける涼。孫策が言っている事は間違っていない。寧ろ正しいだろう。

この世界は乱世の兆しを見せている。そんな中では強い者が民や兵を率いるのが普通だ。

それなのに、弱い者が“天の御遣い”というだけで総大将になっている。それが孫策には気に入らないのだろうか。

（まあ……部隊の指揮は上手いし、ちゃんと自らも戦っている姿勢は認めるけど。）

孫策は涼を睨み付けながらそうも思う。

(けど、だからといって今のままじゃ私の気が収まらないのよね。)

認める所は有っても納得出来ない事も有る様だ。

(……だから、少し怪我するかも知れないけど、我慢しなさいよね。仮にも貴方は、私達の総大将なんだからっ！)

心の中でそう語り掛けながら、孫策は涼に向かって走り出した。

その頃城の廊下では、董卓が軍師であり親友である少女に話し掛けていた。

「詠ちゃん、街の様子はどうだった？」

「大分安定してきたわ。これなら、近い内に洛陽に凱旋出来そうね。」

それに対し、「詠」という真名を呼ばれた親友、賈馱は簡潔に感想を述べた。その顔には少し疲れが見えている。

「詠ちゃん、少し休んだ方が良いよ。何だか顔色が悪いみたい……。」

「有難う、月。けど、これくらいで休んでいたら、アイツに何言われるか解ったもんじゃないし。」

「アイツって……雪里さんの事？」

董卓を真名である「月」と呼んだ賈馱は、「アイツ」と言いながら顰めつ面になった。そんな賈馱に対して、董卓は疑問符を浮かべながら徐庶の真名を口にした。

「そう！ アイツったら、連合軍の筆頭軍師だからか知らないけど

大きな顔してるし、何だか癪に障るのよ。」

「けど詠ちゃん、筆頭軍師を決める時に辞退したのは誰だったかな？」

「それは……ボクだけど……。けどそれは、月が連合軍の総大将じゃないから辞退したただけだし……。」

「けど辞退しちゃったんだよね？」

「う、うん……。」

笑顔のまま確認する董卓に、賈馱は口ごもりつつ答える。

「だったら少しは我慢しないとね。それに、雪里さんは悪い人じゃ無いよ。」

「月は優し過ぎるのよ。……あの男にだって優しいし……。」

「あの男？」

賈馱の言葉が誰を指すのか解らない董卓は、賈馱の言葉を繰り返した。

「うちの総大将の清宮涼の事よ。」

「あ、ああ……。」

言われて漸く気付いたらしく、董卓は途端に焦りの表情を見せる。そんな董卓を複雑な表情で見つめながら、賈馱は話を続けた。

「……確かにアイツはうちの総大将だけど、実績で言ったら未だ未だ月の方が上なんだからね。今からでも役職を取り替えたって良いと思うわよ？」

「だ、駄目だよ詠ちゃんつ。そんな事したら連合軍が分裂しちゃって大変だよ。……それに、私より清宮さんの方が指揮は上手じゃない。」

「……そうなのよねえ。徐庶が上手く補佐しているからだろうけど、

指揮や鼓舞に無駄が無い。」

「あと、私と違って一人でも戦える。」

「総大将が自ら前線に赴くのはどうかと思うけど、実際、意外とやるのよね。これも関羽や張飛のお陰かしら。」

この会話から察すると、どうやら董卓と賈馱は涼を認めている様だ。

まあ、賈馱は何だか釈然としていない様だが。

「愛紗さんと鈴々ちゃん、それに今は時雨さんも清宮さんの武術の先生だもんね。」

「天の国じゃ武器を持った事すら無かつたらしいけど、今じゃ黄巾党みたいな賊くらいなら簡単に倒せる腕前になってるみたいよ。」

董卓が笑顔のまま話すと、賈馱もつられて微笑みながら応えた。

二人が言う通り、涼は義勇軍結成以来ずっと愛紗と鈴々に武術の稽古をつけて貰っている。また、最近では時雨も稽古に加わっており、涼の実力は飛躍的に向上している。

因みに、桃香も一緒に稽古をしているのだが、涼の様には強くなっていないかったりする。

「うん。だからやっぱり私より清宮さんが総大将に合ってるんだよ。」

「……まあ、月がそう言うなら良いけどさ。」

相変わらず笑顔のままの董卓にそう言った賈馱だったが、暫く考えてから話し出した。

「そう言えば、月は関羽達とは真名を預け合ってるんだよね?」

「うん。皆さんともう長い付き合いだしね。」

董卓達が涼達と出会い、義勇軍を結成してから、間もなく五ヶ月になるうとしていた。

その間に兵士達は勿論、武将や軍師、指揮官も皆交流し、親交を深めていた。

董卓が関羽達の真名を呼んでいるのがその証だ。

「……………それなら、ね。」

「……………何？」

賈馱が歯切れが悪そうに話した事に気付いたのか、董卓は不安な表情になって聞き返した。

賈馱はそんな董卓の眼を見ながら言葉を繋ぐ。

「……………何で清宮には真名を預けていないの？」

「え……………ええっ!？」

思いも寄らない質問だったのか、董卓は大声をあげて驚いた。

何故か顔が真っ赤になっている董卓は、焦りながら賈馱の問いに答える。

「そ、それは……………っ。」

「それは？」

「えっと……………ほら、清宮さんは“天の御遣い”だから、畏れ多いし……………」

「けど、関羽達は真名を預けているわよ？」

「へう……………けどほら、愛紗さん達は義勇軍結成時からの仲間だし……………」

「張宝軍との戦いの後に仲間になったあの二人は真名を預けているみたいけど？」

「へうう……………」



賈馭に言い負かされた董卓は、焦りと落ち込みを同時に表した器用な表情になって俯いた。

それを見て意地悪し過ぎたかと感じた賈馭は、董卓の髪を軽く撫でると、優しく、それでいて複雑な気持ちを抱いた声で言った。

「……何が有ったか知らないけど、ボクはいつだって月の味方だよ。だから、もし相談したくなったら遠慮無く言ってね。」

「うん……有難う、詠ちゃん。」

董卓はそう言って笑顔を見せた。

だが、それを見た賈馭は表面上は笑顔を返したものの、心の中では董卓に謝っていた。

（……ゴメンね、月。本当は、貴女の悩みが何なのか判ってるんだ。）

賈馭は董卓と知り合って長い。それだけに彼女の事は誰よりも理解している。ひよっとしたら、董卓の家族より理解しているかも知れない。

だから、賈馭は董卓が涼に真名を預けていない「本当の理由」にも、何故そうなったかも見当がついていた。

だが、賈馭はそれを董卓に言うつもりは無い。

（いつか月が自分から言ってくれる迄待つ。それが、ボクの答え。）

……まあ、複雑な心境なのは変わりないんだけどね。）

自分の為、そして何より親友の為に、今は深く追及しない事にした。

そんな賈馭と董卓の耳に、一人の少女と一人の少年の声が聞こえてきた。

「はああああっ!!」  
「くっっ!!」

しかもその声は、話し声という類のものでは無い。

「な、何よ今の!?!」

「今の声……孫策さんと清宮さん!?!」

まるで戦っているかの様な二人の声に驚き、戸惑いながらも、董卓と賈馱はその声の許へと向かった。

涼と孫策の声は、城の中に在る広場の一つから聞こえている。その広場に着いた二人は、見たくない光景を目にした。

「なっ!?!」

「清宮さん! 孫策さん!!」

二人の目に映ってきたのは、涼に斬りかかる孫策と、それを紙一重で避け続ける涼という光景だった。

「邪魔しちゃ駄目よ、董卓さん、賈馱さん。」

慌てて止めようとした二人にそう言ったのは、孫策の母であり孫軍の大将である孫堅だった。

更に孫堅の正面約十五メートル先には程普が座っており、二人共、涼と孫策の「戦い」を静観している。

そんな二人に対し、董卓は困惑しながらも出来るだけ毅然とした態度で尋ねた。

「孫堅さん、これは一体どういう事なんですか!?!」

「どういう事って……見ての通り、うちの孫策と総大将殿の模擬戦

よ。」

だが、孫堅はそんな董卓に微笑みながら答えた。続けて、賈馱が尋ねる。

「とても模擬戦には見えないんだけど？」

「うちはいつもこんな感じよ。ねえ？」

「はい。」

孫堅と程普が平然とそう言った事で董卓は困惑し、賈馱は疑惑の目を向けた。

現状を把握しきれない董卓は、オロオロしながら孫堅達と涼達を交互に見るしか出来なかった。

そんな董卓の両肩を掴みながら、賈馱は励ます様に言葉を紡いだ。

「月、落ち着いてっ！ 混乱するのは解るけど、今はボク達に出来る事をしましょう！」

「私達に出来る事……？」

未だ困惑している董卓だが、賈馱が何度も励ましていくと落ち着きを取り戻していった。

「……私は邪魔しちゃ駄目って言った筈だけど？」

そんな二人に、孫堅は涼達の「模擬戦」を見ながら再び忠告する。だが、賈馱はその忠告を毅然とした態度ではね退けた。

「悪いけど、ボク達が貴女の言う通りにする必要は無いわ。」

「ふうん……どうしてかしら？」

強気な賈馱に孫堅は視線だけを向けたが、その口元は少しだけ綻んでいた。

賈馱が孫堅のそんな表情の変化に気付いたかは解らないが、先程の孫堅の問いには答えていった。

「月……董卓は連合軍の副将で、ボクは副軍師。一方、貴女達は一軍の将とは言え、立場は劉備・清宮軍や董卓軍より下になっている。解っているでしょうけど、指揮系統の確立や軍律の遵守は、組織を保つ為に必要不可欠なもの。なら、立場が上であるボク達が貴女達に従う必要は無いわ。違う？」

そこ迄言つと、賈馱は孫堅と程普を交互に見据えた。

だが孫堅も程普も表情や姿勢を崩さず、静かに賈馱の次の言葉を待っていた。

どんな組織にも役職が有る様に、連合軍にもまた役職が有る。

連合軍結成当初は、総大将以外は各部隊毎に動いていたが、盧植や曹操の離脱や連合軍の規模の拡大、戦いの長期化といった経緯を辿った結果、明確な役職や厳格な軍律が決められた。

その結果決まった主な役職は次の通り。

『総大将・清宮涼』

『副将・董仲穎』

『副将補佐・孫文台』

『筆頭軍師・徐元直』

『副軍師・賈文和』

『副軍師補佐・簡憲和』

『部隊統括・劉玄德』

『第一部隊隊長・関雲長』

『第二部隊隊長・張翼徳』

『第三部隊隊長・田国譲』

『第四部隊隊長・劉徳然』  
『第五部隊隊長・孫伯符』  
『第六部隊隊長・程徳謀』

勿論、未だ役職は有るが今回は割愛する。

因みに部隊の数字が小さい順に立場が上になっており、緊急時等の指示の優先順位も上になっている。

その為、愛紗は部隊長の筆頭であり、孫策や程普の立場は愛紗より低い事になる。

「……軍律を乱したらどうなるか、孫文台ともあるう者が解らない筈無いわよね？」

「まあね。」

賈馱の質問を、孫堅はやはり視線だけを向けて答えた。

「なら、副軍師として警告するわ。今直ぐ孫策を止めないと、貴女達全員の命が無いわよ。」

「うーん、未だ死にたくは無いわねえ。」

状況は決して良いと言えないのに、何故か孫堅は軽く答える。程普に至っては先程から微動だにしていない。

「けどまあ、折角だから最後まで続けましょうよ。」

「……本気で言ってるの？」

「勿論本気よ。」

そう言った孫堅は満面の笑みを浮かべていた。

「……仕方無いわね。」

賈馱は孫堅の真意を測りきれないまま嘆息し、眼鏡の位置を整えながら言った。

「このまま見過ごす訳にはいかないわ。……月、ボク達は関羽達を探しに行くわよ。」

「う、うん。でも……。」

董卓は、依然として孫策の攻撃を避けている涼を見ながら躊躇う。

「……残念だけど、ボク達じゃあの二人を止められない。アイツを助けたいなら、少しでも早く関羽達を見つけないと。」

「うん……っ。清宮さん、もう少しだけ待っていて下さいっ!」

董卓と賈馱はそう会話を交わすと、今来た道を引き返し、やがて二手に分かれた。

邪魔しちや駄目と言っていた孫堅はそんな二人を止めようとはせず、只静かに見送っていた。

「……良いのですか?」

じつとしたままの程普が、姿勢を崩さずに尋ねる。

「良いんじゃない? あの娘達が関羽達を連れてくる頃には決着してるかも知れないし。」

「……了解しました。」

孫堅の答えを聞いた程普はそう言って再び沈黙した。

それが程普の常なのか、孫堅は何も言わない。

孫堅はそのまま涼と孫策の「模擬戦」に目を向ける。

相変わらず、涼は孫策の攻撃を避け続け、孫策は避けられても追撃し続ける。両者共に体力が尽きてきたのか息が荒くなっているが、

それでも動きは止まらない。

また、涼は先程納刀して以来一度も抜刀していない。つまり反撃してもパンチやキックしかしていない事になる。

(……抜刀して反撃しないのは、雪蓮が本気じゃないと思っているから？ それとも、さっき言った様に戦う必要が無いと知っているから？ ……どちらにしても、この時代にそぐわない甘い考えね。)

避け続ける涼を見ながら、孫堅はそう思った。

(けど……その信念を貫き通せるなら、それは大きな力になる。そうなったら、私達にとって吉となるか凶となるか……楽しみね。)

将来敵対するかも知れないと思いながら、孫堅は笑みを浮かべていた。「何だと!？」

「お兄ちゃんが孫策に殺されるかも知れないのか!？」

「そんな……涼兄さん……っ。」

「わっ!桃香様、お気を確かにつ!」

不測の事態に驚き戸惑う面々。因みにこれ等の台詞は、愛紗、鈴々、桃香、雪里のものだ。

愛紗達を見つけたのは賈馱だった。

愛紗と鈴々は城の西に在る広場で兵士達の調練に勤しんでいて、桃香と雪里は街の視察から帰った序でに愛紗達の調練の様子を見に来ていた。

その後休憩していた愛紗達を賈馱が見つけた、今起きている事を伝え、冒頭の台詞に繋がる。

「孫堅達め……義兄上を手にかけてよつとは、一体どういつつもりだ……!」

「お兄ちゃんに何かあったら、鈴々がぶつとばしてやるのだっ！」

愛紗と鈴々は自身の得物を手に怒りを露わにしている。この場に孫堅達が居たら、間違い無く斬りかかっているだろう。

「冷静に……と言っても無駄の様ですね。なら、早く清宮殿の許に向かいましょう。」

そう言っつて冷静に努めようとする雪里ですら、こめかみがピクピクと動いていた。

「涼兄さん……！」

桃香は先に行く愛紗達の後ろ姿を見ながら、胸の鼓動が速くなるのと、その奥がチクリと痛むのを感じていた。

途中で、時雨達を連れた董卓と運良く合流した賈馱は、そのまま涼の許に向かった。

だがそこには、賈馱達が思いも寄らなかった光景が広がっていた。

「なっ……！？」

「清宮さん……！？」

その光景を見た賈馱達は思わず立ち止まる。

「ぐっ……！」

「……今度こそ勝負有りだね？」

悔しそうな声を出す孫策と、勝ち誇っている涼。

涼は地面に倒れている孫策の体に跨り、その首筋に手刀を添えている。



また、孫策の右手に有った剣は孫策の後方の地面に垂直に突き刺さっていた。

先程迄劣勢だった涼が何故優位に立っているのか解らない董卓と賈馱は、その光景を見て啞然としている。それは、賈馱から「涼が殺されそう」と聞いていた桃香達も同じだった。

「……何だか、話が違うみたいだけど。」

「う、うん……ボクも驚いてる。」

戸惑いながら答えた賈馱は、さり気なく孫堅と程普に目をやった。二人共先程と同じ場所に居たが、その表情は明らかに驚いている。彼女達もこの状況は予期していなかった様だ。

「……孫堅さん、一体何があつたんですか？」

そんな中、董卓が孫堅に近付き尋ねる。

その問いに孫堅は自分の髪を触りながら答えた。

「孫策が清宮殿に対して一方的に攻撃していたのは見ていたわよね？」

「はい。」

董卓は孫堅を見ながら頷いた。

「それはほんの少し前迄続いていたの。だけど……。」

「突然、総大将殿は避けるのを止め、若君様に向かって行ったのです。」

孫堅が言葉に詰まると、代わりに程普が説明しだした。

「それって、抜刀して向かったって事ですか？」

「いえ、納刀したままでした。」  
「無茶するわね……。」

董卓の問いに程普が答えると、説明を聞いていた賈馱は額を押さえながら呟いた。

だが、桃香達は賈馱とは違う反応を見せていた。

「そっかあ、だったらこうなったのも解るね。」

「ええ。」

「解るのだー。」

「確かに。」

桃香達は皆納得した表情で感想を述べ、それは董卓と一緒に来た時雨達も同じだった。

その事を疑問に思いながらも、董卓は程普に説明を続ける様に促した。

「総大将殿がそう動く、若君様は一瞬戸惑いました。」

「何故ですか？」

「元々、若君様は総大将殿を斬るつもりが無かったからです。」

「あんなに殺気立っていたのにですか？」

「若君様は戦の天才です。殺気だけを発する事くらい、雑作もありません。」

程普がそう断言すると、董卓は依然として涼に手刀を突きつけられたままの孫策を見た。

先の黄巾党南陽部隊との攻城戦で、孫策はその類い希なる戦闘能力を敵味方問わず見せ付けていた。

たった一人で五十人以上の黄巾党を瞬時に斬り伏せ、遂には当時の敵将・韓忠を一刀の許に斬り捨てた。

その後、黄巾党は新たに孫夏を大将に据えると、今度は孫堅と共に孫夏を討ち取る等、その武勇は瞬く間に連合軍全体に広がっていた。

そんな孫策なら、実際に斬る気が無くても殺気を発する事が出来るかも知れない、と、董卓はそう結論付けた。

「それで、どうなったのですか？」

「斬るつもりが無い相手が接近してきたので、若君様の剣は止まりました。すると、総大將殿は若君様の懐に飛び込んでその剣を蹴り飛ばし、その勢いのまま身を屈め、若君様の足を蹴り、地面に倒したのです。」

「そして、倒れた孫策に清宮が馬乗りになり、首筋に手刀をあてがった、と言う訳ね。」

「はい。」

程普の説明が終わりに近付いたとみて賈馱が結末を先に言つと、程普はそれを肯定した。

「……正直言つて、孫策が負けるとは思わなかったから、この結果に驚いているわ。」

孫堅は涼と孫策を見ながら言った。

その言葉は嘘偽りの無いものだろう。表情に驚きを隠せていない。そんな孫堅の心中を察しているかどうかは知らないが、涼は未だに孫策に馬乗りになったままだった。

「どうするんだ、孫策？」

「……解ったわよ。」

涼の問いに孫策は観念した様に呟き、それを聞いた涼は手刀を離した。

「やれやれ……。」

涼はホツとした様に呟き、孫策から離れようと立ち上がりかけた。

「ちょっと待って。」

「ん？」

だが、孫策が引き止めた為、涼はその動きを止めなければならなくなつた。

「私を倒せる力が有るなら、何故最初から見せなかつたの？」

「見せたくても、俺にそんな力は無いよ。」

「なら、今私が地に倒れているのは何故かしら？」

孫策の問いに涼は正直に答えたが、孫策は納得していない。

仕方無く、涼は説明を続けた。

「先ず、君が俺を斬る気が無かつたのが勝因の一つかな。」

「……気付いていたの？」

「最初は気付かなかつたけどね。俺が君の攻撃をあんなに避けられる筈無いから、そこで気付いたんだ。」

戦い始めて数ヶ月の人間が、ずっと昔から戦ってきた人間に勝つのは難しいだろう。

今迄涼が勝っていたのは、相手である黄巾党が元農民の集まりで、一人一人はそれ程強く無かつたからだ。

「だから、俺が君の攻撃範囲にわざと入ったら、間違い無く動きが止まる。そこが狙い目だつたんだ。」

「……成程。そうして動きが止まった時に接近して攻撃、って訳ね。」  
「そういう事。」

孫策が分析すると、涼は軽く笑みを浮かべて肯定した。

「けど、それは危険な賭けじゃない？ 私が剣を止められなかったら、貴方は死んでいるわよ。」

「そうだね。けど、俺は余り不安に思わなかったよ。」  
「どうして？」

孫策が疑問に思うと、涼は殆ど間を置かずに答えた。

「孫伯符が失敗するとは思わなかったから、かな。」

「……っ！」

涼は他意も無く正直に答えた為、自然と笑顔になって孫策を見つめていた。

涼と目が合った孫策は何故か言葉に詰まり、涼から目を離せないでいる。

だが、涼は孫策の様子に気付かず、尚も見つめ続けていた。

「……どうした？」

「な、何でも無いわ。」

漸く気付いた涼が尋ねるも、孫策は目を逸らしながらはぐらかす。

「……変なの。」

暫く考えてからそう呟き、涼は今度こそ孫策から離れようとした。

「……待つて。」  
「未だ何か有るのか……っ!？」

孫策が再び呼び止めた為、涼はまたも動きを止めなくてはならなくなつた。

すると、孫策は涼の顔を両手で掴み、自分の顔に近付けた。

「な、何……?」

「……そんなに信頼してくれるのなら、私もそれに答えないとね……。」

そう言つて孫策は目を瞑り、自分の唇を涼の唇に重ねた。

「……っ!？」

突然の事にどう反応して良いのか解らない涼は、全く動けずに只されるがままでいる。

周りに居た桃香達は皆呆気にとられたまま二人の口付けに見入り、孫堅と程普もまた驚きながらその様子を眺めていた。

やがて、孫策は唇をゆっくりと離れた。

「……っ。異性にはこれが始めてなんだから、少しは喜びなさいよ。」

「あ……うん。……異性には始めて……?」

顔を赤らめながらそう言つた孫策を見ながら、涼は疑問符を浮かべた。

「それはまた後で話すわ。それより、もう退いて良いわよ?」

「あ、ゴメンっ。」

そう言われて涼は慌てて孫策から離れた。

よくよく考えてみれば、年頃の女性に馬乗りになっていたなんて、かなり大胆だったなと、今更ながらに照れている。

「雪蓮よ。」

「え？」

立ち上がり、服や髪に着いた土や砂を払いながら、何気なく孫策は言った。

「私の真名、“雪蓮”（しえれん）を貴方に預けるわ。」

「良いのか？」

「当然よ。貴方の力量は解ったし、何より、私達は接吻した仲だしね。」

そう言つと孫策・雪蓮は涼に抱きついてきた。

涼はまたも突然の事に戸惑い、されるがままになっている。

「ちよつ……孫策つ、苦しいつて……つ。」

「ちゃんと真名で呼ばないと離さないわよ。」

「しえ、雪蓮……苦しいから少し離れて……。」

「うーん、涼が初めて真名を呼んでくれたから、もう少しこのままです。」

「おいこら、話が違……つ。」

反論しようとした涼だったが、その口は雪蓮の胸で塞がれてしまった。

雪蓮は母親である孫堅同様、抜群のスタイルを誇っている。

やはり抜群のスタイルを誇る桃香や愛紗でさえも、つい魅入ってしまう程のプロポーシオンだ。

そんな彼女に抱き締められるとは、何て羨ましいんだ。  
まあ、そんな状況だと、

「涼兄さんっ！」

「総大将なのでですから、もう少しじっくりして下さいっ！」

当然ながら、桃香や愛紗といった義妹達がしゃしゃり出て来る訳だが。

その後、一悶着あったものの何とか事態は終息した。

敢えて言うなら、桃香や愛紗は涼が女性にだらしないと叱ったり、

雪里や賈馱は自業自得と呆れていたり、

雪蓮や孫堅はそんな風に言われる涼を、面白そうに見ていたりしたくらいだ。

「疲れた……。」

「孫策の色香等に惑わされているからです。」

「それは関係無いんじゃない……。」

定時会議の時間が迫っていたので、皆一旦自室へと戻る事になった。

その最中、涼は尚も愛紗から諫められている。

そんな中、桃香は自身の胸の内に生まれた気持ちに戸惑っていた。

（何なのかな……このモヤモヤとした感じ……。）

そう思いながら桃香は自身の豊かな胸に手を当てる。

（涼兄さんの周りに女の子が居るのは、今に始まった事じゃ無いのに……。私、心が狭いのかな……？）



そう自己嫌悪しながら、桃香は涼の後ろ姿を見続けていた。

一方、董卓と賈馱は桃香達の少し後方を歩きながら話している。

「……先、越されちゃったわね。」

「うん……。」

一体何の先を越されたのか、主語や述語を言わなくても解る二人だ。

「それで……どうするの？」

「……言つよ。もう決めたから。」

「そっか……。」

親友の決意に、賈馱は一瞬複雑な表情を浮かべるも、直ぐに表情を引き締め、先程と同じ様に応援する。

先程の会話と今の会話の両方共、何をするのはハッキリ言わなかったが、最早言わなくても解る事だった。

「……頑張つてね、月。」

「有難う、詠ちゃん……。」

賈馱が最後に改めて言葉をかけると、董卓は笑顔を浮かべて応え、そして視線を移す。

その視線の先に居るのは、連合軍の若き総大将の姿だった。

その夜、涼は自室で仕事を片付けていた。

連合軍の総大将ともなると、報告書の類の処理だけでも膨大な時間がかかる。

昼間は雪里や賈馱といった軍師達に手伝ってもらったりしているが、流石に夜中に呼びつける訳にはいかない。

涼は男で雪里達は女だから、有らぬ噂が立ったり間違いが起こっ

てはいけないからだ。

但し、今からこの部屋に来る人物だけは例外だ。

部屋の扉が二度ノックされる。

本来この世界にノックという風習は無いのだが、涼は総大将という立場を利用し、天界の風習として全員に徹底させていた。

結構好評なのか、今では皆違和感無くやっている。

「どうぞ。」

涼の声を合図に、ゆっくりと扉が開いた。

「劉徳然、入ります。」

そう言っに入ってきたのは、水色の髪の少女だった。

少女は扉がきちんと閉まったのを確認してから、ゆっくりと涼の前に進んだ。

因みにこの部屋には机とベッドとテーブルと筆筒が在り、涼は今机に向かって仕事をしている為、少女とは机を挟んで対峙している。

「いつもこんな時間に呼び出して悪いな。」

「いえ、事情は解っていますから。」

そう言葉を交わした後、涼は椅子を勧め、少女はそれに従った。

それから暫くは取り留めない会話をしていたが、やがて涼は腕時計に目をやり、時間を確かめてから言った。

「……そろそろ良いかな。いつも通りに戻って良いよ、“地和”。」  
「ふーっ。やっと楽出来る。」

そう言っって両手を組んで上げ、伸びをする劉徳然。

そんな彼女を、涼は「地和」と呼んだ。

「ゴメンな、いつも堅苦しい思いをさせて。」  
「ううん、気にしないで。これも、ちいを守る為に涼がしてくれてる事だから、そんなに堅苦しくないわ。」

「そっか。流石に、連合軍内で張宝って名乗る訳にはいかないからな。」

「まあね。」

そう、先程劉徳然と名乗った少女の正体は、張三姉妹の次女、張宝だったのだ。

涼が張宝を匿うと決めた後、外見は髪型を変えたり服装を整えたりして何とか誤魔化す事が出来たが、名前をどうするかは決めていなかった。

すると桃香が、

『じゃあ、「劉徳然」って名乗ったら良いよ』

と言ってきた。

桃香によると、劉徳然という名前は桃香の従姉妹の名前で、現在は桃香の生まれ故郷である楼桑村の隣村に住んでいるという。

その者の名を借り、時雨達と共に桃香に会いに来たという設定にすれば、張宝がこの場に居ても不自然じゃないという事だ。

因みに本物の劉徳然の真名は「梨香」と言うが、流石に真名迄借りるのは気が引けたらしいので、涼が張宝の真名である「地和」と、本物の劉徳然の真名「梨香」から一字ずつとって、「地香」という真名を作って与えている。

「……………それで、話は何？」

「うん……………」

張宝・地和が尋ねると、涼は一瞬目を逸らしてから言った。

「……今日、広宗の官軍から報告書が届いた。……曹操が黄巾党広宗部隊を征伐したらしい。」

「え……。」

そう聞かされた地和は、まるで言葉を失ったかの様に絶句した。やがて、手や体が震えだし、目の焦点も定まらなくなっている。

「嘘……よね……?」

地和は声を震わせながら、絞り出す様にそう言った。

瞳は潤んでおり、いつ決壊して涙が零れ落ちてもおかしくない。

「……こんな嘘を言う程、俺は意地悪じゃないよ。」

「……っ!」

涼の言葉によって、地和の瞳の堤防は呆気なく決壊した。

涙はとめどなく流れ出し、地和が両手で抑えても塞ぎきれない。

「……お姉ちゃんや……人和はどうなったの……?」

涙を流しながら地和は尋ねる。

因みにお姉ちゃんとは張三姉妹の長女である張角の事で、人和とは張三姉妹の末妹である張梁の真名だ。

「……報告書には、張角・張梁共に討ちとったとあった。そうして指揮官を失った広宗の黄巾党は、呆気なく全滅したらしい……。」  
「そう……なんだ……。」

涙の量が更に増える。

血を分けた姉妹を失ったのだから、その悲しみや辛さは相当なものだろう。

「どうして、こんな事に……ちい達は、只三人で歌っていたかっただけなのに……。」

「地和……。」

涼は泣き続ける地和に近付いて、まるで子供をあやす様にそっと抱き締める。

髪や背中を撫で、落ち着かせようとするが、その優しさが却って地和の涙腺を緩くし、泣き声は激しい嗚咽へと変わった。

どれだけの間泣き続けただろうか。

地和の嗚咽は漸く沈静化し始めていた。

「……落ち着いた？」

「うん……。」

涼の胸元に顔を埋めたまま、地和は力無く答えた。  
そんな地和を、涼は優しく撫で、更に落ち着かせていく。

「ゴメン……。」

「……どうして涼が謝るの？」

「……俺が部隊を広宗に残していれば、張角と張梁も匿えたり逃がせたり出来たかも知れないから……。」

「有難う……。けど、あの状況じゃそれは出来なかったでしょ？」

「うん……。」

涙を拭きながら地和が言うと、涼もまた力無く答えた。

広宗の旧張宝軍を倒した後、涼達連合軍は南陽に向かった。

涼はそのまま残って張角と張梁を探したかったが、南陽黄巾党が

依然として勢力を誇っていた為、その討伐に連合軍があてがわれた。南陽は広宗からかなり離れた場所の為、涼は皇甫嵩將軍と朱儁將軍に頼もうとしたが、二人は豫州に向かう事になっており、また、広宗に残っていた張角軍と張梁軍には洛陽から派遣された何進の部隊が対処する事になっていた。

実はこれは、張宝を討つた連合軍に張角や張梁迄討たれては大将軍としての立場が危ういと考えた何進による措置だった。

何進とは、洛陽の街を取り締まる大將軍という役職を務める女性だ。

元々は洛陽に在る肉屋の女主人だったが、何進の妹が時の帝である靈帝の後に召し抱えられた為、その威光によって大將軍に任命された。

その様な経緯から、何進は実績を欲していた。

今のままでは、妹・何後の存在だけで大將軍という地位に居るだけである。

それでは何れ、帝や何後に何か有った場合に追いやられてしまうだろう。

何進が広宗に来たのは、張宝が討ち取られて士気が落ちているであろう張角軍・張梁軍を討つ事で実績を得ようとしていた訳だ。

だが、張宝を討たれたと思っていた張角軍・張梁軍は甲い合戦と意気込んでおり、何進は苦戦を強いられた。

そこに、軍を再編した曹操軍が援軍として現れ、何進を援護。遂には張角・張梁を討ち取ってしまった。

何進は大將軍としての面目を潰してしまっただが、かと言って曹操を非難する訳にはいかず、曹操に恩賞を与えている。

この様な経緯があった為、涼達連合軍は南陽に進軍しなければならなかった。

大將軍である何進の命に従わなかったら、逆賊として討たれる危険性も有った。それだけは、どうしても避けなければならなかったのだ。

「……涼は連合軍の総大将。だから、連合軍を危険に曝す訳にはいかなかったでしょ？」

「それはそうだけど……他に何か出来たんじゃないかって……。」

地和を抱き締めながら、涼は自らを非難していく。

この世界に来る迄は、こんなに考え込む事は殆ど無かったのだが、今や一軍の指揮官を務める身。そんな状況では、考え込まない方がおかしいだろう。

地和はそんな涼を見つめると、今迄とは逆に涼を抱き締めた。

「確かに、何か方法は有ったかも知れない……。けど、涼が頑張っていたって事、ちいは知ってるよ。」

「地和……。」

「だから……余り考え込まないで。涼が辛そうにしてると、ちいはもっと辛くなるから……。」

そう言いながら、地和は涙を流した。

だがそれは、先程の様な沢山の粒の涙ではなく、頬を伝う一筋の涙だった。

「地和……解った……。」

涼はそう言っただけで地和を抱き締め直す。すると、地和も再び涼を抱き締めた。

気がつけば、互いの首に手を回し、互いの呼吸が感じ取れる距離に二人は居る。

地和の、それ程大きくない胸も涼の体に当たっている。

当然ながら、涼がそれに気付かない訳が無い。

心臓の鼓動が自然と速くなる。

地和の翡翠色の瞳は、涙によるものとは違う潤いに満ち溢れている。

た。

涼はその瞳に惹き込まれ、目を離せなくなった。それと同時に、昏間の雪蓮とのキスを思い出す。突然の事だったとは言え、あの時の感触は今でもハッキリと覚えている。

柔らかい唇と、透き通る様な蒼い瞳。

思い出すと、心臓の鼓動は更に速くなった。

雰囲気としては、このまま地和とキスしてもおかしくない。

地和もその雰囲気を感じているらしく、頬に紅が差している。

(……………こんな時に、良いのかな……………。)

涼は雰囲気や地和の態度から、キスしても良い様な気がしていた。だが、キスとは本来恋人同士がするものであり、涼と地和は恋人同士ではない。

雪蓮とも恋人同士ではないのだが、何故かキスをされた。

(だから、俺と地和がキスしてもおかしくはないけど……………。)

一日の内に二人の女の子とキスをして良いのか、それに何より、地和の姉と妹が討たれたと告げた時にキスをして良いのだろうか。そう迷っていると、地和が尋ねてきた。

「……………涼は、ちいを一人にしないわよね？」

「そんなの、当たり前だろ。」

「だったら……………ちいにその証拠を見せて……………」。「えっ……………!？」

「……………ちいは、寂しいのが一番嫌い……………。だから、涼はちいを寂しくさせないで……………。そうしたら、きっと地和は頑張れると思うから……………」。

「地和……………」。



再び、涙を流す地和。

そんな地和を見て、涼は気付いた。

地和は姉妹の死から立ち直っていない。そんな当たり前の事に、気付いていなかった。

泣き止んだから大丈夫だとも思ったのか、自分を異性として意識していたから大丈夫だとも思ったのか。

どちらにしても、人は身内を亡くして直ぐに立ち直れる程強くない。

そう、強くないのだ。

だったら、少しでも強くなれる様、力になりたい。

涼はそう思った。

「地和……。」

「涼……。」

涼は地和を抱き寄せ、その瞳を見つめる。

暫くの間二人は見つめ合っていたが、やがて地和はゆっくりと瞳を閉じた。

それに合わせて、涼は唇を重ねようと顔を動かしながら目を閉じる。

そうして唇と唇が重なるうとした瞬間、

ギシッ。

と、いう、床が軋む音が部屋の入口付近から聞こえてきた。

意外と大きな音だったので、涼は動くのを止めて目を開け、地和もまた閉じていた瞳を開けた。

「触れ合う程近い距離で見つめ合う二人。」

二人はそこで、今しようとした事を思い出し、瞬時に顔を真っ赤

に染めた。

(……今、絶対にキスだけで終わる雰囲気じゃ無かったよな……。)  
(……ちいつたら、な、何考えてたんだろ……。っ。)

涼も地和も、あのままだったらキスより先の事をしただろうと確信した。

互いにチラチラ見ながら、更に紅く染まる二人の顔。

暫くの間そのままジツとしていたかったが、先程の音の正体を確かめなければならなかった。

涼がゆっくりと立ち上がると、地和も立ち上がるうとしたが、もしもの事が有ったらいけないという涼の説得を受けてその場に留まった。

涼は入口に近付いた。

今は真夜中で殆どの人間が眠りにについている。

起きているのは涼の様に仕事をしているか、見回りをしている兵士くらいだ。

だから、本来なら気にする必要は無いのだが、足音が一度しか聞こえなかったのが気になった。

近づく音なら聞き逃した可能性が有るが、立ち去る音を聞き逃した可能性は低い。

何故ならあの音に気付いてからは、赤面しながらもずっと集中したので、僅かな物音も聞き逃していないのだ。

だから、音の主が未だ居る可能性が高い。

涼はそつと扉に手をかけた。同時に剣の柄に手を置き、不測の事態に備える。

自然と息を潜め、生唾を飲み込む。

地和も同様に息を殺し、扉を見ながら護身用の剣の柄に手を置いた。

涼は一拍だけ息を吐くと、一気に扉を開けた。夜中なので大きな

音を立てない様にしながらという、何とも器用な開け方だった。

瞬時に辺りを緊張感が包む。

が、また瞬時に緊張感が消えていった。

何故なら扉の先に居たのは、不審者等では無かったからだ。

「こ……こんばんは……。」

「あ、ああ……こんばんは。」

そこに居た人物の一人が慌てながらも挨拶してきたので、涼は丁寧に挨拶を返した。

「な、何挨拶してるのよっ。」

「だ、だって、私達見つかったし……。」

「えーつと……。」

扉の先に居る人物達の会話を聞きながら、涼は現状の分析をした。また、地和も状況が変化しているのを理解しつつも、緊急事態では無い様なので涼の言い付け通りに待ち、微かに聞こえる声の主が誰か考えながら座っている。

やがて、涼は目の前に居る人物達に声をかけた。

「取り敢えず、廊下に突っ立っているのも何だから、中に入らない？」

「えっ？」

「……変な事をするつもりじゃないわよね？」

「違っつてっ。」

涼は苦笑しながら答えた。

つい数分前迄、地和と「変な事」をしようとしていた涼だが、当然ながらそれを言う訳は無く、平静に努めながら二人を招き入れた。

「あ……誰かと思ったたら月と賈馱だったのね。」  
「地香さん……。」

二人の姿を見た地和は、二人の真名と姓名を言った。

一方、董卓は地和を偽名である劉徳然の真名を呼んだ。地和として名乗っていないので当然だ。

暫くの間沈黙が流れたが、やがて董卓は意を決して二人に尋ねた。

「あの……済みませんが、二人のお話を聞かせて貰いました。」

「……可愛い顔して盗み聞きとは意外とやるわね。」

「劉燕……いえ、張宝！ 貴女に月を非難する権利は無い筈よ！」

董卓の問いに地和が皮肉を込めて言うと、賈馱が怒気をはらみながら言い返した。

「賈馱、今は夜中だから少し声を抑えて。」

「アンタねえ……！」

「取り敢えず、ちゃんと説明するから暫く我慢してくれ。頼む。」

怒りを隠さない賈馱に対して、涼は頭を下げた。事態の收拾を図った。

「し、仕方無いわね……。なら、ちゃんと話してもらおうよ。」

それが効いたのか、賈馱は瞬時に怒りを収めてくれた。

「ああ、ちゃんと話すよ。」

そう言って、涼と地和はこれ迄の経緯を話し始めた。

それによると、張三姉妹は元々、三人で歌を唄う事で生計を立て

ていた事。

余り人気は無かったが、その最中、旅人から貰った「太平要術」という書に書かれていた術を使って興行をすると、たちまち人気が出た事。

そうして集まった若者達がいっしか暴走し、「黄巾党」という集団になった事。

彼等を止める為に三姉妹もそれぞれ將軍を名乗り、何とか暴走を止めてきた事。

だが、遂には漢王朝に目を付けられてしまい、仕方無く戦っていた事。

大義名分として、腐敗した漢王朝を打倒して新しい世の中を作るというスローガンを掲げていたが、本心では上手くいくとは余り思っていなかった事。

そして遂に連合軍の前に敗れた時に、涼が助けた事。

その後、桃香と涼から新しい名前と真名を貰い、連合軍に同行していたという事。

簡単に言うところの様な流れになる。

「……で、張宝がここに居るって訳ね。」

「ああ。もつとも、最初は隙を見て地和を張角や張梁の許に帰す予定だったんだけど……。」

「その機会が無くて、結局地香さんを連れていてるって訳なんですけどね？」

「そうなんだよ。あはは……。」

涼は苦笑しながら答える。

そんな涼に呆れつつ、賈馱は真面目な表情で言った。

「……けど、これってバレたら洒落にならないわよ。幾らアンタが天の御遣いでも、流石に問題になると思っただけ。」

「解ってる。……だから、二人にも黙っていてほしいんだ。」  
「……どうしようかしらねえ。」  
「詠ちゃんっ。」

賈馱が涼の頼みを意地悪な表情をしながら答えると、直ぐ様董卓が注意した。

注意された賈馱は慌てながら答える。

「わ、解ってるわよっ。今は冗談なんだから、そんなに怒らないでっ。」

「まったく……。清宮さん、地香さん、私達はこの事を口外しないので御安心下さい。」

「良かった。二人共、有難う。」

「月、賈馱、有難うっ。」

董卓が秘密を守ると約束すると、涼が喜んだのは勿論の事ながら、渦中の地和は二人に抱き付く程に喜んでいた。

「じゃあ、今みたいに周りに誰も居ない時は、本当の真名の“地和”って呼んでね。」

「はい、解りましたっ。」

「勿論、賈馱もそう呼んでね。」

「ボクも良いの？ なら、ボクも真名を預けないとね。」

賈馱はそう言うつと、董卓と涼をチラツと見た。

「そうだわ、序でにアンタにも真名を預けてあげる。」

賈馱は暫く考えた後にそう言った。すると、言われた涼だけでなく董卓も驚いていた。

「良いのか？」

「ええ。図らずも長い付き合いになったし、アンタの実力も認めないといけないからね。」

賈駆はそう言いながら、隣に居る董卓に目配せをした。

董卓は、始めの内はその意味を理解していなかったが、賈駆が董卓と涼を交互に見ている事に気付くと、漸く賈駆が意図している事を理解した。

「あの……清宮さん。」

「ん？」

直ぐ様董卓は行動に移った。

だが、涼の顔を見ると言葉に詰まってしまふ。

それから何度か言葉を言おうとして、やはり言えないという状況が続いた。

時間にして、二分弱。

その間、涼は董卓の意図に気付かなかったが、地和は直ぐに気付いていた。

だが、敢えて何も言わなかった。

何故そうしたのは地和にしか解らない。

いや、ひょっとしたら地和にも解らないかも知れない。

只、今はそうするのが一番だという確信は有った様だ。

そうして地和や賈駆が見守る中、董卓は漸くその言葉を口にした。

「あの……清宮さんっ。私の……私の真名を貴方に預けます……っ。」

そう言った董卓は、まるで告白した少女の様に顔を紅らめていた。いや、彼女にとって、これは正に告白と同じ事なのだろう。

そして、その告白は未だ終わっていない。

「わ、私の姓は“董”、名は“卓”、字は“仲穎”、真名は“月（ゆえ）”。……この真名を、貴方に預けます……。」

董卓・月が涼の目を見ながらそう言うと、涼は笑みを浮かべながらその真名を受け取った。

瞬時に月の表情が明るくなる。

それは祝福すべき光景。それなのに、賈駆は何故か複雑な心境で見ている。

「……じゃあ、次はボクの番ね。」

そんな心境を払拭する様に、賈駆は居住まいを正して涼達に向き直り、言葉を紡いだ。

「ボクの姓は“賈”、名は“駆”、字は“文和”、真名は“詠”。この真名、アンタ達に預けるわ。」

賈駆・詠は、涼と地和を見ながら自己紹介をし、自身の真名を預けた。

「最後はちいの番だね。」

地和は月と詠に向き直り、以前と同じ様に言った。

「ちいの姓は“張”、名は“宝”、字は“明専”、真名は“地和”。この真名、月と詠に預けるわ。」

地和は改めて本当の真名を二人に預けた。

こうして、涼達は真名と秘密を共有する事になった。



「ふふ……」

その帰り道、月はいつになく御機嫌だった。

漸く想いを伝え、そして受け入れられた少女の様に、その表情は晴れ晴れとしていた。

「良かったわね、月。」

「うん」

詠が声をかけると、月の明るい声が返ってきた。

黄巾党の乱が起きて以来、乱の鎮圧に一生懸命だった月は、余り笑顔を見せなくなっていった。

だが、涼と出会ってからは少しずつ笑顔を見せる様になり、今では以前と同じ様に笑える様になっている。

(……アイツのお陰ってのは癪だけど、月が喜んでくれるならよしとするわ。)

相変わらず複雑な表情と気持ちのまま、詠は月と並んで歩いていく。

「ねえ、詠ちゃん。」

「なあに、月？」

月が詠を見ながら話し掛ける。その表情はやはり笑顔だ。

「色々有ったけど、今日は私達にとって良い一日だったね。」

「そうね。ボクもそう思うわ。」

笑顔の月を見ながら、詠はそう言った。

(……ん？ “私達” ってどういう事かしら？)

詠は、月だけでなく自分にとっても良い一日だとも言われた事を疑問に思った。

だが、幾ら考えても答えは出なかった。

詠がその答えを知るのは、未だ先の事である。

一方、涼と地和もそれぞれの自室に戻っていた。

地和は未だ涼と居たがっていたが、月達の存在や良い雰囲気では無くなっていった為に、結局諦めた様だ。

涼は、まるで確認する様に、月達に地和の事について念を押してから、三人に「お休みなさい。」と挨拶して自室のベッドに潜った。月や詠、そして地和にとって今日色々有った様に、涼にとっても色々有った。

孫策との対決と突然のキス、そして孫策が雪蓮という自身の真名を預けた事。

地和に彼女の姉妹の最期を伝え、慰めていたら良い雰囲気になってキスやそれ以上の事をしようとした事。

劉徳然と名乗っていた地和の正体を董卓と賈馱に知られるも、彼女達が秘密を守ると約束してくれた事。

更に、董卓は月と、賈馱は詠という自身の真名を預けてくれた事。どれも、涼にとって大きな出来事だった。

(地和とあんな風になるなんて、思いもしなかったな。……俺は、地和をどう思っているんだろう？)

涼は考えた。

地和を好きなのは間違い無い。だが、それは友達や仲間としてあり、恋人としてではなかった筈だ。

(それとも……本当はそうなのか?)

涼は更に考えた。

そしてそのまま眠りについていった。黄巾党の乱は、首領の張角と末妹の張梁が討たれ、残る張宝は行方不明という事で、終息に向かっていた。

涼達連合軍は荊州の残党を制圧し、治安を回復させてから洛陽への凱旋の旅路についた。

また、当然ながらそうした功績を挙げているのは連合軍だけでは無い。

荊州刺史である丁原は、「神速」と謳われる張遼や養子である呂布を引き連れ、連合軍の管轄外に居る黄巾党を討ち倒した。

袁紹や袁術といった、名門と謳われる袁家もまた、圧倒的な軍事力を以て乱を鎮圧している。

また、張角・張梁を破った曹操は、その戦いの最中に従姉妹である夏侯惇、夏侯淵を迎えており、更に残党や周辺地域の若者を引き入れて、軍備を増強していった。

この様に、様々な武将達が黄巾党を打ち倒しており、その武勇は大陸全土に広がっていった。

当然ながら、漢王朝は彼等に恩賞を与えていった。

連合軍も恩賞を貰ったが、月達と違って劉備達は何の身分も無かった為、中々恩賞が与えられなかった。

月や曹操、そして罪が間違いと判って解放された盧植達の取りなしが無ければ、更に時間が掛かっただろう。

そうして皆に恩賞が行き渡ると、洛陽では黄巾党の乱鎮圧を祝って宴が催された。

宴が催されて数日になるが、街では今日もまた花火が打ち上げられ、そこかしこで人々の歓声が上がっていた。

「綺麗……。」

「本当だな……。」

次々と打ち上げられる花火を見ながら、桃香と涼はそう呟いた。今、涼達は洛陽に在る盧植の屋敷に居る。そこでは、街の宴を楽しみながら独自の宴が開かれていた。

表向きは盧植の復帰祝いなのだが、実際には、余り朝廷に行きたくないという理由が有った。

涼達は人々と漢王朝の為に戦ってきたが、現在の漢王朝には朝廷を我が物顔で歩いている十常侍という者達が蔓延っており、彼等とは余り接したくないので極力出掛けていなかった。

その思いは皆同じであるらしく、今この場には涼達以外にも沢山の武将達が居る。因みに連合軍の面々は皆ここに居る。

「皆の歓声を聞くと、私達が戦ってきた甲斐が有りますね。」

「ああ。皆、お疲れ様。」

「どつって事無いのだっ。」

涼と桃香の周りには愛紗と鈴々も居り、酒やお茶を飲みながら歓談していた。

「随分と賑やかな。」

そこにそう言っただけで現れたのは曹操だった。

一時的とは言え、曹操も連合軍に参加していた為に盧植の屋敷に来ているのだ。

「翡翠さんとの話は終わったのかい？」

「ええ。当たり前前の復帰を祝っただけだから、そんなに時間はかからなかったわ。」

曹操は涼の質問に答えながら、空いている席に座った。

「嘘の報告による冤罪だもんな。まったく、酷い事をする奴が居るもんだ。」

涼がそう言いながらお茶をおかわりしようとする、涼の代わりに曹操が注いでくれた。

「それが今の漢王朝の実状……いえ、未だこれは可愛い方かしらね。」

「……十常侍の事が。」

「そうよ。奴等は帝を蔑ろにして、政治を自分達の思い通りに取り仕切っている。その結果、苦しむのは十常侍とそれに与する者以外の人間……つまり民達よ。」

自らはお酒を飲みながら、曹操は深刻な顔をして話した。

「だったら、その十常侍さん達をやっつけちゃえば、問題は解決するんですよね？」

桃香が尋ねると、曹操は静かに頷いた。

「けど、そう簡単に出来る事じゃないわ。奴等はこの国の実権を握っている……下手をすれば、間違い無く殺されるわね。」

「けど、曹操は諦めていないよな。」

「……どうしてそう思うのかしら？」

「曹操の眼は、諦めている人間の眼じゃ無いからな。」……流石は天の御遣いね。人をよく見ているわ。」

「いやいや、そんなに大した事はしてないよ。」

誉められるのは素直に嬉しいが、実際に大した事をしていないと

思う涼は思わず苦笑する。

そんな涼に、突然誰かが後ろから抱きついてきた。抱きついてきたその人物は、イタズラっぽい笑みを浮かべながら明るく言った。

「お待たせ、涼」

「ビックリした……。遅かったね、雪蓮。何かあった？」

「ゴメンゴメン。母様達についていたら、結構時間がかかったのよ。」

「そっか。……まさか、抜け出してきたんじゃないよな？」

「そうしたいのはやまやまだけど、それやったらあの鬼婆に殺されちゃうし。」

涼が苦笑しながら言うと、抱きついたままの人物 - 雪蓮は妖艶な笑みを浮かべながら話していった。

そんな二人を見た曹操は暫くの間唖然としていたが、やがて平静さを取り戻すと小さく一つ咳払いをしてから尋ねた。

「……涼は、孫策を真名で呼んでいるのね。」

「ん？ ああ、荊州で一緒に戦った仲だしね。」

涼がそう言うと、雪蓮は不満げに言った。

「確かに一緒に戦った仲だけど……それだけじゃ無いでしょ」

「……へえ。」

雪蓮がそう言うと、曹操は不敵な笑みを見せながら涼を見つめた。

「ひよつとして、二人は夜伽をした仲なのかしら？」

「なっ!？」

「そうなの、涼兄さん!？」

曹操の言葉に、涼より早く愛紗と桃香が反応する。  
涼は苦笑しながら桃香達を宥めた。そう言えばさっきから苦笑しっぱなしである。

「えつと……取り敢えず、夜伽はしてないから二人共落ち着いて。」  
「本当に!？」  
「本当だよ。」  
「……良かった。」

涼の言葉を信じたのか、桃香達はその豊かな胸を撫で下ろすが、

「あら、私と涼が夜伽をしていないと何故“良かった”になるのかしら?」  
「どきっ!」  
「……どきって口で言う人、初めて見たよ。しかも一度に二人も。」

雪蓮に指摘された二人は慌てる。

そして、そんな二人に冷静にツッコミを入れる涼。  
因みに曹操はそんな涼達のやりとりを面白そうに眺めている。

「桃香も愛紗も、涼の“義妹”じゃなかったかしら? 妹が兄の色恋に口出しするのはどうかと思うわよ?」

雪蓮はニヤニヤと笑みを浮かべながらそう言った。  
その二人はというと、何か反論しようとするものの、結局反論出せずに落ち込んでしまっている。  
そこに、翡翠や月達がやってきた。

「あらあら、ここも賑やかですね。」

「あ、翡翠さんに月、詠。あっちの方は良いんですか？」

「はい、一通りのお客様に挨拶しましたから、大丈夫でしょう。」

「そうですか。……って、そろそろ離れてよ雪蓮。」

「えー。」

不満げな雪蓮は、渋々離れると直ぐ近くの席に着いた。

続けて月達も空いている席に座り、最後に翡翠が座ると、彼女は桃香を見ながら言った。

「そう言えば玄徳、貴女にお客さんが来ていますよ。」

「お客さん、ですか？」

桃香がそう言うと、翡翠達が来た方向から赤毛をポニーテールにしている少女がやってきた。

少女は桃香に近付きながら声をかける。

「久し振りだな、桃香。」

「あつ、白蓮ちゃんだー。」

少女の真名らしき名前を口にしながら、桃香は立ち上がった。

その表情が明るく笑顔になっている事から、相手の少女は桃香にとって大切な人物なのだろう。

「白蓮ちゃんも、先生の復帰祝いに来たの？」

「それもだけど、一応黄巾党征伐の恩賞を頂きにな。」

「そっかあ。白蓮ちゃん、幽州の太守さんだもんねー。」

桃香は少女の活躍を心から喜んでいる様だ。

(幽州の太守で、桃香・劉備の知り合い……そうか、この子が以前



桃香とお母さんの話に出て来た公孫贄なのか。)

涼はそう思いながら、公孫贄と思われる少女を見た。

長い赤毛は白い髪留めで纏めており、眼は金色。健康的で穏やかな表情はとても好感がもてる。

紅いノースリーブの服に黒いヒラヒラのミニスカート、白を基調とした鎧には金色の線による模様が描かれている。

腕には服と同じ紅い布を巻いており、その上にはやはり鎧と同じ材質と模様の籠手を付け、手には指が出せる黒い手袋をしている。

白いニーソックスの上部には桃色のラインが有り、紅いロングブーツを履いていた。

「ああ、清宮殿の評判は聞いているし、何より桃香の義兄だし、それなら私も信頼出来るからな。」

「そっか。俺には真名が無いから、好きな様に呼んでくれ。」  
「解った。」

こうして涼と公孫贄・白蓮の挨拶が終わると、白蓮もまた空いている席に座った。

それからは、皆で改めて盧植の復帰を祝ったり、各々の思い出や自慢話を語っていった。

皆の話の合間も、夜空には花火が上がり続ける。

街の人々の歓声もまだまだ止みそうにない。

そうして夜は更けていき、宴は寝る迄続いた。

翌日、涼と翡翠以外のメンバーは皆二日酔いだっただ。

涼はお酒を飲んでいなかったから当然だが、皆と同じ様に飲んでいた翡翠がケロツとしてるのは凄いとしか言えない。

「曹操、大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ……私がこれくらいで……うう……。」

朝、食堂に現れた一同に声をかけている涼が曹操にも声をかけると、曹操は強がってみせるが、やはり二日酔いには勝てない様だ。

「はい、お茶。」

「あ、有難う…………。」

涼がお茶を渡すと、曹操は頭を押さえながらお茶を受け取り、一気に飲み干した。

「…………私が二日酔いになるなんて不覚をとったわ…………。」

「不覚つて、そんな大袈裟な。」

涼は苦笑したが、当の曹操は至って真面目な表情だった。

「…………大袈裟ではないわよ。こんな状態では、刺客に襲われた時に応戦出来ないわ。」

「刺客つて…………狙われる覚えが有るのか？」

「当然よ。私は今回、黄巾党の人間を沢山を殺した。其奴等の仲間や遺族には、相当怨まれているでしょうね。」

「そうか…………。」

それなら自分も同じだと、涼は思った。

そしてそれは自分だけではない。桃香も愛紗も鈴々も、この屋敷に居る武将や軍師達が皆、直接間接問わず黄巾党の人間を殺している。

涼はそんな当たり前の事を忘れていた自分を、恥ずかしく思った。そして、常に身の危険を感じながら生きている曹操に、何か言わないといけないと感じた。

「…………けどさ、ここは翡翠さんのお屋敷だよ。そんなに気を張らな

くても良いんじゃないかな。」

「翡翠様が良い人なのは解っているわ。けど、翡翠様の仲間や知人が、私の事をどう思っているのかは解らない。」

「だから、気を張り続けるのか？」

「そうよ。」

「……なら、何か遭ったら俺が助けてやるよ。」

「えっ……？」

涼のその言葉に、曹操は小さく声をあげて驚いた。

「そんなに驚くなよ。仲間なんだから当然だろ。」

涼は微笑みながらそう言った。

すると曹操は、

「仲間……ね……。」

と呟いた。

「どうかした？」

「いえ……考え方が甘いわ、と思ってね。」

「それは自覚してる。けど、これが俺のやり方だから。」

「……そう。」

涼がそう答えると、曹操は思案顔になって暫く沈黙した。

「華琳よ。」

「え？」

そして突然、涼に向かってそう言った。

「私の真名よ。翡翠様や孫策だけでなく、董卓や賈馱、それに知り合ったばかりの公孫賛も貴方に真名を預けている様だし、私だけ預けないのもおかしいでしょ。」

「そんな理由で良いの？」

「良いのよ。それに、天の御遣いに真名を呼ばれるっていうだけで私にとっては充分過ぎるわ。」

「あー……成程ね。」

天の御遣いと呼ばれる涼は、民だけでなく色々な武将や軍師達からも一目置かれている。

今回恩賞を受け取る際にも、高官達は初め素っ気なかったのに、月達の進言で涼が天の御遣いと解った途端、手のひらを返して接してきた人物は一人二人では無かった。

つまり、涼と親しく接している人物は「天の御遣いの威光」を得たも同然に見られるのだ。

「……案外、董卓や公孫賛達も同じ理由かもね。」

曹操はニヤリとしながら言った。

「そう決め付けるのは良くないよ。それに、月達はそんな思惑を持ってないと思うし。」

「どうしてそう思うの？」

「どうしてって……勘かな？」

反論する涼も確たる証拠は無く、只そう思ったただけなので他に言い様が無かった。

そんな涼を見ながら、曹操はクスリと笑う。

「本当に甘いわ。……けどまあ、それが貴方の良い所なんでしょうね。」

誉めてるのか貶してるのかよく解らない物言いをする曹操だった。困惑する涼を後目に、曹操は居住まいを正して言葉を紡ぐ。

「では、改めて自己紹介をしましょうか。……私の姓は“曹”、名は“操”、字は“孟徳”、真名は“華琳”。この真名を、貴方に預けます。」

「ああ、確かに預かったよ。宜しく、華琳。」

曹操から華琳という真名を受け取った涼は、微笑みながら手を差し出す。

曹操・華琳はその手を見て戸惑ったが、やがてその手を握った。

華琳と握手をした涼は、それから幾つか話しながら朝食に向かった。

涼達の洛陽滞在も今日で終わる。

皆で一緒にとる食事は、恐らくこれが最後になるだろう。

朝食を終えると、涼達はそれぞれ旅立ちの準備を始めた。

月と詠は涼州へ、曹操は陳留へ、孫策達は豫州へ戻り、盧植はそのまま洛陽で黄巾党の乱の事後処理をする様だ。

涼達は恩賞を貰ったとはいえ、その中身は戦功に見合ったものは無かった。

涼が天の御遣いと解ると、高官達は慌てて恩賞を変えようとしたが、涼は辞退して最初の恩賞のままにした。

只、その恩賞だけでは三千人の義勇兵を養っていく事が出来ない為、涼達は当初の予定通り幽州に行き、公孫賛の世話になる事にした。

「急な話でゴメンね、白蓮ちゃん。」

「気にするなよ、桃香。実は、数ヶ月前に桃香の母上から手紙が来ていてな、それで桃香達が何れ来るだろうってのは解っていたんだ。

「そうだったんだ……。」

「ああ。けど、ちっとも来ないから心配したぞ。」

「ご、ゴメンね、白蓮ちゃんっ。」

出発前、桃香達はこんな話をしてリラックスしていた。

「清宮さん、皆さん、また会いましょうね。」

「せいぜい死なない様にね。」

「次会う時は、敵かもね。」

「今度は負けないからっ。」

「皆さん、道中気を付けるですよ。」

「皆、またなっ。」

各々そう言って帰路についた。

## 断章一 とある会話（前書き）

世界の何処かに在る場所。

そして、その世界の人間は知る事が出来ない場所。

そこに、数人の老若男女が集まっていた。

2010年4月1日更新開始。  
2010年4月2日最終更新。

## 断章一 とある会話

靴音が暗闇に響く。

何処からか風が吹くと、柱に取り付けてある松明の炎が、ゆらゆらと揺らめいた。

「只今戻りました。」

そう言ったのは、足音の主である眼鏡を掛けている青年。

左右に分けた黒髪、黒を基調とした道士服に、白と緑のケープ状の上着を重ねて着ているその青年は、目の前の円卓を囲んでいる人達に声をかけた。

「遅かったな。」

「少し想定外の事態が起きましてね、その状況を観察していましたので時間が掛かりました。」

その中で一番の年長者と思われる老人男性が、青年に尋ねる。青年は苦笑しながら経緯を説明していく。

「想定外の事態とは？」

「……張宝が劉備軍と行動を共にしています。」

「……何だと？」

青年の報告に、尋ねた老人だけでなく、円卓を囲んでいる全員が驚きの声を上げた。

まるで幼子の様な容姿ながら達観した口調の男女、十代中盤から後半の容姿ながら幼い口調の男女、二十代から三十代と、各年代の男女が居るが、皆普通の雰囲気ではない。



「……今回も、張宝等が生き残ったか。しかも今回は曹操ではなく劉備についたとはね。」

「正確には、劉備ではなく清宮涼についている様ですがね。」

「どちらでも構わん。問題は、流れが大きく変わっている事なのだからな。」

そう言ったのは若い容姿の女の子。だが、口調も声質も、外見からは想像出来ない程に落ち着き払っていた。

因みに、多少の差違は有るが皆同系統の道士服を着ている。

「今迄も厄介だったが……今回のファクターは奴では無いのだろうか？　なのに何故また同じ事が起こっているのだ？」

「ファクターが誰であれ、存在する限り変化が起きる、という事なのだろうな。」

二十代の容姿の男性が老人の様な口調で疑問を口にするると、円卓を囲む道士達の後方から、一人の青年が歩きながら呟く様にそう言った。

「どういう事じゃ？」

「異物が入ればそれに対処する。その結果、適応した姿になるという事だ。」

外見も口調も老人の女性が、振り向きながら青年に尋ねると、その問いに青年は低い声で静かに答えた。

青年もまた眼鏡の青年や他の人物同様、黒い道士服と白いケープ状の上着を着ている。

但し、ケープ状の上着は逆三角形の形をしており、他の人物とは明らかに形状が違っている。青年の拘りなのだろうか。

薄茶色の髪は短く、額には何かのまじないなのか、紅い印が描いてある。

眼は鋭く、眼鏡の青年の温和な表情とは対照的だ。

「では、また前と変わらないという事？」

外見も口調も十代の少女が、薄茶色の髪の青年に尋ねる。

「その可能性が高いのは確かだが、未だそうなると決まった訳でも無い。」

「つまり、やり直せる可能性も残されている、という訳ですね？」

「そうだ。」

幼い容姿と、その外見から少しだけ成長した人間の口調と声質の少年が確認する様に尋ねると、薄茶色の髪の青年は短くハッキリと答えた。

「なら、この件は今回も二人に任せる。くれぐれも、失敗しない様に。」

眼鏡の青年と最初に話していた老人がそう言うと、円卓を囲んでいた道士服の集団はゆっくりと立ち上がった。

「そつちもしくじらない様にするんだな。」

「ふっ……。」

薄茶色の青年が老人に対して吐き捨てる様に言うと、老人は小さく笑いながら文字通り姿を消した。

他の道士達も、それを見ながら一人、二人と消えていく。

円卓の周りに残ったのは、眼鏡の青年と薄茶色の髪の青年だけに

なつた。

「まったく……御老体達に何て口の聞き方をするんですか。」

「立場は変わらん。只、奴等の方が長く存在しているだけだ。」

「それはそうですが……。」

「それより、今度のファクターは今何をしている？」

「今は幽州の公孫贇の許で義勇兵を集めたり、兵の調練に勤しんでいる様ですね。」

「ほう……公孫贇も人が良いものだな。自分の領内で兵を集めさせるとは。」

「公孫贇と劉備は親友ですから、軽い気持ちで承諾したのでしょうか。」

「……もつとも、公孫贇も今は少し後悔しているかも知れませんが。」

「どういう事だ？」

薄茶色の髪の青年の問いに、眼鏡の青年は苦笑しながら答えた。

「義勇軍に参加する人間が想像以上に多く、幽州の人材が根刮ぎ持つて行かれる勢いなんです。」

「庇を貸したら母屋迄取られそうな訳か。」

薄茶色の髪の青年は、いい気味だという表情をして笑った。

笑い終えると、表情を戻して尋ねた。

「ところで、アイツの姿が見えなかった様だが？」

「アイツ……ああ、彼女の事ですか。そう言えば居ませんでしたね。」

「また何処かに行っているのか。」

「恐らく。」

「こんな時に何をしているんだ、アイツは……！」

どうやら誰か来ていなかったらしく、薄茶色の髪の青年はその事で苛立っている様だ。

やがて、二人も先の道士達と同様に消えていった。

## 第七章 戦乱の火種（前書き）

黄巾党が居なくなり、世の中は平和になった。

だが、黄巾党が居なくなっても悪人が居なくなった訳では無い。

新たな戦乱は、直ぐそこに迄近づいていた。

2010年4月2日更新開始。

2010年5月2日最終更新。

## 第七章 戦乱の火種

涼達義勇軍が幽州に到着して、約二ヶ月。

その間に義勇軍の規模は三倍以上に膨れ上がり、若くて優秀な人材が集まっていた。

余りにも急激な増加に公孫贇は一時頭を抱えたが、元来のお人好しさも相まって強く言えなかった様だ。

因みに、盧植から預かった兵士はちゃんと返したが、その中から義勇軍に参加した者も少なからず居た。

そうして今の義勇軍は一万を超す大軍へと成長し、それに伴って部隊の再編が行われた。

『総大将・劉玄德』

『副将・清宮涼』

『筆頭軍師・徐元直』

『副軍師・簡憲和』

『第一部隊隊長・関雲長』

『第二部隊隊長・張翼徳』

『第三部隊隊長・田国譲』

『第四部隊隊長・劉徳然』

基本的には連合軍の役職をそのまま受け継いでいるが、連合軍では部隊統括の任に就いていた桃香が総大将になって涼が副将になっていた。軍師も役職変更があったりしている。

桃香は当然ながら総大将になるのを拒んでいたが、将来何が起きるか判らない現状では、桃香にも総大将を経験してもらおう事が重要だと説明し、渋々ながら了承してもらっている。

『というか、桃香も義勇軍の中心人物だろ。』

というツツコミも涼は忘れなかった。

公孫贄及び劉備、清宮の三名に対して洛陽からの使者がやってきたのは、軍の再編と調練を一通り終えた時だった。

「白蓮ちゃん、洛陽からの使者さんは一体何を伝えに来たのかな？」

「解らん。だが、私だけでなく桃香や清宮迄も呼ばれたとなると、只事じゃ無いかも知れない。」

「……だろうな。」

謁見の間へと向かう道すがら、桃香と白蓮は使者の目的について話し合っていた。

だが、涼はこの使者が何を伝えに来たのかという大体の予想はついていた。

(黄巾党の乱が終わったら、次に起きるのはあの事件……そしてあの戦いか……。)

何故かは判らないが、この世界は三国志演義を基にした世界である。

そして、涼はこの世界の人間ではなく、また、普通の人間より三国志演義に関する知識が豊富だった。

「……？ 涼兄さん、どうかしました？」

「いや……悪い知らせじゃなければ良いなと思ってな。」

「そうだよな、折角黄巾党の乱を鎮圧して世の中が平和になったのに、また戦いが起きたら大変だもん。」

「まったくだ。」

涼は心配する桃香を気遣い、それとなく誤魔化す。

だが、桃香の危惧が現実になる事を知っている涼は、心苦しくなっていた。

謁見の間に着くと、そこには見知らぬ二人の少女が居た。

一人は黒髪おかつば頭の大人しそうな少女、もう一人は緑のシヨートヘアが外向きにはねていて、紺色のバンダナを巻いている活発そうな少女だ。

「お前達が使者だったのか。」

「はい、御久し振りです白蓮様。」

白蓮が使者に向かつて喋ると、おかつば頭の少女が挨拶をし、続けて隣に居るバンダナの少女も挨拶をした。

白蓮の口調や、使者の少女が公孫贄を真名で呼んでいる事から、白蓮と彼女達は顔見知りの様だ。

「お前達が来たという事は、麗羽が何か言ってきたという訳か。」

「そーなんですよ白蓮様。しかも今回は、何進大將軍も一緒なんです。」

「何進が？ 一体何が有ったんだ？」

バンダナの少女が何進の名前を出すと、白蓮は怪訝な表情になった。

また、涼達にとっては黄巾党の乱でしゃしゃり出られた経緯が有る為、それなりに思う所は有る。

「重要な事ですから口にする訳にはいきませんので、詳しくはこの封書を御覧下さい。また、読んだ内容は信頼出来る人にだけ伝えて下さい。」

おかつば頭の少女が懐から封書を取り出すと、白蓮の部下がその



封書を預かり、白蓮の許へと持ってきた。

「封書は確かに受け取った。」

白蓮は封書を手にすると、それを懐に入れた。

「二人共長旅で疲れているだろう、今日はこの城で休んでいくとい  
い。」

「有難うございます、白蓮様。」

「流石、白蓮様は麗羽様と違って常識が有るなあ。」

「文ちゃんつてば、麗羽様に怒られても知らないわよ。」

「どうせ聞こえないんだから大丈夫さ。」

おかつぱ頭の少女が注意をするも、バンドナの少女はそう言っ  
てケラケラと笑っていた。

その光景を見た白蓮は苦笑していたが、そこに涼が尋ねてきた。

「なあ、白蓮。」

「ん？ 何だ、清宮？」

「今更だが、この二人は何進と誰からの使者なんだ？ さつきから  
白蓮やこの娘達が言っている名前は真名だろうから、俺は判らない  
し。」

「それは済まなかった。麗羽つてのは袁紹の真名で、この二人はそ  
の袁紹の部下だ。」

「成程、袁紹のね……。」

白蓮から、おかつぱ頭の少女とバンドナの少女について教えられ  
てる間、当の二人は涼をジッと見ていた。

「という事は、緑の髪の娘が文醜で、黒髪の娘が顔良なのかな？」

「えっ!?!?」

「何であたい達の名前を知ってるんだ!？」

涼が発した言葉に使者の少女達は驚いた。

実は先程の挨拶では、二人は名前を言っていない。白蓮とは顔見知りの様なので、名前を言うのを省いたのだろう。

それなのに、涼は二人の名前をピタリと言い当てた。驚くのも無理は無い。

桃香や白蓮もやはり驚いており、涼を凝視している。その空気を読んだ涼は理由を話し出した。

「理由は簡単だ。さつきその娘が君の事を“文ちゃん”って言った  
だろ? だから君の名前が文醜だって解ったのさ。」

「ああ、成程。」

バンダナの少女・文醜は涼の説明に納得しそうになる。

だが、おかつぱ頭の少女・顔良は納得していないらしく、文醜に今の説明の疑問点を述べていく。

「文ちゃんっ、今の説明で納得しちゃ駄目だよっ。」

「え、何で?」

「何で? じゃ無いよう……。あのね、文ちゃん、今の説明だと、  
文ちゃんの“文”って姓は解るけど、“醜”って名は判らないでしょ?」

「……ああ、本当だーっ!」

暫く考えてから漸く意味を理解したらしく、文醜は大きな声を上げた。

「それに、私は姓も名も喋ってないよ。」

「だよな。おい、何であたいだけでなく斗詩の名前を知ってるんだ

よ！」

文醜はまるで敵を威嚇する様に、涼を睨みながら言った。

一瞬にして場の空気が変わる。

使者である文醜達は今謁見中の為に武器を持っていないが、何か有れば殴りかかってきそうな雰囲気だ。

仕方無く、涼は改めて理由を述べた。

「何でつて……まあ、名前を知っていたから、かな。」

「……はあ？」

涼がそう答えると、文醜は間の抜けた声を出した。

顔良も言葉の意味を測りかねており、桃香と白蓮もキョトンとしている。

「袁紹軍の二枚看板と言えば顔良と文醜だろ。だから名前を知っていただけさ。」

「あー、確かにあたい等は袁紹軍の二枚看板ってよく言われるし、それなら納得。斗詩もそう思うよな？」

「う、うん。」

顔良は未だ少し疑問に思っている様だが、追及はしなかった。

桃香や白蓮も納得したらしく、ホツとした表情を浮かべている。

(実は別世界から来たから知っているとか言っただって、理解されないだろうしな……。)

涼は心の中で苦笑した。事情を話してる桃香達でさえ、ちゃんと把握はしていないかも知れない。

何せ涼は天の御遣いにされているくらいだから。

涼はそんな大層な存在では無いと自覚しているが、その名称の効果が有る間は、別に構わないと思っっている様だ。

「そう言えば、あんた誰だ？」

文醜は今気付いたかのようなトーンで尋ねる。顔良もまた同じ様なリアクションをとって涼を見つめた。

「そう言えば自己紹介が未だだったね。俺は清宮涼、義勇軍の副将を務めている者です。」

「あー、あんたがあの“天の御遣い”とか言われてる人か。」

「という事は、貴女が劉玄德さんなんですね？」

涼が「天の御遣い」と判った文醜はマジマジと涼を見つめ、顔良はその天の御遣いと共に戦っている桃香を見つめながら尋ねた。

「はい、義勇軍の総大将を務めている劉玄德です。」

「と言うか、俺達三人を呼んだんだから、そっちは俺達の名前を知っているべきなんじゃないか？」

「それはそうなんです、私達の名前を当てられて動揺してしまい、つい失念してしまいました。」

「ゴメンよ、御遣いのアニキ。」

涼のツツコミに対して顔良は真面目に謝り、文醜は軽く謝った。

勿論直ぐに顔良に叱られている。

「ま、まあ、良いじゃんか斗詩。それより、あたい達も御遣いのアニキ達に自己紹介した方が良いんじゃないか？」

「あつ、それもそうね。」

文醜がそう提案すると、顔良はそれに同意して居住まいを正した。

「じゃあ、あたいから。あたいの姓は“文”、名は“醜”、字は“伸緑”、真名は“猪々子”（いいしえ）。宜しくなつ。」

文醜はそう言つて笑顔で手を振る。

だが、文醜以外の全員は驚いて反応出来ないでいた。暫くして最初に反応したのは顔良だった。

「ちょっと文ちゃんっ、いきなり真名を預けるなんてどうしたのっ！？」

「いーじゃんか、斗詩。気にしなーい気にしない」

「気にするつてばあつ。」

文醜はケラケラと笑っているが、顔良の言う事はもつともだ。

真名は神聖なものであり、呼ぶのを許可していない者が勝手に呼んだら首をはねられても文句は言えない程、大切なもの。

それだけに、真名を呼ぶのを認める時は、相手を心から信頼しているという証になっている。

だから、会つたばかりの涼に真名を預けた文醜の行動は、普通は有り得ない事なのだ。

「斗詩くそんなに心配しなくて大丈夫だつて。あたいだつてちやんと考えてるからさあ。」

「……例えば？」

心配する顔良に、文醜は耳打ちする様に顔を近付けて言った。

「天の御遣いと仲良くなつてれば、姫も喜んでくれるんじゃないかと思つたんだよ。」

「麗羽様が喜ぶ？」「そつ あたい等が天の御遣いと仲良くなつていれば、姫が天の御遣いに認められたつて噂が立つかも知れない

「じゃんか。」

「成程……って、珍しく文ちゃん冴えてるね。」

「珍しくってなんだよーっ。」

顔良の指摘に文醜は頬を膨らませるが、本気で怒ってはいない様子だ。

「だからさ、斗詩も真名を預けなよ。」

「う……うん、そうするね。」

文醜と顔良は一連の会話を声を潜めて話している。

「……随分と大きなヒソヒソ話だな。」

「ですね……あはは……。」

だが、顔良は兎も角文醜の声は結構大きく、涼達は苦笑しながらその会話を見守っていた。

やがて、会話を終えた二人は涼達に向き直って話しだした。

「えっと……兎に角そういう訳だから、あたいの事は真名で呼んでくれ。」

「ああ、解った。」

（って、どつという訳か説明してないじゃんか。）

涼は心の中でそう突っ込んだ。

それは桃香や白蓮だけでなく顔良も同じだった様で、文醜を見ながら苦笑している。

その顔良は暫くして表情と居住まいを正し、涼達に自己紹介をした。

「私の姓は“顔”、名は“良”、字は“青恵”、真名は“斗詩”。  
お二人共、これから宜しく願います。」

顔良はそう言うと、左手の掌に右手の拳を当てて平伏の姿勢をとる。

「ああ。君の真名、確かに預かったよ。」

「猪々子さん、斗詩さん、これから宜しく願いますね。」

涼と桃香は共に笑顔で二人にそう言い、斗詩と猪々子も笑顔で応えた。

こうして、涼達は顔良の真名「斗詩」と、文醜の真名「猪々子」をそれぞれ預かった。

真名を預かった涼は、改めて斗詩と猪々子の姿を見る。

斗詩の髪型は黒いおかつぱ頭で、瞳は薄い紅。

紺に白のラインが入った服に白いミニスカート、紫のニーソックスを履き、服やニーソックスの上には金に黒いラインが入った鎧や籠手、足当てを身に付けていた。

また、長い緑の布を首元と腰に巻いており、腰の布は蝶結びになっている。

一方の猪々子は、髪型は外向きにはねた緑のショートヘアでバンダナを巻き、瞳は碧。

服装は、基本的に斗詩と似た様な服や鎧を身に付けている。

違いと言えば、指先や足も防具を身に付けている斗詩と違い、猪々子は胸と肩、そして籠手だけしか防具を身に付けていない事。

ニーソックスは白で、更にガーターベルトらしき物が付いている事。

服の色が緑で、腰の布は赤紫、首元の布は青だという事だ。

(大人しそうな感じの斗詩に、ボーイッシュな猪々子か……。)

観察を終えた涼は、外見や口調がとても対照的な二人だなあとい

う感想を、頭の中で述べていった。

「それでは白蓮様、私達はお言葉に甘えて休ませて貰います。」

「ああ、ゆっくり休んでくれ。」

そう言つと白蓮は侍女を呼び、斗詩と猪々子を客室へと案内させてから、涼達を連れて執務室へと向かった。

数分後、執務室には涼達三人の他に愛紗と雪里、そしてもう一人の軍師である小さな少女が集まっていた。

「それで白蓮殿、袁紹と何進の手紙には一体何と書かれていたのです?」

愛紗が白蓮に尋ねる。

因みに、この二ヶ月の間に愛紗達は白蓮と真名を預け合っていた。

「それなんだが、簡単に言えば十常侍を倒す手伝いをしてほしいぞうだ。」

「十常侍を?」

「ああ。皆、十常侍の悪評は知っているよな?」

「ええ。帝が病弱で政治に疎いのを良い事に、好き勝手にやっているそつですね。」

白蓮が涼達に確認すると、雪里は帽子の鏝を摘みながら言った。

「そつだ。お陰で今の漢王朝は腐敗しきっている。例えば、何もしなくても十常侍に賄賂を贈れば、簡単に昇進出来るくらいにな。」

「逆に十常侍に睨まれれば、例え戦功を上げていても左遷させられ、下手をすれば処刑されるそつです。」

「そんな……!」



補足した雪里の言葉に、桃香は絶句する。

涼も、判っていた事とは言え、実際に事実を耳にして少なからず動揺した。

「残念だけど、事実だよ桃香ちゃん。先の黄巾党の乱において、戦功をあげていた皇甫嵩將軍は益州太守に、朱儁將軍は車騎將軍として河南の長官になったものの、その後賄賂を拒んだ為に左遷されたという話らしいし。」

「皇甫嵩將軍と朱儁將軍が!？」

もう一人の軍師である小さな少女がそう言うと、桃香は驚きを隠さずに、怒りを含みながら声を震わせた。

愛紗もまた驚きながら言葉を紡ぐ。

「あの二人も、我々連合軍に劣るとはいえ、かなりの戦功をあげていた筈。それなのに左遷とは、何と酷い……。」

「それが現実、か……。白蓮、君はどうするんだ？」

重苦しい空気の中、涼は白蓮に尋ねた。

「麗羽の頼みをきくのはちょっと癪だけど、かと言って十常侍を放つておく訳にはいかないな。」

「じゃあ、決まりだね。」

桃香はそう言って纏めようとした。

だがその時、誰かが執務室の扉を開けて入ってきた。

「伯珪殿、私抜きで軍議を始めるとはひどいではないですか。」

入ってきた人物は、そう言って白蓮の前に立った。

「仕方ないだろ。呼ぼうと思った時に居なかったお前が悪い。」

「少しは探してくれても良いのではないですか？」

「どうせまた、メンマを食べに拉麵屋に行ったのだから？」

「失礼な、ちゃんと拉麵も食べていますぞ。」

「当たり前だ。拉麵屋で拉麵を残したら失礼だろ。」

何だか、喧嘩してるのか漫才をしてるのか判らない感じになってきた。

とは言え、このままでは話がややこしくなりそうなので、涼はその人物を宥め始めた。

「まあまあ、白蓮も悪気が有った訳では無いんだし、そう目くじらたてるなよ、星。」

「……清宮殿がそう仰るなら、今日の所はここ迄にしておきましょう。」

「やれやれ……。」

その人物・星は涼の説得に応じて身を引いてくれた。

だが、その表情からは元々そんなに怒ってもいなかった様に見えるので、放っておいても大丈夫だったかも知れない。

「それで、軍議の内容は一体何だったのですかな？」

星は周りを見ながら尋ね、雪里がそれに応えた。

「成程、十常侍誅殺の要請でしたか。」

「ああ、私達はその要請を受ける事にした。星も来てくれるよな。」

白蓮は星に確認する様に言った。言わなくてももついてくると思っ

ていたが、一応礼儀として尋ねていた。

だが、星は神妙な顔になって考え込んだ。

「……妙ですな。」

「何がだ？」

「悪政を強いる十常侍を倒すのは当然でしょう。ですが、袁紹は三公を輩出した名門袁家の出身で従姉妹には袁術も居る。それに何より、何進は名目上とは言え洛陽を統べる大將軍。彼等の軍勢だけでも十分に十常侍を倒す事が出来る筈なのに、我々に迄出陣を要請するとは少々下せぬと思ひましてな。」

星はそこ迄言つと、まるで涼達の反応を見る様に周りを見た。

それに応える様に、愛紗が言葉を紡ぐ。

「万全を期して、という事ではないのか？ 十常侍の影響力は我々の想像以上なのかも知れないではないか。」

「だと良いのだが……。」

「それじゃあ、星はここで留守番でもしておくかい？」

「御冗談を。天下の一大事になるかも知れない時に留守番等、この趙子龍に出来る筈が無いではありませんか。」

尚も神妙な顔の星に涼がからかい気味に尋ねると、星・趙雲は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「それなら、最初から参加すると言えば良いだろ。」

「だよな。」

白蓮と涼は苦笑しながらそう話し、軍議はこれで終わった。

翌日、白蓮から返事の手紙を受け取った斗詩と猪々子は、一足早く洛陽へと帰っていった。

一方の涼達は、幽州でそれぞれ部隊の編成をし、二日後に洛陽に向けて出撃した。

洛陽は幽州から見て南南西に位置する漢王朝の首都である。

首都だけあって人口が多く、また貴族達が多数住んでいる街である。

一方で、貧民層も少なからず存在しており、貧富の差の解消は漢王朝の至上命題であった。

だが、政治を取り仕切る宦官……特に十常侍にとって貧民層の間等は問題にする事も無く、ひたすら自分達の栄華の為の政策を執り続けた。

その結果、貧富の差は拡大し、人々の不満は増大していく。そして起こったのが黄巾党の乱なのだ。

「……しかし、未だに奴等は危機感が無い様だな。」

「だからこそ、何進や袁紹は十常侍を討とうとしてるんだろう。」

食事をしながら、白蓮と愛紗はそう言った。

今、涼達は洛陽迄あと半日という距離を残して夜営をしている。

無理をすれば夕刻には到着したのだが、不測の事態に備えて休息をとる事にした。

「御主人様。」

「どうしたの、雫?」

もう一人の軍師である小さな少女・雫が、涼に向かって恭しく告げる。

「はい。念の為に放っておいた斥候が、先程戻ってきました。」

「そうか。何か変わった様子は有った?」

「いえ、特に何も無い様です。只……。」

「只……何だい?」

「強いて言うならば、いつもよりは静かだったとの事。その者は洛陽出身ですから、そこが気になった様です。」

「解った。斥候の人達には劣いの言葉とゆつくり休む様伝えてくれ。」  
「御意。」

涼への報告が終わると、雫は一礼してから来た道を戻っていった。

「……どう思う？」

涼が周りに居る面々に尋ねる。

因みに、今この場に居るのは涼の他に桃香、愛紗、白蓮、星、そして短髪の少女の五人だ。

「やはり、洛陽が静かだというのは気になりますね。」

「つい先日迄大乱があったとは言え、洛陽はこの国の首都。それが静かとは、少し変ですな。」

「なら、明日の進軍は必要以上に気をつけていくべきだな。」

「だが、変に気を張ると敵に気取られるかも知れないぞ。」

「けど、だからと言って無防備なままで進むのは危険だと思うよ、時雨ちゃん。」

皆の意見は纏まりそうで纏まらない。

自分一人だけなら多少の無茶も出来るだろうが、今の彼等は義勇軍と幽州軍合わせて約五万の大軍を統べる将と指揮官。彼等の判断一つで五万人の命、そしてその家族の運命が決まってしまうのだから、慎重になるのは仕方なかった。

食事をしながらの軍議は長引きそうな雰囲気だったが、軍議は唐突に終わった。

「軍議並びにお食事中失礼します、清宮殿。」

そう言って近付いてきたのは、義勇軍筆頭軍師の雪里だった。

「どうした？」

「……清宮殿に客人です。」

「客人？」

どこか歯切れが悪い雪里の物言いと、「客人」というこの場に相応しくない単語に、涼は違和感を覚えた。

そこに、一際明るい声が聞こえてきた。

「涼、久し振り」

聞き覚えのあるその声は、真っ直ぐ涼に近付いてくる。

まさかと思いつながら声がする方に顔を向けると、やはりそこには見知った顔があった。

「雪蓮!？」

「ふふ 三ヶ月振りね、涼」

そう言いながら雪蓮は涼に抱きついた。お陰で涼の顔には雪蓮の豊かな胸が押し付けられている。

「ちよっ、苦しいよ雪蓮。」

「あら、気持ち良いの間違いじゃないの？」

涼も男だ。美少女に抱きつかれて、しかも胸を押し付けられたら気持ち良いに決まっている。

だが、この場でそんな事を言ったらどうなるか簡単に想像出来る。

(愛紗のあの一撃は痛いからなあ……。)

過去の痛みを思い出して、心の中で肩をすくめる涼だった。

「と、取り敢えず離れてくれよ。これじゃ雪蓮の顔を見ながら話が出来ないからさ。」

「あら、上手い言い訳ね。」

雪蓮は、艶っぽい笑みを浮かべながらゆっくりと涼から離れた。

ホツとする涼だが、周りの視線が痛いのが感じたので、振り向かない様にする。

空気が悪くなる前に涼は尋ねた。

「えっと、雪蓮はどうして此処に？」

「多分、涼達と同じ理由よ。」

「て事は、雪蓮も何進と袁紹の要請を受けたのか。」

「ええ、既に母様は洛陽に入っているわ。」

「あれ？ 何で一緒じゃないの？」

「私もずっと母様と一緒に訳じゃないわよ。……それに、万が一って事も有るから、私達は遅れて来るように言われていたし。」

「万が一？」

涼が疑問に思いながら呟くと、雪蓮は洛陽が在る方角を見ながら言った。

「……十常侍の奴等に察知されていたら、返り討ちに遭う危険性が有るからよ。」

その表情には、先程迄の明るさや艶やかさは無い。

そこに居たのは、孫家の武人・孫伯符だった。

「……もし何かあっても、雪蓮が居れば立て直せるって訳か。」

「ええ。私達が生き残っていれば、孫家の血は絶えない。母様はそれを見越して、私達に遅れて来るように言ったのよ。」





「初耳だっ！」

自分の恋愛が許可制だった事に驚き、思わず声を上げる涼だった。やがて、順次正気に戻っていき、それぞれ雪蓮に詰め寄っていく。

「孫策殿、少しは場をわきまえて頂きたい！」

「あら……ひよつとして貴女、妬いてるの？」

「なっ！？　ち、違うぞっ！　私は兵達に示しがつかなくなってしまっから言っているのだっ！！」

愛紗もまた、桃香と同じく雪蓮に詰め寄るが、逆にからかわれて赤面する始末。

短髪の少女・時雨は喧嘩口調で雪蓮に殴りかかろうとするも、雪蓮には掠りもしなかった。因みに雪蓮は涼に抱きついたままだったので、涼も一緒に動いていた。

白蓮は何とか場を落ち着けようとするが結局駄目で、雪里は諦めた様に溜息をついている。また、星に至っては一連の騒動を面白そうに見物していた。

そんなこんなで收拾がつかなくなってきた時、聞き覚えの無い二つの声が涼達の耳に届いた。

「何をしているんですか、姉様！」

「悪戯が過ぎるわよ、雪蓮。」　声のした方向に顔を向けると、そこには雪蓮と似た外見の少女と、長い黒髪の女性が並んで立っていた。

雪蓮はその二人を見ながら、キョトンとしたまま声をかける。

「蓮華、冥琳。二人共どうしたの？」

「どうしたの？　ではありません！　ちょっと挨拶しに行くと言っ  
たつきり帰ってこないから、一体何をしているのかと思えば……！」

「楽しいわよ　蓮華も一緒にする？」  
「しませんっ！！」

雪蓮がからかう様に言うと、雪蓮と似た外見の少女・蓮華は顔を真っ赤にしながら拒否した。

ひよっとしたら、蓮華はこういった話は苦手なのかも知れない。

「雪蓮、貴女の行動一つで我々の評価が決まるのよ。少しはそれを自覚して欲しいものね。」

「解ってるって冥琳。それくらいちゃんと自覚してるわよー。」

「……自覚してこれなら尚更困るのだから。」

黒髪の女性・冥琳は、やれやれといった感じで溜息をつきながらそう言った。

「どうやらかなり苦労しているらしい。」

「あの……雪蓮、この二人は？」

雪蓮に抱きつかれたまま涼は尋ねる。

「そう言えば涼は初対面よね。この二人は私の妹の孫権と、親友で軍師の周瑜よ。」

雪蓮の紹介により、蓮華と呼んでいた少女が孫権、冥琳と呼んでいた女性が周瑜と判った。

「成程、この二人が孫仲謀と周公瑾なのか。」

涼は二人を見ながら何気なく言った。

だが、言われた方は何故か驚いている。

「なっ!？」

「……何故、私達の字を知っている!？」

そう、雪蓮は勿論二人も喋っていないそれぞれの字を、涼はピタリと言い当ててしまったのだ。

「それは知っていて当然ですよ。なんたって涼兄さんは天の御遣いなんですから。」

と、桃香が笑顔で言うが、

「いや、その理屈はおかしい。」

「ちゃんとした理由が無ければ納得は出来んな。」

と言われ、桃香は困ってしまった。

とは言え、実際の所桃香が言った事は強ち間違っていないので、涼も説明し難かったりする。

「まあまあ、そんな細かい事、別に良いじゃない。」

「細かくありませんっ!」

「初対面の相手に字を当てられては、少なからず警戒するものだ。」

雪蓮が取りなそうとしても、二人は納得しなかった。

かと言って、元の世界……この世界で言う天界の事や自分の事を説明するのは難しい。それに、その事は余り言っただけいけない気がしていた。

何故いけないかは、涼自身にもよく解らないのだが。

「ちゃんと説明してあげたいけど、上手く説明出来ないんだ。それと、桃香……劉備が言った事も間違っただけじゃないからね。」

「それで納得しろと？」

涼が雪蓮から離れながらそう言っても、孫権は不満らしく、軽く涼を睨みながら語気を強めて言った。

その態度が気に障ったのか、愛紗達もまた孫権を睨み始める。

段々と場の空気が悪くなっていくのを、涼や雪蓮、そして周瑜は感じ取っていた。

「えっと……そう言えば雪蓮、孫権と周瑜の二人はこの間は一緒にやなかったよね？」

「え？ ええ、二人には私達の本拠地である豫州を守って貰っていたのよ。そうよね、蓮華、冥琳？」

「え？ ……ええ、その通りです。」

「我等の主たる海蓮様と雪蓮の二人が豫州を離れている間、黄巾党が攻め込んでこないとも限らるのでな。念の為私達は、小蓮様と共に豫州の守りに徹していたのだ。」

場の空気を変えようと涼が雪蓮に話を振ると、雪蓮もそれを察し てくれたらしく話に乗ってくれた。

その為、孫権も話に乗らなければならず、周瑜に至っては積極的に話を展開していった。

結果、場の空気は何とか保たれたのだった。

「……で、雪蓮は只挨拶しに來ただけじゃないんだろ？」

場の空気が安定した所で、涼は話を戻す為に雪蓮に話し掛けた。

「まあね。こうして涼と仲良くしたりとか……。」

「それは解ったから、真面目に話してよ。」

再び抱きつこうとしてきた雪蓮をかわしながら、涼は話を促す。

「これも真面目な話なんだけどなー。」

「……それはそれで色々と困るから勘弁してくれ。」

涼がそう言うと、雪蓮はまるで拗ねた子供の様に頬を膨らませていたが、孫権や周瑜が諭したら苦笑しながら大人しくなった。

「どうやら、この二人には頭が上がらないらしい。」

「まあ、簡潔に言うなら、この前みたいにまた一緒に戦いましょうって事よ。」

真面目な表情になった雪蓮が、涼達を見ながらそう言った。

涼は、雪蓮がそう提案すると解っていたのか、余り驚かずに応える。

「それはこっちとしても異存は無いよ。雪蓮達の軍の強さは連合軍で目の当たりにしてるからね。」

「涼ならそう言ってくれると思ったわ。」

涼が快諾すると、予めそう応えると解っていたのか、雪蓮は笑顔で抱きついてきた。

その結果、桃香達と雪蓮達との間で再び揉めたのは、言う迄もない。

それから、互いの親睦を深める意味を込めて、雪蓮達も涼達と一緒に食事をする事になり、義勇軍陣内は暫くの間賑やかだった。

そして食事を終えた雪蓮達は今、自陣に戻ってきている。

「まったく……姉様はもう少し総大将としての自覚を持ってもらわないと困ります。」

その自陣の奥に在る一番大きな天幕の中で、孫権は溜息混じりに  
そう言った。

因みに今、その天幕の中には孫権、雪蓮、周瑜の三人しか居らず、  
護衛の兵士達は出入り口に立っている。

「そう言われてもねー。母様と合流したら、私は副将に戻る訳だし、  
」

「それでも、今のこの軍は姉様の軍なのです。ですから、姉様は総  
大将としてしっかりしてもらわないと……。」

相変わらず軽い口調の雪蓮に、孫権は説教をする様に言葉を紡い  
でいく。

時々、雪蓮は助けを求めるかの様にチラッと周瑜を見るが、その  
周瑜は気付かない振りをして二人のやり取りを見続けていた。

「姉様は孫家の後継者なのですよ。その自覚を持ってこれからは…  
」

「けど、私に何かあったら、蓮華が後継者よね？」  
「っ!？」

孫権の言葉を遮って雪蓮がそう言うと、不意をつかれた孫権は絶  
句してしまった。

孫権は無意識の内に生唾を飲み込み、目の前に座っている姉を見  
る。

姉の表情は、先程迄見せていたいつもの明るくて人懐っこい表情  
ではない。

武人として、孫家の後継者としての、凜々しく、どんな相手でも  
萎縮させる覇気を持った、「孫伯符」がそこに居た。

その「孫伯符」が、表情を変えずに孫権に問い掛ける。

「母様に何かあったら私が、私に何かあったら貴女が、そして、もし貴女に何かあったらあの子が後継者になるのよ。それは解っているのかしら？」

「……解っています。ですから、今回の出陣に“シャオ”を連れてこなかったのですよね？」

「そうよ。勿論、豫州を空にする訳にいかないって理由も有るけどね。」

「シャオ」という、恐らく二人と親しい者の名前もしくは愛称を口にしながら、二人の会話は続く。

「ええ。黄巾党が居なくなっただとはいえ、豫州を狙う者がいつ現れるか判りませんから。」

「だから豫州にシャオを残す事で両方を守るのよ。勿論、シャオを守る事が最優先なのは間違いないけどね。」

「はい。……つまり、私達にも後継者としての自覚を持って仰りたいのですかね？」

「そうよ。……母様だって、そうしてきたのだから。」  
雪蓮がそう言うと、孫権は勿論ながら、周瑜も神妙な面もちになって僅かに俯いた。

「父様が急死されて以来、母様は孫家の当主として頑張ってきたわ。……まあ、ちよーつと頑張り過ぎな時もあったけど。」

幼い頃、自身が体験した「或る事」を思い出したのか、雪蓮は苦笑しながらそう言った。

「だから……私達にも自覚を、という訳ですね……。」

「そうよ。……だから、私が涼と仲良くなるのも当然なのよ。」

「はい……って、ええっ!？」

思わず肯定するも、内容がおかしい事に気付き、驚く孫権。目の前に座っている姉の表情は、いつの間にか明るく人懐っこい表情になっていた。

また、周瑜はというと、やれやれといった表情を浮かべながら軽く溜息をついている。最早何か言うのは諦めたのだろうか。

「姉様、何故あの男と仲良くなる事が当然なのですか!？」

「だって、涼は“天の御遣い”なのよ？」

「その様な肩書き、戯れ言に違い有りません!」

「そうかしら? 涼の衣服はこの国で見た事が無いし、それに、初対面の貴女達の字を言い当てたわ。」

「そ、それは確かにそうですが……。」

先程の事を思い出しながら、孫権は言葉に詰まった。

「……それに、もし涼が天の御遣いじゃなくても構わないのよ。」

困惑している孫権に、更に困惑する様な言葉を紡ぐ雪蓮。

そして、やはり孫権は更に困惑しながら尋ねる。

「ど、どういう事ですか!？」

「黄巾党の乱での活躍もあって、民衆の大多数は涼を“天の御遣い”と認識しているわ。勿論、蓮華の様に疑っている者も多数居る。」

「それはそうでしょう。皆が皆同じ意見になる事等、有り得ません。」

「ええ。だけど、人は流され易い生き物よ。肯定派が多数を占めていれば、少数の否定派から肯定派に移る者が出る。」

「そして、物事は基本的に多数派の意見が通ります。つまりこの場合、“清宮涼は天の御遣いである”という意見が多数を占めている現状では、余程の反対意見や証拠が無い限り、否定しても意味は有



りません。」

雪蓮、そして周瑜がゆつくりと孫権に説明をしていく。

その説明を聞いていく内に、いつの間にか孫権は冷静になっており、先程迄の困惑した表情は消え失せていた。

「ならば、“天の御遣いである清宮涼”と親睦を深める方が良いでしょう。ひよっとしたら、“孫軍が天の御遣いに認められた”という噂が流れるかも知れません。」　そこ迄言つと、周瑜はまるで答えを促す様に孫権を見た。

「……つまり、“天の御遣い”の威光を得る、という事ですか？」  
「まあね。」

孫権の答えに、雪蓮は満足した様に頷きながら肯定する。それは周瑜も同じ様だ。

「十常侍によつて政治は腐敗し、黄巾党の乱で漢王朝の国力は更に低下した。今更十常侍を討つても、直ぐに漢王朝が立ち直れる訳は無いわ。」

「そうになると、先ず間違い無く天下を取ろうとする者が現れるでしょう。つまり、戦乱の世が続くのです。」

「その時に少しでも優位な立場に立つ為に、清宮を利用する訳ですか？」

孫権が確認する様に尋ねると、雪蓮と周瑜は殆ど同時に頷いた。

「清宮と劉備には人を惹き付ける人徳が有ります。余程の失態や醜態が無い限り、民衆は彼等を支持するでしょう。」

「なら、涼達と仲良くしていれば孫家にとって有益になるでしょ？」

「確かに……。」

二人の説明を受けた孫権は納得し、また、自分の浅慮と姉や軍師の深慮を比べ、自己嫌悪に陥っている。

そんな孫権を見ながら、雪蓮が明るく告げた。

「……まあ、そんなのは関係無く、涼の事を気に入っているんだけどね。」

「姉様!？」

「だって、涼って結構良い男よ。」

「顔が良ければ良い訳ではありませんっ!」

戸惑っていた孫権が、顔を真っ赤にしながら断言する。

「勿論よ。涼は顔だけでなくちゃんと実力も有るわ。」

「そんなの信じられません!」

「……けど、私は涼に負けたのよね!。」

「なっ!？」

雪蓮の言葉に絶句する孫権。

暫くして「そんなの嘘です」と言おうと口を動かした時、周瑜が告げた。

「驚くのも無理はありませんが本当です、蓮華様。先の戦いで孫軍が連合軍に参加していた時、雪蓮は清宮に一騎打ちを申し込み、返り討ちにあったと泉菜様が仰られてました。」

「そんな……。」

姉が負けていた事がショックだったらしく、今迄で一番動揺している。

「まあ、信じられないなら、その目で見極めれば良いわ。これから暫くは一緒に居るんだからね。」

「……はい。」

落ち込んでいる孫権を励まそうとしたのか、雪蓮はそう言って微笑んだ。

それから、幾つかの話をして三人は各々の天幕へと戻っていった。だが、孫権だけは心の中に靄がかかったままでいた。

結局、その靄は孫権が眠りに就く迄消える事は無く、翌朝目が覚めると再び現れたのだった。

「孫権、その顔どうしたの？ ひよっとして寝不足？」

「……少しね。」

翌日の朝、軍議と朝食を兼ねて集合した涼達と雪蓮達。

そこで見た孫権の顔には隈があり、涼は心配になって声を掛けたのだった。

「大丈夫？ 無理はしない方が良いよ。」

「……解ってるわ。」

素っ気なく返事をし、所定の椅子に座る孫権。

その態度に愛紗達は不快感を露わにするが、涼は何とか落ち着く様に宥める。

「雪蓮。」

そこに、一人遅れていた周瑜が到着する。その手には竹簡が握られていた。

因みに竹簡とは、竹の板を紐で纏めた物で、紙が貴重なこの世界

では一般的な書写の材料である。

「なに？」

「今、洛陽の海蓮様から連絡があった。」

周瑜はそう言って竹簡を雪蓮に手渡す。

受け取った雪蓮は竹簡を開いて内容を確認する。

「……………これは…………。」

そう呟くと、真面目な表情のまま読み続ける。

「姉様、一体何があったのですか？」

座っていた孫権も、その雰囲気から心配しながら立ち上がり声をかける。

また、涼も軍師二人と共に雪蓮の側に立ち、彼女の言葉を待っていた。

「何進と袁紹が、十常侍の蹇碩を誅殺したそうよ。」

雪蓮が発した言葉に、孫権達は驚きを隠せなかった。

「なら、十常侍を全て討ったのですか？」

「いや、竹簡に蹇碩の名前が書かれているのなら違うと思う。もし十常侍全てを討ったのなら、“十常侍を討った”とだけ書かれているだろうからね。」

孫権が雪蓮に尋ねると、雪蓮が答える前に涼が推測を述べた。すると雪蓮は、小さく笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「涼の言う通りよ。……これによると、蹇碩は何進を暗殺しようとしていたらしいけど、それが何進にバレたのね。で、何進は先手を打って蹇碩を討ったんだけど、その直後に妹の何太后に説得され、兵を退いたみたいね。」

「馬鹿な！そこ迄きて兵を退く等有り得ません！！」

「私も蓮華と同意見よ。そして、それは母様達も同じみたい。今、袁紹や盧植達と共に、再び十常侍を討つ様に何進を説得しているそうよ。」

雪蓮はそう言っつて竹簡を涼に手渡した。

涼は竹簡を開いて内容を確認する。因みに、涼はこの世界に来てほぼ毎日勉強をしていた（させられていた）為、今や文字を読む事に支障は無い。

「孫堅さんは何進への説得の意味を込めて、雪蓮にも洛陽に入る様言っつてきてるね。」

「そうなのよ。まあ、要は数に任せて脅かしちゃえつて事よね。」

「身も蓋もない言い方だな。」

涼が苦笑しながら言っつと、雪蓮はケラケラと笑いながら言っつた。

「だつて事実だしねー。……で、私としては涼にも来て欲しいんだけど、どうかしら？」

「元々そのつもりで洛陽迄来た訳だし、構わないよ。雪里と雫もそれで良いよね？」

涼は雪蓮に答えてから二人の軍師に向き直る。

「はい。今、十常侍を倒さないと、この国が立ち直る機会は遠退いてしまつてしまうでしょう。ここは同行するべきです。」

「また、万が一の時の為に、愛紗さんと時雨ちゃんを護衛につけておく事をお勧めします。」

「徐庶と簡雍の二人がそう言つと、安心するわね。」

二人が太鼓判を押ししたので、雪蓮は笑みを浮かべて周瑜に向き直り、これからについて話を始めた。

因みに、簡雍とは義勇軍の副軍師を務めている小さな少女・雫の事だ。

鉄門峡の戦いの後に、地和達と共に義勇軍に参加した彼女は、主に雪里の補佐をしている。

その為、連合軍で一緒だった雪蓮は彼女の實力をよく知っており、どうやら認めている様だ。

雪蓮が周瑜と話してる間に、涼は軍師達の提案を吟味し、結論を出す。「……よし、なら愛紗と時雨と雪里、それと五百の兵に同行してもらおう。桃香と雫、鈴々と地香はここに残って義勇軍の指揮と防衛を頼む。」

「五百しか連れて行かなくて良いの？ もう少し多い方が、脅しになるんじゃないかしら？」

「いや、ここは敢えて少なく見せるべきだよ。」

「清宮、どうしてそう思う？」

雪蓮の疑問に涼が答えると、孫権がその理由を聞いてきた。

涼は孫権達を見ながら説明を始める。

「何進が十常侍の誅殺を止めたのは、妹に説得されただけじゃないと思うんだ。」

「と言つと？」

「さつき孫権が言った様に、幾ら説得されたとは言え、普通に考えるところこの状況で兵を退くのは考えられない。それでも退いたのは、何進が戦いを恐れたからじゃないかと思うんだ。」

「馬鹿な。仮にも何進は大将軍だぞ？ 戦いを恐れる等……。」  
「けど確か、何進は元々軍人じゃなく、妹が皇后になった事で軍人になった人間。なら、戦いの経験は少ない筈だ。」  
「それに、広宗の一件を見る限り、余り実力も無い様です。ならば、清宮殿の考えも強ち間違っていないと思います。」

始めは否定的な孫権だったが、涼と雪里の説明を聞く内に少しずつ納得していった。

「何進についての清宮の見解は解った。だが、それと少数の兵を連れて行く事の関連性は何だ？」

孫権は腕を組みながら尋ねる。  
涼はそんな孫権を見ながら説明を続けた。

「臆病な人間は、普通なら脅かせば簡単に屈服するだろう。だけど、人によつては意固地になつて屈服させるのに時間がかかる事もある。」

「確かに。」

「既に孫堅さん達が沢山の兵を引き連れて洛陽に居るみたいだし、何進にかかっている重圧はかなりのものだろう。」

「……成程、何進を疑心暗鬼にさせる訳か？」

何かに気付いたらしく、周瑜が笑みを浮かべながら涼を見据えた。

「流石は周瑜さん、その通りです。今の状況で俺が少数の兵を連れて行つたら、何進は一旦安心するでしょう。ですが、直ぐに何故俺の兵が少数なのか疑問に思う筈です。」

「仮にも大將軍である何進が天の御遣いである涼の現状を知らない筈は無いし、今迄の流れと違つ展開になつたら疑問に思うわね。」

雪蓮がそう言うと、涼は頷きながら説明を続けた。

「ああ。そして俺はそこで普通に接するだけで良い。臆病な人間は同時に深読みし易いから、少数の兵が実は精鋭中の精鋭なんて勘違いをするかも知れない。」

「直接脅すより、間接的に脅した方が効果的って訳ね。まったく、涼ってば考えが結構エグいわね。」

「脅すとかエグいとか言うなよ……まあ、実際そうなんだけどさ。」

涼は雪蓮にからかわれながらもその言葉を肯定し、皆に意見を求める。

すると、皆涼の考えに同意したらしく、反論は全く無かった。そうして皆に囲まれている涼を、孫権は静かに見つめ、やがて呟いた。

「……冥琳。」

「何でしょうか？」

「清宮の実力は未だ判らないわ。……けど、少なくとも今迄の評価を改める必要はありそうね。」

「……そうかも知れませんか。」

周瑜は孫権と雪蓮、そして涼を見ながら優しい声で応える。

だが、再び涼を見る周瑜の眼は、一瞬だけ鋭く光っていた。

当然ながら涼はそれに気付かず、話しかけてきた白蓮達の対応をしていた。

「白蓮と星は幽州軍だけど、本当に俺が決めて良いのか？」

「清宮は連合軍の総大将を務めていたんだし、私は構わないぞ。」

「伯珪殿の客将である私も異存ありません。」



二人にそう言われた涼は、暫く考えてから告げる。

「なら、ここで桃香達と共に待機してて。もし何かあったら、皆と共に対応してくれ。」

「解った。」

「承知しました。では。」

白蓮と星はそう言うと幽州軍の指揮に戻っていき、涼もまた雪蓮達と一旦別れ、義勇軍に指示を出しに向かった。

「……姉様。」

「なに？」

その直後、孫権が雪蓮に話し掛ける。その表情にはどこか迷いが見えた。

「……私も洛陽に行つては駄目でしょうか？」

「ダメ。」

「やっぱりですか……。」

「勿論よ。けど、理由が解っているのに何故訊いたの？」

「それは……。」

言い淀んだ孫権は、義勇軍の方をチラッと見る。

雪蓮はその仕草を見逃さず、暫く考えてから笑みを浮かべながら尋ねる。

「……なあに？ ひよつとして、涼に惚れた？」

「ち、違いますっ！」

「じゃあ何で涼が居る方角を見たの？」

「そ、それは……。」

雪蓮の追及に孫権は思わず言い淀み、俯いてしまいが、孫権はその理由を解っていた。

清宮涼を見極めたいが、認めるのが恐い。もし認めたら、何かが変わってしまう気がした。

何が変わるのか返は、ハッキリと解らなかったが。

「……まあ良いわ。今は興味無くても、何れ好きになれば良いんだし。」

「……………はい？」

雪蓮の思わぬ言葉に、孫権は間の抜けた声を出した。

「姉様……………それってどういう意味ですか……………？」

雪蓮の言葉の意味を測りかねた孫権が、恐る恐る尋ねる。

そんな妹の態度に気付いているのか気付いていないのか解らないが、雪蓮は明るく言い切った。

「どういう意味って、そのままよ。貴女が涼を好きになって、子供を作ってくれないかなあって事」

「……………え……………っ!!」

雪蓮はサラッととんでもない事を言い、孫権は言葉の意味を理解した瞬間、人目もはばからずに大声をあげて驚いた。

清宮涼と自分が、子供を作る。

それはつまり、二人がとて「親密な関係」になるという訳で。

「親密な関係」が何を意味するのか、十代半ばの孫権には当然ながら解っている訳で。

その状況を安易に想像する事もまた、簡単だった訳で。

「な、な、何を仰っているのか解っているのですか、姉様っ!!」

だからこそ、孫権はその褐色の肌を、普段では有り得ない程に紅潮させている訳だった。

「当然解っているわよ」 孫家に“天の御遣い”の血を入れる、  
って事でしょ」

「で、ですからっ！ それがどういう事が解っているのかと訊いて  
いるんですっ!!」

「ああ、涼と“まぐわう”って事？」

「そ、そうですねっ！ 姉様は、私にあの男とまぐわえと!？」

「勿論、無理強いはしないわよ。けど、そうなたら良いとは思  
っているわ。」

話が話だけに、孫権は声を潜める様にして尋ねていく。

それにつられたのか、雪蓮も若干声量を落として話を続けた。

「何故そんな事を……。」

「昨夜言っただでしょ、天の御遣いの威光を借りるって。これもその  
一つよ。」

「それにしても、子供なんて未だ私には……。」

孫権は真っ赤になった端正な顔を俯かせながら、小さな声で反論  
する。

「何言ってるの。私は今十九歳で貴女は十六歳。シャオは十三歳だ  
から未だちよつと早いけど、私達は充分子供を作る年齢よ。」

「それはそうですが……。」

だからと言って、好きでもない相手を好きになれとか、子供を作れとか言われて、納得出来る訳が無い。

雪蓮の言い分が理解出来るだけに、孫権は納得しきれなかった。

「まあ、私達三人の内、誰かが涼と子供を作れば良いんだし、深く考えない方が良いわよ」

「無理です!」

孫権は真つ赤な顔のままそう言った。

その後、話は一部始終を見ていた周瑜に「いい加減にしなさい!」と注意される迄続いた。

「お待たせ……って、何かあったの?」

涼は、目の前の光景に戸惑いながら尋ねた。

雪蓮と孫権が並んで地面に正座させられ、周瑜に説教されているのだから、戸惑うのも無理はない。

「気にするな、ちょっと常識について説教してただけだ。」

「常識って……雪蓮は兎も角、孫権も常識について怒られるなんて意外だな。」

「涼、それはちょっと酷いんじゃない?」

流石に雪蓮が文句を言ってくるが、直ぐ様周瑜が窘めてきたのでそれ以上は言わなかった。

一方、孫権は静かに正座したまま反論しようとはしない。

姉妹なのにこつも違つものかと、涼は驚きながら二人を交互に見ていった。

「よく解らないけど、こつちは準備出来たし、二人を解放してやっ

てくれないか？」  
「仕方ないな。」

周瑜は涼の頼みを聞き入れ、最後に一言念を押す様に言ってから二人を解放した。

雪蓮はお礼がてら涼に抱きつこうとしたが、最早慣れてる涼は簡単にかわしていく。

その度に雪蓮は文句を言ってくるが、やはり周瑜に宥められてそれ以上は言わなかった。

この様に色々あったものの、涼達は漸く進み始めた。

倒さなければならぬ相手である十常侍が居る、洛陽へ。

## 第八章 十常侍の暗躍（前書き）

漢は高祖劉邦によって作られた統一国家。

約四百年続く漢王朝も、今や落日の兆しが見えている。

その原因の一つが、ほんの一握りの宦官によるものだとはい、劉邦も  
予期出来なかっただろう。

2010年5月2日更新開始。

2010年7月11日最終更新。

## 第八章 十常侍の暗躍

自陣を出て約半刻後、涼は洛陽の城壁を見上げていた。

古代中国の街はその殆どが城壁都市だったと言われており、「三国志」の世界と似たこの世界もまた、殆どの街が城壁に囲まれている。

少なくとも、桃香の故郷である楼桑村を始めとして、涼が今迄訪れた街は全て城壁都市だった。

勿論それは漢王朝の首都である洛陽も例外では無く、寧ろ最大規模の大きさの城壁に囲まれていた。

「どうしたの？」

「いや……本当にでつかいなあと思ってさ。」

初めて見た訳でもないのに、そんな感想しか出てこない。

現代ではもっと大きな建造物が在るし、見た事もある。

それでも目の前の城壁を驚いて見上げてしまうのは、この世界でもこんな建造物が造れるという驚きと、その迫力によるものだろう。

「確かに大きいわね。……でも、大きいだけじゃ意味は無いわ。」

「まあな。」

雪蓮はそう言って馬を洛陽の入口である正門に進める。

城壁が大きいだけに門もそれなりに大きい。横に三十人並んでも余裕があるくらいだ。

「これから先は何があるか判らないわ。……覚悟は良い？」

「ああ、大丈夫だよ雪蓮。」

そう答えて涼は馬を進め、分厚い門を潜っていった。

洛陽の街は静けさに包まれていた。

十常侍の一人が殺された事が住人に伝わっているのか、涼達を見る人々の目には警戒心が強く表れていた。

「巻き添えにならないか不安なんでしょう。」

そんな住人達を見ていた涼に、雪蓮はそう言った。

言われてみれば、力を持たない住人にとって、兵を引き連れていく自分達は争いの種である事は間違い無い、と涼は認識した。

「……巻き込まない様にしないとな。」

「ええ。」

二人はそう言って目的地へと急いだ。

目的地は、洛陽中心部にほど近い場所に在る大きな屋敷。

以前洛陽に来た際にも滞在した屋敷に、今回も向かう。

「義兄上、どこに十常侍の刺客が居るか判りません。十分に御注意下さい。」

「お前に何かあったら桃香が悲しむからな。取り敢えず守ってやるよ。」

愛紗と時雨がそう言いながら涼の隣に並び、辺りに目を光らせる。

その雰囲気は、何人たりとも涼に近寄らせないという感じだ。

「あら、泉菜が居るわ。」

そんな中、雪蓮が進行方向に居る泉菜・程普を見つけ、馬を進めた。



すると程普もゆつくりと雪蓮達に近付いてこう言った。

「若君様、総大将、お待ちしていました。」

雪蓮達を出迎えた程普は、以前連合軍に参加していた時と同じ漆黒のコートの様な長袖の衣服を身に纏っていた。

その為、紅く長い髪がより映えて見える。因みに、雪蓮や孫権、周瑜達と同じ褐色の肌なので、尚更強調されていた。

「御久し振りです、程普さん。……未だ“総大将”って呼び方なんです。」

「連合軍での活躍を見た者なら、皆そう呼ぶかと存じます。」

「そ、そうかなあ……？」

涼は戸惑いながら答え、程普の案内通りに馬を進めた。勿論、その隣には愛紗と時雨が並んでいる。

暫く進むと、見覚えのある屋敷が視界に入ってきた。

「こちらで、殿や盧植様がお待ちです。」

「案内有難う、泉菜。そう言えば、何進も居るの？」

「何進様は先程迄居られましたが、一度御自宅へ戻られました。」

「十常侍の恨みを買っている時に単独行動なんて、大丈夫なの？」

「まあ、念の為、護衛は付けている様ですし問題無いかと存じます。」

「だと良いんだけど……。」

不安な表情になる雪蓮達だったが、大將軍である何進に意見出来る立場では無いので、気持ち切り替える事にした。

目の前に在る屋敷で、早急に話をしなければならぬのだから。

屋敷に入った涼達を真っ先に出迎えたのは、この屋敷の主人だった。

「清宮様、御久し振りです。」

「御久し振りです、翡翠さん。お元気そうで何よりです。」

涼が翡翠と呼んだ屋敷の主人は、名を盧植という。

後漢末期を代表する学者であり文官であり武将でもある盧植・翡翠は、柔らかな表情で涼達を見つめている。

「玄德と伯珪は一緒じゃないんですね。」

「桃香と白蓮には、洛陽の外で万一に備えて貰ってます。」

「この状況ですから、それが良いでしょうね。」

翡翠はそう言つて涼達を屋敷の奥へと招き入れた。

以前来た事があるので、屋敷の構造は大体覚えていた。

入口から真つ直ぐ進み、突き当たりを右に。そのまま真つ直ぐ行くと、沢山の人数が集まる事が出来る広い部屋に着く。

現代で言うなら「リビング」にあたるだろう。

その「リビング」には、先程程普が言った様に、先客が居た。

「久し振りね、涼。」

部屋に入ってきた涼を見ながら、最初にそう言ったのは金髪の巻き毛の少女。

見かけは小さいながらも、彼女が持つ雰囲気は限り無く大きな感じがする。

そんな少女に涼は挨拶を返した。

「久し振りだな、華琳。元気だったか？」

「ええ、病気になる暇が無い程忙しかったからかしら、元気に過ごせたわ。」

「それは良かった。」

華琳は笑みを浮かべながらそう応え、涼もまた微笑みながらそう言った。

因みに華琳とは真名であり、彼女の名は曹操と言う。

「三国志」における三英雄の一人、もしくは最大の敵である人物と同じ名を持つ少女も、今は未だ名が売れてきた武将の一人でしかなかった。

そして、そんな彼女の傍らにはネコミミフードの少女 - 荀或が居る。

華琳の軍師である彼女の真名は桂花と言い、華琳は勿論ながら涼もその名を呼ぶ事を許されている。

「桂花も久し振りだな。」

「ふん、馴れ馴れしく真名を呼ばないでくれる？ 孕んじゃうじゃない。」

「呼んだだけで孕むか！」

……許されているのだが、どうやら彼女は極度の男嫌いらしく、涼に対していつもこんな感じだったりする。

それなのに何故真名を許されているかというと、華琳が自身の真名を涼に預けた後、半ば強制的に桂花も自身の真名を涼に預けさせられたのだ。

勿論、桂花は物凄く嫌がっていたが、華琳が真名を預けている事もあって結局は預けた。

……一番の理由は、華琳が「命令したから」だったりするのだが、華琳様、只今戻りました。」

と、そこに、右目が水色の髪で隠れている少女と、長い黒髪をオールバックにした少女がそう言いながら現れた。

二人は殆ど同じデザインだが色違いの、チャイナ服の様な肩出し袖有りの服を着ており、その上には主に体の左側を、または体の右側を守る紫色の胸当てをそれぞれ着けていた。

因みに、水色の髪の少女の服は青色、黒髪の少女の服は赤色で、色以外の違いは服の留め具が前者は右肩の位置に、後者は左肩の位置に有る事だ。

また、細長い髑髏の腕当てをそれぞれ左腕と右腕に付け、足には黒いニーソックスと黒い靴を履いている。

とまあ、二人はこの様に対称的な姿形をしていた。そんな二人に対して、華琳は真剣な表情で尋ねる。

「お帰りなさい、秋蘭、春蘭。……それで、どうだったの？」

すると、秋蘭と呼ばれた水色の髪の少女と、春蘭と呼ばれた黒髪の少女はそれぞれこう報告した。

「はい、今の所は十常侍達に動きはありません。」

「何進も今は自宅で休んでいる様です。」

報告を受けた華琳は暫く考えてから二人に指示を出す。

「そう……なら、二人は何か起きた時の為に、暫くの間休んでいて。」

「はっ。……ですが、我々は華琳様の護衛をしなくても良いのでしょうか？」

「心配しなくても大丈夫よ。ここには孫堅や孫策といった名だたる武将が居るし、勿論私も戦える。それに……涼も居るわ。」

「えっ？」

華琳の言葉に驚いたのか、春蘭と呼ばれた少女はそう言って振り

返り、涼を見た。すると、何故か瞬時に嫌な顔になった。

「なんだ貴様、居たのか。」

「ご挨拶だな、春蘭。俺は最初から居たぞ。」

「嘘をつくな。私は気付かなかつたぞ、なあ秋蘭？」

「いや、私は気付いていたぞ姉者。」

「しゅくらくんつ。」

秋蘭と呼ばれた少女が同意しなかったからか、春蘭と呼ばれた少女は、それ迄の威勢の良さが全く無い声を出した。

涼はそんな二人を苦笑しながら見つめ、声をかける。

「二人共相変わらずだね。まあ、あれから三ヶ月しか経ってないから仕方ないか。」

「ええ、仕方ないわね。」

涼の言葉に華琳が同意すると、春蘭と呼ばれた少女は更にへこんでいく。

一方、秋蘭と呼ばれた少女はそんな光景を見て微笑んでいた。何故だろう？

「フフ……春蘭、いつまでもへこんでないで早く秋蘭と一緒に休んできなさい。」

「は、は……い……。」 春蘭と呼ばれた少女は未だへこんでいたが、やがて秋蘭と呼ばれた少女と共に部屋を出て行った。

「夏侯惇と夏侯淵、共にまた強くなった様ですね。」

それを見ていた愛紗は、春蘭と呼ばれた少女を夏侯惇、秋蘭と呼ばれた少女を夏侯淵と呼んだ。どうやらそれが彼女達の名前であり、

春蘭や秋蘭とはやはり真名だった様だ。

「流石は関羽、見ただけで相手の实力を見極められるのね。」

「これくらい、武人として当然です。それが出来なければ、戦いで命を落としかねませんからね。」

愛紗がそう言うと、華琳は何故か満足した様に微笑んだ。

「良いわね……益々欲しくなったわ。」

「……それについては既に返答した筈ですが。」

「そうね。……けど、私は簡単に諦める様な人間じゃないのよ。」

華琳はそう言いながら、愛紗と涼を見ていった。

涼はやれやれと苦笑しながら華琳に向き直る。

「華琳、義勇軍の筆頭武将であり俺の義妹である愛紗を、俺の目の前で引き抜こうとするなよ。」

「あら、貴方の目の前だからこそ、引き抜こうとしているのよ。」

「……このドSめ。」

小悪魔の様な笑みを浮かべる華琳を見ながら、涼は小さな声で感想を漏らした。

小さな声で言ったのは聞こえない様に気をつけたからだが、仮に聞こえても意味は解らないだろう。

「……涼、何か言ったかしら？」

「さてね。」

どうやら聞こえたらしいが、対して興味が無かったのか直ぐに話題を愛紗に戻した。

「……まあ良いわ。兎に角、先の黄巾党の乱で敵将の程遠志や趙弘を討ち取ったその実力を、私は認め、欲しいと思っっているのよ。」  
「そう仰って下さるのは有り難いのですが……私は涼様や桃香様の義妹であり臣下。お二方以外の将に仕える気は毛頭ありません。」

華琳は愛紗を褒め称え、自軍に引き入れようとするも、肝心の愛紗は全く聞き入れなかった。

流石に華琳の機嫌が悪くなるんじゃないかと涼は焦ったが、その華琳は逆に満足した様な表情を浮かべていた。

「……断られてるのにご機嫌だな？」

「それはそうよ。簡単に寝返る様な兵なら却って要らないけど、関羽の様に忠誠心に溢れる兵なら沢山欲しいもの。」

「つまり、愛紗は合格って事か。」

「その通りよ。」

涼と愛紗は殆ど同時に溜息を吐いた。

華琳の諦めの悪さは、良くも悪くも彼女の特徴である。

その事は知っていたが、改めて思い知らされた二人だった。（この間ここで断られてるのに、ポジティブかつアクティブな奴だな。）

涼は、自信に満ち溢れた表情を浮かべる華琳を見ながら、そう思った。

三ヶ月前、洛陽で何日にも渡って戦勝祝いの祭りが繰り広げられた中で、華琳は愛紗を勧誘していた。

更に鈴々、雪里、時雨、雫と、義勇軍の主力を次々と勧誘していたのだから、涼や桃香にとっては堪らなかつただらう。

まあ、皆断つたので事なきを得たのだが。

因みに地和は、万が一の場合を考えて余り華琳と接触させなかつ

たからか、勧誘されなかった。

「……まあ良いわ、今は退いてあげる。……けど、諦めた訳じゃ無いから覚悟しておく事ね。」

「はあ……。」

不敵な笑みを浮かべる華琳に、愛紗は溜息混じりの返答をするしか出来なかった。

「なあに、いつの間にか賑やかになっているじゃない。」

「あ、母様。」

そこに、孫堅を始めとした数人の女性が現れた。

その中には、孫堅以外にも涼が見知った人物が二人居た。

「あ、清宮様。」

「あつ、アニキ。意外と早かったじゃん。」

黒いおかつぱ頭の大人しそうな少女と、緑のツンツン頭の元気一杯そうな少女は、涼に気付くと殆ど同時に声をあげた。

「斗詩に猪々子、久し振りだな。二人がここに居るって事は、袁紹も居るのか？」

「はい、この方が……。」

涼の問い掛けに斗詩が答えようとした時、隣に居た金髪縦ロールの少女が突然叫びながら涼に詰め寄ってきた。

「ちよつとそこの貴方！」

「お、俺っ!?!」

「そうですねよ！ 顔良さんと文醜さんの真名を気安く呼ぶ様な世



間知らずさんが、他に居ますの!？」

物凄い剣幕でまくし立てるその少女は、腰に下げている剣の柄にいつの間にか手をかけてた。

それに気付いた涼は、反射的に両手を上げながら必死に落ち着かせようとする。

「いや、気安く呼んだ訳じゃ……。」

「お黙りなさいっ! どの馬の骨かは存じませんが、二人の神聖なる真名を勝手かつ気安く呼んだ貴方は、この袁本初が直々に手打ちにして差し上げますわっ!！」

だが、金髪の少女・袁紹は涼の言い分を聞こうともせず、抜刀し、涼に斬りかかった。

……が、近距離から急に斬りかかられたにも係わらず、涼は難無くかわせた。

(……遅っ!)

紙一重でかわした訳でも無く、剣先がかすめた訳でも無い。

剣を持つ武将とは思えない程、袁紹の動きが遅かっただけなのだ。

「何で避けますのっ!？」

「避けないと死ぬだろうがっ!！」

無茶苦茶な事を言う袁紹に対し、涼は少し我慢しつつ反論する。

だが、袁紹はやはり聞く耳持たずに二の太刀をあびせようと剣を振るっ。

だが、遅い太刀筋を読みかわすのは今の涼にとって苦では無く、袁紹が何度斬りかかってきても簡単に避けられた。

そうして袁紹が数度剣を振るっていたが、途中でその剣は高い金

属音をあげながら宙を舞い、床に転がった。

「な……っ!？」

袁紹は暫くの間何が起きたのか解らなかったが、やがて涼の隣に居た黒髪の少女が、手にしている武器を振るって自分の剣を弾き飛ばした事に気付いた。

「な、何をしますの、貴女は!？」

「主が身の危険に晒されようとしていたので、助けた迄です。」

そう言っただけで涼を守る様に立ち、青龍偃月刀の刃先を袁紹に向ける愛紗。

袁紹はたじろぎながらも虚勢を張り、後ろに居る二人に命じる。

「顔良さん、文醜さん、二人共何をしていますの!？ 早くこの人達を懲らしめてやりなさい!!」

「懲らしめろって言われても……ねえ？」

「だよなあ。」

だが、その二人・斗詩と猪々子の反応は、袁紹の予想とは対照的に鈍かった。

「二人共何でそんなに覇気が無いんですの!？ 貴女達の真名を勝手に言われたんですのよ!？」

「姫え……だからその前提が間違ってるんですってばあ。」

「……………えっ?」

猪々子の言葉に驚いたのか、袁紹は間の抜けた声を出した。そんな袁紹に斗詩が説明していく。

「私達、清宮様に真名を預けてるんですよ。この間そう報告したじゃないですかあ。」

「……………あ。」

どうやら完全に失念していたらしく、呟いたかと思うと途端に表情が焦りの色に変わっていった。

「……………じゃあ、このどの馬の骨かも解らない人が、あの清宮涼ですの？」と呼んでいた。因みに猪々子は、涼の事を「アニキ」と呼んでいた。

袁紹は暫く考えていたが、ついさっきの事なので容易に思い出す事が出来たらしい。

「ま……………まあ、間違いは誰にでもありますわ。そう、名門袁家の生まれのこの私にもありますわ！」

「……………何でこいつは偉そうに言ってるんだ……………？」

思い出した結果、勘違いしたのに開き直った袁紹の態度に、涼は只脱力するしかなかった。

「まったく、貴女は相変わらず馬鹿ね。」

一連の様子を見ていた華琳が、そう嘲笑した。

当然ながら、袁紹はその言葉に反応する。

「……………あーら、華琳さん、居たんですよのね。相変わらず背も胸も小さいから、私まったく気付きませんでしたわ。」

「……………さっき迄会っていた私に気付かないなんて、麗羽は記憶力が無いのかしら？ まあ、頭が悪いからそれも仕方無いわね。」

袁紹のあからさまな挑発に、華琳は一瞬力チンときた表情を浮か

べたが、直ぐに冷静な表情になって挑発しかえした。  
当然、罵り合いになる訳で、場の空気はさつきより悪くなる。

「……なあ斗詩、ひよっとしてこの二人っていつもこんなのか？」  
「はい……麗羽様、あ、麗羽ってのは袁紹様の真名なんですけど、  
その麗羽様と華琳様は長い付き合いでお互い真名で呼んでいる仲で  
はあるんですが、麗羽様は華琳様に並々ならぬ対抗心を抱いていて  
……。」  
「要するに、ケンカ友達って奴だよ、アニキ。」

斗詩が詳しく説明していると、猪々子が簡潔に言い表した。

(ケンカは兎も角、友達なのかなあ……?)

目の前で繰り広げられている口喧嘩に嘆息しながら、涼はそう思  
っていた。

二人の口喧嘩が長くなりそうだったので、涼は他の人に話し掛け  
た。

「孫堅さん、お久し振りです。」

「ええ、久し振りね。……嬪殿。」

「……はい？」

孫堅が言ったとある単語に、涼は違和感と不安を覚え、絶句した。

「あら、愛娘の“初めて”を奪ったんだから、当然責任はとってく  
れるのですよね？」

「……えーっ!？」

そう言った孫堅は笑顔だった。余りにも良い笑顔だったので、却

って怖く見えたくらいだ。

そんな孫堅を見てみると、後ろから雪蓮が抱きついてきた。

「あら、涼はもしかして責任とらないつもりだったの？」

「……責任をとるもとらないも、そもそも何の事が解らないんだけど？」

涼が溜息を吐きながらそう言うと、雪蓮はニヤニヤしながら耳元で囁いた。

「苑城で私の“初めて”を奪ったのを忘れたの？ だったら悲しいなあー。」

「わざとらしいくらい棒読みだな。てか、苑城での“初めて”って、キス……接吻の事じゃないか？」

「あ、覚えていてくれたんだ？ 嬉しい。」

「俺の記憶が確かなら、あれは“俺が奪った”んじゃないくて、“雪蓮が奪った”んじゃないか？」

「んー？ そうだったかしら？」

雪蓮は、先程の孫堅と同じ様に良い笑顔で惚けている。

「やれやれ……。本当に責任をとらないといけない事したら勿論そうするけど、今はその必要は無いよな？」

そう言いながら涼は雪蓮を離れた。雪蓮は離れなくなかった様だが、それでは話が先に進まないの無視する。

孫堅も同じ様に残念そうな表情をしているが、やはり対応したらキリが無いので話を変える事にした。

「ところで、後ろに居る二人はどなたなんですか？」

涼は、孫堅の後ろに居る小さな少女と、その傍らに立つ少女を見ながら訊ねた。

「ああ、この二人は袁術とその側近の張勳よ。」

「ん？ なんじゃ？ 妾に何か用なのかえ？」

「美羽様、どうやら噂の天の御遣いが美羽様と話したいみたいですよ。」

孫堅が二人に振り返りながら説明すると、袁術と張勳と呼ばれた二人の少女がこちらを見ながらそう言った。

どうやら、一見すると小学生の様に小さい少女が袁術で、軍服を着たバスガイドの様な姿の少女が張勳らしい。

（まさか袁術がこんな子供とは……。史実や演義だと袁紹の弟が従兄弟だったから、この世界だと妹か従姉妹かな？）

涼は袁術を見ながらそう思った。

只、よく見れば確かに袁術は袁紹と似ている所が有る。

例えば、袁紹は腰迄ある長い金髪縦ロールで袁術は腰迄ある長い金髪ストレートだが、毛先は同じ様に縦ロールになっている。

また、瞳の色も同じ碧色だし、何だか雰囲気も似ている。

勿論、違う所だって沢山有る。

例えば、袁紹は斗詩達と似たデザインの紅い服と白いミニスカート、白い手袋と腿迄の黒いストッキングに白いロングブーツといった服装。

それ等の上に金と黒という配色の胸当てや肩当て、籠手や足当てを身に付け、腰には青と金という配色の剣を下げている。

一方の袁術はと言うと、ヒラヒラとしたドレスの様な服を着ている。

配色は黄色と白色がメインで、腰から伸びている細長い前掛けみ

たいな布は紫色に葉っぱの様な形の金色の刺繍、その上に薄紫色の帯を巻き、先端には前掛けと同じ様な十字と十文字型の葉っぱの刺繍がやはり金色で描かれている。

肩と胸元は露出しており、姫袖にロングスカート、僅かに見える足下には、紫と黒という配色の先端が上向いている靴。

頭には小さな銀色の王冠、頭の後ろには大きな紫色のリボン、耳には紅いイヤリング、そして首には青色のネックレスを付けている。武将としての装いの袁紹に対し、普通のお姫様の様な格好の袁術。更にこの年代の女子の平均身長（だと思われる）の袁紹と、小学生の様な身長の袁術。

そして、そうした身長差からくるスタイルの違い。

二人は姉妹もしくは親戚とは言え結局は他人なのだから、似た所と違う所が有るのは当然ではある。

「そなたがああの天の御遣いとやらかえ？」

その袁術が、トテトテと歩きながら涼に近付き、そう尋ねた。

「まあね。」

「……思っていたのと違うのじゃ。」

「違っつて、どう違ったの？」

涼が疑問を口にすると、袁術は涼を見ながら答えた。

「黄巾党をあっと言う間に倒したと聞いていたから、もっとゴツイ男かと思っていたのじゃ。」

「そ、そっか……。と言うか、別にあっと言う間に倒してはいないし。」

「そっなのかえ？」

涼の言葉に、袁術はキョトンとしながら呟いた。

一体誰がそんな風に言ったんだと思つた涼だったが、袁術の傍らに居る少女が涼を見ながら微笑んだのに気付き、あつと言つ間に見当がついた。

「成程、貴女が袁術に過剰な説明をしたんですね。張勳さん？」

「さあ、何の事でしょうか？ 私にはちよつと解らないですね。」

そう答えた張勳だったが、その口調はわざとらしいくらいに棒読みっぽかった。

絶対にすつ惚けているなと確信した涼だが、下手に追及して揉めるのは避けようと判断し、何も言わなかった。

そんな涼が改めて張勳を見てみると、やっぱり軍服を着たバスガイド、もしくはスチュワーデスつて感じの格好だと思つていた。

何故そう見えたかと言うと、頭に有る白と紺を基調とした小さな帽子が、いかにもそれっぽい帽子だからだ。

また、軍服っぽい服は半袖で、両肩には黒い紐が蝶結びになって付いている。因みに配色はというと、服の左右は白、真ん中や襟、袖等は青紫で構成されている。

他には、首元に薄紫色のスカーフ、白い手袋に赤紫のプリーツスカートに黒いニーソックス、白い編み上げブーツを身に着けており、左腕には黄色地に黒字で「袁」と書かれた腕章を巻き、腰には黒い鞆に納められている剣を下げていた。

紺色の短い髪は左から右に分けており、四つ葉型の髪留めで留めている。

瞳は紫色で大きく、背は袁紹と同じくらい。序でに言つと、胸も同じくらいか少し小さいくらいに大きかった。

（一見おっとりして優しそうだけど……何だろう、油断出来無い気がする。）



目の前に居る張勳は笑顔だし、物腰も柔らかい。それなのに涼がそう思ったのは、その笑顔や口調がわざとらしく感じたからだろうか。

（まあ……取り敢えず今は注意しておくだけで良いかな。それより、今は確認しないといけない事が有るし。）

そう思った涼は一旦張勳から目を離すと、翡翠や華琳達に目を向けながら訊ねた。

「ちょっと聞きたいのですが、洛陽は昨日静かだったそうですね。

……何かあったのですか？」

「……昨日？ ……ああ、多分あの事ね。」

「あの事？」

華琳と袁紹は未だ口論していたが、涼の質問に気付くと途端に二人共口論を止め、袁紹は沈黙し、華琳は神妙な面持ちでそう呟いた。その様子に涼は勿論、愛紗や時雨、そして雪蓮も怪訝な表情を浮かべる。

そんな涼達を見ながら、華琳は重々しく告げた。

「……帝は今、病に伏せておられるのよ。」

「えっ……？」

思い掛けない言葉に涼達は絶句する。

華琳は尚も続けた。

「……宦官共はその事を伏せていたんだけど、どこから漏れたらしくてね。その噂が街に広まったのが昨日って訳よ。」

「……そうだったのか。」

華琳の説明を聞いた涼は静かにそう呟く。

昨夜の謎は解けたものの、涼達は重苦しい空気に包まれていた。帝の容態によっては、民衆が混乱しかねないからだ。

「……帝の容態はそんなに悪いのか？」

そんな中、暫く俯いていた時雨が華琳に訊ねると、華琳の代わりに翡翠が答えた。

「噂ではその病状はかなり重く、明日をも知れぬ命だそうです……。」

「……っ！ そんなに酷いのですか……。」

想像以上の現実を知らされ、時雨は息を詰まらせた。

約四百年続く漢王朝の帝の命の灯が、まさに今、消えようとしている。

幸い、跡を継ぐ皇子は居るが、二人の皇子はどちらも未だ幼い。つまり、このまま帝が死ぬと、この国は間違え無く混乱する。

そして、その時に十常侍が存在していたら、その混乱は更に大きくなり、黄巾党の乱以上の大乱が起きてしまうかも知れない。

それが解ったからこそ、時雨は絶句しているのだ。

「……我々に出来る事は、天に祈る事だけか……。」

悔しそくに愛紗が呟く。

華琳達は勿論、涼や時雨もまた愛紗と同じ様に悔やみ、天に祈った。

だが、涼は天に祈りつつも、帝が助からないと思っていた。

何故なら、涼はこの世界の元というべき「三国志」を知っている

からだ。

(…………「三国志演義」だと、病に倒れた帝…………霊帝はそのまま亡くなる。そして、十常侍はその死を隠して何進を宮中に呼び出して暗殺しようとするが、逆に何進に気取られて蹇碩等が殺された…………。)

涼は神妙な面持ちのまま、自分が知っている「三国志」に関する知識を頭の中で再生していく。

(でも、この世界では帝の存命中に蹇碩が殺されている…………。まあ、雪里…………徐庶が既に仲間になってたり、地和…………張宝が生きて俺達と一緒に居たりする訳だから、まるつきり同じって訳じゃないみたいだけど…………。)

その知識とこの世界の出来事との違いを考え、涼は少し悩んだ。それでも涼は、帝・霊帝の死は免れないだろうと確信していた。  
「失礼っ！」

そこに、凜とした声の少女が豪快に扉を開き、息を切らせて入ってきた。

突然の事に涼達は驚き、その少女に目を向ける。

「何をそんなに慌てておるのじゃ、瑠衣？」

「紀霊さん、はい、お水。」

「な、七乃殿…………忝ない…………。」

袁術と張勳が、その少女をそれぞれ「瑠衣」「紀霊」と呼び、その少女・紀霊は張勳から渡された水を一気に飲み干していく。

そして紀霊は、深呼吸してから言った。

「…………先程、帝がお亡くなりになりました。」

「っ！？」

紀霊が発した言葉に、その場に居た全員が息を飲む。

「……ま、間違いないのかえ、瑠衣？」

「残念ながら……。」

恐る恐る確認する袁術に、紀霊は俯きながら答えた。

「紀霊さん、その話は誰から聞いたんですか？」

「何進大將軍の補佐をしている張遼殿からです。」

「張遼さん……ああ、確か、丁原さんの所に居る武將で、今回の檄に応えた丁原さんの命で、先に張遼さんが来ていたんでしたっけ。」

張勳は、両手を軽く合わせながら、まるで誰かに説明する様に言った。

涼はその説明と紀霊が告げた事を頭の中で反芻し、同時に紀霊の姿を見た。

紀霊は、短い黒髪をきちんと整えており、寝癖のような乱れは一切無い。

衣服は左肩から服の右下を境に、右側が黄色で左側が黒のノースリーブ。黒いミニスカートを履いているが、その下には黒いスパッツらしきものも履いている。

足には白いニーソックスと、スポーツシューズのような黒い靴。

防具の類は、銀色の肩当てと胸当て、それと足当てを付けているだけで、猪々子に近い格好をしている。

そして背中には、白銀に輝く大剣を背負っていた。

「……強そうですね。」

涼の右隣に居る愛紗が、涼にだけ聞こえる様な声量で呟く。  
その視線の先には、紀霊の姿が在る。

「ああ、今は味方みたいなものだけど、いつかは敵対するかも知れない。その時は充分に気をつけてくれ。」

「解りました。」

「時雨も、良いね?」

「解っている。」

涼もまた、愛紗と同じ様な声量で愛紗と時雨に忠告する。

そう、今は未だ誰も敵では無い。

だが、いつかは敵になるかも知れない。

少なくとも、「三国志」を知っている涼は、普段の性格と違って樂觀出来なかった。

「ところで紀霊殿、帝が亡くなられたと知った何進殿は、今どうしています?」

「何進殿は帝の姻戚でありますから、その死を誰よりも悼み落ち込まれている様です。」

孫堅の問いに、紀霊は背筋をピンと立て、丁寧な口調で答えていった。

何進の妹が帝の後になっていたので、何進は帝の義姉にあたり、帝は何進の義弟にあたる。

それだけに、何進が悲しむのも無理は無いだろう。

そこに突然、

「失礼するで!」

と言う少女の言葉が聞こえてきた。

声が出た方を見ると、入り口の扉を豪快に開けた紫色の髪の少女が立っていた。涼は一瞬「デジャヴ?」と思う程、その光景を遂

最近見た様な気がした。

「おや、張遼殿ではないですか。どうしました？」

先程、その光景の中心だった紀霊が、入り口に居る少女を張遼と呼びながら近付いていく。

するとその少女・張遼は、神妙な面持ちのまま口を開いた。

「……何進が何太后に呼び出されたんや。」

張遼のその言葉に、紀霊は勿論ながら、その場に居た殆どの人間が驚きを隠せなかった。

そんな表情のまま、雪蓮が訊ねる。

「ちよつと、それって本当なの？」

「残念ながらホンマや。」

「……呼び出された理由は何かしら？」

「蹇碩が殺された事や、各地の兵がこの洛陽に集まってる事で何太后が不安になり、何か起きる前に相談したいというのが理由やけど……。」

「そんなの、十常侍が作りあげた嘘に決まってるわ。」

続いて華琳が訊ね、張遼が答えると、即座に断言した。

張遼も同意見だったらしく、小さく頷くと話を続けた。

「ウチもそう思う。このままじゃ何進は間違いなく十常侍の奴等に殺されるで。」

「そこ迄解っていて、どうして止めなかったのじゃ？」

袁術がもつともな質問をぶつける。何故か張勳は驚いていた。

「勿論ウチ等は止めたで。そやけど、何進は蹇碩を殺した事で十常侍がビビってる和高を括って、ウチ等の話を聞かんかったんや。」

張遼は頭を押さえながら言った。

その表情からは、何進のそうした行動が一度や二度じゃ無いと想像出来た。

「兎に角、それなら急いで何進を追い掛けた方が良いと思う。」

「涼の言う通りね。どうせ涼達が来たら何進の所に行くつもりだし、早速行きましょう。」

涼の提案に華琳が同意し、皆もそれに倣う。

袁紹や袁術が何か言っていたが、何故か無視された。

そうして涼達は、案内役の張遼を先頭にして宮中へと向かった。

華琳や袁紹等は宮中への道筋を知っているが、話の流れから自然と張遼が先頭を走っていた。

宮中の門前に到着すると、そこには既に兵士達を引き連れた武将達が居た。武将達は皆少女であり、どうやら張遼や華琳達の知り合いらしい。

華琳達が彼女達と話している間、涼は宮中の門扉を見た。

宮中の門は鉄で出来ていて重くて厚く、そして大きい。それに伴って石造りの堀も大きくて高い為、建物がよく見えなかった。

この先にあの十常侍達が居ると思うと、涼は緊張して息を飲み、剣の柄を握っていた。

そんな涼達の動きを、宮中の高見から見下ろしている人物が居た。

「やれやれ……相変わらず騒がしい連中だね。」

まるで下界を眺める神の様に窓から下を眺めるその者は、少女の様に小さいが、少年の様な声を発した。

短い銀髪が太陽の光を浴びて輝く。

朱い眼は見える者を侮蔑し、口は嘲笑する形に歪んでいる。

前述の通り背は高くないが、その身から感じる気迫は他者を圧倒している。

袖が白い朱色の礼服を身に纏い、頭には宦官の特徴たる小さな帽子を被っていた。

「張讓！」

そこに、小さな少年もしくは少女と殆ど同じ服装の男性が慌てながらやってきた。

年齢は二十代前半くらいで、金髪をリーゼントにしているその男性は、小さな少年もしくは少女を、張讓と呼んだ。

「趙忠、そんなに慌ててどうしたんだい？」

「どうしたって……慌てるに決まっているだろう!？」

張讓は男性を趙忠と呼びながらゆっくりと体ごと振り向き、趙忠と呼ばれた男性は、リーゼントの金髪を乱しながら言葉を紡いでいく。

「蹇碩を斬った連中がまたやってきたんだぞ！ 慌てない方がどうかしている!！」

「ふむ……なら僕は、どうかしてるのかな？」

「何……?？」

趙忠が戸惑いながら声を出した。

そんな趙忠を見ながら、張讓は淡々と話す。

「何故かは解らないんだけどね、僕は今、不思議と慌てていないん



だ。……ひよつとしたら、死を覚悟して安らかな気持ちになつて  
いるのかな？」

「……貴様はそれで良いかも知れんが、俺や郭勝達は違う！ 未だ  
死ぬつもりは微塵も無いんだよ！！」

笑う余裕が未だ有る張讓と比べ、趙忠はリーゼントの頭をかきむ  
しって髪型を乱す等して、余裕が全く無い。

張讓はそんな趙忠を見ながら先程とは違った笑みを浮かべ、口を  
開いた。

「勿論僕だつて死にたくは無いさ。……だから、その為の策は既に  
講じているよ。」

「……策だと？」

「ああ。先ずは……何進は既に殺したよね？」

「勿論だ。今部下に首を跳ねさせている。」

「なら、その首を門前の奴等に投げつけてやると良い。それだけで、  
奴等は恐怖におののく筈だ。」

「……そう上手くいくだろうか？ 奴等は黄巾党の乱で活躍した武  
将達だぞ？」

趙忠はもつともな疑問を口にした。歴然の武将達が、生首を見た  
だけで驚く筈が無い。

「大丈夫だよ。何進はあれでも一応大將軍、門前の雑兵達とは位が  
違うんだからね。」

「……つまり、大將軍である何進の命を俺達が奪う事で、奴等の生  
殺与奪を俺達が握っていると認識させる訳か。」

「その通り。後は、士気が落ちて退却する奴等を追撃すれば……。」「  
簡単に倒せる……。か。よし、早速やってみるぜ！」

趙忠は、入ってきた時とは真逆の表情になって部屋を出ていった。足音があつと言う間に遠ざかり、部屋には静寂が訪れる。

「……馬鹿だね。今の奴等にそんな事が通じる訳無いのに。」

張讓は静かに笑いながら、再び窓から下を眺めた。

そこには一人の男性が居た。服装から察するに十常侍の誰かの様で、何かを持って門に向かっている。

「何進の首を投げる役は郭勝か。ふん……気弱なくせに時々目立ちたがる彼にはピッタリの役だな。」

そう言つてカーテンを閉め、ゆっくりと部屋を見回した後、机の下に置いていたバッグの様な物を持ち上げ、肩にかけた。

何が入っているのか解らないが、かなりの大きさだ。

「趙忠……君は良い手駒だったけど、君が馬鹿だったのがいけないんだよ。」

張讓はそう嘲笑しながら懐から一冊の本を取り出し、部屋を後にする。

その後、他の十常侍達が張讓の姿を見る事は二度と無かった。

誰かが門の上に立ち、何かを言った。

服装から察するに十常侍の一人らしいその男は、まるでゴミでも投げ捨てるかの様に、手にしていた物を涼達に向かって投げた。

「ひっ！」

「ひゃああっ！ な、七乃っ！！！」

袁紹と袁術がその正体に気付いて後退りする。

「な……っ！」

「あれは……！」

「チッ……マジかよ……！」

涼達もその正体に気付き、絶句した。

数度だけしか見た事は無いが、それは間違いなく何進の生首だった。

転がっているその生首は、長い銀髪に整った顔をしているが、眼はまるで鬼の様にカツと見開いてこちらを見ていた。

黄巾党の乱の最中、広宗に現れた何進によつて南陽に向かう事になった涼達。

その時は地和の事もあつて多少恨みもしたが、その何進が既にこの世のもので無い現実にぶつかり、涼の心情は憐れみと虚しさに変わっていく。

「……遅かった、ですね。」

「……ああ。」

帽子を摘んで俯く雪里が静かに呟き、涼もまた小さく呟いた。門の上では、何進の首を投げた男がまた何か言っている。

「これに懲りたらさっさと帰れ！」や、「帝に弓引く逆賊等、直ぐに成敗してくれる……！」と、随分と好き勝手言っている。

当然ながら涼達が懲りる筈は無く、また、逆賊は紛れもなく十常侍達の方である。

「……随分と五月蠅い蠅ね。秋蘭！」

「はっ！」

「目の前に居る蠅を撃ち落として頂戴。」

「御意！」

華琳が秋蘭にそう命じると、秋蘭は流れる様な動きで矢をつがえ、放った。

「ぐふっ……！」

秋蘭が放った矢は、門の上の十常侍らしき男の喉を貫き、その命を瞬時に奪った。

門の向こうに男が落ちていく。宮中に居る兵達は、それによって混乱し騒然となった。

「流石だな、秋蘭。」

「なに、止まっている的を射抜いただけだ、大した事はないさ。」

涼が褒め称えても、秋蘭はいつもの様に涼しい顔で謙遜した。

その間に、何とか冷静を取り戻した袁紹が猪々子と斗詩に指示を出す。

「……ぶ、文醜さん、顔良さん、あの門を壊しなさいっ！」

「わかりましたーっ！」

「了解です！」

袁紹の指示に応えた猪々子と斗詩が、それぞれの得物を構える。

（何度見てもでっかい武器だなあ……。）

涼は二人の武器を見ながらそう思う。

猪々子は自身の背丈と余り変わらぬ長さの大剣を、斗詩は人間の胴体を遙かに上回る太さの先端部を持つ巨大槌を武器にしている。

先に動いたのは猪々子だった。

「あたいの斬山刀の一撃、喰らいやがれっ!!!」

猪々子はそう叫びながら門に向かって大剣を振り下ろす。すると、鉄で出来ている筈の門に大きな亀裂が走った。

「ちえーっ、一発じゃ壊せなかつたかあ。」

(いやいや、鉄の門をあんなに斬り裂いただけでも凄いだろ。)

悔しがる猪々子を見ながら、涼は心の中でツッコミを入れた。

「まあ良いや。斗詩ー、あとお願いー。」

「解ったよ、文ちゃん。」

猪々子が下がると、入れ替わりに斗詩が門の前に立つ。

そして、自身の得物を軽々と振り上げながら、口を開く。

「右手に天国、左手に地獄！ 光になりなさあああーいつ!!!」

「どこの勇者王だっ!？」

今度は思わず口に出してツッコミを入れたが、そのツッコミは門が粉碎された時の轟音にかき消された。

まあ、聞こえても誰も意味を理解出来なかつただろうが。

轟音が鳴り終わっても、辺りには門の崩壊によって生じた粉塵が舞っていたが、それもやがて消えていく。

攻撃後も武器を構えている斗詩は、目の前の門が無くなり、敵兵の反撃も無いのを確認してから振り向いて言った。

「麗羽様、終わりました!」

「二人共お見事ですわ！　ならこのまま、全軍をもって何進さんの仇を取りに参りますわよ！！」

「はいつ！！」

袁紹の号令に斗詩と猪々子は同時に応え、また、袁紹軍の兵士達も同様に応えていく。

斗詩と猪々子が先頭に立ち、袁紹軍の兵士達が雄叫びを上げながら宮中へ突撃する。

「袁紹達に遅れをとるな！　我等曹操軍も進むのだ！！」

「孫家も行くぞ！　総員、我に続けーっ！！」

「れ、麗羽姉様の軍に遅れてはならぬ！　七乃、瑠衣、総員を引き連れて十常侍共をやっつけてまいれ！！」

また、華琳、孫堅、袁術も同様に自軍を鼓舞し、宮中に向かった。

「それじゃ、俺達も行くこうか。」

「……やはり義兄上も行かれるのですね。」

雌雄一对の剣の一振り、「紅星」をゆっくりと抜刀した涼に向かって、愛紗が不安そうな顔で呟く。

「心配してくれて有難う。けど、桃香が洛陽の外に居る以上、俺迄この場に留まる事は出来ない。」

「はあ……義兄上も義姉上と同じで、意外と頑固ですよね。」

「愛紗にだけは言われたくないなあ。」

「まっただ。」

「なっ！？」

涼と時雨にそう言われ、戸惑う愛紗。

何故かここだけ緊迫感が無い感じになっていた。

「あつ、義兄上！？ 私は義兄上の為を思ってますねっ！！」

「解ってるよ、愛紗。」

顔を真っ赤にして怒る愛紗に、涼は笑みを浮かべながら応える。

「愛紗が俺達の事を思って苦言を呈してくれてるのは、皆知ってるから。」

涼がそう言うと、時雨や雪里、そして、近くで涼達を見守っていた翡翠も笑みを浮かべながら頷いた。

それを見た愛紗も自然と笑みが零れる。

「知っててそう言うなんて、意地悪ですね？」

「まあ、たまには良いじゃん。」

涼がそう言うと、愛紗達は勿論、義勇軍の兵士達や盧植軍の兵士達も声を出して笑った。

そうして一頻り笑った後、涼達全員が顔を引き締め、得物を構える。

「それじゃ……改めて行こうか。」

「はい！」

「ああ！」

その顔には、先程迄の穏やかな雰囲気は微塵も無い。

「雪里、百人程残しておくから、十常侍達が逃げてきたら対応していて。」

「御意です。」

雪里にそう命じると、涼は息を整えて叫んだ。

「全ての民の為に義勇軍は戦う！ 突入部隊、俺達に続けーっ！！」  
「「「「「おおおおー！ーっ！！！！！！」」」」」

洛陽全域に轟く様な雄叫びと共に、涼達は宮中に突撃していった。  
涼達が突撃して半刻後、宮中は怒号と悲鳴がそこかしこから聞こえていた。

「十常侍の一人である孫璋は、曹操軍の武将であるこの夏侯惇が討ち取ったぞ！」

「十常侍の畢嵐は、孫堅軍の副将である私、孫策符が討ち取った！」

「十常侍の段珪は、袁紹軍武将の文醜が討ち取ったぜ！」

「十常侍が一人である栗嵩、袁術軍の武将である紀霊が討ち取ったり！」

それに伴うかの様に、至る所で武勲を誇る声が上がっていく。  
涼はそれ等を聞きながら敵兵を倒しつつ、呑気な声を出した。

「やっぱり、皆凄いね。」

「感心してる場合ですか！」

「宮中に居る部隊で十常侍を討ってないのは、うちと盧植軍だけの様だぞ。」

涼と同じ様に敵兵を倒しながら、愛紗と時雨が言った。

「うーん……十常侍を倒せるなら、俺は誰が討ち取っても構わないんだけど……。」

「義勇軍全体を考えると、そうもいきません。」



「だよー。」

愛紗が冷静に窺めると、涼は再認識しながら苦笑した。

皆が十常侍を倒しているのは、世の中を正す為だけでなく、そうする事で名声を得る為でもある。

名声が有れば志願兵や支援者が増えて楽になるが、名声が無ければ何も増える事は無い。

その為にも、涼達自身で十常侍を討つ必要が有るのだった。

「どうやら、残る十常侍は後僅か。ここは別々に行動した方が良いと思うが？」

「それはそうだが……しかし、義兄上を一人にする訳には……！」

時雨は剣を振って付着した血を飛ばしながら、そう提案する。

「どうやら愛紗も同意見の様だが、涼を護れなくなる事が心配らしい。」

「俺なら大丈夫。戦ってみて解ったけど、ここの兵士達は弱い。黄巾党の奴等の方がよっぽど強かったよ。」

「それは……確かに。」

「乱を起こして日々戦っていた黄巾党の奴等と、乱の最中も都でぬくぬくと過ごしていた連中とは、実力が違うのは当然だな。」

三人の意見は一致している。

「ここ迄涼達は何人もの兵士達を斬ってきたが、その殆どが打ち合う事無く斬り捨てる事が出来た。」

ハッキリ言つて、義勇軍を立ち上げて以来黄巾党と戦い続けてきた涼達にとって、宮中の兵士達は相手にならなかった。

「ああ。それに愛紗達に鍛えて貰ってるから、尚更そんな相手に負

けないよ。だから、愛紗達は安心して他の場所に行ってくれ。」  
「……解りました。でも、充分気をつけて下さいね。」  
「解ってるって。……それじゃ、二人も気をつけて。」  
「はい！」  
「ああ！」

三人はそう言ってそれぞれの兵士達を引き連れ、別々の方向に走っていった。

それから暫くの間、涼と兵士達は敵兵を倒し続けた。  
だが、肝心の十常侍は見つけられないでいる。

(見付からないなあ……ひよっとして、皆が全員討つたのかな?)

そう思いながら、目の前の敵兵の攻撃を避け、薙ぎ払う。  
つい数ヶ月前迄、武器すら持った事が無かった少年が、今三振りの剣を携えて人を斬っている。

(……ホント、人って慣れるものだなあ……。)

涼は自分の適応能力に驚きながら剣を振るう。

自分がしている事が、現代では決してはいけない事なのは忘れていない。それは決して忘れてはいけない事だから。

だが、この世界ではそれをしなければ生きていけない事も解っていた。

自分がしている事が恐ろしくなり、震え、涙を流したのは一度や二度では無い。

その度に愛紗達に支えられて何とかやってきている。

仲間が居る素晴らしさを感じながら、涼は剣を振るい続ける。

そして、皆の期待に応える為に人一倍頑張っていく。

清宮涼とは、そんな少年なのだ。

そんな涼の視界に、見知った顔が入ってきた。すると、瞬時に涼の足はその人物の方に向かう。何故なら、その人物は一人で複数の敵を相手にしていたから。

「でやあああつ！！」

涼は雄叫びと共に剣を振るつた。

その人物の周りに居た敵兵達は、突然の乱入者に驚き戸惑い、為す術も無く倒れていく。

そうして敵兵を全て倒した後、涼は仲間の兵士達に指示を出しながらその人物に声をかける。

「大丈夫、華琳？」

「……ええ、大丈夫よ。」

その人物 - 華琳は、左手に持っている鎌を下ろし、乱れた呼吸を整えながら応えた。

見た所怪我はしてないらしく、涼はホッと胸をなで下ろす。

「……何故助けてくれたの？」

「華琳は仲間なんだし、助けるのは当然だろ？」

そっぽを向いたまま尋ねる華琳に対し、涼はサラッと応えた。

「仲間……ね。」

「ああ。それに、前にこの洛陽で言っただろ？ 何か遭ったら助けてやるって。」

「そう言えばそうね……。けど……。」

「けど？」

何を言おうとしているのか解らない涼に対し、華琳は語気を強めて言った。

「……貴方はどうして上から目線な物言いなのかしら？ 流石は天の御遣い様って事かしらね？」

「えっ？ ええっ！？」

思い掛けない皮肉混じりの言葉と迫力に涼は戸惑い、少し後ずさる。

「いや、そんなつもりは無かったんだけど……そう聞こえた？」

「ええ。“助けてやる”って、どう聞いても上から目線だと思うのだけど……？」

「確かに……。けど、他意は無かったんだよ。」

「ふーん……。」

「えっと……その……ゴメン。」

「解れば良いのよ。」

華琳の迫力に圧され、結局涼は謝った。

下手に言い訳を続けるより、謝った方が良いと判断したからだ。

と、そこで、涼は気付いた事を訊ねる。

「そう言えば、華琳は何故一人で居るんだ？」

本来なら、夏侯惇か夏侯淵のどちらかは必ず側に居る筈だと涼は思った。

少なくとも、以前洛陽で会った時は殆どいつも二人が側についていた。

「春蘭と秋蘭は別々に行動してるわ。その方が十常侍を倒す確率が

高くなるからね。」

「けど、それで華琳が危機に陥っていたら本末転倒だな。」

「う、うるさいわねっ。」

華琳は顔を紅くしながら再びそっぽを向いた。自身の失策を余り認めたくないのかも知れない。

「まあ、俺も来たし少しは安心しろよ。」

「……やっぱり上から目線ね。」 華琳はジトツとした眼をして涼を見る。

先程の事もあるので、涼は苦笑いをしたが、今度は先程と違って追及されなかった。

「……まあ良いわ。十常侍配下の兵士達の実力を見誤って、護衛の兵士達を沢山失ってしまったのは事実だし、ここは貴方の力を借りるしか無い様ね。」

どうやら、自身の失策を素直に認め、状況の打開に乗り出そうとしている様だ。

「じゃあ……取り敢えず、春蘭達との合流を目指しつつ十常侍を捜すつてのどうだ？」

「ええ、それで構わないわ。」

涼の提案を華琳が承諾すると、涼は兵士達にもそう指示を出してから華琳と共に十常侍探索を再開した。

それから数分後、涼達の行く先々には沢山の死体が転がっていた。殆どは十常侍の兵士達の死体だが、涼達、所謂「諸侯連合」の兵士達の死体も多々あった。

「結構苦戦してる様だな。」

「十常侍の事だから、兵士の数だけは多く揃えていた様ね。」

華琳は表情を暗くしながらそう言った。未だ先程の事を気にしている様だ。

「華琳……ん？」

何か声を掛けようとした涼だったが、進行方向から聞こえてきた音と声に気付き、注意をそちらに向けた。

「誰か戦っている様ね。」

華琳もそれに気付き、同様に注意を向ける。

音は武器と武器がぶつかり合う金属音で、声は打ち合う時の気合が入った声だ。

涼達の進行方向には二つの道がある。

一つはこのまま直進する道。もう一つは右に曲がる道。その音と声は右に曲がる道から聞こえてくる。

「戦っているって事は友軍が居るって事だよな。」

「そうね。どうやら春蘭達じゃないみたいだけど、流石に見過ごす訳にはいかないわね。」

涼と華琳は互いに顔を見合わせて意思を確認すると、兵士達と共に右へと進んだ。

するとそこには、偃月刀を振るいながら沢山の敵兵と戦っている一人の少女の姿があった。

「ん……？ なんや、誰かと思うたら、曹軍と義勇軍それぞれの大將やない………かっ！」

少女は後ろから来た涼達をチラリと確認しながら、偃月刀を振って敵兵を一撃で薙ぎ倒した。

よく見れば、少女の周りには敵兵の死体だけが山のように転がっている。

「……どうやら、助太刀の必要は無さそうね。」

「そういってこつちゃ！」

少女は華琳の呟きにそう答えながら、またも敵兵を一撃で仕留めた。

敵兵は未だ十人以上残っているが、少女との実力差があり過ぎる上に士気も低い様だ。

（そりゃま、たった一人にこれだけやられたら士気を保ってられないよなあ……。）

涼はそう思いながら床に転がっている敵兵を数える。

簡単に数えたから正確ではないが、五十人くらいは転がっている様だ。

最初から一人で戦っているのか、途中で味方と交代したのかは解らないが、敵兵の怯え方から察すると恐らく最初から一人で戦っているのだろう。

そんな相手を前にして、敵兵達が平静を保てる筈は無い。

「う、うわああーっ!!！」

「た、助けてくれーっ!!！」

そんな悲鳴と共に、十人以上残っていた兵士達は蜘蛛の子を散らす様に逃げていく。

只一人残ったのは、矢でも受けたのか足を怪我している礼服の人

物。

「十常侍……！」

「どうやら、敵兵がここに居たのはあの動けない十常侍を護っていた様ね。でも……。」

「その護衛ももう居ない。」

戦う事も、逃げる事もままならない十常侍に、涼は少しだけ同情した。

その十常侍に、少女はゆっくりと歩み寄る。

右手には偃月刀がしっかりと握られ、その刃先からは血が滴り落ちていた。

「やあつと捕まえたで……覚悟せい、高望！」

「ま、待てっ！ 話せば解る……！」

「問答無用やつ……！」

少女はそう叫ぶと同時に偃月刀を左上に振り上げ、十常侍の首を斬り落とした。

首から上を無くした十常侍の体は、真っ赤な噴水を撒き散らしながらゆっくりと床に転がっていく。

少女はその噴水の勢いが無くなってから十常侍の首を拾い、偃月刀を掲げながら叫ぶ。

「十常侍の高望は、丁原の武将にして何進の補佐であるこの張遼が討ち取ったで！」

その声はとてもよく通り、宮中全体に轟いたのではないかと思える程だった。

「良かったわね、張遼。これで少しは楽になったのではないかしら



「？」

少女・張遼に近付きながら、華琳が話しかけた。

張遼は難しい顔のまま答える。

「…………どうやるな？ コイツ等を殺しても、何進を殺された失態は消えへん。」

「確かにそうね。でも、十常侍を討つ事でその失態も帳消しとはいなくても、少しは雪げた筈よ。違うかしら？」

華琳は張遼に対して穏やかな眼差しを向けながら話していく。

だが、張遼は尚も難しい顔をしたまま俯いている。

そんな張遼を見た涼は、無意識の内に口を開いていた。

「張遼、俺も華琳と同意見だ。」

「…………え？」

そのまま張遼に近付くと、真っ直ぐに彼女の眼を見ながら語り掛けた。

「確かに失態が完全に消える事は無いし、殺された何進は生き返らない。だけど張遼、君は生きているんだからこれから幾らでもやり直せるだろ？」

「やり直せる…………。」

張遼は涼の言葉を反芻しながら、ジッと涼の眼を見返した。

因みにその間の華琳は、黙って二人を交互に見ている。

やがて、張遼は一度眼を閉じてからゆっくりと口を開いた。

「…………そやな。確かに後悔ばかりしても、それで何進が生き返る訳でも、丁原の旦那が許してくれる訳や無い。それに、いつ迄もウジ

ウジすんのはウチの性に合わんしな。」

そう言った張遼が自然に笑みを浮かべると、涼もつられて微笑んでいた。

「どうやら、問題は解決したみたいね。……私達は引き続き十常侍達を捜すけど、貴女はどうする？ 一緒に来るなら大歓迎だけど。」  
「そやなあ……確かにアイツ等をもっと叩きのめしたいところやけど、この首を持ってって何進の部下達に詫びてこなあかんし、遠慮するわ。」

「そう……残念だね。もう少し貴女の武を見ていたかったのだけど。」  
「その内、そんな機会も有るやろ。ほなな！」

張遼はそう言って偃月刀を持つ手を振りながら、出入り口が在る方へ去っていった。

張遼と別れた後、涼と華琳は兵士達を引き連れて十常侍探索を再開した。

だがその間、涼は張遼の事を考えていた。

(張遼……史実通りなら、何れは戦う事になるんだよな……。)

涼は隣に居る華琳を横目で見ながら、そう思う。

(さっきの戦いを見る限り、史実通りに強いみたいだし、手強そうだな……出来れば戦いたくないや。)

心の中で溜息をつく涼。

恐らくだが、さっきの敵兵の死体の山は張遼一人で作り上げている。

幾ら敵兵の練度が低いといっても、何十人もの手相手をたつた一人で倒すなど、普通は出来ない。

だが、彼女は涼の世界の「三国志」に登場する名将、張遼と同じ名前を持ち、その名に恥じない実力を敵兵と涼達に見せつけた。

(けど、今の所基本的には史実通りに話が進んでる……なら、やっぱり避けられないのかな……。)

なまじ「三国志」に詳しいだけに、涼は頭を抱えている。因みに、張遼については強さ以外でも頭を抱えそうだが。

(……何でサラシに羽織袴なんだろう?)

張遼の外見を思い出しながら、涼は顔を紅くする。

張遼は胸にサラシを巻いて青い羽織を肩から羽織り、黒い袴に下駄を履いていた。

そんな服装なので、肌の露出度はかなり高い。

涼と同年代らしい彼女は胸も結構大きいので、思春期真っ只中の涼は目のやり場に困っていた。

(出来るだけ意識しない様にしてたけど、居なくなっただけから余計に意識するなんて……何やってんだ、俺。)

そう自己嫌悪しながらも、涼は表面上は平静を保っていた。

因みに、張遼の外見について補足すると、腕に朱色のベルトの様な物を交叉状に巻き、手には同色の籠手型指抜き手袋をはめ、紫の長髪は前髪の真ん中を逆立て、後ろ髪はトゲ付きの大きな輪っかで逆立てる様に留めていた。

何だか任侠映画に出てきそうな格好だった。

(あと、何故張遼は関西弁を話してたんだ? ……まあ、それを言ったら文章は漢文なのに日本語が通じてるのも変だけど……。)

涼は今更ながらの疑問を思い浮かべ、口元に手を当てながら考え込む。

基本的には楽天家な分、一度気になるとことん気になる様だ。だがそれも、元気が良過ぎる声が聞こえた事で強制終了となった。

「あ、おーい、アニキーっ!」

「文ちゃん、緊張感無さ過ぎだよ……。」

声がする方を見ると、豪快に手を振る猪々子と溜息をつく斗詩の姿があった。

袁紹の部下である二人を見た華琳は余り良い顔をしなかったが、涼が二人の許へと歩を進めた為に仕方無くついていった。

涼と華琳もそうだが、猪々子と斗詩の二人もまた衣服に血が付いていた。

だがそれは怪我をしたからではなく、敵兵の返り血を浴びたからである。

「猪々子、斗詩、こんな所で突っ立ってて何してんだ?」

涼がそう訊ねると、猪々子は先程とは対照的な表情になり、いつの間にか斗詩も真剣な表情になっていた。

「それが……。」

「見つからないんです。」

「見つからないって、十常侍が?」

涼がそう答えると、斗詩は「それもあります……。」と言つと

暫く俯いてから話を続けた。

「何太后とその御子息であらせられる弁皇子、そして亡き王美人の遺児であらせられる協皇子。この御三方の御姿が見えないんです。」  
「……それ、本当なの？」

涼達の会話を静かに聞いていた華琳が、驚いた表情のまま斗詩に訊ねる。

その問いに斗詩はコクンと頷いて答えると、真剣な表情のまま二人に向かい、話を続けた。

「猪々子が十常侍を討ちに行っている間、私は御三方を捜していたのですが、宮中のどこにもいらっしやらないんですよ。」

「宮中の全てを調べたの？」

「流石に全部って訳じゃないですけど……予め麗羽様から聞いていた場所は、全て調べました。」

司隸校尉という役職に就いている袁紹は、それなりに宮中の事に詳しい。

因みに司隸校尉とは、元々は皇帝の親族を含めた朝廷内の大臣を監察する役職の事であり、現在ではそれに加えて帝都（現在は洛陽を指す）周辺の守備及び行政を担当する様になっている。

「麗羽が伝え忘れていた場所があったりしないわよね？」

「無い……と思いますけど……多分。」

華琳の質問に苦笑しながら答える斗詩。

涼は「多分じゃダメだろう。」とツツコミたい気持ちを抑えながら、斗詩に提案する。

「なら、袁紹本人に訊くのが良いと思うけど? ……袁紹は未だ正門前に?」

「麗羽様なら……。」

「私がどうかしまして?」

涼の問いに斗詩が答えようとすると、涼達の後ろから袁紹の声が聞こえてきた。

驚いて振り返ると、そこには兵士達を引き連れた袁紹の姿があった。

よく見ると、近くには寡黙そうな雰囲気を漂わせる長身の少女を伴った袁術の姿も見える。

「……二人共、何故ここに?」

正門前に留まっていた筈の二人を見ながら涼は訊ねた。

「そんなの決まっていますわ。顔良さんからの伝令が、火急の用が出来たので直ぐに来て下さいと伝えてきたので、部下想いの私が飛んできましたのよ。おーほっほっほっ!」

「妾は七乃達が心配なので来たのじゃ!」

自慢げに高笑いをする袁紹と、訊かれる前に明るく答える袁術に、涼は軽い頭痛を覚えていた。

因みに、隣に居る華琳も同様に頭を押さえている。

「ま、まあ……来てくれたのは助かるよ。……斗詩、あとお願い。」

「あはは……お疲れ様です。」

涼は匙を投げて斗詩に託す。

斗詩もまた苦笑していたので悪いとは思ったが、慣れない自分が対応するよりは、いつも側に居る斗詩の方がスムーズに話が進むと

思っていたのも事実である。

そしてその期待通りに、斗詩は袁紹に事の次第を説明し、袁紹の協力を得る事に難無く成功する。

「宮中には、万が一に備えての抜け道が在りますわ。全ての出入り口に兵士を配置しているのに発見報告が無いのでしたら、十常侍達は何太后達を連れてそこを通ったに違いありませんわね。」

というのが、斗詩の説明を受けた袁紹の言葉だった。

先程高笑いをしていた人物とは思えない程、今は真剣な表情になっている。

(そんな顔が出来るなら、最初っからやれば良いのに……。)

涼は袁紹を見ながらそう思った。

因みに袁術はよく解っていないのか、長身の少女が事細かに説明しているのを黙って聞いていた。

「けど、何太后達を連れて逃げるとなれば馬車が必要でしょう？」

その抜け道はそんなに広いの？」

「帝や皇族の為の抜け道ですもの、馬車が通れるくらい大きいのは当然ですわ。」

華琳の疑問に袁紹がふんぞり返って答える。「何故お前が威張る？」と言つツツコミをしたくなった涼だが、何とか我慢して話の先を促した。

「なら、急いだ方が良くないじゃないか？」

「そうね。……麗羽、その抜け道は何処に在って何処に通じているの？」

「抜け道の入り口は裏庭の一角に在って、洛陽の外……確か北西の

山中に通じていた筈ですわ。」

華琳の再びの質問に、袁紹は記憶を探りながら答えた。

この時代に馬車で通り抜けられる程の大規模な抜け道が在る事に、涼は内心驚いている。

（けどまあ、ここは俺が居た世界とは違う世界だし、元の世界と同じ様に考えるのは間違ってるのかもな。）

そう結論付けた涼は伝令に馬を連れてくる様に命じ、追跡開始迄暫く休む事にした。

数分後、伝令を受けた雪里が涼達の馬を連れてやってきた。

涼は雪里から馬を受け取ると直ぐに騎乗し、華琳達も残りの馬に跨っていった。

「有難う、助かるよ。」

「いえ。それよりも早く追撃に向かって下さい。宮中の探索は私が引き継ぎます。」

「なら、秋蘭を置いておくから好きに使ってちょうだい。」

雪里が馬上の涼と話していると、やはり馬上の華琳が雪里にそう提案する。

驚いた雪里は暫く考えてから尋ねる。

「……良いのですか、曹操殿？」

「ええ。貴女の実力は知っているけど、優秀な人材が居なければその才を十二分に発揮出来ないでしょう？」

「……解りました。では、序でに荀或殿もお借りして宜しいでしょうか？」

「勿論構わないわ。私の右腕であるあの子を驚かせるくらいに、そ



の実力を発揮してちょうだい。」  
「解りました。」

雪里はそう言うと華琳に向かって平伏して正門へと戻ろうとし、華琳は伝令に今決まった事を秋蘭と荀或に伝える様指示を出した。これで何太后達と十常侍達の探索に移れる、と、誰もが思っていた。

「なら、芽依も一緒に連れて行くと良いのじゃ！」

袁術が脳天気な声でそう言う迄は。

「……えっと……誰を連れて行けと仰ったのでしょうか、袁術殿？」

雪里は小さく溜息をついてから振り返り、出来るだけ笑顔で袁術に訊ねた。

「じゃから芽依を連れて行けと言っておるじゃろ？」

「あの……真名で言われても私には誰の事が解らないのですが。」

「おお、それもそうじゃな。では芽依、自己紹介をせい。」

「はい……。」

袁術に促されて、芽依と呼ばれた長身の少女がゆっくりと前に出る。

その後、雪里にだけ聞こえる声量で「済みません。」と言ってから、少女は自己紹介を始めた。

「私が“芽依”こと橋隋、字は土保です。袁術軍では張勳と共に袁術様の補佐をしています。」

「……御丁寧にどうも。私は徐庶、字は元直。劉備・清宮軍で軍師を務めています。」

長身の少女・橋隋が自己紹介をしたので、雪里も簡単に自己紹介をした。

その際に雪里が橋隋の顔を見てみると、何だか申し訳無さそうな表情をしていた。

自身より遥かに背が高いのに、全く威圧感が無いなど雪里は思った。

(……唯一迫力が有るのは胸だけですか。)

表情には覇気が無く、体格は細身だが、胸は存在感を示すかの様に高くそびえていた。

(桃香様より少し小さいけど……これは。)

雪里は目の前の少女と自身の胸を見比べ、色々と思う。

因みに、橋隋の外見を更に詳しく言うと、紅く長い髪は膝迄伸びており、左耳には蒼いピアス。

眼の色は茶色で、少し伏せ眼がち。

ちゃんと運動しているのか疑問に思う程、肌は白く、腕も足も腰も細い。

服装は肌の色と対照的な黒一色のツープース。スカートの下にはやはり黒のガーターベルトとニーソックス。靴は張勲と同じ白いブーツを履いていた。

左腰にはやはり張勲と同じデザインの剣を下げているが、少し長い様だ。

(武器を持っているという事は武官なんでしょうか？ ……全然武官っぽく見えませんが。)

観察を終えた雪里は、橋隋についての感想を心の中でそう述べた。

その後、袁術に「芽依は役にたつぞよ。」と太鼓判を押された橋を連れながら、雪里は正門へ戻っていった。

「……じゃあ、そろそろ行くこうか。」

雪里達が戻っていくのを確認しながら、涼は誰に向けるでもなくそう言った。

溜息をつきながら華琳達がそれに同意し、馬を進める。

いつの間にか、宮中は静かになっている。

一部を除き、それに気付いた者は皆、再び溜息をついた。

左右に斗詩と猪々子を連れた袁紹が先頭を進む。この中で抜け道を知っているのは袁紹だけなので、当然ではあるが。

だが、斗詩を除いた袁紹達や袁術達以外は、半ば諦めた表情になっていた。

「時間がかかり過ぎたな……。」

「そうね……馬を連れてくるのにかかった時間は兎も角、その後の橋隋の件は要らなかつたわ。」

袁紹達の後方を走る涼がそう呟くと、併走している華琳も同意する。

その後ろでは、袁術を前に乗せた張勳が馬を走らせている。何だか御機嫌そうである。

「ほん……っと、袁家の人間は碌な事しないわね。」

「アハハ……まあ、今更言っても仕方無いよ。今は兎に角急こう。」  
「……そうね。」

華琳はそう言うと、馬の速度を速めようとして手綱を握り直した。その時、進行方向の物陰から武器と武器がぶつかり合う金属音と、

それに伴う戦士達の咆哮が聞こえてきた。

「この声は……愛紗達!？」

「春蘭の声もするわ!」

仲間の声を聞いた涼と華琳は、直ぐ様馬を走らせ、前を行く袁紹達を追い抜いていく。

そのままの勢いで角を曲がると、そこには十常侍の兵達と戦っている時雨、翡翠、春蘭、そして愛紗の姿があった。

涼達が着いた場所は広くて緑が多い庭で、愛紗達の兵士と十常侍達の兵士が入り乱れて戦っていた。

時雨は四方から斬りかかってきた敵兵を大剣の一振りで薙ぎ倒し、春蘭もまた、片刃の大剣を振り下ろして周りに居る敵兵を次々と一刀両断にしている。

愛紗は愛紗で、自身の身長を超える長さの偃月刀を片手で軽々と扱いながら右へ左へと動き回り、次々と敵兵を斬り捨てていった。

「皆、大丈夫か!？」

聞かなくても解るが、涼はそう言いながら馬を進め、敵兵を斬り倒す。

「あ、義兄上!？」

「遅いぞ! ……って、何故曹操と一緒に居るんだ!？」

「何、華琳様だと!？ 華琳様、ここは危険ですからお下がり下さい!」

涼達に気付いた愛紗達は、皆一様に驚きながらも、目の前や周りに居る敵兵を確実に倒していく。

「氣遣いは無用よ春蘭。これしきの相手を倒せなくて、曹家を継ぐ者と言えようか！」

(……さっき苦戦してたのはどこのどいつだよ?)

春蘭にそう言いながら敵兵を斬り倒す華琳に、涼は心の中で突っ込んだ。

わざわざ言う事では無かったから口に出さなかったのだが、本当に言ったら華琳に斬られそうな気がしていたというのも理由ではある。

その証拠に、殺意がこもった華琳の視線が涼の背中に突き刺さっている。

更に、今は春蘭も居るのだから、下手したら大怪我じゃ済まないかも知れない。

十常侍を倒すのが先決なのに、味方同士で争う訳にはいかないので、涼の判断は正しいだろう。

「覚悟っ！」

そう思っていると、進行方向奥から翡翠の声が聞こえてきた。いつもの穏和な声とは違つ、どこか凄みのある声だが、間違いなく翡翠の声だった。

涼が目を向けると、そこには大きな斧を振り上げた翡翠の姿がある。

「ひいっ！」

悲鳴をあげたのは十常侍だった。あれから大分時間が経っているのに、未だ宮中に残っていた事に涼は驚いている。

だがそれ以上に、あの翡翠が自身の上半身と同じ大きさの刃を持つ斧を軽々と扱っている事に、一番驚いた。

ズシャツ。

その斧で十常侍の首が斬り落とされる。肉が切り裂かれる音が聞こえた。首の骨が砕ける音が聞こえなかったのは、首の関節を綺麗に斬ったからか、斧が地面に着いた時の衝撃音が打ち消したからだろうか。

いずれにしても、十常侍の一人はたった今討ち取られた。

「十常侍の一人、張恭は盧植軍の大將である私、盧植が討ち取りましたわ！」

翡翠は斬った十常侍の首を掴んで近くに居た部下に渡すと、涼達に向かって叫んだ。

「清宮様、華琳さん、残りの十常侍は二人の皇子と共に、この先の抜け道を通って行きました！ ここは私達に任せて、急いで追い掛けて下さい！！！」

「解りました！ 行くよ、華琳！！！」

「ええ！！！」

そう言っただけで涼と華琳は共に馬を走らせ、翡翠の前方に在る抜け道と思われる地下道へと向かって行った。

「ちょっと、清宮さんに華琳さん！ ここ迄案内した私達を置いていくななんて許しませんわよ！ 顔良さん、文醜さん、私達も行きますわよ！！！」

「あ、麗羽さん達はここに残ってくれませんか？」

「えっ！？ な、何故ですか、翡翠様！？！」

涼達を追いかけようとして馬の手綱を握り直した袁紹だったが、

翡翠の思い掛けない要請に戸惑い、危うく落馬しそうになった。

「麗羽さんは司隸校尉という役職に就いていますよね？ ですから、ここに残って私と共に今回の事後処理を手伝って下さい。」

「で、ですが、黄巾党の乱で北中郎将として活躍し、現在は尚書という役職にある翡翠様なら、私が手伝わなくとも……。」

「けど、今は少しでも人手が欲しいんですよ。……駄目でしょうか？」

翡翠は温かい笑顔を袁紹に向けながら頼み込む。

数多く居る官軍の将の中でも、実績・名声共に抜きん出ている盧植・翡翠に懇願されて、断れる者はそう居ない。

「翡翠」という盧植の真名を呼ぶ事を許されている袁紹なら、尚更断れないだろう。

更に翡翠は、切り札というべき言葉を投げ掛ける。

「それに、先程保護した何太后は帝に続いて姉を失った事で憔悴しておられます。そんな何太后を元氣付けてあげられるのは、何進大將軍の友人であつた麗羽さんだけです。」

「何太后は御無事なんですの！？ ……解りました、ならば私、袁本初は盧植將軍の要請を受けさせて貰いますわ。」

「頼りにしてますよ、袁紹殿。」

翡翠がそう言うと、袁紹は下馬して翡翠に対して恭しく平伏し、斗詩と猪々子もそれに倣った。

それから、翡翠の指揮の下、盧植軍と袁紹軍の兵士達は共闘して十常侍の兵士達を倒した。

また、その間に袁紹達が乗ってきた馬は愛紗、時雨、春蘭が乗る事になり、三人は直ぐ様涼達の後を追い掛けて行った。

因みに、袁術は敵味方の死体を沢山見た為に卒倒し、張勳によって宮中へと戻されていた。

彼女達は一体何をしに来ていたんだろうか。

袁術達がそんな状態の頃、涼と華琳の二人は必死に馬を走らせ、抜け道を駆けていた。

抜け道は、上下左右が石畳や石垣になっており、長い間使われていなかったからか、空気が湿っていた。

只、壁に付けてある松明には火が灯っており、暗い抜け道を臙気に照らしていた。

逃げている十常侍達に火を灯す暇があったのか疑問だが、どうやら松明の一つに火を点けると全ての松明に火が点く仕掛けになっている様だ。

もつとも、涼達がそれを知るのは暫く後の事になるのだが。

「……あれだっ！」

「思ったより離れていなかったわね。きつと、翡翠様達が足止めしてくれたお陰ね。」

前方に行く馬車と護衛の騎馬兵達の姿を確認し、涼と華琳は馬の速度を更に速める。

馬車は馬に車を引かせる乗り物だから、馬に直接乗っている涼達と比べたら明らかに速度が落ちる。

その分、二頭で一台の馬車を引いているが、それでも複数の間人が乗っている分どうしても遅くなってしまふのだ。

そんな中、護衛の騎馬兵達がこぞって反転し、涼達に向かって突進してきた。

「……！ こっちに来るぞ！？」

「どつやら足止めと始末に来た様ね。気をつけなさい、涼！」

「お前もな、華琳！」 二人はそう言いながら、自身の武器を構える。

それから暫くの間、辺りに金属音が響き渡った。



実力で勝る涼達によつて、敵兵は次々と倒されていく。それでも涼達の表情は曇っていた。

「ちい……っ！ 未だ居るのかよ!!」

「本当に兵の数だけは多いわね……。」

共に馬上で武器を構え、目の前の敵と対峙する涼と華琳。

その二人の周りには、物言わぬ敵兵達が無造作に転がっている。その数は十や二十では足りない。

だが、目の前に迫ってくる敵兵はそれよりも多かつた。

「でええいつ!!」

それでも涼は剣を振るつて敵に向かい、

「はああっ!!」

華琳は鎌を振るつて敵に立ち向かう。

敵の返り血で顔や服が汚れても気にせず、只敵を倒し続けた。

だが、数的不利の状況では疲労が溜まっていき、段々と動きが鈍くなつていく。

「くっ……!! 華琳、一端下がるぞっ！ このままじゃられちまうっ!!」

「馬鹿を言わないで！ ここで退いたら私達は逆賊に仕立て上げられるのよ!!」

涼の提案を一蹴しながら武器を振り続ける華琳だが、その額からは汗が流れ落ち、呼吸も乱れている。

それは涼も同じで、流れる汗は拭っても拭っても乾く事は無い。

「そんな事は解ってる！ けど、死んだら何にもならないだろ！」  
「ならば貴方一人で逃げなさい！ 私は、敵に後ろを見せるくらいなら誇り有る死を選ばわ！！」

敵兵を斬りながら華琳はそう言い切った。

涼はそんな華琳の決意を聞きながら、複雑な表情を浮かべる。

確かに、惨めに生きるより志に殉じる方が良いという考え方もあるだろう。例えば、日本も武士や侍が居た時代は、まさにそんな考え方が普通だった。

だが、涼は武士や侍が居た時代の人間ではなく、平和な、そして自由な時代の人間だ。

だから、華琳の意志を理解する事は出来ても、同意する事は出来ない。

「……きやつ！」

そう思いながら敵を倒していた涼に、華琳の悲鳴が聞こえてきた。見ると、華琳は落馬している。

彼女が乗っていた馬は顔や首に矢を受けており、よろめきながらゆっくりと倒れた。

どうやら、馬が矢を受けた事で暴れた為にバランスを崩し、落馬してしまっただけだ。

だが、流石は華琳と言うべきか、落馬による負傷はしていない。

もともと、確実に着地する為に武器を手放してしまっただけで、今の華琳は丸腰だった。

そんな状態の華琳を、敵兵が見逃す筈も無かった。

敵兵の刃が華琳に迫る。

着地したばかりな上に丸腰の華琳には、防ぐ事も避ける事も出来ない。

迫り来る死に、華琳は思わず目を閉じた。

(「ここ迄、か……無様ね……。」)

華琳は自嘲しながら死を受け入れようとする。

(「……………?」)

だが、彼女がいつ迄待っても死は訪れない。

代わりに聞こえてくるのは、剣と剣がぶつかる音と敵兵達の断末魔。

華琳は恐る恐る目を開ける。

そこには、馬上で剣を振るって敵兵を薙ぎ倒す涼の姿が在った。

「……………じゃないか。」

「え……………?」

涼が不意に呟いた言葉を聞き取れず、華琳は聞き返す。

すると涼は、一瞬だけ華琳を見てから迫り来る敵兵を斬り倒しながら答える。

「誇り有る死を選ぶとか言っても、本当は死にたく無いんじゃないか?」

「そんな事は……………!」

「なら、何で今お前は目を閉じていたんだよ? 死ぬのが嫌だから、直視出来なかったんじゃないか?」

「……………っ!」

涼は敵兵を倒しながら、後ろに居る華琳に対して段々と語気を強めながら訊ねる。

そんな涼に華琳は何も言い返せず、只目を逸らす事しか出来なか

った。

その時、華琳の遙か後方から、複数の馬が走ってくる音が聞こえてきた。

「後ろから!? 一体誰が……っ!?」

「少しは落ち着けよ、華琳。」

指摘されて動揺しているのか、華琳は振り返りながら慌てて武器を拾う。

そんな華琳に苦笑しながら、涼は冷静に言った。

「後ろから来るって事は……味方って事さ。」

笑みを浮かべながらそう言うと、それを証明するかの様に声が届く。

「義兄上、御無事ですか!？」

「桃香が悲しむから、死んでも死ぬな!！」

「華琳様——っ!！」

声の主である愛紗、時雨、春蘭の三人がそれぞれ馬に乗って駆けながら二人に近付いてくる。

そしてそのまま、涼と華琳に襲いかかっている敵兵達に向かって叫んだ。

「我が義兄にして我が主に刃を向けるとは言語道断! 我が青龍偃月刀で、その罪ごと叩き斬ってくれようぞ!！」

「コイツに何かあつたら桃香が悲しむんだ。だから、間接的とは言え桃香を悲しませようとしたお前達は、俺がぶっ倒してやるぜ!！」

「華琳様の敵は全てこの私、夏侯元讓が地獄に叩き落としてくれるわ! 貴様等全員、そこになおれいっ!！」

愛紗達の叫びが抜け道中に響き渡り、敵兵達を萎縮させていく。たった三人の増援だが、敵兵達の勢いを削ぐには充分だった。結果的には、勢いを削ぐどころか殆ど全滅させていた。

「華琳様、御無事ですか!？」

「ええ、涼のお陰で命拾いしたわ。」

そんな彼女達は今、短い休息を兼ねて互いの無事を確認している。

「そうでしたか……。清宮、よく華琳様を助けてくれた。礼を言わせてくれ。」

「そんな、大した事じゃないよ。仲間を助けるのは当然だしさ。」

「だが、当然の事が出来ない者も居るのにそれを出来るのは、充分に大した事だと思うぞ。」

春蘭が真面目な顔でそう言ったので、涼は素直にその礼を受けた。

「義兄上、そろそろ追撃を再開しないと逃げられます。」

会話が一通り終わると、愛紗が急かす様に言ってきた。

実際、皇子達と共に逃げた十常侍の馬車が視界から消えて久しい。急がなければ逃げられてしまうのは明白だった。

「関羽の言う通りね。涼、貴方は関羽、田豫と共に先に行って頂戴。」

「それは構わないけど……。華琳達はどうするんだ?」

「私も行きたいけど……。」

涼が尋ねると、華琳は表情を曇らせながら右足首を見せた。

見ると、右足首は真つ赤に腫れ上がっていた。

「着地の際に挫いていた様ね……。今頃になって痛んできたわ。」  
華琳はそう言うと、腫れている右足首を優しく撫でた。  
因みに春蘭はそんな華琳を心配してオロオロしている。

「……解った。俺達は先に行くよ。」

「頼むわ。私も手当てをして動ける様なら直ぐに追いつくから。」

「ああ。けど、無理をするのは良くないぞ。」

「心配してくれるのなら、無理しないといけない状況にはしないでほしいわね。」

「そうするよ。……それじゃ、愛紗、時雨、行くよ！」

「はっ！」「はっ！」

笑顔で華琳に応えた涼は、瞬時に表情を引き締めて乗馬すると、  
愛紗と時雨・田豫を引き連れて駆け出していった。

華琳と春蘭は、そんな涼達の姿が見えなくなる迄見送った。

「……大丈夫ですか？」

暫くして、春蘭が心配そうな表情で尋ねた。

「ええ、痛むけど何とか歩く事は出来るわ。」

「いえ、勿論足の具合も心配ですが、今のはそちらではなく……。」「？」

華琳は春蘭が何を言いたいのか解らず、キョトンとした表情でその顔を見返す。

「……清宮達に手柄を譲らなければならなかった事です。」

「ああ……。」

華琳は春蘭が言いたい事を漸く理解した。

ここで手柄を立てると立てないでは、大きく意味が違うからだ。

「もし華琳様が残りの十常侍を倒し、二人の皇子を助けだしたなら、今回集まった諸侯の中で一番の評価を受けていた筈です。」

「そうね……それについては確かに残念だね。……でもね。」

春蘭の言葉を肯定しつつも、華琳の声や表情は毅然としており、足を痛めているのに立ち居振る舞いも崩れていない。

「これはたかが一度の好機を逃しただけ。未だ私の……私達の名を上げる機会は何れ必ず来るわ。」

「華琳様……。」

華琳は涼達が進んだ暗闇の先を見据えながらそう言い、春蘭はそんな華琳をウツトリとした目で見ている。

「それにしても……まさか春蘭に指摘されるとは思わなかったわ。」

「わ、私だつて曹軍の武将ですから、それくらいは出来ますっ。」

「フフ……解つてるわよ、春蘭。」

妖しい笑みを浮かべながら、華琳は春蘭の頬を撫でる。

その結果、既に紅潮していた春蘭の頬は、更に赤味を増した。

「……そう言えば、私が乗ってきた馬は死んでしまったのよね。春蘭が乗ってきた馬に乗せてくれるかしら？」

「も、勿論です華琳様！」

その後、華琳は春蘭が乗ってきた馬に乗せてもらい、来た道を戻

っていった。

その頃、涼達は漸く十常侍が乗っている馬車を捉えた。

「やっと追い付いた……このまま一気に行くぞ！」

「はっ！」「はっ！」

涼は併走する愛紗と時雨に声を掛けると同時に、手綱を上手く捌いて馬を速め、馬車との距離を詰める。

馬車の周りに居る兵の数は余り多くなく、こちらに向かってくる者も居ない。

そんな中、馬車の前方から突然光が漏れてきた。

「……出口か!？」

「どうやらその様です。……まずい！」

「彼奴等、出口を塞ぐ気が!？」

馬車が光の先へ進むと、残った二人の敵兵が出口を閉じ始めた。

このままでは閉じ込められて、追撃出来なくなるのは確実だ。

「そうは……させねーぜ！」

時雨はそう叫びながら、自身の大剣を前に向かって思いっきり投げ飛ばした。

「ぐわっ！」

その大剣は残っている敵兵の一人の体に突き刺さり、命を奪った。

「やるな時雨! ……ならばっ!！」



時雨に刺激されたらしい愛紗もまた、もう一人の敵兵に向かって  
偃月刀を投げ飛ばす。

「がは……っ！」

そして、その偃月刀もまた、もう一人の敵兵の喉笛を貫き、その  
命を絶つ。

これにより、涼達は閉じ込められる危機を脱する事が出来た。  
「先に行ってるよ！」

倒した敵兵に刺さったままの武器を回収する愛紗と時雨を横目に、  
涼は出口に飛び込んでいく。

「……っ。」

出口はどこかの山道に通じていた様だが、暗闇から急に明るい場  
所に出た為に眩しく感じた涼は、思わず目を閉じる。

それでも馬を走らせ続けられたのは訓練の賜物であり、十常侍を  
逃がさないという意思の表れだった。

そのお陰か、涼の目が光に慣れてきたのとほぼ同時に、十常侍の  
馬車を再び視界に捉えた。

そんな涼に気付いた敵兵達は、慌てながら馬車の中に居る十常侍  
に報告をしている。

「趙忠様、未だ追っ手が来ています！」

「くっ……しっこい奴等だ！ 今来ているのはどんな奴だ！？」

「頭巾が付いた白き衣を身に纏った、黒髪の少年です！」

「何っ！？」

兵からの報告を受けた十常侍・趙忠は驚きを隠せないらしく、慌

てながら再び確認する。

「そ、そいつはもしや、噂に聞く“天の御遣い”とやらか!？」

「お、恐らくそうかと……。」

「お、終わった……。」

再確認の末、趙忠は絶望した。

十常侍の一人である趙忠は、「天の御遣い」である清宮涼が、黄巾党の乱を鎮めた立役者の一人である事を知っている。

また、只強いだけでなく公明正大で、不正は絶対に許さないらしい。

約三ヶ月前、黄巾党の乱鎮圧における各武将達の戦功を讃え、恩賞を与える際に、十常侍達は涼達を過小評価していた。

その為、恩賞を与える役目の高官達に命じて、恩賞を与える順番を後回しにしていたのだが、その事に曹操や董卓、更には盧植迄もが異を唱えた為に、慌てて恩賞を与え、その際に恩賞も良いものに変更しようとした。

だが、涼はそんな高官達の態度が気に入らなかったのか、恩賞の交換には頑として応えなかった。

また、個人の武力だけでなく統率力も有るらしく、義勇軍はその殆どが農民の集まりであるにも拘わらず、兵の損耗率は低く、また実力も兼ね備えていた。

勿論それは、関羽、張飛、田豫といった武将、徐庶、簡雍といった軍師を、劉備、劉燕といった劉勝の末裔と共に纏めているからではあるが、裏を返せばそれだけ人望が有るという事だ。

そんな人物が今、自分達を追撃している。

仮に涼を倒せても、彼の部下である関羽達が黙っていないだろう。その為、趙忠に出来る事は、只ひたすらに逃げる事しか残されていない。

だが、事態はそれすらも出来ない状況になっていた。「に、逃げ

るーっ！」

「た、助けてくれーっ！」

突然、護衛の兵士達が悲鳴を上げながら逃げていく。

それにつられてか、馬車を動かしていた兵士も逃げる兵士の馬に飛び乗って一緒に逃げだす。

「ま、待てっ！ 貴様等戻らんかっ！！！」

趙忠は慌てながらそう叫ぶが、護衛の兵士達は止まる事も振り返る事もせず一目散に逃げていった。

馬を操る者が居なくなつた馬車は、暴走するしかない。

悪い事は続くもので、二頭の内の一頭を繋いでいた縄が切れ、そのまま逃走。今迄二頭で動かしていた馬車を一頭だけで走らせられる訳もなく、また慣性の法則も加わって馬車は更に暴走。

遂には馬車の車輪の一つが脱輪し、馬車は横転した。

「し、死んでたまるか……！」

趙忠は倒れた馬車から這い出て必死に逃げようとする。

だが、そんな趙忠の前に、馬に乗って武器を構える少年が立ち塞がる。

「……どこに行くつもりかな？」

「げえっ、御遣い!？」

趙忠はそう叫びながら、尻餅をついて後退りする。その表情は絶望感に支配されていた。

涼は「関羽相手みたいに言っなよ。」と思つたが、多分言つても意味が無いだろうから言わなかつた。

「漢王朝を腐敗させ、国を乱し、沢山の人々を苦しめ、更には皇子達をも連れ去ろうとしたその罪、お前の命一つで償える程軽くは無いが、かと言って見逃す訳にはいかない。……悪いが、ここで死んでもらう。」

涼は相手を威圧する為に凄んでみせる。

涼を知っている人間なら思わず吹き出しそうな台詞回しだが、涼の名前と風評しか知らない趙忠には効果覲面だった。

「ひいっ！ た、頼むっ、殺さないでくれっ！！」

「……そうやって命乞いをした人達を、貴様等は何人殺してきた？ 随分と都合が良い物言いだな。」

趙忠はとても情けなく、保身にしか考えが回っていない。

十常侍として権力をほしいままにしてきた人間が、いざ我が身の危険に苛まれるとこの有り様だ。

そんな趙忠は涼が一番嫌いなタイプであり、見ていると段々と腹が立ち、演技をしなくても自然と言葉や態度に凄みが出る様になった。

「そ、それは全部張讓の指図だったんだ！ 俺は悪くねえ！！」

「悪くない？ 張讓に荷担して人を苦しめ、殺めた人間が全く悪くないだつて？ ……ふざけるなっ！！」

「ひっ！！」

「張讓の指示に何の疑問も持たず、人々を苦しめ続けた貴様は罰せられるべきだ！！」

余りにも自己中心的な趙忠の態度を見た涼は、最早我慢の限界だった。

下馬して剣を向けながら近付き、その剣を喉元に突き付ける。

「……殺す前に聞いておく。殺した人達に詫びる。」  
「な、何故俺がそんな事をしなければならな……。」

趙忠がそう言いかけると、涼は黙ったまま剣を少し前に突き出した。

「わ、解った！ 悪かったと思ってる、本当だっ！！」

「……良いだろう。なら次は、張讓の居場所を教える。」  
「し、知らんっ！」

趙忠がそう言うと、涼は更に剣を前に突き出した。

「ほ、本当に知らないんだっ！ 彼奴、俺達に何進の首を投げれば諸侯は逃げるとかデタラメ言ったかと思ったら、そのまま居なくなりやがったんだよっ！！」

「……何だって？」

張讓が居ない。その事に涼は途轍もない違和感を感じた。

（張讓が居ないだっ……？ “三国志演義”だと十常侍の筆頭で、二人の皇子を連れて逃げた筈。ひょっとしてこの世界じゃ違うのか……？）

涼は暫く考え込んだ。考え込み過ぎて、趙忠がゆっくりと後退りしているのに気付かない程に。

そうして一定距離をとると、趙忠はあっという間に逃げ出し、涼から離れていった。

「……あっ！」

涼が気付いた時には、趙忠はかなり離れた場所を走っていた。

慌てて後を追いかけてしようとするが、馬に乗ってからのほうが良い事に気付कि、騎乗してから追い掛ける。

人の速度と馬の速度、速いのはどちらかと考える迄も無い訳で、その距離はみるみる縮まっていく。

それでも趙忠は必死に逃げていたが、突然その走りを止め、立ち尽くした。

「あつ……。」

涼は思わず声を出した。

よく見ると、趙忠の体には見知った武器が突き刺さっている。その武器は偃月刀。涼の義妹にして大切な仲間の武器だった。

「義兄上、止めを！」

涼を「義兄上」と呼ぶ少女 - 愛紗。その隣にはやはり仲間の少女である時雨が居る。

涼は愛紗達に頷き返すと、剣を構えながら趙忠に近付く。

趙忠は、体に青龍偃月刀が刺さったままにも拘わらず、倒れず立っていた。

もつとも、傷口からは大量失血しており、致命傷なのは間違い無い。放つておいても何れ死ぬだろう。

「た、助け……っ。」

趙忠は首だけ動かして涼に助けを求めた。

その姿は余りにも哀れで、とても今迄権力を握っていた人物とは思えない。

涼はそんな哀れな男に対し、無言で剣を振り抜いた。

次の瞬間、趙忠の首が飛び、それによって出来た新たな傷口から

勢い良く血が飛び出る。

趙忠の体はゆっくりと倒れ、二つの傷口から血溜まりを作っている。

やがて、体内の血液の殆どを出し終えた趙忠の体は完全に生き物としての活動を停止した。

それを確認した愛紗は、未だに趙忠の体に刺さったままの青龍偃月刀を引き抜き、刃に付いた血を振り落とす。

それから時雨と共に下馬し、揃って涼の前に来ると跪いて平伏し、涼に向かって恭しく言った。

「逆賊の討伐達成、おめでとうございます。これで義兄上の評判、ひいては劉備・清宮軍全体の評判が上がる事でしょう。」

「どうなる事かと思ったが、よくやったじゃねえか。流石は桃香の義兄だな。」

「……ああ。けど、これも二人の、そして宮中や洛陽の外で頑張っている皆のお陰だよ。本当に有難う。」

愛紗に続いて時雨が誉めた後、涼は一瞬反応が遅れたものの直ぐに表情を正し、二人に向かって微笑みながらそう答える。

だが、愛紗はそんな涼の態度を見逃さなかった。

「……どうかなされましたか、義兄上？ 何だか不安そうなお顔をなされていますが……。」

「……実は。」

涼は張讓の事を二人に話した。

「……つまり、張讓を見付けないとこの戦いは終わらない、と、義兄上は思っているのですね？」

説明を聞いた愛紗が真剣な表情で確認し、涼は静かに頷いた。

因みに、元の世界での張譲については話していない。混乱する事を避ける為と、何よりここ迄展開が違うと却って話さない方が良くもしている様だ。

その後、二人の皇子を助ける為に時雨を馬車に向かわせた。数分後、帰ってきた時雨の両隣には、未だ幼い二人の男の子が居た。

一人は泣きべそをかいていたが、もう一人は毅然とした態度を保っていた。

見たところ、二人共怪我はしていない様だ。

趙忠の死体や首を見た時は流石に二人共驚いていたが、涼達が経緯を話している内に落ち着きを取り戻していった。

因みに、泣きべそをかいていたのが弁皇子で、毅然とした態度を保っていたのが協皇子だ。

霊帝が崩御した今、次の帝は兄である弁皇子がなるのだが、風格等は弟である協皇子の方が上だ。

「三国志」についての知識が豊富な涼は複雑な思いで二人を見つめ、だが何も言わずに二人を連れて洛陽への帰路についた。

張譲の行方は気掛かりなままだが、今は皇子達を洛陽に戻す事が先決だと判断した結果だった。

その頃、その張譲はとある山の中に居た。

そこには、張譲以外にも一人、怪しげな雰囲気を漂わせた人物が一緒だった。

「……そうですか、趙忠が死にましたか。」

「ええ、これで十常侍は貴方を除いて全員が死亡し、邪魔者が居なくなつた訳です。これからの貴方の働きに期待してますよ。」

「御期待に応えられる様、尽力します。于吉様。」

張譲は、隣に居る眼鏡を掛けた導師服の男・于吉に対して恭しく平伏する。どうやら張譲の仲間、それも上司にあたる人物の様だ。



「それで、これからどうするつもりです？」

「僕としては、こちらの兵をなるべく損耗したくないので、“新しい兵”を使う予定です。」

「ほう……そしてそれがあの部隊と言っ訳ですか。」

于吉は張讓の視線の先に目を向ける。

そこは張讓達が居る山の麓の街道であり、そこには洛陽に向かって悠然と進む大部隊が在った。

「ですが……果たしてそう上手くいきますかね？」

「御心配無く。既に準備を進めていますから問題有りませんよ。」

張讓は自信たっぷりにそう言うと、再び麓を進む大部隊に目を向ける。

その大部隊が掲げている旗には、「董」の文字が記されていた。

## 第九章 宴と少女（前書き）

董卓。真名は月。

涼の世界に居た董卓とは違い、この世界の董卓は虫さえも殺せない可憐な少女。

そんな彼女に涼は心を許していた。恐らく、彼女・月も同じだった筈だ。

多分、今もそれは同じ。

2010年7月11日更新開始

2010年8月8日最終更新。

## 第九章 宴と少女

涼が趙忠を討ち取って数刻後、洛陽では二人の皇子の帰還と十常侍討伐、それぞれの立役者達の功績を讃え祝賀会が開かれていた。

十常侍を討った各武将達には恩賞が与えられ、特に、趙忠を討って皇子達を助け出した涼には格別の恩賞が与えられた。

もっとも、涼はその事に対して複雑な思いでいた。

「なあ、愛紗。」

「どうしました？」

「趙忠に致命傷を与えたのは愛紗なんだから、これは愛紗が受け取るべきじゃないのかな？」

「何を仰います。義兄上が止めを刺されたのは間違い無いのですから、ここは素直に受け取るべきですよ。」

苦笑しながら愛紗はそう言って、涼の背中を軽く叩いた。

宮中での祝賀会は、場合が場合だけに簡素なものだが、それでも十常侍の殆どを倒せたので、この国を立て直す機会を得る事が出来たのは確かな為、かなり盛り上がっていた。

洛陽の外で待機していた桃香や白蓮達も今は合流し、雪蓮や華琳達と共に談笑している。

そんな中、雪里が一つの知らせを持ってやってきた。

「先程、月様が到着された様です。」

そう言われて涼が出入口に目をやると、黄巾党征伐時に共に戦った董卓・月が賈馱・詠と共に近付いて来るのが見えた。

「御久し振りです、皆さん。」

涼達の許にやってきた月は、いつもの優しげな笑顔を浮かべながらそう話し掛けてきた。

「久し振りだね、月。詠も元気そうで何よりだよ。」

「……有難う。」

詠もいつも通り無愛想に返事をする。

月には優しく接しているのに、他人には厳しいのは何故だろうと思っ涼だった。

「皆様の御活躍は先程お聞きしました。特に清宮さんは趙忠を討つただけでなく、二人の皇子も同時に助け出したとか。」

「それも皆が頑張ってくれた結果さ。たまたま俺が手柄を取れただけだよ。」

「ふふっ、相変わらず謙虚なんですね。」

口元に手を当てながら月は笑みを浮かべ、暫くの間涼を見つめた。十代の少年である涼は月のその仕草にドキリとし、顔を紅くする。だが同時に、涼は違和感を感じていた。

(……何だろう。月は前と変わらない筈なのに、どこか変に感じる……?)

だが、その違和感が何か解らなかった涼は、結局深く考える事はしなかった。

その間に、月と詠は桃香達とも話していき、やがて苦笑しながら言った。

「私達も、間に合えば皆さんのお力になれたのですが……遅れてしまい申し訳ありませんでした。」

「仕方ないよ、月ちゃんは私達の中では一番遠い所に居たんだし、それに異民族と戦っていたんでしょ？」

「地理的にも状況的にも不利だったのなら、遅れるのは仕方ないと思うわ。」

桃香と蓮華が月をフォローする。が、そんな行為を無にするかのように、華琳は意地悪な表情になって話し出した。

「桂花に聞いたのだけど、今の董卓軍は確か二十万の大軍なのよね？ それだけの軍勢が居れば、楽出来たでしょうね。」

「ここに連れてきたのは十五万程だけど、確かに曹操の言う通りだったでしょうね。」

それに対して、詠が敢えて皮肉を受けながら答える。

「当然ながら場の空気は悪くなるので、慌てて桃香や白蓮がフォローに回った。」

一方、雪蓮はそうして慌てる二人を見ながらお酒を飲み、華琳はその様子を楽しむかの様に眺めている。

そんなちよつとしたドタバタ騒動は、折角の祝賀会で喧嘩になつては困ると感じた涼が止める迄続いた。

「あー、居った居った。」

そこに、何処かで聞いた事のある関西弁が聞こえてくる。

「この世界で関西弁とはおかしいが、実際に話しているのだから仕方が無い。」

「張遼、お疲れ様。」

「おおきに。まあ、お互い様やけどな。」

張遼も涼と同じく、十常侍討伐で功績をあげている。

そうした意味で「お互い様」と言ったのだろう。

「そうだね。それより、俺を捜していたみたいだけど、何かあったの？」

「ああ、ウチの大将が会ってみたいらしくてな。少し時間ええか？」

「大丈夫だよ。張遼の大将って……確か丁原って人だったよね？」

「せや。丁原の旦那には色々助けて貰うてな、その恩を返す為にウチは部下になつてるんや。」

張遼は真面目な表情でそう言った。

そんな張遼の過去を涼が気になっていると、そこに低く威厳の有る声が聞こえてきた。

「儂は大した事はしてないから気にするなと、いつも言っておるんじゃないがな。」

声の主は白髪が多めの頭髪をした初老の男性だった。また、その傍らには色黒で紅い髪の少女が居る。

「せやけど、あの時旦那に助けて貰わなかったら、ウチは今頃どうなつとつたか解らへんのやし、気にするなつてのが無茶ですわ。」

「相変わらずだな、霞しほ。まあ、儂しほとしてもお主が居てくれた方が助かるし、娘が増えた様で楽しいがの。」

初老の男性は、そう言つてカラカラと笑う。

つられて張遼も笑つたが、紅い髪の少女は無表情のままだった。

そんな紅い髪の少女の様子も気になる涼だったが、その前に確認しなければならぬ事が有るので後回しにする。

「張遼、ひよつとしてその人が……。」

「ああ、放っておいてスマンかったな。察しの通り、この爺さんがウチの大将であらせられる丁建陽や。」

「爺さんで悪かったの。……さて、挨拶が遅れて済まんかったのう。儂が荊州刺史の丁原、字は建陽じゃ。」

「御丁寧にどうも。自分は劉備・清宮軍の副将を務めています、清宮涼です。」

張遼に紹介された初老の男性・丁原が挨拶してきたので、涼は平伏しながらそう答えた。

すると丁原は、怪訝な表情になりながら訊ねてきた。

「副将？ 確か黄巾党征伐時のお主は、連合軍の総大将を務めていたと記憶しておるが。」

「あれはあくまで一時的なものです。本来は劉玄德が大将で、自分はその補佐が役目ですから。」

涼は謙遜する様に言った。それが、桃香が居たら間違い無く即座に否定しそうな事だったのは、今更言う迄も無い。

丁原が涼の言葉をどう受け取ったか判らないが、暫くして先程の様にカラカラと笑いだした。

「今時珍しい謙虚な男じゃな。……じゃが、それでいて隙を見せぬとは、流石じゃの。」

「そんな……買い被り過ぎですよ。」

いきなり高評価を得た涼は照れながら謙遜した。

だが丁原は、そんな涼に対して尚も評価を述べていく。

「義勇軍とは言え、一万を超える大軍の補佐となれば、誰にでも出来る事ではない。……それでいて、儂等の事を探ろうと目を光らせ

ておる。じゃから流石じゃと申した迄よ。」

(……読まれてたか。)

涼は内心で小さく舌を出した。

「三国志」に詳しい涼だが、その知識をそのままこの世界で使えるとは限らない。

何しろ、大半の武将・軍師が女になっっている世界だ。勿論、今涼の目の前に居る丁原の様に、男性のままという場合もあるが。

そうした事情から、涼は情報を得る事を最優先にしている。とは言っても、あくまで自分自身にとっての情報だが。

「俺は、俺に出来る事をしているだけですよ。」

「ふむ……」天の御遣いは公明正大で思慮深く、それでいて謙虚だ  
”という噂は、間違っておらぬ様じゃの。……どうじゃ、お主さえ  
良ければ、うちの霞と恋を嫁にくれても良いのじゃがの?」

「なあっ!?!」

「……義父上、急過ぎる。」

涼は余りの急展開に苦笑しつつも、初めて喋った紅い髪の少女を見ていた。

丁原が恋と呼んだ紅い髪の少女は、ボーっとした表情をしている。紅く短い髪は前後に鋭く伸び、上部には二本の長い髪がまるで触角の様に伸びている。

燃える様な深紅の瞳は大きくて、髪の色と相まって自然と見る者を惹きつけていく。

色黒の肌の肩や腹部には、黒い線状の模様が有る。刺青かボディペインティングだろうか。

服は真ん中のフアスナーらしき物を境に右が黒、左が白に分かれているタンクトップみたいな襟付きの服で、真ん中のフアスナーらしき物の左右に一本ずつ、左胸の辺りに曲線を重ねた様な金色の刺



繡がそれぞれ施してあった。

肩先から有る袖は腰と同じ赤茶色のベルトで固定。色は服と同じで右が黒、左が白で、肩口と袖先に三角形の金色の刺繡が有る。

また、首元には赤紫色の布をマフラーの様に巻いており、その布は地面に着くんじゃないかと思う程長い。実際に着いているのか、布の先は所々に穴が空いていた。

白いプリーツスカートの上にはボロボロの黒い布を巻き、赤茶色のベルトで固定している。

黒いオーバーニーソックスと赤茶色を基調とした、登山靴の様な厚底靴の様な靴を履いており、只でさえスタイルの良い体型が、更に綺麗に映えていた。

「……ふむ、どうやら清宮殿は恋が気になる様じゃの。」  
「えっ!？」

丁原がそう言った時、涼は何を言われたか解らず慌てて声を出した。

どうやら、丁原が勘違いする程に紅い髪の少女 - 恋を凝視していた様だ。

「……恋、オマエの妻になるの？」

「いやいや、決まってないからっ。」

恋は相変わらずポーっとしたままそんな事を言い、慌てて涼が否定した。イマイチよく解らない娘である。

「……義兄上。」

そこに、凜とした声が冷たさを含んで聞こえてきた。

聞き覚えが有り過ぎるその声を聞いた瞬間、涼は背筋が凍ったかと錯覚した。

それから涼は恐る恐る振り返り、そこに居た愛紗を確認する。清々しいくらいの笑顔なのに、涼は何故かそれを恐いと感じていた。

「……相変わらずおモテになりますねえ、義兄上。」

「そんな事は……無いと思うよ、うん。」

涼は所々言葉に詰まりながらそう答える。

その間に、雪蓮や華琳、月達もやってきた。

「あらら、競争相手がまた増えたのねー。」

「……本当に人気があるわね、涼。」

「へう……。」

約一名を除き、彼女達は皆ジトツとした目を涼に向ける。

(な……何か、皆の視線が痛い！)

涼は愛紗達の冷やかな視線にたじろぎながら、どうやってこの場をやり過ごそうか思案する。

だがそこに、丁原の笑い声が聞こえてきた。

「いやはや、流石は清宮殿じゃな。自軍の者だけでなく、他軍の者迄惹きつけるとはのう。」

「いえ……そんなつもりは無いんですが。」

丁原のその言葉に苦笑しながら涼は答える。

また、愛紗達も丁原にそう言われて冷静になったのか、はたまた却って焦り始めたのか、少なくとも涼へのジトツとした視線は無くなった。

「これは負けておられぬな、恋、霞。」

「うん……負けない。」

「呂布っち、意味解つとるか？」

紅い髪の少女に張遼が冷静にツッコミを入れる。

それを聞いた涼は、納得しながらも内心で少し驚いていた。

(さっき、丁原を“義父上”って呼んだからもしかしてとは思ったけど……この娘がこの世界の呂布なのか……。)

涼はそう思いながら再び紅い髪の少女・呂布を見る。

呂布と言えば、三国志史上最強と謳われる武将である。

何せ、「三国志演義」における虎牢関の戦いではたった一騎で連合軍を蹴散らし、迎撃にあたった劉備・関羽・張飛の三人が連携して戦っても勝てなかつた程だ。

因みに、その戦いの場面は「三英戦呂布」と呼ばれている。

(けど、この娘は強いって言うより可愛いって感じだなあ……。)

涼は呂布を見ながらそう思った。もし口に出して言っていたら、愛紗達のあの視線をまた受ける事になっていただろう。

そんな事を考えない涼は、結局いつも通りの事をするだけだった。

「まあ……結婚とかは兎も角、これからも宜しくね、張遼、呂布。」

涼はそう言いながら右手を差し出した。

「そやな。ウチは未だ結婚する気無いから、変に期待せんといてな

「……宜しく。」

張遼と呂布はそう言いながら涼と握手を交わす。  
それから二人は居住まいを正し、笑みを浮かべながら次の様に続けた。

「ほなら、改めて自己紹介や。ウチの姓は“張”、名は“遼”、字は“文遠”、真名は“霞”（しあ）や。」  
「……じゃあ恋もする。……姓は“呂”、名は“布”、字は“奉先”、真名は“恋”（れん）。……宜しく。」

名前だけでなく真名迄言ってきた二人に、涼は少なからず驚いた。

「今のつて……真名を呼ぶ事を許してくれたって受け取って良いんだよね？」

「せや。」

「……うん。」

「この世界では真名は神聖な物と聞いてるけど？」

「その通りや。そやから、ウチはアンタの事を認めたっちゅう事や。」

「……恋はオマエの事よく解らないけど、義父上が認めてるから、構わない。」

「そ、そうなんだ。」

聞き間違いでは無かった事を確認した涼は、多少戸惑いながらも、やがて自らも居住まいを正して言った。

「じゃあ、俺も改めて自己紹介を。姓は“清宮”、名は“涼”。字と真名は無いから好きに呼んでくれ。」

「了解や、涼。」

「……解った、涼。」

その言葉を受けて、張遼・霞と呂布・恋はそれぞれ、目の前に居る「天の御遣い」と呼ばれる少年を涼と呼んだ。

それを見ていた愛紗達は再びジトツとした視線を送ったが、やがていつもの事だからと諦めたらしく、彼女達も霞達と普通に接し始める。

そうなると後は早いもので、涼達は段々と和気藹々とした雰囲気になっていった。

だが、そんな涼達とは違い、何だか重苦しい雰囲気の一団が居た。

「……気に入りませんわ。」

「はい？」

「どうしたんですか、姫ー？」

金髪の巻き髪をした少女がそう呟くと、おかつぱ頭の少女とツンツン髪の少女は、キョトンとした顔でそう応えた。

「どうしたんですか、じゃありませんわよ文醜さん！ 貴女はあれを見て何とも思いませんかの！？」

「んー……アニキ達が仲良く喋っているなあと思います。」

「……それだけですの！？」

文醜と呼んだツンツン髪の少女の答えが不満だったのか、姫と呼ばれた金髪巻き髪の少女は文醜を睨み付ける。

因みにおかつぱ頭の少女は、姫と呼ばれた金髪巻き髪の少女が何を言いたいのか解った様だが、何故か小さく溜息をついていた。

「えーつと……豪華な顔触れだなあ、と……。」

「まあ……華琳様や白蓮様、それに孫策さん、董卓さんに丁原さん達が一緒だからね。」

文醜の答えにおかつぱ頭の少女も続いて答えた。すると、姫と呼

ばれた金髪巻き髪の少女は、右手人差し指で文字通り二人をビシッと指差しながら、強めの語気を更に強めた。

「そう！ そこですよ文醜さん、顔良さん！！……何故、四代に渡って三公を輩出した名門袁家の当主である私、袁本初ではなく、“天の御遣い”という胡散臭い肩書きのあの男がチヤホヤされていますの！？」

「あ……成程。だから麗羽様の機嫌が悪いのか。」

「いつもの事なんだから早く気付こうよ、文ちゃん。」 そう話す文醜・猪々子とおかつぱ頭の少女・顔良・斗詩は、金髪巻き髪の少女・袁紹・麗羽を見ながら、深々と溜息をついた。

「……二人共何ですの、その疲れた表情は。」

「そりゃ疲れますよ……。」

「文ちゃんっ。……あ、あの麗羽様、今回はかりは清宮様があの様に褒め称えられるのは仕方が無いかと……。」

「どうしてですの？」

「清宮様は十常侍の一人であつた趙忠を討つただけでなく、連れ去られた二人の皇子を助け出しました。ですから、清宮様が高評価を得るのは当然だと思いますよ。」

誰が見ても当然な結果に納得がいかない麗羽に対し、斗詩は簡潔且つ丁寧に説明をした。

普通ならこれで理解する筈だ。

だが、やはりと言うか麗羽は違った。

「そんなのは言われなくても解ってますわ。……ですが、だからと言って私が蔑ろにされる理由にはなってますせんわ。何しろこのわた・く・しは！ 大陸屈指の名門、袁家の当主なのですから……！」

「……。」

余りにもいつも通りな主人に、呆れて何も言えない斗詩と猪々子。そう、麗羽こと袁本初は、世界は自分を中心に回っていると思っているだろうなと他人が思う程、自意識過剰な少女なのだ。

「……そもそも、これでは当初の計画とかけ離れ過ぎですわっ！」  
「……当初の計画？」

「文ちゃん忘れたの？ 本来なら麗羽様と何進様の軍だけで十常侍を誅殺出来たのに、そうしなかったのは……。」

「ああ、最近力を付けてきた諸公の軍を使って十常侍の兵を削って、良い所だけかつさらおうってやつだよな。」

「……言葉は悪いけど、そうだね。」

斗詩は今日何度目か解らない溜息を、やはり深々とついた。

これ等の話から解る様に、麗羽は自軍の損耗を避けつつ諸公を損耗させ、手柄を得ようとしていた。

その為に何進を説得して諸公を呼び寄せたのだが、その何進が十常侍に討たれたり、一番の手柄を他軍に取られたりと誤算続きだった。

名門だなんだ威張っている割にセコい手を使うから、そんな結果になるのだろう。

もし、猪々子が段珪を討っていなかったら、麗羽は今以上に機嫌が悪くなっていた筈だ。

「……あ、麗羽様、あれを見て下さい。」

「何ですか？」

小さく驚いた斗詩が指差す方向に、麗羽は目をやる。そこには、歓談中の涼に近づく見知った顔があった。

「美羽さんがどうかしまして？」

「えっと、多分なんですけど……。」  
斗詩が自分の考えを麗羽に伝えている間に、美羽こと袁術は涼に声をかけていた。

「これ、清宮とやら。」  
「ん？」

後ろから少女に声を掛けられた涼は直ぐに振り返る。  
が、そこには誰も居なかった。

「あれ、居ない？」  
「どこを見ているのじゃ？ 妾はここじゃ。」

やはり振り向いた方向から少女の声は聞こえてくるが、何故か涼の視界には誰も居ない。

「声はすれども姿は見えず……。」  
「なっ！？ 失礼じゃぞっ！！」

少女の声は少し不機嫌さを含み始めた。

「……どこ？」  
「……仕方の無い奴じゃ。……見ー下ーげてーこーらんー」  
「ん？」

涼が「新喜劇？」と思いながら言われた通りに視線を下げると、そこには今日会ったばかりの少女が居た。

「確か君は、袁術だよな？」  
「そうじゃ、妾は名門袁家の一人、袁公路じゃ……って、誤魔



化すでない！ 妾の姿を見つけれぬとは失礼であろう！」

袁術は自身の背の低さをからかわれた様に感じたらしく、頬を膨らませながら涼に怒っている。

だが、怒られてるにも拘わらず、涼は平然としながらこんな事を思っていた。

（怒ってるけど、いかにも子供の癩癩つて感じで可愛いもんだな。）  
涼は袁術を普通の子供の様に見ていた。事実、この袁術の年齢は未だ十一歳だったりする。

「コラッ、そちは妾の話をちゃんと聞いておるのかや？」

「勿論、ちゃんと聞いてるよ。」

だからだろうか、涼はそう言いながら袁術の頭を撫でていた。

「にゃっ!?!」

すると何故か、袁術は驚いた猫の様な声を出した。

「どうした？」

「きゅ……急に妾の髪を撫でるでない！」

袁術は頭や顔を両手で隠しながら僅かに後ずさる。

その反応を見た涼は、「あれっ?」という表情を浮かべながら考え込んだ。

（おかしいなあ……鈴々や雫はこうすると直ぐ機嫌を直してくれるんだけど。）

何気なく自分の掌を見ながら、涼はどうしたら袁術の機嫌を直せるか考え続けた。

その間、袁術は俯きながら顔を真っ赤にしていた。

もつとも、袁術が両手で頭や顔を隠していた為、涼はその表情を確認出来なかったが。

「……仕方無いのじゃ。」

「えっ？」

暫しの間沈黙していた袁術がそう呟くと、ゆっくりと手を下ろし、涼を見ながら言った。

「妾は心が広いから、先程の無礼な振る舞いは水に流してやるのじや。有り難く思ふのじゃぞ」

「う、うん。有難う？」

袁術の表情の変化に涼は少し戸惑いながらも、どこかホッとしていた。

（マセた事言ってるけど、やっぱり子供だなあ。直ぐに機嫌が直ったよ。）

そう思いながら、自然と微笑む涼。

そんな涼を見て、袁術も更に微笑む。何故か顔を紅らめながら。

「と、ところで清宮よ、名前は何と言ったかえ？」

「涼だよ。」

「涼かえ。なら、字と真名は何なのじゃ？」

「俺はこの国の人間じゃないから、字も真名も無いよ。」

「そう言えばお主は“天の御遣い”じゃったの。……で、では、どう呼べば良いのかの？」

袁術は何故か口ごもりながら訊ねる。  
それを涼は袁術が遠慮してるのかと思いながら、笑顔のまま答え  
た。

「袁術が好きに呼ぶと良いよ。」

「そ、そうかえ？ ……な、なら、涼と呼ぶ事にするのじゃ！」

袁術は右手を挙げながら、笑顔でそう宣言する。

だが直ぐにまた口ごもりながら、上目遣いで続けた。

「な、なら……妾の事も真名で呼んで良いのじゃ。」

「良いの？」

「妾が良いと言っておるのじゃから、勿論良いのじゃ。」

「解った。じゃあ改めて自己紹介を頼むよ。」

涼がそう言うと、袁術は笑顔になって居住まいを正し、言葉を紡  
いだ。

「妾の姓は“袁”、名は“術”、字は“公路”、真名は“美羽”な  
のじゃ！ 気軽に美羽様と呼ぶが良いぞ。」

「解った。宜しくね、美羽ちゃん。」

涼が袁術・美羽に笑顔でそう言うと、美羽もまた頬を朱に染めた  
笑顔を返してきた。

と、そこに、聞いた事のある間延びした声が聞こえてきた。

「御嬢様どこですか？」

涼と美羽が声がした方を見ると、そこには張勳の姿があった。ど  
うやら美羽を捜しているらしい。

「七乃ー、妾はここじゃー。」

美羽が右手を振りながら呼び掛けると、張勲は直ぐ気付き、小走りで駆け寄ってきた。

「捜しましたよ、美羽様。迷子になったのかと思って心配してました。」

「それは悪かったの、七乃。……そうじゃ、折角じゃから七乃も涼に自己紹介すると良いのじゃ。」

「自己紹介、ですか？」

美羽にそう言われた張勲は、キョトンとしながら美羽と涼を交互に見る。

「そうじゃ 因みに妾は真名を涼に預けた故、七乃も預けると良いのじゃ。」

「はあ、真名を預ける、ですか……って、ええっ!? 美羽様、清宮さんに真名を預けたんですかっ!？」

「だからそう言っておるではないか。聞こえてなかったのかえ？」

美羽はそう言いながら呆れた様な表情で張勲を見る。

その張勲はと言うと、苦笑しながら二人の顔を交互に見続けた。

「聞いていたからビックリしたんですよ。……けど美羽様、そんな簡単に真名を預けちゃって良かったんですか？」

「涼は妾が認めた人物じゃから構わないのじゃ。」

「なら良いんですけどね。」

そう言っつて張勲はチラッと涼を見る。

視線に気付いた涼は何故か苦笑していた。

「えっと……無理に真名を預けてくれなくても良いですよ。この国の人間じゃない俺でも、真名がどういふものかは解っていますから。」

涼が苦笑していた理由は、単に張勲に気を遣っていたからだだった。それに気付いた張勲は、不意に可笑しくなった。

「天の御遣い」と呼ばれ、義勇軍の象徴であり、今回最大の功勞者である涼が、美羽の側近とは言え今回手柄らしい手柄を得ていない自分を氣遣っている事が、何故か可笑しかったのだ。

そして、同時に理解した。そんな涼だからこそ美羽が真名を預けたのだと。

(まあ、勢いで預けた可能性も有りますけどねー。)

……寧ろ、そっちの方が可能性が高いかも知れない。

とは言え、張勲の心は既に決まっていた。

「美羽様が真名を預けていらっしゃるのに、家臣の私が預けない訳にはいきませんよ。」

「良いんですか？」

「はい、良いですよ。」

涼が確認すると、張勲はニツコリと微笑みながら答えた。

「解りました。では、自己紹介をお願いします。」

「はい。私の姓は“張”、名は“勲”、字は“玲源”、真名は“七乃”。我が主袁術共々、宜しく願います。」

自己紹介をしながら軽く会釈をする張勲・七乃に対し、涼もまた

改めて自己紹介をした。

それから三人は、暫くの間歓談した。何の変哲もない話から、それぞれの価値観やら何やらを話していった。

難しい話になると美羽の頭に「？」マークが浮かんでいたが、涼達は構わず続けた。

どうやら、涼も七乃も美羽で遊んでいた様だ。

その様子を見ていた三人・袁紹、斗詩、猪々子は三者三様の反応を見せる。

「……み、美羽さんは何をしていますの！？ あんな簡単に真名を預けるなんて！！」

「ですから、さっき説明したじゃないですかあ。“天の御遣い”である清宮さんと、繋がりを持ちたいんじゃないかって。」

「ほえー、アニキって本当に人気なんだなあ。あの美羽様がすっかり懐いてるよ。」

猪々子が感心した様な声を出している隣で、袁紹は斗詩に詰め寄りながら説明を受けている。

やがて、斗詩が何度も説明して漸く理解したのか、袁紹は難しい顔をして考え込んだ。

「むむむ……美羽さんがそんな事を考えていたなんて……やりませわね。」

「何がむむむですか……。兎に角、麗羽様も清宮さんに真名を預けた方が良いかと思えますよ。」

「嫌ですわ！」

「即答ですか！？」

「名門袁家の当主たるこの私が、あんな男に何故真名を預けなければならぬのです？」

「ですからそれは、さっき説明したじゃないですかあ。」

「そうでしたわね。ですが、理解はしましたけど、納得はしていま

せんわ！」

「そんなあ……。」

袁紹がそう断言すると、斗詩は頭を押さえながら深々と溜息をついた。

周りの者が皆、「天の御遣い」の威光を利用としている中、袁紹だけが利用しないのは明らかに間違っている。

これから先、何が起こるか解らないのだから、保身の為の手段は取れるだけ取っておくべきだ。

斗詩はそれが解っているだけに、憂鬱な表情を浮かべる。

(私、益々苦勞しそうだなあ……。)

その内、胃に穴が開きそうな程苦勞性な斗詩だった。

結局、祝勝会は夜遅く迄続いた。

そんな時間になっても、涼の周りには「天の御遣い」の威光を得ようとする者や、単に傍に居たいという者がひっきりなしに現れる。

お陰で、祝勝会が終わった時の涼の顔には疲労の色が出ていた。

そうして祝勝会が終わり、涼達が祝勝会会場を出た時、月と詠が涼達に話しかけてきた。

どうやら二人も帰るところらしく、涼達は話しながら歩いていった。

「……では、清宮さん達は明日にはもうお帰りになるのですか？」

「ああ。未だ張讓が見つかっていないとはいえ、十常侍は事実上居なくなった。なら、後は洛陽に駐留する軍だけで何とか出来る筈だからね。」

「……そうですね。それに清宮さんは徐州の州牧になる訳ですし、これから忙しくなりますものね。」

「あー……その事なんだけど……。」

月がそう言うと、涼は何故か口ごもった。  
頬を人差し指でポリポリと掻きながら、暫く中空に視線を漂わせ、やがて月と詠を交互に見ながら小声で言った。

「これは内緒なんだけど……実は、州牧になるのは俺じゃなくて桃香なんだ。」

「えっ？」

「……何でそうなる訳？」

内緒と言われたからか、月と詠も小声になっていた。

「弁皇子……いや、もう即位されたから少帝だね。その少帝は今回の恩賞として俺を州牧にしてくれるって仰って下さったけど、俺はそれを断ったんだ。」

「ええっ!？」

「月っ、声が大きいわよっ。」

詠に言われて、慌てて月は両手で口を塞いだ。

幸いにも、今涼達の近くには誰も居ない。

最も話を聞かれてはいけない桃香達は、涼達の前方、少し離れた所に固まって歩いている。

涼が月と詠と話し始めた時、桃香達は空気を読んで少しだけ前を歩き始めた。

内心は色々複雑だっただろうが、義兄、もしくは主君や友人の邪魔はしたくないという気持ちだけが僅かに勝った様だ。

勿論、護衛の任は忘れておらず、愛紗や鈴々、そして時雨達は桃香の護衛をしつつ、涼に不審者が近付いてこないか警戒している。

そんな中、愛紗は月の声に反応して振り向いたが、話の最中だと確認すると再び前を向いて歩き出した。

涼達はそれを確認してから話を再開する。



「……それで、辞退したのはどういう訳なの？」

「理由は簡単、義勇軍の総大将は桃香だからさ。なので、俺じゃなくて桃香 - 劉玄德を州牧にして貰う様に頼んだんだ。」

「そして、少帝はそれを認められたのですね？」

「ああ。そもそも桃香は中山靖王劉勝の末裔だから、自分より州牧に相応しいだろうしね。」

「天の御遣いだって相応しいでしょうに。」

「それに、何だかめんどくさそうだし。」

「それが本音か！」

涼の一言に的確なツッコミを入れる詠と、苦笑する涼。

月はそんな二人を見ながら微笑んでいた。その笑みに僅かに影が差していたのは、月自身は勿論、涼と詠も気付かなかった。

やがて、月と詠の宿舎前に着いた。涼達の宿舎はこの先に在るので、月達とはここで別れる事になる。

「結果的に送って貰っちゃいましたね。皆さん、有難うございます。」

「どう致しまして　まあ、どうせ通り道なんだし、気にしないで  
良いよ。」

涼が笑顔でそう返すと、月もまた笑顔を見せる。

それと同時に、愛紗達や詠が少しだけ不機嫌になるのは、最早日常茶飯事にも等しくなっていた。

「それでは皆さん、お休みなさい。」

「ああ、お休み。また明日ね。」

涼と月、そして各々がそれぞれ挨拶を交わし、涼達は再び帰路に

就く。

月と詠は、涼達の後ろ姿を見送ってから宿舎に入ってしまった。その途中、二人は何か話していたが、その会話を聞いた者は誰も居なかった。

翌日、宿舎に居た涼達は幽州への帰り支度をしていた。

「何か、お手伝いしましょうか？」

そこに言いながら現れたのは、私服姿の月だった。

いつもの服装とは違い、白と淡い桃色で構成された長袖ロングスカートのワンピースを着ている。

「有難う、月。でも殆ど終わってるから大丈夫だよ。」

「そうですか……なら、少し早めに来れば良かったですね。」

月はそう言いながら微笑んだ。

その笑みは美しく、涼は思わず見とれてしまいそうだったが、どこか違和感を感じてもいた。

それが何か考えていると、そこに、やはり私服姿の詠がやってきた。

「月、やっぱりここに居たのね。」

そう言った詠の私服は月と同じ色の長袖のワンピースだが、スカートが黒のミニスカートになっている。

どうやら走ってきたらしく、詠の息は少し乱れていた。

「あつ、詠ちゃん。ひよつとして、何かあったの？」

「別に何も無いけど……出掛ける時はちゃんと言付けてからにしてよね。急に居なくなっただから、心配したじゃないの。」

「へう……ゴメンね、詠ちゃん。」

詠に注意された月は、俯きながら謝った。すると今度は、詠が慌てながら月を元気付けだした。

（本当に詠は月に弱いなあ。）

と、涼が思いながら見ていると、それに気付いた詠が慌てて居住まいを直し冷静さを保とうとした。

今更手遅れなのは誰が見ても判るのだが。

その後、帰り支度を終えた涼達は休憩がてら少し話をした。

その内容は、お互い時間が出来たらゆっくりと遊びたいという、たわいもない話。

そう、たわいもない話の筈だった。少なくとも涼にとっては。

十数分後、休憩を終えた涼達は、部隊に洛陽の正門に先行する様指示してから、少帝に別れの挨拶をする為に宮中に向かう準備をした。

「じゃあ月、詠、また今度ね。」

「はい。清宮さん達もどうかお元気で。」

「ま、無事を祈っておいてあげるわ。」

涼は二人と別れの挨拶を交わしてから、桃香達と共に宮中へと向かった。

月と詠は涼達が見えなくなる迄見送ってから、ゆっくりと帰り出す。

その最中、詠が静かに口を開いた。

「良かったわね、月。」

「うん……最後に私服姿を見て貰えて、本当に良かった。でも……。」

「

「…………でも？」

俯く月に詠が訊ねると、月は一度目を閉じてから呟く様に答えた。

「…………出来れば、このまま残って私を…………“殺してほしかった”な…………。」

月がそう呟いてから約半刻後、少帝への別れの挨拶を済ませた涼達は洛陽を離れた。

その少帝との面会時に、州牧になるのが桃香だとバレてしまったが、少帝の決定に桃香が口を出せる訳が無く、その場は大人しくしていた。

結局、涼は幽州への帰路に就いてからずっと、桃香の恨み節を聞き続ける事になる。

因みに、涼の様に洛陽から本拠地へと直ぐ戻ったのは、華琳と孫堅・雪蓮の二組。

袁紹や美羽、そして遅れてきた丁原や月達は、そのまま残って張讓や十常侍派を掃討する為に兵を動かしている。

黄巾党の乱、十常侍誅殺と続いた動乱も、漸く終わろうとしていた。

一方、幽州に戻った涼達は義勇軍を解散させていた。

これは、義勇軍の総大将である桃香が徐州の州牧になる為、今迄の様に幽州で暮らすか、各々の地元に戻るか、桃香達について徐州に来るかかの判断を任せる為である。

その結果、殆どの者が桃香達についてくる事になり、その後、幽州での引き継ぎを終えた涼達は、一万二千以上の兵やその家族を伴う事になった。

「気を付けてな、桃香。」

「有難う　白蓮ちゃんも元気だね！」

涼達は白蓮とその部下達に見送られ、新天地である徐州へと向かっていった。

## 第十章 徐州の日々（前書き）

義勇軍の大将から正規軍の大将へ。

図らずも州牧になった桃香・劉備は、仲間と共に政務に取り組んでいた。

だが、彼女達には様々な問題があった。

その一つは……。

2010年8月8日更新開始。

2010年10月3日最終更新。

## 第十章 徐州の日々

徐州は幽州の南東、豫州の北東、そして洛陽の遙か東に在る州である。

東には海が在り、周りを他州に囲まれているものの、平原の中に丘陵が点在している為、古くから要害の地として数多の戦乱に巻き込まれてきた。

また、漢王朝の初代皇帝、劉邦の故郷である沛県が在り、その宿敵、項羽の本拠地、彭城は徐州のかつての名前でもあった。

その徐州の州牧となった劉備玄德・桃香は、軍師達に助けられながら慣れない州牧の仕事をこなしていた。

「桃香様、次はこの書簡に目を通して下さい。」

「桃香ちゃん、これが住民からの要望を纏めた書簡。後で見えておいてね。」

「桃香様、兵士達の訓練について一つ案が有るのですが……。」

「桃香、この間討伐した賊が持っていた宝物の扱いなんだが……。」

「桃香お姉ちゃん、たまには街に行ってみるのだ。」

だが、ひっきりなしに仕事が舞い込んでくるので、毎日目を回していたりする。

「……そう言えば、涼義兄さんはどうしたの？」

「清宮様なら、陶謙様からの引き継ぎの仕上げをしています。」

「そっかあ……引き継ぎって未だ終わってなかったんだよね。」

腕と背筋を伸ばしながら、桃香は呟く様に言った。

陶謙とは徐州の前太守の事で、自身が高齢だった事と適格な後継者が居なかった事もあり、少帝の勅書が届けられると徐州を快く桃

香に譲った男性である。

陶謙は善政を行っていた為に民に慕われており、今も尚その引退を惜しむ声は多い。

その為、桃香は陶謙以上の政治をしなければならぬという重圧がのしかかっている。

そんな桃香の負担を減らすべく、涼や愛紗、雪里達は皆力を合わせて頑張っているのだ。

その甲斐あつてか、徐州に来てから未だ約二週間だが、少しずつ民達の信頼を得てきている。

「ただいま。」

噂をすれば影とやらで、涼が桃香達の居る執務室に戻ってきた。

「涼義兄さん、お帰りなさい。陶謙さんからの引き継ぎは終わったの？」

「ああ。雪里、一応確認はしたけど念の為見ておいてくれないか。」「解りました、では早速取り掛かります。」

涼から引き継ぎに関する書簡を受け取った雪里は、涼と桃香に一礼してから執務室を後にした。

「お疲れ様、今お茶淹れるね。」

「有難う、桃香。」

そう言つて桃香は茶棚から茶器を取り出し、火鉢の上に置いていた薬缶のお湯を湯飲みに注いだ。

二人はそのお茶を飲みながら話し出した。

「ふう、最近仕事山積みで肩が凝つてキツイから、こうして休憩しながらお茶を飲んでると、心がすつごく落ち着くんだよねえ。」



「桃香の肩が凝ってるのは、別の理由も有るんじゃないか？」  
「……涼義兄さんのスケベ。」

次の瞬間、二人は殆ど同時に笑い出した。

仕事続きで緊張しまくっている桃香に、こんなフランクな物言いが出来るのは、桃香の義兄であり州牧補佐の任に就いている涼だからこそだろう。

まあ、余りやり過ぎるとセクハラになるが、この世界にそんな概念が有るかは涼も知らない。

「それで、陶謙さんは何て仰ってたの？」

「自分も出来る事が有ったら力になるので、遠慮無く言っして下さい、だつてさ。」

「そつかあ。実際、まだまだ陶謙さんにも助けて貰わないといけなし、そう言っつて貰うと助かるよね。」

桃香は飲み干した湯飲みを台に置きながらそう言った。

陶謙は実質的に引退したものの、前述の通り影響力は大きい。

そこで、自分達で徐州を治めきる迄は陶謙の助力を得る事にした。本当なら最初から自分達でやるべきだが、如何せん涼達には未だ人材が足りていない為、余り勝手な事は出来ないでいる。

「それで、これからの方針としては、人材確保が急務……なんだよね？」

「ああ。武将としては愛紗達が、軍師としては雪里達が居るけど、まだまだ足りない。義勇軍のままならまだしも、徐州軍としてだと今の人数じゃ話にならないかな。」

「そうなんだよねえ……私達、正式な軍隊なんだよねえ……。」

桃香が徐州の州牧になった為、桃香についてきた旧義勇軍はそのまま徐州軍に編入された。

その結果、元々居た徐州軍と合わせて兵数は五万を超えたが、元々から将や軍師の数は少なく、また質も余り高くなかったらしく、陶謙の意向もあつて徐州軍の編成は旧義勇軍を中心に行われた。なので、現在の徐州軍は旧義勇軍の時と同じく筆頭武将を愛紗が、筆頭軍師を雪里が務めている。

「少しは良い人材が居るかと思つただけだな。」

「愛紗ちゃんも雪里ちゃんも、余り良い顔はしてなかったもんねー。」

「ああ。さて、どうやって人材を集めるかな……。」

涼はそう呟きながら残つたお茶を飲み干す。

残つていた茶渋も口に入つたので、思わず苦い表情になつたが、それは図らずも現在の心境とリンクしていた。

州牧補佐である涼にとつても、問題解決は急務なのだ。数分後、休憩を終えた涼は桃香に労いの言葉を掛けてから執務室を出ると、その足で人材確保について相談する為、雪里達が居る軍師室に向かった。

（まあ、そんな良策が有るならとくにやってるだろうけどね。）

そう考えながら涼は軍師室の扉を開く。

中では雪里と雫、二人の軍師が、先程涼から受け取つた書簡の確認をしていた。

「あつ、清宮様。」

「どうかありませんでしたか？ 陶謙殿の書簡についてなら、只今確認中ですが……。」

「いや、その事じゃないんだ。その……人材について、ね。」

「ああ……成程。」

雪里は涼のその言葉だけで意味を理解したらしく、読んでいた書簡を置いて涼の話を聞く事にした。

「結論から言えば、人材確保の為の有効な手段と言うのは有りません。」

「いきなり落胆する事を言うね。」

「事実ですから仕方有りません。」

話の始めからそう言われて、涼は苦笑するしかなかった。

「勿論、出来る限りの事は全てやっています。ですが、善政をしていた陶謙殿の許にさえ余り良い人材が居なかった事を考えると、樂觀視は出来ないと思います。」

（だよなあ……。 “ 本当なら居る筈の人材 ” も何故か居なかったし……。）

涼が知っている三国志の通りなら、この徐州に数人は良い人材が居る筈だ。

只、そもそもここは涼が知っている世界とは違つので、居るべき人材が居ないのも納得出来なくはない。

ひょっとしたら、何れ見つかるかも知れないが。

（そもそも、本来なら劉備が徐州に来るのは反董卓連合の後だしな……。 まあ、この世界の董卓……：月が悪い事をする訳無いし、この流れは正しいんだろうな。）

そう考えながら、涼は雪里と共に人材確保の為の良策が無いか話し合った。

勿論そう簡単に見付かる訳は無く、気付けば数刻の時間が過ぎ去っていた。

「あ、いつの間にかこんな時間か。」

涼は左手首に付けている腕時計を見ながら呟く。

この世界に正しい時間を計る時計は無く、この腕時計に今表示されている時刻も元の世界のものだが、時間経過は判るので意外と重宝している。

因みにこの腕時計は太陽光による充電が可能なので、電気が無いこの世界でも電池切れを起こす事は無い。序でに言うと完全防水なので濡れても平気だ。

「結局、清宮殿の世界に在る“はろーわーく”の様に求人募集をするしか手は無い様ですね。」

「だな。……それしか思い付かなくてゴメンな。」

「いえ、求人募集や職の斡旋を専門とする組織を作るという“あいであ”だけで充分ですよ。」

「そうなのか？」

「ええ。これが上手くいけば人材の確保だけでなく、“はろーわーく”に勤める者が生活の糧を得る事も出来ます。また、職にあぶれる者も減りますし、それによって治安も安定するでしょう。今迄私がかしてきた人材確保の策より、一石何鳥にもなる良策ですよ。」

「そう言われると何だか照れるな。」

雪里が笑みを浮かべながらそう言ったので、涼は思わず照れ笑いをする。

そしてそのまま「ハローワーク」や元の世界について考えた。

涼の世界の「ハローワーク」は雪里が言う程万能では無いだろうが、それなりに機能しているし、実際に治安は先進国の中ではダントツに良い。

そうした事例を鑑みると、雪里の喜び様は間違っていないのだろ

う。

「じゃあ、“ハローワーク”については後で詳しく説明するから、施設の建築や人員については雪里と雫に任せても良い？」

「はい。」

「大丈夫です。」

涼の問いに、雪里と雫は同時に頷きながら答えた。

「ですが、天界の名前のままでは私達は兎も角、民に解り難いでしょう。何か別の名前を付けなくては。」

「それもそうだな。この国には横文字が無い訳だし。」

「横文字……？」

横文字という聞き慣れない言葉に二人はキョトンとした。

だが、横文字が所謂天界の言葉だと説明されると、納得した表情になった。

「では清宮殿、“はろーわーく”の此処での名前は何にします？」

「そんな事を急に言われても、良い名前が思い付かないよ。」

「それもそうですね。……雫、貴女は何か思いついたかしら？」

「いえ、私も何も……只……。」

話を振られた雫は申し訳なさそうに俯きながら答えたが、その口からは未だ続きが有る様だ。

「只……何かしら？」

「変に奇異を銜った名前にするより、先例に倣った名前にした方が却って良いと思うのです。」

「それもそうね。なら……“招賢館”と言う名前はどうでしょうか

「？」

「“招賢館”……何だか聞いた事が有る名前だな。」

「清宮殿は“楚漢戦争”についての知識もお持ちでしたね。でしたら当然知っておいでです。」

「“楚漢戦争”……ああ、“韓信”のあれか。」

「楚漢戦争」と言われて、涼は漸く思い出した。

楚漢戦争、つまり漢王朝成立前の統一戦争で漢軍の大元帥として活躍したのが「韓信」だった。

韓信は元は漢の敵国である楚の一軍人だったが、楚の霸王項羽はその才を正當に評価せず、更には楚の軍師范増によって殺されようとしていた。

そこで韓信は楚の都尉である陳平や漢の軍師である張良の助けを借りて一足早く楚を離れ、漢が当時統治していた蜀へと亡命する。

その地で「招賢館」という才有る人物を求める施設を見つけた韓信は、張良から渡されていた割符を見せて簡単に重職に就く事を一時止め、自らの手で才を認めて貰う事にした。

「……そして、招賢館の責任者である夏侯嬰が口に出した書の文を一字一句間違えずに答えて夏侯嬰を驚かせ、翌日会った丞相の蕭何をも感服させた。……で、良いんだよね？」

「はい。その後、漢の大元帥となった韓信は楚軍を悉く打ち破り、漢王朝成立の立役者となったのです。」

だがその後、韓信はその戦功を認められながらも良い晩年を送れなかつたらしい。

「雪里は韓信の様な逸材が来る事を願って、招賢館と名付けたいのか？」

「韓信の様な逸材中の逸材はそう現れないでしょうが、験を担ぐ意

味ではその通りですね。」

「ですがその名前だと、求人は兎も角、職の斡旋もする施設とは思われないのではないですか?」「それは、施設の入り口前に説明文を書いた立て札を立てる事で解決出来るわ。」

「成程。」

「じゃあ、決まりかな?」

涼が確認を込めてそう言うと、雪里と雫は頷いて答えた。

それからの二人の行動は素早かった。

徐州軍の武器・資材調達兼土木官となっていた葉と景に命じ、「はるーわーく」こと「招賢館」の建築を始めさせる。

勿論、施設が直ぐに出来る訳では無いので、暫くは今迄通りのやり方で人材を探していった。

そして約一ヶ月後、遂に招賢館が完成した。

木造二階建てのこの施設は、大まかに言うと一階が一般的な仕事を斡旋する場所、二階が軍の求人募集の場所になっている。

一階には、涼が居た世界の様にパソコンで仕事を検索する等はお出れない為、街のあちこちで募集している仕事の内容を纏めて書いた竹簡を台の上に並べている。

勿論、専門の人間を待機させて相談を受けたりアドバイスをしたりもしている。

二階は基本的に複数の担当者を待機させて、希望者が来た場合は直ぐに面接を行っていく。

そうして良い人材が見付かれれば登用し、もし不合格だった場合には、一階で他の仕事を見つけた様に促した。

そうして、更に一ヶ月が過ぎていった。

「それじゃあ、次は人材についての報告をお願いします。」

軍議室で各々からの報告を受けている桃香が次の報告者を指名し、その報告者・雪里がゆっくりと立ち上がる。

雪里は手元に有る竹簡を時々見ながら、ハツキリとした声で話し始めた。

「はい。私達が徐州に来て以来、軍の再編成及び新人の登用や育成を行つて来ました。その甲斐あつて徐州軍の兵数は七万を超え、それ等を率いる将や補佐する文官の数も順調に増えています。」

「ほう。これはやはり、招賢館が機能しているという事なのか？」

「はい。愛紗殿の仰る通り、招賢館が出来る前後で登用した人材の数が大きく違います。また、それに伴つて労働者の殆どがきちんと仕事に就いている為、民の生活が安定し、結果的に治安も良くなつています。」

「お陰で鈴々は暇なのだ。」

「だが、俺達が暇なのは良い事だぞ。」

「それは解つてるのだ。けど、暇過ぎてお腹があんまり減らないのだ。」

「それで何であんなに食べられるのよ……。」

鈴々の言葉に時雨と地和がそれぞれ反応する。

因みに、鈴々と時雨、地和の三人は徐州軍の部隊だけでなく、街の警邏も担当している。それだけ人材が居なかつたのだ。

人材が増えてきた今は鈴々達が警邏をしなくても良いのだが、まだまだ安心出来ないのか、はたまた街のおじちゃんやおばちゃんがかかる点心が目当てなのか、鈴々は警邏を続けている。

その為、必然的に時雨と地和も警邏を続ける事になった。

「……まあ、それは確かに良い事なのですが……。」

「何か問題が有るの？」

桃香が訊ねると、雪里は頷きながら竹簡に目を落とし、話を再開した。



「確かに人材は集まりましたが、私は余り納得していません。」

「ふむ……何故だ？」

「将にしる文官にしる、最低限の能力を持った者ばかりで、飛びつきり優秀な人材は残念ながら未だ登用出来ていないからです。」

雪里がそう言つと、愛紗を始めとした将や文官達は皆一様に表情を暗くした。

どうやら、皆も同じ感想を抱いていた様だ。

「……まあ、こればかりはどうしようも無いからなあ。」

「清宮殿の仰る事も解りますが、やはりもう少し優秀な人材が欲しいところですよ。」

「これから先の事を考えると、人材はどれだけ居ても多過ぎる事は無いですし、優秀なら尚良いですからね。」

雫がそう言つと、やはり皆一様に頷いた。皆も同じく優秀な人材が欲しいのだ。

「涼義兄さん、何か良い方法って無いかなあ？」

桃香は左隣に居る涼に訊ねる。すると涼は、難しい表情のまま髪を掻きながら答えた。

「有つたらとつくにやってるよ。まあ……敢えて言うなら、宣伝をする事かな。」

「宣伝？」

涼の言葉に桃香はキョトンとしながら聞き返す。

涼はそんな桃香と、涼に注目している愛紗達を見ながら説明を始めた。

「要するに、俺達が人材を求めているって事を徐州全体は勿論、豫州や青州といった他州に広めるんだ。そうすれば、他州に活躍の場が無い人材がこちらに流れて来る可能性が高くなる。」

「ですが、その様な人材はやはり余り優秀な人材では無いのでは？  
また、我々が人材を集めている事を他州の州牧達が知ったら、却って人材を穫られてしまうのではないですか？」

「確かに愛紗の言う通りだと思う。けど、徐州内の人材だけで足りないのなら、余所からも捜すしか無いよ。」

涼のその言葉に愛紗は勿論、雪里達も頷くしか無かった。

結局、人材確保については招賢館と他州からの来訪に頼るという方針に決まった。

それから数日後、桃香と涼が居る執務室に雪里が訪れた。

「実は、少しお暇を戴きたいのですが。」

雪里がそう話を切り出したので、桃香は涙目になりながら慌てて言った。

「わ、私、何か雪里ちゃんに酷い事したかな！？ もししてたなら謝るから、どこにも行かないでっ！っ！」

「えっ？ …… ああ、いえ、そうではなくてですね、人材を捜しに旅に出たいと思ひまして、お暇を戴きたいと申しただけで……。」

雪里が説明すると、桃香は自分の勘違いに気付き顔を真っ赤にした。

涼はそんな桃香を見てから、雪里に訊ねる。

「捜しに行くって言うけど、当ては有るのかい？」

「はい、荊州の隆中に私と同じ私塾に通っていた者が居ます。その

者なら、必ずや桃香様や清宮殿のお役に立てる筈です。」

「けど、荊州つてかなり遠いよ？ 何人くらい兵の皆さんを連れて行くつもりなの？」

「いえ、一人旅の予定ですが。だからお暇を貰いたいと申した訳ですし。」

「ええっ!？」

あっけらかんと言った雪里に対し、桃香は大袈裟過ぎる程に驚いた。

だが涼は比較的冷静に雪里の言葉を受け取り、向き直って再び訊ねる。

「まあ、桃香が驚くのも解るけど、雪里の事だから無事に戻って来れる自信が有るんだよな?」「勿論です。お忘れかも知れませんが、私は皆さんと行動を共にする前は一人旅をしていたのですよ。」

「そ、それはそうだけど、雪里ちゃんは武将じゃなくて文官だし……。」

「御安心下さい。私とて身を護る術は心得ていますし、実際に人を斬った事も一度や二度ではありませんから。」

「そ、そうなんだ……。」

またも衝撃的な事をサラッとと言う雪里に、桃香は苦笑するしか出来ないでいる。

だが涼はやはり比較的冷静に受け止めていた。勿論、「三国志」を知っているからの冷静さなのは間違いない。

「……解った、雪里の一人旅を許可しよう。」

「涼義兄さん!？」

「大丈夫だよ、桃香。雪里は無謀な事を言い出す様な娘じゃない。ちゃんと無事に帰って来るよ。」

「涼義兄さんがそう言うなら……。けど雪里ちゃん、幾ら慣れていても絶対に無茶しちゃうダメですからね！」

「はい、肝に命じておきます。」

涼と桃香の許可を貰った雪里は、恭しく平伏してから退室し、旅支度をしに自室へと戻っていった。

そして翌日の早朝、雪里は涼達に挨拶をしてから荊州へと旅立った。

真面目な彼女らしく、前日迄に残っていた仕事は全て片付けていた。

一時的とは言え筆頭軍師が居ないので、その間は副軍師の雫が筆頭軍師代理となり、政務や招賢館に来る人材の面接を取り仕切った。そんなある日、招賢館に二人の少女が訪れてきた。

「暫く離れている内に、色々と変わっているみたいね。」

「そうね。そもそも、州牧からして違うし……。」

「まあ、善政を行ってくれるのなら、誰が州牧でも構わないけど。」

「フフ……貴女らしいわね。」

その二人の少女は、招賢館の待合室の椅子に座りながら談笑をしている。

前の人の面接が未だ終わらない為、空いた時間を使って喋っている様だ。

そうしていると、面接を受けていた人物が面接室から出て来た。

溜息を吐いている事から察するに、芳しくない結果だったらしい。

「それでは次の方、どうぞ。」

その面接室から一人の女性が出て来て、次に面接を受ける者を呼んだ。

「あの、私達姉妹なんで出来れば一緒に面接して頂けないでしょうか？」

「……通常は一人ずつ面接をしているのですが……少々お待ち下さい、面接官に伺ってきます。」

女性はそう言って面接室に戻り、それから一分もしない内に戻ってきた。

「二人でも大丈夫だそうです。どうぞ中へ。」

女性がそう言うと、二人の少女はゆっくりと面接室に入っていく。中には面接官の栗が一人座って待っていた。

「どうぞお掛け下さい。」

栗が目の前に在る二つの椅子に手を向けながらそう言うと、二人の少女は一礼してから着席した。

「では、先ずはお二人の名前と出身地をお聞かせ下さい。」

「はい。私の名前は麿竺、字は子仲。東海郡の出身です。」

「自分の名前は麿芳、字は子方。姉である麿竺と同じく、東海郡の生まれです。」

「麿竺さんに麿芳さんですね。……あれ、ひよつとしたらお二人は、前徐州州牧の陶謙殿に仕えていた麿姉妹ですか？」

栗が面接用の竹簡に二人の名前を書いていると、途中で何かに気付いたらしく、二人の少女・麿竺と麿芳に尋ねた。

すると、姉である麿竺が居住まいを正しながら答えた。

「はい、確かに私達は以前陶謙殿にお仕えしておりました。」

「やはりですか。……以前、陶謙殿が仰っていました。『糜姉妹が残って居れば、劉備殿もきつと喜ばれた事でしょう。それだけあの姉妹は優秀でしたから。』と。」  
「勿体無いお言葉です。」

雫の言葉を聞いた糜竺は恭しく平伏した。

まるで目の前に陶謙が居るかの様だ。

「確か、黄巾党征伐後に軍を辞めて旅に出たと聞きましたが、何故また徐州軍に？」

「元々、ある程度見聞を得る事が出来たら戻るつもりでした。勿論、一度軍を辞めている訳ですから、一からやり直す覚悟は出来ていません。」

雫が尋ねると、糜竺は真っ直ぐに雫を見つめながら、淀みの無い口調でそう言い切った。

次に雫は、糜竺の考えを知る為に向き直って尋ねてみた。

「成程……姉君はこう仰っていますが、糜竺さんはどう思っているのですか？」

「個人的には、元徐州軍の一員だったって事で、また一武将として用いて貰いたいんですが……。」

「私達は一度軍から離れた身なのです。それを忘れてまた武将として取り立てて貰う等、厚かましいにも程があります。」

「……と言っている姉の意見は尤もだと思つので、自分も姉と同じで良いです。」

糜竺は苦笑しながらそう答えると、頬をポリポリと掻き始めた。

雫はそんな糜竺と糜竺を見比べながら考えを巡らす。

(……対照的な姉妹ですね。個人的には糜竺さんだけを採用したい

「氣もしますが……今は一人でも多くの人材が欲しい時。贅沢は言っていないかもしれませんね。」

結局、雫は糜竺と糜芳を二人共採用した。

糜竺と糜芳が徐州軍に採用された翌日、招賢館に新たな人材が現れた。

「……陳珪さんに陳登さんですか。」

雫は、目の前に居る妙齡の女性・陳珪から受け取った書簡を見ながら、確認する様に呟く。

「はい。私達は以前陶謙殿にお仕えしていましたが、私は病気になるだったので療養の為に、この娘は私の看病の為にそれぞれ軍を辞めたのです。」

「成程……。それがこうして招賢館に来られたという事は、お身体の方は心配無いと考えて良いのですね?」

「はい。私は復調する迄長く掛かると思っていたのですが、華佗という旅の医者に診て貰ったところ、直ぐに良くなりました。」

「へえ……。それ程の名医ならば、我が軍で取り立てたいですね。」

陳珪の話聞いて興味を持った雫は何気なく、だが本気でそう思った。

名医が一人でも多く居れば、君主や将兵の病気や怪我の治療は勿論、街で流行り病が起きた時に、いち早く対処出来るからだ。

「そうですね。……ですが恐らく、登用する事は出来ないでしょうね。」

「何故です?」

「あの医者は、出来るだけ沢山の患者を助ける為に旅をしていると

仰っていましたから、一ヶ所に留まる様な事はしないと申しますよ。

「陳珪がそう言つと、雫は残念そうな顔をしながら諦めた。

話を聞く限り、華佗は是非とも欲しい人材だが、だからといって無理矢理登用する訳にはいかない。

世の中には無理矢理登用する者も居るが、雫は勿論ながら桃香や涼もそんな事はしない人間だ。

「それなら仕方有りませんね。……話を戻しますが、お二人は一度辞めていきますから、役職についてはこちらで決めて構いませんか？」  
「勿論です。丁度良い機会ですから、これを機に心機一転頑張つていきたいと思つてます。」

「解りました。陳登さんも宜しいですか？」

確認の為、陳珪の隣に立つ陳登に話し掛ける雫。

「はい、私も母上と同じ気持ちです。」

「成程、よく解りました。では、お二人共採用しますので、明日改めて登城して下さい。」

「はい。」

「親子共々、宜しく願います。では……。」

陳珪と陳登の親子はそう言つてから一礼し、面接室を出て行つた。それから暫くは面接者が来る予定が無い為、雫は案内役の人に休憩をとらせ、一人思案に暮れた。

(少しずつですが、人材が集まってきましたね。……けど、未だ足りない……。)

徐州軍の人材不足は、完全には解決していなかった。

更に数日後、徐州の城下町を鈴々、時雨、そして地和の三人が歩



いていた。

勿論、只歩いている訳では無く、街の警邏中である。

「今日の点心も美味しいのだ！」

「……お前は警邏と食べ歩き、どっちをしているんだ？」

「両方なのだ！」

「……頼むから、そんなに元気良く言い切らないでよね……。」

溜息を吐く時雨と地和の気も知らず、鈴々は袋一杯に点心が入った袋を左手に抱えながら、パクパクと点心を食べ続けている。

因みに、時雨と地和の二人は何も食べていない。三人は食べ歩きをしているのではなく警邏をしているのだから、三人共何かを食べていたら警邏中という説得力に欠けるからだ。

「まったく……何度も言うけど、ちい達がすっかりしないとダメね。」

「そうだな……。って、口調や態度が素に戻っているぞ、“地香”。」

「あつ……と、いけないいけない。」

時雨に小声で指摘され、「地和」は慌てて口調や態度を「地香」に直す。

生きる為に「張宝」という本来の名前や性格を封印した地和は、「劉燕」という新たな名前や性格を演じている。

だが、時々今の様に素に戻ってしまうので、その際は周りからフオローされている。

地和自身、いつまでもそんなんじゃないと解っているので頑張っているのだが、如何せん他人になりきるなんてそう簡単に来る訳では無い。

とは言え、公務や部隊を指揮している時は殆ど素に戻っていない。

素になるのは地和の素性を知っている仲間だけで居る時や、自室に一人で居る時が多い。

そう考えると、余り深く考えなくても良い気もする。

今もまた、そんな風に思っていたのだが、その思考は突然の言葉によって遮られた。

「……地香、気を付けるのだ。」

「きゅ、急にどうしたのよ、鈴々?」

それ迄ののんびりした雰囲気から一変し、鈴々の表情や声は真剣なものに変わっていた。

「さつきから誰か付けて来てるのだ。」

「えっ!?!」

思わず振り返って確認しようとした地和だったが、右側に居る時雨が地和と肩を組んでそれを遮る。

「馬鹿、振り向いたら感付かれる。落ち着いて前を向いたまま、歩調を変えずに歩け。」

「う、うん……。」

時雨に言われた通り、前に向き直って歩く地和。

付けられている、と鈴々が言い、先程の台詞から察すると恐らく時雨も気付いていた様だ。

だが、地和はその何者かの尾行に全く気付いていなかった。(ちは全然気付かなかった……そりゃ、ちは元々武将じゃないから、気付かなくて当然なのかも知れないけど……。)

地和は表情を崩さずに、心の中だけで悔やんでいた。

黄巾党では大部隊を率いていたとは言え、兵を鼓舞するくらいしかしておらず、実質的には単なるお飾りでしかなかった。

歌を唄いながら旅をしていた三姉妹が、とある事情から人気を博し、フアンの集まりがいつしか黄巾党になった。

単なる「ファン」の集まりが、何故「暴徒」になったのか、地和には心当たりが有った。と言うより、他に思いつかなかった。

「それ」が有ったから自分達の歌が認められ、あれだけの人が集まった。

だから、「それ」が無ければ、自分達に人を集める程の魅力も才能も無い。

地和はそう思っていた。

(ひよっとしたら、お姉ちゃんや人和には有ったのかも知れないけど……ちいには……。)

考えれば考える程、地和の心は沈んでいく。

だから、自分が曲がり角を右に曲がった事すらも気付かなかった。勿論、鈴々と時雨も一緒に曲がっており、尾行している何者から、少しの間姿を消す事に成功する。

結果、鈴々達を尾行している何者かは焦って歩を速めた。

(ちよ、ちよっと待って！)

前方に居た三人が曲がり角を右に曲がった為、「追跡者」は慌てて駆け出した。

とは言え、元々はこんな尾行みたいな真似をするつもりは無かったらしい。

だが、擦れ違った人物に思わず見とれ、自然とその人物の後を附いていつていた。

自分でも変だとは思っている。こんな気持ちになったのは、「あの方」に初めて会った時以来だ、と。

だが、「あの方」はもう居ない。戦いに敗れ、死んだと聞いている。

だからだろうか、「追跡者」が「あの方」と似た雰囲気を持つ「彼女」の後を附いていったのは。

「ちよつと話を……あれ？」

曲がり角を曲がった「追跡者」は思わずキョトンとした。

何故なら、「彼女」達が曲がった筈の道には誰一人として居なかったから。

「追跡者」は怪訝な表情をしながら辺りを見回し、ゆっくりと前に進む。

その時、「追跡者」目掛けて物陰から大剣が飛び出てきた。

「わっ!？」

何とか避けるも、今度は反対側の物陰から槍が同じ様に飛び出てきた。

「ひゃっ!？」

連続して攻撃され、「追跡者」はバランスを崩し、地面に倒れる。

そんな「追跡者」の首筋に、大剣と槍の刃先があてがわれた。

「俺達に何の用だ？」

「コソコソするなんて、怪しい女の子なのだ。」

大剣の持ち主である時雨と、槍の持ち主である鈴々が、「追跡者」に武器を突きつけ、睨みながらそう言った。

鈴々が言った通り、「追跡者」は女の子だった。しかも、鈴々より少し年上くらいの外見をした女の子だった。

「……。」

「追跡者」こと女の子は、二人を交互に見ながら黙っている。刃を向けられて怯えているのか、若干震えている様にも見える。黙っているのは、恐怖によるものかも知れない。

「……二人共、殺しちゃダメよ。私達に附いてきた訳を訊かないといけないんだから。」

「解っています、劉燕様。」

「鈴々達に任せるのだっ。」

時雨が隠れていた場所から、ゆっくりと地和が現れ、毅然とした口調でそう言った。

地和の言葉遣いは「張宝」ではなく「劉燕」を演じている為であり、時雨と鈴々もそれに合わせて対応していた。

劉燕は劉備の従姉妹である為、必然的に劉燕である地和の立場も高くなっている。

つまり、立場で言えば劉燕＝地和は鈴々と時雨の上官になる。

尤も、それは外交等の対外的な立場でという側面が大きく、軍では二人より下の立場になっていた。

そんな複雑な立場の劉燕 - 地和は、鈴々達に武器を向けられている女の子を見据えた。

「私達に附いてきた理由を話してくれない？ その理由によっては、このまま貴女を解放するわよ。」

「……。」

女の子はやはり黙ったままだった。只、震えはいつの間にか消え、視線は地和に固定されていた。

そんな女の子を見据えてると、地和は或る事に気付いた。  
女の子の右手首に、懐かしい巻き方をした布が巻かれていたのだ。

「貴女……。」

「……お前、黄巾党か？」

その布や巻き方について地和が訊ねようとする、先に時雨が訊ねた。

しかも、地和が訊ねようとした内容より直接的な文言で。

「……元、ね。黄巾党はもう無くなったんだし、私はもう悪い事はしてないわよ。」

それ迄黙っていた女の子が、時雨を睨み付けながら口を開いた。

それを聞いた時雨は、一瞬だけ視線を地和に向けてから再び女の子を睨み付けながら言葉を紡ぐ。

「なら何でそんな黄色い布を巻いている？ 黄色い布は黄巾党を指すから、今でも身に付ける者は少ないぞ。」

時雨の言う通り、黄色い布を身に付けている為に黄巾党に間違われ、捕まった者は少なくない。

徐州では居ないが、他州ではその為に殺された者も居るといふ。冤罪で殺されては堪らないので、今では民の衣服に黄色い布は殆ど使われなくなっている。

この女の子がそれを知らないとは考え難く、知っていて尚黄色い布を身に付けているのは、未だ黄巾党として悪事を働いているのではないかと、時雨は考えた。

「そんな事は百も承知してるわ。けど……。」

「けど、なんなのだ？」

鈴々が話を促すと、女の子は俯きながら声を絞り出した。

「……天和ちゃんも人和ちゃんも、そして地和ちゃんも居ない今、私一人くらいあの方達を想って黄色い布を巻いていても良いでしょ？ 私にとって張三姉妹は、命を救ってくれた恩人なんだから……。」

「恩人？」

時雨が気になった言葉を繰り返す様に呟くと、女の子は俯いたまま話し始めた。

「……漢王朝が腐敗していた為に、私が住んでいた邑は重税を課せられ、その日食べる物にすら困っていたわ。けど、そんな窮状から助けてくれたのが、張三姉妹率いる黄巾党だったの。」

「黄巾党がお前の村を助けただと!？」

時雨は驚いて聞き返した。

彼女にとつての黄巾党は倒すべき敵だったのだから、この反応は当然だろう。

「おかしい？ 元々黄巾党は、腐敗した漢王朝から民を救う為に出来た組織なんだから、私達を助けてもおおかしくは無い筈よ。」

「それはそうだが……。」

確かに、女の子が言う様に黄巾党は元々義によって作られた組織だった。

「蒼天已死 黄天富立 歳在甲子 天下大吉」

これは、黄巾党が使っていた旗に記されていた文字であり、また、彼等のスローガンであった。

訳すれば、「蒼天已に死す、黄天富に立つべし。歳は甲子にありて、天下大吉。」となる。

「蒼天」は漢王朝を指し、「黄天」は黄巾党を指していると思われる。「甲子」（きのえね、こうし、かつし。）とは干支の組み合わせの一番目であり、その年に黄巾党が天下を治めるという意味合いになる。

この文は陰陽五行思想に基づいており、その思想の「木火土金水」の順に当てはめると黄色は「土」を表し、「火」の王朝である漢王朝に代わるという意味が有り、先の文とも符号している。

只、それだと「蒼天」が漢王朝を指すのは合わない気がするが、理由を知っている地和からすれば何の問題も無かった。

（“赤天”より“蒼天”の方が言い易いし格好良いから、なんて誰も思わないわよね……。）

地和は、スローガンを決める時にそう言った姉の姿と声を頭の中で再生した。

その姉の隣には、苦笑する末妹の姿も在る。

だが、二人共もうこの世に居ない。

その事実を初めて知った時、涼の胸で散々泣き尽くした。

それから、二人の事を忘れた事は一度も無いし、忘れるつもりも無い。

だが、今の地和は「張宝」ではなく「劉燕」だから悲しむ訳にはいかない。

地和は泣きそうになるのを堪えて、言葉を紡いだ。

「……話を続けて。」

「あ、はい。……そんな時でした。邑を含めた辺り一帯を統治していた官軍が黄巾党に討たれ、その黄巾党が邑に食料を分け与えてく



れたのは。」

(あつ……。)

それを聞いた地和の脳裏に、一つの光景が映し出される。

あれは未だ黄巾党が逆賊ではなく、義勇軍の様に扱われていた時だった。

末妹である人和・張梁から、近くの邑や街が飢えに苦しんでいるらしいと聞いた長姉であり黄巾党の首領、天和・張角は直ぐ様行動を開始した。

すると、呆気なくくらいに官軍は敗れ、彼等が違法裏に貯め込んでいた沢山の食糧を手に入れた。

すると張角は、そこから黄巾党の分を差し引いた食糧の残り全てを、辺りの邑や街に配っていった。

「……そのお陰で、私達は誰一人として飢える事無く過ごせました。私は、その恩に報いる為に黄巾党の一員になったんです。」

女の子の話はそこで終わった。

地和は女の子の眼をジッと見た。

栗色の髪とお揃いの色の眼は、黄巾党で「悪い事」をしていたとは思えない程澄んでいて、今迄の話が嘘でない事を物語っている。

何より、彼女は正体を知らないとはいえ張飛、田豫の二人に武器を突きつけられた状態で嘘を言える程、この女の子の肝が座っているとは思えない。

先程の時雨に対する強気な弁は、嘘偽りが無いと自負しているからだろう。

「……貴女、名前は？」

「劉燕」らしく儼かな口調で地和が訊ねる。

「……廖淳、字は元俟。」

女の子もまた、地和の眼を見ながら廖淳と名乗った。

地和はその名前を、記憶している黄巾党の人間の名前に当てはめる。

黄巾党は殆どが男性で構成されていたので、廖淳の様な女性は少なかった。だから、地和の脳内検索の結果は直ぐに出た。

「では廖淳、詳しい話を訊く為に貴女を連行するわ。一応言っておくが、逃げようとしたら命は無いと思いなさい。」

地和は、黄巾党第二部隊に居た廖淳を連れていく事にした。

「元・黄巾党の女の子？」

「ええ、以前ちいの部隊に所属していた娘よ。」

城の執務室で、先程連れてきた女の子 - 廖淳について涼に報告する地和。

室内に居るのは地和の事を知っている者だけなので、地和は「劉燕」ではなく「張宝」の口調で喋っていた。

「その者は強いのか？」

「うーん……どうだったかしら？ 目立った戦功が有るならちいの所に報告に来てただろうけど、覚えが無いわね。」

「単に忘れてるだけじゃないのかー？」

愛紗の質問に記憶を探りながら答えると、鈴々がケラケラ笑いながら言った。

「それは無いわね。黄巾党に居たのは殆どが男性だったから、女性が戦功の報告に来てたら記憶に残ってるわよ。」

「実力は未知数……か。如何致します、桃香様？」

暫しの思案の後、結論を桃香に託す愛紗。

託された桃香は、常の笑顔で皆を見ながら答えた。

「今は少しでも人材が欲しい時だし、地和ちゃんが薦めてくれたんだもの、断る理由は無いよ。勿論、本人の意思次第だけだね。」

「……解りました。では地和、廖淳の勧誘についてはお前に一任する。頼んだぞ。」

「まっかせといて じゃあ、早速行ってくるねー」

涼が教えたピースサインをしながら、笑顔で執務室を出て行く地和。

執務室を出た瞬間に表情が「劉燕」になって瞬時に公私の切り替えをしたのは、流石としか言い様がない。

「……納得出来ないって顔だね、愛紗ちゃん。」

地和が出て行ってから暫くして、桃香はそう言った。

愛紗は直ぐに応えなかったが、やがてゆっくりと振り返り、険しい表情のまま言葉を紡いだ。

「個人的な事を言わせて頂けるならば……私は廖淳の勧誘に反対です。」

「元とは言え、黄巾党の一員だったから？」

「はい。」

桃香の質問に、即座に答える愛紗。その口調には迷いも澱みも無い。

「けど、それを言ったら地和ちゃんだってそうだよ？ しかも指揮

官だったし。」

「地和については、義兄上が保護すると決められたので、私から言う事はありません。」

(……確かに、愛紗はあの時も反対してたなあ。)

地和は黄巾党の中心人物の一人であり、匿ったのがバレたら涼達も逆賊として処断されていただろう。

だからこそ、愛紗を始めとした当時の義勇軍の武将や軍師達は保護に反対していたのだが、涼の意志が固いと知ると諦め、「張宝」を「劉燕」にするという手段をとったのだ。

「ですが、地和はあれから自分自身を押し殺して生きています。我々と一緒の時だけは素に戻りますが、それがどれだけ大変な事か……。そこに新たに元・黄巾党の人間である廖淳が加わって、地和の正体がバレないとも限りませぬ。また、廖淳自身にもその出自によって周りから疎まれる危険性が……。」

と、愛紗が反対理由を述べていると、桃香がクスクスと笑い出した。

「……桃香様、私が真剣に話しているのに何故笑われるのですか？」

「ご、ごめんなさい愛紗ちゃん。でも、それだけ可笑しいんだもの。」

「何が可笑しいのですか？」

不謹慎な、と思いながら愛紗が桃香に訊ねると、桃香は笑い声こそ押し殺すも笑顔を保ったまま言葉を紡いだ。

「だって愛紗ちゃん、何だかんだ言っても、地和ちゃんと廖淳ちゃんのこと心配してるんだもの。」

「なっ!？」

桃香がそう言うと、愛紗は途端に顔を紅くして口ごもる。それを見ていた涼も笑いを堪えながら言葉を紡いだ。

「俺も、愛紗は元・黄巾党の人間が入る事による軍の風評より、彼女達個人に対する風評を気にしている様に見えたな。」

「そ、それは……。」

反論出来ないのか、愛紗は俯いてしまった。

暫くの間その状態が続いたが、やがて意を決した様に愛紗が顔を上げると、顔を真っ赤にして言った。

「そうですよ！ 義兄上達の仰る通りですっ！！ 私が彼女達の心配をして悪いのですかっ!？」

「逆ギレ!？」

愛紗の剣幕に涼は思わずそう突っ込むが、逆ギレというには余りにも可愛らしい怒り方だった。

「悪くないと思うよー。愛紗ちゃんって、いつも厳しい事言っけど本当はすっごく優しいもん。」

「~~~~っ!」

「……あんまりフォローになってない気がするぞ、桃香。」

変わらないのニコニコ顔でそう言葉を紡ぐ桃香に、愛紗は顔を更に真っ赤にして言葉すら出せなくなった。義妹二人のやりとりに、涼は苦笑しながらそう言ったが、桃香達はフォローの意味が解らないのでポカンとしている。

涼がフォローの意味を二人に教えると、桃香達は納得と尊敬の眼差しと声をあげた。

それから、コホンと咳払いをした愛紗が相変わらず顔を赤らめたまま二人に忠告する。

「と、兎に角、義姉上達は徐州の州牧になられたのですから、もう少し危機感を持って物事に接して下さい！」

「はいっ。」

「りょーかい」

危機感の欠片も無い返事をする二人であった。

「私を、徐州軍にですか？」

一方その頃、徐州城の一室に連れて来られた廖淳は、椅子に座ったまま間の抜けた声でそう言った。

「ええ。桃香……劉備様と清宮様の許可は得たから、後は貴女の意思次第ね。」

そう言ったのは、廖淳と机を挟んで対面している地和。

因みにこの部屋には他に鈴々と時雨も居り、地和が来る迄は二人が廖淳と話していた。

つまりは「取り調べ」をしていた訳だ。

だからこそ廖淳の反応は当然だ。今迄「敵」扱いしていた人間を勧誘する等、普通は考えられない。

しかも廖淳は元とは言え黄巾党の一員だ。疎まれるのが普通であり、味方に引き入れて得が有るとは思えなかった。

「本気、ですか？」

「本気よ。ああ、劉備様も清宮様も出自は問わない方だから、黄巾党の一員だった事は気にしないで良いわよ。」

「はあ……。」

そう言われても、廖淳は簡単には信じられなかった。

今迄経験した事を考えれば、何か裏があるのではと思い、思案する為に視線を下げた。

そんな廖淳の視界に、良く見知った物が映る。

「それって……。」

廖淳は、地和の右手首に巻かれている黄色い布を見ながら、机越しに立っている地和を見つめた。

「私も、貴女と同じで元は黄巾党の一員だったの。」

さつきは巻いていなかった黄色い布を見ながら、地和はそう言っ  
て笑みを浮かべ、ゆっくりと座る。

当然ながら、地和は「劉燕」になって以来、黄巾党時代の服は着  
ていない。

今着ている服は、桃香が着ている服を基にして地和なりにアレン  
ジしたもの。

何故桃香の服を基にしたかという点、劉燕は桃香・劉備の従姉妹  
なので、服も似た服にした方が良いという桃香の提案によるものだ。  
桃香の服は長袖にフリル付きスカートだが、地和はそれを肩出し  
へソ出しルックにし、プリーツスカートの上に白い布を巻いている。  
服の基調となる色は白と薄緑で、スカートは本来の髪の色である  
水色にした。

本来の髪の色と言う様に、今の地和の髪は茶色に染めており、髪  
型もサイドテールからストレートに変えていた。

黄色は服にも装飾にも使っていないが、実は一人の時には今みた  
いに黄色い布を巻いていたりする。

それは、別に黄巾党に未練が有るからという訳ではなく、単に黄  
色が好きな色であり、亡き姉と妹を忘れない為の行為だった。

「そんな私でも、ここでは将として認められてる。だから、貴女も心配しなくて良いわよ。」 地和が廖淳を見つめながら優しい口調でそう言うと、廖淳は目を離せずに只地和を見つめるしか出来なかった。

「……………地和ちゃん……………」

暫くして廖淳が口にしたのは、劉燕になっている張宝の本当の名だった。

それを聞いた鈴々と時雨は、表情は変わらぬものの内心で驚いていた。

二人は、劉燕の正体がバレたのかと焦り、また、地和が動揺してないかと思ひ、それとなく彼女を見る。

だが、その地和は、

「……………地和ちゃんと離れ離れにした事、許してね。」

と、返していた。

その言葉に一番驚いたのは廖廖だった。

目の前に居る「劉燕」という少女が元は黄巾党の一員だと言われ、思わず口に出た言葉が「地和ちゃん」だった。

劉燕の姿は、廖淳が知る地和とは全く違う。だが、瞳は地和と同じ碧眼だ。

勿論、碧眼の持ち主は他にも沢山居る。有名な人物としては、黄巾党の乱や十常侍誅殺で活躍した孫堅とその娘孫策が居るし、噂では孫策の二人の妹もそうらしい。

だから、目の前の「劉燕」が「張宝」と似た瞳をしているからといって、同一人物とは限らない。

それでも、劉燕の笑顔は限り無く張宝・地和ちゃんとそっくりだ



と、廖淳は思った。

「いえ……地和ちゃんも黄巾党の中心人物の一人でしたから……貴女方に非は有りません。」

「……有難う。」

廖淳が俯きながらそう言つと、地和は複雑な表情をしながらも廖淳の髪を撫でる。

「え……。」

「悲しい事を思い出させてゴメン。黄巾党と戦つた私達と居たら、もつと貴女を悲しませちゃうわね。」

そう言いながら、今度は廖淳の頬を親指で撫でる地和。

廖淳の眼からはいつの間にか涙が流れ落ちており、地和はそれを拭っていた。

それに気付いた廖淳は慌てて自らも涙を拭う。

「……これ以上、貴女を悲しませるつもりは無いわ。さつきも言ったけど、うちの州牧様は出自を気にしないし、貴女は悪い事をするつもりが無いみたいだからこのまま帰れるわ。落ち着いたら、この二人に門送送らせるわね。」

そう言つて地和は立ち上がり、扉へと向かう。

そうして扉を開けようと手を掛けた時、後ろからガタツという音と共に廖淳の声が聞こえてきた。

「あ、あの……っ！ ……私を徐州軍に入れて下さいっ！！」

地和が振り返ると、そこには再び涙を流しながらも、しっかりと地和を見つめる廖淳の姿があった。

地和は姿勢を正してから、廖淳に訊ねる。

「……良いの？ さつきも言ったけど、貴女を疎んじる者が居るかも知れないわよ？ ……まあ、私みたいに出自を劉備様達だけに打ち明ける様にすれば、大丈夫だとは思うけど……。」

「やっぱり、劉燕様も隠されているんですね。」

「ええ。劉備様達が、その方が私の為だって仰って下さったから。」

実際には少し違うのだが、それを話す訳にはいかないので話を合わせる地和。

「桃香達が気にしなくても、兵達は気にするかも知れないしな。」

「隠し事するのは気が引けるかも知れないけど、皆で仲良くするには仕方ないのだ。」

そこに、それ迄沈黙していた時雨と鈴々が、地和をフォローする様に言葉を紡いでいく。

彼女達が何度も言う様に、黄巾党に居たという事でトラブルになる危険性は否定出来ない。

幾ら桃香や涼が出自を問わないと言っても、兵の中には家族や友人を黄巾党に殺された者も居る。

だからこそ、出自を隠すのはトラブルを避ける為に必要なのだ。

もつとも、桃香も涼も、いつまでもそれで良いとは思っていないが。

「……それは解ります。だから私も、皆さんに迷惑を掛けるつもりは有りません。」

「……つまり、貴女も出自を隠すという事ね？」

「はい。」

「……出自を隠しても、貴女の想像以上の事が有るかも知れないわよっ。」

「解っています。」

廖淳は、確認する地和を真っ直ぐ見つめながら答える。その眼に迷いは無く、真水のように澄みきっていた。

「……どうやら、本当に覚悟したみたいね。なら、私達は貴女を歓迎するわ。」

地和はそう言いながら右手を差し出し、言葉を紡ぐ。

「私の名前は劉燕、字は徳然、真名は地香よ。これから宜しくね、廖淳。」

「ふむ、地香が真名を預けたのなら俺も預けよう。俺の名前は田豫、字は国譲、真名は時雨だ。宜しく頼む。」

「鈴々の名前は張飛、字は翼徳、真名は鈴々なのだ。宜しくなのだ。」

地和が自己紹介をすると、時雨と鈴々もそれに続いた。

三人が自己紹介でいきなり真名を預けてきた事に、廖淳は驚きを隠せないでいた。

「わ、私なんかには真名を預けて頂けるなんて……。」「仲間なんだから、当然でしょ?」

地和が微笑みながらそう言うと、廖淳はそんな地和の右手を両手で包みながら、自己紹介の言葉を紡ぐ。

「姓は“廖”、名は“淳”、字は“元儉”、真名は“飛陽”（ひようつ）です!」

こうして、廖淳は徐州軍の一員となった。

そうして廖淳が徐州軍の一員になった頃、招賢館に一人の少女が現れた。

少女は笑顔のまま軽く会釈すると、懐から一通の手紙を取り出した。

少女はその手紙を雫に手渡すと後ろに一步下がり、雫は受け取った手紙を見ながら少女に訊ねた。

「これは……紹介状ですか？」

「はい。それは前徐州州牧、陶謙様からの紹介状です。」

陶謙の名前が出たので、雫はその手紙を隅々迄読んだ。

そこには、鄭玄という学者が一人の文官を推挙してきたのだが、自分の所より劉備の所に居た方がその文官にも劉備にも良いと判断し、こちらに寄越したと書かれていた。

「……成程、解りました。陶謙様の紹介となれば安心して採用出来ます。」

「有難うございます。」

「ですが一応、改めて自己紹介をして貰いましょうか。ここは本来、面接する場ですからね。」

雫がそう言うと、少女は先程と変わらぬ笑顔のまま自己紹介を始めた。

「解りました。私の名前は孫乾、字は公祐と申します。」

「紹介状には文官と書かれていましたが、どういった分野が得意ですか？」

「どういった分野というより、文官の仕事、つまり政治全般に通じていると自負しています。」

笑顔のままそう断言した少女・孫乾を見ながら、雫は再び訊ねる。

「……随分と自身の才能に自信が有る様ですね。」

「自分に自信を持たずに生きていける程、今の世は優しく有りませんからね。勿論、自身の力を過信する気はありませんよ。」

やはり変わらず笑顔のまま喋る孫乾は、放っておいたら鼻歌を歌いそうなくらい明るい表情だった。

雫は、そんな孫乾を見ても不思議と嫌悪感を抱かなかつた。

雫は本来、自分の才能を過剰にひけらかす人物は余り好きではない。

自身が余り積極的な性格でない事もあって、そうした人物とは出来るだけ関わりたくないと思っている。

勿論、だからといって他人の才能や実績を認めないという事はない。

雫が本当に嫌いな人間は、才能が有るのに何もしない怠惰な人間だ。

実際、単なる怠惰な人間より、才能が有るのに怠惰な人間の方が質が悪い。

何故なら、単なる怠惰な人間は何も成せないので有る意味諦めがつくが、才能が有るのに怠惰な人間は、何かを成せるのに何もしないのだから。

勿論これは極論ではあるが、雫としてはそんな人間は登用したくない。

そして幸いにも、目の前に居る孫乾はそんな人物ではなかつた。

勿論、雫は孫乾について、紹介状の記述と今の会話でしか知らない。初対面なのだから当然だ。

それなのに、雫は何故か目の前に居る少女を信頼していた。

何故かはよく解らない。只の勘、としか言い様が無い。

軍師が勘に頼るのはどうかと雫も思うが、たまには良いかとも思

っていた。

「……解りました。紹介状はちゃんとしてますし、何より貴女の自信の持ちようが良い。徐州軍はそんな貴女を歓迎します。」

「有難うございます。……ですが、一つ良いですか？」  
「なんですか？」

任命の木簡を渡しながら、配属先の希望かと思いつつ、雫は応える。

結果的に、孫乾の言葉は、ある意味で配属先に関わる事だった。

「私は今回文官として紹介されましたが、少しは武官としても働けます。どうかその事を心に留め置いて下さい。」

「成程、武官としても働けるのですか。解りました、しっかりと覚えておきましょう。」

「お願いします。」

雫の答えを聞いた孫乾は、一礼してから面接室を出て行った。

一人残った雫は天井を見ながら呟く。

「これは……良い人材がやってきましたね。」

そんな雫の表情は、子供の様に無邪気な笑顔だった。

この様に、着々と戦力を増強していく徐州軍だったが、愛紗や鈴々の様な強者は中々現れなかった。

まあ、あの二人と肩を並べられる様な武将がそうそう居る訳も無く、勿論涼達もそれは解っているのだが、それでも無い物ねだりをしてしまうのだった。

そんなある日、招賢館に一人の人物が訪ねてきた。

「まさか貴女が此処に来るとは思っていませんでした。」

雫は、目の前に立っている人物を見ながらそう言った。

雪里は未だ旅から帰っておらず、招賢館の責任者は引き続き雫が担っている。

「そうか？ 噂の州牧様の治世がどうなっているか気になるのは、至極当然であろう？」

雫と話しているその人物は、朱い瞳を細め、口許を不敵に緩めながら言葉を紡ぐ。

「相変わらずですね。……それにしても、よく白蓮さんが貴女を手放しましたね。」

「元々、伯珪殿の所には客将として身を置いていただけ。時機が来れば別の場所に行くというのは、予てより取り決めていたのだ。まあ、伯珪殿が未練タラタラなのは丸判りだったかな。」

(……それが判っていて出て行くのはどうなんでしょうか。)

雫はそう思いながら、目の前の人物・星こと趙雲を見つめた。

加えて、今頃、白蓮さんは星さんの抜けた穴を埋める為に大変な苦勞をしてるんだろうなあ、と思いながら、雫は確認の為に訊ねる。

「それで、ここに来たという事はうちに仕官しに来たとして宜しいのですか？」

「うむ、そろそろ私も腰を落ち着けようと思ってな。」

「それはつまり、貴女が桃香様と清宮様を真に仕えるべき主と認めたいという事ですか？」

「そうだ。……まあ、そもそも、今の世の中で英雄と呼べる人物は五指も居ない。」

星はそう言いながら右手の指を、一つずつゆっくりと立てていく。そうして言葉通り、親指以外の四指を立てた所で、星は雫を見た。

「……群雄割拠の時代になりかけている今、早々に判断するのはどうかと思えますが？」

「ふむ……経験は不足しているとは言え、流星は軍師。自身の心情とは真逆の言葉で私を試しますか。」

「それが私の仕事ですので。」

雫は星の指摘に「相変わらず鋭い方だ。」と思いながら、表情を全く変えずに答える。

そんな雫を何故か満足そうに見ながら、星は再び言葉を紡ぐ。

「確かに、漢王朝が力を失いかけている今、大陸各地に力を持った諸侯が現れている。その事実に関しては異存は無い。」

「そう話し始めた星に、雫は首肯して先を促す。」

「だが、その中で大陸に平穩を齎し、維持する事が出来る者が何人居るだろうか。残念ながら、殆どの者は私利私欲に塗れた愚者でしかない。自覚しているか、無自覚かは別にしてな。」

「そうですね。」

雫は星が言う愚者が誰かは訊かなかった。

訊かなくても大体は判るし、何より、他者の評価を鵜呑みにするつもりが無かったからだ。

とは言え、誰を英雄と評しているのかに関しては興味があった。

これも恐らくは自分と同じだろうと思いつつ訊ねる。

「では、貴女が思う英雄とは誰なのですか？」



すると星は、真面目な表情になって答えた。

「まずは曹操だな。あの者の持つ覇気は誰よりも大きい。また、人を使う事に長け、尚且つ信賞必罰をきちんとしている事も、人の上に立つ者に相応しい行いだろう。」

それは雫も同感だった。彼女は桃香達と比べれば、曹操・華琳とは短い時間しか会った事は無い。

だが、その短い時間でも、華琳が持つ覇気や言動の端々に強さが込められている事は十二分に判った。

……序でに、常に人材を求めているという事も。

「……では、他には誰が居るのですか？」

更に訊ねる雫に対し、星は一瞬だけ視線を中空に彷徨わせてから口を開く。

「他にはそう……孫策だな。」

「孫堅ではなく、その娘ですか。」

「意外か？」

「いいえ。」

星の問いに雫は即答した。

確かに、今の孫軍は孫堅が指揮しているが、何れは娘達の誰かが継ぐだろう。

勿論、孫堅は未だ若く実力も衰えていないので、それはまだまだ先の事だろうが、曹操と同年代・正確には孫策の方が少し年上・という事を考えれば、英雄と呼ぶのは孫策の方が合っているかも知れない。

「母親譲りの武に、部下を統率する力、どちらも英雄と呼ぶに相応しい。一時は若さ故の血気盛んさが目に付いていた様だが、今ではそれも少し落ち着いている様だしな。」

「ええ……。」

星の言葉に、何故か雫は力無い声を漏らす。

それは、孫策が落ち着きを得た理由を知っているが故の声だった。その理由を知らない、もしくは察している星は、妖しげな微笑を浮かべて雫を見やる。

その視線が何となく嫌だったので、雫は話の先を促した。

「そ、それで、他には誰が居るのですか？」

「……雫なら、言わずとも解るであろう？」

星は変わらずの表情のままそう言った。

「……確かに。ですが私は、星さん自身の口から聞きたいのです。」

「ふむ……まあ良かろう。残りの人物は、ここの州牧である劉備殿と、その補佐を努める清宮殿だ。」

星がそう言うと、雫は内心満足しながらも、表情は冷静さを保つたまま更に訊ねる。

「その理由は？」

「先ずは二人の肩書きが万民を惹き付ける。片や“劉勝の末裔”、片や“天の御遣い”。肩書きの真偽は兎も角、これを聞いて興味を持たぬ者等、この国には居りませぬ。」

星が言った事に間違いは無い。

劉勝は漢王朝の初代皇帝・劉邦の子孫の一人である。つまり、現皇帝である少帝と桃香は血縁関係になる訳だ。

天の御遣いという言葉も、下手をしたら占いで政治を決める者も居るこの世界では、敬意と畏怖のどちらか、若しくは両方の感情を込めて注目を集めているだろう。

事実、桃香も涼も、十常侍誅殺後の宴で高官達から引つ張りだこにされかけた。

その度に華琳や美羽が話し掛けてきて、その場から連れ出してくれたのだが、それがなかったらどんな話を聞かされていたかは、想像に難くない。

「それでいて名声にかまけず、きちんと善政を敷いている。それはまさしく英雄の証だ。」

「善政を敷いていると、何故判るのです?」

雫は答えが解っている疑問をぶつける。

すると星は、やはり妖しげな笑みを見せながら答えた。

「私を見くびってもらっては困る。ここに来たばかりとは言え、街の人々の表情を見れば善政を敷いているか否かは一目瞭然。前任者である陶謙が善政を敷いていたのだから、それより悪い政治を行っていたれば、街の人々の表情は暗くなっているのが自然だからな。」

星の答えは雫の予想通りであり、事実だった。

初めの内は前任者である陶謙の治世を懐かしんでいた住人達も、桃香達の政治やその人柄に触れていく内に段々と桃香達を認めていった。

そして、軍備拡張だけでなく、一部の税の緩和と治安の安定等の政策が上手くいくと、最早桃香達を受け入れない住人は一人も居なかった。

「成程。では何故、星さんは曹操や孫策ではなく、我等が主たる劉

玄德と清宮涼を選んだのですか？」

華琳達は勿論、自らの主君の敬称すらも略して訊ねる。

それは、この場で星の結論を聞く為にした事だった。

「曹操の所は百合百合しくて適わぬし、孫策の所は身内意識が強い。そして残ったのはここだと言っただけだ。」「……それは、消去法で止む無しに、という事ですか？」

「止む無しに、という訳では無いが、消去法なのは確かだな。勿論、それ以外にも理由は有るが。」

「私としては、それ以外の理由について知りたいのですが……まあ、良しとします。」

雫は、ふうと溜息を吐きながらそう言うと、一度目を閉じてから暫く考え、再び星を見ながら言葉を紡いだ。

「趙子龍殿、貴女を徐州軍の一員として迎え入れます。これからは劉玄德様と清宮涼様、そして民の為にその力を奮って下さい。」

「はっ。この趙子龍、我が命有る限り、主と共に戦う事を誓います。」

雫が仰々しく任命すると、星もまた恭しく左手を右手で包み、平伏して拝命した。

そうして暫くの間、真面目な表情でいた二人だったが、やがて殆ど同時に笑い出した。

「では、早速行ってくるでしょう。」

暫く話した後、星はそう言って招賢館を出て行った。

その手には、招賢館の仕事が残っている雫から受け取った任命の

木簡が有る。

(さて……二人が私が思った通りの人物かどうか、見極めさせて貰うとするか。……ふふっ。)

星こと趙雲は、今迄感じた事が無い程の高揚感のまま城へと向かって行った。

その頃、徐州から遠く離れた荊州に徐庶 - 雪里は居た。

「……はあ。」

周りを見ながら溜息を一つ。

この旅に出てから何度同じ溜息を吐いたか解らない。

再び周りを見る雪里。

何度見ても、そこには賊しか居なかった。因みに全て男だ。

「……面倒ですね。」

賊には聞こえない声量で呟く。

別に聞こえても構わないが、賊を必要以上に刺激するつもりは無い。

只でさえ賊は、女である雪里を見ながらニヤニヤと笑い、誰が最初に行くかと話している。

勿論それが、二つの意味を持つ言葉だという事は雪里にも解っている。

この世界で女の一人旅をしていれば、こうなるのはよくある事だ。大して珍しくもない。

だからこそ、雪里の溜息は止まらなかった。

「はあ……。」

その溜息を、観念したという意味にとったのか、賊の一人がやはりニヤニヤしながら近付いてくる。

その手には剣を持っており、脅しの意味が有るのは明白だった。

雪里はその賊にゆっくりと近付く。賊の男は、雪里が観念したとみている為、全く警戒していない。

「……邪魔です。」

雪里がそう言った次の瞬間、賊は体から紅い液体を撒き散らしながら地面に倒れた。賊の男は地面に倒れると、そのまま息絶えた。突然の事に賊達は暫くの間呆気にとられていたが、やがて雪里が武器を手に行っているのに気付くと、賊達は慌てて抜刀した。

雪里が手にしている武器は、剣と言うには短く、かといって短剣と言うには長いという長さの両刃刀だった。

雪里はそれを逆手に持ち、正面に構えると周りを軽く見回し、走り出した。

雪里は先ず、近くに居た賊に斬りかかった。勿論賊も防御しようと剣を動かすが、それより早く雪里の剣が賊の喉笛を切り裂いた。更に雪里はそのまま体を回転させ、たった今倒した賊の左側に居る賊を一刀両断に斬り倒した。

この時、他の賊達は雪里に向かって斬りかかってきていたが、連携も何も無い只の突撃をかわして反撃に転じるのは、雪里にとって何の苦にもならなかった。

数分後。

辺りには物言わぬ屍と化した賊達の死体が転がっている。

全員が一撃で倒されており、その傷口からは夥しい量の血液が流れ出し、土や草を朱に染め上げていた。

「……さて、行きますか。」

顔や服に付いた返り血を拭い、連れている馬に騎乗した雪里はそ  
う言って馬を走らせる。

彼女の目的地迄は、あと一日という距離だった。

## 第十一章 旧友と新友（前書き）

徐州軍がより良い人材を得る為、単身旅に出た雪里。

時々危険な目に遭いながらも、漸く目的地に辿り着く。

そこに居る人材は、雪里が知る限り最高の人材。

何としても徐州に連れて行くを決意し、雪里は馬から下りた。

2010年10月3日更新開始。

2010年12月5日最終更新。



## 第十一章 旧友と新友

荊州北部の街、襄陽から西に約二十里先に、隆中という小さな村が在る。

黄巾党の乱から続く戦乱とは無縁だったのか、隆中の地は豊かな大地のままであり、ここに住む人々の表情もまた穏やかなものだ。

雪里は村の入り口で下馬し、そんな村の様子をゆっくり見ながら進んでいた。

「良くも悪くも変わってないわね。」

そう呟いた雪里の表情は温かな笑みに溢れている。

何故ならそれは、道行く村人の穏やかな表情を確認したからだ。

戦乱の世になるうとして今、こんなにも表情が明るい人が多い事は、それだけで充分凄い事である。

「あら元直ちゃん、久し振りね。」

と、そこに一人の中年女性が、雪里に対して気さくに声を掛けてきた。

雪里はその女性と二言三言、言葉を交わした後、手を振って別れた。

（長い間会っていないのに、ちゃんと覚えててくれるなんて、おばさんも変わらないみたいね。）

雪里はそう心の中で呟くと、更に笑顔になった。

今迄の雪里の言葉等で解る様に、彼女はこの村に以前来た事がある。

実は、今回連れて帰る予定の人物と雪里は、同じ私塾の同窓生なのだ。

「……あの子との話も、今みたいに上手くいけば良いけど。」  
そう呟くと、雪里は急に暗い表情になった。

ここに居る人物を連れて帰ると決めてはいるが、無理矢理連れて行く訳にはいかない。

きちんと話をし、相手に納得してもらった上で徐州に来てもらう。それが理想であり、それ以外の手は使いたくない。

「とは言っても、私も余り長くは此処に居られないし……。」

そう呟いた時、雪里は目的地に着いた。

雪里の目の前には、この村の中では比較的大きい屋敷が在る。

「さて……行きますか。」

そう呟いて屋敷に入ろうとした時、後ろから声を掛けられた。

「あつ……雪里お姉ちゃん？」

「ん……？ あら、久し振りね緋里<sup>ひり</sup>。お姉ちゃんは居る？」

振り返って声の主を確認すると、雪里はその声の主を緋里と呼び話し始めた。

緋里は小さな女の子で、身長は鈴々より更に小さい。

「はい、居ますよ。今はきつと、最近入手した“孫子”と“九章算術”を読んでいると思います。」

「あら？ あの子は確か、その二冊を持っていたと思うけど……無くしたの？」

「いえ、注釈等が違う本だったので買ったみたいです。」  
「……相変わらず本の虫なのね。」

緋里の説明を聞いた雪里は、苦笑しながらそう言った。  
それから雪里は、緋里に案内されて屋敷へと入っていった。

「雪里お姉ちゃんの顔を見たら、お姉ちゃんは凄く喜ぶますよ。」  
「だと良いけどね。」

笑顔で話す緋里に対して、雪里は笑みを向けながら、努めて明るく答えた。

緋里が言う「お姉ちゃん」こそが、雪里が連れて行くこととする人物だ。

つまり、雪里は緋里から姉を奪っていかうとしている。それが判った時、緋里は今みたいに明るく雪里と接するだろうか。

普通なら有り得ない。  
姉と引き離されるだけでなく、姉を戦地に連れて行くこととしているのだから。

「……ん？ 話し声？」

そんな事を考えながら部屋に近付いていると、聞こえてくる声が二つ有る事に気付く。

そのもう一つの声も、雪里が知っている女の子の声だった。

「お姉ちゃん、お客様だよー。」

緋里はそう言って扉を開けた。

「お客様……？ あっ！？」

「雪里ちゃん!？」

部屋の中に居た二人の少女は、扉の先に居る人物を見て驚きの声を上げる。

そんな少女達に対し、雪里は笑顔を見せながら挨拶をした。

「久し振りね、朱里、雛里。」

雪里がそう言いながら部屋に入ると、朱里と雛里と呼ばれた少女が駆け寄ってきた。「久し振りね、じゃないよっ! ずーっと音沙汰無かったから、私達がどれだけ心配したか……。」

「もしかしたら……って思っ、泣いたりもしたんだよ……。」

二人はそう言いながら雪里に抱きつく。

二人は雪里より小さい為、二人の顔は自然と雪里の胸にうずまっている。

その光景は、さながら姉に泣きつく妹達という感じだ。

「……ゴメンね。ここ一年、余りに忙しくて連絡出来なかったの。」

雪里は二人の髪を撫でながらそう謝る。

すると、雪里の右側に抱きついていて、朱里と呼ばれた少女が雪里を見上げた。その拍子に、首元に有るアクセサリーの二つの鈴が、小さく鳴る。

そんな朱里の大きく朱い瞳はどことなく潤んでいて、首迄の長さの薄い金髪と共に輝いていた。

朱色の長袖の上着の下に白色の服を着ており、その服は青紫色のフリースカートに重なり、その先は花びらの様に広がっている。

また、それ等の服は黄緑色のリボン状の帯で巻いて留めていた。

白いオーバーニーソックスはスカートの中に隠れる他長く、素足

は全く見えない。

近くの床には上着と同じ朱色のベレー帽が置いて有り、そのベレー帽もまた、帯と同じ色と形のリボンが付いていた。

「……忙しいって、何してたの？」

「……今日はそれに関する話をしに来たのよ。」

雛里の質問に対して、雪里は二人の髪を撫でながら、優しい口調でそう答えた。

その言葉に、二人は若干の違和感を感じた。そして、二人がそう感じた事に気付いたのか、雪里は尚も優しく二人の髪を撫で続ける。雪里の左側に抱きついていて、雛里と呼ばれた少女は、そんな雪里を見上げながら思案を巡らす。

そんな雛里の瞳は大きく穏やかな緑色の瞳で、まるで見る者の庇護欲をかき立てる様だ。

薄紫色の髪は朱里と違って長く、両耳の後ろで綿の様な髪留めを使ってツインテールにしていた。

雛里の服装は、簡単に言うと朱里の服装と色違いのデザインになっている。具体的には、朱里の上着の色である朱色がスカートの色に、朱里のスカートの色である青紫色が上着の色になっていた。

色以外では、白服の花びらの様な形の部分の折り目が多くなっていたり、首元のアクセサリーが髪留めと同じ様な素材で出来た、二つの丸い綿になっている、という違いがある。

他には、朱里が白いオーバーニーソックスを穿いているのに対し、雛里は素足に白く短い靴下といった所が目に見える違いだろうか。

そしてやはり帽子を被っているらしく、近くには緑色のリボンが付き、上着と同じ青紫色の魔女帽が置いてある。

勿論、「魔女」なんて言葉知らない雪里達は、その帽子を「魔女帽」とは呼ばないだろうが。

因みに緋里はと言うと、朱里と同じ薄い金髪を肩迄伸ばし、眼もやはり朱里と同じ朱い瞳をしている。

服装は、朱里の服を小さく簡素にした感じだ。色も、薄めの朱色を基調としている。

今は帽子を被っていないので帽子を持っているかは判らないが、姉である朱里の物と思われる帽子が有る事を考えると、妹である緋里も持っていると考えるのが自然だろう。

「それじゃあ、私はお茶淹れてくるね。」

「あつ、お構いなく。」

緋里が笑顔でそう言っただけで部屋を出て行くと、雪里は二人の髪を撫でながら明るく返した。

緋里の足音が遠ざかっていき、部屋には沈黙が訪れる。

すると、雪里はゆっくりと二人から離れて座り、正座の姿勢になった。

突然の事に戸惑う朱里と雛里を見上げながら、雪里は静かに言葉を紡ぐ。

「朱里、雛里。……いえ。」

一度言葉を切り、言い直す雪里。

「諸葛孔明殿、そして鳳土元殿。私、徐元直は貴女達の力を借りに来ました。」 雪里に「諸葛孔明」と呼ばれた朱里と、「鳳土元」と呼ばれた雛里は、雪里が何を言ったのか理解出来なかった。

本来の彼女達は、先程迄の様にお互い真名で呼び合っているのに、今の雪里は二人を姓と字で呼んでいる。

「えつと……。」

「雪里ちゃん、詳しく話してくれる？」

未だに困惑しつつも、二人は思考を巡らせながら雪里と同じ様に正座の姿勢をとりながら訊ねる。

雪里はそんな二人から目を離さずに、ゆっくりと、だがハッキリと言葉を紡いでいく。

「さつき、私が今何してるか聞いたわよね？」

「う、うん。」

「その答えはね……“徐州軍筆頭軍師”って事よ。」

「……………えっ!？」

雪里の言葉に、朱里と雛里は暫く反応出来ず、間が抜けた声を出すしか出来なかった。

漸く思考が停止していた二人だったが、やがて無事に再開したらしく、真面目な表情になって確認する。

「雪里ちゃんが……徐州軍の筆頭軍師……?」

「す、凄いよ雪里ちゃんっ。以前朱里ちゃんが言っていたみたいに、出世してるんだねっ。」

「まあ、そうなるのかしらね。」

目を丸くしている朱里と興奮している雛里を見ながら、雪里は苦笑しつつ言った。

以前、雪里達と同じ私塾に通っていた時、親友同士で集まって甘味を食したりお茶を飲んだりした事があった。

その時、朱里が親友達を見ながら、将来についてまるでそれが正解かのように断言した。

『雛里ちゃんは、最低でも中郎将は固いね。』

『雪里ちゃんは、州刺史か郡太守になれるよ。』

親友達に対して次々と、余りにも堂々と言うものだから、皆驚きながらも朱里の言葉を信じていった。  
そんな中、雪里が朱里に訊ねた。

『なら朱里、貴女は？』

『さあ？ ……ふふつ。』

だが、いざ自分の事となると朱里は意味ありげな笑みを一つするだけで、何も答えなかった。

「朱里、貴女はあの時、自分の事は何も言わなかったわね。勿論今更、何故言わなかったのか訊くつもりは無いけど、その時に私が貴女の事をどう思ったのかは、教えてあげる。」

「……どう思っただの？」

雪里が昔の事を思い出しながらそう言うと、朱里は暫くの間何かを考えてから訊ねた。

「……貴女は、私達とは比べ物にならない程大きな事を成せる人間。州刺史とか郡太守なんて生温い役職ではなく、もっともっと上の役職に就くだろう、ってね。」

「買い被り過ぎだよ、雪里ちゃん。」 そう言った朱里は顔を紅くしながら目の前で両手を振り、口をぱくぱく動かしていった。

先程は姓と字で朱里達を呼んでいた雪里は、今はちゃんと真名で呼んでいる。あの言い方は、ある種の意味表示みたいなものだったのだろうか。

「そんな事はないわ。貴女は私達の中で一番優秀だったし、水鏡先生も期待していらしたじゃない。」

「私も雪里ちゃんと同じ様に思ってるよ。」



「雛里ちゃんまで……。」「

雪里だけでなく、もう一人の親友である雛里にもそう言われた朱里は、思わず苦笑してしまう。

「私はそう思ったからこそ、貴女に会いに来たの。それに、雛里も一緒に居たのはラッキーだったわね。」

「「らっきい?」「」

聞き慣れない言葉に反応した朱里と雛里は、同時に聞き返した。それを見た雪里は、小さく「あっ」と声を出してから二人に説明を始める。

「ゴメンゴメン。“ラッキー”って言葉は、天の国の言葉で“幸運”とか“僥倖”って意味よ。」

「天の国……。それじゃあやっぱり、徐州州牧補佐の清宮涼という人物は、噂通り“天の御遣い”なの?」

雪里の説明を聞いた雛里が、確認する様に訊ねると、雪里は小さく頷いて答えた。

「少なくとも、清宮殿がこの国の人間では無い事は確かね。私達の知らない言葉や知識を使うし、服装とか持ち物も全然違うわ。因みに、清宮殿と接してるお陰で私も時々だけど、今みたいに天の国の言葉を使う様になったわ。」

補足する様にそう言うと、雪里は今日何度目かの苦笑をした。

彼女の主の一人である清宮涼は、桃香達の前では極力「天の国の言葉」を使わない様になっているが、最早日本語と化した外国語、つまり外来語を全く使わないでいるのはかなり難しい。

何せ、扉は「ドア」、厠は「トイレ」と言う様に、外来語を使う

のが普通になつてゐる為、言葉選びに細心の注意を払つてもついでに使つてしまふのは仕方ないだろう。

「それで、そんな清宮涼殿と劉玄德様が居る徐州に、貴女達を連れて行きたいのよ。」

そんな雑談の中でサラツと今回の旅の目的を話すと、朱里と雛里の表情が瞬時に曇つた。

「……私達を、徐州軍に？」

「そうよ。……今の徐州軍には優秀な人材が足りないの。勿論、そこそこやれる人材は居るけど、一軍を率いる武将や内政を任せられる文官が少ない。」

「だから、私や朱里ちゃんに徐州軍で手伝つて欲しいって事なの？」

「ええ。勿論、今直ぐなんて言わないわ。出来るだけ早く来て欲しいのは確かだけど、色々と準備も必要だろうし。」

雪里は二人に要望を述べながら、気遣つていく。

親しき仲にも礼儀あり、という意味での気遣いだが、実際には一日でも早く来て欲しいという気持ちが強いのは丸解りだった。

「……………い。」

「え？ 朱里、今何て言ったの？」

暫くの間、部屋を沈黙が支配していたが、朱里が何かを呟いた事でその沈黙は破られた。

「……………悪いけど、雪里ちゃんのを要請には応えられない。」

朱里はしっかりと雪里を見据えながら、そう断言した。

雪里は朱里の言葉に驚いている。今の朱里の言葉が、単なる「拒否」ではなく、「拒絶」に近い言い方だったからだ。

「……理由を聞かせてくれるかしら？」

だが、雪里はその驚きを極力隠しながら、表面的には冷静にして訊ねる。

対する朱里も、その幼さの残る顔を引き締めながらハッキリと理由を述べる。

「一言で言えば、戦には関わりたくない。只、それだけだよ。」

「……それは解るけど、貴女が手伝ってくれたらその戦を早く終わらせられるし、そもそも戦を起こさずに済むかも知れないのよ。」

雪里は少し苛つきながら言葉を紡いだ。

彼女は、昔馴染みの親友に断られる確率は低いと思っていた。

だが、実際には朱里は雪里の要請を頑なに拒否している。

その事実には雪里は違和感を感じるが、一番の違和感は「あの朱里が何故、世の為に動くこうとしないのか」という事だった。

学生時代、朱里は同級生の中で、いや、その私塾で学んだ全ての生徒の中で一番の秀才だった。

真綿が真水を吸い込む様に知識を得ていき、尚且つ誰も考えつかない応用を瞬時に閃く。

雪里は朱里のその才を、周の文王に認められた古の賢者である太公望や、高祖劉邦に仕えた名軍師張良に勝るとも劣らないと思っていた。

そんな朱里が、今の世を憂いていない筈が無い。世の中を正す為なら、絶対に力を貸してくれる筈だと思ったからこそ、断られる確率は低いと思っていたのだ。

朱里は、学問を役立てず、学問の為に学問をする無能者達や、論議の為に論議をする曲学阿世の人間とは違う筈だから。

「朱里、貴女は一生その才を埋もれさせたまま、この隆中で過ごすつもり？」

「……うん、そうだよ。」

そう訊かれた朱里は僅かの間考えたが、彼女が出した答えは雪里を落胆させるものだった。(どうして……？ どうしてあの聡明な朱里が、こんな馬鹿な判断をしているの？)

雪里は、朱里を見つめたまま呆然としている。

そして朱里は、そんな雪里をジッと見据えていた。いや、半ば睨んでいたと言った方が正しいだろうか。

「……朱里ちゃん、せめてちゃんとした理由を言わないと、雪里ちゃんも納得しないと思うよ。」

そんな二人を静かに見守っていた雛里が、オドオドしながらそう言った。

すると朱里は、それ迄の固い表情を和らげ、ふうつと一息を吐いた。

「……そうだよ。有難う、雛里ちゃん。」

「ううん、良いよ。」

朱里の表情が和らいだのを見て、雪里は一体何を話すのか気になった。

先程迄睨んでいた表情が、瞬時に穏やかな表情に変わったのだから、その戸惑いは仕方ない。

そんな雪里の戸惑い等関係なく、朱里はその表情をやや厳しくして、真っ直ぐに雪里を見つめ直すと、ゆっくりと、だがハッキリと

した口調で話し出した。

「……雪里ちゃん、私が何故雪里ちゃんの誘いを断るのか、その訳を教えるね。」

「う、うん……。」

真剣な朱里の表情と口調に、雪里は無意識に唾を飲み込む。

そして朱里は言葉を紡いだ。

「……実はね、黄巾党の乱が起きてた頃、叔父夫婦が亡くなったの。」

「

「えっ……!?!」

予想外の告白に、雪里は絶句するしか出来なかった。

朱里の両親は、朱里が幼い頃に二人共他界しており、朱里達四姉妹は父が生前娶った後妻と共に、江東の叔父夫婦の許に身を寄せていた。

その後、朱里の姉の諸葛瑾は長子としての責任を全うして一家の計を立てる為、義母と末妹と共に揚州（呉）に移り住み、孫堅に仕官している。

それから数年後、成長した朱里は妹の緋里と共にここ隆中に移り住み、育ててくれた叔父夫婦に恩返しをする為に書を書いて生計を立てていた。

「ま、まさか、黄巾党に……!?!」

「ううん。……朱皓っていう人と争いになって、戦死したの。」

元黄巾党の人間が徐州軍に居る事もあり、雪里はもしそうだったならどうしようと気が気でなかったが、違つと判ると安心し、同時に自己嫌悪に陥った。

朱里の話によると、何でも朱里の叔父である諸葛玄は、袁術によ

つて豫章の太守を命じられたが、同時期に朝廷から豫章を治めよとの辞令を受けた朱皓がやってきた為に対立。

その結果起きた戦争で叔父夫婦は戦死し、朱里と緋里は最近迄鬱ぎ込んでいたらしい。(まったく……あのおチビちゃんは何をやってんのかしら。)

朱里から話を聞いた雪里が最初に思ったのは、溜息混じりの様なそんな一言だった。

本来、太守を任命出来るのは朝廷、つまり漢王朝だけである。

だが、黄巾党の乱は勿論、それ以前から続く乱れた世の中では、地方の豪族は朝廷の命を待たずに勝手に決めてきた。

今回の事件は、そうした先例に則った袁術が勝手に決めた為に起こった悲劇だった。

(……もつとも、どうせ張勳がはやし立てるとかして、袁術を唆したんだらうけど。)

そう考えると、袁術も被害者だなと、雪里は思う。

だが、そのお陰で朱里を連れて行く事が出来なくなりそうになっているので、同情はしなかった。

「……つまり、朱里は戦に係わりたくないから徐州に行きたくない、という訳ね？」

「うん……。」

雪里は、朱里の話から導き出した答えを、それが正しいか確認する様に訊ねる。

その問いに朱里は只の一言で返すと、俯いたまま口を閉じた。そんな朱里を見ながら、雪里は溜息を吐いて髪をかきあげた。

(……今日は駄目みたいね。)

雪里はそう思いながら雛里にも訊ねてみたが、彼女もやはり要請を断った。

雛里が断った理由は、朱里と同様に戦に係わりたくないという事だったが、その表情からは、今の朱里を置いていけないという理由も有る様だった。

徐州軍の軍師としては無理矢理にでも二人を連れて行きたい雪里だったが、彼女は二人の親友でもある為、それを出来ないでいる。

「……解ったわ。」

雪里はそう言うと、小さく息を吐きながらゆっくりと立ち上がり、入ってきた扉に向かいながら話し掛ける。

「取り敢えず、今日は帰るわね。」

「何度来たって、私の答えは変わらないよ。」

朱里は俯いたまま即答する。雛里はオロオロし続け、雪里は振り返らずにそのまま扉を開け、部屋を出た。

扉を閉めて歩き出すと、雛里が朱里に対して何かを言っているのが聞こえた。だが、雪里は足を止めず歩き続ける。

廊下を歩いていると、四人分のお茶と甘味が乗ったお盆を持った緋里と出会った。

「あれ、雪里お姉ちゃんどうしたの？」

「……ちよつとね。」

余程難しい表情をしていたのか、緋里は訝しげに訊ね、雪里ははぐらかす様に答える。

幼いとはいえ諸葛瑾と朱里を姉にもつ緋里である。雪里のその答えだけで、二人に、若しくは三人に何かあったと察した様だ。…  
…解りました。また来て下さいね。」

「ありがとう、緋里。」

二人はそう言葉を交わすと、それぞれの行く先へと向かった。

「お姉ちゃん、蒼詩さんが……。」

緋里は、朱里達が居る部屋の扉を開けながら何かを伝えていたが、雪里は歩き続けていたので最後迄聞こえなかった。

雪里が玄関を出ると、そこには一人の少女が立っていた。

紅く長い髪に健康的に焼けた肌。大きな碧眼に活発そうな表情、子供特有の八重歯が特徴的だ。

背丈は朱里や雛里と同じくらいで、服装は白を基調としたノースリーブに黒いホットパンツ。靴下は履いておらず、素足に紅いサンダルを履いている。

雪里が少女に一礼すると、少女も同様に返し、朱里の屋敷へと入っていった。

(……朱里の友達かしら?)

そう思いながら、乗ってきた馬に騎乗し、ゆっくりと走らせる。段々と遠ざかる朱里の屋敷を一瞥し、これからの事を考えた。

(さて……大見得をきったのに手ぶらで帰るのも何だし、取り敢えず兵だけでも集めてこないかね。)

雪里はそう思いつつ、気持ちを切り替えて徐州へと帰って行った。因みに、帰還時に雪里が集めてきた兵数は、軽く二万を超えてい



たらしい。朱里の勧誘に失敗した雪里は、徐州に帰還すると直ぐに桃香と涼に事の次第を報告し、朱里の代わりに得た二万を超える兵達を徐州軍に組み入れる了承を得た。

そしてその兵達の訓練を、訓練場に居る愛紗に頼もうとすると、そこで思い掛けない人物と出会った。

「……貴女が来ていたとは。いつ此処に？」

「三週間程前に。今ではこうして兵の訓練を任されている。」

その人物は白を基調とした振り袖の様な衣服を身に纏い、頭には両端に紅い飾り紐が付いた白いナースキャップの様なものを付けている。

衣服について詳しく言うと、帯の色は濃紺、袖には黄色い蝶の羽根が大きく描かれている。

また、胸元はその豊富な胸を強調するかの様に開いており、長く伸びてミニスカートの役割も兼ねている衣服の下から覗く太股と共に、妖しい色気を漂わせている。

その太股には白のニーソックスを履いており、上部には紫色の三角形が連なる様に幾つも付いている。

靴は、薄紫色の厚底下駄になっていて、全体的に和装っぽい服装だ。

水色の髪は左右が長く、他は首に掛かる程度。但し真後ろの髪だけは細く長く伸ばしている。

朱い瞳を持つその人物の名前は趙雲、真名を星と言う。

「そうでしたか。星殿なら安心して訓練を任せられます。」

「ふふ、世辞でも嬉しいものだ。しかし、私が徐州軍に参加した事を筆頭軍師殿が知らなかったのは少し拙いのではないか？」

「私は先程帰還し、桃香様と清宮殿に今回の旅の報告をしただけで、軍達からの報告は未だ受けていませんから。何せ一刻も早く、あの者達の訓練を始めてもらいたかったので。」

雪里はそう言いながら、訓練場に並ぶ二万以上の兵達に目をやる。星も其方に目をやり、雪里が集めてきた兵達を吟味するかの様に見ていった。

「とは言え、知らなかったのは事実ですから。どう言われても仕方がないのですけどね。」

「ふっ……知らなかったのなら、知れば良いだけではないか。」

冗談めかして雪里が言うと、星もまた、口元に指を置き、妖しい笑みを浮かべながら返した。

「……それもそうですね。では、兵の訓練は星殿に任せて私は報告書を読んでくるとしますか。」

「ああ、それが良いだろう。武官は訓練に、文官は報告書に、正に適材適所だ。」

「まったくです。」

雪里はそう言って星に一礼すると、同じく訓練場に居た愛紗と鈴々にも挨拶をしてから、自室へと戻っていった。雪里が自室に入ると、そこには大量の書簡が有った。

旅に出る前に、残っていた仕事は全て片付けていたものの、二ヶ月程留守にしていたので、当然ながらその間の仕事が溜まっていた。勿論、急を要する案件は雫達が処理しているので、此处に置いてあるのはそれ程急がなくても良い案件ばかりだ。

「覚悟はしてしましたが……これは骨が折れますね。」

机の上は勿論、食卓や寝台の上に迄置かれている書簡を見ながら、雪里は溜息を吐いた。

それから暫く目をつぶると、意を決した様に表情を引き締め、書簡の山に取り掛かった。

筆頭軍師を務めているだけあって、雪里の処理能力は高い。一刻も経たない内に、机の上に山の様に積まれてあった書簡は無くなった。

「取り敢えず、これで良しとしますか。」

そう呟くと、書簡の山とは離して机の上に置いてあった報告書を手取る。報告書と言っても、竹の板を使った竹簡だが。

「……糜竺、糜芳の姉妹に陳珪、陳登の母娘。元黄巾党の廖淳に、文武両道の孫乾。そして、恐らく愛紗殿や鈴々殿と同じくらいの実力の持ち主である趙雲殿。ふむ……私が居ない間に、随分と色々な人材が集まったものですね。」

報告書には、雪里が不在の間に徐州軍の一員になった者達の一覧が書かれており、その中でも比較的優秀な者達については、別の書簡に名前と詳細なプロフィールが書かれていた。

その数は十や二十では足りない程だった。

「人材の質は兎も角、数は揃ってきましたね。」

それが、報告書を読み終えた雪里の感想だった。

正直に言えば、もっと色々な人材が欲しいと思っているが、桃香が州牧になって数ヶ月でこれなら充分だとも思っていた。

雪里はプロフィールが書かれている書簡を懐に入れると、ゆっくりと立ち上がり部屋を出た。

「先ずは、直接会ってみますか。」

そう呟きながら、雪里は城内を歩き始めた。

帰還した時は、報告を済ませようという気持ちが強かった為に気付かなかつたが、改めて城内を見渡すと見慣れぬ顔が増えているのに気付かされる。

女性が多いのはこの世界では普通だから気にする事ではないが、器量が良い女性が多いのはちょっと気になった。

「早くも英雄の片鱗……という訳では無いでしょうけど、ね。」

苦笑しながら辺りを見渡すと、目的の人物達を見つけた。

「歓談中申し訳ありませんが、少し宜しいですか？」「はい、何ですか？」

その中の一人が応えると、雪里は先ず自己紹介を始めた。

「私は、徐州軍筆頭軍師の徐元直と申します。失礼を承知で訊ねますが、貴女方は糜竺將軍と糜芳將軍、それと廖淳將軍と陳登將軍ではありませんか？」

「はい。ああ、貴女が噂に聞く筆頭軍師殿なのですな。」

四人の中で一番年長者っぽい落ち着きさはらった少女が応対すると、他の三人も雪里を見つめ始めた。

「ええ。私はつい先程帰還したばかりなので、貴女方についてよく知らないのです。それで、宜しければ少しお話をさせて戴ければと思いますして。」

「それは勿論構いませんが、私達に対してその様にへりくだる必要はございません。どうか、いつも通りにして下さい。」

「これがいつも通りなのですが……解りました、善処しましょう。」

雪里がそう応えようと、五人は話をする為に場所を移した。

その途中で、雪里以外の四人もそれぞれ簡単な自己紹介をした。落ち着きはらった年長者の少女は「糜竺」、その糜竺にどことなく外見が似ている少女は「糜芳」、明るい雰囲気で栗色の髪と瞳を持つ少女は「廖淳」、四人の中で一番背が小さな少女は「陳登」と名乗った。

歓談室に着いた五人は、小さな円卓を中心にして座り、話を始めた。

話していくにつれて、雪里は四人の人柄について把握していった。先ず、四人の中で最年長　　と言っても未だ十八歳なのだがの糜竺は兎に角礼儀正しい。

凜として尚且つ透き通る声で紡がれる口調は丁寧だし、所作は貴族のそれと変わらないのではないかと思う程だ。

聞いてみると、糜家は代々裕福な家系らしく、それに伴って礼儀作法も身に付いたらしい。

外見を詳しく見ると、胸の辺り迄伸びている黒髪は艶やかで、窓から差し込む陽の光を受けてキラキラと輝いている。

髪の色と同じ黒い瞳は見る者の心を捉える様だし、白を基調としたワンピースタイプのゆったりとした服の上からも判る胸の膨らみも相俟って、清楚ながらに少なからず妖艶さも持ち合わせている。

スカートの丈は膝下迄の長さで、短めの青い靴下と茶色のブーツタイプの靴を履いている。

装飾品は余り付けておらず、緑色の宝石がはめ込まれたブレスレットを右手首にしているくらいだ。

武器は背中に大型の弓矢を背負っており、左腰には短剣も所持している。こっちは恐らく護身用だろう。

「得物は弓矢なんですね。」「ええ。尤も、妹と違って私は将として部隊を率いた事は、未だ一度も無いのですが。」

「けど、姉の弓矢の腕は確かですよー。軍師殿もビックリするかも知れませんかー。」

糜竺が困った様に答えると、右隣に座っている少女が明るくそう話す。

その口調がどこか軽かった所為か、糜竺はその少女を窺める。

窺められた少女の名前は糜芳。糜竺を「姉」と呼んだ事から解る様に、彼女は糜竺の妹である。

確かに外見はどことなく似ている。髪や瞳の色は同じだし、身長も同じくらいだ。

だが、その口調や所作は姉とは対照的に軽く、雑だ。

服装にしても、基本的に白だけで構成している糜竺と違い、糜芳の服装は黒やら赤やら青やらと、カラフルな色合いになっている。

スカートも、糜竺がロングなのに対してミニスカート。色は前述の黒。

白のオーバーニーソックスにスニーカーの様な黄色い靴を履いており、姉と比べたら活発的な格好だ。

装飾品も、ブレスレット一つだった糜竺とは違い、ブレスレットにネックレス、アンクレットと沢山身に着けている。

只、それだけ着けても派手さが抑えられているのは、糜芳の顔立ちや体型がボーイッシュだからかも知れない。豊富な胸を持つ姉と違い、彼女の胸は同年代の平均より少し小さい。勿論、大きければ良い訳では無いが。

髪は首迄のショートヘア、ラフなTシャツタイプの服、武器は腰に下げている剣。年齢は十六歳。

それが糜芳という少女である。

「椿お姉ちゃんは、いつも山茶花ちやんかお姉ちゃんに怒られてるよねー。」

ケラケラと笑いながら、子供特有の甲高い声でそう言うのは、雪里の左隣に座っている小さな少女だった。

名前は陳登、年齢は十三歳で、この場に居る五人の中では最年少だ。

年齢の割には小柄なその少女は、顔つきも体型も幼く、十歳やそれ以下の年齢と言ってもおかしくはない。

栗色のショートのは髪はふんわりとしており、丸顔によく合っている。

丸く大きな碧色の瞳に薄い唇、短い手足に僅かに膨らんだ胸と、いかにも子供らしい体型だ。

頭には赤いワンピースが有る白いベレー帽。Ｔシャツっぽい赤い服の上には白いジャケットを羽織り、プリーツスカートも白と、服装は殆ど白で構成されている。勿論、靴下も靴も白だ。

武器は腰の真後ろで横一文字に下げている長剣の様だ。下手したら身長と余り変わらない長さに見えるが、ちゃんと扱えるのだろうか。

「まあ、椿さんだから仕方ないですね。」

「そうだねー」

「残念ですが……。」

「お姉ちゃんも皆も酷いーっ。」

栗色の髪と瞳を持つ少女・廖淳が言ったのを皮切りに、陳登や糜竺が椿 恐らく糜芳の真名だろう をからかう様に言葉を紡ぐ。からかわれた糜芳はそんな三人を見ながら怒っているが、その表情は笑っていた。どうやら本気で怒ってはいない様だ。

廖淳は地和の副官として街の警邏をしているらしく、今では街の事を知り尽くしているらしい。

年齢は十四歳で、背は雪里と同じか少し大きいくらい。胸もそんなに変わらない大きさの様だ。

栗色の髪には黄緑色のバンダナを巻いて、ポニーテールにしている。本当は黄色いバンダナを巻きたいのだが、勿論、雪里達はそれを知らない。

服装は黄緑色を基調としたノースリーブに黒いホットパンツと、運動に最適な格好をしている。

本来は黄色い布を巻いていた右手首には、空の様に澄みきった青い布が巻いてあり、ポニーテールのバンダナと共に装飾品代わりになっていた。

靴下やニーソックスは履かず、素足に青いスニーカータイプの靴を履いている。

武器は黄緑色の鞘に納められた剣で、左腰に下げている。

見た所真新しい様なので、最近手に入れた剣なのかも知れない。

それから半刻の間、五人は軍について政治について、更には雪里と四人は初対面だというのに、プライベートについても大いに語り合った。

それは雪里の真面目な人柄が、四人に安心感を与えたからかも知れない。

その雪里が四人と話してみても解った事は、彼女達は少なくとも悪い人間では無いという事だった。

性格的に気になる人間は居たが、それは軍に悪影響を与える程では無い。

話しただけなので実力については解らないが、訓練や政務の様子を見て判断すれば良いので後回しにする事にした。

「それでは皆さん、これから宜しくお願いしますね。」

話の最後に雪里がそう言うと、四人もまた同じ様に応え、平伏しながら雪里を見送った。

因みに、雪里は四人から真名を預けてもらい、自分の真名も預けている。



四人の真名はそれぞれ、糜竺が「山茶花」、糜芳が「椿」、陳登が「羅深」、廖淳が「飛陽」といった。

四人と分かれた雪里は、その足で残りの二人 - 陳珪と孫乾に会いに行った。

(陳珪殿は羅深殿の母親ですし、孫乾殿については雫からの手紙も有りましたし、楽しみですね。)

雪里はそう思いながら二人を捜し続けた。

その二人は中庭に居た。書簡に書かれたプロフィール通りの外見の二人は、何やら立ったまま話しており、口調には熱がこもっている。

とは言え口論している訳では無い様なので、雪里は普通に近付いて声を掛けた。

「随分と白熱していますね。」

雪里がそう声を掛けると二人は話すのを止め、雪里に向かって振り返った。

だが、二人はそこに居たのが見慣れない少女だった為、その少女が誰かと考えている間、言葉を失った。

「えっと……貴女は？」

やがて、妙齡の女性が訊ねると、雪里は恭しく居住まいを正しながら自己紹介を始めた。

「申し遅れました。私は徐州軍筆頭軍師、徐元直と申します。」

「ああ、貴女が噂の軍師さんなのね。私は陳漢瑜、兵糧管理を担当しています。」

「お噂はかねがね聞いておりますよ。私は孫公祐、書簡整理等を担

当っています。」

二人は雪里を見ながらそう返す。

すると、雪里は先程から感じていた疑問を口にした。

「……先程、陳登殿達と話していた時も私の噂を聞いていると言っていました。一体、どんな噂を聞いているのですか？」

「あら、噂の当人は知らないですね。」

そう言ったのは、陳漢瑜こと陳珪。

娘の陳登と同じく白を基調とした服装だが、ジャケットでは無く、和服とドレスを足して二で割った様な、袖とスカートの丈が長い服を身に纏っている。

娘と同じ栗色の髪は首の後ろで紅い布を巻いて纏めており、髪の長さは背中迄ある。

左耳には翡翠色の宝石が付いたピアス、首にはやはり翡翠色の宝石が付いたネックレスといった装飾品を身に付けていた。

身長は雪里より頭一つ分高く、胸はこの歳の女性の平均より明らかに大きい。勿論、全体のスタイルも良い。

殆どスカートに隠れているが、靴は黒いロングブーツを履いている。

文官だからか城の中だからかは判らないが、武器は何も携帯していない。

「噂とはそんなものでしょう。」

そう言ったのは、孫公祐こと孫乾。

何か可笑しいのか、微笑みながら雪里を見ている。

薄紅色の髪は短く、前髪は目にかかっていない。

服は、紺色のノースリーブの上にデニムのような生地だが赤い長袖の上着、紺色のホットパンツの上に白いミニスカートといった格好。

素足にやはり紺色のスニーカーを履いており、見た感じは余り文官らしくない。

因みに装飾品は無く、武器も持っていないかった。

雪里はそんな孫乾を見ながら、雫の書簡には自信家だとあつたなと思ひ出し、どれくらい自信家なのかより注意を払いながら訊ねた。

「それで、その噂とはどのような内容なのですか？」

雪里は孫乾をじつと見据える。

その孫乾は相変わらず笑みを浮かべながら、まるでありきたりな話をするかの様に、噂について説明し始めた。

「なに、特に面白くも何ともない事です。“徐元直は公私共に厳しく、桃香様は勿論、清宮様も頭が上がらない。”と。」

「なっ!？」

思わず驚きの声をあげる雪里。

そんな風に思われては不本意だと、雪里は二人に反論するが、

「ですが、厳しい軍律を作ったのは事実ですよね？」

「それは、まあ……。」

そう孫乾に指摘されると、不服ながらも肯定した。

確かに、涼達が徐州に来てから、雪里が軍律を改めたのは事実だった。

だが、雪里だけでなく雫や地和、桃香に涼も加わって話し合い、決めていたので、決して雪里一人で決めた訳ではない。

尤も、涼達の意見を取り纏めたのは雪里なので、雪里が責任者という事にはなるだろうが。

「だからと言って、私が清宮殿達を言いくるめていくのかの様に言われるのは心外です。」「まあまあ。確かに嫌な噂ですが、真に受けている者は殆ど居ませんから御安心下さい。」  
「少しでも居る事が問題なのですが……まあ、極力気にしない事にするわ。」

孫乾に宥められた雪里は、渋々ながら身を引く事にした。ここで二人に文句を言っても、問題が解決する訳では無いのだから。

それから雪里は、先程の四人と同じ様にこの二人とも色々話していった。

そうして話した感じでは、陳珪は穏和で常識人。いかにもあの無邪気な羅深の母親らしいなど、雪里は思う。

只、話を聞いていると時々否応無しに背筋がピンと張り詰めているのを感じたのは、少なからず疑問に思った。

(何なんでしょう……このそこはかかない不安は。)

雪里は頭を振って不安を振り払った。

一方の孫乾はと言うと、雫の手紙に書いてあった通りの自信家だった。

初めは只の自信過剰な人間かと思ったが、どうやらそうではなく、きちんとした理由が有る様だ。

(まあ……自信の無い人間よりはマシですしね。)

それが孫乾に対する雪里の感想である。

因みに、雪里はこの二人とも真名を預け合った。

陳珪の真名は「羽稀」、孫乾の真名は「霧雨」と言った。

雪里は二人との話を終えると、残った仕事を片付ける為に自室へと戻った。

不在の間、自分の代理として頑張ってくれた雫に助けて貰ったりしながら、少しずつ片付けていく。

そうして数日かけて全ての仕事を片付けたある日、雪里の部屋を桃香が訪れた。

「これは桃香様、わざわざお越しになられたという事は、何か急用ですか？」

寝台で横になって休んでいた雪里は、君主の来訪と同時に気を引き締め直しながら、部屋に入った桃香に椅子を勧める。

「ううん、別に急用じゃないんだけど、聞きたい事があって。」  
「聞きたい事、ですか？」

椅子に座りながら桃香がそう言うと、雪里は円卓を挟んで対面に座りながら再び訊ねる。

「うん。諸葛亮さんと鳳統さんについて詳しく教えて欲しいんだ。」  
「朱里と雛里について、ですか。」

雪里が確認すると、桃香は笑みを浮かべながら頷いた。  
それを見た雪里は疑問に思った。

二人については帰還した時にも説明している。それなのに今また話を聞きたいとは、どういった意図が有るのだろうか。

とは言え、君主が訊ねてきたのに答えない訳にはいかず、きちんと答えていった。

翌日、その桃香が居なくなっていた。『ちよつと諸葛亮さんと鳳統さんの所に行ってきました。護衛には愛紗ちゃんと鈴々ちゃんを連れて行くから心配しないでね。桃香』

そう書かれた手紙を読んだ雪里は、目の前に居る人物に目を向けながら訊ねた。

「……これが、桃香様の部屋に置かれていたのですか？」

「……ああ。因みにこれは、愛紗と鈴々の部屋に有った置き手紙だ。」

雪里の目の前に居る人物 - 涼は、そう言いながら机の上に二枚の手紙を並べる。

因みに此処は執務室であり、この場には他に地和、時雨、雫、星が居る。

「義兄上、済みませんが暫くの間留守にします。理由は……もうお分かりでしょうが、荊州へ行かれる桃香様の護衛です。徐州軍筆頭という大任を任されていながら、その徐州から離れる事は心苦しいのですが、私には桃香様の熱意に抗う術を持ちませんでした……。もし、軍の事に関して何かあった場合には、星や時雨に聞いて下さい。ああ、桃香様が呼んでいるので文はここ迄にします。……では、行ってきます。愛紗」

「ちよつと荊州へ行ってくるのだー 鈴々」

何ともまあ、二人の性格が如実に表れた手紙である。

雪里は二人の手紙を読み終えると、盛大な溜息を吐いた。

「何故昨日、朱里と雛里の事を聞いてこられたかと思えば……こういった理由でしたか。」

雪里は額を押さえながらそう呟いた。どうやら今回の件に関して責任を感じている様だ。

「桃香ちゃんって、普段はのんびり屋さんだけど、時々大胆な行動

をとるんだよね。」

「そうだな。俺達も子供の頃から何度驚かされたか。」

一方、雫と時雨の二人はこの状況に慣れているのか、言葉の割には余り驚きもせず、寧ろ笑みを浮かべながらそんな事を話している。

「何ともはや……どうやらここでは、思ったより楽しい日々が過ぐせそうですな。」

そう言ったのは星。君主が突然旅に出るといふハプニングに戸惑う涼達を、心底楽しそうに眺めている。

「はあ……ある意味天和姉さんより自由人だわ。」

溜息を吐きながらそう呟いたのは地和。どうやら姉である張角を思い出している様だ。

「……取り敢えず、桃香達の事は今更どうしようもないから、これからの事を考えようか。」

涼は皆を見ながらそう言った。

城門の警備兵の話によると、桃香達は昨夜の内に荊州へ向かったらしく、今から追い掛けても追い付けず、下手に騒げば要らぬ混乱を招く事になってしまう。桃香達は城門の警備兵達に「急用が来たので私達は荊州へ向かいます。後の事は御遣い様に任せてあるので、ご安心下さい。」と言って出て行ったらしい。

警備兵達は、天の御遣いが残るなら心配無いと思っただらしく、今朝方涼達が桃香達の不在に気付いて警備兵達に訊きに來る迄何もしていなかった。

「いくらなんでも、たった三人で徐州から荊州に行くのがおかしいと思わないのかなあ。」

「……まあ、私が先日迄一人旅をしていましたからね。」

涼が疑問を口にすると、雪里が苦笑しながらそう言った。

確かに、雪里はたった一人でここ徐州から荊州に行き、無事に戻ってきている。しかも沢山の兵を手土産にして。

警備兵達はそういった事実を知っていたからこそ、たった三人で徐州へ向かうという桃香達を止めなかったのだろう。

「先程清宮殿も仰られた様に、過ぎた事を言っても仕方ありません。取り敢えず、州牧代理は清宮殿に、その補佐は地和さんに任せます。」

「えっ？ 涼は解るけど、何でちいがその補佐なの？」

「桃香様が居ない今、その代わりが出来るのは二人しか居ません。」

“天の御遣い”である清宮殿と、“劉玄德の従姉妹”である地香さんだけです。」

「ああ、成程ね。」

雪里の説明を受けて、自分が対外的には「劉玄德の従姉妹」として名が通っている事を思い出し、納得する地和。

ここに居る者達は皆、地和が黄巾党の「張宝」だと知っているが、他の者達、つまりは徐州に来てからの者達は皆、地和を桃香の従姉妹である「劉徳然」と認識している。

星は仲間になったのは徐州に来てからだだが、地和の処遇について話し合ったあの場に居た為、地和の事を知っていた。

そうした事情もあり、地和は今回の人選には欠かせない人材なのだ。

「はい、そういう事です。」



「だが、桃香様の不在を羽稀殿達にはどう伝えるつもりだ？」

頷く雪里に対してそう訊ねたのは星。付き合いが長く、桃香達の人格や性格を知っている彼女達と違い、羽稀達は知り合ってから未だ日が浅い。

そんな彼女達がこの事を知ったらどんな反応をするか。大混乱に陥ったり、下手をしたら反発を招くかも知れない。

それを承知の上の涼は、雪里が星に答える前に決断した。

「……どう取り繕ったって、何れは本当の事が知られるだろう。人の口に戸は立てられないからね。」

「……それはつまり、初めから本当の事を知らせるべきという事ですか？」

涼の言葉を先回りするかの様に、結論を確認する雪里。

涼はそれに頷いて答えると、皆の顔を見ながら自分の考えを述べ始めた。

「勿論、混乱や反発は考えられるけど、桃香が徐州の州牧である限り、こんな事がまた起きないとは限らない。なら、ここで隠すよりは話した方がマシかと思うんだ。」

「確かに、桃香ちゃんならまた何かしそうだよね。」

「あいつは何に關しても一途だからな。それが良い事と判断したら、間違いなくまたやるだろう。」

涼の説明を聞いていた雫と時雨が、納得した様に首を縦に振りながら言葉を紡ぐ。

「幼馴染みである時雨達がそう言うのであれば、間違いなかるう。地和はどう考える？」

「ちいも、涼や雫達と同意見かな。桃香って、自分の事より他人が

優先って考えだから、多分またこんな事をしそうだもんね。」

星に話を振られた地和は、義理の従姉妹でもある桃香をそう評した。

その答えに星は苦笑するも、決して否定的ではなかった。

漢王朝が衰退し、黄巾党の乱や十常侍誅殺等により、世の中は乱れ始めている。

そんな世の中において、自分より他人を思いやる事が出来る桃香を、星はとても好ましく思っていた。だからこそ、ともすれば無責任かつ無謀な今回の桃香の行動も、余り大した事ではないとさえ思っている。

確かに、桃香は一時的とは言え州牧という職務を放棄している。だが、それは部下、いや、桃香の言い方で言えば仲間や友達である雪里の失敗を補おうとしての行動だ。

一時的に放棄している州牧の仕事も、事後報告とは言えちゃんと託している。まあ、了承を得る事はしていないが。

護衛に関しても、義妹である愛紗や鈴々の武はよく知っているの  
で問題は無い。

大軍に包囲されては流石に危険だろうが、野党くらいなら例え百人居ても二人には勝てないだろう。

そうした事を考えた末に、星もまた涼の考えに同意した。

残る雪里はと言うと、皆の発言に耳を傾けながら、事実を隠した場合と明らかにした場合の損得勘定を頭の中で考えていた。

どちらの場合でも損得は有る。実際、世の中の物事は損しかない、得しかないという方が少ないだろう。

そうして考えた結果、雪里もまた涼達と同じ答えに辿り着いていた。

「……どうやら、皆は清宮殿に賛成の様ですね。」

「おや、軍師殿は反対なのか？」

自分とは違う意見を口にした雪里を、意外そうに見ながら星は訊ねた。

だが雪里は、単に反対する為にそう言ったのでは無かった。

全員が何の不満も言わずに安易に賛成しては、いざという時に誰かから反対意見が出た場合に、ちゃんとした判断を下せない危険性がある。

そうならない為に、一応は意見を述べ、判断能力を養っておこうと思っていたのだ。

「反対と言う訳ではありませんが、皆さんが余りにも楽観的な様でしたのが少し気になりましたね。」

そして、その為に直接的な物言いはしない雪里。

「うっ……。」

「……そう見えた？」

「ええ。」

また、その為には少しくらい意地悪な役目も進んでやるのが、徐元直こと雪里という少女だった。

そうして話し合った結果、涼達は羽稀達を呼ぶ事にした。

主要メンバーが揃うと、涼は桃香達が急用の為に荊州へ向かった事、その間の代理を涼、補佐に地香、軍部筆頭代理と補佐はそれぞれ星と時雨が務める事を伝えた。

突然の事に皆、多少は動揺していたものの、涼達が危惧していた混乱や反発は起きなかった。

皮肉にも、警備兵達が思っていた「天の御遣いが居れば大丈夫」という考えを、どうやら羽稀達も持っていた様だ。

なんだかねで、徐州は平和である。そんな平和な徐州から遠

く西方に在る都、洛陽。

言わずとした漢王朝の首都。そこに在る屋敷の一つでは、今まさに事件が起きていた。

「……義父上、何故!？」

紅い髪の少女は、目の前に居る初老の男性を戸惑いの眼で見ながら、そう叫んだ。

紅い髪の少女が「義父上」と呼ぶ初老の男性は、紅い髪の少女の問いに答えながら抜き身の剣を振り上げた。

「お前は生きてはいけないのじゃ……呂布!」

初老の男性は呂布と呼んだ紅い髪の少女に向かって、手にした剣を振り下ろす。

呂布はそれを難なくかわすが、初老の男性は二撃三撃と追撃してくる。

その太刀筋はどれも呂布にとってはかわすのに何の苦も無いのだが、相手が義父だけに反撃が出来ないでいた。

「恋が……生きていちゃいけない……?」

「そうじゃ! じゃから、お主の義父であるこの儂、丁原自らが殺してやるう!」

初老の男性・丁原はそう叫びながら呂布・恋に向かって容赦なく剣を振り続ける。

勿論恋にその攻撃は当たらないが、反撃出来ない恋に対して攻撃が止む事は無い。

そうして暫くの間同じ事の繰り返しになっていたが、突然恋は何か足をとられて転んでしまった。「……っ!」

だが、そんな不意の出来事にも瞬時に受け身を取り、床への直撃を避ける恋。

それと同時に周りを見ると、空の酒瓶がコロコロと恋の足下を転がっている。どうやらこれに足を乗っけてしまった為に、倒れてしまった様だ。

丁原の攻撃を避けている内にもいつの間にか厨房に来ていたらしく、周りには転倒の衝撃で落ちたのか割れた皿の破片や包丁が散乱している。

と、呑気に観察している時間は恋には無かった。

「死ねええっ!!」

受け身をとっているとはいえ、床に倒れている事に変わりがない恋を見据えながら、丁原は剣を振り上げる。

だが、その剣が振り下ろされる事は無かった。

「ぐっ……っ！」

丁原が剣を振り下ろすより速く、恋は近くに落ちていた包丁を手にとると、それを丁原の腹部に突き刺した。

「あ……っ!？」

恋は包丁を手にしたまま小さく呟き、だが表情は常と違って大きく変化した。

どうやら、自分がした事に驚いている様だ。

先に攻撃を仕掛けたのは丁原だ。だが、だからと言って恋は義父に刃を向ける事が出来ない。

涼の世界に伝わる呂布なら兎も角、ここに居る呂布 - 恋は本来、

心優しい少女なのだから。

それなのに今、恋は丁原を刺している。何故か？

丁原が恋に向かって剣を振り下ろそうとする直前、恋はその意識とは無関係に体が動いていた。

それは戦いの中で鍛え上げられた、類い希なる反射神経が自分の身を守るうとした結果によるもので、そこに恋の意思は無い。

だからこそ、恋は現状を把握するにつれて包丁を持つ手が震えていった。

戦場では、初陣の時さえ武器を持つ手が震えなかったというのに。

「ち…………義父上…………っ！」

恋は手だけでなく声も震わせながら反射的に包丁を抜き、床に放り投げると、丁原から目を逸らさずにゆっくりと後ずさった。

「…………この、親…………殺しめ…………ぐふっ！」

「…………っ！」

丁原は恋を睨みながらそう言葉を絞り出すと吐血し、呆然とする恋の前にドサツと倒れた。

恋が恐る恐る近付いて確認すると、丁原はカツと目を見開いたまま、ピクリとも動かない。既に事切れているのだ。

腹部から流れ出る血は瞬く間に床を朱に染めていき、辺りを血の海に変えた。

恋は呆然としたまま、座り込んでしまっていた。

「一体何の騒ぎやつ！…………っ!？」

と、そこへ、騒ぎに気付いた少女が厨房へと駆け込んできた。

少女の髪は紫色で所々逆立っており、その瞳は鋭く力強い。

「……………霞。」

恋はその紫色の髪の少女を霞と呼んだ。だがその言葉には力が無く、視線も安定していない。

「旦那っ！ ……恋、一体何があつたんや!？」

霞は丁原の死を確認すると、その傍で呆けている恋の肩を揺さぶりながら訊ねる。

恋は目の前に居る霞にすら焦点を合わせられないまま、まるで独り言の様に呟いていった。

「義父上が……………急に斬りかかってきて……………恋は生きていちゃいけないから……………転んだら斬られそうになって……………刺した……………」

そこ迄言つと、恋は俯いたまま黙り込んでしまった。

霞はそんな恋と丁原の死体を見ながら、心の中で叫んだ。

(何でや!)

それは疑問。

(何で丁原の旦那が恋を殺そうとするんや!)

それは有り得ない事が起きた事に対する、疑問と怒り。

(あんなに仲が良かったやないか……………。血が繋がってるとか繋がってないとか関係なく、“親子”しとつたやないかっ!)

在りし日の丁原の姿と、その隣で表情は余り変わらなくても楽しそうに過ごしている恋の姿を思い出しながら、その疑問は絶叫となつて心の中に轟いていった。

そうして心の中で絶叫と思考を終えた霞は、未だに放心状態の恋へと向き直つた。

「……恋、しつかりするんや。」

「……………」

「受け入れ難いんはよう解る。せやけど、今はそないのんびりされては困るんや。」

「……………」

恋が反応しないのも構わず、霞は話し続ける。

「事情はどうあれ、丁原の旦那は死んだ。なら、今のうち等には旦那の跡を継ぐ人間が必要や。」

「……………」

「そしてそれは、旦那の娘である恋、アンタしか居らんのか。」

「……………」でも、恋は義父上を殺した。……恋にそんな資格は無い

……………」

漸く恋は口を開いた。その口調は弱々しく、相変わらず眼に力は無かったが、さっきよりは一步前進したと見た霞は更に話を続ける。

「自分の欲の為に旦那を斬つたのなら兎も角、乱心した旦那を斬つたのやから資格が無い訳や無い。」

「でも……………」

「さっきも言うたけど、今の丁原軍を纏められる人間は恋以外に居らん。選択肢は無いのや。」



「霞が居る……。」

「アカンアカン。確かにウチは部隊の指揮は出来るし旦那への恩義も有る。けど、恋を差し置いて跡を継ぐ事は出来へんのや。それこそ、資格が無いんやからな。」霞がそう言つて断ると、恋は今迄とは別の意味を持つ悲しい表情で霞を見つめた。

そんな顔が出来る程落ち着いたんか、と思いながら霞は気を引き締め、言葉を紡ぐ。

「……覚悟を決めとき。勿論、ウチも力を貸すし、恋は恋らしくしとるだけでええんや。」

「恋、らしく……。」

「そつや。旦那の娘として、今迄通りに、な。」

「……………解つた。」

逡巡の末、恋は決意し、ゆっくりと立ち上がった。

「なら、得物を持って中庭に来てや。そこで恋が跡を継いだ事を兵士達に知らせるんやから。」

「うん……。」

霞にそう言われた恋は、未だ少しフラフラしながら厨房を出て行った。

その後ろ姿を見送ると、霞は一つ息を吐く。

「誰か居るか！」

それから大声で呼ぶと、兵士が一人やってきた。

その兵士は丁原の死体を見て驚いていたが、霞の説明を受けて幾分か落ち着きを取り戻した。

霞の指示を受けた兵士が走り去るのを見てから、霞は改めて床に

倒れている「主」に語り掛ける。

「……本当に、何があつたんや。」

勿論、その答えが得られる事は無かった。

丁原軍の大將が恋になり、「呂布軍」と生まれ変わるのはその一刻後の事である。

## 第十二章 三顧の礼（前書き）

人材を得る為に、州牧自ら赴く。

普通なら有り得ないだろう。事実、呆れかえる人も居た。

だが、その評価が正しいかは誰も知らない。

もともと、他人の評価を気にしないのが桃香の良い所でもあるのだが。

2010年12月6日更新開始。

2011年2月10日最終更新。

## 第十二章 三顧の礼

「良い天気だねー。」

「本当ですね……雲一つ有りません。」

「とつても晴れ晴れで愉快なのだっ。」

三人の少女が、それぞれの馬に乗って進んでいる。

空を見上げながら、最初に言葉を発した長い桃色の髪の少女の名は劉備、真名は桃香。

徐州州牧という立場に居るのだが、そうは見えない。誰に対してもフレンドリー過ぎるからだろうか。

その桃香の声に応えた黒髪サイドテールの少女の名は関羽、真名は愛紗。

徐州軍筆頭を務める程の実力の持ち主であるクールな彼女は、桃香の義妹でもある。

最後に明るく応えた赤い髪の少女の名は張飛、真名は鈴々。

徐州軍では愛紗に次ぐ立場である彼女も桃香の義妹であり、愛紗の義妹でもある。パツと見は元氣一杯な小さい女の子だが、その実力は愛紗に勝るとも劣らないらしい。

彼女達が居るのは隆中という小さな村。未だ陽は高く、周りに目をやれば畑仕事に精を出す人々の姿が見てとれる。

「……と、現実逃避してみたけど、これからどうしよっか？」

何故か急にテンションが下がった桃香が愛紗に訊ねる。

「私に聞かれても困ります。……それに、どうするも何も、既にお決めになられているのではありませんか？」

「まあ、そうなんだけどねー。」

桃香はそう言うと再び空を見上げ、溜息を一つ吐いた。

「まさか、留守だとは思わなかったからなあ。」  
「仕方ありませんよ。先方には、私達が訪ねる事を知らせていないのですから。」

愛紗がそう応えると、鈴々も言葉を繋ぐ。

「それに、あの女の子は結構おっかなかつたのだ。」  
「そうだったね。最初は笑顔だったのに、私達が徐州から訪ねてきたって知ると、凄い剣幕で怒ったし……。あの子、何て名前だったっけ？」

「確か、“黄月英”と名乗ってましたね。あの様子だと、どうやら諸葛亮殿の親友の様です。」

つい先程の出来事を思い出しながら、三人は馬の歩を進める。

諸葛亮の家に着いて門から声をかけると、玄関から鈴々と余り背丈の変わらない一人の少女が現れた。

紅く長い髪に健康的に焼けた肌、大きな碧眼に活発そうな雰囲気  
の少女は、突然の来訪者を最初は訝しがりながらも、やがてきちんと笑顔で応対していた。

勿論愛想笑いだろすが、その時に見えた八重歯が可愛いなど、桃香は思っていた。

だが、その笑顔は怒りの表情へと豹変する。

『また徐州からなの！？ 朱里ちゃんは居ないから帰って！！』

桃香が『私は漢の別部司馬、宜城亭侯、領は徐州の牧、下丕の劉備玄徳です。』と自己紹介をした途端に、少女の顔から笑みが消え、烈火の如く怒りだしたのである。

突然の事に驚き戸惑いながらも、桃香達は何とか話をしようとした。

だが、少女はそんな桃香達の言葉には耳を貸さず、

『この黄月英が居る限り、朱里ちゃんには指一本触れさせないんだからっ！！』

と叫びながら、何処からか取り出した短剣を振り上げた。

これには桃香は勿論、愛紗達も驚き、慌てて馬に乗ってその場から離れた。

そして今に至る。

「あんな恐い女の子が居るなんて、雪里ちゃんは言わなかったのになあ。」

「雪里の性格なら、知っていれば教えたでしょう。……命に関わりますし。」

「本当に危なかったのだ！」

そう言いながら桃香は勿論、愛紗と鈴々も冷や汗を浮かべていた。

「けど……折角ここ迄来たのに、諦める訳にはいかないよね。」

「何せ、義兄上達には内緒で出て来ましたからね。」

桃香の言葉に愛紗が応える。その口調は、元来真面目な愛紗らしくない、少し意地悪な感じだった。

「うう……このままじゃ涼義兄さん達にすっごく怒られちゃうだけだよ。」

「だったら、何回も訪ねて行ったら良いのだっ。そうすれば、その内孔明とも会えるかも知れないのだっ。」

鈴々がそう言うと、落ち込んでいた桃香の表情が一気に明るくなっ  
ていった。

「そ、そうだよねっ。元々そのつもりだったし……よし、愛紗ち  
ゃん、鈴々ちゃん、諸葛亮さんと会う迄頑張ろうねっ。」

「はい、頑張りましょう。」

「頑張ろー、なのだっ!」

元気になった桃香が右手を高々と突き上げながらそう言うと、愛  
紗と鈴々もそれぞれ手を上げて応えた。

そうして先程迄の暗い雰囲気から完全に脱却した桃香達は、その  
まま宿へと馬を走らせる。

そんな中、愛紗は笑顔の桃香と鈴々を見ながら一人思案に耽って  
いた。

(しかし……先程の少女が言った様に、諸葛亮殿は本当に留守だっ  
たのだろうか?)

今来た道を振り返りながら、愛紗は考えを続ける。

(もし、本当に留守だったのだとしたら、家人が居ない家に何故あ  
の少女が居たのだ? 留守番を頼まれた、という事も考えられるが、  
普通に考えれば居留守を使った、と考えるべきであろうな。)

そこ迄考えて、引き返すべきか迷ったが、今戻っても同じ事の繰  
り返しだろうと判断する。どうやら、またあの少女に襲われるの  
は嫌な様だ。

「愛紗ちゃんっ、何してるのー?」

「あ、はい、今行きますっ。」

いつの間にか遙か前方に居る桃香が、馬を止めて愛紗に向かって手を振っている。

愛紗は馬を走らせ、距離を詰める。

愛紗が隣に来るのを確認すると、桃香と鈴々は再び馬を進めた。

一先ず今日は帰ろう、と改めて桃香が言つと三人は頷き、その場から離れていった。

翌日、愛紗は一人で襄陽の街を歩いていた。

かと言つて、只ふらついている訳ではなく、きちんとした目的を持って歩いている。

「確かこの辺りだと聞いたのだが……。」

宿の主人から聞いた目的地に向かいながら、呟く愛紗。

道行く人々をそれとなく見ると、どの人も楽しそうに微笑みながら歩いている。それにつられて愛紗も微笑んだ。

襄陽の街は荊州の治所に定められている事もあつて人通りも多く、活気に満ち溢れている。

元々、襄陽は漢水の中流域に当たり南岸にあつては樊城と対峙していたり、古来より関中、中原、長江中流域といった地域を結ぶ要の地であつた。

そうした事情もあり、漢水沿岸では最大の都市であるこの地は、交通の要衝として栄えているのである。また、栄えているという事は人が多いだけでなく物も多いという事であり、愛紗の目的にとつても丁度良かった。

「ああ、在つた在つた。」

その目的地を見つけると、愛紗は心做しかホツとしていた。



だが愛紗はその事に気付かぬまま、そこに在る建物に入ろうとした。

「……げっ。」

が、その建物から出て来た人物が愛紗を見た途端にそんな声を出す、愛紗は思わず足を止めた。

目の前に居るその人物は、よく知ると迄はいかないが忘れられない人物だった。

「黄月英殿？ こんな所で会うとは奇遇ですね。」

「……そうね。」

比較的冷静に振る舞う愛紗と違い、黄月英は明らかに愛紗を敵視して睨みつけている。

昨日の様に怒らないのは、ここが沢山の人を通る天下の往来だからだろうか。もしここが昨日と同じ場所なら、また短剣を振り上げていたかも知れない。

「……？ 蒼詩ちゃん、どうしたの？」

と、そこに、黄月英が出て来た建物から、彼女と似た背丈の少女が現れた。

手には紙袋を抱えており、買い物を済ましたのだろうと推測出来る。

「しゅ、朱里っ！？ な、何でも無いから別に気にしなくて良いわよっ。」

黄月英は慌てながらその少女を「朱里」と呼んだ。

愛紗はその少女・朱里を見ながら、以前雪里から聞いた事を思い出す。

それによると、雪里の親友である二人の少女、諸葛亮と鳳統の真名はそれぞれ「朱里」と「雛里」といった。

(……つまり、この少女が諸葛亮殿か。)

愛紗は目の前に居る少女をジッと見ながら、思案に耽る。

雪里より背が小さく、顔は幼さを残している。パツと見は鈴々と変わらない程幼いこの少女が、雪里が太鼓判を押す程優れているとは思えなかった。

勿論、人は見かけによらないという事は鈴々の義姉である愛紗がよく知っている。それでもそう疑問に思ってしまう程、少女は幼く見えたのだった。

「……貴女は？」

その少女が愛紗に訊ねる。

それに気付いた瞬間、愛紗は反射的に身構えようとした。

先程迄少女から感じていた穏やかさは最早無く、感じるのは全てを見通そうかという視線と威圧感。

雪里の話から察するに、恐らく武の心得は無い筈のその少女は、今確かに愛紗を、関雲長を圧倒していた。

(これは……っ！……フッ、どうやら私はまだまだ修行が足らんという事か。)

愛紗は少女の威圧を受け止めながらそう自嘲する。そうして愛紗が少女の威圧に耐えると、何事も無かったかの様な表情で答えた。

「私の名は関雲長。我が義姉劉玄德と義妹張翼徳と共に、とある人物を訪ねる為、遙々徐州からやってきた次第です。」

「徐州からとある人物に……ですか。宜しければ、その人の名前を教えてくださいませんか？」

「“臥龍”こと諸葛孔明殿と、“鳳雛”こと鳳土元殿です。」

少女の問いに迷う事無く愛紗が答えると、少女の表情が一瞬だけ、ほんの僅かだけ変わった。

その一秒も無い変化を愛紗は見逃さない。既に雪里や黄月英の言葉から、この少女が諸葛亮だと確信していた。

そしてそれは、他ならぬ少女自身によってより強固なものへと変わったのだった。

少女も自分の失態に気付いたのか、その口元が小さく歪む。今度は隠そうとはしなかった様だ。

「……会えると良いですね。」

「ええ。」

互いに視線を離さぬまま、言葉を交わす二人。

武と文。対極たる二つの分野をそれぞれ極めつつある二人は静かに、だが熱く視線を交えていた。

「……で、そのアンタが何でここに居るのよ？」

そんな空気を嫌ったのか、黄月英は少女を庇う様に前にながら、愛紗に訊ねる。

その問いに、愛紗は若干表情を暗くして答えた。

「実は桃香様……劉玄德様が昨夜熱を出されてな。宿に有った薬は余り効かなかったので、薬を買いに来たのだ。」

「熱冷ましの薬、ですか……。」

愛紗の話聞いた少女と黄月英は、何故か互いに顔を見合わせ、やがてしかめた。

そんな二人の行動に、愛紗は怪訝な表情を浮かべる。

「……どうした？」

「……実は、この店にはもう熱冷ましの薬は無いんです。」  
「なっ!?!」

少女の言葉に驚いた愛紗は、思わず少女の両肩を掴む。

「ど、どういう事だっ!?!」

「はっ、はわわっ!?!」

愛紗は少女の肩を揺さぶりながら訊ねる。

その表情はそれ迄の柔らかさを残した表情とは違い、武人・関雲長の形相になっていた。

そんな愛紗に揺さぶられ続ける少女は、目を回しながら可愛らしい声を上げている。

「ちょっと! そんなに動かしたら朱里が倒れちゃうじゃない!」

黄月英が怒りながら少女と愛紗の間に割って入り、少女の身を愛紗から離れた。

「あっ……す、済まない。」

「はわわ……。」

すっかり目を回した少女は、相変わらず可愛らしい声を出しながら

ら目を回し続けている。そうして少女の目が回り続けている間、愛紗は黄月英に怒られ続けた。

その黄月英も、正気を取り戻した少女から注意を受けていた。

「……つまり、貴殿の妹君と黄月英殿のお父上が発熱したので、熱冷ましの薬を買ったという訳か？」

「はい。その……済みません……。」

それから、少女達から説明を受けた愛紗が状況を把握し、少女は申し訳なさそうに俯いた。

「謝る必要は無い。私が桃香様を大切に想っている様に、貴殿等も家族を大切に想っているのだから。」

「はい。」

少女の二度目の「はい」はハッキリと、力強く口にした。家族を想う気持ちはちゃんと表明しないといけないと思ったのだから。

「……さて、ならば私は他の薬屋を探すとするか。」

愛紗はそう言って二人に背を向ける。瞬間、その二人が同時に「あっ」と声を出した。

（この街に薬屋は他にも在る……。けど、そのどこにも熱冷ましの薬は、無い……。）

少女は自分が知る事実を胸中で呟く。

（知らせないとこの方が徒労に終わるけど、知らせたらきつと悲しむ……なら……。）

少女は暫く考えいたが、やがて意を決すると、愛紗に向き直って言葉を紡いだ。待つて下さい、という少女の声に気付いた愛紗が足を止めて振り向くと、少女は手元の紙袋から小さな袋を取り出して言った。

「あの……全部は渡せませんが、少しなら……。」  
「だが、それでは……。」  
「元々、予備を含めて多めに買っていたのでこれ一つ無くても構わないんです。それより、今は早く薬が必要なんですよね？」

少女はそう言いながら、小さな袋を愛紗の目の前に差し出す。愛紗はその小さな袋を暫くの間見つめたままだったが、やがて小さく息を吐くとゆっくりとそれを手に取った。

「感謝する。」  
「どう致しまして。」

愛紗は一礼して感謝を述べ、代金を渡して小さな袋を仕舞つと再び感謝の意を示してから宿へと戻っていった。  
その後ろ姿を見送った後、黄月英がポツリと呟く。

「……予備なんか買ってないくせに。」  
「あはは……。」

少女は苦笑いするしかなかった。  
実は、少女は熱冷ましの薬を買ってはいたが、予備は買っていなかった。

「あんな奴ほつとけば良いのに……薬足りるの？」

「ちゃんと足りるから大丈夫だよ。……それと蒼詩ちゃん、いくら私を連れて行きたい人の仲間でも、困っていたら助けないとダメだよ。」

「それは解るけど……朱里はお人好しだと思うわ。」

そう言った後、続けて、だから私がシツカリしないと、と小さく呟いたのを少女は聞き逃さなかった。

その後、二人は薬を持ってそれぞれの家へと帰って行った。  
それから三日後。

「桃香様、本当に大丈夫なのですか？」

「大丈夫大丈夫　もう熱は下がってるし、そんなにノンビリしてられないしね。」

隆中への道を桃香、愛紗、鈴々の三人が馬に乗って進んでいる。  
桃香を真ん中にして、その両隣を愛紗と鈴々が守る様に馬を寄せていた。

「けど、無理して倒れたら大変なのだ。孔明の家に行くのは鈴々達に任せて、桃香お姉ちゃんは宿で休んでいたら良いと思うのだ。」  
「有難う鈴々ちゃん。でも、それはダメだよ。諸葛亮さんを説得する為に来たのに、私が出向かなかったら意味が無いもの。」  
「かといって、訪問先で倒れたりしたら先方に迷惑をかけてしまいますよ。」

「うう……それを言われると困っちゃうよう。」

気遣う鈴々に対しては確固とした意志を持って話していた桃香だったが、その意志は愛紗に対しては弱かったらしい。

うなだれる桃香に苦笑しながら、愛紗はフォローをいれた。「まあ、その誠実さと行動力は桃香様の美点ですから、そんなに落ち込

む事は無いかと思えます。」

「愛紗ちゃん……っ。」

途端に笑顔になつて愛紗を見つめる桃香。心做しか、瞳がいつもよりキラキラしている。

何ともテンションの差が激しいものだ。

「ええーっ！ 諸葛亮さん、また留守なんですか!？」

三人のやり取りの後、隆中の諸葛亮宅に着いた桃香達に待っていたのは、またしてもそんな事実だった。

今回桃香達の応対をしたのは黄月英ではなく、諸葛均と名乗る小さな少女だった。どうやら諸葛亮の妹らしい。

「済みません。姉は今朝、蒼詩さんと紺杜さん……黄月英さんと崔州平さんといった友人達と出掛けたんです。」

「どこに行つたか解りますか？」

「いえ……。姉は好奇心が旺盛で、湖に船を浮かべる事もあれば山寺に登る事もあります。ですから、妹である私も行く先迄は解らないんです。」

「そうですか……。」

諸葛均の説明を聞いた桃香は、誰が見ても解るくらいに落ち込んだ。

説得したい相手が不在というのだから当たり前だが、実はそれだけでは無かった。

彼女は、自分の為に薬を分け与えてくれた事に対して、お礼が言いたかったのだ。

しかも、愛紗の推測によれば予備の分を買っていると嘘をついて迄、その薬を分けてくれたらしい。



推測なので実際はどうか判らないが、もし本当にそうならちよつと悪い事をした気になる。

「じゃあ、また明日来ます。」

「いえ、姉は今回の様に友人と外出すると中々帰らない事もありますから、明日居るとは限りませんよ。」

「うーん……じゃあ、諸葛亮さんに手紙を残したいので紙と筆を貸してくださいませんか？」

「構いませんよ。では、こちらへどうぞ。」

諸葛均は桃香の頼みを聞き入れ、三人を応接室へと招き入れた。

暫くして紙と筆が用意されると、桃香は諸葛均に一礼してから椅子に座り、机に向かって筆を手に取った。

(只の手紙じゃ、きっと諸葛亮さんには伝わらない……だから、この手紙は誠心誠意を込めて書かないと。)

桃香はそう思いながら筆を進める。

一字一字に想いを込め、言葉を選び、相手に自分の気持ち伝える様に願いながら書いていく。

だからだろうか、同室で待つ鈴々は待ちくたびれたらしい。

「桃香お姉ちゃん、詩でも書いてるのー？ 早くしてなのだ〜。」

近くの長椅子に座っている鈴々は、足をバタバタさせながらそう言った。

「こら鈴々、桃香様の邪魔をするでない。」

「えー、だって退屈なんだもーん。」

「アハハ……鈴々ちゃん、もう少しだけ待っててね。」

共に長椅子に座っている愛紗に窘められるも、鈴々は不満を露わにし続ける。

そんな二人に苦笑しつつ、桃香は尚も筆を進めた。

「……これでよし、と。」

暫くして手紙を書き終えた桃香は、大きく伸びをしてから手紙を纏め、ゆっくりと立ち上がると諸葛均の許へと向かう。

因みに諸葛均は、同室に在るもう一つの長椅子に座り、愛紗達と対面していた。

「それじゃあ諸葛均さん、この手紙を諸葛亮さんに渡して下さい。」  
「解りました。」

諸葛均は桃香から手紙を受け取ると、大事そうに懐に仕舞った。未だ幼いのに、しっかりしている様だ。

その諸葛均は、桃香達にお茶や甘味を振る舞ったり、愛紗に訊かれた際に「孫子」の書き出し文から数ページ分を暗唱したりと、流石は噂の諸葛亮の妹という人物だった。

桃香はそんな諸葛均も連れて行きたくなかったが、諸葛亮すら連れて行けるか解らないのに欲を出しては駄目だと自制し、口には出さなかった。

そうして暫くの間話をしてから、桃香達は宿へと帰っていった。

その夜、諸葛亮こと朱里は、黄月英こと蒼詩と共に帰ってきた。

その為、劉備達にああ言っていた諸葛均こと緋里は、彼女達に悪かったかなと思った。

因みに、崔州平こと紺杜は疲れたらしく、ここには寄らずに自宅に帰っていた。

「お姉ちゃん、これ。」

「……手紙？」

「食事を終えた朱里が一息ついていると、緋里は懐から手紙を取り出し、朱里に手渡した。」

「劉玄德さんから、お姉ちゃんへの手紙だよ。」

緋里がそう言うと、お茶を飲もうとした蒼詩の手が止まる。

「あいつ等、またやってきたの!？」

「うん。お姉ちゃんが不在だと伝えると物凄く落ち込んでたよ。」

「そりゃ、あいつ等の目的は朱里を連れ去る事だもん。居なかつたらガツカリするわよ。」

「連れ去るって……アハハ……。」

蒼詩の言葉に苦笑する緋里。勿論、劉備達が朱里を無理矢理連れて行くつもりが無いのを緋里や朱里は知っていたし、恐らく蒼詩も解ってはいるのだろう。

だが、朱里を大切に想っている蒼詩にとっては、朱里が連れて行かれる事自体が許されない事なのだ。

しかも、それによって戦に巻き込まれるのなら尚更だ。

「……けど、手紙を読まないのは失礼だよね。」 朱里が呟く様に言うと、蒼詩は何か言いたそうな表情になったが、それから暫くの間煩悶すると溜息を一つ吐いてお茶に手を伸ばした。

そんな蒼詩を穏やかな表情で見つめてから、朱里は手紙に向き直り封を解いた。

『私、劉玄德は筆頭軍師徐元直の推薦もあり、徐州牧の任を一時的とは言え義兄に委ね、この隆中迄参上仕りました。』

手紙はその様な書き出しで始まっていた。

『ですが、残念ながら御不在の様で、私は虚しさを抱えたまま、一旦宿のある襄陽に帰ります。』

続いて、自身の心情と居場所を告げる。

『先年に起こった黄巾党の乱、そして十常侍誅殺と、国は乱れました。それは朝廷の権威が無くなり、綱紀が乱れ、逆賊が君を侮る有様だからです。私はそれを見ると心が張り裂けるかの様な思いになるのです。』

そして、この国の現状とそれに対する自身の思いを手紙越しに述べていた。

思ったより達筆なその文章は、その一文字一文字から切実さを直に訴えてくる様だった。

『私はこの国を救おうと思いつながら、その策を知らず、今先生におすがりする次第です。』

自分の事を「先生」と呼ばれた朱里は、顔を真っ赤にしながらも手紙を読み続けた。

『願わくば、先生の優れた才能を天下国家の為に使って戴ければ、これ以上の幸せは有りません。後日、私の気持ちを述べに参りたいと思っておりますが、取り敢えず今のこの気持ちをお手紙にしたためておきます。 劉玄德』

朱里は手紙を読み終えると、暫くの間手紙に目を落としたまま何かを考えていた。

蒼詩と緋里はそんな朱里を見詰めながら、彼女の次なる行動、行動を待つ。

「……劉玄德さんと会ってみるね。」

暫くして朱里が発した言葉は、二人にとって予想通りの言葉であり、蒼詩にとっては聞きたくない言葉だった。

「……理由は？ まさか、徐州に行きたくなつたとか言わないわよね？」

「それは判らないよ、蒼詩ちゃん。」

「朱里っ！」

朱里の答えを聞いた蒼詩は思わず立ち上がった。慌てて緋里が宥めるが、それでも蒼詩は着席しようとはしない。

そんな蒼詩を見詰めながら、朱里はゆっくりと言葉を紡ぎ出した。

「勘違いしないで、蒼詩ちゃん。雪里ちゃんに対する答えと、先日の劉玄德さん達の訪問に対して居留守を使った事。そうした言動と行動の根底である“戦いへの拒絶”は、今でも私の中に確かに有るよ。」

「それなら、どうして……？」戸惑い気味に訊ねる蒼詩に、朱里は答えとなる言葉を発した。

「一つは、州牧という立場でありながら、遠く徐州からこの隆中迄、私を訪ねてくれた事に対する礼かな。」

「……他には？」

「純粹に、劉玄德という人と会って話がしたいから。この手紙を書いた人と話す事で、私は何を為すのが正しいか知る事が出来る。そんな気がしてきたの。」

勿論、だからといって徐州に行くとは限らないけどね、と付け加える。

だが、そう言った朱里の表情は雪里の要請を断った時とも、劉玄徳の訪問時に居留守を使った時とも、薬を買いに行つて関雲長と会つてしまった時とも違う、比較的穏やかな表情だった。

それに気付いた蒼詩は半ば諦めの表情を浮かべる。

確かに、朱里は徐州に行くと言っていない。だが、あれ程忌避していた州牧との面会を望む様になっただけで、朱里の心境が大きく変化したのは誰の目にも明らかだった。

そして、そんな朱里を何とか引き留めたいと思つていても、今の朱里の心を変えるのが困難だという事も知っている。

朱里は柔軟な思考の持ち主ではあるが、一度決意した事はそう簡単に曲げない性格の持ち主でもあった。

その為、蒼詩は何も言えなかった。その日はそのままお開きとなり、朱里達はそれぞれ床に就いた。

因みに、蒼詩はいつもの様に泊まっていた。

それから三日後、桃香達は諸葛亮の屋敷を三度訪れていた。

「……やはり、貴女が諸葛亮殿でしたか。」

「はい。その……先日は失礼しました。」

応対した諸葛均によつて連れられた部屋に居た諸葛亮と対面した愛紗は、柔らかい笑みを浮かべながらそう言い、一方の諸葛亮は名乗らなかつた非礼を詫びた。

「お気になさらずに。貴女のお陰で義姉上の熱は下がったのです。

礼こそすれ、非難する事は有りません。それに……。」

「それに？」

「私達は雪里から貴女の名前や特徴等を聞いていました。勿論、貴

女の真名も。」

「つまり、蒼詩ちゃん……黄月英が私の真名を呼んだ時に、私の正体に気付いていたという事ですか。」

「ええ。」

愛紗の説明を受けた諸葛亮は、困った様にふうと息を吐いたが、一転して笑みを浮かべ、愛紗や鈴々、そして桃香を見て呟いた。

「……“大夢、誰か先ず覚む。平生、我自ら知る。草堂に春睡足りて、窓外に日は遅々たり。”……ですか。」

「えっ？」

諸葛亮の呟きが聞き取れなかった桃香は、思わず聞き返した。

「ああ、お気になさらずに。今は、今朝方目覚めた時にふと思いついた詩ですから。」

「詩、ですか。」

諸葛亮がそう言うと、桃香はキョトンとしたまま呟き返した。

諸葛亮と違って桃香は余り詩を嗜む事が無い為、興味が無いのかも知れない。

だから、その詩がこの時の諸葛亮の新たな気持ちを表していたとか、色々な意味が含まれていたとかには気付かなかった。

「桃香様、世間話も宜しいのですが……。」

「あ、うん、そうだね。……諸葛亮さん、私の話を聞いて頂けますか？」

「はい、もとよりそのつもりでしたから。……ですが、一つ条件があります。」

「何ですか？」

居住まいを正しながら諸葛亮がそう言ったので、桃香達も同じ様に居住まいを正しながら聞く体勢になった。それを見てから諸葛亮は口を開く。

「話は私と劉玄德さんの二人だけで。つまり、他の方には御退室をお願いします。」

諸葛亮の言葉を聞いた愛紗と鈴々は少なからず驚いた。もっとも、鈴々は余り話し合いに興味が無いのか、直ぐに笑顔になっていた。また、桃香はそれを望んでいたのか、余り表情を変えていない。そして数分後、部屋には諸葛亮と桃香だけが残っていた。「……一対一で話したい等と我が儘を言ってしまう、申し訳ありません。」  
「いえ、元々私達が押し掛けて来ているんですから、気にしないで下さい。」

二人きりとなった諸葛亮の部屋で最初に交わされた会話は、そんな謝罪の言葉だった。

「この間残していかれたお手紙、拝見しました。」  
「有難うございます。」  
「貴女が民を想い、国を思う気持ちがひしひしと伝わり、同時に感服しました。ですが……。」

そこ迄言うと諸葛亮は一旦言葉を切り、数秒間瞑目してから再び言葉を紡いだ。

「ですが私は御覧の通りの若輩者の上、浅学です。恐らく貴女の御期待には応えられません。」  
「いえ、それは御謙遜です。貴女をよく知る雪里ちゃんの言葉に誤りは無い筈です。」



「雪里ちゃんは黄巾党の乱が起きて以来、劉備・清宮軍の軍師として活躍してきたと聞いています。ですが、私は勉学に励むしか能の無い、只の少女でしかありません。そんな私が何故、州牧である貴女と天下の政を談じる事が出来るでしょうか。」

諸葛亮は桃香が言葉を紡ぐと直ぐ様反論した。

その弁舌はまさに立て板に水。盧植門下生で優等生だった桃香でさえ、その滑らかさに目を見張っていた。

だが、それでも桃香は盧植門下生の意地でも有るのか必死に食らいついていった。

「貴女の行動は、玉を捨てて石を拾う様なものです。」

「い、石を玉と見せようとしてもダメな様に、玉を石と言われても誰もそうは思いません。」

桃香は多少どもりながらも、最後は強い口調で言い切った。

「先生は十年に一人……いえ、百年に一人出るかどうかという程の天才。それなのに世の為に動かずに山村に身を潜めていては、忠孝の道に背くのではないのでしょうか？」

「忠孝の道に背く……。」

「今は国乱れ民安からぬ日。あの孔子でさえ民衆の中に立ち、諸国に教えを広めました。今はその時代よりも国が乱れようとしています。それなのに一人山に籠もって一身の安泰を図って良いものではないでしょうか。」

話していく内に、段々と桃香の口調も滑らかになっていく。

一方の諸葛亮は、そんな桃香の言葉を静かに聞いていた。

「今こそ、先生のような優れた人が必要とされているんです。民衆は

それを待ち望んでいます。」

そう言うと、桃香はゆっくりと立ち上がり、しっかりと諸葛亮の顔を見ながら言葉を紡いだ。

「先生、どうか私達と共に立ち上がって下さい。」

そう言った桃香を、諸葛亮はジッと見据える。

そうして暫く見つめ合ったまま時が流れたが、やがて諸葛亮が口を開いた。

「……劉玄德様、貴女のお力でも国を救う事は出来ません。」

「私の力で……？ 確かに、国を思い民を想う気持ちは誰にも負けないつもりです。けど力では、袁紹さんや袁術ちゃん達に遠く及びません。」

「では、その解決方法をお教えします。」

「えっ？」

「私の様な少女に三顧の礼を尽くして下さいましたお礼です。」

諸葛亮はそう言うと、優しい笑みを桃香に向けた。

桃香は何か言いたくなかったが、結局言葉が出ずにゆっくりと座るしか出来なかった。

それを見てから諸葛亮は言葉を紡ぎ出した。

「確かに、今の袁紹、袁術が相手では勝つのは難しいでしょう。また、孫堅、曹操といった勢力も着々と力をつけていると聞きます。

漢王朝の力が衰えた今、彼等が覇権を獲る為に争うのは誰の目にも明らかです。」

「はい……。」

「ならば天下は名門と呼ばれ、大きな戦力を持つ袁家によって二分され、孫堅や曹操達は彼等に組みするしかないのか。それとも四つ

巴や五つ巴となるのか。何れにせよ、平和な時代が来るのは未だ先でしょう。」

諸葛亮の言葉を、桃香はジッと聞き続ける。

「では、乱世を少しでも早く治める方法とは何か。単純な事です、他者より早く勢力を伸ばせば良いだけですから。」

「それはそうですけど、具体的にどうすれば……。」

「人材を集め、民心を掴み、領土を拡大する事。高祖劉邦は勿論、春秋戦国時代や殷周時代の頃から使われてきた、戦の基本を行えば可能です。」

「ですが、先程仰られた様に袁紹さん達は強いんですよ。そんな中で、どうやって領土を拡大すれば良いんですか？」

桃香の質問は尤もである。

桃香達が居る徐州は大陸の東端に在り、北には青州、西には兗州と豫州、南には揚州、東には東海と四方を囲まれており、それ等を治める者の中には先程名前が上がった曹操や孫堅といった面々が居るのだ。

「……徐州に居るままでは難しいかも知れませんね。ここは思い切つて、別の場所から始めるのも手かと思えます。」  
「えっ!？」

思わぬ発言に驚く桃香。

だが、そんな桃香には構わず諸葛亮は話を続けた。

「徐州の北に在る青州は、黄巾党が特に暴れまわった地域であり、黄巾党が滅んだ現在も依然として治安が良くないと聞いています。」

「はい……青州と接している臨句、東莞郡等でも、度々黄巾党の残党による被害が報告されています。」

桃香は悲痛な面持ちになって、以前受けた報告を述べる。

「やはり……。ですから、仮に劉玄德様が北伐を行って青州を得たとしても、治安や経済を回復させるには時間が掛かるでしょう。ひよっとしたら、黄巾党の残党によって青州は今以上に疲弊するかも知れません。」

「そして私達も今より弱体化する危険性が……。」

「はい。それに青州を得た場合、冀州と隣接します。そうになると、袁紹とも対立する危険性が出てきます。失礼ながら、今の徐州に袁紹、曹操、孫堅と戦って勝てる程の戦力が有りますか？」

「それは……。」

無い、としか言えないだろう。

どこか一勢力だけなら勝てる可能性は未だ有る。だが、一対二や一対三となってしまうと、総兵力が十万に満たない徐州軍では太刀打ち出来ないだろう。

何せその相手は、陳留を中心とした袁州を治める曹操。

豫州と建業を中心とした揚州北部を治める孫堅。

そして南皮を中心とした冀州を治める袁紹といった面々なのだから。

もし、現有戦力でこれ等の勢力に勝てたら、それは奇跡としか言えないだろう。

「劉玄德様がこの国の明日を望んでいるのであれば、一日でも早く体制を整え、不足の事態に備えるべきです。」

「……その為なら、徐州を捨てる事も必要だと言っんですか？」

「はい。」

桃香が確認する様に訊くと、諸葛亮は即座に答えを返した。

すると桃香は暫くの間諸葛亮を見つめ、やがてゆっくりと立ち上

がった。

「諸葛亮さん、今日は有難うございました。」

「おや、もう宜しいのですか?」

桃香の突然の行動にも、諸葛亮は平然としたまま対応する。

「はい。」

「そうですか。……では、返事をするのでしょうか。」

「いえ、その必要は有りません。」

「……と言つと?」

諸葛亮は眼を細めながら桃香を見た。

そこには、怒りを押し殺しながらも隠しきれない桃香の表情があつた。

「……私は、雪里ちゃんや義兄から諸葛亮さんの話を聞いて、貴女が志操の高い人だと思つてました。けど貴女は、民を捨てるという人の信賴を裏切る事を平然と言いました。……私は、そういう人は好きになれません。」

桃香はそう言つと諸葛亮に背を向けた。

徳と義を重んじる桃香にとって、徐州を捨てる「民を捨てる」という考えは端から無い。そんな桃香に民を捨てると言つのは、彼女の生き方を否定するのと同じである。

だから桃香はそう言つた諸葛亮から離れ、この部屋から出る為に出入口へと向かつていった。

「ふふふ……。」

そして出入口の戸に手をかけようとした時、小さく笑う諸葛亮の  
声が聞こえてきた。

「ふふ……あははっ。」

「……何がそんなに可笑しいんですか？」

尚も笑い続ける諸葛亮に向き直り、桃香は怒りを含んだ質問をす  
る。

諸葛亮は、そんな桃香を見ながら尚も笑い続けていたが、やがて  
笑みを含んだ真面目な表情になって言葉を紡いだ。

「どうやら劉玄德様は、噂通りの仁君の様ですね。」

「えっ？」

「お怒りになるのはごもつとも。ですが今は私の本心ではありま  
せん。失礼ながら、貴女の心を試させて貰いました。」

「試す……？」

諸葛亮の思わぬ言葉に、桃香は今迄の怒りを忘れたのかキョトン  
とした表情になっていた。

そんな桃香を見詰めながら、諸葛亮は言葉を紡ぎ続ける。

「はい。実は雪里ちゃんが誘いに来たあの日から、少しではありま  
すが貴女や徐州、そして、“天の御遣い”と呼ばれている清宮涼様  
の事を調べさせてもらいました。」

「私達の事を？」

桃香は少なからず驚いた。

何故なら、雪里が諸葛亮の屋敷を訪れたのは約一ヶ月前の事。そ  
れからの僅かな期間で情報を集めたというのだから。

涼が居た現代と違い、この世界は交通の便が余り良くない。

また、本が手に入る機会も多くない、インターネットも無いというこの世界では、同じ州は勿論、遠くの州の事を個人で知るのは難しいのだ。

「はい。そして手に入れた情報は、そのどれもが貴女や天の御遣いを誉め讃えるものでした。ですから、その情報が正しいかを確かめる為に、貴女が怒る様な事をわざと言ってみたんです。」

「そ、そうだったんですか……。」

そう説明すると、諸葛亮は桃香を見詰めながらニコリと微笑んだ。最早すっかり毒気を抜かれた様に呆けている桃香は、そう返しながら再び席に着くしか出来なかった。

「お気を悪くなされたでしょうが、どうかお許し下さい。」

「あ、いえっ、こちらこそ失礼な事を言ってしまった……。」

二人は互いに頭を下げながら謝り、苦笑した。

「……ですが、貴女がこの国の為に動いていく内に、先程の様な決断をしなければならなくなるかも知れません。それは覚えて下さい。」

再び真面目な表情になった諸葛亮に、桃香は戸惑いながら頷き、暫くの間考えてから言葉を紡いだ。

「あの、先生。」

「ふふ、先生なんてよして下さいよ。私は見ての通りの若輩者ですし。」

「なら、諸葛亮さん……いえ、孔明さん。今の私達に出来る事は無いのでしょうか？」

「そんな事はありません。今の劉玄德様……いえ、玄德様にも出来る事は充分にあります。」

「本当ですか！？ なら、それは一体何なんですか？」

互いに字で呼ぶ様になった二人は、それぞれの瞳をジッと見詰めるながら言葉を交わしていく。

そして、桃香の問いに諸葛亮・孔明はさほど時を置かずに答えた。

「簡単な事です。青州を獲れば良いんですよ。」

「えっ？ でもさつき、青州を獲っても余り意味が無いって……。」

「只獲るだけでしたら、ね。」

驚き戸惑う桃香に対して、孔明は微笑みながら一言付け加えて立ち上がると、近くの本棚から一つの巻物を取り出して戻ってきた。

その巻物を台の上に広げると、それには桃香もよく知る図が描かれていた。

「これって、この国の地図……。」

「はい。司州を始めとする漢国十四州に、五胡や南蛮を加えた地図です。」

桃香はその地図を見て思わず息を飲んだ。徐州の城に有る地図と、精度が余り変わらないからだ。

桃香が何故そんなに驚いたかと言うと、勿論それにはちゃんとした理由がある。

地図は単なる図ではなく、その国や地域に在る街の位置や地形が描かれている物である。

それはつまり、重要な情報が書かれているのと同じであり、軍事衛星による偵察等が出来ないこの世界に於いては、精度が高い地図は軍事機密として扱われていてもおかしくないのである。



「この地図は、私の師である司馬徽先生……一般的には“水鏡先生”の呼び名で知られている方なんです。その方が開かれている“水鏡女学院”という私塾を卒業した際に貰った物なんです。」

まるで桃香の心を読んだかの様に説明する孔明に驚く桃香。  
そんな桃香にやはり微笑みながら、孔明は言葉を紡ぐ。

「顔に出てましたよ、何でこんなに精度が高い地図が有るんだろう？ っつて。」  
「あう……。」

悪戯を見つけた子供の様に、バツが悪い表情になる桃香だった。

「そ、それで、青州を獲ると良い理由は何なんですか？」  
「はい。この地図を見るとよく解りますが、徐州は四方を囲まれていますよね。」

誤魔化す様に話を進める桃香に、孔明は一度微笑んでから地図上の徐州とその周辺を指差した。

「徐州は東に東海、南に揚州、西に豫州と兗州、そして北に青州と海と陸によって囲まれています。」  
「はい。」

「注目すべきは東に在る東海です。これにより東から襲われる危険性は先ずありませんが、それは同時に、東への退路が無いのと同じです。」

孔明は地図上の徐州の東に広がる海の部分を指差しながら、説明を続ける。

孔明は海から襲われる危険性は余り無いと言ったが、勿論この世界にも船は有る。

だが、この世界の船は基本的には河を進む為の物であり、海を進む為の大型船は余り無い。

必然的に、大軍を擁せる軍船を保持している諸侯は皆無と言える。そうした事を踏まえると、孔明の説明に間違いは無いのである。

「そうになると、少なくとも南北や西の何処かに退避出来る場所を得ておく必要があります。」

「あの……始めから負けるのを前提で考えないといけないんですか？」

「当然です。勝つ事しか想定していなければ、負けた時の被害は甚大なものになります。ですが、負けた場合を想定していれば、その被害を最小限に抑える事が可能になるのです。」

孔明はそう言うと再び地図に目をやり、説明を続ける。

桃香は、先程孔明が言った東海の事で頭が一杯になりそうだったが、何とか孔明の説明に集中する事が出来た。

因みに、何故そうなりそうだったかと言えば、東海について或る人物が興味深い事を言っていたからだが、桃香がそれを今の孔明に話す事は出来なかった。

「……そして、青州はその退避場所に適任なのです。」

「青州は実質的に空白地帯だし、他の州には強そうな人が居るからですか？」

「はい。袁紹は勿論、曹操や孫堅と事を構える必要はありませんし。」

「けど、さっきの話じゃ青州を獲ったら袁紹さんと対立するんじゃない？」

「恐らくは。なので、その為に此処に手伝って貰うのです。」

そう言うと、孔明はその小さな指を地図の上部分、つまり大陸北部が描かれている場所へと滑らせる。

「……幽州？」

桃香はそれを見て疑問符が付いた呟きを漏らす。

「はい。現在幽州を治めているのは鮮卑や烏桓の侵攻を防ぎ、自身の愛馬と同じ白馬ばかりで構成された騎兵部隊“白馬義従”を率い、“白馬長史”と讃えられている公孫贇。また、東海恭王・劉彊の子孫である劉虞がその補佐をしています。」「あれ？ 劉虞さんって確か、白蓮ちゃん……公孫贇と仲が悪いって聞いてたけど……。」「確かにそうですね。ですが、つい最近話し合った結果二人は和解除し、それ以来二人で協力して幽州を治めている様です。」「

孔明の説明を聞いた桃香は少なからず驚いた。

以前白蓮から聞いた話だと、異民族への対応が正反対だとか何とか色々あって折り合いがつかず、これからどうすれば良いか解らずに頭を痛めているという事だったからだ。

「その劉虞さんは東海恭王・劉彊の子孫ですから、中山靖王・劉勝の子孫である玄德様とは同族になりますね。」「

劉彊は後漢王朝の初代皇帝である光武帝（劉秀）の長子であり、当初は皇太子とされた人物だ。

その光武帝は高祖劉邦の子孫にあたり、やはり劉邦の子孫である劉勝と劉彊は同族になるのである。

「そうなりますね。なら、私も劉虞さんと仲良くなれるかなあ。」「その可能性は有りますね。人間は、少なからず同族意識を持っていますから。それに……。」「それに？」「

「玄德様が劉虞さんと仲良くなれば、幽州との協力体制を築き易くなります。」

孔明は微笑みながらそう言うと、地図と桃香を交互に見ながら話を続けた。

「玄德様と公孫賛は、盧植さんの許で共に勉学に励んだ仲だと聞いています。」

「はい、それ以来白蓮ちゃんとは親しくさせてもらってます。」

「それはとても良い事ですね。……そして、その人脈が幽州との“同盟”を結ぶ為にも有効になります。」

「同盟……もしかして、白蓮ちゃんを使って袁紹さんを牽制するんですか？」

「はい。」

桃香の問いにそう答えた孔明は一旦庭に出て石を持って来ると、それ等を地図の上に置きながら説明していく。

「青州を得た場合、隣接する冀州を治める袁紹から攻められる危険性が出てきます。ですが、もし私達が公孫賛達と同盟を組んでいれば、袁紹は北への防備を考えなければなくなり、迂闊に動く事は出来ません。」

孔明は説明しながら地図上の冀州に置いていた大きな石を徐州に向けて少し動かし、同時に幽州に置いていた楕円形の石を冀州に向けて動かす。

「もし、袁紹がそのまま軍を動かした場合、公孫賛に范陽や易京から唐や廬奴を目指して貰います。一方の徐州は、樂安郡や済南国といった冀州との隣接地点で防戦し、袁紹が撤退するのを待つのです。」

「

「けど、袁紹さんが他州に援軍を要請したらどうするんですか？」  
桃香の疑問は尤もだ。自分達が同盟を結ぶ以上、相手も誰かと同盟を結んだり援軍を要請する可能性は充分にある。

だが、孔明はそんな桃香に微笑むと、地図上の四角い石を置いて  
いる場所と三角の石を置いてある場所をそれぞれ指差した。

「そこで、この方達とも同盟、若しくは“不可侵条約”を結んでおくのです。」

「成程、華琳さんと雪蓮さんですか……。」

桃香は孔明が指差す地図上の「兗州」と「豫州」を見ながら呟いた。

兗州は冀州の南に在り、徐州の西に在る。

豫州はその兗州の南に在り、やはり徐州の西に在る。

それぞれ曹操と孫堅が治めており、軍力は勿論ながら、その統治も評価が高い。

もし、袁紹を倒す事に正当な大義名分が有れば、彼女達から助力を得られるのは勿論だが、それはつまり他州の民からの支持を得られる事でもある。

孔明はそこ迄考えてからこう告げた。

「玄德様の義兄であり、徐州の州牧補佐をしている“天の御遣い”こと清宮涼様。その方は曹操及び孫堅、そしてその娘である孫策にも一目置かれてっていると聞きます。ですから、清宮様御自ら彼女達にこの話を持って行けば、まず間違い無く成功するでしょう。」

「えっ！？ 涼義兄さんを同盟の使者に、ですか？」

「はい。この場合、徐州は兗州や豫州の助力を得たいと思ってますが、彼女達もまた、“天の御遣い”の名声を得たいのです。ですから、清宮様自らが使者に赴く事で両者と手を結ぶ可能性を高められるのです。」

そうやって、孔明は地図上の冀州に向けて四角い石と三角の石を動かした。

いつの間にか、冀州は四つの石に囲まれている。

北は幽州の楕円形の石。

南には兗州の四角い石と豫州の三角の石。

そして東には青州と徐州の丸い石が在る。

西の并州や南西の司州には石が置かれてないが、司州には首都洛陽が在り、首都を混乱させる訳にはいかないので逃げられず、必然的に并州しか逃げ道は無い。

幾ら袁紹が大軍を擁していようと、逃げ道も補給路も無ければともに戦えない。

北の鮮卑や烏桓を頼る可能性は有るが、そうなれば袁紹は完全に漢王朝の臣では無くなる。帝自ら袁紹征伐の勅命を下すかも知れない。

そうして作られた反袁紹連合は更に大軍となり、袁紹は滅びるだろう。

その後は冀州を得るだけだが、連合を組んでいた以上分割される可能性が高い。

勿論、冀州を丸々得る策も孔明は考えているのだが。

「ですが、この同盟はあくまで徐州軍が袁紹軍とほぼ互角に戦えないと意味がありません。同盟や不可侵条約は、状況によっては何の意味も無くなってしまうものですから。」

「そう……ですね。」

孔明はそう言って桃香を見据え、桃香もまた同じ様に孔明を見据えた。

孔明が言う様に、同盟や不可侵条約は互いの利が一致して、初めて成立するものである。

それは、涼の世界の歴史を見ればよく解る。

例えば明治時代の日本は、清や朝鮮半島の利権を巡ってロシアと対立。

対抗手段として、ロシアの南下を阻止したいという思惑があったイギリスと日英同盟を結び、日露戦争に踏み切って勝利した。

また、第二次世界大戦ではヨーロッパ戦線を戦うドイツ、イタリヤと日独伊三国同盟を結び、ソビエトとは日ソ不可侵条約を結んだ。これにより日本は中国戦線と太平洋戦線に集中する事が出来たのである。

だが、敗戦濃厚となった終戦間際、ソビエトは不可侵条約を一方的に破棄し、日本に侵攻している。

三国志の世界に合わせるなら、曹操軍の南下を阻止したい劉備と孫権が手を組んでいるし、高祖劉邦の時代には秦打倒を目的とした反秦連合や、楚漢戦争に於ける漢連合の例も有る。

どれも互いに利が有る内は上手くいつていたが、その利が無くなればそうはいかなかった。

同盟や不可侵条約は外交に於いて重要なものだが、使い所を間違えると痛い目に遭う危険性を伴うのである。

つまり、今回の話の様に桃香達徐州軍が袁紹軍と戦う為に公孫賛、曹操、孫堅と同盟や不可侵条約を結んだとしても、戦況が悪化すればそうした盟約も破棄される恐れが出てくる。

最悪の場合、彼女達全員が敵に回るかも知れない。

だからこそ孔明は、徐州軍の力を今以上に強化するべきだと、暗に言っているのだ。

弱いままで同盟を結んでも、後には手痛い「ツケ」が残るものなのだから。

「先ずはそうして領土を拡大し、勢力を伸ばすのが肝要かと思いません。」

「……はい。」

孔明の話聞き終えた桃香は、彼女に対して心の底から感服していた。

雪里達から話を聞いていたとは言え、実際に会って話をしてみれば噂以上の人物だと感じたのだから、それは当然だろう。

だからこそ、桃香はそのままではいられなかった。

「えっ……！？ げ、玄德様、一体何をっ！？」

桃香が突然とつたその行動に孔明は驚き、思わず立ち上がって桃香を見下ろしながら慌てふためいた。

桃香は体を折り曲げて額を床に擦り付け、両手を頭の両端近くに置いている。

それは所謂「土下座」の姿勢になっていた。

「……私は、孔明さんに謝らなければなりません。ですから、こうして床に膝を着け、頭を下げていますのです。」

「私に……謝る？」

孔明は桃香が何を言っているのか理解出来ないでいた。

先程迄、あれだけ知略や弁舌を披露していた孔明が、目の前に居るたった一人の少女の思考を読む事が出来ないのである。

孔明は、桃香が自分に対して何を謝ろうとしているのか考えた。

そんな孔明の頭の中に真っ先に浮かんだのは、桃香達が自分を徐州に連れて行くこうとしている事だった。

だが、それは桃香達の旅の目的であり、今こうして話しているのもその為である。

それなのに謝るといふのは不自然だ。謝るくらいなら初めから話し合いをする必要は無いのだから。

それから孔明は幾つか心当たりを思い浮かべたが、どれも謝るという程のものではない。



結局、理由が思い付かなかった孔明は桃香に訊ねた。  
桃香は顔を伏せたまま答える。

「……実は、私が孔明さんと話した内容の大半は、私自身の言葉では無いんです。」

「……どういう事ですか？」

孔明は戸惑いながら桃香の独白を聞く事にした。

「私は、私の義兄……清宮涼からの助言をそのまま口にしたに過ぎないんです。」

「そのまま……？」

「はい。例えば、孔明さんが“玉を捨てて石を拾う様なもの”と言ってきたら、“石を玉と見せようとしてもダメな様に、玉を石と言われても誰もそうは思いません”と答えると良い、と言われたので、私はその通りに喋っただけなんです。」

「……つまり、清宮涼さん、いえ、“天の御遣い”は私がどう考え、どう話すか予め読んでいたという事ですか？」

「そうかも知れませんが、私も、今日孔明さんと話す迄は半信半疑でしたけど、孔明さんの言葉の中に幾つも“聞いていた言葉”が出て来た時は、やっぱり義兄さんは天の御遣いなんだなあと再認識しました。」

依然として顔を伏せたままだが、その声からは誇らしげに微笑んでいる表情が容易に思い浮かぶ。

そんな桃香を見下ろしながら、孔明は思案に耽っていた。

(どついう事……？ 確かに、相手の行動を読むのは兵法にも有る。だけど、見ず知らずの人間の言葉を予測するなんて事、普通は出来る筈が無い……。噂通り、天から来た人物だから出来たという事なの？)

孔明の疑問は尤もだ。幾ら雪里から話を聞いていても、一度も会った事が無い人物の思考だけでなく発言迄予測する事等、不可能と言って良い。

これが、相手を少しでも知っているのならば未だ理解出来る。

例えば、兵法書で有名な孫子（孫武、及び孫濱）の言葉に、「敵を知り、己を知らば百戦危うからず。」とある。この言葉は「敵の情報だけでなく、味方の情報も知っていれば、何回戦っても負けはしない。」という意味だ。

その言葉通り、斉の軍師となつた孫濱は魏の大將軍で同門の鳳絹と対立した際、鳳絹や魏の兵士達の性格や気性を把握した上で策を練り、見事打ち取っている。

だが、清宮涼は孔明と会つた事も話した事も無く、雪里の話だけで孔明の行動や言動を予測している。

「孫子」「呉子」「六韜」「三略」「山海経」「呂氏春秋」「九章算術」「司馬法」「尉繚子」といった兵法書や地理書、農学書や数学書を沢山読み覚えてきた孔明でも、そんな事は出来ないというのに。

いや、恐らくこの国に居る誰であろうとこんな事は無理だろう。

尤も、天の御遣いこと清宮涼がこんな予測を立てられるのは、「三国志」に関する様々な書物から得た知識が有るからなのだが。

勿論、そんな事を孔明は知らないし、桃香も知らないのだが。

だが、そうした事実は孔明の知的好奇心を揺さぶるのに充分だった。

（……この国の様々な書物を読んで、知識を頭の隅々迄記憶する様に勉強してきたつもりですが……世の中には、まだまだ私の知らない事が沢山有るのですね。）

先程迄戸惑っていた孔明の口許が、いつの間にか綻んでいる。

解らない事に対する恐怖心は残っているが、それ以上に、知らない

い事を知りたいという探究心が彼女の心を突き動かしている様だ。

(それに……。)

孔明は未だに顔を伏せたままの桃香に目をやる。

(私を連れて行きたいのに、わざわざ言わなくても良い事を正直に話してくれた玄德様。私は、玄德様のその素直で正直な性格にも惹かれ始めている……。)

孔明はしゃがみ込んで桃香の手をとる。

「玄德様、どうかお顔をお上げ下さい。そうしてもらわなければ、私はどうして良いのか解らなくなります。」

「ですが……。」

「玄德様、先程の会話の中に玄德様御自身による言葉はありましたか？」

「はい、勿論有りました。流石に、涼義兄さんも会話の全てを予測する事は出来ない様でしたから。」　　そう言いながら桃香は僅かに頭を上げる。

「でしたら、玄德様は御自身の言葉で私を説得しています。なので、頭を下げる必要はないのです。」

「孔明さん……。」

そこで漸く、桃香は頭を上げた。

それと殆ど同時に孔明は桃香の手を両手で握り直し、その瞳を見詰め続け言葉を紡ぐ。

「玄德様の人を想うその気持ちに、私は心をうたれました。そして、

そんな玄德様の義兄であり“天の御遣い”である清宮様にも、興味が出ています。」

「え……それじゃ……?」

孔明の言葉を聞いた桃香の表情が、まるで花が咲いた様にパツと明るくなった。

そんな桃香を見詰めながら孔明は頷き、言葉を続ける。

「はい。大した力も無い私ですが、共に国事に尽くしましょう。」

「あ……有難うございます、孔明さんっ!」

「“朱里”、です。」

「えっ?」

「私の真名です。これからお仕えする方に真名を預けるのは当然ですから。」

「なら、私の事も真名の桃香と呼んで下さい、朱里さん。」

「はい、桃香様。」

桃香はそう言うと孔明・朱里の手を握り返してニツコリと微笑み、朱里も同じ様に微笑んだ。

これが、後に名軍師と謳われる諸葛孔明が世に出た瞬間だった。

桃香と朱里の二人が部屋に残って約四半刻の時間が流れた。

その間、桃香のお供である愛紗と鈴々、朱里の妹である諸葛均、そして先程来たばかりの朱里の友達の黄月英と鳳統は、大広間で二人を待っていた。

その中の一人、黄月英は愛紗と鈴々を睨み付けながら、心の中では深々と溜息を吐いていた。

( 出遅れたわね……まあ、最初から居ても多分、朱里の気持ちを变える事は出来なかっただろうけど……。 )

黄月英はそう思いながら、今度は本当に溜息を吐く。

朱里が桃香の手紙を読んだあの日から、黄月英は毎日この屋敷に  
来ている。

それは大切な友達と会う為であり、守る為だった。

自分が傍に居れば、朱里は徐州に連れて行かれない、と、半ば本  
気で思っていた。いや、思いたかった。

幾ら大切な友達を守る為とは言え、本人の意思を無視して迄引き  
留める事は出来ない事くらい、彼女だつて解っている。

只、解っている事と納得する事は似ている様で違う。

彼女は、黄月英は諦めなくなかったのだ。

大切な友達が、遠くに行つてしまわない様に願っていた。

だが、朱里が桃香と並んで部屋に入つて来た瞬間に、その願いが  
叶わなかつた事を、黄月英は悟つたのだつた。二人はまるで長年  
の親友かの様に笑いあいながら、大広間へと入つてきたのだ。

その様子に、黄月英だけでなく愛紗達も驚いている。

愛紗達からすれば難航すると思われていた交渉相手が仲良く義姉  
と一緒に入つてきた事に、諸葛均達からすれば初めはあんなに拒否  
していた相手と談笑している事に。

この僅かな時間で、一体何があつたのか。当事者である桃香と朱  
里以外の全員がそう思っていた。

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、お待たせー」

「あつ、蒼詩ちゃん達も来ていたんだね。」

共に明るい口調で言ったそれが、大広間に入ってきた二人の第一  
声だった。

それから二人はそれぞれの大切な人達、義妹だつたり実妹だつた  
り、親友だつたりと話していく。

その中で、朱里が桃香の求めに応じた事が告げられた。

「お姉ちゃん、世の中の為に動く決心がついたんだね。」

「うん。桃香様は大した才能も無いこの身に対して三顧の礼を尽くし、私を招いてくれた。私はそんな桃香様を支えたい。何れ、功なり名を遂げたら緋里ちゃんを呼べると思う。だからそれ迄、この家を守っていて。」

「解ったよ、お姉ちゃん。徐州でも頑張ってきてねっ。」

諸葛均は笑顔でそう言うと、目の前に居る姉に抱きついた。

朱里は妹が自分の胸に顔を埋め、鼻を嚙っているのに気付くと、優しくそつと抱き締める。

利発な子ではあるが、未だ幼いのも事実。本当なら一緒に連れて行きたいのだが、これから仕える相手にそんな我が儘は言えなかった。

「……蒼詩ちゃん、私が居ない間、緋里の事お願い。それと……ゴメンね。」

諸葛均を抱き締めたまま、朱里は蒼詩にそう言った。

「……謝るくらいなら行かないですよ。……まあ、緋里の事は心配しなくて良いわ。毎日遊びに来てあげるから。」

「有難う、蒼詩ちゃん……。」

涙を瞳に溜めながら言った蒼詩に、朱里もまた同じ様に涙を溜めた笑みを返す。

乱世の兆しを見せるこの時代では、下手をすれば二度と会えなくなるかも知れない。

特に朱里は、これから軍に属する事になる。ひよっとしたら戦死するかも知れないし、仕事の量が多過ぎて体を壊し、そのまま亡くなってしまいかも知れない。

朱里は勿論、黄月英もそれを承知の上で言葉を交わしていく。

やがて、黄月英も静かに朱里に抱きつき、諸葛均と同じ様に鼻を  
嚙った。

朱里はそんな大切な友達を感謝しながら抱き締める。暫くして  
二人は朱里から離れ、涙を拭くと再び笑顔を作った。

姉の、友達の門出をこれ以上湿っぽくしたくないという二人の気  
持ちに、朱里は感動しながらも笑顔を絶やさなかった。

そうして二人と話した後、朱里はもう一人の友達に向き直る。

「……雛里ちゃん。」

「……朱里ちゃん。」

互いに友達の名前を口にしながら、見つめ合う二人。

殆ど同じ背丈と体型、ほぼ同じデザインで色違いの服装。知らな  
い人に「この二人は姉妹です。」と言ったら、かなりの確率で真に  
受けられそうな程、二人は仲が良く、知り合ってからずっと傍に居  
た。

そんな二人が、今別れの挨拶を交わそうとしている。

先程、諸葛均や黄月英と言葉を交わした時に思った様に、これが  
最後の会話になるかも知れない。

そう思いながら、朱里は口を開く。

「私、行ってくるね。」

「うん……。」

紡いだ言葉は短く簡潔。言い訳めいた事も何も無い、それは言わ  
ば決意表明。

そんな言葉に、鳳統もまた頷きながら短く応える。

朱里は、頷いたままの友達を見て、やはり謝るべきかと迷い始め  
た。

「……でもね、朱里ちゃん。」

そんな朱里をチラリと見ていた鳳統が、静かに言葉を紡ぐ。

鳳統の言葉に気付いた朱里が彼女に目を向け直すと、目の前に居る少女はニツコリと微笑んでいた。

「私にも、生き方を選ぶ権利は有るよね？」

「えっ？」

鳳統が言った言葉に朱里はキョトンとするが、鳳統はそんな朱里の横を通り過ぎると、自分達とは反対側に居る一団の前で足を止める。

「貴女は……ひょっとして鳳統さん？」

「はい。お初にお目にかかります、劉備様。私の名前は鳳統、字は士元と申します。」

「あつ、御丁寧にも。私の名前は劉備、字は玄德です。」

丁寧に御辞儀をしながら自己紹介をする鳳統に、桃香もまた丁寧に御辞儀を返す。

因みに室内だからか、普段は帽子を被っている鳳統や朱里は今、帽子を被っていない。

まあ、帽子は本来日差しから頭を守る為の道具であり、屋内で被る物では無いのだからそれが当たり前なのだが。

「朱里ちゃんの事、任せて大丈夫ですよね？」

「あ、はい、安心して下さい。」

「そうですね……なら。」

桃香の答えを聞いた鳳統は一度眼を瞑ってから何かを考え、それ



から目を開くと意を決したかのように桃香を見つめた。

「……劉備様、私も朱里ちゃんと同じ様に、貴女の麾下に加えて下さいっ。」「……ええっ!?!」

桃香と朱里は、囁らずも同時に声をあげた。

突然の事に桃香は慌てふためきながらも愛紗達と相談し始め、朱里もまた慌てながら鳳統に駆け寄っていく。

「ひ、雛里ちゃんっ、一体どうしてっ!?!」

「そんなの決まってるよ、朱里ちゃん。私も世の中を良くしたいと思っただからだよ。」

朱里の疑問に鳳統は微笑みながら答える。

「で、でもっ、雪里ちゃんが誘った時は断ったじゃない。」

「あの時は朱里ちゃんが断っていたからだよ。……もし、あの時朱里ちゃんが雪里ちゃんの誘いを受けていたら、多分私もそうしてたよ。」

「っ! ……それって……。」

鳳統の言葉にピンときた朱里はジッと鳳統の眼を見ながら、彼女の次の言葉を待つ。

「うん。私は朱里ちゃんと一緒に、この世の中を変えていきたい。

朱里ちゃんは私にとって大切なお友達だもの。協力したいって思うのは、当然でしょ?」

「雛里ちゃん……っ。」

朱里は感極まって鳳統の右手を両手で握り、鳳統もまた空いてい

る左手を朱里の両手に重ねた。

同じ私塾に通っていた親友は、互いを想い、切磋琢磨しここ迄きた。

きつとそれは、これからも変わらないのだろう。

二人はそう確信しながら見つめ合い、やがて微笑みながらゆつくりと離れた。

鳳統は改めて桃香に向き直る。その瞳は真つ直ぐに桃香を捉えており、それに気付いた桃香は表情を引き締めて鳳統に向き直り、厳かに訊ねた。

「鳳統さん、先程の言葉は貴女の本心ですか？」

「勿論です。あの……私が徐州軍に入るのは駄目ですか？」

「そんな事ありませんっ。元々、朱里ちゃんの説得が終わったら結果がどうあれ、鳳統さんにも会うつもりでしたし。」

「なら、問題ありませんね。朱里ちゃん共々、これから宜しくお願いいたします。」

「あ、はい。こちらこそ宜しくお願いします。」

再び御辞儀をする鳳統につられて御辞儀をする桃香。

こうして、桃香は呆気ない程簡単に鳳統を得た。

朱里を得る為に必死になって説得した桃香は、鳳統も同じ様にないと難しいだろうと覚悟していた。

それが、論戦どころか自己紹介と少しのお喋りだけで麾下に入りたいと言ってきた。

ハッキリ言って拍子抜けだが、あの緊張感はそう何度も味わいたくないとも思っていたので、ホッとしているのもまた事実だった。

何はともあれ、「臥龍」と「鳳雛」はこうして徐州軍の一員となったのである。

その日はその後、皆で歓談をしてから解散となり、夜には朱里と鳳統の送別会が開かれた。

実は二人共既に旅支度を済ませており、直ぐにでも徐州へ向かうつもりだったのだが、桃香は流石に気が引けたらしく、出発は明日にという事になった。

今は食事を終え、朱里、鳳統・雛里、諸葛均・緋里、そして黄月英・蒼詩の四人は二つの長椅子に二人ずつ座って対面しながら話している。

話の内容はたわいない世間話に昔話と、いつもと同じ談笑。

だが、今夜ばかりはそればかりでいられない事を、この場に居る四人は気付いている。

そして、話の雰囲気を変えたのは、この屋敷の家主である朱里だった。

「……緋里、蒼詩ちゃん。我が儘言ってゴメンね。」

「お姉ちゃん、それはもう良いよ。それより、劉備様や御遣い様の許で頑張ってきてね。」

「うん、お姉ちゃん頑張るからね。」

「……まあ、朱里が徐州に行くのは何となく予想していたから良いわよ。……けど、まさか雛里迄とはねー。」

「あ、あわわっ。」

蒼詩にジト目を向けられた雛里が、慌てながら目を伏せる。

そんな雛里を隣に座っている朱里が落ち着かせ、蒼詩にはやはり隣に座っている緋里が宥めていった。

「蒼詩お姉ちゃんはお姉ちゃんの事になると、周りが見えなくなるからねー。雛里お姉ちゃんがどうしたいか気付かなかったのは無理無いよ。」

「えっ？ て事は緋里は気付いていたの？」

「うん。雛里お姉ちゃんはいつもお姉ちゃんと一緒だから、お姉ちゃんが徐州に行く事になったら絶対に一緒に行くんだろっなと思っ  
ていたよ。」

緋里は笑顔でそう言いながら、朱里と雛里、そして蒼詩を見ていく。

蒼詩はそんな緋里を見ながら、やっぱり朱里の妹だなと感心していた。

(……ううん、私が凡人なだけ。朱里も雛里も、そして緋里も才能があるし。……なんだ、そうだったのか。)

その最中、蒼詩は朱里達を見ながら気付いた。

(我が儘を言っているのは、朱里でも雛里でも、勿論緋里でもない。私だったんだ……。)

愕然としながらも、蒼詩はその表情を平静に保っている。

折角の門出なのに雰囲気は暗くする訳にはいかない。なにより、その事実には負けたくなかった。

(……そうよ。今は朱里達の傍に居るのが相応しくなくても、いつかきつと相応しい人間になってみせるわっ！)

蒼詩は心の中でそう固く決意し、親友との暫しの別れを受け入れたのだった。

翌日、朱里と鳳統の旅立ちの見送りには諸葛均や黄月英だけでなく、崔州平を始めとした水鏡女学院の同窓生達も来ていた。

朱里と鳳統はその彼女達と話しており、少し離れた所で桃香達はその様子を微笑ましく、そして少し申し訳無さそうに見守っている。そんな中、鳳統は朱里が手にしている物に気付いた。

「朱里ちゃん、それって……。」

「うん、卒業の時に水鏡先生から戴いた“羽毛扇”だよ。」

朱里の手に有るのは、白い羽で作られている扇。

涼が居た世界の諸葛孔明のトレードマークでもあるその「羽毛扇」は、こちらの世界の諸葛孔明である朱里も持っていた様だ。

「いつか、こうして世に出る時に持って行こうと思っていたの。…  
…大分遅れたけど、漸く、その時が来たよ。」

そう言った朱里の表情は、嬉しさと申し訳無さが同居していた。恐らく、恩師の教えを生かそうとせずにこの隆中で晴耕雨読の生活しかなかった事を悔いているのだろう。

叔父夫婦への恩返しや、その叔父夫婦を亡くした事による悲しみの所為とは言え、自身が学び得た事を世の為に役立てなかつた事もまた事実。

だからこそ、旅立てる今日という日をとて嬉しく感じているのだ。

「うん、やっぱり朱里ちゃんは世に出ていくのが一番だよ。なんてって、水鏡女学院始まって以来の秀才なんだし。」

「雛里ちゃんだって、水鏡先生に認められていたじゃない。」

あはは、と、二人を中心とした一団の明るい声が響いた。

だが、そんな一時にも終わりはやって来る。

朱里と鳳統は、同窓生達に一礼すると、桃香達の許に向かった。

「お待たせしました、桃香様。では、参りましょうか。」

「もう良いの？」

「はい、余り長く話していても別れが辛くなるだけですから。」

「……そっか。」

朱里と鳳統の表情から彼女達の心境を察した桃香は、諸葛均達に一礼し、愛紗達と共に木々に繋いでいる馬達の許に向かう。

そんな桃香達に向かって、「宜しくお願いします」や「頑張れっ」といった声が掛けられる。

よく見れば、あんなに徐州行きを反対していた黄月英でさえ、笑顔で手を振っている。

そこに嘘や我慢が無く、心からの行動なのは表情や声から解った。だから、二人はそんな家族や友達に向かって手を振りながら、笑顔でこう応えるだけで良かった。

「みんな……行ってきますっ。」

こうして、臥龍鳳雛は歴史の表舞台に出たのだった。

### 第十三章 劉備の北伐、清宮の南進・前編（前書き）

青州は混乱していた。

本来居る筈の州牧は居らず、全国的には滅んだ筈の黄巾党はこの地では未だに健在していたからである。

だが、人々は希望を捨てていなかった。それには理由が二つあった。

一つは、州牧代わりに活躍している孔子の子孫である孔融の存在。

そしてあと一つは……。

2011年2月10日更新開始。

2011年7月13日最終更新。

### 第十三章 劉備の北伐、清宮の南進・前編

「今ですっ！ 関羽隊は右翼から、糜竺隊と糜芳隊は左翼から攻めあがって下さいっ！！」

「「「応っ！！」」」

軍師の指示を受けた関羽・愛紗、糜竺・山茶花、糜芳・椿はそれぞれの部隊を率いて、目の前で自分達に背を向けている「敵」に向かって突撃を開始する。

その敵は、後方に在る丘の向こうから現れた「新手」に対して動揺するばかりであり、今迄追いかけていた「獲物」を追う事すら出来なかった。

その獲物・田豫隊は、敵が混乱したのを確認すると偽りの逃走を止め、反転して敵に向かっていく。

田豫・時雨の部隊が自分達に向かって来ているのに気付いた敵は、後方から来る三部隊に応戦しながら、更に一部隊とも戦わなくてはならなくなった。

つい先程迄は倍の戦力をもって相手を圧していた敵は、今では逆に三倍から四倍の戦力を相手にしている。

正規兵ならまだしも、農民上がりで何の訓練も受けていない彼等に、この状況を覆せる力は無かった。

結局、それから半刻もしない内に敵は壊滅した。

後方で戦況を見守っていた少女がそれを確認すると、隣に居る軍師に話し掛ける。

「これで、この辺りの黄巾党は倒せたかな？」

その問いに、軍師の少女は微笑みながら答えた。

「はい、これで青州の半分は解放出来たと言って良いでしょう。先



ずはおめでとうございます、桃香様。」

「有難う。けどこれは、実際に黄巾党と戦った愛紗ちゃん達や、策を考えてくれた朱里ちゃんのお陰だよ。有難うね。」

「勿体無い御言葉です。」

軍師の少女・朱里は、隣に立つ少女・桃香の謝辞に顔を赤らめながら頷くと、羽毛扇で火照る顔を覆った。

実際、今回朱里が執った策はそれ程大した事ではない。

先ず、囷となる部隊が黄巾党と戦い、わざと負ける。

その部隊はそのまま敵を引き付けながら敗走し、兵を潜ませている丘を横目に突き進む。

そうして敵が丘を通り過ぎてから伏兵を動かして、敵の背後を衝く。

後方からの攻撃に敵全体が混乱した所で、囷部隊を反転させて反撃に移る。

前後からの挟撃に黄巾党が対応出来る訳は無く、簡単に壊滅する。

正規兵相手なら、多少は抵抗されたり、そもそも策にかからないかも知れない、基本的な策。

勿論、それを実行出来る将兵が居なければ策に意味は無く、愛紗達はそれを見事にやってくれている。

それにより、最小限の被害で最大限の成果を出せたのである。「それで、これからどうするんだっけ？」

「北海国の平寿に向かいますよ。現在、暫定的に青州を治めている孔融さんと合流するんです。既に私達を受け入れるという返事は貰っていますし、一度兵を休ませる必要もありますから。」

桃香は朱里の提案を採用し、兵を纏めて小休止をとってから平寿へと向かった。

今居る場所から平寿迄は、兵を率いて移動しても半日もかからない。

今から移動すれば、夕刻には到着するだろう。

「……涼義兄さんは、上手くやってるかな。」

平寿への移動中、桃香は何気なくそう呟いた。

「大丈夫ですよ、桃香様。護衛には鈴々が居ますし、雫や霧雨が補佐についていますから弁舌で負ける事も無いでしょう。」

「そ、そうだね。」

桃香を護る為に隣を進む愛紗の言葉に、多少どもりながら返事をする桃香。

（まあ、身の安全や交渉についてはそんなに心配してないんだよね……。じゃあ、私は何について不安なんだろう……。）

漠然とした不安を胸に抱いたまま、桃香は平寿に着いた。

未だ続く戦いに備えて休息をとる為に。

その前に、徐州牧である桃香が青州に居る事の説明が必要だろう。話は、三ヶ月前に遡る。「着いたーっ。」

「のだーっ。」

隆中を出てから約一週間後、本拠地である下丕に着くと、桃香と鈴々は安堵の声を上げた。

「二人共、何を呑気に言っているのです。早く義兄上達に報告に行きますよ。」

「……やっぱり、行かないとダメ？」

「当たり前です。」

先程と違って、何故か気乗りしない桃香を軽く睨む愛紗。  
桃香はその眼力にビクツと肩を震わせると、苦笑しながら言葉を紡ぐ。

「わ、解ってるよう。ちゃんと報告して……怒られてきます。」

「そうして下さい。私達も一緒に叱られますから。」

「鈴々もなのかー?」

「当然だ。」

愛紗に断言されて、鈴々も桃香と同じくうなだれる。

州牧と将軍が揃って落ち込んでいる姿というのも、中々シユールな光景だ。

因みに、朱里と鳳統はそんな三人を見ながら戸惑っていた。

「あわわ……大丈夫なのかな。」

「はわわ……た、多分……。」

この時、二人は徐州に来たのをちよつとだけ後悔していたのかも知れない。まあ、そんな自覚はない様だが。

その後、桃香達は愛紗に促されながら城の中へと入っていった。

これからの事を考えると逃げたくはなかったが、勿論逃げられる訳は無いのだった。

「……えっ?」「」

「はわわっ!?!」

「あわわっ!?!」

執務室にやってきた桃香達は、そこに広がっている光景を見て絶句した。

「ぐー……。」「」

「すやすや……。」

普段は桃香が座っている執務用の机の側に在る長椅子に、二人の人物が穏やかな寝息をたてて眠っている。

一人は元黄巾党ナンバー2で、今は桃香の従姉妹という設定の張宝。またの名を劉燕。真名は地和、若しくは地香。今は劉燕の姿なので地香と言うべきか。

そしてもう一人は桃香の義兄にして、天の御遣いである清宮涼。

まあ、ただ眠っているだけなら、それ程驚く事ではない。何故なら、この長椅子は疲れた時の仮眠用として使う事も多々あるからだ。だが、二人はただ眠っているだけではない。

涼は仰向けに寝ており、その上に地香が俯せに寝ている。

しかも涼の左手は地香の腰に回っており、心做しか二人の服装や髪が乱れている様に見える。

勿論、二人共ちゃんと服は着ているのだが、状況が状況だけに、少しの乱れも目につき、何かあったのではないかとの疑念が出て来る。

そこに、

「ふむ、昨夜は地香と一緒にだった様ですな。」

という声が桃香達の後ろから聞こえてきた。

「せ、星さん!?!」

「これはこれは桃香様。どうやら、仕事を放り出して逸行った人材獲得は上手くいった様ですな。」

「うう……星さんが意地悪する。」

桃香達の後ろに居たのは趙雲、真名を星という少女だった。

その星の皮肉にうなだれる桃香だが、愛紗はそんな彼女の肩に手を当てながら非情な言葉を紡ぐ。

「仕方ありません。仕事を丸投げしたのは事実なのでから。」  
「愛紗ちゃんっ。」

厳しい義妹の言葉に、桃香はやはりうなだれるしか出来なかった。

「ん……何の騒ぎ？」

と、そこに、涼に抱きかかえられる様にして寝ていた地香が、そう言いながらゆっくりと起き上がった。

「あっ、桃香お帰りー。」

「た、ただいま地香ちゃん……。」

寝ぼけ眼の地香は、目を擦りながら桃香達を確認すると「地香」の姿になっているのを忘れていたらしく、口調は「地和」のままだった。

それに気付いた桃香は地和に近付き、朱里と鳳統に聞こえない程度の小声で指摘する。

途端に地香の表情が引き締まり、雰囲気「地和」から「地香」へと変わっていく。

「そ、それで、勧誘は上手くいったの？」

「う、うん。ほら、この二人がそうだよ。」 未だ若干「地香」を演じきれない様だが、それをフォローするかの様に桃香が話を合わせる。

その後、桃香から地香について説明された二人は、執務室に入った時と変わらず慌てたまま自己紹介をしていく。

「はわわっ。は、初めましてっ、私は諸葛孔明と言いましゅっ。」

「あわわっ……。は、初めましてっ、私は鳳土元と言いましゅ……っ。」

「……何この可愛い生き物達。」

噛み噛みに自己紹介する、見た目は幼い少女達。

地香はそんな二人に見とれながら、「そのままの姿勢」で改めて自己紹介を返した。

余りにも自然にしているので朱里達もそのまま話し続けたが、やはり不自然さは否めない。仕方無いので、桃香が地香に訊ねる事にした。

「あ、あのね地香ちゃん。」

「なあに？」

「……なんで、そこで寝ていたのかな？」

「そこ？」

桃香が何を言っているのか疑問に思った地香だったが、その視線が自分の足下にあると気付くと、そのまま視線を下げていく。

するとそこには、有る筈の寝台の敷布は無く、何故か涼が寝ていた。

「……………えっ、ええええっ!？」

予想外の事態に驚いた地香は、悲鳴と共に涼から飛び降りていった。

「いて……。っ。何だよ一体……。」

地香が飛び降りる際に腹部を踏んだらしく、その痛みで目が覚めた涼はお腹を手で押さえながら、ゆっくりと起き上がった。

「ん……？ ああ、お帰り桃香。」  
「た、ただいま。」

先程の地香と同様に、未だ寝ぼけ眼のまま桃香を確認する涼。  
次いで、愛紗、鈴々、地香と確認していき、二人の少女の所で見  
が止まる。

「桃香、もしかしてこの子達が？」  
「うん、諸葛孔明ちゃんと鳳土元ちゃんだよ。」

桃香に名前を言われた朱里と鳳統は、やはり噛み噛みのまま自己  
紹介をしていく。

涼もまた地香と同じ感想を抱いたが、違う感想も抱いていた。

（雪里から聞いていたとはいえ、本当に小さい女の子なんだな。け  
ど、三国志でも有数の名軍師であり、“臥龍”と“鳳雛”の異名を  
持つあの諸葛亮と鳳統なんだから、きつと凄いだらうな……。）

涼はそう思いながら居住まいを正す。寝起きなのでイマイチ締ま  
らないのだが。

「お二人共初めまして。こんな格好で悪いけど自己紹介させてもら  
うよ。俺がこの徐州の州牧補佐を務めている、清宮涼です。暫くは  
慣れないかも知れないけど、解らない時は遠慮なく俺達に聞いてね。」

そう言っつて、涼は朱里と鳳統の前に右手を差し出す。

二人は暫くの間その手をジツと見つめていたが、やがてゆっくり  
と手を伸ばし、それぞれ握手を交わした。

「よ、宜しくお願ひしましゅっ。」

「お願いしましゅつ。……あわわ、また噛んじゃった……。」

握手しながら言った朱里と鳳統の言葉は、やはり噛み噛みだった。最早噛むのは彼女達のデフォルトだなと思いつつ、涼は二人と会話をしていく。

その中で、雪里の事が出て来ると二人共嬉しそうな表情になった。同じ私塾に通っていた仲間であり親友なのだから、その反応は当然だろう。

「積もる話も有るだろうけど、取り敢えず、二人共荷物を置いてくると良いよ。鈴々、帰ってきたばかりで悪いけど、二人をこの部屋に案内してやって。」

「解ったのだつ。」

涼から部屋の場所が記された竹簡を受け取った鈴々は、朱里と鳳統を連れて執務室を出て行った。

執務室に残ったのは、涼、桃香、愛紗、星、地香の五人。

涼は桃香と愛紗に対して、旅から無事に帰ってきた事を喜び、諸葛亮と鳳統を連れてきた事を誉め、黙って旅に出た事を叱った。

とは言え、その声には義妹達を見守る義兄らしい温かさがあった。それを感じ取った桃香と愛紗は、義兄の優しさに感謝しつつ謝った。後で鈴々も謝らせようと思いつつながら。

そうして涼の話が一通り終わると、桃香と愛紗は一度顔を見合わせてから涼と地香に向き直り、先程から思っていた疑問を投げかけた。

「……義兄上。」

「ん？」

「義兄上は何故、地香と一緒に寝ていたのですか？」

「えっ？」



「……………」

愛紗が訊ねた瞬間、地香の顔が焦りの表情に変わる。

だが、涼は間の抜けた声を出して愛紗と桃香、そして地香を見るだけだった。

「えっと……………何の事？」

「っ！……………惚けるつもりですか？」

「いや、惚けるも何も俺は徹夜で政務をやっていただけだし。それが終わったのが明け方で、部屋に戻るのもキツかったからここで寝たんだ。」

「……………一人で、ですか？」

「一人で、だよ。」

そう答えた涼を暫く見つめていた愛紗と桃香だったが、その視線はやがて涼の後ろに立つ地香へと向けられた。

それに気付いた涼も同じ様に地香に目を向ける。何故か地香は目を合わせようとしていなかった。

「……………地和？」

涼が彼女の本当の真名を呼ぶ。

地香の正体を知っている者だけの時も余り言わなくなった、その真名を。

久し振りに聞く自分の本当の真名にピクリとする地香。だがそれでも彼女は目を逸らし続ける。

「地和、愛紗が言ってる事は本当なのか？」

「そ、それは……………」

「正直に言わないなら、今日の政務を全部やってもらうよ。」

「そ、それは……っ。」

涼がそう言って圧力をかけると、地香は更に焦っていく。それから暫くの間、地香は涼達の視線に曝されながらも沈黙し続けたが、やがて観念したかの様に溜息を吐くと、ゆっくりと涼達に向き直った。

「……愛紗が言った通りよ。ちいは涼に抱きついて寝てたわ。」

「何でそんな事を……。」

「言わなきゃ解らない？」

先程迄と違い、落ち着いた表情と声で涼を見詰めながら言った地香に戸惑っているのか、涼は勿論ながら桃香達も言葉を返せなかった。

地香はそんな涼達を見回してから息を吐き、言葉を続ける。

「……まあ、今は言わないでおくわ。何せ、ここにはお喋りな人が居るからね。」

地香はそう言って一人の少女に目を向けた。

「おや、心外ですな。私のどこがお喋りだと？」

振り袖の様な白い服を着こなしているその少女は、不敵な笑みを浮かべながらそう答える。だが、この時実は涼達も地香と同感だった。

白い服の少女・星は基本的には真面目なのだが、時々不真面目になる。いや、ひょっとしたら不真面目な時が多いかも知れない。

その不真面目な面が出るのが調練の時ではなく、味方の私事の時ばかりというのは幸いではあるが。

ただ、私事とは言え、ちょっかい出される方からしてみれば、迷惑な事に変わりはなく、それ故に皆注意をしていたりする。

「まったく……どの口がそれを言うのか知らないけど、ちいはこの前の事を忘れてないわよ。」

「この前……？ はて、どれの事を仰っているのかな？」

「そんなの、“あの歌”の事に決まっているじゃない！」

地香は星に向かってそう叫ぶ。

だが、話の内容が解らない涼達はキョトンとしていた。

「「「……あの歌？」」」  
「あ。」

奇しくも三人の声が揃った事で、地香の熱くなっていた思考が瞬時に冷えていく。

あたふたとしながら言い訳をする地香。そんな彼女を星がニヤニヤしながらと見つめている事に地香も気付いたが、それに抗議する事すら出来ない程、慌てふためいている。

結局、「あの歌」について知られたくないらしい地香は、それ以上追及出来なかった。

一体どんな歌なのか気になった涼だったが、地香に睨まれると直ぐに諦めた。触らぬ神に祟り無し、である。

その地香がこの場から早く離れたがっているのに気付いた涼は、諸葛亮や鳳統を皆に紹介しようと提案し、その場は解散となった。

(うう……ちょっとだけと思って抱きついていたら、そのまま眠っちゃうなんて……ちいとした事がしくじったわ。)

執務室から一旦自室へと戻る道すがら、地香はそんな事を思って

いた。

地香が心中で呟いている通り、始めはちょっとした出来心だった。桃香が荊州に行つて以来、州牧代理となつた涼とその補佐を任せられた地香は、毎日政務に勤しんでいた。

この世界の人間ではない涼は勿論、黄巾党時代は優秀な妹が居た地香もまた、こうした頭脳労働は余り得意ではない。

一応、立場上ずっと桃香を補佐してきた涼は少なからず出来るが、それでも州牧の桃香や文官筆頭の雪里と比べたら大きく落ちる。

桃香はいつも大変そうにしながら政務をしていたが、盧植の許で学んでいただけあつて、実は結構飲み込みが良かったりする。

州牧代理やその補佐という立場になつて初めて、涼達は桃香の凄さを思い知つたのだつた。そう思いながら二人は政務をこなしていったが、慣れない仕事や自身の許容量を超える書簡の数に、若くて体力に自信のある二人も数日で疲労困憊になつていく。

その為、休み休みに仕事をしていったが、やむを得ず徹夜になる事も勿論あつた。

昨夜も二人は徹夜する筈だったが、地香の疲れが目に見えていた為、涼はその仕事を一手に引き受けた。

勿論、地香は大丈夫だと反論したが、最後は州牧代理命令だと言われてしまい、仕方無く自室にて睡眠をとる事にした。翌朝、早くに起きて手伝おうと思ひながら。

普段は早起きが苦手な地香だが、今朝はちゃんと起きる事が出来た。

起きると直ぐに身支度を整え、執務室へ向かう。

徹夜したであろう涼がそこに居るか、自室に戻ったかは判らなかつたが、どっちでも良かった。どっちにしる、政務に取り掛かる予定だったのだから。

執務室の扉をノックする。寝ている場合の事を考えて控えめに。

返事は無かつた。居ないのかと思ひながらゆっくりと扉を開くと、長椅子に寝ている涼の姿が目に入ってきた。

机の上の書簡を見ると、その殆どが処理されていた。今日の分はこれから届けられるだろうが、どうやら今は何もしなくて良い様だ。折角張り切って来たのに意味無かったかな、と、思いながら、地香は何気なく涼を見た。

よっほど疲れているのか、地香が来た事に気付いて起きる気配は無い。

だからだろうか、地香はちょっと大胆になってみた。

その行動に若干の後ろめたさを感じながら、地香は涼の顔にそつと手を当てる。

起きる気配はやはり無い。続けて、上半身だけ体を預ける。

涼の温もりと鼓動を感じると、自分の体温が上がり、鼓動が速くなっていくのを感じた。

年齢的及び精神的に大人と少女の狭間の地香でも、何故そうなっているかの理由は解っている。

それがどういった感情によるものか、この次はどうしたいかも解っている。

だが、だからこそ地香は躊躇う。

こんな事をして良いのか？ “あの子”は今居ないのに。

恐らく、自分と同じ想いを抱いているであろう少女の顔を思い浮かべながら、地香は涼の顔を覗く。

結局、ちょっとだけ誘惑が勝った。

彼女が本来望んでいる事は勿論しないものの、涼が起きていたら多分してくれない事はやってみたい。

だから、上半身だけでなく体全体を涼に預けてみた。

ほんの少しだけ、と思いながらしたその行動が、先程の騒動の原因になったのだった。（まさか、あのまま寝ちゃうなんて……。しかも、そんな時に限って桃香達が帰ってくるし……。）

感じた温もりや鼓動が心地良くて、つい二度寝をしてしまった。

それ自体はそれ程後悔していないが、その場面を桃香達に見られ

た事は後悔している様だ。

(後で何か言われるわよね……。まあ、遅かれ早かれこんな日が来るのは解っていたけどね……。)

地香は髪を梳きながらそう覚悟を決めると、衣服を整えてから自室を出た。

だが、結果的にはその覚悟は要らなかった。何故なら、

「彼女達が、新しく私達の仲間になった軍師の諸葛亮ちゃんと鳳統ちゃんだよ。」

「しょ、諸葛孔明でしゅつ。」

「ほ、鳳統でしゅつ。あう、また囁んじやった……。」

というやりとり、所謂、自己紹介が玉座の間であった為に、桃香による詰問は無かった。

因みに、朱里と鳳統を見た諸将の感想は、往々にして先程の地香や涼と同じだったらしい。

勿論、二人の容姿からその実力を疑問視する者も居たが、隆中で朱里が桃香に対して行った献策 青州獲得とそれに伴う同盟の構築 を改めて涼に語り、鳳統が徐州軍の改善策を述べるのを見ると、皆一様にその認識を改めていった。

彼女達の自己紹介が終わった後に詰問されるかと思っていた地香は、結局その後も何も言われなかった事に拍子抜けしたが、いつ詰問されても良い様に身構えてはいた。

尤も、桃香はそんな事をしている暇が無かったのだが。

桃香が不在の間、涼や地香が代理を務めていたとは言え、桃香が州牧の仕事を放棄してきた事に変わりはない。

よって、桃香はその間の仕事の内容を頭に叩き込む必要があった。

「はい、じゃあ次はこの書簡に目を通してくれ。」

「あの……。」

「桃香様、その次はこちらをお願いします。」

「えっと……。」

「……何か？」

「何でもありません……。」

桃香は何も言い返せずに執務室でうなだれた。

結局、彼女はこの日から三日三晩、涼と雪里によって選別された必要最低限の量の書簡を読まされる事となった。

因みに地香は、桃香が帰ってきた事によって州牧代理補佐の任から解放されている為、本来の仕事に戻っていた。

その為、桃香が半ば軟禁状態で政務をしていたとは知らなかったのだ。

地香がそれを知ったのは、全ての書簡に目を通して解放された桃香が、フラフラになっている所に出くわして話を聞いた時になる。

この時、仕事に忙殺されていた桃香は涼と地香の一件を忘れていた。それどころでは無かったのだから、仕方がないのだが。

そんな訳で、地香は追及される事無く、無事に日々を過ごしていた。

青州から一人の傷だらけの将がやってきたのは、そんな時だった。

「雪里、彼女の具合は？」

「はい。怪我してはいましたが、幸い命に別状は無い様です。」

「只、青州から休み無しに馬を走らせて来たのか、かなりの疲労が溜まっていた様で、今はグッスリ眠ってますね。」

「じゃあ、話を訊くのは未だ暫く無理なんだね。」

「そうなりますね。」

「けど、早く訊かないといけない気がするのだ。」

執務室には涼や桃香を始めとした、徐州軍の諸将達が集まっていた。厳密には、その中で旧徐州軍や霧雨達を除き、星と飛陽、朱里と鳳統を加えた面々だ。

彼等の今の議題は、その青州から来た少女への対応と、その後どのように行動するかだった。

「何せ、“青州を助けて下さい”、ですからね……。」

「恐らく、黄巾党を倒してほしいという事でしょう。青州は黄巾党の残党に苦しめられていますから。」

「青州黄巾党か……。」

涼はそう呟くと一人静かに思案に耽る。

涼が知る歴史では、青州黄巾党はその名の通り青州で暴れまわっていたが、最後は曹操によって討伐されている。

更に曹操はその大半を麾下に加える事によって、戦力を増強した。それを自分達がやる事になるかも知れないと思うと、涼は若干の戸惑いを覚える。

(けど、やらないと苦しむ人が増え続けるよなあ……。)

曹操　華琳が将来手にするであろう手柄を奪う事になるのは気が引けるが、だからといって今現在困ってる人を放ってはおけない。それは彼女も同じだったらしく、皆を見ながら口を開いた。

「……私は、青州の人達を助けに行きたいと思ってる。助けてって声を無視する事なんて、出来ないよ。」「桃香……。」

涼はそう言った少女　桃香を見詰める。

「それに、どうせ青州には行く予定だったんだし、良いよね?」



「それは……まあ。」

「ですが、その予定はきちんと計画を立ててから動く予定でした。計画も無く急に動くのは危険です。」

「そ、それは……。」

桃香が確認すると涼は同意したが、すかさず雪里が口を挟む。

慌てて涼を見る桃香だが、その涼が困ってるのに気付くと、途端に自身の言葉に自信を持ってなくなっていった。彼女は人材を得る為に荊州迄勧誘に行くくらいなので、決して意志薄弱では無いのだが、同時に周りの人々に対して優し過ぎる。

その為、今みたいに反対されると困惑してしまうのだ。

「……勘違いしていらっしやる様ですが、青州出兵自体は賛成です。それに、一応この様な時の為の対策は練っております。」

「へっ？ な、なら何で……。」

雪里の言葉にキョトンとする桃香。そんな彼女に、雪里は事も無げに言葉を紡いでいく。

「桃香様が荊州に旅立たれた際に清宮殿達に申し上げたのですが、常に全員が賛成しては、いざという時の為になりませんので。」

「そうなんだあ。有難う、雪里ちゃん。」

「勿体無い御言葉です。……朱里、雛里、昨日纏めた青州出兵に関する案を述べて頂戴。」

「うん。」

雪里は桃香に対して恭しく平伏すると、朱里と鳳統に説明をする様に促す。

二人はそう言われるのが解っていたらしく、直ぐ様説明を始めた。

「本来の計画では、周辺の諸侯に対して青州出兵の正当性を伝え、同時に不可侵条約若しくは同盟を結び、それから青州へ出兵する筈でした。」

「……ですが、時間的余裕が無くなった今、そうはいきません。」  
そう言つて策を述べ始めた二人は、目の前に在る大きな机の上に、徐州と青州を中心とした地図を広げながら説明を続ける。

「あの子が青州からの救援要請の使者と仮定して話しますが、だとすると、今の青州は存亡の危機に瀕している事になります。」

「……だとしたら事は一刻を争います。……ですから、私達は青州に兵を進めながら、同時に周辺の諸侯との同盟等を結んでいくしかありません。」

「まあ、それしかないか。」

二人の説明に涼はそう言つて同意を示した。

最終的な決定は州牧である桃香が下すが、その桃香も涼と同意見なのか、涼を見ながら頷いている。

他の者も涼達と同意見らしく、反論は無い。その様子を見てから鳳統が説明を再開する。

「……問題は、この策を遂行する為に、桃香様と清宮様のお二人に動いてもらわなければならないという事です。」

「片方は青州への部隊の指揮だよね……もう片方は？」

「曹操さん、孫策さんとの同盟締結です。」

「……こちらには、お二人と仲が良いという清宮様に動いてもらつた方が良いと思ひましょ……あう。」

桃香の疑問に朱里と鳳統が答えるが、鳳統はまたも噛んでしまい小さく俯いてしまった。

そんな鳳統を微笑ましく見詰めつつ、声は常の冷静さを保つたま

まの星が訊ねる。

「主が曹操や孫策の所に行くのはまだ解るが、桃香様自ら青州へ赴かれる必要があるのか？ 黄巾党の討伐だけなら、州牧である桃香様が行く必要はなかるう。」

「……確かに、討伐だけなら必要ないかも知れません。」

真面目な質問を受けて落ち着いたらしい鳳統は、帽子の唾を両手で動かして帽子の位置を整えると、少し口調を早めて言葉を紡ぎ出した。

「ですが、先程述べた様に、今回は黄巾党の討伐と諸侯との同盟を同時にやらなければなりません。その為には、桃香様自ら指揮を執ってもらう必要があります。それに……。」

「それに？」

「青州の北、幽州には桃香様の親友である公孫贄さんが居ます。黄巾党討伐の為に桃香様自ら青州に来てしていると知れば、あちらから接触を図ろうと思えます。」

「もし接触が無かったとしても、青州から使者を出せば、徐州から使者を出すよりは返事を貰う迄の時間を短縮出来ます。」

鳳統、そして朱里の説明と補足を聞くと、星は勿論ながら、桃香や愛紗達も納得していった。

と、その時、バンツという音と共に勢いよく扉が開いた。

「青州を助けて下さいっ！ ……いてて。」

そう叫びながら執務室に飛び込んできたのは、一人の少女だった。頭や左腕に包帯を巻き、頬には軟膏を塗った布を貼っている。

一見すると重傷者の様だが、肌の血色は良いし、何よりここ迄走ってきたみたいだから、それ程大きな怪我ではないのかも知れない。

「し、子義さん、未だ無理しちゃダメなのですよーっ。」

そう言いながら、わふわふと息を切らせ、白い衣服を身に纏った小柄な少女が執務室に入ってくる。

少女の名は陳登、真名を羅深という。

「あー……羅深、お疲れ様。」

「あつ、清宮様っ。突然の入室、失礼しましたっ。」

「気にしないで。それより……彼女は目が覚めたんだね。」

涼は羅深を労いつつ、目の前に居る少女に目をやった。

肩迄ある瑠璃色の髪に金色に光る瞳、涼と同じくらいの背丈に透き通る様に白い肌、若干幼さを残しつつも大人へと成長している凛々しい表情と、桃香と同じくらいに大きい胸。

そんな少女は涼の視線に気付くと声をかけてきた。

「あの……貴方は？」

「ああ、そう言えば自己紹介が未だだったね。俺は徐州牧補佐の清宮涼。で、隣に居る彼女が徐州牧の劉玄德だ。」「こんにちは、私が州牧の劉玄德です。」

「あ、貴方達が……し、失礼しましたっ。」

二人が目の前少女に対して丁寧に自己紹介をすると、少女は恐縮したのか慌てて頭を下げた。

先程涼が言った様に、少女とはきちんと自己紹介をしていない。

何せ、桃香達の前に案内された時の少女はフラフラの状態であり、「青州を助けて下さいっ！」と叫ぶと同時に体力が限界を超え、そのまま眠ってしまったのだから。

その為、少女が涼と桃香の事を知って驚くのは当然だった。

その後、執務室に居る面々から自己紹介をされた少女は、居住まいを正して自らも自己紹介をする。

「私の名は太史慈、字は子義と申します。青州牧、孔融の命を受けて皆様方に救援要請に参りました。」

少女　太史慈は表情を引き締め、真っ直ぐに涼達を見詰めながら、凜とした声でそう言った。

涼達は、太史慈の目的が自分達の予想通りだと知ると、彼女を安心させる意味も込めて青州出兵の旨を伝える。

その瞬間、感謝された太史慈から抱き締められる事になり、涼や桃香達が驚いたり慌てたりするちよつとしたハプニングもあったが、それ以外はさほど問題無く話が進み、それから二日が経った。

「青州遠征及び南方外交遠征の部隊構成が決まりました。」

「そっか、じゃあ早速発表してくれるかな。」

二日前と同じメンバーが集まっている執務室で、軍議が行われている。

その中で雪里の発言の番になり、先程の様に言ってから報告を始めた。

「では、まずは青州遠征の陣容から。第一陣を愛紗さんの関羽隊、第二陣を山茶花さんの糜竺隊、第三陣を椿さんの糜芳隊、第四陣を朱里の諸葛亮隊、本隊である第五陣を桃香様の劉備隊、そして後詰めの第六陣を時雨さんの田豫隊に、それぞれ担当してもらいます。」

「結構多いな。兵数はどれくらい連れて行くんだ？」

「関羽隊が二万五千、糜竺隊と糜芳隊が一万ずつ、諸葛亮隊が五千、本隊が三万三千、田豫隊が一万七千。合計十万ですね。」

涼の問いに雪里は即座に答える。

すると今度は、兵数を聞いて驚いた桃香が訊ねた。

「徐州軍の約半数になる程の兵士さん達を連れて行くの？」

「本当はもつと多い方がいいんですけどね。何せ、太史慈さんの報告によれば青州黄巾党の数は十万を軽く超えている様ですから。」

雪里は軽く溜息を吐きながらそう答える。相変わらず黄巾党の数が多いので、辟易している様だ。「そっかあ……けど、これ以上増やすと徐州の守りが手薄になっちゃうし……。」

「その通りです。まあ、黄巾党といえど所詮は賊ですから、余程の事が無ければ少しくらいの数的不利があっても、負けはしないでしようが。」

雪里は自信あり気げな表情でそう言い切った。

地香と飛陽が複雑な表情をしているのは、勿論気付いている。

この場に居る者は皆、二人が元・黄巾党だと知っているので多少なりとも気を遣っているのだが、雪里は敢えて気を遣わない様だ。

それは、二人が黄巾党と決別していると知っているから。

今の二人は黄巾党の張宝や廖淳ではなく、徐州軍の劉燕と廖淳なのだから、気を遣い過ぎると却って変だと思っていた。

だからこそ、雪里は普段と変わらずに接している。

地香と飛陽の二人もそれに気付いているのか、そんな雪里に対して特に反応していなかった。

そんな訳なので話が滞る事無く、軍議は続いていく。

「それに、清宮殿の部隊にも兵を割かなければなりません。」

「けど、俺への兵はそんなに要らないんじゃないか？」

「何を仰います。清宮殿は徐州軍の州牧補佐、そして何より“天の御遣い”なのですから、兵は絶対に多く必要です。」「そっだよ涼義兄さん。涼義兄さんに何かあったら大変なんだから、護衛の兵士

さんは沢山居ないとダメだよ。」

「まったく、相変わらず義兄上は御自身の立場を理解しておられませんか。」

「お兄ちゃんはバカなのだ。」

「それ、鈴々にだけは言われたくないんだが。」

義妹達から散々に言われた涼がツツコミを入れると、鈴々がふてくされてしまい、次いで桃香達から笑いが起きる。

それから暫しの間、執務室に笑い声が響いた。

やがて軍議が再開されると、議題は先程少し話した外交遠征に関する事に移っていった。

「南方外交遠征の部隊の内訳ですが、第一陣は鈴々の張飛隊、第二陣は雫の簡雍隊、第三陣は本隊の清宮隊、そして後詰め第四陣は霧雨さんの孫乾隊です。」

「四部隊か……兵数は？」

「こちらは戦をしに行く訳では無いので少なめです。張飛隊が千、簡雍隊、孫乾隊はそれぞれ五百、本隊の清宮隊が二千ですね。」

「合計四千か……。確かに青州への部隊と比べると少ないけど、話し合いに行くにしては少し多くないか？」

「確かに。ですが、道中で賊に襲われる危険性はありますし、曹操や孫策が敵対しないと限りませんから。」

「賊は兎も角、今は華琳や雪蓮と敵対しないと思うけどなあ……。」

そう言いながら涼は、二人ともいつかは敵対する事になるだろうなと思っていた。

今は友好的とは言え、彼女達が「曹操」と「孫策」である事に変わりはない。

「三国志」に登場する英雄達の中でも類い希な才能を持ち、三國で一番の領土を獲得し、結果的には魏王朝の礎を作った曹操。

一方、孫堅の跡を継いで江東を統治し、やはり後々の呉王朝の礎を作った孫策。

それぞれ、存命中には建国していないものの、その功績は息子の曹丕、または弟の孫権が受け継ぎ、「魏」と「呉」が建国された。

そこに劉備が建国した「蜀」を加えて、漸く三国が揃う事になる。二人はその英雄と同じ名前を持ち、その名に恥じない實力を持っている、と、涼はそう思っていた。

因みに、建国の順番としては「魏」の建国に対抗する様にして「蜀」が建国され、「呉」の建国はその二ヶ国より少し遅れて行われた。

「三国志」と言っても、実際に三国が出来たのは物語のかなり後であり、また、三国が揃っていた期間も意外と短かった。

涼がそんな事を考えていると、やれやれといった表情の雪里が言葉を紡ぎ出した。

「確かに、あの二人が今の私達と明確に対立してくる事は無いでしょう。ですが、清宮殿を拉致して私達を脅したり、自分達の御輿として担いだりする可能性が無いとは言い切れません。」

「まさか。」

雪里が言った仮定に対し、涼はそんな事は有り得ないと笑い飛ばす。

「……若しくは、色仕掛けで籠絡しにくるかも知れませんか。」

「「「っ!?!?」「」」

「ま、まさかあ。」

雪里が続けて言った思い掛けない言葉に一同が絶句し、涼もまた先程とは違って弱々しく否定する。

だが、涼は否定しつつもどこか納得していた。



（華琳は兎も角、雪蓮はそうする可能性が有るのは確かだよなあ……。何せ、結婚したいとか言ってたし……。）

黄巾党討伐の際、真名を許されたあの一件以来、雪蓮は何かと涼にアプローチしてきた。

それが単純に恋愛感情によるものか、政治的目的によるものか、はたまたその両方かは判らないが、少なくとも雪蓮が涼に対して必要以上の好意を見せていたのは確かだった。

（キス……しちゃったしな……。）

正確には、したというよりされたと言うのが正しいのだが、キス自体は本当なので、その事を思い出した涼の顔は自然と紅くなった。

「……何で顔が紅くなってるんですか、涼義兄さん？」

「えっ……？」

左隣から聞こえてきた声に驚きながら振り返ると、そこには頬を膨らませた桃香が居た。

「恐らく、曹操殿や孫策殿の事でも考えていたのでしょう。」

「えーっと……。」

更に、右隣には仏頂面のまま涼を睨み付けている愛紗。

「まったく……涼、素直に言いなさいっ。」

「えっと、その……。」

そして、桃香の左隣には地香が明らかに不満な表情のまま、ビシツと右手の人差し指を涼に向けて突き出していた。

その仕草や口調は、地香というより地和に戻っているのだが、今

の涼にそれを指摘する余裕は無かった。

二人の義妹と義従妹に追及され、言葉に詰まる涼。天の御遣いと呼ばれ、民から慕われ、敵からは畏怖されている彼も、彼女達に対しては弱いらしい。

因みに雪里達はというと、いつもの事だからと特に止める事も無く、只静かに見守っていた。

というか、何人かは面白がっていた様な気がする。

「取り敢えず、部隊に関しては以上です。呼ばれなかった人は徐州の守りや内政をしてもらいたいのですが。」

「賊を倒したい気が無い訳では無いが、私はそれで構わぬぞ。」

「ちい……私も構わないわ。また、桃香姉さんの代わりをやってれば良いんだしね。」

星と地香がそれぞれ了承し、それが居残り組全員の総意となった。これで軍議は終わりかと思われたが、朱里が静かに手を挙げると、地香と飛陽を交互に見ながら静かに言葉を紡いだ。

「誰も……雪里ちゃんも訊かないので私が訊ねます。……地香さん、飛陽さん。」

「何かしら？」

「何です？」

真名で呼ばれた二人が真剣な表情になって朱里に向き直る。

因みに、朱里は徐州軍の主要メンバーとは真名を預け合っている。

「青州黄巾党の首領、管亥について知っている事があるなら、教えて頂けませんか。」

紡がれた言葉は、まるで機械が発したかのように冷たく、平淡だっ

た。

だがそれは、本来なら真つ先に一人に訊ねられるべき事柄である。それなのに、何故か今迄誰もそうしなかった。

二人を気遣つての事か？ いや、流石にこれは気遣つて良い事ではない。

なら何故？

そう疑問に思ったからこそ、朱里は訊ねたのだった。

「管亥……ね。」

「……？ どうかした？ もし知らないのなら、そう言ってくれて構わないよ。」

「いえ、知らない訳じゃないわ。ただ……。」 何故か歯切れが悪い地香に対して、疑問の表情を浮かべる涼達。

そんな地香に代わつて、飛陽が言葉を継いだ。

「出来れば、管亥の事は余り思い出したくないんです。」

飛陽がそう言うと、地香は静かに頷いた。

「えっと……それって、どういう事？」

「皆さんは、黄巾党の実態を御存知なんですよね？」

「実態って……黄巾党の中心が、実は張三姉妹の追っ掛けばかりだったって事？」

「はい。」

皆を代表した形になった涼の答えに、肯定の意を返す飛陽。

涼達は地香が未だ地香という名前を使う前、つまり地和の時に黄巾党の実態について彼女から直接聞いている。

正確には、聞いたというよりは愚痴として聞かされた、というべきだが。

その地和曰く、

『ちい達は只、三人で大陸を旅をしながら歌を唄っただけ。』

曰く、

『偶然手に入れた“太平要術”を使ったら沢山人が集まった。』

曰く、

『やがて大きな集団となったが、その中には血の気が多い人も沢山も居たので、彼等を纏める為にちい達が首領になった。』

曰く、

『やがて、その集団は“黄巾党”という名前の賊になっていき、段々とちい達でも制御出来なくなっていた。』

曰く、

『集団が肥大化したのは、多分“太平要術の書”が原因だと思うけど、それは妹の張梁に渡していたので、その後の行方も効果についても解らない。』

との事だった。

尤も、これはあくまで地和の考えなので、実際は少し違っても知れない。

「あの黄巾党の乱で暴れていたのは、殆どが元々賊として暴れてい

た奴等。張三姉妹の本来の取り巻きは、そいつ等に影響されて暴れていたんだよな。」

「そうよ。まあ、だからと言って黄巾党が被害者とは言わないわ。どんな理由があれ、黄巾党が人々を苦しめた事に変わりないし……。」

「……。」

そう言うと、地香は神妙な顔をして俯いた。彼女は黄巾党の中心人物だった訳だから、申し訳無い気持ちがあるのだろう。

自然と空気が重くなる。が、それを察した涼が飛陽に話しかけ、空気を変えていく。

「それで、管亥についてなんだけど……。」

「あつ、そうでしたね。……管亥は元々、その取り巻きを纏める張三姉妹親衛隊の一人だったんです。」

「親衛隊の一人“だった”……?」

星が「だった」を強調すると、飛陽は星を見ながら頷いた。

「管亥は……あいつは、親衛隊を辞めたんです。……人殺しを楽しむ為に。」

「……闇に堕ちた、と言う訳か。」

星が目を閉じながらそう言うと、地香と飛陽は神妙な顔のまま同時に頷いた。

「……以前の管亥は、張三姉妹の親衛隊として皆を纏める優等生だったわ。けど、悪い奴等の影響を受けて残忍な男になってしまった……。」

「私の村を助けてくれた一員でもあったんですが……そんな優しか

った面影は無くなりました。そして、管亥の一番の悪事は……親衛隊員であつた管亥が率先して暴れる様になつた為に、他の黄巾党員も皆それに倣つていつた事です。」

地香と飛陽が喋り終わると、数秒間の静寂が辺りを包んだ。さつきより重苦しい空気に包まれたまま、愛紗が口を開く。

「……上が悪事を働いているのだから、下も悪事を働く、か。」  
「管亥は悪い見本になつたつて訳だな。」

「ええ。後は、皆が知っている通りの黄巾党が出来上がったわ。……張三姉妹が居ても、その暴走を制御しきれないくらいの賊がね。」

愛紗の言葉に涼が続くと、地香が更に続いて自嘲気味に言った。実際、今の地香はその当時の事を思い出していた。

暴走する黄巾党員に対して虚勢を張りつつも、内心では怖いと思つていた、張宝だつた頃の自分自身を。

少なくともつたとはいえ、未だまともな黄巾党員が居なかつたら、自分達の命も危なかつただろう。

ひよつとしたら、命を落とす前に生き地獄を味あわされたかも知れない。

そう思った地香の体は自然と震え、次いで自らの体を抱き締める。その様子に気付いた涼が、またも飛陽に話し掛けて先を進めた。

管亥について話す飛陽もまた辛そうだつた。かつての恩人を倒そうとしているのだから、それも仕方無いのだが。

「管亥の部隊は、今迄皆さんが相手にしてきた黄巾党とは違います。恐らく、黄巾党の中で一番残虐で、一番強く、一番倒さなくてはいけない相手です。」

だが、そんな飛陽が表情を引き締めて話の最後にそう言うと、皆

もまた気を引き締めた。

一番倒さないといけないという事は、絶対に倒さないといけないという事。

張三姉妹が居なくなつて瓦解した黄巾党だが、残党である青州黄巾党は張三姉妹が居なくても勢力を維持し、暴れている。

言わば、青州黄巾党は鎖が外れた狂犬。血に飢えた獣と同義。だからこそ、一刻も早く倒さないといけない。

涼達はそう決意をし、互いに確認するとその日の軍議を終え、青州北伐と外交遠征の準備に戻つていった。翌日。

徐州軍の約半数にあたる十万四千もの兵士達が、下丕城外に整然と並んでいた。

その内の十万は、青州黄巾党を討つべく集められた精鋭達。

桃香達が義勇軍だった頃からの面々も多数組み込まれており、その実力は疑いようがない。

しかも、彼等を率いる武將の筆頭は愛紗こと関雲長。徐州牧である桃香やその義兄の涼の義妹にして、黄巾党討伐や十常侍誅殺に於いて活躍した、徐州軍随一の武將である。

更に、遠征には州牧自らも赴くとあつて、兵士達の士気は大いに高くなつていた。

一方、残りの四千は南方外交に於ける護衛部隊。

護衛と称するには些か多い気もするが、賊との遭遇や交渉先での不測の事態に備える為には、多過ぎるという事は無い。

そんな護衛部隊を率いる武將の筆頭は鈴々こと張飛。関羽と共に徐州軍を代表する武將の一人であり、見た目に反する実力を敵味方問わず見せつけてきた。

そんな人物が護衛に附くのだから、例え寡兵であってもその強さは推して知るべしというもの。

まあ、彼等の任務は万が一の為の護衛であり、戦いに行く訳では無いのだが。

そんな兵士達が整列したままでいるのは、この場に彼等の指揮官

が未だ来ていないからだった。

では、どこに居るのかと言うと、二人共下丕城内の執務室に居た。

「どうしても、ダメ？」

「ダメ。」

因みに執務室には地香も居り、先程の疑問系の「ダメ」は彼女の言葉である。

そして、否定系の「ダメ」を同時に言ったのは涼と桃香。今回の二つの遠征、それぞれの総大将によるものだった。

「だって、今度の相手は青州黄巾党なんですよ。だったら、ちいが行って黄巾党のケリをつけないと……。」

「気持ちは解るけど……。」

「地香はこのまま下丕に残って、俺達の代わりに内政をやってほしいんだ。」

「ちい、内政得意じゃないわよ。」

「私が荊州に行った時は、ちゃんとやってくれたじゃない。」

「あの時はちいだけじゃなく、涼も居たし……。」

何やら地香がぐずっている。涼と桃香はそれを宥めている様だ。

「今回は雪里だけじゃなく雛里も居るから、心配は要らないよ。」

「だったら、ちいが居なくても……。」

「私も義兄さんも徐州を離れるんだから、地香ちゃんには残ってほしいの。」

「……今の私は“劉徳然”だから？」

「う、うん……。」

尚も引き下がらない地香だったが、桃香が発した言葉に反応し、



顔を曇らせていく。仕方がないとはいえ、本当の自分を表せない事は少なからず苦痛なのだろう。

例えばそれが、彼女自身を守る為だとしても。

「それに、青州黄巾党の首領、管亥は張三姉妹の親衛隊だったんだろ？ だったら、そいつに地香の正体を見破られてしまいかも知れない。」

「それは……。」

涼にもっともな指摘をされた地香は言葉に詰まり、僅かに俯いた。今の地香は、黄巾党時代とは違う髪型や服装をしており、髪に至っては染めてもいる。

とは言え、瞳の色や輪郭、声や体型を変える事は当然ながら出来ない。一応、声は多少低くしているが。

その為、見る者が見たら地香の正体を悟られる危険性がある。かつて、張宝率いる黄巾党第二部隊に所属していた飛陽が未だに気付いていないのは、単に運が良いだけに過ぎないのだ。

「雪里も、それを危惧して遠征から地香を外したみたいだな。」

「私達も、もしもの事態は避けたいし……。」

「解ったわよ……。」

尚も言葉を続ける二人に対し、地香は仕方無いという表情をしてそう口にした。

依然として納得はしていないが、かといって更に駄々をこねる程子供でもない。

正体がバレた時の事を考えれば、その判断は当然だった。

黄巾党の、しかも「地公將軍」という黄巾党ナンバー2の肩書きを持っていた張宝 地和を匿い、更に「劉燕徳然」という名前と、「地香」という新しい真名を与えてくれた涼と桃香。

そして、そんな自分を受け入れてくれた愛紗や鈴々達。  
地香は彼等に、どれだけ感謝しても足りない程の恩義がある。  
だからこそ、余計な心配や迷惑をかける訳にはいかなかった。

「けどその代わり、桃香は青州黄巾党を討って、涼は外交を成功させて、無事に戻ってくる事。良い？」

「ああ。」

「解ってるよ、地香ちゃん」

先程迄と違い、地香は努めて明るい表情を浮かべながらそう尋ねる。

その問いに涼は頷きながら、そして桃香は抱きつきながら応えた。  
お陰で、地香の顔は桃香の豊かな胸に包まれる事になる。

その様子を見ていた涼が若干羨ましくしていたのは、未だ十代の少年の反応としては至極当然の事だった。

それに対する義妹と義従妹の反応は別として。

暫くの間、涼は二人から非難されたり、からかわれたりしたが、それは何かを思い出した桃香の一言で終息した。

「そう言えば涼義兄さん、地香ちゃんに“それ”を渡すんじゃないか  
つたっけ？」

涼の背中に有る一振りの「剣」を指差しながら、桃香は尋ねた。  
すると、涼はそうだったと言いながら、背中に有る剣を鞘に付けたたすき掛けのベルトごと外し、それを両手で胸元の高さに持ち上げ、地香を見詰めながら厳かに言葉を紡いだ。

「劉徳然將軍。」

「は、はいっ。」

真名ではなく、姓名を呼ばれた地香は反射的に敬語になって返事

をした。

「自分達が暫くの間徐州を離れる事、及び、將軍の今迄の功績を称え、この“靖王伝家”を与える。」

「……え、ええっ!？」

敵かに告げられた言葉に、地香は驚くばかりだった。

「まあ、これは靖王伝家の予備だけだな。」

「それは解ってるけど……それでも、それが劉家に伝わる宝剣には変わりないでしょ? 一体何を考えて私に……。」

「なんだ、地香ちゃんも解ってるんじゃない。」

「え?」

突然の事に困惑している地香に、桃香が更なる困惑の言葉を投げ掛ける。

「地香ちゃん、今言ったよね。“靖王伝家は劉家に伝わる宝剣”って。」

「言ったけど……?」

「だったら、劉家の一員である地香ちゃんが持っていてもおかしくはないよ。そうでしょ、劉徳然?」

「それはそうだけど……。」

地香は応えながら、それってどうなんだろう? と思った。

確かに、今の彼女は桃香が言った様に劉徳然という名前であり、

劉徳然は桃香 劉備の従姉妹だ。

つまり地香は劉家の人間であり、そうした事を考えるならば、彼女が靖王伝家を持っていてもおかしくはない。

だが、本当の地香は地和 張宝であり、劉家の人間ではない。その事を地香が指摘すると、

「それを言ったら、俺だって劉家の人間じゃないぞ。桃香の義兄だから、その点では劉家の人間だけど。」

と返された。しかも笑顔で。

どうやら、地香が「靖王伝家（予備）」を受け取るのは決定事項の様だ。

「……仕方無いわね。」

地香はそう苦笑しながら、涼達の申し出を受ける事にした。そうしないと話が先に進まない気もしたからだ。

地香は涼の前で片膝を着いて平伏の姿勢をとると、僅かに頭を下げ、劉徳然としての口調を更に恭しくして言葉を紡いでいく。

「徐州軍第四部隊隊長、劉徳然。お二人の申し出を、謹んでお受けします。」

「うむ。徐州牧補佐、清宮涼。只今より、靖王伝家を劉徳然に託す。」

涼もまた、先程以上に厳かに言葉を紡ぎ、「靖王伝家（予備）」を地香に手渡す。

地香はその宝剣を両手で恭しく受け取ると、そのまま胸元に抱き寄せ、まるで愛しい我が子を見つめる母親の様に宝剣を見つめた。それが何を意味するかは、地香にしか解らない。

その後、地香がその宝剣「靖王伝家（予備）」を腰に付けると、それ迄静かに見守っていた桃香が笑みを浮かべながら、だがどこか厳かに告げた。

「徐州牧、劉玄德。宝剣授与の儀を確かに見届けました。」

涼と地香を平等に見守る様に立っていた桃香は、この一連の儀式とも言うべきやり取りを、言葉通り見届けたのだった。

こうして地香とのやり取りを終えた涼と桃香は、両手を天へと伸ばし、ふうと息を吐いた。

「さて……あんまり待たせると愛紗が怒りそうだし、そろそろ行くか。」

「だね。地香ちゃん、徐州の事ヨロシクね。」

「まつかせといて　まあ、困った時は雪里達に丸投げするから安心して。」

「「「うら。」」」

その直後、執務室に三人の笑い声が響いた。

これから先、桃香は青州黄巾党の討伐に、涼は華琳や雪蓮との外交に臨む。

戦に赴く桃香は勿論、場合によっては涼も命の危険に晒されるだろう。

だからこそ、三人は笑っていた。

今生の別れになっても悔やまない為に。

そうして一頻り笑うと、三人共表情を引き締め、下丕城外で待つ将兵達の許へ向かった。

が、城外へと通じる正門の前で、涼達は足を止める事になる。

「随分とお早いお越しですね、御主人様？　桃香様？」

「「「うっ……。」」」

そこに居たのは、まるでここから先には通さないという様に腕を組んで門前に立ち、その利き手には自身の得物である青龍偃月刀を持つ黒髪の少女。

即ち、愛紗こと関雲長が満面の笑顔を浮かべながら、目の前の二人に向かってそう言った。

目の前の二人、即ち涼と桃香は、笑顔の愛紗を見て何故か背筋を冷やしていた。

それは、二人を見送りに来ていた地香も同じ、いや、ひよっとしたらそれ以上だったかも知れない。

「え、えっとね。愛紗ちゃん、これには訳が……。」

「あるのでしょうか……まあ、それは後で訊く事にしましょう。幸いにも、桃香様の行く先は私と同じ青州ですからね……。」

弁解しようとする桃香の言葉を遮った愛紗は、常の凜とした声を意図的に低くし、喜悦と怒気を孕んだ口調でそう言った。

堪らず、桃香は後ろに居る涼と地香に顔を向けて助けを求める。

だが、徐州軍の筆頭武將に二人が敵う筈はない。なので二人の答えは、必然的に桃香の期待を裏切る事になる。

「ゴメン、無理。」

「桃香姉様、頑張つて。」

「涼義兄さんと地香ちゃんの薄情者ーっ。」

あつさりと自分を見捨てた義兄と義従妹に対し、涙目になりながら恨み節をぶつける桃香だったが、不意にその首根っこを掴まれた。再び背筋に冷たい物が伝う様に感じながら、桃香はゆっくりと振り向く。

そこには、先程と変わらぬ笑顔の愛紗が居た。

「さあ、桃香様。皆が待っていますから早く行きましょう。」

「あ、愛紗ちゃん、解ったから離してくれないかなー？」

「駄目です。」

ちよつと愛紗ちゃーんつ、と叫ぶ桃香の首根っこを掴んだまま、  
愛紗は正門へと向かう。

その結果、桃香はわたたと後ろ向きに歩く事になったのだが、  
愛紗はそんな事はお構い無しに歩を進める。

仮にも州牧である桃香を、筆頭武将とは言え桃香の部下である愛  
紗が文字通り引っ張っていく。それだけで愛紗が怒っているのは充  
分に解る。

まあ、予定時刻から半刻近くも遅れればそりや怒るだろう。  
因みに、桃香は正門が開かれる前に解放された。

愛紗も流石に、桃香の惨めな姿を将兵達に晒す訳にはいかないと思  
った様だ。

そんなハプニングもありながら、涼達は何とか将兵達の前に出た。  
涼達が遅れた為、その間もずつと立って待っていたのだろうが、  
将兵達の表情には疲労や不満の色は見えない。

それは愛紗達による訓練の賜物であり、徐州軍の将兵の統制の良  
さや練度の高さを表していた。

徐州軍は元々大した実力は無かった。勿論、賊を討伐するくらい  
は出来たが、近年力を付けてきている諸侯の軍隊、例えば曹操や袁  
紹等の軍隊が押し寄せていたら恐らく一溜まりもなかったであろう。  
前徐州牧である陶謙は、そうした危機が遠からず訪れる事を予期  
していた。

だが、陶謙は既に高齢であり、自ら動くのは困難。また、部下達  
が訓練を強化しようとしても、彼等の才では高が知れていた。

洛陽の帝から、「次期徐州牧は劉玄德とする。」という勅命が届  
いたのは、そんな折だった。

突然の勅命に、徐州は少なからず混乱した。何せ、陶謙は年老い  
たといえ未だ政治は行えていたし、任を解かれる様な落ち度も無か  
ったからだ。

だが、陶謙は勅命に従う事にした。それが徐州の為だと思った故

の判断だった。

尤も、漢王朝の忠臣である陶謙に、勅命に逆らうという選択肢は最初から無いというのもあるが。

若い頃は色々無茶をした陶謙も、徐州牧になってからは名君と呼ばれる治世を行ってきた。

それでも限界はあり、自分ではこれ以上の発展は見込めないと判断した。

そして今、勅命に従って跡を譲った事が正しかったという事が、強化された徐州軍により証明されている。

軍が強化されるという事は人口が増え、物資が豊富になっているという事でもある。例外として、軍だけが豊かになる事もあるが、勿論桃香達はそんな事はしていない。

そうして強化された徐州軍が今、涼達の目の前に存在している。

陶謙の苦悩を知り、尚且つこの場に居る者達 孫乾、糜竺、糜芳、陳珪、陳登といった忠臣達の想いは、恐らく陶謙と同じだろう。だからこそ、彼女達はこう思っている。

『この遠征は、絶対に成功させなければならぬ。』

徐州軍の新たな一步。その一步を踏み外す訳にはいかない。

踏み外したが最後、待っているのは底が見えない奈落のみ。

そうなってしまうては、全てが無駄になってしまう。

それを防ぐ為に、彼女達は全力で事にあたるだろう。青州組も南進組も、そして勿論居残り組も。

そんな彼女達の決意を知る桃香が今、将兵達に向かって言葉を述べていた。

「恐らく、今回の出兵に関して疑問に思っている方も居るでしょう。何故、徐州軍が青州の為に動かなければならないのか、と。」

用意されていた台の上に立つ桃香が、目の前に並び立つ十万四千



もの徐州兵達に訊ねる様に、ゆつくりと言葉を紡いでいく。

「確かに、今現在苦しんでいるのは青州の人々です。彼等を助け、守るのは本来青州軍の役目でしょう。」

ゆつくりと、だが力強く紡ぎ続ける。

「ですが、青州黄巾党の数は思ったよりも多く、青州軍だけでは倒すのに時間がかかっているのが実状です。」

そう言つと少しだけ顔を俯かせる桃香だが、直ぐにその顔を上げる。

「それに、青州を助ける事は私達の為でもあるのです。皆さんも知つての通り、青州黄巾党はこの徐州にもその魔の手を伸ばしています。」

桃香がそう言つと、徐州兵達が息を飲む音がそこかしこから聞こえてきた。

「幸いにも、州境の警備隊によつてその被害は最小限に抑えられています。それでも犠牲者が出ているのもまた、残念ながら事実です。」

桃香は真つ直ぐに徐州兵達を見据え、宣言する。

「ですから、この遠征はその悲劇を終わらせる為のもの。必要な事なんです！」桃香は力強くそう言つと、更に語気を強めて言葉を続けた。

「私達の遠征の目的は、黄巾党に苦しめられている人達は勿論、黄巾党の呪縛に囚われたままの人達を助ける事です。……ですから決して……決して、相手を殺す事に囚われないで下さい。そうやってしまつては、兵士ではなく、只の血に飢えた獣と変わりませんから。」

前半は熱く、勢いがあつたが、後半は一転して冷静に、宥める様に言葉を紡ぐ桃香。

それにより、只熱いだけだった兵士達の士気が、冷静さを含んだ熱気となつて拡散していく。

「私は皆さんの強さを知っています。徐州の兵士として、一人の間としての誇りを忘れずに戦ってくれると思っています。」

桃香はそう言つと胸元で両手を握りしめ、瞑目してから右手を前に伸ばす。

そのまま真つ直ぐに兵士達を見詰めながら、誓いを立てる様に言葉を紡ぐ。

「その誇りを保つたまま青州の人達を助け、皆でここに戻つてきましょう。大切な家族や仲間が居る、この徐州に！」

桃香が言い終わると、数秒の静寂が辺りを包み、そして十万を越す兵士達の歓声が一気に轟いた。

その咆哮にも似た歓声は、下丕城全体に響き渡つたのだった。

桃香の檄が終わつて暫く経つた。今は各部隊が行軍の為に整列し直している所だ。

そんな兵達の様子を見ながら、桃香が深く溜息を吐く。

「はあ……。」

「相変わらず慣れないか？」

「うん……だって、どんなに最善を尽くしても必ず誰かは犠牲になる。私は、皆にそれを強いているんだもん……。」

涼の問いに桃香は、俯きがちになって小さな声でそう答えた。

涼と桃香は、兵達から離れた場所で、最後の打ち合わせと称する雑談をしている。

勿論、打ち合わせも嘘では無いが、大半は互いを気遣う言葉で占められている。

今、気遣われているのは桃香だった。

「犠牲者の居ない戦いは無いからな。昔も、今も。」

「うん……。でも、覚悟はしないといけないって事も解ってるつもりだよ。……でないと、死んでいった兵士さん達や、殺した人達に悪いから。」

「……そうだな。」

桃香は再び兵達を見ながらそう言った。桃香の表情には先程とは打って変わって、強い意思が感じられる。

涼はそんな桃香の頭にポンと手を乗せると、そのまま優しく撫で始めた。

突然の事に驚き、涼に視線を向けた桃香だったが、結局そのまま撫でられ続ける。その姿はまるで猫の様だ。涼は桃香の、可愛い義妹の精神的な強さを愛おしく思った。だからこうして頭を撫でている。

勿論、それが強がりなのも解っていた。

桃香の意志は強く、固い。かといって、その為にも何でも出来るといって程非情にはなれない。

だからこそ今の様に弱気になったりするのだが、それをフォローするのは義兄である涼の役目だった。

その結果が今の状態であり、桃香もまたそれを解った上で受け入れている。

その姿は、仲の良い兄妹というよりは恋人同士に見えた。

勿論、二人はそんな関係では無いのだが。

暫くすると、ゴホン、という愛紗の咳払いが聞こえた。

どうやら、二人の行為がエスカレートしない様に釘を刺そうとした様だ。

慌てて二人は離れる。兄妹とは言え、二人に、正確には愛紗や鈴々を含めた四人に血縁関係は無い。

「桃園の誓い」によつて義兄妹・義姉妹という関係になっているだけなのだ。

だから将来、涼が桃香達と恋人の関係になつてもおかしくはない。勿論、儒教の考えや倫理観といった、様々な理由や問題が無い訳では無いが。

「お二人共、仲が宜しいのは結構ですが、そろそろ出立しませんと

」

「あ、ああ。」

「わ、解つてるよ、愛紗ちゃんつ。」

愛紗に睨まれたからか、二人は多少言葉に詰まつてしまった。

それから暫くして、二人は自分の馬に跨つていた。

二人はそのまま互いを見詰める。それぞれの後ろには青州へ向かう十万の兵士達と、南方に向かう四千の兵士達が整列している。愛紗や鈴々といった武将達も既に列んでいた。

そんな中、桃香がゆっくりと口を開く。

「気をつけてね、涼義兄さん。……鈴々ちゃん、雫ちゃん、霧雨ちゃん。涼義兄さんと兵士さん達をヨロシクね。あと、鈴々ちゃん達も気をつけて。」

「わかつたのだーっ。」

「が、頑張るねっ。」  
「任せました。」

桃香は涼だけでなく、鈴々達や兵士達も気遣った。  
それを見た涼は、いかにも桃香らしいなと思いつながら、自身も口を開いた。

「桃香も気をつけてな。……愛紗、時雨、山茶花、椿、朱里。桃香と兵士達を頼む。勿論、愛紗達も気をつけてくれよ。」

「はっ。」

「まあ、俺に任せておけ。」

「清宮様もどうかお気をつけて。」

「りょーかーいっ」

「はわわっ、あ、有難うございますっ。」

涼は桃香と愛紗達に、先程の桃香と同じ様な言葉をかけた。

次いで城門前に居る一団に目を向ける。桃香も殆ど同時に目を向け、涼の言葉を待った。

二人の視線の先には、居残り組である雪里、星、雛里、羽稀、羅深、飛陽、そして地香の姿があった。

「雪里、雛里を頼んだよ。」

「解りました。お二方が戻られる迄、精一杯雛里を鍛えておきますよう。」

「あわわ……。」

涼の頼みを雪里は満面の笑みで承諾し、雛里は困った様な表情になっっていた。

雛里は極度の人見知りである。

朱里の様に昔からの親友や、知り合っただばかりでも桃香の様に同

性の者なら余り問題はない。

だが、当然ながらこの世は雛里と同じ性、つまり女性ばかりではない。

徐州軍での雛里の役職は「副軍師補佐」。同じ時に副軍師に任命された朱里のサポート役である。

サポート役とは言え、軍師である事に変わりはなく、場合によっては副軍師や筆頭軍師の役目を担う事もあるかも知れない。

そんな立場の人物が、人見知りなので指示を出せません、ではないという時に困る。非常に困る。

なので、朱里が居なくなる遠征の間、雪里が雛里の人見知りを直す特訓をする事になっている。雪里は乗り気だが、雛里は不安そうだ。

雛里が今回の遠征のどちらにも参加しないのは、そうした事情からである。

その後、星や羽稀達と言葉を交わし、徐州の事を託す涼と桃香。

そして最後に、二人は地香に向き直る。

「俺達の代わりに徐州を頼んだよ、地香。」

「任せて下さい、お二人の留守は皆と共に守ります。」

地香は劉燕としての口調、所作で応対する。

素の地香を知っている涼達はつい吹き出しそうになるが、何とか堪える。

「それじゃあ、太子慈さん。道案内を頼みますね。」

「了解しました。」

桃香が太子慈を見ながらそう言うと、太子慈は桃香に一礼し、隊の先頭集団を務める関羽隊へと馬を進めた。

下丕に来た時は怪我や空腹でボロボロだった太子慈だが、今はそ

んな面影は無い。驚異的な回復力と言えるだろう。

「じゃあ……。」

「ああ、またな。」

桃香と涼が笑みを浮かべながら言葉を交わす。

ひよつとしたら、こうして言葉を交わすのは最後になるかも知れない。

だからだろうか、旅立ちの時は笑顔でいた方が良いと、鈴々が言っていた。

二人はその通りにした。次いで、愛紗や鈴々も、雪里や地香も皆、そして、「劉」「関」「糜」「田」「諸葛」の旗は北に。

「清宮」「張」「孫」「簡」の旗は南に。

それぞれの目的と共に、動き始めた。

そうして涼達と別れた桃香達は、下丕から一路青州を目指した。十万という大軍の為、進軍速度は遅かったが、それでも可能な限り急いだ。

彭城、蘭陵、開陽を通り、青州の城陽郡東武へと向かう桃香達。

この進路にしたのは、開陽・東武間が徐州と青州を結ぶ主要交易路だからだ。

この交易路に賊が居ては、人や物の出入りが滞ってしまう。それを防ぐ為にも、交易路の安全を確保しながら賊 青州黄巾党を倒すという方針になっている。

勿論、青州黄巾党も黙っておらず、開陽・東武間に在る徐州と青州の州境で、青州黄巾党との最初の戦闘が起きた。

敵の数は約三万。青州遠征軍の第一陣である関羽隊は約二万五千。兵数では僅かに負けている。

とは言え、農民上がりの青州黄巾党と正規兵である関羽隊では、実力差があり過ぎた。

半刻の戦闘の末、青州黄巾党は五千の数的優位を活かす事無く敗

走。それを見た関羽隊は、後続から合流した第二陣の糜竺隊、第三陣の糜芳隊と共に追撃し、瞬く間にその全てを討ち取り、または捕縛した。

この時、実質的に初陣だった糜竺、山茶花が緊張の余り弓矢を落したりしたが、優秀な部下達のフォローもあって無事に戦闘を終えている。

因みに、「実質的に初陣」とはどういう事かと言うと、山茶花は今迄賊の討伐等で戦場に出た事はあるが、それ等は全て一兵士としての参戦であり、部隊を率いる指揮官としては初めてだという意味である。

そうして初戦を制した桃香達は、その勢いを殺さずに東進した。東武から不其、挺へ進み、そこで一度大休止をとる。

青州に入ってから以来、各地から志願兵が集まっていた。

その中には不覚にも青州黄巾党に敗れ、敗走中だった青州軍の部隊もあった。朱里はその部隊から様々な情報を聞き、対策を講じていった。

元々朱里は、徐州に居た時から雪里達と色々な策を練ってきていた。

それだけでも充分だったのに、今は実際に戦った人達の意見を聞く事が出来ている。

「孫子」という世界的にも歴史的にも有名な兵法書に、「敵を知り己を知れば百戦危うからず」とある様に、敵と味方、両方の情報を知る事は、戦いに於いて重要な事である。

様々な兵法書を読んできた朱里はその事をよく理解しており、情報を得るとそれを踏まえて策を練り直し、味方への被害を最小限にしながら敵への損害を最大限にしていた。

その甲斐あって、青州遠征軍の東進は難無く進んだ。挺での大休止を終えた青州遠征軍は、昌陽、東牟、牟平と、海岸線に沿う様に半時計回りに進軍した。

青州黄巾党の主力が包囲しているという州都・臨淄から離れてい



る所為か、各地に散らばっている青州黄巾党を倒すのは、思った程手こずらなかつた。

牟平で二度目の大休止を終え、そこから北西に在る東萊郡の黄を解放すると、桃香達は部隊を二つに分けた。

一つは桃香や愛紗といった主力部隊が中心となり、もう一つは残つた時雨や山茶花の部隊を中心にして、それぞれ掖<sup>えき</sup>・膠東<sup>こつとう</sup>と即墨に向かう事にした。

これは、同時に攻める事で一日でも早く青州から黄巾党を排除する為である。

本当は昌陽・東牟・牟平の三ヶ所を解放する際もそうしたかつたのだが、その時は十万の兵を三つに分ける事のメリットより、デメリットの方を重視していた。

太子慈の話によれば、青州黄巾党の数は十万を超えており、その総数は恐らく数十万に上る。

幾ら兵の精度で勝っているとはいえ、無闇に戦力を分散させる事は出来なかつた。

だが、今は青州各地から何万人もの志願兵が集まっており、そのお陰で戦力の分散が可能になっていた。

その為、今回は部隊を分けて同時に攻める事に関しては不安は全く無い。

不安があるとすれば、それは混成部隊の弱点と言える連携不足だろうか。

当然ながら、所属する州や郡、県が違えば訓練は違ってくるし、それによって兵士達の練度も違ってくる。

練度が違えば連携に響くし、そうした小さな綻びが大きな綻びに繋がる事は決して珍しくはない。

勿論、「臥竜」と呼ばれる諸葛亮はその事に気付いており、既に対策を練っていた。

その対策はと言うと、連携がとれないのなら下手にとらなくて良い、というもの。

果たしてそれが対策と言えるかどうかは微妙だが、時間がかかられない現状ではそれが最良なものもまた確かだった。

詳しく説明すると、徐州軍は徐州軍の兵だけで構成し、青州軍は青州軍の兵だけで構成する。

戦闘になった際は基本的な策に従いつつ、各自の判断で行動するという事にした。

徐州軍の中に青州軍の兵を組み込んで戦うよりかは、別々にした方が綻びは小さくて済む。時間が無い中ではそうするしか無かった。そうして二手に分かれた青州遠征軍は、それぞれの目的地へと軍を進める。

二手に分かれたとは言え、その兵力はそれぞれ八万を超えていた。州都に近づくにつれ、青州黄巾党も少しずつ強くなってきていたが、未だ噂程の数や実力は無く、八万以上の大軍である青州遠征軍の敵では無かった。

掖と膠東、更に即墨といった三ヶ所を難無く解放した桃香達は、膠東で部隊を再編成し、西に在る北海国を次の目的地と決めて進軍した。

その途中で幾度か戦闘になるも、既に兵数が二十万を超えていた青州遠征軍には大きな被害は無かった。

そんな中、桃香達は部隊を幾つかに分け、周辺地域の平定に向けた。

その為、味方が少ない時に戦闘になる事もあったが、予め朱里が対応策を考えていた事もあって、さほど問題無く進んだ。

そして今、桃香達は北海国の平寿に到着していた。

此処には、黄巾党の乱等の影響で州牧不在の中、実質的にその仕事をしている孔融が居る。

州都である臨淄で青州を治めていた孔融は、州都が青州黄巾党に狙われている事を知ると、太子慈に徐州への救援要請を託した後、民を密かに臨淄から脱出させてから応戦していた。

だが、多勢に無勢だと覚っていた孔融の部下は隙を見て孔融を逃

がした。

勿論、実質的な州牧である孔融は部下の進言を素直に聞かなかつた為、半ば無理矢理に逃がされたのだが。

その孔融は、桃香達が青州に来たのを知ると、直ぐ様桃香達と連絡をとる為に使者を送り、対黄巾党について連携をとろうとした。

だが、桃香達の進軍速度が孔融の予想より速かったり、黄巾党の残党に邪魔されたりで中々連絡がとれなかった。

漸く連絡がとれたのは、ほんの一週間前の事だ。

そうして合流し、桃香達と会談した孔融は、州都から共に逃げた兵士達と、避難先で集めた兵士達の大半を預けると申し出、桃香はそれを受け入れた。

その後、桃香達は今後の目標を決める為に軍議を開いた。

勿論、その目標は州都である臨淄なのだが、ただ闇雲に進軍するだけでは、幾ら黄巾党とは言え数十万を超える相手には簡単に勝てないだろう。

だが、軍師の朱里は慌てる事無く瞑目していた。

「朱里ちゃん、何か良い策でもあるの？」

「はい。策という程の物ではありませんが、大軍に対して効果的な方法があります。」

自信に満ちた表情の朱里は、桃香の問いにそう答えると、机の上に広げてある地図のとある場所を静かに指差した。

「私達のとるべき策は。」

静かに語り出す朱里。

それを聞き終えた時の桃香達の表情は皆、朱里と同じ様に自信に満ちていた。

## 第十四章 劉備の北伐、清宮の南進・中編

桃香達が北で活躍している頃、涼は南で活躍していた。

涼が最初に目指したのは揚州の建業だった。

本当は先に、青州と隣接している兗州の陳留へ行きたくはあったが、陳留へ行ってから建業へ行き、それから下邳に戻るには移動や時間の大幅なロスになる。

時間が掛かれば、それだけ状況が悪化するかも知れないのだから、そうしたロスは可能な限り避けたい。

その為、まずは南下して孫堅や孫策　雪蓮との会談を成功させるべきと判断した。

建業へは、泗水に沿って南東に進み、泗水と淮水の合流地点である広陵郡淮陰から州境の高郵を通り、揚州へと入った。

そこから広陵に入り、江水を渡って武進に進んだ。ここ迄で一週間を要している。

翌日、その武進から西に在る建業へ向かっていた所、とある一団と遭遇した。

その一団は商人でもなければ賊でもない、軍旗を掲げた正規の軍勢だった。

その軍勢の先頭の旗は「甘」と「凌」、少し遅れて「黄」の旗が有った。

突然現れた軍勢に、驚き戸惑う徐州軍。

だが、軍師である簡雍　雫は冷静だった。

「清宮様、どうします?」

「俺達は戦いに来たんじゃない。けど念の為、油断しない様に皆に伝えて。」

「解りました。」

雫はそう言って一礼すると、後ろで待機している兵士達に涼の指

示を伝えに行つた。

その間、涼は前方一里（約四百メートル）で止まった一団に目をやった。

（“甘”に“凌”に“黄”か……。凌がどつちの武將の旗かは判らないけど、あとの二つは多分あの武將の旗だろうな。）

次いで、やっぱり女なんだろうな、と付け加えながら思案に耽る涼。

そうしている内に、その一団から三人の女性が馬から降りて近付いてきた。

それを見た涼も馬から降り、彼女達を待つ。

同じ様に降りて涼の隣に居る鈴々は自然と身構えるが、涼に制されるに僅かに蛇矛を下げた。

それでも、万一に備えて蛇矛を握る力は緩めなかった。

やがて、涼達との距離が十メートルになった所で女性達は足を止め、次いで三人の中で一番年長者らしい褐色の肌の女性が声を発した。

「儂の名は黄蓋、右に居るのが甘寧、左に居るのが凌統。我等は孫堅様の名代として貴殿等を迎えに参つた。貴殿が徐州軍の清宮殿で相違ないか？」

「え、ええ。清宮涼は自分です。それと、左の子は張飛、後ろの二人は右が簡雍、左が孫乾です。」

黄蓋と名乗つた女性の声に、涼は若干怯んだ。

別に黄蓋は涼を睨んだりしていない。寧ろ、穏やかな表情を向けているといつて良い。

それなのに涼の背筋には今、汗が流れている。

（流石は孫呉の宿将、黄蓋の名を持つだけはあるな……愛紗や星が訓練の時に見せるのと同じ……いや、それ以上の気迫だ……っ！）

涼は内心ヒヤリとしながら気持ちを立て直し、黄蓋を見返す。

黄蓋の髪は薄紫色で、頭の後ろで結い上げてそのまま腰迄伸ばしている。

細い濃紺の瞳は穏やかであり、鋭くもある。

小豆色のチャイナドレスみたいな服により、肩や太股は大胆に露出している。胸元が空いているので、谷間も見える。

その胸は、男なら誰もが凝視してしまうであろうと簡単に予想出来る程豊かな胸。豊か過ぎる気もする。少し垂れ気味なのは歳の所為か。

背中には大きな弓矢を背負っており、それが黄蓋の武器の様だ。

その証拠に、腕には弓使いが使う弓籠手ゆちてと呼ばれる長手袋を身に付けている。

太股には薄桃色のガーターベルトらしきものが有り、同じ色のニーソックスみたいな物と繋がっている。

靴は濃い小豆色の短いブーツっぽい靴で、全体的に同系色を中心とした服装は色合いのバランスがとれている様に見えた。

と、涼が黄蓋を一通り観察し終わると、今度はその黄蓋が涼を見ながら口を開いた。

「ふむ……策殿からは白い服か青い服を着ている黒髪の少年、と聞いておったが、今日は青……浅葱色の服であったか。」

そう言った黄蓋は涼をじっくりと見据えている。

確かに、今の涼はこの世界に来た時の服、つまりコートを着ていない。

今の服装は、浅葱色の羽織りにジーンズといった格好だ。

「袖の様が策殿の服の袖の様と似ているのは、策殿を意識しての事かの？」

「いえ、特にそんなつもりは無いです。単にこの服が俺の国で有名な服ってだけです。」

確かに、涼が今着ている服は涼の国、つまり日本で有名な服だ。

袖と裾に白い山形の模様、俗に言うダンダラ模様を染め抜いた浅葱色の羽織。

それは、日本の幕末に名を馳せた剣客集団、「新撰組」の羽織と同じデザインだ。

鉄門峡の戦いの後、涼は返り血が付いたコートの代わりに、青を基調とした羽織を羽織っていた。

この羽織はその時の羽織を見た涼が、折角だから作ってみようと思いついて、後に徐州の町の仕立屋に依頼して作った物だ。

因みに、これとは別に背に「誠」の一字を白く大きく染め抜いた羽織もある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3800n/>

---

天命之外史

2011年11月20日19時01分発行